RECONSTRUCTION

改造

單純生活・赤露橫斷

思想と研究

阿部次郎
小泉信三
森戸辰男
中澤臨川
森本厚吉
佐野利器
戸田正三
山川均
野上俊夫
昇曙夢
布施勝治

新マルサス研究

國家主義の解剖

文藝と講談

武者小路實篤
谷崎潤一郎
柳宗悦
大庭柯公
上司小劍
細田民樹
廣津和郎
宇野浩二
正宗白鳥
里見弴
長谷川如是閑

拾月増大號

新刊發賣

死線を越えて

賀川豐彦著

◇四六版新鑄ポイント組六百頁◇

◇バイブル式裝幀天金函入美本◇

我國社會運動の唯一人者たる新人賀川豐彦氏が一大感激の結果堂々一千枚の社會小說はなる。社會改造に全身を投げ出せる一青年が炎々火の如き戀の苦悶を排し、滔々たる唯物主義の世相を痛憤し、又舊道德の父との止み難き爭鬪を排して、一念發奮、富に赴くを捨て、名譽に趨るを捨て、眞實の世界に生きんが爲め、一生を貧民窟敎化に捧ぐるといふ聖にして雄々しき、そして萬丈の波瀾に運命を弄ばれたる我國坆大なる思想家を主題とす、遮莫、著者も慘風悲雨の十年を神戶貧民窟に捧げたる我國唯一の貧民敎化の體驗者で、その行逕は篇中の失戀思想家を髣髴せしむるものがある。此の記憶すべき新人の一大心血を濺げる社會小說が天下に歡呼さるるは當然のことであつて、本書を一讀するによりて始めて社會諸相の解按を斷じ得べきである。

◆定價金參圓貳拾錢・送料廿錢◆

東京芝櫻田久保町
改造社
振替東京八四〇二





改造秋季增大號

新人材の深さ廣さ高さ……卷頭言……一

國家主義の解剖……阿部次郎……二

フエビアン社會主義の功過……小泉信三……一三

二種の人權宣言……森戸辰男……三八

政治の理想（遺稿）……中澤臨川……五五

單純生活

―單純生活と能率生活……法學博士 森本厚吉……五九

―無產生活の享樂……賀川豐彥……六九

―住の生產方法の改造……工學博士 佐野利器……七四

―文化的分業生活は簡易生活の根本義……醫學博士 戸田正三……八〇

根本義……工學士 本野精吾……八九

クロポトキン原著

馬場孤蝶氏
佐藤緑葉氏
森下岩太郎氏共譯

全譯 露西亞文學講話

露西亞文學を論評紹介して精到凱切、唯一無比の世界的名著を見よ。人間苦の暗黒裡に無數の寶玉を藏せる近代露西亞文學は、この大思想家の深刻なる人生觀と犀利なる藝術觀を透して、茲に廣汎精密なる一大鳥瞰圖を現出す。本書は實に露西亞文學の過去及現在を詳述し、其將來を暗示せる一大名著にして、近代藝術の一大驚異たる露西亞文學を知らんとする人、及び人道的思想を知らんとする人は必らず一讀せざる可らず。

◆四六判總布製箱入美本五百頁◆定價貳圓六拾錢（送料十二錢）◆

目下盛んに愛讀せられつつある思想書類

ウヰリアム、モリム原著 堺利彦氏譯 改版 **理想郷**（再版）定價壹圓貳拾錢 送料八錢

日本一のユウモリスト 貝塚澁六氏著 **猫の百日咳**（五版）定價壹圓四拾錢 送料八錢

堺利彦氏著 山川菊榮女史譯 **女性中心と同性愛**（五版）定價壹圓六拾錢 送料八錢

與謝野晶子女史著 **激動の中を行く**（六版）定價壹圓六拾錢 送料八錢

前田蓮山氏著 **社會の黴**（五版）定價壹圓四拾錢 送料八錢

東京神田中猿樂町 合資會社 アルス 電話九段二一六九番 振替東京二四八八八番

最新刊

實業之日本社長 増田義一著

大國民の根柢

定價壹圓八拾錢郵税十錢
四六判函入總布四百頁

最高常識より見たる我國民性の批判と其の救治策

今や我國は五大强國の一に列した。吾人は須らく因襲固陋の消極思想を捨て、廣く眼を放ちて、世界的常識の涵養と、潑溂進取の積極的新人格の完成を期せざる可からず。

本書は多年社會人心の警醒指導に貢献せる著者が、先に親しく歐米を視察せる所を以て、現下世界の大勢を論じ、我が國民性の長短を説き、大膽明快に大國民たるの修養方法を説く。所説頗る多面に亘り、各篇内外古今の實例美談を擧げ千古の金言名句を挿み、古今東西の碩學大家の學説所論の精髓を引證する等、一卷の書、恰かも萬卷を讀むが如く、津々たる趣味の内に無限の教訓を含む。是れ實に本書の誇りとする所也、

青年學生諸君は勿論、何人も一讀の要あり、特に教育家に採って以て新時代の教育資料に供するに、極めて適切なり。

附錄「歐山米水」は著者が歐米に遊んで親しく見聞せる所を極めて印象的に記錄せしもの、輕快な讀み物である。

東京京橋南紺屋町 實業之日本社 振替東京三二六番

電話京橋九八九番　電話京橋八七四番

新聞界の覇王

夕刊
朝刊

報知新聞

報知新聞は
最も大新聞にして發行部數の多きこと天下に冠たり

報知新聞は
記事の正確報道の機敏を旨とし懇切叮嚀を主義とす

定價
一部金四錢
一ヶ月金九拾五錢（郵送一ヶ月金一圓拾錢郵稅共）
三ヶ月分前納に限り金壹圓一錢郵稅共
五分增▲郵券代用

廣告料
五號活字十五字詰一行金壹圓▲一定一行毎に貳拾五錢增
雜報欄貳圓▲一の面及揭載場所

報知新聞は
社會の改良を主眼として國民一般の大なる味方なり

報知新聞は
婦人の好伴侶にして最も家庭的の特色を有し居れり

◯電話丸ノ内
特長五〇編輯局
長五一編輯局
長五二編輯局
長五三編輯局
長五四編輯局
特長五〇一販賣部
長〇二販賣部
長五〇三廣告部
長四〇四代理部
長五〇五安信所
長五〇六會計部

發行所
東京麴町區有樂町二丁目一番地
報知社

東洋一の新聞

と社界主義學の眞髓■

法學博士 福田德三氏序
カルル・カウツキー氏著 高畠素之譯

マルクス資本論解説

四六判五百卅頁 總クロース上製 金四圓
半價格宣傳版 金貳圓
送料 十二錢 並八錢

資本主義文明は今や最後の審判を前にして戰慄す。見よマルクスが印したる科學的文字は新興階級の經典として地球の全面に舞躍せり。本書原著はマルクス學の中堅たる『資本論』に平易明快なる解説を加へたるもの、久しく專門學者の机上に置かれし難解深遠の典籍も本書出づると共に高級常識の一資材と化せられたり。原著者は社會主義學の最巨頭にして、譯者は今マルクス全集の譯出に從事中なる日本マルクス學の第一人者也。寔に原著者譯者共に其の人を得たる者と云ふべし、マルクス學は革命の學也。精緻なる學究的論理の間を縫ふて一脈の熱火縱横に奔馳す、新人の腸、本書に依て初めて燃えむ。社會改造の戰に參與せんと欲する青年諸君の必讀を促す。

本書は特に半價格宣傳版を發賣す。紙價印刷費倍騰の時價格を半減する所以のもの之れに依つて社會主義宣傳の一端を行はんと欲するが故なり。

發閲 東京市芝區三田一丁目 三田書房
振替東京四一八一〇番

新社會の基礎

◇故中澤臨川氏著◇
◇山本鼎氏裝幀◇

四六版新鑄ポイント組
定價二圓卅錢
送料十六錢

大正初年から今年までの思想界は中澤氏の黄金時代であつた。その絢爛な文章、その豐潤な思想は近時思想界の逸品であつた。臨川の名を聞くものは假令へそれが論敵であらうとも氏の特絕の芳香に魅醺せられざるものはなかつた。氏の訃と共に秋は一段と淋しくなつた。氏の存在は春の如く賑かなものであつた本年の春の論壇は臨川氏の論壇であつた。その春も逝き、其夏も逝いて、臨川氏は再び還らない。ただ淋しき秋にこの感激の多い一書が一入に氏の高風を仰がしめるのみである。

最新刊

内容

◇新社會主義への道 ◇勞働の危機 ◇ソシアル、デモクライシーの新精神
◇自滅を急ぎつゝある智識階級 ◇湘南養痾錄 ◇勞働問題の愛護
◇ロシヤに於る宗教動運の復興 ◇田園工業 ◇全國の敎育者に寄す
◇電子説から觀た世界 ◇技術家の覺醒 ◇思想の自由といふこと（森戸問題）

◇詩人にして科學者眞正至純なる文藝鑑賞◇
◇者にして文明評論家たる氏の至言を聽け◇

東京芝櫻田久保町 **改造社** 振替東京八四〇二



——（改造十月號）——

新人物の深さ、高さ、廣さ

レニンが、六號活字でも問題にならなかつた時代は、露都あたりでは、そのマルクス張りの理想主義を一笑に附したことだろう、だが、現在となつては、彼のボルセイズムを否認するものでも、彼が人格の崇高と、彼が英雄的努力の偉大なるには感歎せない譯には行くまい、これと同時に、理想政治家必らずしも、實際に適せずとは云はれまい。

現代で人物の缺乏せる國は、我國と米國が其尤なるものであるが、殊に政界の人材の拂底せることはまた意表の外である。吾人は必ずしも、英雄の出現を希望するものではない、聖人の降臨を翹望するものでもない。だが、われ〳〵は人間らしく、眞に人間としての使命を完ふする上より、人間としての集團的指導者は必要である。指導者と云へば語弊はあるが、適當な哲人的世話役はなくてはならぬ。原氏や、加藤氏はその指導者としての力量があるか、力量はあつても、識見を具備しておるか、否。

勞働運動の適當な指導者があるか、社會主義運動の偉大なる指導者があるか、新人政治の首唱者に眞に現代を了解したものがあるか、否。

勞働團體の團結も堅くはあるまい、社會主義の大同盟も遣るべし、薄つぺらな新人は團結して一人前の人格にでもなるべし、たゞその人々に實名以外どれ丈けの自我があるか、我執があるか、禁錮二ケ月で慄え上るもの丶別名は薄つぺらではなかつたか。象山、松陰はどうであつた、生は人間として尤も尊いものである。しかし古人は死するに勝る恥、鴻毛より輕き生命と云つたが、一體これは何の事だろう。

眞に婦人に同情なきものが、盛夏酷暑の議會で婦人解放、治警撤廢の狼烟を舉げ、軍閥に尤も關係ありと稱せらる丶ものが、勳爵に拗ね、或は隨喜し稚態、醜態とりどりである。或は一國の宰相が國政を忘れて、渺たる勳爵の肝入りに秋の日も暮れ野黨の首領は旗を卷いて輕井澤の高原に凉を趁ふ蒼生の苦みは知らず顔である。之が現代人の深さであり廣さであり、高さである。

われ〳〵は人生を樂觀し、人生を愛護するが俳奮的、ノラクラ的に希望もなく努力もなき世界に生きたくはない。モット辛酪味あり、そして眞劍味ある元氣な空氣の中に成長したいのである。

國家主義の解剖

阿部次郎

一

私は或る意味に於いて國家主義者である。併し今の世に於いて、國家主義ほど不純にされ汚された概念は少いであらう。私は自分の信じてゐる國家主義の意義を明かにするために、玆に少しく國家主義の概念の洗滌を企てて見たいと思ふ。固よりこの議論の中には、從來自分が時に觸れて斷片的に書いたり話したりした思想の繰返しがある。併し私の玆で目的とするところは、繰返しを避けることではなくて、此方面に關する自分の思想を一纏めにして言ふことである。それは、國家主義の諸相を概觀して置くことが、今日の日本にとつて特に必要であると信ずるからである。

二

最初に先づ一通り明かにしておかなければならないのは國家の概念である。固よりこれは大問題であつて、此問題を論じ盡すことは現在の場合には不可能でもあり又不必要でもあるが、我等の後の議論に必要な限りに於て、國家の性質を明かにして置くことは、避く可からざる必要である。

思ふに我等は國家について考察する時次の三點に着目しなければならない。第一に國家は一つの社會である。凡そ國家と云ふ社會は如何にして成立したか、此問題については、專門學者の間に種々の説があるに違ひないが、假令國家の成立が、征服者又は征服階級の利己心によるにせよ、國民相互若くは統治者との間の契約によるにせよ、血族的團體

の擴張によるにせよ、若くは共同防禦の目的によるにせよ、兎に角國家が或る力によつて結合せられたる人間の團體であると云ふことは、動かすべからざる事實である。

併し國家は他の社會と如何にして區別せらるべきか、多くの社會の中に於て、國家が特殊のものとして保有する特質は何であるか、私はそれは國家が強制の力を有つて居る點にあると考へる。固より他の社會に於ても制裁は存在するが、其の制裁は、個人が其の社會の成員（メンバー）たることを選擇する限りに於て有效なのであつて、其成員（メンバー）たることを選擇すると否とは個人の自由である。從つて此等の社會の制裁の性質は結局除名的であるに止まる。併し國家は我等によつて、我等が其中に生れ落ちた運命の一種である。我等が生れるとは或る國家の成員（メンバー）として生れることである。我等は最初から自分の屬する國家を選擇する自由を有つてゐない。固より事實上歸化權と云ふものは存在するが、それは國家が或る條件の下に其國民に對して許容する權利の讓渡しであつて、それを許すと許さないとは國家の自由である。そうして國家は彼等が他邦に歸化せざる限り其の國民に對して國家の法律に對する絕對的服從を強ひる。國家の權利は國家內又は國家相互の間に於ける強制力を支持する根據である。國家內の種々の小社會、例へば地方自治體の如きものに強制權あるは、國家が其權力を此等の社會に分けてやるからであるとは云ふまでもなく、國際聯盟や仲裁々判の如きものもその決議が有効である限り、その強制力は現存の國家によつて支持されなければならない。凡そ斯くの如き社會はその強制力の背後に國家の支持がなければ、それが強制力として成立する譯がない。(國家の特質を此點に認めることについては固より種々の反對說若くは異說がある。例へば Cole: Social theory が國家の構成的原理を「合意」に置くが如きはその一例である。併し自分は少くとも近代國家の事實を解釋するものとしては、コールの說に贊成しない。今は固よりその批評に立入るべきときではないが玆に一言を附記して置く)。

最後に現在の事實として、國家は對立してゐる。對立は國家の概念上必然的なものではないが、現在の世界史的事實である。我等は固より概念上世界國や強制力を有する公教會（カソリツク、チャーチ）や、個々の國家の對立を絕した全人類の結合による國

家を考へることは出來る。之れを歴史上の事實に徴すれば、神聖羅馬帝國若くは國際聯盟の如きは、或意味に於て對立を絶した國家と考へることも出來るのである。併しこれは現在の世界に於いて充分有効に行はれてゐる事實ではない。故に今國家主義について考へる場合には、我等は現在の國家が事實上對立して居るとを記臆して置かねばならない。

三

國家は一つの事實(ファクト)である。然るに國家主義とは此事實の規範性を主張するものである。國家の價値を絶對に近きまでに肯定して、之れに服從し奉仕するの義務を國民の良心に課するものである。本來服從と奉仕とは、決して同一の意義を有するものではないが(「三太郎日記」五六六頁以下參照)國家主義は、奉仕と服從とこの二つの義務を併せて國民に課せんとするものである。我々の問題とするのは、此の如き國家主義の是非——換言すれば、國家の規範性の根據及び範圍に關する問題である。

國家主義是非の問題は、結局國家の文化價値如何の問題である。併し諸々の文化價値を綜合して、其關係を定め、其位置をそれ〴〵に規定するものは、結局人格價値でなければならない、政治、經濟、學術、宗教等、種々の文化價値は人格價値を標準として計量せられなければならない。而して凡そ人格の價値を増進するものを「善」と名付けるとすれば、凡ての評價の標準は、畢竟倫理的價値に歸する。故に國家主義是非の論は、結局國家の倫理的價値の如何の問題であるのである。(「倫理學の根本問題」二二一以下參照)

故に此發問には最初から國家は當然「善」に從はざるべかざることを豫想する。國家主義が正當ならば、それは國家が何等かの意味に於て善なるが故である。國家に道德的使命があるかなきか、若し使命があるならば、其の使命の爲めに國家には價値がある。そして其使命の如何に應じて、其の價値の程度が定められる。之れに反して若し其の使命がないならば、國家は無價値であると云はなければならない。

以上略々國家と國家主義との概念を明かにしたが、之れに依つて我等は國家主義の諸相を導き出すことが出來るであらう。卽ち最初に擧げたやうな國家觀察の三種の着眼點に相應して、三種の國家主義を區別することが出來ると思ふ。固より現在主張せらるゝ國家主義を悉く此等三つの範疇に總括し盡すことが出來ると云ふのではない。此三種の國家主義の種々なる結合、及び之れと他の範圍に屬する諸々の主義と――特に民族主義並に歷史主義との結合によりて、國家主義は極めて多樣の相を呈する。併し私は今玆では、唯だ其の最も典型的なる場合について、之れを考察することを以て滿足しなければならない。

然らば三種の國家主義とは何であるか。第一の國家主義は、國家の特質なる强制を絕對化するものである。政治上の意味に於ける Absolutism である。國家の權力があらゆる意味において絕對的なることを主張して、其の命令の內容如何を問はず、臣民に絕對服從を强ひ、之れに對する批評を拒まんとするものである。

第二の國家主義は、國家と云ふ社會の福利を絕對化するものである。國家の福利を人生最上の理想として之れに矛盾するものを絕對的に排斥せんとするもの。換言すれば、國利民福主義、若しくは富國强兵主義の如きものである。

第三の國家主義は、所屬國家の繁榮を絕對理想として、他の國家に對する侵畧若しくは掠奪の如きも、所屬國家の繁榮のためには意とするに足らざることを主張するもの、換言すれば、帝國主義の最も純粹なる形がそれである。

併し我等は以上三者の如き國家絕對主義の立場をとらざるも、尙國家存在の理由と意義とを認めて、國家を否定せんとする思想に對立することが出來る。此意味に於て國家を是認するものも、國家否定主義に對して國家主義と名付けることが出來るであらう、此意味に於ける國家主義は絕對的道德理想の實現を準備する一つの單位として、國家の價値を是認するものであつて、若し Cosmopolitanism を無祖國主義の意味に解するならば――世界主義とは祖國と離るゝこ

とを義務とする一種のエスペラント主義の如きものならば——斯くの如きコスモポリタニズムに對するものとしての國家主義である。私は此意味に於ては國家主義者である。私が後に主張せんとするは此意味に於ける國家主義である。

五

權力絶對主義とは何であるか。我等は先づこれとこれに類似せる理想主義との區別を明かにして置く必要を感ずる。たとへばプラトンの「クリトン」に出て來るソクラテスは、國家の法律に對する絶對服從を市民の義務であると云つてゐるが、これは國家が如何に不正なる命令を發するも其の命令は國家の意志なるが故に、正しいと云ふのではない。國家には正義に從ふ義務が有る、併し國家がその道德的使命を果す爲には、市民が國家の法律に服從することを必要とする。故に國家の權力が其の市民に對して絶對的權威を有する所以は、結局國家が或る道德的目的に奉仕する義務を負ふてゐる所にあるのである。故に此意味に於て、國家の權力の絶對的權威を主張するものは、決して道德的目的を無視する權力そのものの絶對性を主張するのではないのである。私が玆に云ふ權力絶對主義とは、ソクラテスの意味に於ける國家主義を云ふのではない。凡て國家の意志は其の內容の如何を問はず、國家の意志なるが故に正當なりと主張するものを意味する。如何なる不正も國家の意志の內容となるによつて直ちに正しくなるといふ主張を意味する。斯くの如き權力絶對主義は當然に國家の道德的使命を否定するもの でなければならないであらう。何となれば、道德は權力命令の內容に對して、或る規範を與へるものであつて、從つて權力是認の根據を權力以上の或る者に置くものであるからである。國家の上に立つ「道」の權威を承認する限り、國家は其の氣紛れに從つて、恣に國民の自由を束縛し、國民を酷使すべきではなく——又單に氣紛れに從つて氣の向いたときにのみ善政をなすべきでもない。國家は常住に嚴正に國家の使命に叶ふことのみを命令すべきである。この使命に服從することは、國家の上に懸けられたる義務である。併し權力が自己の上に立つて其意志の內容を規定する原理を承認するとき、權力絶對主義は已に其の根據を失つてしまはなければな

らない。權力絕對主義が權力絕對主義たる限り、權力以上の道德的使命を認めることが出來ないのは固より當然である。故に於て權力絕對主義は已に理性以外に逸せる我儘の一種となる。此主義を證明するものは、最早理論ではなくて、直接に權力を行使することと共ものでなければならない。權力が絕對なのはその權力を行使するに當つてこれを阻むほど有力な障碍がないからである。併しその權力が阻まれるときそれは旣にその瞬間から絕對ではない。權力絕對主義は權力が阻まれるときと雖も、權力は絕對であるべきであると主張する理性の支持を缺いてゐるからである。理性は最初から權力絕對主義と云ふ理性を侮辱する主張を否認する。此兩者の間には已に橋梁を斷たれて居るのである。

故に權力絕對主義を批評することは、事實上不可能と云はなければならないが、併し我等は權力絕對主義の當然の歸結(コンセクェンス)を指摘して、權力主義者は果して此歸結(コンセクェンス)に滿足するか否かを反問することは出來る。恐らくこれは權力絕對主義を批評するための唯一の途である。我等は彼の我無者羅なる主張にも拘らず猶彼の中に潜んでゐるべき「理性者」を信じてこの隱れたる者に訴へるより他に途がないからである。

第一に權力絕對主義に於て、其の命令の內容を規定するものは何であるか。それは言葉の上で云へば國家の意志であるが、國家の意志とは文字通りに云へば空語である。國家の意志なるものは、これを代表し支配する個人、團體若くは階級の意志によつて始めて決定される。縱令此の如き支配的代表的階級を背面より支配する勢力は何であるにしても、兎に角國家の意志とは、直接に具體的に云へば、それは主權者又は主權階級の意志である。故に權力絕對主義の國家に於て其命令の內容を決定するものは事實上當然に權力者の無制約なる意志でなければならないのである。斯の如き國家を支配する原理は、權力者の利己主義である。固より權力者は其性情によりて必ずしも惡政を行ふのみとは限らない。アブソルーテイズムの國にも固より多くの善政があり得る。併し彼がその意志を規定する自己以上の原理を認めざるとき、彼の善政も彼の惡政と同樣に氣まぐれである、彼の善行も彼の惡行と同樣に我儘の一種である。故に彼の「善」は結局まぐれ當りであつて利己主義の一種に過ぎないのである。權力絕對主義の國家は、この意味に於いて結局權力者の利己主

義に依つて率ゐらるる國家でなければならない。さうして斯の如き專制階級若くは專制者(タイラント)の利己主義には、實質上自己の利益を遂行する事の愉快と、凡そ人を匍匐せしむることの喜びと、(國民の讃美を喜ぶが故に善政を行ふが如きも此類の權勢慾の一種である、)二樣の意味の愉快があるであらう。此二つの意味に於てアブソルーテイズムの國家は、權力者の利己を中心とする。固より此處に言ふ權力者とは決して君主に限られてゐるのではない。現在の世界に於て行はれてゐるものは、寧ろ其の婉曲にして陰險なる形態である。或る階級が種々の口實を用ひるにも拘らず、結局自己の階級に有利なることを根本の條件として國政を行ふことを許さるゝ時、其國家は實質上アブソルーテイズムの國と云はざるを得ないであらう。故に我等は資本主義(キャピタリズム)、若しくは過激主義(ボルシエビズム)の國家をも權力絕對主義の一變形と見ることが出來るのである。尤も露西亞の過激主義は、或る社會理想を實現するまでの過程に於ける一手段として、差し當り無產階級の專制を行はんとするものであるとすれば、彼等は最後の信念に於ては、權力絕對主義者と云ふことが出來ないであらう。此點に於ては恐らく資本主義の方が、より多く利己的であり、より多く權力主義的である。併し資本主義や過激主義の實質は何であつても、兎に角動かすべからざるは權力絕對主義の內容を成すものが權力者の利己主義であると云ふ一事である。アブソルーテイズムの主張者は、果して此事實に滿足することが出來るか、私は先づ此事を反問したいと思ふ。

第二に權力絕對主義の國家は、其の國民に無批評の絕對的盲目的服從を要求する。盲目的服從を最も容易にするものは人を盲目にすることである。而も人が到底盲目にしきることが出來ないことを悟るとき、猶之を意のまゝに操縱するには喰はすに利を以てし脅すに笞を以てする必要がある。故に此意味の國家主義は、其の國民を無智蒙昧にするか、若しくは奴隷とすることに於て始めて徹底する。さうして奴隷とは最も陰險なる利己主義者である、自己の利益を得んが爲めに、其の自尊心を蹂躪せらるゝに任せて、權力者の前に面從匍匐するものである。故に此意味に於ける國家主義の根本條件は國民の品性の破壞である。國民の闇愚陋劣若くは無氣力である。凡そ人間が人間である限り、人は果して斯くの如き國家主義に滿足することが出來るか、私は此事をも反問して置かなければならない。

・第三に、而も人間は果して無智蒙昧となり切ることが出來るか、此の意味の國家主義を實行せんとする者は此問題をも熟慮しなければならないであらう。若しそれは到底不可能であるとすれば、權力絕對主義も亦當然に實行不可能とならなければならない。さうしてそれが實行不可能となるとき、理性の支持を得ざるアブソルーテイズムは既にその唯一の地盤を喪失したのである。人間とは、カントが考へたやうに、先驗的當爲に支配せらるゝ理性的存在ではないであらうか。利己主義とは却つて人間を其の奥底に於て傷ふものではないであらうか。故に自己の利己主義を遂行せんが爲めに、他人を利己主義的奴隸に造り上げたとする時、結局其の君主若しくは支配階級の不幸を被支配階級の不幸と、二重の不幸を齎すに過ぎないやうなことはないであらうか――彼等は此事を熟慮しなければならない。さうして若し人間は到底利己主義的奴隸になり切ることが出來ないものであるとすれば、そこに生じて來るものは奴隸となることの强制に反抗する革命運動である。其の國民が强健なる品性を喪失せざる限り、斯くの如き專制國家は當然革命によつて崩壊する。若し又國民を奴隸とする訓練が成功して、國民悉く奴隸的利己主義者となつて了ふとすれば、其時この國民は生氣と活力とを缺き積極的結合の興味を失つて、其國家は自然に無力となり、自然に解體しなければならないことになるであらう。特に現在に於けるが如く、個々の國家が對立することを考慮に入れゝば、其國家が外國の侵略に對して自己の獨立を防禦する彈力を持續することは、到底出來ないに極つてゐるのである。故に斯くの如き國家主義は、其の實國家を崩壊せしめんとする最も危險なる非國家主義である。探偵制度（スパイシステム）によつて漸く支持せらるる國家や、司法權によつて僅に國民思想の統一を維持せらるゝが如き國家は、已に此意味の權力絕對主義によつて毒せらるゝと甚しき狀態に在るものと云はなければならないであらう。さうしてこれは自己以上の道若くは理性を認めざる――從つて權力者若くは權力階級の專制を唯一の原理とする國家が當然に陷るべき運命である。我等は、斯くの如き當然の歸結を豫想しながら、而も尙權力絕對主義を固執しなければならないであらうか。私は最後に此事を彼等に反問せんと欲する。

日本は決して此意味に於けるアブソルーテイズムの國ではなかつた。私は權力と妥協する爲ではなく、日本の美點を

明かにせんが爲めに、敢て此事を云つておきたい。聖武天皇が自ら三寶の奴と稱せられた言葉は、古來種々の議論を招いだ所であるが、その議論の要點は佛教が果して歸依に價する敎であるかないかの點にあるべきであつて、帝王が道に服從せんとする意味の是非にあるべきではない。又明治天皇が教育勅語の中に、我等の遵守すべき種々の德を擧げられた後、單に爾等臣民はこれを服膺すべしと宣はるゝことなく、朕も亦爾臣民と拳々之に服膺することを庶幾ふと云はれたのも、主權者が道に從はむとする意志を明示せられたものと信ずる。道に從ふことは、單に臣民の義務であるのみならず、又た帝王の義務である。帝王は道に從ふことによつ始めて神と祖宗とに對する義務を全くする——これは極めて崇高な理想主義である。この崇高な理想主義を取去ることによつて日本を權力絶對主義の國に化さんとするが如き者があるならば、彼等は最も重大なる點に於て——玆に彼等の愛用する言葉を借用すれば——我が國體を變更せんとするものである。若し日本の傳統の中に苟も愛惜すべきものがあるとすれば、このやうな政治上の思想主義はその最重要なものでなければならないのであらう。然るに彼等はこれを官僚的に法律化してこの理想主義を低級な專制主義に作りかへようとするのである。我等は此の如き者に對して——日本をルイ王朝の佛蘭西に化せんとするが如きものに對して、特に警戒する所がなければならない。彼等は畢竟羊の皮を着た狼であるのである。

之を要するに强制は道德的目的に奉仕することによつて、始めて是認せられる。而も人間は、强制せられずに義務を行ふ境地に至つて始めてその道德的完成を明することが出來るとすれば、强制は人間が自己を完成するまでの過程に於ける一つの方便として始めてその意義を獲得するのである。强制の使命は結局次第に自己の影を薄くするところにある。然るに最後に消滅するために存在する强制を絶對化するが如きは、本末轉倒の最も甚しきものと云はなければならない。然らば强制が止揚（アウフヘーベン）せられたる後國家は果して何うなるであらうか、それは民族と、歷史と、特殊なる利害とによつて結合せらるる一つの社會として存續するであらう。我等は國家が斯くの如き社會に進化することを阻るべき何の理由をも有つてゐないのである。

六

次に問題となるものは、國利民福を最上の理想とする意味の國家主義である。凡そ福利とは何であるか。この言葉は隨分曖昧な意味を持つてゐると思ふが、これを常識的に使用してゐる場合を論じつめて、その意味を學術的に限定すれば、福利とは畢竟物の所有と共享樂とを意味すると云ふことが出來るであらう。我等が金によつて或便宜と享樂とを購ふことが出來れば、金錢の所有は我等にとつて一つの福利である。又我等が飮食によつて一日の生を樂しむことが出來れば、飮食は我等にとつて一つの福利である。國利民福を最上の理想とするとは、結局斯くの如くにして、國民の富を增加し享樂と便宜との機會を多くすることを理想とすることを意味するのである。併し福利は福利なるが故に、無條件に價値あるものと云ふことは出來ない。本論の最初の立脚地より見れば、福利の價値あるはそれが人格の價値を增進するところにある。福利の價値を決定するは、之れを使用する人格の如何によるのである。福利は例へば兩刄の劍であつて、その使用の目的如何によつて我等の福利ともなり禍ともなる。故に國利民福を絕對の理想とするは結局絕對ならぬものを終局のものとする誤謬であつて、人間の眼を終局的のものに向けることを妨げる點に於いて、それはあらゆる中途半端なものと同樣の危險を持つてゐるのである。

今、假りに國家がその富强の點に於ては他に比肩すべきものがないと假定する。そのときこの國家は單にそれだけの理由をもつて、その存在の理由を完くしたと謂ひ得るであらうか。思ふに國利民福主義はそれ自身の內部にそれ自身の批評を含んでゐる。我等は國家がその外面的富强の極度に到達したときに、その內面的崩壞の準備が既に出來上つ居るやうな多くの實例をもつて居るのである。富强がそれ自身に於いて亡國の原因でないことは言ふまでもないが、或る國家が富强以上に必要な一つの事を缺くとき、その富强なるが故に益々その崩壞の勢を馴致する。ローマのことは云ふ迄もなく、或意味に於ては現代のヨーロッパも亦その一例として考へることが出來るであらう。獨逸の軍隊がランスの

本院（カテドラル）を破壞したときにロダンが言つたと傳へられてゐる言葉は、此間の消息を暗示するものと云ふことが出來る。ランス本院が燒かれた當時、ロダンはイギリスに避難して居たが、彼はその話を聞いても數日の間はそれを信じなかつた。彼はそれは公衆を刺戟して應募兵を增さうとする新聞の作りごとだと主張した。併し最後に事實が動かせなくなつたときに彼は言ひやうのない悲哀をもつてかう云つた――『聖哲の時代が、メドス人や、ペルシヤ人の大侵入が、再び歸つて來た、それならば世界はこれまでその中にまどろむで居た、享樂主義（エピキュリヤニズム）のために罰せられなければならぬところまで遣つて來たのか』――彼はかう云つて深い感慨に沈むだ、（クラーデルの「ロダン」による）實際大戰前のヨーロッパがその富强の頂點に於て、その富强に狎れたるが故に、崩壞の運命を招致したのでないとは、誰れが云ひ得よう。福利はこれを濫用することによつて國家を沒落に導くものである。故に國利民福をして、眞正に國家を偉大にする力とならしめる爲めには、福利を制御してこれを奉仕せしむる福利以上の原理――換言すれば國家の道德的偉大を求める理想がなければならない。この理想に代るものとして國利民福を理想とするとき、此意味の國家主義は却つて國家の禍である。故に我等は國利民福の意味に於ても國家主義に贊成することが出來ない。この意味に於て國家主義に贊成しないのは、國利民福を求むべからずと云ふ意味ではなくて、國利民福を生かすためには、國利民福以上の立脚地を必要とすると云ふのである。

然らば國家の道德的偉大を理想とするものも亦國家主義であるか。固よりそれが國家の偉大を求めると云ふ意味に於て、これを國家主義と名づけることはその人の自由である。併しこの意味に於ける國家主義は最早國家至上主義の形を取ることが出來ない。何となれば國家の道德的偉大を求めるとは、國家が自己以上更に權威あるものを認めてこれに服從することでなければならないからである。この意味の國家主義は、國家が自己の絕對權を自己以上の理想に讓るところにのみ成立するからである。この立脚地に立つとき、國家の偉大とは必ずしも富强の力によつて他國に號令することではない。極端なる場合について云へば、それは又必ずしも永久に其形體を存續することでもない。國家の偉大にとつて

必要なる條件は、唯其國家の精神が永遠に亘つて滅びざる光輝を放つことである。さうしてこの精神は當然に國家が自己を絶對化する理想と矛盾する。換言すれば、自己の中に實現せられたる眞理を絶對化する以外の意味に於いて、自己を絶對化するあらゆる思想と矛盾する。

我等が一度この立脚地に立つとき『死すべきときに死せざれば、死に勝る恥あり』と云はれて來た祖先傳來の言葉が、單に個人のみならず國家にも亦適用し得ることを發見するであらう。若し國家の理想がその道徳的偉大にあるとすれば、個人が徒らにその生に執着せずにその死所を選ぶと同樣に、國家も亦非常の場合には生死を賭してその道徳的偉大を求めなければならない。固より數千萬の國民を包容してその福祉を護るべき義務を負ふ國家は徒らに痛快を貪つて輕々しく死地に立つべきではない。併し萬やむを得ざる場合に生死を賭して正しき方針を貫徹する覺悟は、我等の國家生活の一瞬一瞬に準備されてゐなければならないであらう。封建時代に於ける小國家が降伏か落城かの岐路に立てるとき、甘んじて落城を擇んだ心持は最後の準備としては今日に於いても必要である。私は日本人として此の如き感情の傳統を愛する。さうして此の如き傳統を代表する一つの言葉として、玆に西郷南洲の言を引用して置きたいと思ふ。――『正道を踏むで國をもつて斃るゝ精神なくむば外國交際は全かるべからず、彼の强大に畏縮し圓滑を主として曲げて彼の意に從順するときは輕侮を招き好親却つて破れ終に彼の制を受くるに至らん』（南洲全集五五四頁）これは外國と戰ふ場合に就て言つて居るのであるが、同樣の精神は當然に、他國に對して不正を行ふことを恥辱とする方面にも適用されなければならない。何れにしても國家の道徳的偉大を求める爲めに生死を賭する大覺悟を有する點に於て南洲の態度は甚だ崇高である。自分は、今日の政治家が、種々の點に於いて斯樣の精神に回顧する要があることを信ずるものであり、特に彼の「遺訓」は今日と雖も世界の政治家が熟讀玩味するを要する多くの眞理を含んでゐると信ずるものであるが、此點に於ては特にさうであることを覺える。政治上の理想主義を缺く國家は極めて調子の低い國家である。今日の日本は特にこの點に於て先覺に恥づるところがなければならない。國家は商人のやうに、又アングロサクソンの或者

のやうに、單純な利益のために叩頭したり威嚇したりすべきではないのである。（倫理學の根本問題一七、五〇、二二一―二二七參照）

七

國利民福主義若くはそれと思想上の根柢を等しくする國家至上主義に國家對立の事實を加へるとき、そこに生ずるものは帝國主義である。帝國主義は福利を他より奪つて自己のものとするものである。凡そ福利を無條件に追求するときは當然そこに所有の爭ひを生ずる。何となれば、所有せらるべき物質には限りがあつて所有を求むる人とその所有慾とには限りがないからである。福利と善とは此點に於て明かに相反せる特徴を持つ。我等は玆で物質的所有と精神的所有との相違について明かなる觀念を持つてゐなければならない。凡そ我等の善は他人が善なることによつて少しも減ぜざるのみならず、他人の善は寧ろ我等の善を增進する。ダンテが淨罪の第二圈、嫉妬の罪を淨むるものゝ圈に於てヴージルとなせる問答はこの意味に於て甚だ注目に價する。ダンテが所有を共有することによつて各人その所有を增すと謂ふ所以を怪しみ問へるときに、ヴージルはかう答へた、

『それ汝等の願の向ふ處にては、侶と領を分てば減ずるがゆゑに、嫉妬鞴を動かして汝等に太息をつかしむれども
至高き球の愛汝等の願を上にむかはしむれば、汝等の胸にこのおそれなし
そはかしこにては、我等の所有と稱ふる者愈多ければ、各自の享る幸愈多く、かの僧院に燃ゆる愛亦愈多ければなり。』
『……かの高きにいまして極なくかつ言ひ難き幸は、恰も光線の艶ある物に臨むがごとく、馳せて愛にいたり
熱に應じて己を與ふ、されば大なるにしたがひ永劫の力いよ〳〵その上に加る
心を天に寄する民愈多ければ、深く愛すべき物愈多く、彼等の愛亦愈多し、而して彼等の互に己を映すこと鏡に似たり……
（神曲、淨火、第十五曲、山川丙三郎氏譯）

思ふにヴージルのこの言葉は、精神的所有と物質的所有との一般的對照として適用せらるべき眞理である。物質的所有

の增加を求むるものは當然に他人の所有を侵略し若くは壓倒しなければならない。さうしてこの事は單に狹義の經濟的利益のみならず、軍事的優越若くは國威といふが如きものに於いても亦同樣である。故に國家が此等種々の意味に於いて自己の所有を增加することを無條件の理想とするとき、そこに生ずるものは他國の侵略と他國の利益に對する掠奪とである。斯くの如くにして生ずるものは即ち帝國主義なのである。

帝國主義は種々の形に於て現はれることが出來る。その最も元始的な形は自國の選民的優越を信ずることである。次には軍事的征服の慾望である。それが更に實質的となれば經濟的侵略の慾望となり、それが精神的な外貌となれば文化的侵略主義となる。その形は種々に異にしても、自國の優越を求むるが爲めに他を侵略せむとする精神に於ては一樣であると云はなければならない。

斯くの如き帝國主義は倫理上如何なる立脚地に立つか。それは權力絶對主義の如く國家內に於ける或個人又は或階級の利己主義ではないが、或國家が他の國家に對して主張する國家的利己主義である。故に帝國主義の徹底も亦他國を奴隷とすることを條件としなければならない。然るに如何なる國家も他國の奴隷とならむことを欲するものは有り得さるが故に、世界の各國が其精神に於て——その辭令と外貌は兎に角その精神に於いて——帝國主義を奉仕する限り斯くの如き國家によつて合成せらるゝ世界が、常に直接間接の爭ひによつて充さるゝことは當然である。凡そ人と人、若くは國と國とが相並んで立ちながら而も不當に相爭ふことなしに協同することが出來る爲めには敬他の精神が必要である。併し帝國主義の國家間に於ては固より敬他の精神が存在し得ない。假りに外觀上如何に他國の權利を尊重するが如く見へるにしても、それは詐欺であり辭令であつて眞實ではない。故に結局斯くの如き敬他の外觀は利己に加ふるに虛僞を以つてする一層甚だしき下劣に過ぎないのである。此の如く利己に加ふるに詐欺を以てする國家の間に如何なる狀態を生ずるかは、これを個人の場合と比較すれば明瞭至極である。此の如き下劣なる國際關係の結果として若し世界的不安を生ずることがないならば、それは奇蹟と云はなければならないであらう。さうして斯くの如き世界不安は、我等

が眼前に目撃するが如く自國を不幸にし又他國を不幸にする。故に帝國主義の意味に於ける國家主義も亦國家の禍である。而もそれは單に自國の禍なるのみならず、亦世界の禍である。國家主義の自欺は玆に至つて益々甚しきを加へるのである。

帝國主義的夢想の最も雄大なものはカイザー主義である。それは帝國主義的征服によつて世界統一の大業を全くせむとする。併し此の如き企圖は過去に於いて失敗したと同樣に將來に於いても失敗するであらう。その失敗する所以はあらゆる帝國主義の失敗すると同一の理由に基く。それが各國民の獨立を尊重することを忘却する限り、カイザー主義は假令一度成功しても幾許もなく解體するに極つてゐるのである。若し今日に於て同樣の企圖を試みむとするものがあるならば、彼は歷史の敎訓を無視すること甚だしきものと謂はざるを得ないであらう。現在日本の一部にも斯くの如き意味に於て世界の統一を夢想するものがないとはいへないであらう。併し我等の日本は彼等の誇大妄想的利己主義の實驗の具に供すべく餘りに貴重である。我等は特に此點に於いて時代錯誤の愛國主義を警戒しなければならない。將來の世界國は、もしこれが可能ならば、必然に自國の獨立と他國の獨立とを同樣に尊重することを基礎としなければならない。ヱルサイユに於ける國際聯盟は、國家的利己の抑制が足りなかつたゝめに、又當事者の不徹底な妥協的態度のために、無慙に失敗した。併し國際聯盟は或時期に到達すれば實現されないとも限らないであらう。カイザー主義は過去のものであつて國際聯盟は將來のものである。將來の世界的結合は結局國際聯盟的性質のものでなければならないことを私は信じてゐる。さうして世界の平和を愛するものは、國籍の何れにあるを問はず悉く協力して、それ〴〵の國に於けるカイザー主義的妄想に最後の引導を渡してやらなければならない。

然し帝國主義の行はるべからざるは單に軍事的經濟的帝國主義に限られるのではない。文化的帝國主義と雖亦行はるべからざるは他の帝國主義と同樣である。それは凡ての國家は軍事的經濟的獨立を要求すると同樣に、又その精神生活に於いても自律的生活を必要とするからである。固より文化價値は或個人若くは國民によつて創造せられ、他の個人若

くは國民によつて採用せられる。其處に文化生活の世界的協同は成立する。併し或國民の創造せる文化が世界的意味を有するはその內容の普遍性によつて國民的特殊性によるのではない。一つの國民によつて創造された文化が他の國民によつて採用されるためには、その自發的選擇に依らなければならない。この意味に於いて凡ての國民は、自ら創造したものゝやうに自己に協ふ文化によつてのみ、福祉を感ずることが出來るのである。文化が文化たる限りそれは强制することが出來ない。一國の國民的特殊文化を全然其儘に他國に通用せしめるとするは不可能を强ひるのである。若し我等の創造する文化が特に獨逸的若くは日本的と名けらるゝものである限り――換言すれば獨逸的とは非日本的であり、日本的とは非獨逸的であることを意味するものである限り、獨逸文化は日本を支配することを得ず、日本文化は獨逸を支配することを得ないのは自然の數である。然るに他國を侵略することに依つて自國の文化を世界に擴布せんとするはこの不可能事を强行せむとするものであつて、その缺陷は他國に影響する方法の他律的外面的なところにある。それが外面的强制につよて他國民を征服せむとする限り、若くは自國文化の世界的膨脹の準備として、軍事的經濟的征服を必要とする限り、文化帝國主義も亦國家の權勢慾の一種の發現である。故に斯くの如き文化的帝國主義が他の粗大なる帝國主義と共に世界的不安を釀生すべき理由となるは已むを得ない。文化的侵略と民族文化の世界的使命とを區別するはデリケートな問題であるが、この區別を明かにするは世界的文化政策にとつて極めて切要の事に屬する。總ての國民はその特徵に從つて夫々に文化を創造をしなければならない、而て最も自己にふさはしき特長ある文化を生み出さなければならない。併し斯くの如くにして創造せられたる國民文化が他國を感化するは其內容の普遍性に依るのであつて其國民の他國に通用せざる。特殊性（パーティキュラリティ）によるのではない。各の國家と民族とは夫々の文化を持ち寄つて世界文化を形成する。併しその相互影響の方法は、各國文化の普遍的內容による結合でなければならない。國民的文化の特質によつて世界を征服せんとするは他の總ての帝國主義と等しく甚だしく危險なる妄想である。それは結局歐米人に下駄を穿く事を强ひるやうな滑稽となつて終局するであらう。

私は玆に國家至上主義の奇妙なる中間的位置を指摘して置きたいと思ふ。それは個人の利己主義を否定して公共に奉仕することを要求する點に於ては甚だアットラクティーヴである。併しそれは世界に對する國家的利己主義を固執せんとする點に於て、利己主義の征服が甚だ曖昧であることを曝露する。又それは外國文化の奴隷となることを戒しめて國民文化の獨立を主張する點に於ては正當である。併し國民の各個人に他律的服從を強いて異れる個性を劃一せんとする點に於て彼の不徹底なる自律主義は裏切られる。此の如き不徹底を打破するとき、國家至上主義は一面に於て文化的國際主義に變じ、一面に於いて個人的創造の尊重となつて現れて來なければならないであらう。

最後に我等は、他國の競爭と共同防禦の爲めの團結なしには人類の進歩を期待することが出來ないと云ふ説を一瞥して、帝國主義に對する批評を閉ぢよう。人類の進歩のためには果してその敵が必要缺くべからざるものであるか、私は今假に此説を肯定するとする。併し我等の敵は必ずしも他國のみではないであらう。我等は他の人類を敵とせざるも猶その敵の乏しきを憂いないのである。然らばその敵とは何であるか、私は、人類が共同して戰ふべき大敵の一ッは自然力であると答へたいと思ふ。この自然力に對する戰に於て我等人類は國境に差別なしに結合することが出來る。我等がゲーテのフアウストとともに、寄せては返す波濤の徒らに荒ぶのみにして何の創造するところもなきを憤つて、

荒らぶる巨大の無目的なる力よ！
之を見て俺の心は、敢て自己以上に飛翔せむことを企てる。
俺は此處で戰ひたい、俺はそれを征服したい。

と叫ぶとき、我等は他の人類と戰ふことなしに、全身を打込むべき征戰の對象を持つてゐる。さうしてこの征戰は人類の分裂と相互殺戮とを要求せずに、却つて全人類の結合を要求する大事業なのである。我等は此處に學術的藝術的國際主義の根據を發見することが出來る。故に我等は又耳にしたフアウストと共に『復た戰爭か。それは智者の聞くを好まぬ響だ』と云ふとが出來るのである。人と人とが互に利害を爭ひ相殺し合ふとがなければ人類が進歩しないと謂ふやう

な思想は、餘りに幼稚にして餘りに野蠻である。而も我等は自然に對する戰ひの外にも更に多大な一つの戰ひを持つてゐる。それは惡に對する善の戰である。この戰も亦國境を撤して總て善を求むるもの丶世界的共同に依つて行はれなければならない。さうして宗教的倫理的國際主義は此處に牢乎として拔く可からざる根據を持つてゐるのである。然るに帝國主義の形に於ける國家主義は斯くの如き文化的國際主義の障害として寧ろ世界に禍するものである。さうして世界に禍を齎すものがどうして眞正の意味に於いて自國に禍を齎さずにゐることが出來よう。

八

以上私は種々の意味に於て國家主義の支持すべからざる所以を述べた來た。私の論鋒は常に國家主義に對して向けられて來た。併し玆に至つて私は少しく考察の方向を轉じなければならない——然らば國家主義はあらゆる意味に於いて否定せらるべきであるか、國家は全然何の倫理的價値をも持つてゐないのであるか。

若し國家とは何の倫理的價値をも持つてゐないものならば、さうして國家主義とは畢竟白く塗れる墓を彩る自欺に過ぎないものならば、我等が正善の人とならうと志す限り、我等はあらゆる意味に於いて國家主義を打破し、一日も早く國家を解體せしめるやうに努力しなければならないであらう。さうして如何に消極的方針をとるも、我等は出來るだけ自分を國家の事から遠けて愛國といふ自然的感情を殺さなければならないであらう。實際我等が國家を愛するとは、權力者の奴隷となり、物質的福利を最上の關心となし、人類の世界的結合を妨害する事以上に出ることが出來ないならば、國家を愛しないことが我等のやむを得ぬ義務と言はなければならないやうにも見える。併し若し此の如き途以外、猶眞正に、道德的に、國家を愛する方法があつて、我等の自然的愛情を懸けてゐる國家が、我等の正しき愛國によつてその道義的使命を果すことが出來るとすれば、我等はこの正しき愛國の途を發見して、これに積極的に働きかけて行かなければならない。國家の解體を希望すべきか、眞正に我等の國を愛すべきか——此處に我等の態度の極めて重要なる分岐

點がある。これは新しい意味に於いて國家主義と非國家主義との岐路である。我等はこの兩者の孰れをとるべきであるか。

劈頭に於いて言つたやうに、私はこの意味に於いては明瞭に國家主義者である。私はこの點に於いて非國家主義者と明かに反對の立場に立つものである。私は自己の屬する國家を善くしようとする努力が、他の如何なる義務とも矛盾するものではないことを確信する。權力者の專制を是認し、國利民福を無上の原理となし、他國を侵略することを國家の使命とする者は、國家を善くするものではなくて寧ろ最も本質的な意味に於いて國家を賊するものである。故に此の如き態度こそ非愛國であつて、あらゆる犧牲を拂つても國家の道義的偉大を求める者こそ眞正の愛國である。故に所謂愛國を否認することは、眞正に愛國そのものを否認することとはならないのである。併し此の如くにして國家の道義的偉大を目的とすることは、內容上國家に自滅を勸めることではないであらうか。國家の道義的偉大は、それが自滅するとき最も完全に實現されはしないであらうか。國家は果して何處にその存在の積極的理由を持つてゐるか。――其處にはこの問題が依然として殘存するのである。

私はこの問題に對して、第一に現在の問題として國家の强制力は人類の幸福のために必要である、第二に、永遠の問題として、國家の成員を結合することによつて成立する民族的社會は、人類全體の社會を組織する一つの單位として必要であると答へたい。我等は世界全體に對する義務を破ることなしに、寧ろ世界全體に對する義務を全くするために、この社會を愛しなければならない。父母や朋友や妻子を愛すると同樣に、積極的にその國家を愛しなければならない。さうして我等が父母妻子を正しく愛することによつて人類社會に對する義務を破ることがないと同樣に、國家を正しく愛することによつて世界に對する義務を破る理由も亦ないのである。國家を愛することは人類の世界的結合を妨げるといふのは、利己的のことであつて眞正なる愛國の事ではない。我等は此の如き愛國によつて國家存在の積極的意義を果させなければならないのである。私は此意味に於いて眞正なる愛國主義者の驥尾に附することを光榮とする。

然らば國家の强制力は何故に現在の人類にとつて必要であるか。此點について我々は人間の現狀が利己主義に支配されてゐると云ふ、動かすべからざる事實を承認しなければならない。利己主義は他人を侵害することを以て本質とする。故に若し各人を利己主義のまゝに放置すれば我等の社會は結局相互の掠奪と鬪爭とに依つて滿されて仕舞ふであらう。斯くの如き狀態に對して我等は如何なる處置をとるべきであるか、此場合に於て最も必要なるは固より精神的感化の努力である。併し少くとも人間を一ツの塊（マス）として取扱ふとき、我等は精神的感化が成功する前に、眼前に防禦し保護しなければならぬ多くの不幸と災禍とを見るであらう。之を放置することは、多くの正しき者弱き者罪なき者を利己主義者の掠奪に任せて置くことである。故に現在の世界に於いては各個人の正當防禦を代行する法律が——換言すれば「保護的」法律が必要である。殊に今日に於いて必要なるは、權力を所有するものゝ權力を限定して、國民の權利と自由とを保證する意味の法律である。さうして日本に於いては「敎育的」法律も亦益々必要を加へるのみである。國民の向上を助け國民の文化を促進し國民の健康を保持する爲めの制度と法律とは多々益々辨ずるであらう。併し最後に最も重要なるは今日の社會制度の缺陷を根本的に改革する爲めには國家の權力を必要とすることである。現在に於ける社會的不公正を矯正して、社會的不安の根柢に斧鉞を加へることは、公共的福利を壟斷する者の自發的讓歩を百年河淸を待つが如くに悠々として待つてゐられない急要の問題である。故に我等は直接行動の暴行を避けようとすればするほど、國家の强制力が正當に發動するとの必要を痛感する。單にその重大なる使命を果すためにも、我等は國家の强制力を保持して置かなければならない。故に今日に於て國家の强制力を否定せんとするは、理想家の事實を無視する空想に過ぎないと私は信ずる。

更らに强制の必要がない時代が來ても、民族的社會の存續は何故に必要であるか。それは血族的歷史的一致が共同作業に多くの便益を與へるからである。特に此の如き社會は個人の敎育にとつて極めて必要である。凡そ親のある子は、縱令それが特に優れた人を親とする場合でないにしても、猶親のない子よりも幸福であると同樣に、我等が人となる爲にも、自已に最も親しき特殊なる文化が必要である。我等は此特殊なる文化の雰圍氣の中にあつて、世界的文化の影響を攝取し

つゝ更に廣濶にして而も亦特色ある文化を創造する。故に相互に排斥し合ふ爲ではなく相互に協力し合ふ爲に、特色ある國民的文化は必要である。さうして此如き文化の祖國として、我等は我等の國家といふ一つの單位的社會を必要とする。

然らば我等は我等の愛する國家に對して如何なる奉仕を爲すべきであるか。我等は先づ我等の屬する國家の存在を保證しなければならない。從つて侵略ではなくて國防を、掠奪ではなくて殖民の權利を保有しなければならない。（私は今玆で無抵抗主義若くは徹底せる聖貧主義の立脚地をとらない。それは此等の主義を否定するからではなくて、私にはまだその立場が十分に體得されてゐないからである。現實の問題を考へるとき、未來に或ひは到達するかも知れない立脚地を豫定するのは、影の上に家を築かむとする者である。私の立場は固より眼にて眼を償ひ齒にて齒を償ふ報復主義ではないが、私は地上に於いて人格價値を實現するためには生命の保存と或程度の物質の必要を認めて、正當防禦及び必要なるものの所有若くは使用の權利を承認するものである）。我等が直ちに此權利を抛擲するとき、日本人は恐らくアングロサクソンの奴隷とされてしまふであらう。我等は奴隷として生存することを免れるために、自己の存在と發展との保證を持つてゐなければならない。

併し此等のものは畢竟國家の輪廓であつてその內容でない。器は盛るためにあるので、若し盛るべきものがないならば我等は寧ろその器の美しいことを恥づべきである。故に我等は更らに全力を盡して日本の文化を向上させることに務めなければならない。單に世界の文化を一般的に進歩させることに務めるのみならず、寧ろ世界の文化を進歩させる爲めに、日本の文化を進歩させなければならない。さうして文化向上の努力は無限の道である。我等は此の如く日本の爲めに爲すべき多くのことを持つて居る。これを怠り之を輕んずるのは我等の義務を閑却するのである。併し日本の文化を進める爲めに我等は如何なる方法を取るべきであるか、凡そ我等は自國の文化に對して如何なる態度を取らなければならないか。これは特に民族主義と傳統の意義とに關する問題である。私はその一部に就ては、曾て一言したことがあるが（三太郎日記五四五以下）、此問題を更に一般的に考察することは又之を他日に期したいと思ふ。

フェビヤン社會主義の功過

小泉信三

ギルド社會主義の運動が漸く勢を得て、之に關する評論が盛に行はれると共に、フェビヤン社會主義の人の話頭に上ることも亦頻繁である。併しギルド社會主義に關聯して論評せられる場合のフェビヤニズムは、何時も有難くない役目に廻はされて居る。フェビヤニズムは何時も非難せられ侮蔑せられる爲めに引合に出されるのである。ギルド社會主義は一般に從來の社會主義が勞働者の物質上の不如意と云ふこと許りに着目し、根本の禍因が彼等の隷屬に在ることを忘れたと云つて此點に痛撃を加へるものであるが、從來の社會主義と云つても、ハインドマン等に依て代表されて居るマルクス主義(英吉利に就て云ふ)は言論の上でも實際運動としても近年不振の狀態に在つたのであるから、攻撃の目標となるものは何時もフェビヤン社會主義の外にはない。そこで年少氣鋭のギルドメンは、充分の道理を以て、併しまた同時に新運動の鼓吹者には常に免れ難き誇張と偏頗とを以てフェビヤニズムを責めるのである。このギルドマンの批評は大體に於て正當で、フェビヤン社會主義には慥かに此非難に値する弱點と罪過とのあることは否認されないと思ふが、併しこれは別の機會で既に再三論じた事で、今それ以上新に附加へ度いと思ふ意見もない。たゞギルドメンの眼鏡に映じたフェビヤニズムがフェビヤニズムの全部ではない。その價値に就ては諸家自ら見るところを異にしては居るだらうが、フェビヤニズムが社會主義思想發達の上に一種の貢献をなして居ることは爭はれない。玆では主としてその方面の事を擇んで書からと思ふ。

英吉利では凡そ一八四八年チャアチスト運動が鎭靜に歸した頃から、社會運動には一轉機が來て、勞働者は主力を經

和なる勞働組合運動と消費組合とに注ぎ、社會主義的思想及び運動は多發の狀態に入つて凡そ三十年を經過する。その間にマルクスの國際勞働協會創立の事があつて（一八六四年）、英吉利勞働組合も之に加入することはしたが、社會主義思想は侵入して來なかつた。當時世界の獨占的工業國たりし英吉利の經濟的繁榮に、資本家階級と共に均霑して、今日の社會制度內に於て其地位を改善すべき餘地の充分あることを信じて居た熟練職工に取ては、社會主義は遂に用のないものだつたのである。併し此狀態は永續しないで、一八八〇年代に入ると、思想上に於ても實際運動の方面に於ても形勢は著しく變はつて來た。マルクスやヘンリイ・ジョオジの影響に依て、社會主義を主張し或は少くも之を研究するものが激增した。このマルクス及びヘンリイジョオジの影響と云ふことは多くの本に書かれて居るが、この新しい形勢の變が果してマルクス及びジョオジ等の影響に依て促がされたものか、又は形勢の變が人をしてマルクス、ジョオジ等に傾聽するに至らしめたのかと云へば之れは兩方だと答へなくてはなるまい。マルクスは既に三十年前から倫敦に客寓して居たのであるが、彼れの影響は彼れの周圍に在る少數外國人の間に止まつて、久しく英吉利勞働者には及ばなかつたことを見れば、マルクスの說が何時でも、誰れにでも傾聽されるものでないことは明かであらう。併しまた、ハインドマンがマルクス主義の宣傳を行はず、ヘンリイジョオジが亞米利加から渡來すると云ふやうな事件（一八八二年）がなくても、英吉利に於ける社會主義思想の發展は同じ經路を取つて行はれたであらうかと云へば、これにも然りとは答へ憎くいのである。兎に角さう云ふ譯で社會主義思想及び社會主義運動が復活する。而してその先驅をなしたのはマルクシストのハインドマンが起したS.D.F.（Social Democratic Federation）であつた。この團體は一八八一年に設立せられた時には單にデモクラチックフエデレエションと云ふ名稱で、其綱領も土地國有の一條を除けば、他に特に社會主義的色彩の著しいものはなかつたが、一八八三年社會主民聯合會の名稱を定めると同時に、マルクス主義を標榜した。「勞働階級の解放は生產、分配、交換要具の社會化に依てのみ行はれ得べき事」「この解放の業は獨り勞働者階級のみ能く之に當り得る事」而して勞働者は階級鬪爭の手段に訴へて其目的を達すべきことを宣言したのである。S.D.F.の運動は始め甚だ盛

況を呈して、英吉利社會運動上の人材を凡べて網羅した形勢があつた。是に加入した著名の人物としては第一にヰリヤムモリスがある。後に「同盟罷工の三王」と稱せられたジヨン・パアンス、トム・マン、ベンチレツトがある。マルクスの女婿で、有能無賴なるエドワアド・エヴリングがある。併しモリス、エヴリングは間もなく脫會して社會主義同盟を起こしパアンス等も漸次に脫會してS.D.F.の勢は漸く振はなくなつた。何故S.D.F.が振はなくなつたかと云へば、ハインドマンに統率の才が缺けて居たと云ふ事も無論あるのだらうが、それよりはマルクス派の階級爭鬪を標榜する社會主義運動が英吉利の國情に適しなかつた事がその重なる原因をなして居るだらう。後に（一九〇五年）獨立勞働黨の首領ケヤハアデイはS.D.F.を評して謂ふのに、「英吉利に於ける社會主義は二十年前S.D.F.が創立された時に始めて組織ある形をなした。然るに此團體の創立者は啻に社會主義を歐羅大陸殊に獨逸から輸入しようとした許りでなく、成程獨逸の政治的事情には適合して、彼の國では缺く可からざるものではあつたが、併し社會上經濟上及び政治上の情況を全然異にする爲め、英吉利には全然不適當なる特殊の敎義學說及び主義宣傳の方法をも併せ輸入しようとした。其結果として一八九三年に獨立勞働黨が設立せられる迄、社會主義はあまり進步しなかつた。ところが此黨（獨立勞働黨）は始めから勞働組合と最も密接な聯絡を取つて進まうと試みた。勞働組合消費組合及び禁酒運動を輕蔑せずに、是等のものゝ社會問題解決の方法として不充分なものであることは指摘しながら、是等に對して同情ある立場を取つたのである云々と。」

S.D.F.が英國の國情に合はない爲め、やがて不振の狀態に陷つたのと相對して、英吉利人の性情に適した爲め徐々に輿論の間に勢力を植えることが出來たのはフエビヤン社會主義であつた。後にフエビヤン協會となつた會合が始めて催されたのは一八八三年の事であるが、それがフエビヤン協會なる名稱を得たのは一八八四年一月のことだと記されて居る。Fabian と云ふ名は羅馬の名將 Fabius から取つたもので、此名を擇んだ由來を聞けば、フエビヤン協會の態度も亦略ぼ推測することが出來る。その由來に曰く、「フアビウスがハンニバルと戰ふとき、多くの人が其緩怠を責めたにも拘らず、忍耐して時機の到るを待ちたるが如く、汝も亦時の到るを待たなければならぬ。併乍ら時が來た時には、フア

ピウスの爲したるが如く汝も亦敵に痛撃を加へなければならぬ。然らされば汝の待機隱忍は徒爾無効となるであらう」と。

斯くの如くフエビヤン協會は名稱が既にその機會主義(オポチユニズム)漸進主義妥協主義を示して居るが、併し此漸進主義の方針が定まつたのは稍々後の事で、フエビヤン協會内でも始めの中は社會の革命的改造の可能を信ずるものが多く、「火藥の發明が封建制度を破壞したと同じやうに、資本家制度はダイナマイトの發明後久しく生き延び得るものではない」と云ふやうな事を自由に放言して憚らなかつた。加之後にクロポトキンの仲間に加入したヰルソン夫人がフエビヤン協會に入會してから暫らく「無政府主義のインフルエンザ」が流行したこともあつたのである。併しフエビヤン等は數年の經驗に依て革命主義を棄て、その今日の特色となつて居る實際主義常識主義の信念を堅めたのである。バアナアドショオが書いてゐるところに據ると、「フエビヤン協會が革命主義者の嘲笑の裡に、市街戰 barricades に背を向けて、悲壯なる失敗を轉じて平凡なる成功としよう turn heroic defeat into prosaic success と決心したのは一八八五年の事であつた。」而して彼等は二つの具體的の仕事に着手した。その一つは「ピイルが自由貿易論に改宗したやうに、社會主義に改宗した總理大臣の爲めに、その政治上の綱領(プログラム)を供すること、」もう一つは「普通の英國紳士の爲めにその社會主義者となることを猶ほ自由黨員となり、又は保守黨員となると同じやうな家常茶飯事たらしめること」であつた。

既にフエビヤンは heroic defeat を棄てゝ prosaic success を取らうとするものであるとすれば、其傾向は言葉を費やす迄もなく明瞭になつて居る。彼等は革命を排して改良を取り、理想に耽らずして實務を重じ、心醉せずして批評し、dosma に當らしめるに常識を以てしようとするものである。斯う云ふ傾向の運動が人の熱情を振ひ起こさせるに足りないことは固より論を俟たないが、たゞ此れと相並んで別に獨斷的、偏理想的、過感傷的なる運動を行はれてゐる場合には、此の常識、實務主義は彼の感傷主義の迂濶と迷妄とを摘發することに依て、偶々その價値を發揮することがある。而して前者の運動が有力强大であればある程、それに伴つて後者の價値も發揮せられ、それ自體としては決して

悲壯と云ふやうな形容詞に該當しない此傾向が、時としては稍々それらしい趣を呈することにさへなるのである。フエビヤン社會主義の功績の一半は、社會主義行政事務の綿密周到なる調査（その最も模範的なるものは一九〇九年の救貧法調査委員小數意見報告である）に依て、新らしい一種の官房學 Kameralwisscnschaft とも云ふべきものを樹立したことにあるが、他の一半は、當時大陸から輸入せられたマルクス主義に對して、英吉利流の平凡主義常識主義の立場から忌憚なき批評を加へた點にあつたと云つて好からう。

フエビヤン協會の創立者は別にあつたが、創立後間もなく入會してその主腦人物となつたのは、シドニイエツブとバアナアド・シヨオとであるから、フエビヤニズムの論評も亦主として此二人の著作に就てすれば好いのである。

今フエビヤン協會の奉じて居るフエビヤン原則（ベエシス）によれば「フエビヤン協會は社會主義者を以て成る。故に協會は土地及び工業資本を個人又は階級の所有より解放し、之を一般利益の爲め社會の有に移すことに依て社會を改造せんことを期す。されば協會は土地の私有を廢止し、また從つて地代の形ちに於て土地の使用許可並に優良地（農業の上に於て、また位置の便否の上に於て）の利益に對して支拂はるゝ價格の個人的領得を廢止せんことを期す。協會はまた支障なく社會的に經營せられ得るが如き凡べての工業資本を社會の手に移さんことを努む。云々、」とある。併し土地資本の公有を主張する爲めには、その必要、その可能を論證する經濟理論がなくてはならぬ。それではフエビヤン社會主義はどんな經濟理論を持つて居るか。シヨオはビイスの「フエビヤン協會史」に寄稿して、フエビヤン社會主義の純理經濟學は、價値に關しては、ジエヴンスの經濟學、地代に關してはリカルドオの經濟學であると云つて居る。即ち彼等はジエヴンスの壘に據つてS.D.F.の奉ずるマルクスの勞働價値說を攻擊し、リカルドオの地代論から出發したヘンリイジヨオジの土地單稅論を更に擴張して土地資本公有の結論に到達したのである。

價値學說發達の歷史上に一期を劃したジエヴンスの「經濟學理論」は一八七一年を以て公にされた。ジエヴンスの意

國は「價値は効用(利用)に依て定まると云ふ新說」を唱へ出して價値の尺度は勞働なりと云ふリカルドオこの方傳來の學說を倒すのにあつた。玆にジエヴンスの價値論を紹介する餘地はないから、已むを得ず試みに此書中の重要なる一二の章句を引用すれば、「吾人は或貨物から生ずる全部効用と、その特定の部分に附着する効用とを區別しなければならぬ。」而して貨物の「各増量の必要の程度は、それに先だつ増量の必要の程度よりは低い。」「効用の度は貨物量の増減と共に變化し、究極貨物量の増加するに從つて低減する。」「最終増量は、交換せられたる貨物の全量と同じ比率で交換されなければならぬ」「交換せられたる貨物の効用の度は交換せられたる増量の大小と反比例する」と云ふのである。然るにリカルドオの價値說から系圖を引いて、更にそれを大成したマルクスの價値論がハインドマン等に依て頻りに紹介せられた頃にはジエヴンスの効用價値說は漸く經濟學界の常識とならうとして居た。そこで誰か此新說を以てマルクスを撃つものが現はれても好い筈であつたが、果してダンテの研究者として知られて居るフイリプ、キツクスチイドが一八八四年 Today と云ふ雜誌の上で其任に當つた。ショオは元來先づヘンリイジョオジに依て刺戟され、次にマルクスを讀んで社會主義者になつたのであるが、キツクスチイドがマルクス攻撃をすると、直ちに起つて駁論を公にした。併し後に自白してゐる通り、彼れには此時問題が解つてはゐなかつたのである。そこでショオはジエヴンスを研究し始め、間もなく改宗して効用論者となり、更に間もなくキツクスチイドの側に立つてマルクス批評を公にする。これが可なり問題になつたのである。

一八八三年ムウアとエヴリングとが「資本論」第一卷を英語に翻譯したが、ショオはこれを今はなくなつた National Reformer 紙上で三回に亘つて批評した。その結論を紹介すると(この原文は勿論見たことがないから、玆ではヘンダアソンのショオ傳に據つて書くのである。此本にも不明の廉はあるが、今如何ともすることが出來ない)ショオは「同量の勞働が具體せられてゐる、若しくは同時間内に生産せられ得る商品は同價値を有す」と云ふマルクスの斷定に反對し、又マルクスが始めに効用を以て商品の一性質たることを認めながら、後に到つて商品から効用を抽去して、價値

を單に抽象的なる人間勞働の結晶と見ることを咎めてゐる。ショオの云ふところに從ふと、マルタスは問題を既定のことゝして議論をして居る。「それは宛かも彼れ（マルクス）が精密なる抽象の連續に依て液體は人間に有害であることを證明し、而して最後に『勿論液體は有毒でなければならぬ』と結論したやうなものだと云ふのである。彼れは抽象的効用と、ジェヴンスの所謂「無差別の法則」（一物に二價なしとの法則）及び「効用増減の法則」とを武器として價値は決して商品の、種類としての効用を代表するものではなくて、抽象的効用、而かも抽象的全部効用でなくて最終効用を代表するものであることを證明した。「商品はそれに同量の勞働が投じられた爲めにその價値を同ふするのではなくて、價値が等しい爲めに（と云ふのは等しく欲求せられるから）同量の勞働が之に投ぜられるので、それと是れとは別事である。」ショオは又マルクスの所謂平均利潤の難點にも觸れて居る。マルクスの謂ふ通り價値が勞働からのみ生ずるものならば、同額の資本を生産に投じても、その資本の中の勞働雇傭の爲めに費やされる部分と、機械道具原料等に費やされる部分との割合が同じくなければ、擧げ得る利潤の高は違つて來なければならない筈であるのに、實際の事實はこれに反して諸種の生産業を通じて利潤率は歸一せんとする傾向がある。彼の學說と此の事實とは何うして之を調和させ得るかと云ふのは、マルクス批評者の好んで指摘する點であるが、ショオも亦此點に氣が着いて居たと見えて、斯う云つて居る。「マルクス餘剩價値發生に關する全學說は、彼れの蒸汽力機械其他のものは餘剩價値を生む能はずとの證明の正しいことを基礎として居る。然るに若しマルクスが正しいとすれば、九千磅を機械什器に要し、賃銀（即ち人間勞働力）の爲めに一千磅を要する事業に投下せられた一萬磅の資本は、同額の資本で、その中の一千磅が營業什器九千磅が賃銀資本の形にあるものゝ九分一の餘剩價値をしか擧げない筈である。然るに事實を見ればこの兩者から擧げらるゝ餘剩價値は等しいのである」と。

併しマルクスの價値論を承認しないことは地主資本家の勞働者搾取を否認することを意味しては居ない。ベルンシュタインが「マルタスの價値論の當否は餘剩勞働の證明（勞働搾取の證明）の爲めにはどうでも好い事である」と云ひ、

ツガンバラノウスキイが「資本主義社會……內に於て勞働搾取の事實を證明する爲めには何等の價値學說に縋る必要がない」と云つて居るのと同じやうに、ショオも亦、若し人が蕪菁を盜んだとすれば、蕪菁の價値に關する學說は何うあらうとも、盜みは依然として盜みたることを失はないと云ふ意味を言明して居るのである。

　このショオの評論は勿論忠實なるマルキシストの憤慨を招いて、ショオとハインドマン一派との間には激しい論爭が交へられ、ハインドマンは「最終効用は最終無用事」final utility is final futility なりと公言して之に答へた。またバックス、ハインドマン、エヴリング、モリスが連署して「凡べての良き社會主義者はマルクス主義者なり」と云ふ意味の宣言書を發表したやうな事件もあつた。それで此論爭にどつちが勝つたかと云ふ事は容易に云へない。些か自から好むところに阿つて見れば、ショオの議論の方が優勢であつたらしく思はれるけれども。それは今どうでも好い。兎に角これでフエビヤン社會主義なるものは價値論に於けるマルクスとは緣を絕つたのである。

　さて勞働價値論を採用しないとすれば、フエビヤン等は何處に產業公有の論據を求めたか。（マルクスは勞働價値說の上に直ちに共共產主義的要求を置くものでないことは態々エンゲルスが斷つて居るにも拘らず、フエビヤン等はマルクスが其價値學說に基づいて直ちに勞働全收權を主張して居るもののやうに即了して居るらしい。）エップ答へて曰く、勞働のみを以て價値の創造者となす謬說よりも一層難解で、一層堅固なる地代の法則こそ眞に社會主義經濟學の土臺石をなすものであると。地代の法則はどうして社會主義經濟學の基礎になるかと云ふと、ヘンリイ、ジョオジがリカルドオの地代法則に基づいて土地國有（嚴格に云へば地代公收）を主張したのを、更に擴張して、產業公有に應用するのである。

　ヘンリイ・ジョオジは（「進步と貧困と」の中で）先づ問題を提起する。今日文明諸國に於て、富の增加と技術の進步となるにも拘らず、貧困の益々甚しきを加へるのは何の原因に基づくか。勞働の生產力は增進してゐるにも拘らず、勞

働者の賃銀はその生活最低必要資額に歸着しようとしてゐるのは何故であるか。ジョオジはマルクスの人口法則を信じない。人間は食ふべき口と共に働くべき手を持つて居る。ところが新たに増加する口は古い口より多くを食べることをしないのに、之と共に増加する新らしい手は（勞働組織の改善によつて）より多くを生産し得るのであるから、人間社會の貧困は自然の吝嗇が原因となつてゐるのではなくて、人間社會に於ける分配の不正が原因となつてゐるに違ひない。ところでその分配を決するものは地代の法則であるが、これに由ると土地の私有されて居るところでは、一定の土地の地代は、其土地の生産額が、同量の資本勞働を投じて現に耕やされて居る最劣等地から擧げ得べき生産額に超過する、その超過額に依て決定せられる。而して此の地代の法則あるが爲めに賃銀及び利子は騰貴することを得ないのである。何となれば地代の法則に依れば、勞働及び資本の投下が如何なる收益を擧ぐるにもせよ、此の二者が賃銀及び利子として受けるところは、生産物の中、この二者が地代を支拂ふことなくして耕やし得る土地（即ち現に耕やされて居る最劣等地）に於て生産し得べき部分に過ぎないからである。故に如何に生産力が増加しても、地代の増加が之と歩を共にする限り賃銀も利子も共に上進することは出來ないのである。此道理を了解すると、それ迄一見不可解であつた問題が凡べて一度に解決せられる。進歩しつゝある國に於て、生産力の増進に伴つて、何故賃銀及び利子が騰貴することを得ないかと云ふ疑問を開く鍵が、地代の騰貴の一事であることが直ぐ解かる。そこで一切社會的弊害の根源は地代に在ると云ふ結論にジョオジは到達する。地代は一切の利益を壟斷して窮厄は進歩と相伴ふ。地價を騰貴するところには必ず富裕と貧困との對立がある。地價の最も高いところは即ち必ず奢侈と窮迫との並び存するところである。

さて斯う云ふ結論に到達すれば、是に處すべき方策も亦私人の地代收得を廢止するに在ることは明白である。併しジョオジは形式上に於ては土地の私有を廢止しようとはしないで、土地に對する課税に依て、凡べての地代を國家の手に吸收し、同時に他の一切の租税を廢止すべきことを主張したのである。斯うすると、形式上では土地の所有權は依然として存續してゐるが、實質上に於ては、地主の特殊利益は消滅して、從來一階級に獨占せられてゐた利益は社會全體に

歸屬すると云ふのである。

フヱビヤン社會主義はヘンリイ・ジョオジが足を停めたところから發足した。地代公收の論據は成程ジョオジの云ふ通りであるが此理法の適用を受けるものは果して地代丈けであらうかと云ふ點に彼等は着目した。優等地と劣等地とが同時に耕やされて居るやうに、優等な設備のある工場と極めて貧弱な設備しか持つて居らぬ工場とが相並んで競爭してゐる事實がある。さうして見れば最劣等地に於ける收穫高が、一般勞働者の賃銀の標準を決定すると同じ道理に由て、最劣等設備の工場に於ける賃銀が一般同業勞働者の賃銀を決定する筈ではないか。そこでフヱビヤンの理論家は所謂「耕作の限界（マアヂンオヴカルチエエション）」の觀念を擴張して、これに新しい意味を附する。從來「耕作の限界」と云へば現に耕やされて居る最劣等地を斥したものであるが、フヱビヤンはそれを資本及び人間の熟練にも及ぼして、最劣等地に於て、最小度の熟練と、最小度の資本とを以て生産を行ふ勞働者を想像する。これが絕對的「耕作限界」であつて、此限界に於ける勞働者の收穫が所謂「經濟賃銀」で、これが共社に於ける凡べての無熟練勞働者の所得決定の基準となる。而して此の「經濟賃銀」を超過する所得は凡べて地代（レント）だと云ふのである。即ちこの超過所得は、或は土地生産力の優等なる爲めか、或は資本設備の優等なる爲めか、また或は一の人が特殊の熟練を有つて居る事に歸すべきものだと云ふので、土地レント資本レント能力レントと云ふ新造語を彼等は使用する。而して是等「有ゆる形ちに於ける經濟レント」は個人を富ますべきものではなくて社會全體を富ますべきもの」だと彼等は主張するのである。

この地代法則の擴張はヱッブが「國民所得と共分配」と題する論文（「近世工業上の諸問題」に收錄せらる）の中で詳細に說明してゐるが、地代法則の應用はショオも甚だ好むところであつて、その「無政府主義の不可能」の中では、此法則に據つてタクカアの個人主義的無政府主義を駁してゐる。ショオ自身の云ふところに從へば、「人性と地代法則との間に介んで、個人的無政府主義を壓し潰した」のである。

一八九六年倫敦で開かれた國際社會黨大會にフエビヤン協會が提出した「フエビヤン政策の報告」は此派の偶像破壞的態度を最も露骨に表明したもので、宛も其五年前にエルフルト綱領が可決せられ、國際社會黨大會に於ても最も有力な地位を占むべき獨逸社會民主黨が、マルクス無條件信奉の原則を定めた事實を顧みれば、此時のフエビヤンの態度は殆ど挑戰的だつたと云つても好い程である。「報告」の第九條は曰く、「フエビヤン協會は社會主義的著作家、經濟學者領袖、諸黨派の謬論に關しては、其反對者（非社會主義）の謬論に對すると同じく、斷然意見と言論との自由を主張す。故に協會は其見解が、最早今日或部分は誤謬として、或部分は時代遲れとして之を排棄せざる可からざるマルクス及びラツサアルに對して、正に此等卓越せる社會主義者が、その先人たるサン・シモン及びロバアト・オエンに對したと同じ批評的態度を取るの必要なることを主張す」と。

然るにそのマルクスは階級鬪爭を主張し、資本主義經濟組織の或時期に於ける激變的崩壞（カタクリスミック）を豫期して居つた。反之フエビヤン社會主義は（エツブの諸論文、就中「社會主義の歷史的基礎」「眞社會主義と僞社會主義と」「英國に於ける社會主義」"Towarbs Social Democracy?"等に由て窺はれるやうに）社會主義が歷史上の或瞬間に於て一擧に實現せられるものではなくて、長い時間内の部分的、濟し崩し的改造の綜合として、漸次に成立つものと見た。社會主義の社會と、非社會主義の社會との境界は截然一線を以て劃すべきものではなくて、勞働者保護立法、勞働組合、消費組合運動都市事業、國有事業の範圍の擴張等に依て、漸次に個人主義の色彩が稀薄となつて社會主義的色彩が濃厚になつて行くものと見た。資本主義社會と社會主義社會との相違は其過渡の段階に於ては謂はゞ濃淡の差である。社會主義は將來の或時期に實現せられるものではなくて、吾人が踏みつゝある一歩一歩に實現せられて行くものである。今日は昨日よりもより多く社會主義的であり、明日はまた今日よりも一層社會主義的であると云ふに過ぎないと云ふやうに說くのである。ベルンシユタインの修正主義なるものは、何の程度までフエビヤニズムの影響を受けたものかは定かに云ふことは

出來ないが、目的は何でもない、運動が凡べてゞあると云ふベルンシユタインの立場はまた正にフエビヤン協會の立場である。「報告」第四條の大意に曰く、フエビヤン協會は人性、英吉利人の國民性及びその政治的狀態に依て定められたる條件を承認する。協會は革命、軍隊及び警察官との戰鬪、及び殉教死よりも、寧ろ平和漸進的改良を欲する普通市民に同意するものである。…故に本協會はプロレタリヤと有産階級との鬪爭に於て、社會主義の全問題がたゞ一回の總選擧、議會に於けるたゞ一個の法律案に依て悉く決せられると云ふやうな瞬間の來り得べきことを信じない。社會民主々義なるものは一個の年賦支拂金額のやうに、漸次に部分的に實現せられるであらう。而して其の各部分は他の幾多提案中の一たるに過ぎぬであらう。社會黨の任務は畢竟此等の案を提出し且つ其遂行に努めるに在る。世界史上に於ける劃新紀元的危機に目を注いで居るやうな凡べての社會主義者は何卒フエビヤン協會以外の他の團體に加入せられん事を希望すると。

革命主義を奉ずるものはまた當然革命の擔當者たる勞働者階級を理想化して見る傾がある。而して正純なる感情を抱ける者が被抑壓階級を見るの際時に寛大な目を以てすることは極めて自然の事であるから、よしや多少の誇張があつても必しも深く咎むべきものではなからう。然しこれが一歩度を超えて、ブルジヨワジイが一切の事を所謂ブルジヨワ的偏見を以て見るのと同じやうに、その反對の側から、一切事物を階級的猜疑心を以て眺め、勞働者の行ふところは凡べてこれを婦女子の感情（センチメンタリズム）を以て是認し寬假することになれば、フエビヤンの如き事務的常識的社會主義者が之を假借しないのはまた當然と云はなくてはならぬ。

マルクスは勞働者が資本的社會に於ては道德上智能上益々墮落せざる可からざることを豫言して居る。即ち彼れの言葉に從へば、「一方に於ける富の蓄積は同時に他方に於ける貧窮苦痛隸屬無知動物化墮落となる」のである。然るにマルクスの後繼者に動ともすれば資本家を暴虐の、勞働者を美德の代表者として相對立せしめようとする嫌がある。これは後にベルンシユタインも指摘したことで、彼れはその「社會主義の前提」の一節に記して、「吾々は勞働者を在りの儘に見

なければならぬ。彼等は『共產黨宣言に宣言せられてゐるやうに、一般的に貧窮に陷つてゐるものでもなければ、また彼等に阿ねる者 Höflinge が吾々に信じさせようとするほど弱點と偏見とを脫して居るものでもない。彼等はその生活の社會上經濟上の條件に伴ふ德と罪とを有するものである。而して此條件も其作用も、共に一日にして之を除くことは出來ない」と云つて居るが、これはフエビヤンの主張と正に符節を合する觀がある。卽ち「報告」第十一條は曰く今日まで社會主義運動は中流階級又はブルジョワジイのメムバアに依て鼓吹せられ、敎育せられ、指導せられた事實を顧み、本協會は社會主義者が社會主義その者を生みたる階級を敵視するの無意義なることに抗議する。但し中流階級より出でたる是等の指導者が、嫌惡の情を以てその已れの階級に存する偏狹なる社會的理想を責めたることは之を認めるに躊躇しないが、フエビヤン協會はプロレタリヤが同じ偏見に囚はれてないと云ふロマンチックな空想を抱くものではない。…故に「ブルジョワ」又は「中流階級」なる言葉はフエビヤン協會に依ては決して輕蔑の意味には用ゐられることがない云々。

更に又第十條で、フエビヤン協會は所謂ブルジョワ新聞にも寄稿することを憚らぬ事を云ふところでは、其態度は andacions を以て許すべきものである。曰く、「英吉利に於ては凡べての政治新聞は例外なく私人資本に依て經營せられ、資本所有者の支配を受けて居る。此等の新聞の二三のものは社會主義的意見を代表し、他のものは保守的、また更に他のものは自由主義的及び急進主義的である。而して社會主義の立場から見て、社會主義的新聞の優れて居ることは、保守主義の立場から見て保守的新聞の優れて居ることゝ正に同樣である。フエビヤン協會が其意見を新聞紙上に公表しようとする場合には、最も讀者の範圍が廣い新聞を擇ぶと云ふの外何等の差別を置かないのである」と。

要するにフエビヤン協會は或種の社會主義者の通弊たる美文的演說口調を以てする感傷論を好まない。悲歌慷慨を嫌ふのである。そんな事は云はないでも分つて居ると云ふ態度を取るのである。而して此態度を、世故に通じ、旣に社會

的地位を占めて居つたハインドマン等が取らないで、却て年少無經驗なるフエビヤン等が取つたのは些か不思議であつた。ショオの自ら誇るところに由ればフエビヤン協會内では夙くから「笑殺」の習慣が行はれて、文飾空語を排斥した。實際的なる提議や批評を重んじて、勞働者階級の努力に對する同情などを頻りに口にすることを好まなかつた。更に一歩を進めては反對論者を人類の敵などと云つて非難せずに寧ろこれを戯弄する方法を取つたと云ふのである。

　この傾向は誇張せられてショオの戯曲に現はれて居る。ショオの戯曲では正義、人道、愛、宗教、道德などを頻りに口にする人物が、觀察力と實行力とを具へた常識的人物の爲に飜弄されることになつて居る。さう云ふ人物は何の戯曲にも現はれるが、玆には一例として「バアバラ少佐」中の兵器製造會社長アンドリユウ・アンダシヤフトを擧げる。彼れは意志と打算と經營の才とを備へた實業界の英雄で、姑らくモルガン、ロツクフエラアと云ふやうなのがア、ムストロングギツカアス會社の經營に當つて居るものと思へば好い。此人物が全作中で最も作者の優遇を受けてゐて、時々作者がこれに乘移つて、滔々と非道學的、非感傷的、事務的、雄辯を揮はせる。さう云ふ場合の一に於て、彼れは貧乏を罪惡だと云ふ。相手が驚いて Do you call poverty a crime? と問き返すとアンダアンヤフトは忽ち雄辯になつて、「The worst of crimes 他のどんな罪惡も之に比較すれば美德である。他のどんな卑劣行爲も之に比較すれば士道その者である。貧乏は全都市を凋萎せしめ、恐るべき疫病を蒔き散らし、これを見、これ聞きこれを嗅ぐものゝ魂は破壞される。君が罪惡と稱するものゝ如きは何でもない。人を殺す、物を盜む、人を撲る、呪咀する。これ等の如きは人生の過失と疾病とに過ぎない。眞正の常習犯罪者は倫敦中に五十人とは居ない。然るに其處には幾百萬の貧乏なる下賤なる、醜汚なる、充分食べず、充分着ない人間が居るのである。彼等は道德的に肉體的に吾々を毒する。社會の幸福を滅ぼす。彼等は吾々として、彼等が起つて吾々を彼等の深谷中に曳き却さうとすることを恐れて、吾々の自由を棄てゝ不自然なる殘酷なる組織を設けしめる。……」それから、救世軍でして居る無賴漢の救濟に言及して云ふのに、その男を自分のところへ連れて來れば其の靈を救濟して見せる。「言葉や夢で救濟するのではない。一週間三十八志の賃銀と、清潔な町にある

健康な住宅と、永續的な仕事とを以て救濟するのである。三週間内に彼れは變り色のチヨツキを着るだらう。三ケ月内には絹帽を冠つて寺に參詣するだらう。一年立たない中にプリムロオズリイグの會に出て、公爵夫人と握手をして、保守黨に入黨するだらう」と。

この傾向を助長すれば僞惡になる。アンダアシヤフト夫人は夫が善事を行ふに惡口實を以てすることを映じてゐるが、彼れのこの性癖は即ち作者その人の弱點である。更にこの傾向が墮落すれば一切の崇高悲壯を否認する cynicism に陷らざるを得ない。崇高がり、悲壯がり、人道がり、正義がる人間が嘲笑されて居るのは甚だ愉快であるが、それが一歩を邪路に投じて崇高悲壯その者の價値を否認するに至れば、誠意ある人がこれに背き去るのは當然だと云はなくてはならぬ。而して「殉教は無能人物が有名になる唯一の方法である」と云ふに至つて、フエビヤニズムは既に危險區域内に充分一歩を踏み入れたものと云はなければならぬのである。

フエビヤン社會主義は極樂境(ミレニアム)は一日にして成らず、社會改造には忍耐と長年月とを要する事を說いた。忍耐を說くことやと現狀に滿足することゝは同じではない。併し事實上、忍耐を說くものは屢々現狀に對する「神聖なる不平」を忘れ易い。而してこれを忘れた瞬間に緊張は失はれて、是に伴ふ人心淨化の作用も亦停止する。フエビヤン社會主義(Revisionism Possibilism 亦然り)の危險は此點に存した。近年に至つてフエビヤニズムが、行政實務に沒頭して人間の日常生活の必要以上のものに對する要求を理解することの出來ぬ、狹隘低卑なる社會主義として、新しい理想派の攻擊を受けてゐるのは當然の成行であつた。併し此方面の問題は既に詳論したこともあるから玆には繰返さない。若し篤志の人に依て、拙稿「再論ギルドソシヤリズム」(拙著「社會問題研究」收錄)が併せ讀まるゝことを得ば甚だ幸ひである。

(完)

二種の人權宣言

森戸辰男

一

歐米に於ける法律發達の歴史を調べて見ると、吾々が法律と呼んでゐるものの中には、二つの異つた要素が含まれてゐる。一つは吾々の共同生活の事實から自づと民衆の間に發達し來つた所の人類連帶相互扶助の表白であつて、他の一つは、少數者がその優れたる武力によつて贏ち得たる優越的地位とそれより生ずる利益とを確保せんがために、多數民衆の生活に課した所の拘束である。そして近代に於ける法律の發達の大勢はだん／＼と後者が前者に其の處を譲りつゝある、と言ふことにあるらしい。

玆に新しい法律が出來る。その法律に於ては、民衆の連帶、相互扶助を表白する要素が、民衆の隷從搾取を目的とする要素を押し除けて、表面に現はれて來る。さうなると、民衆はきつと衷心よりの感激を以て斯の如き法律の制定を迎へるのを常とする。同時に、人類文化の歴史も亦、民衆の建設的勞作の光榮ある結實として、永久に此の如き法律を記念するのである。

斯樣な法律は、多くの場合兵馬倥偬の裡に、咄嗟の間に、出來上つたものであるから、その體裁も整はず、内容も混雜矛盾し、文意の不明瞭な點も甚だ多い。之を、多數の法律學者が知惠袋を絞つて拵らへ上げた巨大なる系統的法典に較べれば、殆んど比較にならぬ程に不完全なものであつて、之に法律と言ふいかめしい名前を與へることにすら、吾々

は何がなしに一種の氣遅れを感ずる位である。それにも拘らず、民衆が歡呼を以てその誕生を祝するものは、大學者の作つた首尾整然たる大法典ではなくて、却つて法律の名にすら價しない粗朴なる一片の宣言なのである。

二

これはどうしたわけであるか。私の見る所を以てすれば、その理由は極めて簡單である。夫の巨大なる系統的大法典は少數の法律學者が多くの場合、過去の時代から、外國の事例から、或は論理の世界から、蒐め來つた所の複雜なる規則の綜合である。併し此の微を極め細を穿つた、到れり盡せりの法典の中に、唯一つ閑却せられたものがある。それは他でもない、現在、民衆の間に、抑へ難き力强さを以て動きつゝある所の彼等の生活要求其者である。

民衆の生活要求より生れずに、外部から押し付けられた法律は、民衆の生活に自由を保障せずして、却つてその束縛となる。此の如き法律が完全であれば完全であるだけ、精密であれば精密であるだけ、民衆は益々之を好まざるのみか、却つて之を厄介視するのである。蓋し、民衆の要求してゐるものは、巨細洩らさぬ論理の網ではなくて、生活の自由である。

之に反し、丁度切傷から血がにじみ出るやうに、民衆の生活要求がにじみ出てゐる法律がある。此の如き法律こそ民衆が眞實に共鳴し、同感し從つて亦理解し得る所の法律である。體裁の不備、論理の矛盾、文意の曖昧、そうしたことは、法律學者を失望させるかも知れぬが、彼等民衆の心を亂しはしない、彼等の生活は、ゆつくりと左樣なことを瞑想するには餘りに切迫してゐる。民衆の生活要求に照應する人類の連帶相互扶助の聲明、彼等の求むる法律は之であり、彼等の歡び迎へる法律は之である。

三

・民衆の生活要求に生れた法律の中、近世史上、最も顯著であり、その影響の及ぶ所が最も深く最も廣かつたものは、夫のフランス革命の際に生れた『人權宣言』である。此の宣言書は、一七八九年八月二十六日フランス立憲議會の發布したものであつて、後ちそれは一七九一年のフランス第一憲法に於て其の儘受け繼がれた。これより以後、フランス及び其他のヨオロッパ諸國で制定せられた成文憲法は、悉く多かれ少かれ、その影響を受け、皆な人民の權利に就いての規定を設け、かくて人權の保障は立憲制度の一大要素をなすに至つた。我國の憲法も亦均しくその影響の下に立ち、まづいながらにも、とも角その第二章には『臣民の權利』が規定されてあるのである。

此の記憶すべきフランスの『人間及市民の權利の宣言』は聲明して言ふ。『人は自由且つ同權に生れ且つ生活す』(第一條)べきものであり『凡ての政治的結社の目的は、人の天賦且つ不可讓の權利の保全にある。此等の權利は、自由と財産と安全と壓制に對する反抗とである』と。(第二條)進んで、同宣言は、個々の天賦人權に就いての規定を設け、身體の自由、信教の自由、言論著作の自由等の原理を聲明してゐるが、その精神とする處は、最初の二條を以て盡きてゐると思ふ。而して、それはフランス革命の合言葉であつた『自由』と『平等』との精神を法律の形を以て表白したもの過ぎないのである。

四

此の宣言が生れたのはフランスの啓蒙哲學、殊にルソオの『社會契約論』からであるか、或はそれはアメリカ諸洲殊にヴアジニヤの憲法の單なる摸倣であるか、更に又、此等の憲法はその源をイギリスの實際的政治運動に求むべきであるか、或は遡つて宗教改革以來高調され來つた信敎の自由に之を求むべきであるか。此等は凡て興味ある問題ではあるが、

私の今取扱はうとする問題ではない。私の知らんとする所は、何故に此の人權宣言がフランス革命の最大戰利品となされ、『近代自由主義の聖典として國家的秩序の永久の基礎たるべきもの』とされたのであるか、である。

天賦人權の思想は明かに自然法の學說から生れたものである。併し、天賦人權の思想が十八世紀末からかけての政治的大變革の指導概念となつたのは、それが自然法學者によつて誤りなき學說であることを證明せられたからではない。私はそのことが全然無價値であつたとは主張しない。けれども、天賦人權の思想が、そしてその表白たる人權宣言が、あれだけ根本的に全歐洲を搖り動かすことのできた主な原因は、到底其處に之を求めることは出來ない。民衆は決して空虛な論理的概念によつて動くものではない。彼等が動くのは彼等の裡に燃えて居る生活要求からである。或者は生れながらの門地のために安逸驕慢の中に日を送り他の者は生れながらにして、無名の民衆となつて、駄獸の如く働き駄獸の如く遇せられ、彼には暴君の專横が公許せられるに反し、此には奴隸の如き屈從のみが許されるのである。此の如き生活事實より民衆の生活要求は生れて來る。彼等の追ひ求めた所の自由と平等とは冷灰なる論理の歸結ではなくて、突けば血の出るやうな彼等の生活要求の表白であつたのである。天賦人權說の價値はその精緻なる形而上學的構想に存するのではなくて、その簡明なる合言葉が端的に當時の民衆の生活要求を甘く象徵し得た、と言ふ社會學的事實に存するのである。

五

ヨオロッパの反動勢力は『人權宣言』によつて象徵せられた民衆思想の洪水に對して、あらゆる方法を以て反抗を試みた。政治上に於てはナポレオンの帝國主義の復興があり、メテルニヒ等の神聖同盟の締結がある。此處でも、彼處でも、或は單獨に、或は共同に、舊勢力による民衆の生活要求の抑壓が試みられた。學問の世界に於ては歷史學派が擡頭した。自然法學派の合理主義に代つて、歷史學派の傳統主義が唱道された、自由批判の精神は頽れて、盲目なる權威の信

仰が復活した。併し。此等のあらゆる反動思想と復古運動とに拘らず、民衆の生活要求の基礎の上に築かれたる『人權宣言』記念碑は、何等重大なる損傷を被ることなくして世界民衆のこよなき遺產となつたのである。

六

『人權宣言』及び其の影響の下に出來た法律は、民衆運動の貴重なる戰利品である。之によつて征服奪掠の代りに。人類連帶相互扶助の原理が表明せられた。併し、それは凡ての人間の權利を實現することが出來たか。

第一に、此の『人間』の權利の宣言は主として男子の權利の宣言であつた。當時の人權擁護論者は、『人間』と言ふ語の下に『男子』のみを意味して、何等の不思議をも感ずることがなかつた。そこで此の『人間』と言ふ包括的名辭の下に單に『男子』の權利を宣言した所の『人權宣言』に對して革命當時のフランスの女子だちは『女權宣言』を發表し、一八四八年、アメリカの女子達は『感情の宣言』を主張せざるを得なかつた。『人權宣言』が眞實の意味に於ての『人權宣言』であることのためには、當然其の中には『女權の宣言』が含まれてゐなければならぬ筈であつた。併し、此の當然あるべき筈のことは、實際に起らなかつた。かくて『人權宣言』をしてその眞實の意味を持たしめる爲に、女子運動の長い歷史が必要とされつつあるのである。が、此の事は、今私が論じようとする所ではない。

次に、此の『人權宣言』は、その社會的意義に於ては、主として貴族僧侶に對する『有產者の權利』の宣言であつた。從つて『無產者の權利』はその重要なる點に於て閑却されてゐた。これを學問的の術語を以て言へば、それは『政治的基本權』の宣言ではあつたが、『經濟的基本權』の宣言ではなかつたのである。これ、屢フランス大革命の特色がプロレタリヤの革命でなくて、ブルジョアの革命であると呼ばれてゐる所以である

七

フランス革命も亦、他の凡ての革命のやうに、主として民衆の力によつてなし遂げられたのである。そして彼等の生活要求に應ずる自由平等の理想は彼等を激勵鼓舞するに充分であつた。併し、一度革命が遂せられるや、此の自由平等は、主として有産者である所の革命指導者によつて片手落ちな自由と平等とにされて仕舞つた。勿論民衆は之によつて或る貴重なる權利を獲得した。農民や勞働者が權利も何もない馱獸の樣に考へられた舊時代と、兎にも角にも、法律の前には萬人平等であると言ふ原理の承認せられた新時代との間には、寔に隔世の感がある。吾々は此の顯著なる事實を否認しようとするのではないが、併し『天賦の人權』として數へられてゐる多くの政治的權利は、之を裏付ける所の經濟的權利なしには、殆んど空しき權利であることも亦爭ふべからざる事實である。『自由の聲は餓死しようとする貧乏人の心には、何の福音をも傳へない』と言ふたマラアの言葉は、『政治的基本權』の宣言に留まつた『人權宣言』に對する手痛き批評であつたに違ひない。

八

人權宣言は人類平等の原理を聲明した。併しその平等は單に法律の前での平等であるに過ぎなかつた。實生活上に於ける平等はその關り知らざる所であつた、否、それはむしろ實生活上の不平等を確認したものとすら考へ得るのである。人權宣言は天賦の人權として自由、安全、壓制に對する反抗の外に、所有權を舉げ、（第二條）之を以て「不可侵且つ神聖なる權利」（第十七條）であるとなしてゐる。然るに、實生活の上に於て人類を不平等ならしめてゐる所のものは、貧富の懸隔である、財產制度である。成程、人は法律上には平等となつた、併し同時に所有權制度の『神聖化』によつて、實生活上に於ける不平等の事實も亦『神聖化』せられたのである。

人權宣言の思想的背景をなす所の自然法の學者は、直接人性に基礎を置き、その最も原始的なる欲望の充足を目的とする所の所謂原權を認め、之を天賦人權と名付けた。その內容として彼等の揭げてゐるものの中に、吾々は身體生命の

保護、自由、平等、名譽、權利能力、既得權の保護等を見るけれども、實生活の保障實生活上の平等に關する要求に就いては、彼等は殆んど之を閑却したかの如くに思はれる。有產者にとつては、身體生命が保護され、所有權が神聖化されゝ、自由と平等と名譽とが與へられゝば、もうそれで充分である。有產者は自己の生活を安樂ならしむべき財產を持つてゐるのである。故に財產權の保障は同時に彼等の安樂なる生活の保障に他ならぬ。

之に反して、無產なる民衆はどうであるか、身體生命の保護を受けることは彼等にとつても結構なことである。『自由』も立派であれば『平等』も立派だ。『名譽』となれば一段と麗はしい。併し彼等の日常の生活はどうなるのであるか。財產なき彼等にとつては、所有權の神聖化は、彼等の生活の壓迫でこそあれ、決して彼等の生活の安樂を保障する所以ではない。身體や生命に對して加へられる暴行から保護されることは、それがたまさかにしか起らぬにしろ、勿論大切なことがあるには違ひない。併し、時々刻々に經驗しつつある實生活の窮迫から、民衆を救ふのでなければ、天賦人權の民衆に對する意義は著しく害はれざるを得ないのである。蓋し人間の生命と身體と人格とが眞實に尊重せらるべきであるならば、時たまに起る暴行より之を保護するに止まらず、何よりも先に、日常の實生活の窮迫より之を保護しなければならぬ。所有權の神聖化によりて、少數なる經濟的特權階級の生活の安樂のみを保護して、多數民衆の生活を不安の裡に放任して置くことは、著しく平等の原理に反する所ではないか。而も天賦人權の爲した所は、民衆生活の安樂ではなくて、所有權と不勞所得の確立であつた。斯様に考へて見ると人權宣言の思想的背景をなしてゐた自然法學說は、其後に生れた歷史法學說に比較べれば、遙かに根本的見地に立ち、より多くの敎訓と暗示とを與へるものであるにも拘らず、而もなほ、少からず有產階級的特質を帶ぶるものと言はねばならぬ。

夫の人權宣言によつて保障された平等は法律の前で平等である。裁判所やお役所に出た場合の平等である。實生活の不平等は依然として存續しなければならなかつた。一七九三年の革命の指導者であるマラアは、既にその不徹底を感知して、『權利の平等は享樂の平等に導かねばならぬ、そして此の玆に達して始めて平等の思想はその安定を得るのであ

る』と主張し、バヴーフは、政治的平等に對して『現實の平等』『事實の平等』を實現するために、一七九六年の叛亂を企てたのである。

『人權宣言』は法律の前での平等を保護したけれども、實生活の平等を保障しなかつた。從つて民衆の生活の安樂も亦保障されなかつた。併し單にそれだけではない。民衆が自己の力によつて自己の生活の向上を計るべき方法をも民衆から奪ひ取つたのである。

人權宣言は『自由』を聲明した。併し、此の自由は平等と同じく、著しく資本家的特質を帶びてゐた。實生活に於ける彼等の自由は營業並に契約に關する個人的自由であつた。然るに、資本家と勞働者とが、契約關係に於て個人的に對立する場合、彼等の間の契約の自由が、資本家による勞働者の隷屬と奪掠とに終るであらうことは、多くの說明を要せぬ所である。此の狀態にあつて、弱者が自ら助ける道は、唯團結の一途あるのみである。然るに『自由』を高唱する人權宣言は、民衆の團結の自由を認めなかつた。單にそれだけではない。一七八九年の十月二十日の戒嚴令は「群衆が命令によつて解散せざる時は、軍隊は之に發砲すべき」ことを命じ、一七九一年にルシャプリエ法は「同一職業に從事するものが彼等の所謂共同の利益を促進するためにする團結はその何者たるを問はず『自由』と『人權』とに違背するもの」として之を嚴禁した。（二行缺）かくて勞働者は久しく『自由』主義の社會の唯中にあつて、『自由』のために苦しき鬪爭を續けなければならなかつたのである。

之を要するに、『人權宣言』は人類の政治的基本權の宣言であつたが、經濟的基本權の宣言ではなかつた。從つて、それは政治的特權階級に對する經濟的特權階級の權利の宣言としては、非常に重大な意味があつたが、一般民衆の重要なる生活要求は遂に之れによつて實現されることなくして終つた。

無產なる民衆は政治的基本權によつて象徵せられて居る生活要求の外、經濟的基本權によつて象徵せらるゝヨリ力强

き生活要求を持つてゐる。而して彼等は此の實現を要求した。過去百餘年のヨオロツパの民衆は、此の第二の人權の宣言のために絕えざる運動を續けた。吾々の呼んで『社會運動』となす所のものはそれである、

九

一九一八年七月十日、世界がまだ戰爭の暗黑に鎖されてゐた時、第二の『人權宣言』が發表された。それは、「ロシヤ社會主義ソヴィエト共和國憲法』である。其の第一章は明かに、「勞働者被掠奪者の權利の宣言』なる名を持つてゐるのである。

此の第二の『人權宣言』に於て最も注意すべきことは、それが政治的基本權の宣言と共に、一層重要なる要素として經濟的基本權の宣言を含んでゐると言ふ點である。ソヴイエト共和國は、經濟生活に於ては『富の生產及分配に於けるロシヤ全市民の平等』を實現することをその『根本目的』として居る、併しそれは根本目的であるから差當つてすぐに實現するわけではないらしい。從つて憲法中には、國有とされた土地を「各人の耕作し得る能力に應じ、…………………、農民の間に分配する」との規定があるが、これ以外には民衆の經濟的生活の平等を明する經濟的基本權の積極的聲明は殆んど見當らない。民衆の經濟的基本權の聲明は、所有權、從つて不勞所得の制限若くは廢止を通して、消極的の形で、なされてゐるのである。そして此の消極的聲明は次の二方面から最もよく之を推知することが出來る。

第一は、一般的勞働義務の承認である。ソヴィエト憲法は明かに安逸徒食の權利を否認してゐる。即ちソヴィエト共和國は、「社會の寄生的階級を排除し、國の經濟生活を組織する目的のために、一般勞働義務を採用し」「勞働を以て各市民の義務」と認め『働かぬ者は食ふてはならぬ』と言ふことをその格言として宣言してゐる。

第二は、資本公有の原則の採用である。ソヴィエト憲法は「土地の社會化を實現する目的のため一切の土地私有を廢して、土地の全體を國有にし』「一般公益に必要なる一切の森林、地中の富源河海湖沼、並に一切の有生無生の用具、農

業[illegible]、及農業上の企業を國有財産と認め」「一切の製作所、工場鑛山、鐵道及其他の生産交通の機關を」國有とする第一歩として「勞働者統制法」を制定し「最高國民經濟會議」を創設し尚「一切の銀行を」國有とすることを宣言してゐる。第一の人權宣言が資本の私有を原則としてゐたに反して、第二の人權宣言は明かに資本の公有を原則としてゐる彼が私有財産の『神聖不可侵』を宣言したに反し、此は國民の必要のためには『私有財産權を顧慮することなしに』財政政策を實行し得べきことを規定してゐるのである。

なほ、所謂個々の政治的基本權が單なる空虚なる權利として宣言されたに止まらず、經濟的權利によつて裏付けられてゐることも、注意すべきであらう。勞働者階級に思想發表の自由があつたとしても、言論機關が彼等の手にない限り、言論の自由は、實質なき權利となるであらう。また教育を受くるの自由に就いても同樣で、たとへ國家が凡ての教育機關を平等に萬人に開放したとしても、之を受くるに必要な費用と時間とのない無産者にとつては、それは單なる空虚なる權利として留まるのである。其他の所謂政治的權利に關しても、程度の差こそあれ、略、同樣なことが云へるのではあるまいか。此等の政治的權利が實質的効果を持つためには、之れに應ずる經濟的効果が保障されなければならぬのである。

ソヴィエト憲法は斯樣な事情の理解の上に出來てゐるのであつて、例へば、無産者の思想の自由は、「新聞、小冊子の出版に必要なる一切の技術的物質的手段」の支配を以て伴はれて居り、集會の自由は同時に「保溫點燈の設備を伴ふ集會所」の提供を含み、民衆の團結の自由は之に對する「物質上及其他の補助」を與へられ、教育の自由は「完全な一般的な無料教育を」民衆に與ふることを意味してゐるのである。

此の宣言が正當であるか不當であるか。此の如き宣言が果して實生活に於て實現され得るものであるか。又實際に於て、どの點迄實行されてゐるか。その實行が如何なる程度迄社會生活を混亂させたか。此等の問題は私が此の研究に於て取扱ふとする問題ではない。唯、私の指摘せんとする所は、ロシヤの新憲法が國家による經濟的基本權の最も重要なる

宣言であると言ふことである。

或は言ふ人があるかも知れぬ、此の第二の『人權宣言』も亦それが『勞働者被掠奪者の權利の宣言』である限り『人間』の權利の宣言ではないのではないかと。定にそうである、それは無産者專制の主義の上に立つてゐる。けれども、よく考へて見ると、勞働者被掠奪者はロシヤ國民の大多數であるのみならず、資本家と雖も、その特權的地位の放棄によつて何時でも所謂勞働者被掠奪者の中に入り得るのである。加ふるに、此の無産者の專制は憲法正文中にも屢々繰返されてゐる通り、單なる經過的狀態であつて、階級區別の撤廢された來るべき狀態にあつては、それは男女を問はざる『全人民』の權利の宣言となるべき筈である。故に、夫の第一の『人權宣言』が『人間の權利』と言ふ立派な名前を持ちながら、その實、謂ふ所の『人間』から女と無産者とを排除したのに較べて見ると、第二の『人權宣言』はその名前の偏狹なるにも拘らず、その實質は遙かに一般的なることを認め得るであらう。

一〇

併し、私が茲にソヴイエト憲法の經濟生活に關する根本原理を擧げる所以は、その表明してゐる思想が新奇であるからではない。或る意味から云へばそれはむしろ陳腐と言ふてもよい程に、かなり古くから存してゐる思想である。最も類似した例は一八四八年の二月革命に於ける於ける假政府の宣言である。二月革命に於て勞働者階級が決定的勢力となるや、彼等は假政府を强要して重要なる宣言をなさしめた。無産者階級のために經濟的基本權を承認したと言はれてゐる此の最初の宣言は規定して言ふ。

一、假政府は勞働によつて勞働者の生存を保障することを約す。
一、假政府は凡ての人民に對し勞働を保障することを約す。
一、假政府は勞働の正當なる利益を享受するために勞働者の結社を認む。

此の宣言はそれが單なる勞働權の承認に留まつたがために、就中、勞働者の優越がほんの束の間であつたゝめに、政治史上の一挿話となつて仕舞つた。社會運動は經濟的基本權の實現のために、長い間の曲折した歷史を經ねばならなかつたのである。

十一

近代社會運動の合圖であつた所の『共產黨宣言』の中に於て（一八四八年）既にマルクスは、「最も進歩したる國々に對してかなり一般的に適用し得る」方策として「土地所有權を沒收し地代を國費に充用すること、(二)强度の累進稅、(三)相續權の廢止、(四)凡ての往住者及反逆者の財產の沒收、(五)國家資本と排他的獨占とを有する國有銀行を設立することにより、信用を國家の手に集中すること。(六)交通機關を國家の手に集中する事、(七)國有工場及生產要具を增加し共同的計畫に基き土地を耕作及改良すること、(八)萬人に平等なる勞働義務を課し、產業隊を特に農業に於ても設立すること、(九)農業及工業の經營を結合し都鄙の區別の漸廢に努むること、(十)凡ての兒童の公的無料敎育を行ひ、現今の形態に於ける兒童の工場勞働を廢止し、物的生產と敎育とを結合すること等」を揭げてゐる。

マルクス派社會主義を以て任じて來たドイツの社會民主黨は、そのゴータ綱領一八七五年に於て、稍々理想的見地より『勞働は凡ての富と凡ての文化との源泉である。萬人に有用なる勞働は、唯社會によつてのみ爲され得るが故に、勞働生產物の全部は、社會卽ちその凡ての成員のものである。而して之が頒與の割合は、凡ての人が均しく勞働義務を負擔してゐるのであるから、平等の權利に從ひ、各人の正當なる需要に從つてなさねばならぬ。今日の社會に於ては、勞働資料は資本家の獨占する所であり、其の結果生じたる勞働者階級の不獨立は、あらゆる形式に於ける彼等の窮乏と隷屬との原因である。故に、勞働を解放しようと思へば、勞働資料を社會の共產に改め、全勞働を組合的に組織し、その勞働收益を公益に從つて充用し、正義に從つて分配することが必要である』（拙譯ブレンターノ『勞働者問題』一一七頁—一二一頁）と主張し、そのエルフルト綱領（一九九一年）に於ては、稍現實的見地より

『生産手段に對する私有財産は、以前にあつては、生産者に向つて其生産物に對する所有を確保する所以の手段たりしが、今や之は、百姓、職工、及小商人を掠奪し、かくて非勞働者――即ち資本家大地主――に向つて、勞働によりて生産せられたる貨物の所有を確保する所以の手段と爲つた。只、生産手段――即ち、土地、鑛山、原料、道具、機械、交通機關――に對する資本家的の私有財産を變じて、社會公共の財産となし、商品生産を變じて、社會的生産、即ち社會のために、又社會に依りて行はるる所の生産をなすことに依りてのみ、かの大規模の經營並びに絕えず增加する所の社會的勞働の收益力は、從來掠奪されゐたる階級に向つて、始めて貧窮及び壓制の泉源たる地位を脫し、最高の福利及び圓滿調和せる發達の泉源となるであらう。此の如き社會組織の改造は、啻に無產者の解放を意味するのみならず、亦實に現時の狀態の下に苦しめる全人類の解放を意味する。』河上敎授の譯による。『社會問題研究』第八册一三頁―一四頁）と聲明した。尙、兩綱領の揭げてゐる具體的の政策を見ると、多くの點に於て、ソヴイエト憲法の規定と酷似してゐる歐米諸國の社會黨は悉く、之と大同小異の綱領を揭げてその運動を續け來つたのである。

十二

此等は單なる紙上の綱領たるに止まつて未だ全體として實生活の上に實現されたものではないが、彼等と違つた行き方を採つた社會主義者等（廣義の）は、その規模こそ小さいがともかく斯の如き原理を實生活上に實行したのである。例へば、前世紀の半頃アメリカの新大陸は色々な形の社會主義制度の試驗場となつた。何十と言ふ多數のものの中から一つの例として、玆にはジョージ・ラプの創設した宗教的共產主義團體のエコノミイを採つて見やう。

此の團體の『加入誓約』によると、團體加入者は「吾々の手の勞働のみならず、吾々の小供、吾々の家族又は將來吾々の支配の下に來るあらゆる他人の手の勞働によつて、本團體の利益と福利とを促進す（第二條）ることを約束し且つ『吾々は決して吾々自身のためにも、吾々の小供のためにも、吾々に屬する如何なる人々のためにも、直接にも間接にも、本

團體のために又はその團體員の誰かのために、爲した所の吾々の又は彼等の勞働又は勤勞に對して、何等の代價、賞讃又は報酬を請求又は要求しない積りであり」なほ、「吾々又は吾々の家族が、共同又は各別に、爲なければならぬ所、又はなし得る所は、凡て、吾々の同胞のためにする任意的奉仕と考へらるべきものである」（第三條）と言ふことを誓言しなければならぬ。

之の加入者の約束に對して團體の方では、『彼等自身及その家族のために、必要なる衣服、肉類、飲料、住居の如き生活必要品を各別に供給し」（第四條）更に、「彼等自身のみならずその小供及家族に對し、現世の幸福のために、並に來世の冥福のために「當然必要であるとされるやうな一切の教會及學校に於ける教育」を與ふることを約し（第四條）而も「此の給與は勞働能力の存續する期間だけに限られず、彼等の誰でもが疾病、癈疾、又は其他の理由で勞働不能となつた場合にも、從來同前の給與及扶助は勿論、之と共に、彼等の境遇が當然必要とするやうな醫藥、看護付添、慰藉をも與へらるべきである」（第五條）

斯樣な例は、之を遠い外國に求めないでも、我が國に於ても之を見出すことが出來る。武者小路氏の『新しき村』はその一例である。『會則』（現在）は「會の精神に自ら責任を以て入りしもの」の中、「村に入つて協力して會の精神通りに生活しようとするもの」を『第一種會員』とし、之に關して略ぼ次の如く定めてゐる。

「一、第一種會員は總べて權利と義務と自由に於て、同等である。

一、第一種會員は村に入る時、無條件にて自分の持つてゐる金を全部村にをさめる。

一、村に入る責任は全部自己が負ふ。

一、第一種會員の衣食住の心配は、第一種會員全部で荷ふ。一人でも健全な衣食住を得られないものがないやうに、皆で骨を折る。

一、第一種會員の內病人が出來た時、皆でそれを養ひ、又出來るだけなほすやうに骨を折る。其のために臨時費を造

るやうにする。

一、義務勞働の時間及び年限には制限あれども、少しきてと此實際によつかつて二年乃至五年の間にきめる。今は皆同じ時間だけ働くことにする。」

吾々此等兩者に於て、社會民主主義とは全く違つた宗教的又は準宗教動機からではあるが、私有財産制度の廢止、從つて不勞所得の否認、富の生産及び享樂に於ける平等、即ち一般的勞働と生存權との承認の諸原理の聲明せられてゐるのを見出すことが出來る。

十三

終りに、現存國家も亦その動機は遠ふかも知れぬが兎も角、ソヴィエト憲法の聲明して居る原則の或る者を、——勿論極めて低い程度にではあるが——實行し來り、又は實行せんと努めつゝあるのである。

公共の利益と言ふ理由の下に、多くの國々に於ては、電信、電話は勿論、鐵道や電車も亦、既に久しい以前から、公有され、或は公の統制の下に置かれて居る、水道、瓦斯、電氣の諸事業に就いても同樣である。同時に、地價增差税の賦課により、資本課税により、所得税と相續税とに累進率を適用することにより、不勞所得の社會化が努められつゝある。

他方に於て、或は農民に農地の獲得を容易ならしむることにより、或は都會居住者にヨリ善き住居とヨリ善き生活資料を安價を以て給することにより、或は最低賃銀を法定することにより、或は疾病、災害、養老、失業、の保險制度を設くることにより、無産なる民衆に『人間相應の生活』を確保せんがために、近代國家は益々多くの考慮と資力とを費すやうになつた。

學校教育に就いても、多く文化國は小學校や補習學校の授業料を免除し、國によつては小學兒童の學用品並に食事の

公給をも實行してゐる。かくて教育の自由は漸次空虛なる權利たるの性質を脫しつつある。

斯樣な傾向は特に最近の世界戰爭に際して著しく表はれた。吾々は屢々之を呼んで國民經濟の軍國化若くは戰爭社會主義となしてゐる、それは戰爭に際して、軍國の目的のために害はれたがためにしか呼ばれたのであるが、其の中には經濟的基本權の承認の方へ一步を進めた方策が數多含まれてゐる。最高價格令、奸商取締法、生活必要品の徵發收用、切符制度、高率なる戰時利得稅等は、その例であらう。勿論、此の政策の動機が軍國の要求であつたと言ふことは吾々の返す〲遺憾に思ふ所であるが、併し、此の戰爭社會主義によつても、更に高尙な目的のために、即ち侵略と殺戮とのためでなく、愛と自由とのために、同樣の政策のとり得る可能が示されたことを看過してならぬ。（三行缺）

十四

斯樣に考へて來れば、此の第二の『人權宣言』は、之を一個の思想として見れば、何等新奇のものではない。寧ろ現代に於ける社會發展の諸相の指示する所の其の偏趣である。それにも拘らず、私が玆に之を特說する理由は何處にあるか。それは斯うである。私が讀者の注意を促さうとする點は、此の第二の人權宣言に表はれたる思想が新奇であると言ふことではなくて、一つの大なる國家或は國民的團體が、此の思想をその國家若くは國民的團體の根本組織即ち憲法の一部として宣言した、と言ふ事實である。即ち、第一の人權宣言と異つた新なる民衆の生活要求が、國家の法律によつて承認せられた、と云ふ事實である。かくて再び民衆の連帶相互扶助の要素が征服と掠奪との要素に變つて、法律の表面に強く印せられたのである。（三行缺）

政治の理想（ベルトランド、ラッセル）

故 中澤臨川

故中澤臨川氏は本社のため、ラッセルの「政治の理想」を翻譯しつゝあつたが、その一部、即ち此處に錄載せる部分を譯了して溘焉世を隔つた。しかし此片鱗の裡にも氏の志向、氏の文藻は躍るが如く、吾人の心胸を搏つものがある。氏の尊き絶筆として未定稿ながら氏の令弟なる豐澤氏に乞ふて本誌に登載させて貰つた。

暗黒の時代に處するには、明確なる信念と根強い希望とが人間に必要だ。而してこれ等のものから困苦を物ともしない沈着な勇氣が生れる。現に我等の遭遇しつゝある時代は、我等の多くに對してその平生の信念を充分確認せしめるに與つて力があつた。我等が從前から惡いと考へてゐた幾多の事柄は眞實惡い者であつた。で、自己破滅の淵に急ぎつゝある現代社會の廢墟の上により良き社會を建てようとするには、何んな方向に人間が進まなければならんかといふことを、我等は明確に知ることができた。實際、今日まで人間がお互の間を縛つて來た政治的行爲は全部が惡い理想の上に立てられてゐたのだ。我等の政治が依然として貧困、掠奪、罪惡などの原因となることを避けようとするには、それは全く違つた理想に依らなければならないのだ。

政治上の諸理想は個人生活の要求する諸理想を基とすべきである。政治の目的は個人の生活を出來るだけ良くするといふことにほかならぬ。政治家はこの社會を構成するさま〴〵の男、女、小供のことを專念すればよいので、それ以外のこと、それを超越したことを考へる必要がない。政治の問題とはあらゆる個人に出來るだけ良い生活を送れるやうな方法に於て人間間の關係を調整することだ。で、最初に起る疑問は、我等が良いと考へる個人生活とはいかなるものか

といふことである。

第一、我等はあらゆる人間が同樣であるべしとは要求しない。全ての種類の人間を何等かの方法でそれに似寄らせる爲めには一つの見本又は型を案出する必要はない。それは氣短かな行政家の理想に過ぎないことだ。世にはまた自分の意見を强制して、一の疑はしい問題に一定の答を與へさせるやうに全體の生徒を仕込むところの惡教師がある。バーナード・ショオ君は『トロイラスとクレシダ』を以て沙翁劇中の最大傑作だとする意見を有して居られるさうだ。私はこの意見には同意し兼ねるが、若し一生徒が左樣の意見を懷いてゐるとした場合に、私は個性の標徵として之を歡迎する。然し世間多數の教育家はさうした異端的見解を寛容しえまい。單に教育家ばかりでなく、凡そ權勢の位置にあるあらゆる普通人はその部下の行動を豫定的でそして不便でないやうに嵌込む爲めに何等かの均一を彼等に要求するものである。その結果はかうだ、それが成功した場合には獨創と個性とが踏み躙られるし、それが不成功の場合には爭ひが起るのだ。

あらゆる人間が一つの理想を持つといふことが、出來るならば在らま欲しいことだ。どんな人間でもが善惡いづれかに發達すべき彼の理想をその内在中に有してゐる。彼には一番に適したことと、一番に不向なこととがある。で、彼の境遇によつて、彼の善良な能力が發育するか壓し潰されるか、それとも彼の惡い衝動(インパルス)が増長するか又は次第に良い方向に振向けられるかが決まる。

そこで、一般に適用のできる理想的性格といふものを事細かに斷定するわけにはいかないが——例へば凡ての人間が勤勉であれとか、犠牲的であれとか、音樂好きであれとかいふ風には言へないが——然し何が可能でありまた望ましくあるかに就て我等の評價を導くに足るところの汎い原理はある。

我等は二種類の生産品と、而して之に對應する二種類の衝動(impulse)とを區別することができる。即ち私有の可能な生産品と萬人が等しく分けうる生産品とがある。一人の者の食物と衣物とは他の者の食物と衣物ではない。若しも供

給が不充分の場合は、一人が有つ物は或る他人を損害せねば得られぬ。この事は一般の物的生産品に就て言はれることで、從て現代社會の經濟的生活の大部分にあてはまる。然るに他面に於て、心的及び靈的生産品は他を除外した一人の者の專有ではない。或る者が一の科學を知つてゐたにしても、それは同一科學を他人が知ることの妨げにはならない。反てそれは他人が知識をうる扶けになるのだ。また或る者が立派な藝術家であり詩人であることは、他人の畫を描き詩を作る妨げにはならないで、寧ろそれを勵ます效がある。また若し或る者が二三の者に對し善意を有してゐたとするに、その爲めほかの人間の間に分けられる善意が尠なくなるわけではない。一人が多くの善意を有てば有つほど、彼はより多く他人の間に善意の種を蒔くであらう。されば之れ等のものには所有といふことがない、なぜなら決まつた量が分配されるわけでないから。で、何處にでも增加があれば、あらゆる處に增加を生じて行く。

かうした二種類の生産に應じて、人間には二種類の衝動がある。即ち第一は所有の衝動（Possessive impulses）であつて、共分することのできない私の品物を獲得し保有しようとするもので、蓄財の衝動がその中心をなしてゐる。第二は創造又は建設の衝動（Creative or Constructive impulses）であつて、獨占や所有といふことのない生産品を社會に提供し又は世の使用に便せようと努めるところのものである。

人間の最善の生活とは、創造の衝動が最も汎き部分を働き、所有の衝動が最も狹き部分を占めてゐる生活である。この說は決して新しい發見ではない。福音書にも恁う言つてある、「何を食ひ、何を飮み、または何を着るかを思ひわづらうな」と。即ち是等の物に對する我等の考慮は重要な事でないとして除かれたのである。然しもつと惡いのは、是等の物に就て考へる習慣の附いた心そのものである。それは競爭、嫉妬、支配、殘忍、そのほか社會を毒する殆んど凡ての罪惡へ導く。殊にそれは力の侵略的使用へ導く。物的所有は力によつて得られ、而して掠奪によつて樂むことができる。然るに心的所有はかやうな方法では奪ひえない。あなたは或る藝術家なり思想家なりを殺すことはできるが、然しあなたは彼の藝術なり思想なりを奪ふわけにはいかない。またあなたはその同僚を愛する件によつて或者を殺害することは

できるが、然しあなたは、その爲めに、彼の幸福を構成してゐた愛までも奪ふわけにいかない。力はかやうな物に對しては全く無能である。唯だそれは物的財産に對してのみ有効である。これ故に、力を信ずる人間は、その思想と慾望とが物的財産によつて奪はれてゐる者である。

所有の衝動は、それが強いときには、全く創造的であることを要するところの活動をも害する。或る重要な發見を爲した者が他の競爭的發見者を妬むやうな場合がある。例へば、或る一人は癌に對する治療法を發見し、他の一人は肺病に對する治療法を發見したとするに、その一人は他の者の發見が誤謬であつたと聞いて、之にかゝつた患者の不幸に同情する代りに、一種の喜びを覺ゆるやうなことがないでもない。この場合その人は、知識の爲めの智識を欲し、またはそが効用のための智識を欲するのではなくて、單に名譽の爲めにそれを欲してゐるのである。かうしてあらゆる創造の衝動は所有の爲めに暗らまされる。聖道の念者でさへより上達した聖人を見ては妬ましく思ふ。また大概の愛情に嫉妬の影の伴ふのも創道の境域に所有の衝動が侵入するからである。で、その最も惡い例は、人生に於て凡ての價値ある物を失つた徒輩の懐く鋭い嫉妬で、それ等の者は自分の持たない物を樂むことから他人を妨げようとする傾きを本能的に有してゐる。これは老人が青年に對して屢ばとる態度である。

植物や動物と同じく、人間には一定した自然的の發育衝動(impulse of growth)があり、それは精神的にも肉體にも確かである。肉體の發育は空氣、食物、運動などにより助成され、支那婦人の足を小さくするやうなたぐひの方法によつて妨害されると同樣に、精神的發育も亦外界の影響によつて、或は助成し、或は妨害することができる。發育を助成する外界の影響とは、心的機能を練磨する爲めに、單に奬勵なり精神的食物なり機會なりを與へることである。また發育を妨害する影響とは訓錬、權勢、恐怖、輿論の暴力、全く不似合な職業の強制といふが如きものゝうち、何れかのたぐひの力を用ゐて干渉する謂ひである。そのうち最も惡いのは、道徳上の良心として現はれる人間の根本的衝動を遮げまたは撓めることで、かような影響は恐らく一生癒すことのできない内的危害をその人に及ぼすであらう。

力の暴用によつて他人に及ぼす害惡と、並びに力によつて得た財品の無價値なことゝを能く了得してゐる人達は、他人の自由に對して深い尊敬を拂ふであらう。その人達は他人を拘束しまたは桎梏にしようとは思はぬだらう。彼等は裁くには孤疑するが、同情することは早からう。彼等は親切心を以て一人〳〵の人間に對するだらう、なぜならその人の中にある善根は脆いと同時に限りなく尊いものであるから。彼等は自分達と違つた人達をも責めぬであらう。彼等は個性のあるところに差異があり、均一は死を意味してゐるといふことを知り且つ感じたであらう。彼等は各個の人間が能ふ限り多く生きた物であり、できるだけ少なく機械的の產物であることを望むであらう。約言すれば、他人に對する彼等の凡ての態度は深い尊敬（reverence）であらう。

玆に於て我等が個々人に希望する事柄は明らかとなつた。一は所有の衝動を壓倒し抱擁するだけの強い創造の衝動、二は他人に對する尊敬、三は自分のうちにある根本的創造衝動の愛惜。で、自尊の念または自然的矜持は良き生活に必要である。人間がその性を完く保つためには、彼は內的に全き敗者であるといふ觀念を持つてはいけない。寧ろ進んで、內外ともいかなる障害に逢はうとも、彼の內にある最善の物に由て生きて行かうといふ勇氣と希望と意志とを振ひ起さねばならない。彼が所有の衝動よりも創造の衝動を持ち、他人に對する尊敬を持ち、彼自らの根本的衝動に對する愛惜を持つならば、この三つのものがあるならば、彼の生活は、一個の人間自らの力の及ぶ範圍に於ては、その最善の可能性を發揮しうるであらう。

政治的制度の良否は、それが個々人の上に及ぼす善または害によつて判定さるべきだ。即ちそれ等の制度は所有心よりも創造心を催起させるかどうか。それが人間同士の間に尊敬の精神を增進させるかどうか。それが人の自尊心を扶ばうかどうか。

是等の凡ての點に就て看るに、現に我等の住む制度は、在るを要するところのものより實に甚だ遠く距たつてゐる。

單純生活問題

單純生活と能率生活

法學博士　森本厚吉

一　生活の單純化

理論から考へても實際から論じても現在の文化は生活の單純化を要求して居るのである。經濟學者の第一位を占めて居るマーシャルの書いたものを見ても「英國上流社會の消費の過半は全く不必要なる物である」との事であるから、消費を單純化する餘地は實に茫漠として廣いのである。英國に於てでさへ其通であるから、我國の如く生活問題は貧乏人や女中任せにすべき小問題に過ぎないと考へて何等學理の適用を行はず時代の進步に伴はない生活を營んで怪まない國では、驚く可き程生活の浪費があるのは別に不思議な事ではない。唯かゝる狀態が永く縱けば個人の不幸は勿論の事國家も是れが爲めに國際的に自滅せねばならぬのである。

二　生活能率の增進

生活の單純化を要求して止まない文化は其本源に於て生活能率の增進を目標として居るのは當然の事である。五ケ年も續いた歐洲大戰爭が約六千七百餘億圓を全く不生產的に消費したと云ふ事だけでも如何に世界的に生產力が萎縮したかと云ふ事は明白な事である。オーストラリヤの首相ヒユースが「吾人は今や勞力及び資本の各單位に於いて曾て見ざりし程度でより多くの生產を爲さねばならぬ」と倫敦のクインスホールで叫んだのはよく世界改造の根本義を示して居るのである。元來今日の經濟進步は全く最少の勤勞で最大の効果を得んとする經濟主義が色

々の方面に適用された結果に過ぎない。然るに不思議にも經濟の主體である人其物の生活には其經濟主義が十分に適用されて居ないで、唯習慣に囚はれた在來の生活方式によつて居るのであるから其能率の擧らない事は夥たしい。夫れだから勞働の貴重な今日にありてもギルマンの言つて居る樣に無意味な生活の爲に「婦人勞力の五分の四は無駄に費されて居る」のである。かかる時代に處して最も大切なる事は不必要なる消費を省き生活の能率を大にする事、換言すれば最小生活費を以て能率の最大なる生活を營む事である。而して玆に生活と云ふのは單に生存(to exist)する事卽ち所謂露命を繋ぎ得ると云ふ事ではなく新時代の人間として生活(to live)する事を意味するのである。斯くの如く考へ來ると今日單純生活の鼓吹は最も大切であるが其生活を單純化する方法は合理的のもので且其程度は生活能率の增進を寄せざるものでなければならぬのは勿論のことである。

三　單純生活に關する誤謬

能率生活は合理的及經濟的に生活の無駄を省いて單純化されたものであるから一種の單純生活と見る事も出來る。けれ共普通に單純生活と云ふは二つの意義に於て誤られて居るのである第一は所謂簡單生活又は安價生活と同一視して、あまり生活の內容に注意を拂はず專ら生活費を出來るだけ少くせんとする事に重きを置くのである。

第二は單純生活を鼓吹する事の必要は上流社會に最も多いのであるが、是れを生活に餘裕の少ない中流以下の者に說くのを主として彼等に無理な勤儉貯蓄をなさしめんとする事である。

二者共に實に恐る可き誤謬であるが共に生活に關する意味が徹底的に理解されて居ない事から起る誤謬である。

四　生活の意義

人類が生を此世に享くれば物質的にも亦精神的にも其個性を十分に開發して人として當然有す可き特權を發揮し得なければならぬ。而して此目的を達する手段として生活向上が必要なのである。若し此目的を達する事が出來たならば精神的に個性の自由發達を見る事が出來ると同時に物質的に一層生活の能率が大になつて且つ樂しき物になるべき筈である。然るに今日誤つたる習慣や生活に關する一般知識の缺乏の爲に人類の自由なる發達は阻害されて却て重い生の刑罰を受けて居るのである。衣服哲學の著者が人が生を此世に享くるのは恰も天の使が天來の赤子を籠の內に容れて持ち來り夫れを人々に貸與するが如きもので、其時に天の使は嚴格なる申渡しを人類に與へる。卽ち「是

れは測り知る可らざる程の尊き貢與物である、十分の注意を加へて是を用ふ可し何時かは高價な報酬を以てするにあらざれば重い刑罰を以て取り返へさる可き時が來るのである」然り我等は全身全力最善を盡して個人の發達と社會の進歩を期す可き責任を有して居る。是が爲には吾々の生活をして先づ合理的のものとして生の意義を十分に發揚しなければならぬのである。

五　生活の基礎觀念

生活の基礎は人の欲望である。生活は欲望の實現された物に過ぎない即ち人の欲望の滿足に適合したる行爲が人の生活の標準となるのである。故に欲望の意義が明かになれば生活の眞意も自然理解されて「單純生活」と云ひ或は「能率生活」と稱する物の本性が明かになる。

抑も欲望とは缺乏の感覺及び其缺乏を滿足せんとする意志の狀態を云ふ即ち欲望は一種の心理的現象で是が基となつて生活の活動を起すのである。生活標準に種々の種類の存在して居るのは、つまり其根本である欲望に色々種類があるからである。勿論生活と云ひ或は欲望と云ふ物に對して具體的に分類する事は困難であるが、大體に於ては次の四つに別つて欲望發達の有樣を知る事が出來る。

一、必然的欲望　是れは人の生存に絶對的に必要なる物を得んと欲するもので若し是れを滿足する事が出來なければ人の健康を害し肉體的生活に於てすら不完全に陷いるのである。

二、身分的欲望　必然的欲望が發達すると身分的又は應分的欲望と云ふものが發生する。是れは原始時代孤立的生活を營んで居る時には發生するものでないが或る程度まで文明が進歩して色々な社會的關係を生ずると各人が夫々社會の一員として習慣的に必要と認むる物を得んとするに至るものである。是れ即ち身分的欲望であつて是を滿足させる事が出來ない樣な場合には社會的生活に於て何等かの損害を受けるのは止むを得ないが個人生活に於て其肉體的健康に於ては何等の害を起すものではない、而して此欲望を人類が充し得る樣になると社會は一層秩序正しく發達する樣になる。

三、快樂的欲望　身分的欲望が進歩して快樂的欲望になると其滿足によつて社會は一層よく健全なる發達をなすものである。如何となれば此欲望滿足によつて心身の休息及慰安を受くる事が出來其結果生活的能力の發達を來し人類の勞働力を旺にして能率を大にする事が出來る。けれども快樂的欲望が誤つた

る發達をすると奢侈的慾望に變ずるのである。

四、奢侈的慾望　是れは快樂的慾望以上のもので個人にも社會にも其時代に於ては必要と認められざるものである。絕對的に不必要でないとしても個人及社會の富力の關係上其出費と結果に於て共に不釣合と認む可き物であるから其滿足は一種の浪費となり經濟界を害する物と云はねばならぬ。

以上四種の慾望は勿論相對的のものであるから種々の事情の相異によつて同一のものでも異種の慾望となるものであるを事を記憶せねばならぬ。

六　生活の標準（文化生活）

生活の標準を如何なる點に於て決定すべきやと云ふ事はまだ今日の經濟學に於ては確定された問題ではない。實に上王侯から下日傭勞働者に至る迄其生活狀態は千差萬別何等一定の標準なき亂雜なる者に見ゆるが、よく研究して見ると矢張生活にも種々の標準があつて一定の時代一定の場合に於ては夫々標準とすべき生活方式の存在して居る事は否む可らざる事實である。戰後、今日の如く社會は激變した時に於て我國民の生活狀態を見るに、今猶封建時代の平凡な社會に適した生活を營んで居る者が多いから先づ國民生活の標準を能率生活に改める事が何より大切なのである。

生活の標準を大別すると絕對的標準と相對的標準と二分する事が出來る。生活の絕對的標準と云ふのは慾望の第一種である必然的慾望のみの滿足に適應したる生活を云ふのである故に此標準を保つて居る者の生活狀態は辛ふじて露命を繫ぎ得るだけの衣食住に關する自然的慾望を滿足するの他には何等の餘裕のなきものである。即ち漸く生存するに過ぎないので生活を營んで居るものではない。此標準對にして生活の相對的標準と云ふのは必然的慾望の外に他の慾望の滿足にも適應した生活を測定して定めた物である。故に絕對的標準は稍ゝ固定したものであるに反して相對的標準は非常に變化が多くて複雜なものである。然らば現代文化に適應したる生活の標準は如何なるものであるかと言ふに勿論相對的標準に屬する物でなければならぬのは當然であるが、更に其特質に就ては或人は非常に複雜したる奢侈的生活でなければならぬと云ひ。或人は寧ろ原始的生活に近い程度迄簡單にしたものでなければならぬと云ふ兩極端の間に色々の異說を主張して居る而して私の考へる處によれば現代人類の目標とすべき生活の標準は「生活の能率的標準」と稱する

者でなければならぬと思ふ。此の標準を保てる生活を普通に「經濟的生活」（經濟生活に非ず）、「能率的生活」又は「能率生活」或は「文化生活」と稱するのである。

一寸附言して置くが文化生活と云ふのは哲學的に解釋すると種々の異論もあるけれ共經濟的に論ずる場合には單に文明的或は現代的生活と云ふ意味で新時代に適した無駄のない能率の多い且つ樂しい生活を意味するのである。故に經濟學的見地から言へば必然的、身分的、及快樂的慾望の滿足に適應さする生活樣式であるが奢侈行爲は全然許さないものであるから文化生活と云ふよりは能率的生活とか經濟的生活と云つた方が科學的なのである。けれ共單に經濟的ばかりでなく精神的意義を加味して考へる時には能率的生活或は經濟的生活と云ふのは少しく意味が狹過ぎるから文化生活の方がわかりがよい。私共が近來提唱して居る「文化生活研究」に於て種々文化に關する質疑を受けるが勿論文化とはフランス及び獨逸で用ひて居るクルツールの譯語であつて獨逸語のシベリザチオン又は英語のシビリゼーションと云ふ字とは意義が餘程異つて居る點がある。然し寧ろシビリゼーション（文明）の意義で文化生活と云ふ名稱を用ひて居るのは恰もギゾウの有名な講演は主として所謂クルツールに關するものであるが是を文明史と譯したのと同じ意味である。元來クルツールと云ふのは立派な語であつたが數年前から惡用され初めてプロシヤ主義とか軍國主義とか、倨傲自負主義とかが加味される樣になつた從つてアングロサクソン人種は此語を好まないから決して使用しない斯んな關係もあるから文化生活と云ふのは英語では簡單に適譯を附する事は出來ない。私共の「文化生活研究會」に於て今度北米合衆國に支部を置いた關係上文化生活研究の英語が必要になつたが、どうしても直譯が出來ないから單に內容を示すに止め總に Study in the problems in Modern Life とぼんやり稱する事にしたのである。

七　單純生活と能率生活

前にも述べた樣に現代の生活は大いに單純化されなければならぬ、けれども其程度は生活能率の增進を害せざる點で止めなければならない。能率生活は一種の單純生活ではあるが所謂簡易生活とは異つて居る。十數年前に珍重されたワグナー著『簡單（シンプル）生活（ライフ）』とか、クロス著『十二錢生活』或は賴田博士著『安價生活』等に示されて居る生活とは同一ではない。

元來必然的慾望とか必然的標準とか云ふのは今日二つの意味

を有して居る事はマーシャルの言つて居る通りである即ち

一は生存に必要缺く可らざるものを意味し

二は能率に必要なるものを云ふのである

所謂簡易生活と稱するは前者に屬するもので古き時代には非常に喜ばれ宗敎家殊に禁慾主義の人々は盛に是を皷吹した。今でも殆此時代後れの說に囚はれて居る者があつて生活の向上は勞働の高價又は生産費の増加を意味し「安い勞力」と云ふ我國産業の基礎を覆す物であるから我が農民及一般勞働者の生活は今迄通り出來るだけ質素に且つ安價にせねばならんと主張して居る。併し是れは大なる時代錯誤の說である。今日の經濟界で世界の競爭に勝を占め樣とするには昔の樣に「安い勞働」ではなく能率の大なる勞働を最も尊重せねばならない。日本人も人である以上は時代に生きた生活を營む特權を有して居るのであるから西洋人と同樣に生活の向上を計らなければならぬ。生活が向上すれば或る程度迄は生活費が増加して勞働の生産費が大になるのは止むを得ない事であるが「安い勞力」は一般に能率の少いものであるから結局高價なものであると云ふ位な事は普通の經濟學敎科書に書いてある通りである。故に我國民が簡易生活から脫して一層高價な能率生活を送る樣になる事は却て國力發展上必要なるものであるのみならず斯くする事が戰後の經濟界に於て經濟進步の唯一の根源となるのである。

八　能率生活の標準

然らば生活の標準は如何なる物であるかと云ふにワシントン大學敎授ライアン博士はボンヤリと人類たる品位を保つに恥しくない生活を營む程度であると云つて居る。ハーバート大學敎授バロック博士は一定の階級に於て慣習的に樂しみ得る快樂又は奢侈の量が生活の標準を形成するものであると云つて居る。是等の解釋は皆漠然たるもので單に前述の相對的標準を說明して居るに過ぎない。私は文明人の生活は能率的標準を保つべきもので其主義としては『一定の時及場所並びに一定の社會に於て必然的、身分的及び快樂的慾望の滿足に適應せんとする活動の狀態を生活の能率的標準と云ふ』のである。而して國民全部が悉く此の標準を保ち得て居る能率生活を營み得る樣に我等の文化的戰ひは戰はれなければならぬのである。近來米國農務省勞働局で生活標準を三つに別けて

一、窮民標準　二、最低生存標準　三、最低健康及快樂標準

として居るが自分が能率標準と云つて居るのは最後の最低健康

及快樂標準を意味して居るのである。故に此の生活には普通に奢侈と稱して居るものより快樂的慾望を分離して之が滿足を認めるが奢侈的慾望滿足の行爲は全然排除するものである。從て單純生活と能率生活に於て共通性と認む可きは共に奢侈的慾望の滿足行爲を全然除外して居る事である。是に反して單純生活と能率生活が全然相異して居る點は單純生活に於ては單に必然的慾望及或程度迄は身分的慾望の滿足を本體として居るけれ共能率生活に於ては其外に更に快樂的慾望の滿足を必要として其程度迄生活の標準を高めんとして居るのである。

九　能率生活の必要條件

文化の進歩殊に生活に關する知識の開發に伴ふて生活の標準は次第に向上するものであるから例へば德川時代に於て完全無缺な生活と認めたものでも今日では不完全極まるものに變じたとしても別に不思議な事ではない、從つて一定の生活標準を保つに必要な條件は時代の進歩によりて絕えず變遷す可きものである然らば今日能率生活を營むに必要た條件は如何なるものであらう。

抑も生活に最も必要な物質的條件は勿論食を第一とする食衣住でなければならぬ。然るに我國に於ては衣食住と云ふ字句を未だに本氣に使用して衣を第一に尊重して居るのは遺憾なる我國民生活の時代後れなる事を表はして居るのである。昔は比較的人口が稀薄なるが上に極端な簡易生活を營む水呑み百姓が豚の如き生活に甘じて自己の勞力を○にして働いたからして食物は容易に得られて僅かに一方農の貴重說位を說けば食料問題は解決された。而して一般社會は生活の內容よりも外見に重きを置き平常着より外出着、日常の家庭料理よりも饗宴料理、居室や臺所よりも客間と玄關に重きを置くと云ふ方針で生活が營まれたのであるから自己は社會、國家の爲めに犧牲に供す可き事が當時の世界的理想であつた。今や其恐る可き弊害が續出して國民の進歩發達を著しく害して居るのである。斯かる時代に於ては他人の目に觸れない家族の日常の食事は極端に節約して美衣を纒ふて外見の體裁を飾らんとし食物よりも衣服を重じたのは當然である。乍去今日は社會事情が全く異つたからしてぽんやりして居つては食ふ事が出來ない否一生懸命に働いても猶十分に家族を養ふ事が出來ないと云ふ有樣であるから或は生命を短縮したり、不必要な病氣に罹つたり、種々の罪惡を犯さなければならぬ程の生活難に苦む樣になつて居るのである。

實に現今の社會問題は生理的基礎を持つて居ると云ふのは決して過言ではない。

十　能率生活と食物

今生活に必要な條件の第一位を占めて居る食物に例を採つて考察を下さんに今日の科學が示す標準食物或は安全食物と稱して能率生活に必要とする食物は如何なる物であるかと云ふに、勿論多少の異論がある。例へばよく咀嚼する事に最も重きを置くチユーベリズムの說とか。或は普通に必要と認める蛋白質量の約半分で足ると云ふチツテンデン一派の說もあるが普通には體重約十四貫目の大人一日に要する熱量約二千五百カロリーを得るが爲には蛋白質二十五匁脂肪五匁及び炭水化物百二十匁と適度にビタミン及び鑛物質等を要する者としてある。而して夫れだけの養分を攝るには日本食ならば米約四合、野菜物約九十匁、味噌約十匁の他に魚肉六十匁に雞卵二個か、牛豚肉六十匁に牛乳一合位に相當する物を一人一日に食せねばならぬ、西洋食ならばパン類約四分の三斤、バタ約十匁、牛乳約二合、野菜約八十匁の外に魚肉又は獸鳥肉約七十匁並びに雞卵約一個位に相當するものを必要とするのである。かゝる食物の最小價格の平均は大正九年五月の相場で計算すると一人一日約八十錢であるから二ケ月の食費は主要原料だけでも二十四圓を要し若し一家五人(大人二人三分)とすれば絕體的に必要なる調味品を加算すれば少くも一ケ月約九十圓の食費を投ずるでなければ能率生活を營むに足る食物を攝る事が出來ない事になる。

十一　能率生活と生計費

能率生活の必要條件は食費の他に被服費、住居費、健康費、教育費公費娛樂費貯蓄費等を要するのであるが是等各費目に對して夫々必要と認むべき條件を擧げる事は必ずしも不可能ではないが玆には是を省いて唯全體に亘つて必要なる一家の生計費を擧ぐる事にする。

生計費を測定する最も簡單な方法は先づ一家の食費を調査して夫れが總生計費に對する百分率によつて生計費の實數を見出すのである。即ちエンゲルの發見した消費法則の第一則に依ると食費の百分率は一家の收入の增加に伴ふて次第に減ずるものである我國に於ける家計の事實によると大體歐米のものと同樣で食費の總生計費に對する割合は貧民が約五割中流者は約三割五分富者は約三割以上位である。能率生活を最少限度で營んで

居る者を中流者の標準とすれば一家一ヶ月の食費九十圓は收入の三割五分に當るのであるから其家族に必要な生計費總額は一ヶ月約二百五十圓一ヶ年約三千圓である。而して此の數字は私が實日に就いて實際に調査した物とよく符合して居るのである。一ヶ年三千圓の所得を有して居る者は極少數で約一千萬家族の中で僅かに十萬乃至二十萬戶に過ぎないであらう。大正五年に於ては千圓以上の年收を得て居る者は全家族數の僅かに二パーセントに過ぎなかつた或る論者は能率生活の收入標準を年三千圓とするのは多額に失するものと非難するであらうが生活の必要品が今日(大正九年)は戰前に比して約二倍半の騰貴である事と生活の標準が一般に高くなつた事を考慮すれば決して不當ではあるまい。

十二　簡易生活の弊害

云ふ迄もなく能率生活に必要と認める生活費を節減する事は容易に出來る。例へば一日の食費に一人八十錢を費す代りに安價生活論者が主張して居る樣に稻荷壽司とか馬肉の如きものを最上として味噌汁に鹹辛き漬物で米飯をのみ用ひた場合には胃擴張を起す位まで多量に食しても一日四五十錢で足りるのである。現に大多數の我國民は標準よりも遙かに低い生活を營んで居るのであるが是れが爲に起る弊害として實に悲慘なる結果を來すものである事を記憶せねばならぬ。アイルランド人は馬鈴薯により、伊大利人はマカロニにより、ビルマ人は米のみにより日本人は米麥五合と澤庵一本半位で容易に滿腹する事が出來る。乍去滿腹したと云ふ事は必ずしも生理的に食慾が滿足されたものでないから早晩粗食の弊害は種々の形で現はれて來るのである。

簡易生活は生計費に於て幾分の節約を見るのであるが、人一生涯の經驗から見れば非常に不經濟なる空費が多くなるのであつて、延ては國民經濟を危くするに至るものである。殊に我國民の最も注意を要す可き事は食物に於ては極端な簡易生活を送つて居るにも拘らず比較的不必要な衣服や社交に於て不合理不經濟極まる空費を行つて怪まない事である。故に刻下の急務としては個人的には被服及社交に於て根本的に生活の單純化を行ひ以て生活全體の能率化を計る可き事である。此方針の上に生活の革命的改造を斷行しなければならないのであるが猶詳細に關しては最近中央公論、太陽、大阪每日新聞等に於て種々の方面から此の論議を公にしたのであるから玆には夫れを繰返さ

ない。

十三　富豪の横暴

現代文化は人類過去の努力によつて創り上げたものであるから我等はすべて其文化の恩恵に浴して進歩した能率生活即文化生活を營み得可き特權を有して居るのである然るに今日實際に生活をエンジョーイ(樂み)——得る者は百人中僅かに二名以下の富者のみであつて九十八人の大多數は所謂生活難に襲はれて生を苦しんで居るのである。云はゞ百人で創り上げた文化の實はたつた二人に專有されて九十八人は其犠牲に供されて居るのである今日の社會が斯かる富豪の經濟的横暴を許して居るのは實に現代文化の大矛盾であるまいか。キングの著書によると英獨佛米に於ける事實は次の表に示すが如くやはり人口の二分より占めて居ない少數の富者が全國富の約六割五分を專有して居るに反して人口の六割五分を占めて居る多數の貧者は僅かに富の二分を占めて居るに過ぎない。

英獨佛米に於ける富の分配表

階級別	全人口に對する百分率	富の所有額(一人當り)	全國富に對する百分率
富者	2%	二十萬圓以上	57−71%(65)
中流ノ上	18%	一萬五千圓	23−33%(28)
中流ノ下	15〃	三千圓	3−6〃(5)
貧民	65〃	四百圓	1.7−5〃(2)

此事實より考ふれば現今大多數の者が能率生活を營む事の出來ないのは決して世界的に富力に缺乏を來して居るのではないから、人類全體が生活に要する資料が不十分であるとは言へない。若し夫れ特殊の生活必要品に缺乏ありとすれば其生産に對する生産能力が富豪の奢侈的欲望滿足の爲に無意味に浪費されて居るからである。

十四　結論

私は徒らに富豪其者を呪ふのではないがマーシャルが「上流社會の消費の過半は全く不必要なものである」と云ふ彼等の奢侈生活を極力打破せんとするのである。彼等が不意味で結局人類全體を害する消費を行つて居るから國民大多數の能率生活費に不足を來すに至つたのである。若し分配の公正が行はれた場合には勿論國民すべてが能率の多い文化生活を營み得る様になる資格を具へることが出來るのである。故に私共は同志と協力して合理的方法によつて現社會から有害消費及奢侈消費を全滅

し得る様に努力しなければならぬ是が爲めには先づ私共の槍先を富豪に向ける事が必要なのである。

生活の單純化！ 是れ現代文化が榮華豪奢の生活に憂き身をやつして居る階級者に警告しつゝある儼然たる天誡である。今や文化の特權を蹂躙された不幸なる民衆は世界的に自覺し始めたではないか。「耳ありて聞ゆる者は聞く可きの秋である」

生活の能率化 是れ現代文化が一般に幸福なる生を樂ましめん爲根本的に必要な條件である。よろしく自己の與へられた境遇に於て生活の無駄を省いて其充實を計り以て能率増進の爲に最善を盡す可きである。而して正直に働く者は必ず能率生活を營み得可き特權が何時かは實現されるであらう。正しき者は必ず正しき報いを受く可きであるから今は怠らずして守るべきの秋である。

無産生活の享樂

南京にて　賀川豊彦

支那に來て

支那に來て、私は貧民窟を尋ねて、路次を彷徨つた。上海に、南京に、私は幾十萬の貧民を見た。湖北の飢民は江蘇の都市の貧民窟を形造り、その慘狀は言語に絶して居る。然し、私は何處でも、貧民の愛しく、柔和で有つて、少しも私が遠ざけられないことを發見した。子供等は、すぐ、私等になづいてくる。私はその頸を抱いてすぐ友人になる。裸體の彼等には、何の遠慮も無く、私の抱くまゝに寄り添ふてくる。

私は友人に云ふた。私がもし、支那に住まなければならないならば、日本と同じように、上海の貧民窟に住むと。

私が貧民窟に住むのは、犧牲の爲めでは無い。私は、貧民生

活を享樂して居る。私に貧民生活をよせよと云つても、よせられ無い多くの理由がある。私は持つことが嫌ひである。私は指環や寶物に少しも趣味が無い。勿論衣類や、靴や、蒲團に就て少しも好みがない、私は凡てが簡易でありたいと考へる爲めに、複雜な生活が嫌ひである。

私は人に使はれるのが嫌ひであると共に、人を使ふのも嫌ひである。西洋料理が食ひたい爲めに、料理人と、給仕人とを別に使用せねばならぬ複雜な生活は、私に合は無い。

私は二重の生活がしたくない。私は私の主人公でありたい。それで面倒臭い五重六重の形式生活に飽いて居る。

つまり、私は無産者生活を居心地の善い生活法として、享樂して居る。

一枚の衣の使途の意味

私は何でも無理のある生活が嫌ひである。わざと、乞食の眞似をしたり、わざと蝗や野蜜で生活して見たり、縄の帶を自慢にしたりすることは、私には出來ない、

私は結婚するまで、衣類は凡て一枚で滿足して居た。結婚する時に紺の木綿の紋付と袴を人から貽つてもらつた。然し、友人の注告に從つて、結婚後文字通りの一枚をやめた。それは妻の面目を思ふた爲めであつた。イエス・キリストも『新郎新嫁と共に居るときは斷食が出來ない』と云ふたが、私は妻に對する尊敬の爲めに、務めて、サツパリした風をすることにした。そうしなければ、妻が他人から非難せられることを恐れるのである。

私は一枚の衣を誇る權利を持たぬ。それを誇るのは、綺羅を誇るのと、少しも差違が無い。私は凡て無理が嫌ひである。私は、貧民でなければ人間で無いとも考へぬ。私は或人が、私より善い衣物を着て居るのを見てその人を罵ることもしたい。私は凡て多く持ちたくないのである。自分に屬するものには鍵をかけたくない。戸を閉じたく無い。私はそうかと云ふて、乞食の眞似をしたくない。相當に、私の個性を發揮し得る範圍で、一枚主義で行きたい。私は持つことに反對する。一番善いのは、もしも許してくれるならば、着のみ、着のまゝで、何處へでもやられてくれるならば、最もうれしいことゝ思ふ。

二疊敷住宅の讃美

私は家も廣いことを望まない。もし私一人であれば、二疊敷で結構である。たゞ、私は必しも、南京虫と、蚊と、虱と、蚤、を——今日、私が貧民窟で經驗して居るような——あまり歡迎したく無い。

私と、そして、私の妻は貧民窟を充分、享樂して居る。今日は經濟である爲めに、合宿的に共同食堂のような處で十五六人のものが一緒に食ふて居るが、それで無ければ、七輪で生活する病人等と夫婦位の食ふことは、充分やつて行ける。

凡て簡單にやることには面白味がある。

トローの森林生活との比較

エマルソンの高弟『森林生活』の實行者、トローの自炊主義も、羨しくもあるが、自分一人で善いならば、トローも善いが、私は人の爲めにも盡さねばならぬから、何もかも一人でやることには贊成が出來ない。たゞ自分手に家を建てゝ、自分手に机を造つて、自分手に飯を炊く、暇のある人間であれば、私はトローの生活に少しも不贊成を唱へるものでは無い。然し眞に社會に奉仕する爲めには自ら專門にならねばならぬが、その爲めに私は人を奴隷にしたく無い。それで、私は私の衣食住が最も簡單なもので、人を奴隷にしない範圍内に止ることを望んで居る。

私は下女を使ふような生活がしたく無い。私は下婢と云ふ私に使はれることのある社會が嫌ひである。然し不幸にして、そんな不幸な人が私の家庭に來たとしても、私はその人を自分の家の姉妹として、自由の時間を取つてもらつて午前中でも、午後でも勉强して貰ふことにして居る。

菜食主義と簡易生活

貧乏は私の敵である。然し多く持ち過ぎることも私の敵である。持つ可きものは、知慧と創造力と、愛である。それで、もし持たねばならぬものがありとすれば、私はそれを凡て、人間と人格に放資する。私は金持を尊敬する氣にはなれない。金の爲めに、金を欲しがる資本主義者は賤しい動物である。

私は甘いものが食ひたいとは思はぬ。私はあつさりした口に合ふものが食ひたい。朝は、牛乳とパンがあればそれで善い。晝だつて甘い大根煮でもあれば滿足する。私は八年九ケ月菜食主義で通した。米國で、菜食主義でやつて行け無いものだからやめて了つたが、今日でもあまり肉や魚が好きで無い。私の最も好きなものは冬の朝の蕪汁である。菜食主義者では有つたが魚のだしにはあまり反對しなかつた。今日でも獸肉が善い方だか、魚肉そのものを食ふよりか、野菜を善いだしで煮たものが好きである。勿論だしが無くても善い。野菜は私に適して居る。私は殺生をしないと云ふことから、菜食主義を取つたが、今日では寧ろ、その方が自然的になつて來て居る。從つて、私は漆の椀で食ふ日本の食事が好きである。然し私は白米の飯と、料

理屈の面倒臭い習慣と、疊の上のだらしない生活が嫌ひである爲めに、靴で一寸這入つて、少しもお上手のいら無い、西洋料理屋によく這入る。然し之は私が簡便生活を愛するからである。兎に角、私はどちらに向いても、生物と人間を多く犠牲にしない簡易生活が好きである。

粗食は必しも、簡易生活では無い。岡山孤兒院の創立者石井十次先生は兒童に對して滿腹主義を取られた。私は滿腹主義計りで無く適當な享樂主義に贊成する。赤飯も、お壽司も必しも罪では無い。友人を折々御馳走に招くも善からう。たゞ私はその爲めに奴隷になりたくないし、他人を奴隷にしたくない。北條泰時のように、燒味噌で酒を吞むことは必しも面白くないことも無い。私の友人等は數年の間、月曜日の朝々、私の宅の味噌汁を一緒に食ふことを宴會に來るように樂しんでくれたことがあつたが、燕の巣を食ふのも味噌汁を食ふのも、要する所は、口が食ふのであるから、それが御馳走である點に於て別に變つたものでは無い。私は所謂宴會の凡てを否定する。心の宴會は酒と肉のある所には無い。寧ろ朝の味噌汁を一緒に分けて食ふ所にある。

トルストイとミラー

トルストイは自分の靴を自分手に縫ふた有名な簡易生活論者であつたが、實際は必しも簡易生活の實行者では無かつた。その點から云へば、野口米次郎氏の師事せられた米國太西洋岸の詩人ミラーは家も二疊敷式の小さい獨立した家を建てゝ、そこに住むことを主張したし、自己も住んで居た。

人間が生きて行く爲めには、大自然は最も美い所である。然し青天井で寢られ無いならば二疊敷で結構である。

私は生活の藝術化に反對するものでは無い。然し衣裝が最も藝術化して行くならば、遂には裸體そのものが衣裝になるのではないか！　肉體の曲線美の外に人間藝術の眞髓があり得るであらうか？

私は食物の藝術化に反對するものでは無い。然し眞正の食物は肉體の最も美しく保つ爲めに攝取されることの外意味は無いので、燕　巣を五つ食ふても、死んで終へば何の役にもたゝぬ。甘いものと云ふものを食ふことは善いことである。それを美しく食ふことは更に善いことである。然しそれより更に善いことは美しく生きることである。それで、美しく食ふ爲めに、汚なく生きねばならぬのであれば、私は寧ろ美しく食ふことを廢止する。禮に取つては、美しく食ふと云ふことはその根本に於

て、美しく生きる爲めである。それで人を掠奪してまでも美しく食ふことを望まない。世界はそんなにして藝妓にお給仕させて食ふことを美しい生活と云ふて居るが、それは體に取つては汚い生活である。

私は多く持つて居る爲めに高い塀をたてて常に裏切りせんとする下女下男に取り圍まれて閉門生活を送る貴人を憐む。私は無產者であるために——又貧乏である爲めに萬人を友人となし得るうれしさを感謝せざるを得無い。多く貯らんとする商人には排日とボイコツトがあるかも知れ無い。然し愛せんとする意志のある、私にはどんな無頼漢の住む支那の貧民窟でも、私は安全である。私は無產者を誇る。多く持つことは多くの場合墮落して居るのである。眞違へてくれては困る。私は多く創造することに反對するものでは無い。勞働者は常に生產して居る。然し彼は常に聖貧に甘じて居る。それで彼等は常に勤勉である。多く創造せざるものは、常に多く持ちたがる。それは墮落した一種の本能である。

私は無產を誇る。多く持つことは、多く自らを縛ることである。人間は何れも飢え死にする必要は無い。衣食住に缺がぬようにはせねばならぬ。然し餘剩價値を發生させて、その爲めに富むことはあまり賞めたことでは無い。貧乏であることと、無產者で居ることは違ふ。貧乏であることは、事に缺ぐことである。無產で居ることは、事に缺がず、財を凡て人間建築に投資すると云ふことである。それで持つ可きものは社會が、或組織を立てゝ持つてくれたら善いのだ、——それは公產主義、集產主義、組合管理、なんでもかまわぬ——個人としては自己自身の人間建築を完成さす爲めに、物質の保管と整理と所有と增殖にのみ、一生を送る所謂今日の複雜な、資本主義的、有產者生活主義で滿足が出來ない。

貧乏であることが、人間建築に邪魔になる爲めに、私は貧乏に反對するが、無產で居て、人間建築に妨害にならぬ場合、私は無產生活を誇る。

新しい世界は、無產者の世界である。それは所謂、持つことによつて縛られ無い世界である。

誠に新しい世界は多く持つことによつて、少しく、人間を愛し愛せられた世界より、少しく持つことによつて多く人を愛しまた人に愛せられる世界であらねばならぬ。

（揚子江を眺め乍ら）

住の生産方法の改造

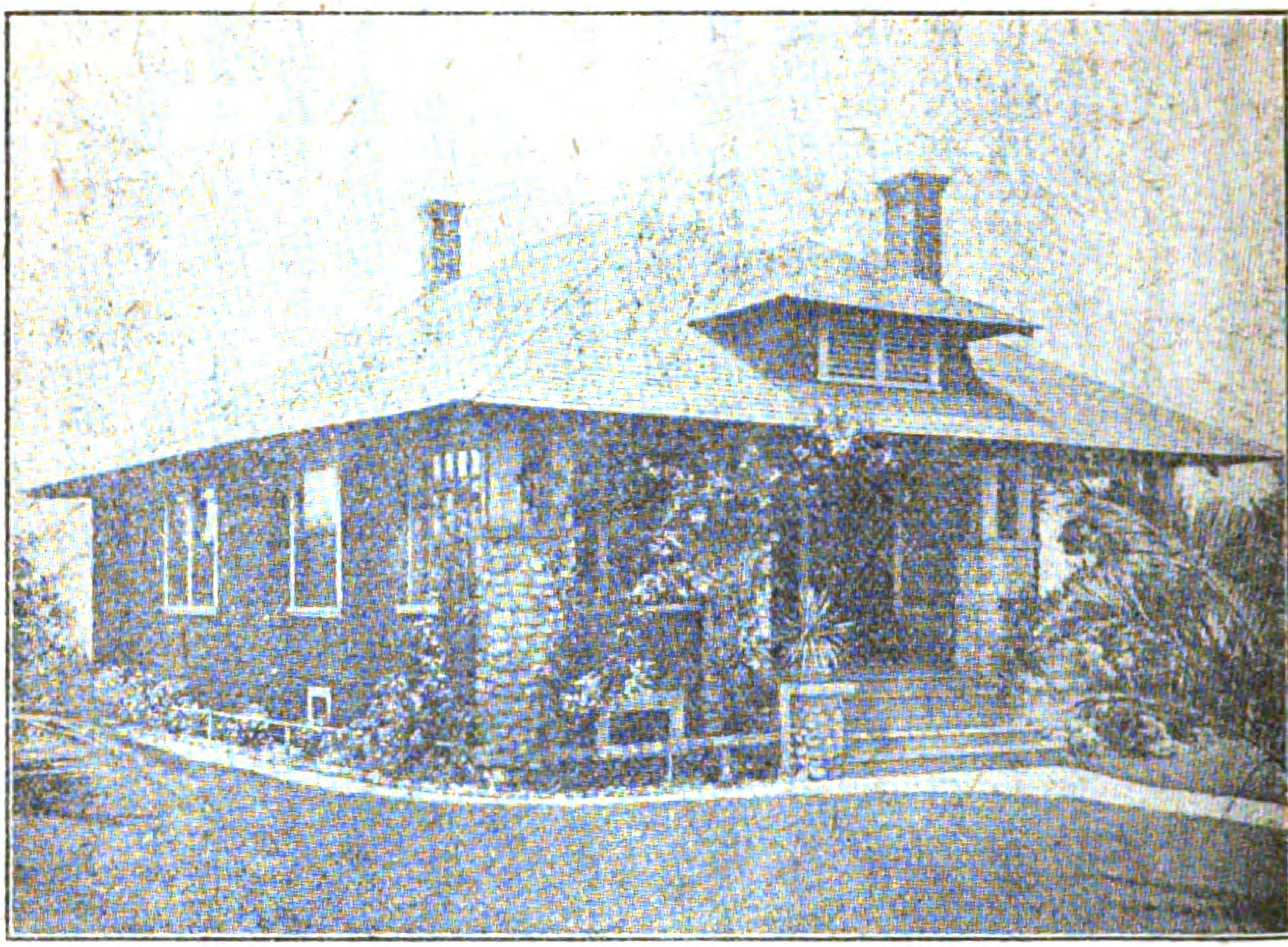
工學博士　佐野利器

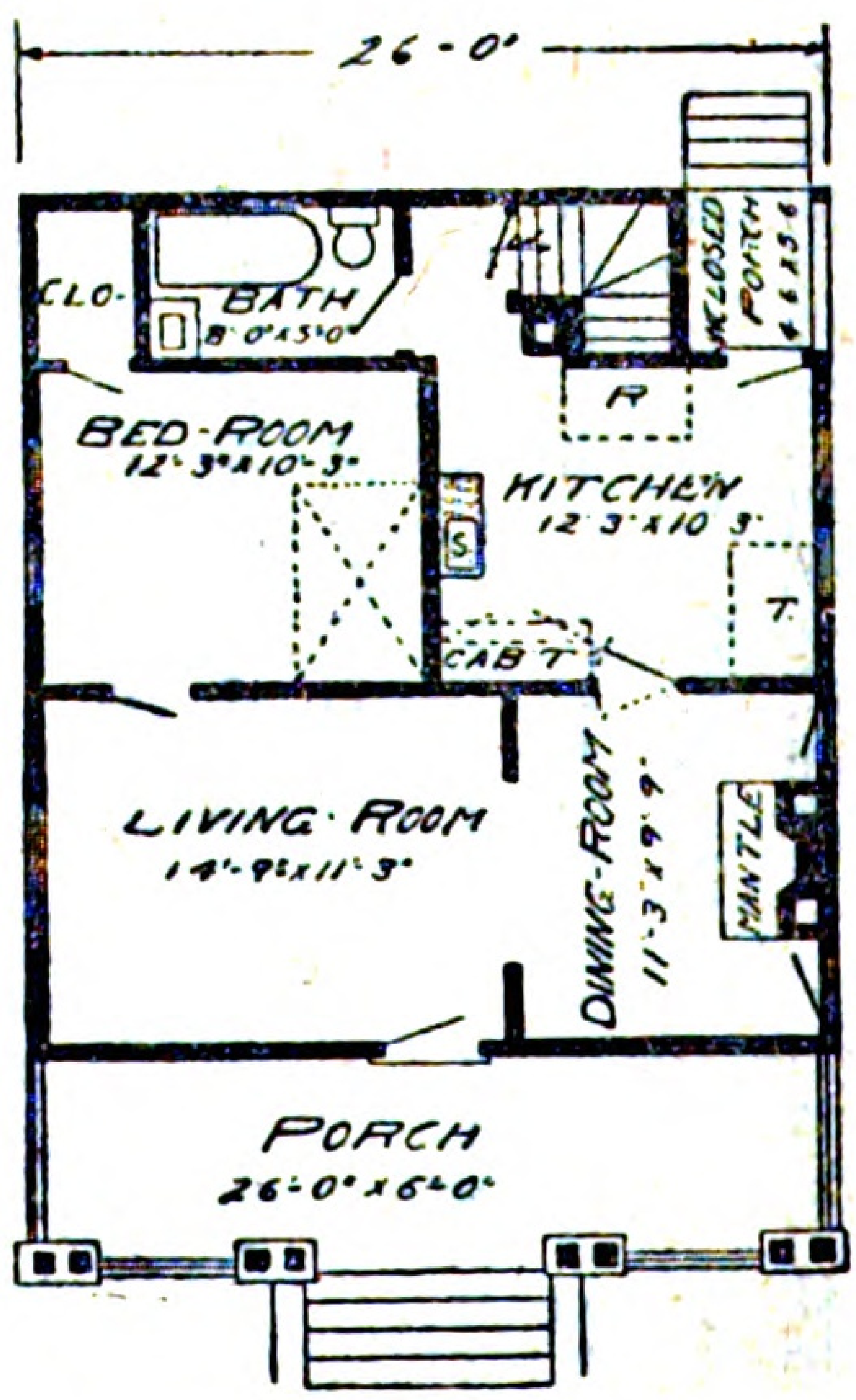
住宅の間取、構造、設備等については、可なり意見の發表をしておいたから、此處では住の生産について述べて見度いと思ふ。

建築物とは、築造とか、造營とか建設とか云はれるべきもので、住の生産と言ふのは少し妙ではあるが、併し住のやうな普遍的な、そして世の中で多數を必要とするものについては、製造工業、卽ち生産の觀念を以つて取扱はれるべきものであると思ふ。今日住を營むものは、各々勝手次第で、敷地も不規則であり、從つてこれに建てる家も場合によつては規則正しくいかぬ。であるから家を造らんとするものは、その人思ひ思ひの全く個人的の考へにて、間取、其の他の設計を定める。建てる大工や請負人も、亦注文者の間取や設計に對する希望に基いて、材木を買ひ集め、一本々々に特殊な手細工を試みてコツ／＼叩き、鋸の目を立てる立てないなどと苦心して造つてゐる。こうして大工の造つた家を鳶人足が組み立て、維新前からの古い遣り方をそのまゝにやつてゐる。壁をつけるにもその時々に土を集め、石灰を買ひ、スサを切りてこれにまぜ、それをこれかへして壁土を作り、年期奉公の弟子を相手に、昔流のまゝの塗り方をして、黄大津とか、茶大津とか、砂漆喰とか言つて、昔ながらの手數をかけてゐる。瓦の如きは元來殆ど同型のもので、そして一地方にしても年々多量の需要あるにかゝわらず、その造り方は昔からの家代々の營業で、竈を一つ乃至二つ持つた瓦屋が手で型を造り、薪でこれを燒いて供給してゐる。そして瓦屋が又他の職人同樣に古い頭で葺いてゐる。

全體が斯くの如くで他の工業に比べると手工業でやつてゐるから、今日の進んだ技術の特色には、少しも觸れて居ない。今日の工業の特色と言へば、一口に云ふと機械の應用で、何もかも大企業組織で機械的に造られる。その結果は、物が揃ひ、

正確に行くし、改良が一つ事項にも凡ての品物に普及する事となり、進歩速かに、價格も安く、そして早く出來上る、然るに今日の住宅については、少しも技術工業の特色とは交渉がないと言つてもよい、此の狀態にあるについては、自分等も罪が





出來合住宅の一（價格、六百八十九弗　間數、四間）

あると思ふ。大體建築技術を學んでも、兎角設計とか、工事の監督の如き役人の役目になる事を餘儀なくされるので、自然かかる結果となり、請負人や、製材者や、その他の材料及び工事者等をまわりかねてゐたので、進歩を見る事が出來なかつたの

も一つの原因であると思ふが、然し世人が住は生產されるものであると言ふ觀念に乏しい事も重要の原因の一つであらう。

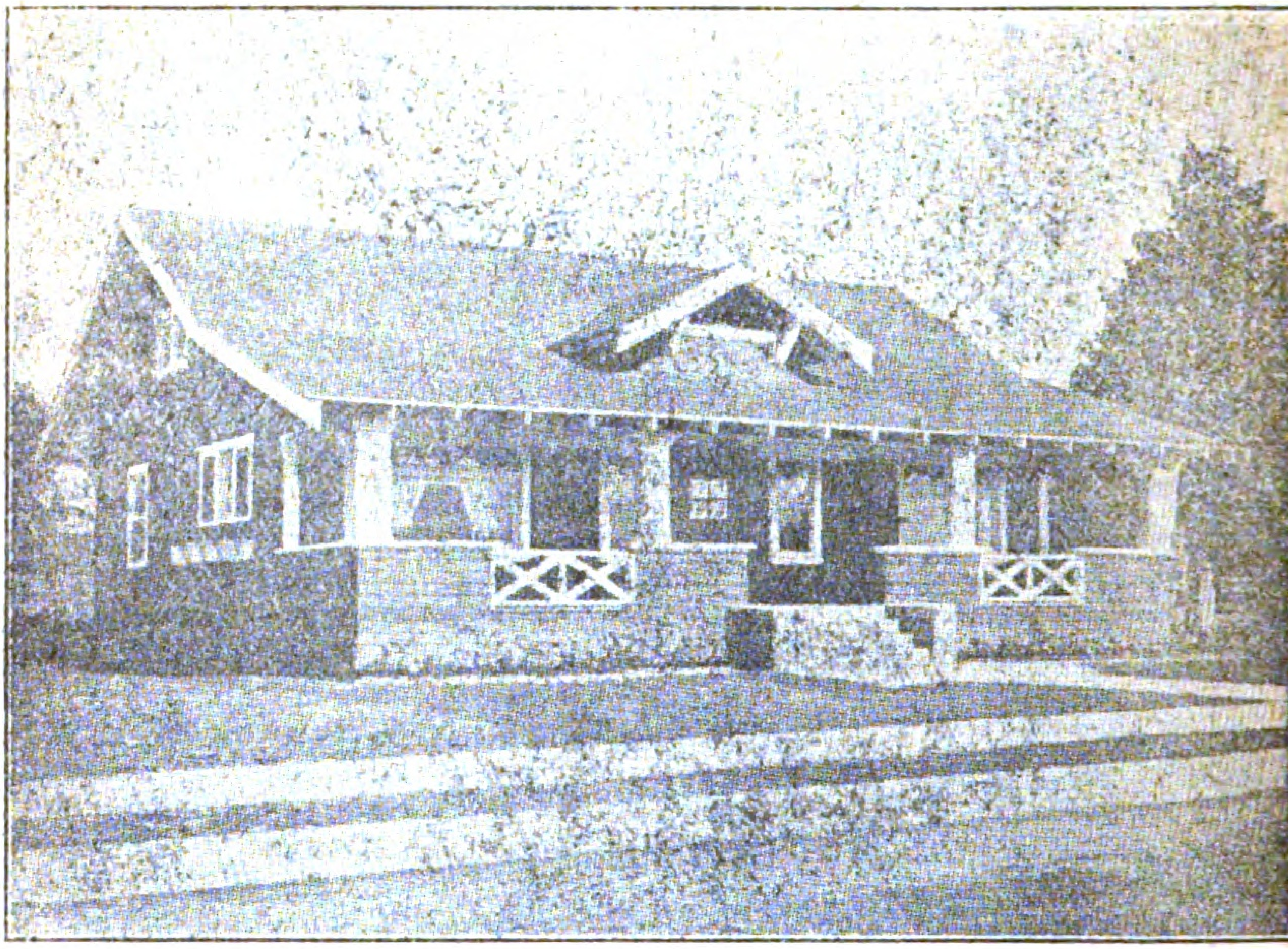
例へば建具を生產して賣らんとする會社を計畫しても、多くの資本家はこれを光彩ある投資とは考へないために、計畫者は非常な苦心をした事もある。又瓦の如き多量の需要ある品物は他に多く類がないのに、これが今日の產業組織とならずにゐるのは、不思議過るほど不思議であると思ふ。然しこれを企ても建築會社同樣あまり資本家に喜ばれないと言ふ嘆を洩らした事を聞いてゐる。故に家は生產せらるべきものであると言ふ觀念が國民一般に普及しなければ駄目であると思ふ。

一體住宅の種類は一般的に言へば、今日の如く複雜極つたものでない方が明に良好で、家族の人數、及び生活の程度に應じて數種に分ければ足るものである。材木の如きも從つて其型に合ふ樣に用意し工作して、企業組織で、安價に生產し、これを供給して單純な工作を試み作ると言ふ、一口に言ふと出來合家屋が一般の住宅となつて然るべきものだと思ふ。近來米國の出來合家屋が日本のしゝの話題となつてゐるが、出來合家屋とは如何なるものであるかを說いて、やがて日本の家屋が出來合になる爲めの參考にしたいと思ふ。

米國は木材が非常に豐富で、從つて木造の家屋の多いところで、その率は日本に次いで世界中で最も多い。米國の家屋と言へば、煉瓦造、コンクリート造、石造などの不燃質物家屋が多いと思はれてゐるが、これは市街地の事で田舍に入ると殆ど木造である。又都會を離れた郊外地の田園都市の中の大部分は、木造である。米國全體として見ても其約八割以上は木造住宅である。で、木材の產地及運搬や工作の便利な地方には、出來合家屋の會社が多く設立されてゐる。

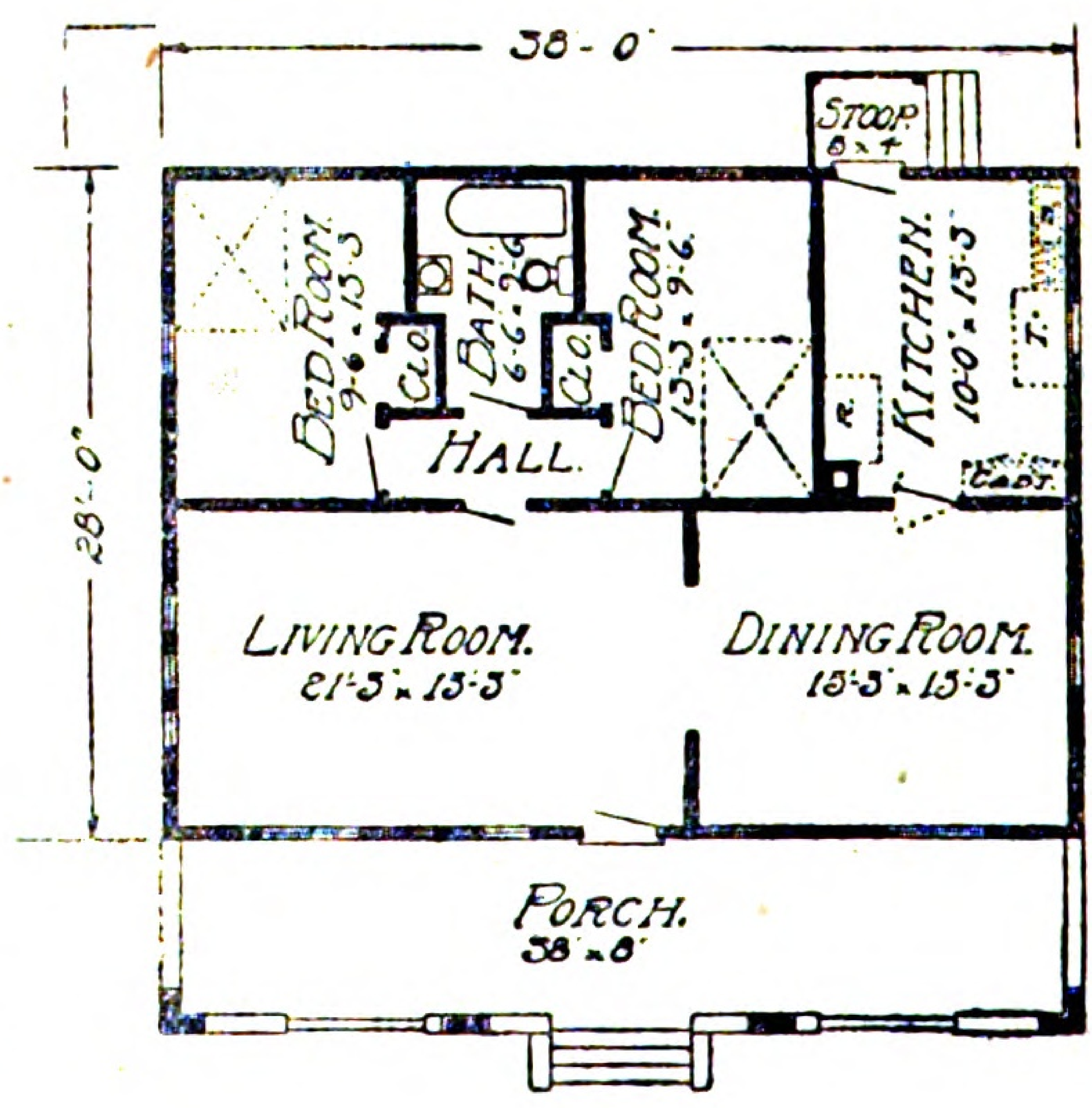
一二の例を言へばミシガンのベーシテイにあるレヴイス、アラデンカンパニー、市俄古のシーヤスメーベックの如きがそれで、かゝる會社が各地に非常に多く散在してゐる。此等の會社では、各々約百種位の出來合家屋を有してゐるが、精細にその種類を調べると非常に小さな分類が出來てゐる。

即ち玄關の位置とか、屋根の形とか間取の具合とかに大小の變化を加へて、百種になつてゐるが、實際の種類は極めて少ない。そして或は番號をつけ、或は星や神の名をつけてその種類を區別する標準としてゐる。而してその軸部(即骨組)內外の壁に要する材料、屋根の材料、パテン材料、床の材料等悉く揃へてストックにしてある。そこに注文するとすぐに希望のものを



送つて來る。只地業丈は別にやらねばならぬ。尤もある會社では切り組まずに之れに要する板のみ供給するところもあるが、これ等は全く別種類で、多くは出來上つたものを供給するのである。

出來合住宅の二（價格、千八十五弗　間數、七間）



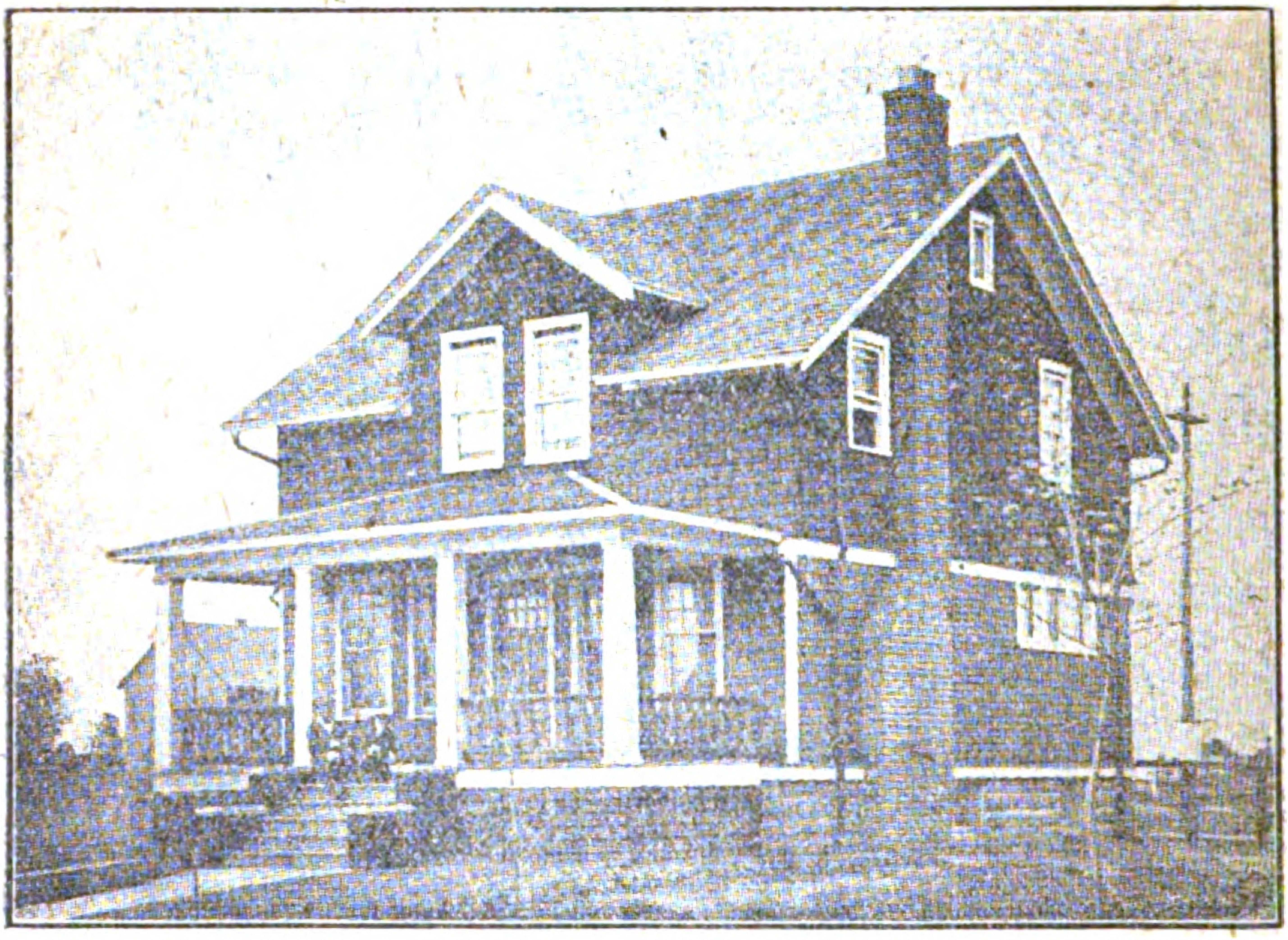
造りは先づ軸ではすべて二吋四吋乃至十吋のヌキの如きもので、壁には柱を用ひない、卽ち土臺を二吋四吋乃至六吋とし、

その上に同じものを立て柱とし、一尺五寸間に並らべてこれを大釘にてとりつける、柱の桁も柱や土臺と同しで、二階の床は二吋に八吋前後の根太を以てし、ハクを用ゐない、二階の柱も下と同樣として、屋根は小屋組を置かずに、厚さ二吋巾五六吋に垂木を組合せて造る、外は下に板を張り丁寧なものは下に荒板を張り、ビルリングペーパーと云ふ紙にタール質を含ませたものを一面に張る、その外に普通の下見板をつけ内部には多くはプラスターボールと言ふ漆喰板をはりつけ、厚さ約四分位に造られた二尺に六尺位の大きさ樣一枚位の壁を釘づけとする、其上を或は壁紙又は薄漆喰仕上とする、床は板だが、丁寧なものは二重になつてゐる、天井は板をはるか、又壁に用ゐたプラスターボールの薄いものを用ゐる、屋根は種々あるが最も簡單なものは、マルソエド又はラバイドと言ふ毛織物にゴム質アスファルト質を浸み込ましたもので、巾三尺長數十尺のものをビヨー止めにして止めて行く、尤もこれは對火力がないから、對火を必要とする場合には、その上にセメント板をつけたものを張る、又シングルと稱して大さ五寸に一尺位の板に防腐劑を入れたものを、スレート葺にする。これは簡單で値も安いから多く用ひられてゐるが、その他スレート瓦、石面板等も多く用ひられてゐる。

建具は兼て出來合のものを用ひるが、これも會社によつて各色がある、例へば窓から雨の入らぬ裝置とか、閉めた後通風の特よいものとか、掃除がし易いとか言ふ種々な工風をしたステントを用ゐる。

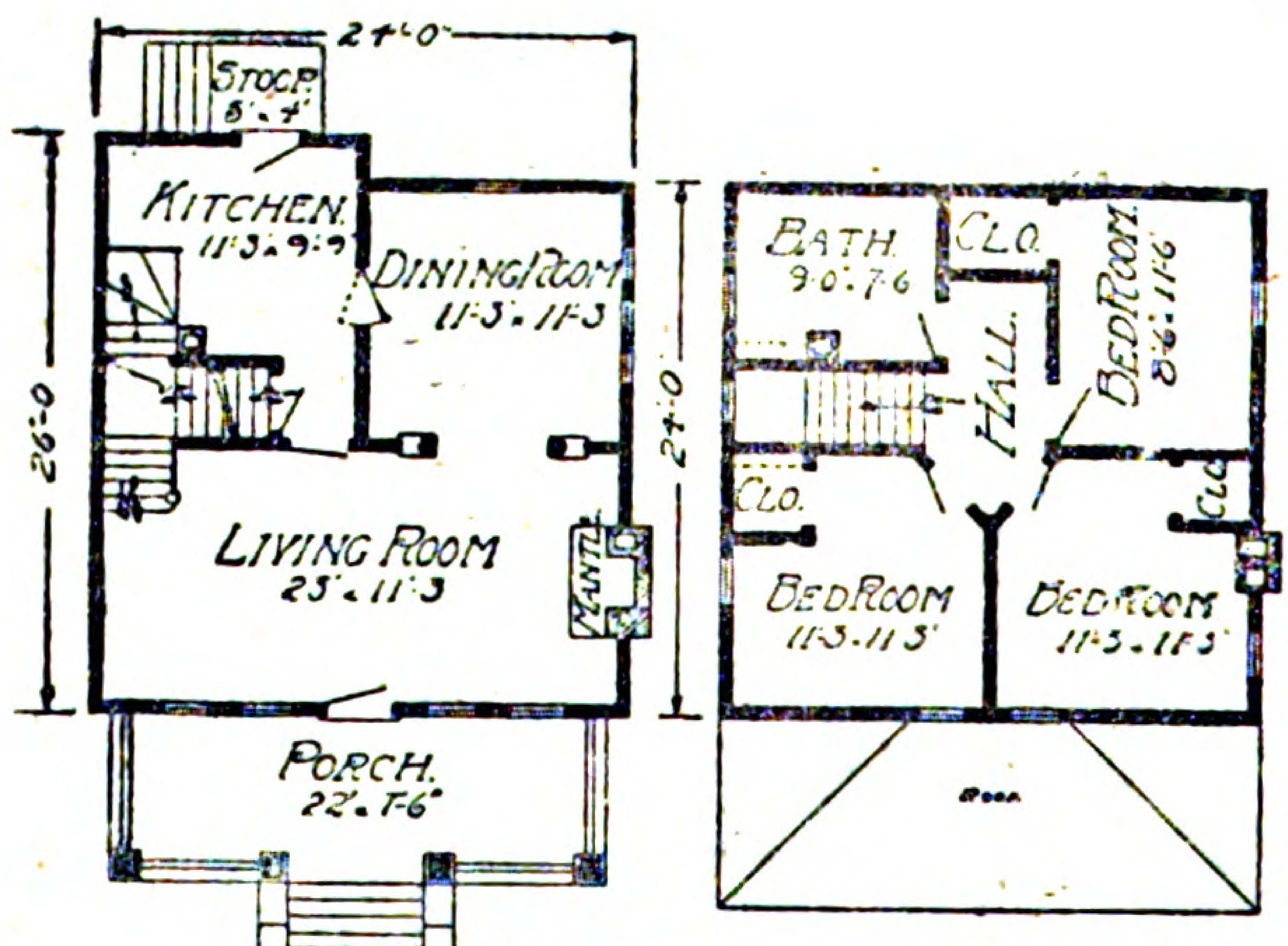
斯くの如くすべてのものは機械的に造られるので、建てるのに殆ど技術を要しない、釘とボルドで止めて行くのであるから、圖を理解した世話役が一人あればよろしい、そして壁を塗つても、乾燥の時間をまつ不便がないから、出來上ると直に住む事が出來る、前に言つた市俄古のシーヤスメーベツクのカタログには、八時間で一軒の家が出來上ると說明して、時計を畫き、一時間毎の出來上りを圖解してある、それ等は極く少さいものであらうが、數日にして出來上る事は事實である。勿論地業丈けは普通にやらねばならぬ。

こんな風に米國の多數の家屋は造られてゐるが、出來合家屋と云ふことの觀念を、日本にも普及する爲め、有識者は少し米國から輸入して、見本として造つて見てほしい。誤解があるといけないから一言して置くが、移動式出來合家屋とこれとは、全然別物である事である。所謂ポータブルハウスと稱する移動



式のものは、同じ出來合ではあるが、夏は輕井澤に、冬は鎌倉の別莊地にと言つた風に、自分の欲するまゝに持ち歩きの出來

出來合住宅の三（價格、九百八十四弗　間數、六間）



First Floor　　Second Floor

る簡單の組み立て式で、全く遊び道具同樣で永久的なものではない。

結局吾々の住宅は、吾々の國で造らねばならぬ。いかに西洋風の住み方をする時でも、風雨季候の相違があり、雨の吹き込みが多いとか、濕氣が多いとか、又は必ず下駄ばきの客があるとか言ふ、我國とは全然異つた點があるから、米國風のそのままで日本人に適當ではない。殊に日本は耐震的なものを必要とするから、米國の出來合物をすぐに我々のものとすることは出來ない。しかのみならず運賃や關稅を入れると、結局安くはないから、どうしても木材及び建築に關係する人を中心として出來合家屋の事業を起してほしいと思ふ事切である。そして日本人に適合する、間取り、構造、設備を全きものにして十種乃至二十種位のもので好いからカタログにして供給してもらい度いと思ふ。一體昔から見ると、衣に關することは非常に進んでゐるから、衣は今後益々潤澤に生產されて値も割合に安い、唯行渉らぬと言ふ事はある。又食は昔と價格に於ても似てゐるし、人口增加に伴つて作られてゐる。食は何人も眞劍に考へるので、その結果として各相當に進んでゐるが、住はこれに反して年々不足を告げて來てゐる。人口は年々增加し、都會地に急激な移動がある每に不足の聲が激しくなる。これは獨り日本のみの現象ではないが、殊に日本では非常な不足を告げてゐる、世の中が文明となるに從つて、一般生活が惡化して來たと言はれるのは、衣食の點ではなくして、住について惡化して來たと言つてもよからう。

住と住者の關係を考へると、思想問題や社會問題と言ふ事は、住に基く問題でないとは決して云へないであらう。衣も食も近來の技術の進步に伴つていろ／＼進步してゐるやうに、住も亦社會の進步と共に進み、今日迄の大工又は請負人による舊式の事業ではなくして、全然新らしき生產事業として生產する事とならねばならぬもので思ふ。

（大正九、八、三〇）

挿入寫眞に就て　米國に於ける出來合住宅の價格は丁度世界大戰が始つた頃の値段であるが其後の物價騰貴を見積つたとしても日本の請負建築より遙に低廉なことを知ることが出來やう。最も安價にして簡單なものは三間で四百弗內外のものから始まるが、現在の價格にして見ても、約六百弗である。注文して二ケ月目には輸入が出來る。（記者）

文化的分業生活は簡易生活法の根本義である

醫學博士　戸　田　正　三

其一、人間の能率、對、文化生活方法——其二、輓近に於ける機械の發達と人類の進歩（？）——其三、假飾の習慣——其四、文化に伴ふ分業生活（科學的分業方法）——其五、世に老朽淘汰ほど複雜混沌たる生活方法はあるまい——其六、世襲的觀念の弊害——其七、人口減少論、對、文化的分業方法

單純生活法とか、簡易生活法とかの希望や議論が、智識階級者によつて盛んに唱道せらるゝ様になつたのは、惡く云へば、生活難の結果でもあらうが、又一面から考ふれば、過渡時代に於ける複雜なる生活方法から脫して、吾々の生活能力を一層簡單に維持せしめ、生活問題の外に時間と金との餘裕を得て、人間らしく暮して見たいと云ふ希望にもよるのであらう。其の他種々の方面から見れば種々の點に於て、吾々の現在の生活方法よりも、もつと簡單で、もつと能率の良い生活方法は限りなくあるに相違ない。が何れにしても、良い希望である、又各人が勇氣を以て實行に着手すべき事柄が多いやうに思ふ。殊に現在の我國に於ては歐米の夫れと比較して甚だ複雜した事が多く、併も其れが只從來の因襲的觀念から捕はれて居つて良いとは知りつゝも之れを實行する勇氣が無い爲めである事が多いやうに思はれる。勿論一つより無い體だから、自分で種々な職業や、生活方法、例へば無妻で暮して見るとか、多妻で暮して見るとか、子供を多く持つて見るとか、持たないで見るとか、大家族の主人公になつて見るとか、僕婢になつて見るとか……。何れにもせよ一度に得難い經驗であるから。廣義にして、併も良好なる單純生活に對する定義などが、何れの階級に於ても今忽に下せるものでは無く、唯ぼんやりと、見たり聞いたりした事を話合うて居る位に過きないと思ふ。

從て字句の解釋の仕樣で得手勝手な議論が出て來る譯である、自分のも其一つと思つて貰ひたい。

先づ第一『人間の能率』對『文化生活方法』を度外視して考

へるなれば、單純生活は野蠻時代の生活方法に限る。今の樣に人と人との交渉が多くなり、剩へ交通機關の發達に連れて、各交渉が敏速に行はれ、敏速に行はれるから、下らぬ用向迄も增加して來る。中には金と勢とに任せて不必要なる要求をなすのみか、其れが次第〳〵に重なつて來て、一社會に於ける多人數の時間を無益な事の爲めに盜む樣な事も數限りない、人の一生を働く時間に計算して見ると、永い樣であつて其實甚だ短いものである。之の短い時間を多人數から、單に自己の下らぬ慾望を滿す爲めに僅かの金で盜む樣な事をするのは、人類一般の單純生活方法から觀て最も敵視す可き事柄の一つに相違あるまいと思ふが。其れ等の事は今日の話題の要點から、脫線する恐れがあるから、直ちに本論に移りませふ。」

抑も、編輯者足下の余に希望せられた『簡易生活に於て』の御注文が甚だ廣汎な意味に解せられて、以下私の述べます事が果して讀者諸君の要求に一致するや否やは知らないが。自分の考としては『所謂簡易生活法』なるものも、畢竟吾人現在の生活方法に時間と財力との餘裕を生ぜしめ、文化生活をよく味はしめんとの事に外ならないと思ふ。即ち之れを簡單に云へば、吾人の能率增進法を攻究するに外ならない事であると思ふ。』

其處で先づ、晩近の機械的文明が人類の生活方法に及ぼした影響並に其結果として人類其物の能率が如何程迄發展したかを考へて見ませふ。唯表面から見れば吾人の能率は晩近に於ける機械の進步と共に、各種の產業方法に於て一大革命に遭遇し著しく高まつて來て居る樣である。然し乍ら今一步翻て吾人の腦裏に映ずる處は、凡て生活作用無き機械と異つて、此生活作用を營みつゝある最も複雜した機械の一つである人間其物の能率は殆んど昔も今も變りが無い樣に見へるのである。由來機械が物理學の原理に基き諸種の科學の進步に連れて、長足の發達を成しつゝあるに係らず、人間自己の能力は由來一上一下、昔も今も同じ樣な事や同じ樣な考を反復して居る樣に見へる。勿論其の間に幾分の進化はしたであらふが、夫れ等も疑へば愈々不合理な點が生じて來得るので、直ちに之れを進化論などにあてはめて是認する事は出來難い、例へば吾々の親よりも吾々の方が賢い樣に見へるのも、主として活版術ある機械の相違に外ならないのである。

申す迄も無く晩近の機械は其のあらゆる方面に於て科學を根柢とし、其の機械の能率に於て、又た使用方法に於て、破損前に對する修繕方法に就て、設備に於て、用意周到ならざるな

く、一つとして科學の應用に待たざるはなし。各其目的の如何に應じて、能率の少きものは數年にして過去のものと代り、過去の經驗に應じて新軌軸が續出せられつゝあるの有樣である。元より是等の發達は人間によりて成就せられたるものあるも、其實、機械が機械を産み、産む毎に、機械の歷史と經驗に基き其長所を採りて短所を捨て、以て今日の如き進歩をしたものと見るの外はない。換言すれば機械の運命は現在又は將來に於て人間の智識が應用せられ得る一定の極限に達する迄は漸次發達し得る望みのあるものである。」

之に反して、歷史上、人間其物の發達は如何であるか。尤も人間の發達に關しては、今假りに吾人の生活要件、例へば衣、食、住の如きを、人類の生活に最も適當と認むる條件に就て供給し、同時に其等の人々に對し絶ず其の生活に最も適當せる刺戟を與へ得たと假定しても、一時間に百里も歩行し得たり、百馬力も出す様になり得るものは想像し難いのである。人類の如く既にく克く發達した物である以上直ちに之をして目ざましき發達をなさしむる事が困難であるのは勿論であるが、少くとも今日及び將來に就て吾人の知る生理學並に衛生學の根柢に基き、恰も機械の夫れの如く、吾人の生活要件並に職業をして吾人の能力を發展せしむる都合の好い様に實行せしめ得る事が出來たなれば、も少しまゝな人間となり得るのみならず、少くとも適應條件の下に適應の刺戟を與へる事の實行が出來るなれば、今日の様に屑物同様のもの又は機械で云へば少しも生産能率の無い Lost Montion and Waste of Energy の多いやうなものは、全く出來なくなる慮までは行かなくとも、少くなる事は疑ひないであらふと思ふ。何も高等動物であるから其發達がむずかしいからと云ふ解は無い。歐米諸國に於ける家畜が諸種の目的に適應して、克く發達せる歷史を見ても明らかである。然るに今我が國の何の家庭にでも見らるゝ様に能率の少い人間が多い、換言すれば寄生虫的のものが多いのでは、簡易生活とか、單純生活とか希望して見ても、元々無理な注文である事が多い。又たいくら單純生活方法であると云つても、人類の生活要件に不足を來す様な方法又は生活要件に適應しない様な不合理な非生理的、非衛生的の方法であるならば、是れは一見單純に見へても、其實單純では無くして複雜混沌生活の最大原因を來すものである事が多いのである。

或る人の座談に曰く、某家では子供が多くて寢室の世話が面倒であるから、丁度汽車や汽船の寢室の様なものを有つて、其

狭苦しき一室に、澤山な子供を何時でも、寢させ得る樣にしたと。一見單純生活法の一例の如きも、若し其れが實であつて其子供等が數年乃至四五年も共生活方法を續行させられた時には、其子供等は皆肺病患者と化する事は疑ひないのである。夫れ等の者共が延いて社會に流す複雜生活の有樣は申す迄も無い事である、勿論、之れは極端な一例に過ぎないのみならず、事實左樣な事があつたか否か、自分が觀たのではないから確かだとは申しませんが、之れに似た樣な例は、今過渡時代の本邦人にして一知半解者の筆に屢々見らるゝのである。發育時代の兒童に對し安眠が如何に必要なるかは申迄もなく、而して之れが爲めには吾人相當の寢室の大きさと廣さとを有せしむる事が睡眠時に於ける、換言すれば疲勞快復時に於て吾人の生活機能を平靜に行はしむる爲めに最も重要なる關係を有するものである事は吾人の信じて疑ふ餘地のない處である。其外又た現社會には時々一部の者が機械の發達に誘惑せられて、機械を人間が利用するのでは無くして、機械の爲に奴隷使されつゝある事實が多い。先に申した如く機械は如何樣にも發達せしめ得る事が出來又た如何樣にも變へる事が出來たものであるが、人間には人間生活に必要であり、又た人間の能率を高むるに必要缺くべからざる物質の量的並に質的條件がある外に

鍛錬と習慣

とが、吾人の能率に至大の關係を有するものである事を、忘れてはならぬ。之れが卽ち、社會の文化と共に各專門的業務の分るゝ、又分れざる可からざる所以であると思ふ。例へば讀者諸彥は私が坐業に從事して居る以上、恐らく私の體は弱いであらふと想像せられしかも知れぬ。如何にも今直に私をして、重勞役に服せしめたならば私は屈强なる勞役者の半分の仕事も出來ないかも知れないが、私自身は決して彼等に比較して弱いとは思つて居ない。今若し彼等をして私共がする樣な仕事、例へば文字は讀めるが內容難問不解の書籍を百頁づつも日々了解して行けと云つたならば、彼れ等は其業務に從事するや數時間で卒倒して仕まふかも知れない。世の中に苦しい仕事の種々があるけれ共、私の見解と實驗とによれば、何と云つても解らない事を解決する努力にこすのものはない。趣味に乘じ、勝氣に誘はれて、する事はするものの、難問不解の書を一定の短時間內に了解し、自分のものとするに要する勞力より苦しい仕事はないと思ふ。

所が現代の吾人の生産を一層簡單にして、然も能率の適に有効なものとせうと云ふのには、一は先程申した如く、既に〳〵解り切つた事柄であつて、唯其れを利用すればよいのであるが、昔が因襲的觀念の捕虜となつて、實行する勇氣のない場合にて勇斧を要求する事と。他は現在當不確實なる處を確定して、夫れを何人もが實行せんと欲すれば、直ちに實行し得る處まで漕ぎ着ける方法を研究するとの、二つより外に途は無いわけである。

何れにしても、此の意味から考へて來るならば、文化生活中の簡易生活法とは、既に現代の思潮たる分業を文化に應じて遺憾なく發展せしむる事が第一策であると思ふ。總て何事にもよらず、慣れた者が慣れた事をするのならば、何事が單純に行き其間に生活の餘裕があるから、其人も益々發達し、又た從つて其れ等の人々に屬する機械も發達して來るわけである。之を改善すべき勇氣も自ら生じ、解決せんと企つる努力も自然生る可きである。唯其の**文化に伴ふ分業生活**を實現するにしても、私が玆に反復述べんと欲するのは、決して現在の夫れの如く、機械が主であつて、又は設備が主になつて、夫れに只人間を好い加減な見當で割り當てたのではいけない殊に親讓り又は傳業的の舊志操は全く一掃せんといかぬ。(適材適才並に適體)を適宜の職業に從事せしめねばならぬ。而して適材の撰擇方法に就ては、得手勝手な僅かの經驗に基くのみでなく、必ずや之を科學の根柢に求め、幾分にてもよいから、實際なる試驗方法によらなければならない。さすれば試驗方法の如きは漸次發達して來るに相違ないのである。即ち兒童期が過ぎて一定の職業に從事せんとするや、必ず先づ一定の生理學的又は衞生學的及び心理學的の試驗を行ひ、之れに本人の履歴を考慮し、適材を適業に從事せしむるの方針を取らねばならぬ事と思ふ。

若し左なくして現在の樣に、機械の試運轉に對しては專門技師の周到なる試驗を經て之を採用しつゝあるに係らず、人間の方は一時間にさへ合へば其れで事濟みの有樣では、機械は漸次發達して來つゝあるに係らず、之れを使ふ職工の如きは一向發達せず機械の能率は高きに係らず、職人の働き振りには消耗と損失とが甚だ多くして、人間が機械に使用せらるゝ樣になり、果ては老朽淘汰の非運に接せねばならぬのである。私の見

る處では

老朽陶汰ほど複雑混沌たる生活方法は無い

若し初めから適材適度の撰擇方法が行はれてあつたならば、又た其れ等の者に適當なる生活要件と刺戟とが與へられてあつたならば、特別の職業は措て措き、一般的に見て四十や五十で老朽陶汰の必要が起る可き筈は無いのである。總て若年の者は精神にしろ、肉體にしろ彈力性に富み、一定の範圍内に於ける餘裕のある處から、之れを一見した許りでは誤魔化しのきゝ易いものである。初め斯る誤魔化し主義で採用されて居るから、少し老年になつて其箔でも剝げた曉には陶汰されねばならぬ様になるのも當然の勢である。

眞實適材が適處にあつて相當に眞面目でやつて居るならば、年と共に熟練の結果其能率は増加して來る可き性質のものである。病氣にでも罹らぬ以上四十や五十まで陶汰せられなければならぬ様な運命に遭遇する筈はないわけであると思ふ。

既に述べました如く、自己の使用すべき裝置か自己に相當である以上一般の場合に於て、神經と筋肉との共働作用は鍛練と習慣とにより益々熟達し來り勞少くして效多き様になるべき筈のものである。尤も之にも一定年限のあるのは勿論であるが、其一定年限なるものが適材適處の場合に於ては非常に永續し得べき筈のものである。生れ附きの才能及び資性は申すに及ばず、後天性の體質、就中、職業別罹病並に死亡原因別の如きを鑑みても、實に明白なる事實である。若し斯くの如くして、文化的分業生活方法が實現せらるゝならば、第一、安んじて其職に從事する事を得るのみならず、上下の區別は比較的自然的にして、不平の種となる事少なく、從て各自其職に忠實であり易き筈であると思ふ。第二には、鍛練と習慣とによつて漸次其能率は高まつて來るから、時間と金とに自然餘裕が生じて來て健康も克く保全され、人間生活の味を加味する事も、少し一般的になり得るであらふ。今時の様に人間と云へば我慾と嫉妬とより成立せる畸形體の様な者が漸次減少して來るであらふ。比較的出來る奴は飽く迄も我慾の擒りとなり、出來ない奴は嫉妬の囚りとなるのも、つまり生活の安全が保證されないのと、自己の足らない事が解らなかつたり、足らない人間が感情撰擇の爲めに重用せられたりする事が多いからであらふとも想はれる。第三には初めに申上げた寄生的人物が今よりも少なくなるのであらふ。

何れにせよ今茲で私が自分の論據に都合の好い狀態や引例を擧げて來る日には數限りなかるべく、私としては忙がしい間に時間の浪費をする事となり、讀者諸君には甚だ無趣味の事であらふと思ふから**茲に一段落を付けて、此の文化的分業生活を實**行するに當り、最も大なる障碍物である

世襲的觀念

に於て少し許り述べて見たいと思ふ。尤も私は一概に世襲方法が惡いと云ふのでも無い。まだ夫れを云ふまで專門的に社會を攻究しても居ないのである。併し乍ら極端なる世襲的觀念の發揮は、を觀れば愚の圖りであり、子供を觀れば墮落の徵候であると見る事も出來る。のみならず邦人の樣に此觀念が強くては何時まで經つても科學的根柢に基いた分業生活方法などは、行はれ得るものでは無い。」

私が甞て米國を旅行した時、私は米人と語る每にワシントンの子孫は其後如何なつて居るかと、物好きに聞いたものである。尤も私に聞かれた人々が歷史に鈍い人々であつたのかも知れないが何れも、何不思議なく、『知らぬ』と答へたきりで、かたに耳を傾け樣ともしなかつた。彼の米人は申すに及ばず、世界の異人種からも、敵と味方の區別なく神の樣に尊敬せられて居るワシントンの子孫すら米人には其通りである。私は別に之れを好いとも惡いとも思はぬが、唯私の嫌いなのは、吾人同胞**間に今尚ほ深く沁み込んでいる**

子孫崇拜の觀念である

英雄崇拜とか祖先の崇拜とか云ふ事は決して惡い事とは思はないけれ共、何も其の子孫まで崇拜する觀念を他人に持たせなくともよいと思ふ。吾人人類一般の能率を增進せしめ、適材を適處に配置する點から見て之の觀念は非常に障碍物となるのである積り大きな意味から觀て、人類の發展を防害する事となるのである。同樣の意見に基いて、私は又た極端なる家族制度又は家族本位にも贊成する事は出來ない。

矢張り親の財產は子供に平等に分割してやつて、弟であらうが、女子であらうが、家の爲めに犧牲にする樣な事は、良好なる單純生活法と云ふ點から見ては、極端に排斥せねばならなぬ事柄である。既に時代の思想として遲かれ早かれ我國の一般にも實現せらるゝ事ではあらうが、現在の如く長男は家督をつぐもの、家督の娘には必ず養子せねばならぬと云ふ樣な思想が播て

つて居ては、科學的分業生活法の如きは愚か、第一、寄生的人物の養成法であつて、生活方法の複雜さの上もないのである。何も私は殊更に單純生活を好むものでも無いが下らない事のみ多くして爲に吾人人類一般の能率を低下せしむる樣な複雜な生活方法には反對せざるを得ないのである。

簡易生活にも勿論種々の程度があり、又種々の方法があるのであるが、恐らく現在歐米諸國に於ける大都市民の理想である『無兒制』の如きは其極端に達したものであらふ。簡易生活と云ふ點から見れば、子供は甚しき邪魔物であるに相違は無いけれ共どちらかと云へば餘り極に過ぎる樣である。日本には人口が稠密過ぎて困る、今に食物が不足する樣になるであらふ、などと憶測する人々もある樣であるけれども、夫れは大きな間違ひであつて、日本でも、西洋でも、衣、食、住、の原料は決して歷史上人口の增殖、卽ち生産死亡の差增か多いからと云つて減少するものでは無い。否其れよりも反對に是等物質の原料は人口の增殖に連れて、今日までの處では、比較的多額に生産せられて居るものである。元來衣、食、住の原料品の如きは機械的の生産物であるからして、機械の發達に伴うて、又た科學の進歩に並行して、或る極限に達する迄は如何樣にも生産の出來得るものである。例へば我國に於ても之を例年の計統年鑑に徴するに、米麥を初めとして爾他の有用なる穀物、野菜類は勿論魚介類其他一般に至るまで、其生産增額は人口增加の割合よりも遙かに高いのである。

『二兒制』足なりとか、『三兒制』可なりとかの議論は別として私は、マルサスや新マルサス論者一派の士が稱ふるが如き、生活資料の缺乏を憶測して、人口の增加を心配するが如きは、根柢の甚だ薄弱なる假說に過ぎ無い事であると信ずる。勿論私とても粗製濫造式の事は、仕方が無いとは云ふものゝ、隨分厄介な事である、のみならず其人の爲めには御氣の毒な事であると思はぬでも無いが。

今私をして豫言せしむるならば、現代の文明にのみ附隨して、機械の發達と、人間との間に調和が取れない樣であつては物資原料不足よりも先に案ぜられるものは、一國には一社會に於ける人口の減少でないのと思ふ。加ふるに晚近の機械的進歩に伴ふ交通機關の發達、産業方法の改新は、益々都市の人口集中を實現せしめ、我國に就ても近き將來には却て人口の減少を憂慮せねばならぬ時機が來るであらうと思うて居る。之を要するに、私の考としては、一家は別として一國又は一社會に於

ては單に人々の減少は簡易生活若しくは生活安全の上に有効ならざるものであると思ふ。文化的分業生活が發達し來るならば寧ろ吾人の生產能率は程度の人々增加以上に遙かに增加し吾人の生活は一層容易になり得るものであると思ふ。

「註」實は私は本記事中に私が度々用ひた言葉である『文化生活に適當なる生活要件並に適當なる刺戟』と云ふ事に就て終りに、大體の說明をなし。此の極限の範圍を脫して吾人の衣、食、住法の如きを簡單縮少する事は出來ない。つまり簡易生活方法を講ずると云つても此範圍內の問題であると云ふ事を專門的見解からして述べて見たい積りで居つたのであるが。意外の事を永く書き初めた爲めに原稿を渡さなければならぬ時間に到達したので、先程の言葉の說明もせずに打切る事は遺憾乍ら讀者諸君の御察を乞ふ次第である。（了）

住宅改造の根本義

工學士　本野精吾

目下日本住宅の革命期に迫つて居る事は、少しく此の方面の考慮を費やすものに取つては最早疑ふ餘地なき事柄であると思ふ。唯如何なる方針の下に如何にして實行するかと云ふ事が、人々の頭にはつきり浮んで來ないのである。此の事に關して建築專攻の人々の間に論議せられたのは、もう餘程久しい以前であつた。其後樣々の意見か各方面から發表せられて、私の見た丈でも隨分澤山な數と種類とがあつた。然し乍ら百の言論は一つの實行に若かず、遂に風潮は力弱きものとなつて一時は消えかゝつた樣に見えた。夫れは大戰勃發の少しく前の頃であつたと想ふ。其の後改造の趨勢は再び形を變へ可なり力強ひものとなつて各方面に表はれた。夫れが現時に續いて來て居るのであると想はれる。其の中で最も尨大な形になつて表はれたのが

東京に生れた生活改善同盟會であらう。其の決議文(住宅に關する)を拜見した處、大體に於て私の取つて居る方向を同じくして居る様なので會心の笑を漏さゞるを得なかつた。唯改造をモットーとして立つ以上今一層勇氣と果斷とを以て出發する事が望ましく想はれる。其の一つの例として「漸次腰かけを改むる事」と云ふ一項があるのを擧げる。それ等は斷然椅子生活と決定して、それを實行せざるものは除名すると云ふ位な程度迄にやつて欲き度かつた。あの決議文には私の賛成し兼ねる點もあるが、今それに就て論議する事を止めて、以下私の考を直截に述べて此の項を終る事にする。希くは改善同盟會の決議が決議に終らずに、一日も速に實行に這入る事を望む。百の決議文は遂に、一つの實行に若かずである。

住宅改造の出發點——住宅改造は樣々の方面から研究と考慮とを要する。社會的見地から見れば、社會組織と關聯し勞働問題等を基本として考へる事が出來る。國民經濟の方面より見れば、商工業と關聯し富や工業の實質を土臺として考ふる事が出來る。軍事的方面より考ふれば、國防の一つとして考へる事が出來る。事實現時の日本の大都會は燃料を組み立てゝある樣なものである。曰く何、曰く何。總ての方面より見たるものは悉く「日本の住宅は改造せざるべからず」と云ふ一語に落ちて行くのである。私は今それ等に就て一々論議し樣と云ふのではない、今は唯國家を離れ社會を離れ一個赤裸の人間の住家として研究して見度いと想ふ。それを以て私は住宅改造の出發點と考へるのである。

赤裸の人間其處には貴賤の別もなく貧富の別もない。故に私の研究は總ての人類に共通のものでなければならぬ。

坐生活と腰掛け生活——此の何れが正しき生活であるかと云ふ事に就ての私の意見は今迄に度々發表した事もあり、趨勢は已に腰掛け生活を正しいと考へる方に傾いて居る樣であるから、今は之れに就ては述べない事にする。唯私は七八年前から生活を腰かけと定め着々實行し經驗した結果、生活は腰かけを本位とすべきものであると云ふ信念は牢固として拔くべからざるものになつたと云ふ事を一言して置くに止める。

住宅の間取り——之れは住宅構成の根本であつて總ての方面の要求が一つに結晶して間取となつて先づ表はれるのである。所謂進んだ人間の要求と云ふものは極めて複雜なもので、錯雜混亂し時には散漫に流れ到底一つに收集する事の出來ないものになつて居る事がある。現代の文明は正にそれである。殊に吾

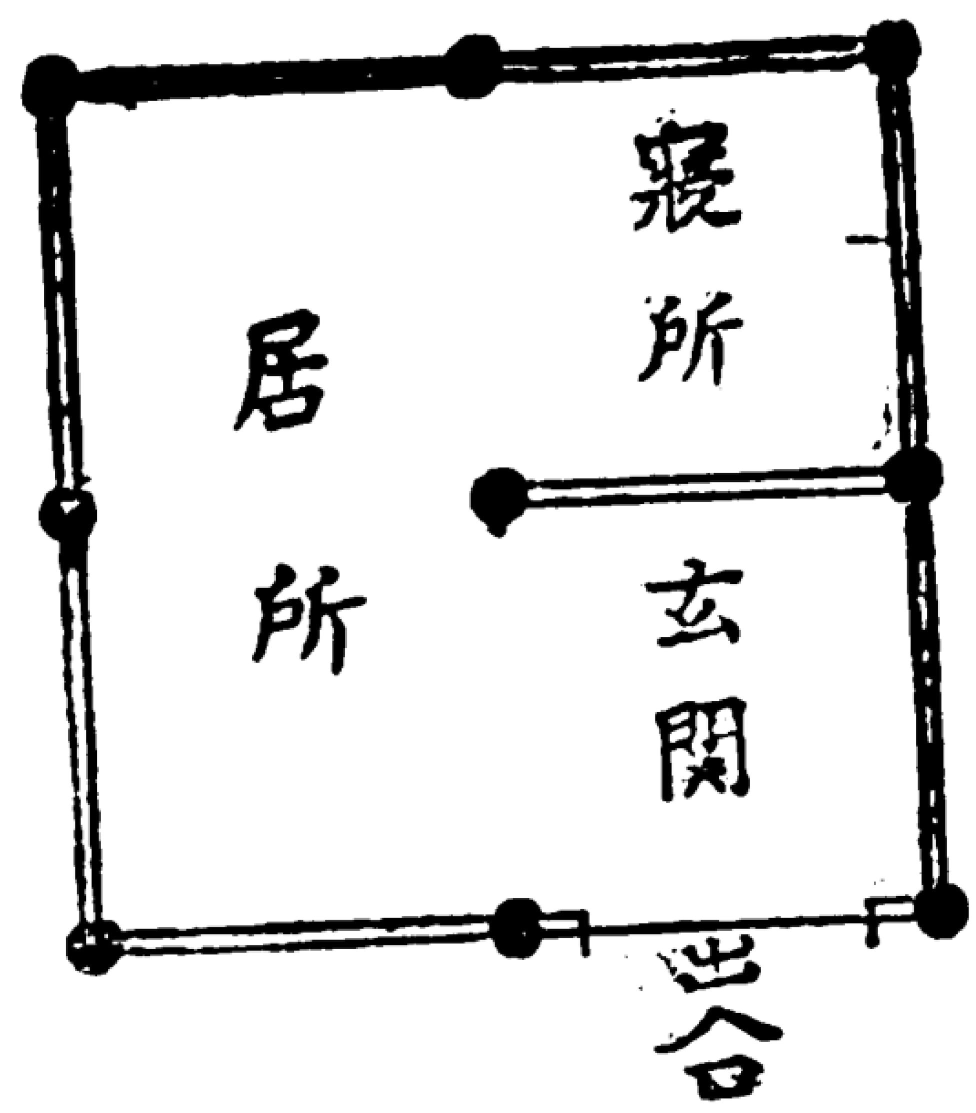
が徳川幕政の末期は此の最も甚だしいものであつたものである。近時迄日本住宅として相當の敬意を拂はれて來たものは此幕政の末期に生れ出たものであると云ふ事に注意せねばならぬ。人間の要求が平穏な「デカダンチズム」を背景として生れた程始末に困るものはない。外觀は整然とした「システム」の中に熔かし込まれた少しの矛盾も撞着もないもの丶様に見えるが、人間の方が一つの畸形兒になつて居る事には氣が付かないのである。此の畸形兒が産み出した住宅は矢張り畸形兒にふさわしいものであつた。然しながら畸形兒としても本來の美兒は矢張り美兒である、日本に拔く事の出來ない美しさも矢張り此に潜んで居る事を忘れてはならぬ。

　非常な長さと面積とを持つた廊下や幾つもの空いた部屋を通つて漸く目的の部屋に達する事が出來る。斯う云ふ風な間取りは現時の大邸宅には決して珍らしくはない。曲りくねつた廊下は迷宮を歩く様な心持を與へる。そこで其の全體には何等の「システム」もない。それが畸形でなくて何であらう。吾々健全なる人間が斯ふ云ふ家に住む事は不可能である。唯快活な野原に居る様な心持ち、瀟洒閑雅な部屋の心持ち、斯ふ云ふものは畸形兒にも持つて生れた美しさとして何處迄も敬意を拂ふべきであらう。斯う云ふ繁雜な生産物の間にあつて、私が唯一つの尊重して居るものがある。夫れは云ふ迄もなく數奇屋である。之れとても近代のものには繁雜な畸形兒の生産物もあるが、少しく優れたものは人生の總てを僅か二坪か三坪斗りの中に完全に詰め込んで、矛盾も撞着もなく大膽に解決した誠に驚嘆に値するものがある。豐公が隱れ家として眞個の生を托した山崎妙喜庵の數奇屋を見る度に此の感を深くするのである。

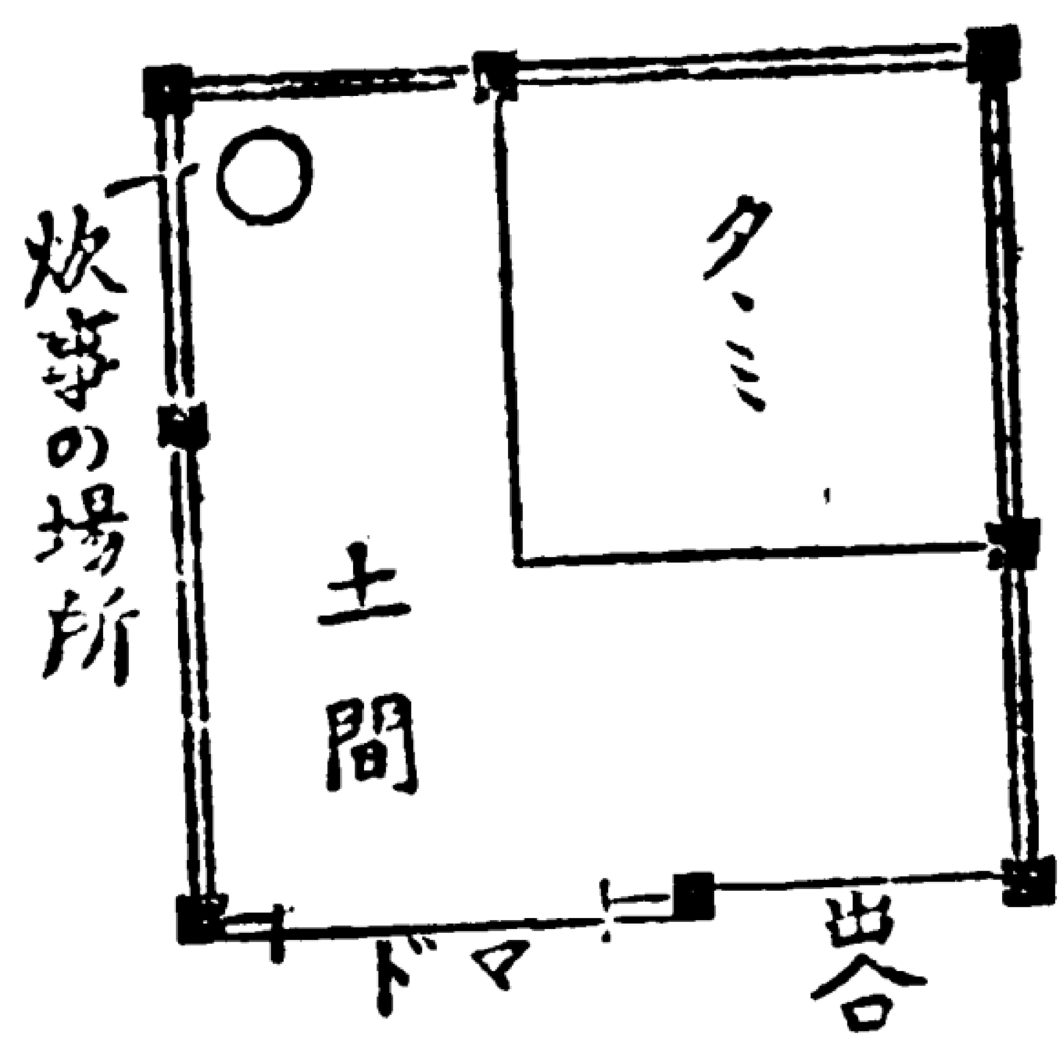
住宅の精神――住宅とは人間と云ふ生物の住家である。人間が生物である以上生物を容れるにふさわしい者でなくてはならぬ。玆に廣々とした土地の眞中に唯一つ五六坪の家を建て丶夫れに一人の人間が全體の生を托するとする。其の時に四角な部屋に四方に同じ様な窓を同じ様にあけたとする。其の中は落莫とした砂漠の様な人生とは何等の關係もない一つの箱と等しき感じを與へるのである。生活の簡易と眞個の住宅との分岐點は此の處に存する。改善同盟會の方々が後から「趣味は住宅にはなくてならぬものに定まつて居るから決議條件の中には入れなかつた」と云ふ意味の說明を附加發表された事を記憶する。同盟會の諸賢よ簡易生活と趣味生活それを矛盾した二つのものに數へ擧げ、其の協調に心を惱ます程貧しき頭腦の持主であ

られざる事を希望する。住宅の改造は生其物を基本として一糸に終局に向つて進まねばならぬ。人生は自然の大きな波動と共に渾然とした一つの「リズム」の中に溶け込んで進んで行く、人間の住家は斯く形ち造られねばならぬ。

實際の問題――生其の物の純なる要求を考へるには、一度は原始の生活を顧みねばならぬ。今心に浮んだ二三の例を擧げて見樣と想ふ。私が住宅建築として尊重して居るものが日本の太古に一つある。之れは勿論何物と現存して居る譯ではないが、



第一圖



第二圖

學究の結果が殆んど其の實際を推定する迄に進んで居る。自然木を掘り立て組み合せたもので其の間取りが第一圖に示す樣になつて居る。私は此の住家を見つめる度に、深い純なる要求が産み出した力強ひ純一さを感ぜずには居られない。最も出入口から遠ざかつた靜かな寢所、主要な部分を大膽に占領した日常の居所、それ等が唯一個の方形の中にをし込められて、其處に少しの矛盾も撞着も見出す事の出來ない、實に純正の住家は斯くあるべきものと云ふ力強さを感ずる。人間の住家の「エッセンス」とは斯ふ云ふものを云ふのであらう。

今一つは私が一度細民の部落を探究した時の事である。露路は又露路に岐れ、次第に細くなつて行き、左右から垂れかゝつたあやしげな軒先は中でぶつかる位に挾まつて、暗澹とした處は遂に袋露路で行き止まつてしまつた。其の一番終りにあつた一軒は力強く私の神經を引きつけた。夫れは第二圖に示す一間半角の家で、全體は土間で隅に疊二帖の場所丈が一尺斗り高くなつて居る。そこで隅に炊事の場所がある。家の主は何れ何かの仕事にでも行つたらしく、家はがらんとあいて居た。少し高い處にある窓からさし込む光線を便りにして此の一隅のあばら家を見つめた時程嚴肅な心持が體全體を占領した事は稀である。尊い人生の純なる或物が此の九尺四方の中に何の飾りもなくむき出しになつて壓し込められて居る樣な心持がしたのであ

る。壁に懸つて居るぼろ〳〵な布や、燻ぶつた鍋等が一つ一つ夫れを語る。

住宅の問題を解決する爲めには、一度は斯う云ふものに立ち戻つて考へねばならぬ。近頃行なはれた家の革命に最も興味あるものゝ一つとして、私は「バンガロー」を擧げる。「バンガロー」は英人が印度の暑き氣候には本國の建築極めて適せざる事に着眼し、印度の土地に産れた土民の家に「ヒント」を得て極めて大膽な改革を行なつたものであるが、何事にも新しきを求むる米人は直ちに之れを移し植えて、今は宛も米國の產物であるかの觀をなして居る。其の上初めは極めて純な動機の下に出發した「バンガロー」も今では樣々の徑路を經て一つの混成物となつて、初めに生れた純な要求から放れて在來の邸宅と餘り變らないものも澤山に出來上つて居る。「バンガロー」の生れる時は日本の解放的な住宅が「ヒント」を與へたとも云はれて居るが、それの眞僞を明かにする事は出來ない。唯「バンガロー」にあつては日本の家の樣な散漫を極めたものでなく、一つの純一な「システム」の中に成り立つて、家の各部は人間の體の各部が互に聯絡して一つの「リズム」の中に熔け込んで作らる樣に、極めて有機的に作用する處に日本の死んだ樣な住宅とは根本に於て相違する。發達したる頭腦の生產物は斯くあらねばならぬ。

實行案

建設の前の破壞――結局は全部の改造を要する日本在來の住宅ではあるにしても、一度は破壞して建て直す事は到底實行不可能の事に屬する夫れ故に先づ第一着手として在來の日本住宅は兎に角椅子を持ち込む事にする。玆に破壞の第一步が始まるのである。部屋の用ひ方心持等が全然別のものにならなければ納まりは付かなくなる。今迄尊嚴侵す事が免さず部屋の一隅に尨大な面積を占めて居た床の間は今迄の通りの資格を保つ事は出來なくなる。斯る破壞を敢てして玆に在來の住宅の中に新らしき天地を創造するのである。斯くして出來上つたものは次の時代に生るべき日本住宅の萌芽であらねばならぬ。今迄に永い間聞き倦きる程聞いた言葉――「西洋館ならば本統の西洋館日本家ならば純粹の日本家」――と云ふ言葉は何年かの過去には相當に權威があつたかもしらぬ。然し現時には通用せぬ言葉である。勿論新らしき家を建てゝ次の時代に來るべき家の萌芽を造る事は改造を積極的にする最上の企であるが、それは一部少數の人々にのみ實行し得る事柄であるから、數に於て或力弱さがある。大多數の民衆が此の方法に依て實行に着手する事

を希望するのである。

實行の順序――家の最も頻繁に用ゐる部分より先にすべし。居間、寢室臺所等より改めて最後に客間に及ぶべし。簡易なる生活にあつては居間は當然客間と兼用にすべく。家を新らしく建てる場合には其の側に臺所の場所食卓の場所料理の場所等があれば小さな面積の中に生々しき人間の住家が出來上る譯である。家とは斯くあり度いものである。

衣食との關係――「着物が改まらなければ腰かけ生活は出來ぬ」「テーブルで茶漬けは適さぬ」と云ふ、斯ふ云ふ種類の言葉は結局改造に心なき人々の遁辭に過ぎぬ。一旦改造に志すならば何れの隅からでも斷乎として始めねばならぬ。「テーブル」は銀の匙と銀の「フオーク」にて「スープ」と「ビステキ」を食ふ爲にのみ存在するものではない、のみならず一時に總てを改める事は却て惡き結果を引起す事がある。

習慣の力――最後に生の形式に重大な關係を持つ習慣の力に就て一言して、此の項を終る事にする。家の改造に就て最も障害になるものは習慣の力である。習慣の力は多くの矛盾や撞着を消滅して何者をも感ぜしめなくなる、のみならず醜をさへ美と感ぜしむる不可思議の力を持つ。其の上一旦出來上つた習慣は破壊する事に非常の困難が伴なふ事を忘れてはならぬ。在來の畸形兒が造り出した日本の住宅を改造する爲めには習慣を破壞せねばならぬ。玆に實行上の最大困難があるから、改造に志す人々の果斷と勇氣を要する譯である。

新マルサス主義の研究

產兒調節と新マルサス主義

山川均

一

子供の欲しい人が鬼子母神に願を掛け、伊香保の溫泉に湯治に往つたとて、よし其迷信と徒勞を嗤ふ人はあつても、何人も其人の道德上の責任を問はうとするものは無いだらう。ところが反對に、子供の欲しくない場合になると、必ずしもそうでない。そこで從來の因襲的の倫理觀念では、子供が持ちたいといふ欲求は道德的であつて、子供を持ちたくないといふ欲求は、不道德的となつてゐる。

或人は此論法を、自然と不自然と云ふことに求めるかも知らぬ。子供の持ちたいのは自然であつて、子供を欲しくないのは不自然である。不自然は即ち不道德的である。

けれども子供を持ちたいと云ふことが、或狀況の下に於いて自然であるのと同樣に、子供を持ちたくないと云ふことも、或る狀況の下では、人間の極めて自然な欲求である感情である。又た生殖機能に缺點のある男女が、伊香保の溫泉によつて子供を得ようとすることは、恐らく之れ以上に不自然なことの考へられぬほどに不自然な欲求である。そして此不自然な欲求が、必ずしも不道德とされないところを以て見ると、自然と不自然といふことは、必ずしも此場合の、倫理的批判の標準となつて居るものではない。

假りに產兒調節（バース・コントロール）といふことが不自然であるとしたならば子を持つまいと云ふ感情や欲求が不自然であるとも解せられるし此感情と此欲求との結果として、人類の自然の蕃殖力が妨げられるといふ意味にも取れる。

けれども如何なる心理現象も、如何に不自然に見える心理現象も、精密に云へば悉く自然である。そこで或る心理現象を不自然であると云ふことは、畢竟斯かる心理現象を『自然』に誘致したところの條件が、不自然であると云ふことに外ならぬ。そしてこの『不自然』な條件からは、この『不自然』な心理現象を生ずることのみが『自然』であると云はなければならぬ。

蕃殖力そのものも、必ずしも一定したものではない。人類が今日有する蕃殖力は、一定の生存狀況の下に於て、其必要に應じて定まつたものである。して見れば、生存の狀況が變化して來れば、此新しい必要に應じ蕃殖力の上に變化の起るとは、決して不自然なことではない。唯だ問題は、此新しい環境に對する適應が、無意識に行はれるか、意識して行はれるかと云ふことである。

そこで若し意識といふ要素の這入ることが、即ち不自然な現象であるとするならば、不自然が必ずしも不道德でないことは無論であつて、人間社會の進歩は、或意味では益々多く自然に服從することであるとも云はれるが、同時に或意味では、益々多く自然に反することであるとも云ふことが出來る。そこで產兒調節と云ふことを、人間が自己の運命を支配する一新項目として考へる場合には、恐らく何人にも、反對の餘地があるまいと思ふ。

二

そこで產兒調節に對して贊否の岐かれる所は、人間が必要に應じて、蕃殖力を調節するの力を持つことが、善いか惡いかと云ふ問題ではなくて、或る一定の社會狀態の下に於いて、產兒調節の必要があるかどうか、又た或る特定の個人の生活狀態について產兒を制限するの必要があるかどうかと云ふ、實際上の問題でなければならぬ。個人の場合に、最も異論の少ないのは、恐らく精神上肉體上の不健康者の場合であらう。精神病者や遺傳病者が、自らその子孫の蕃殖を制限することに就ては、恐らく極端な因襲的道德論者の外には、多く異論があるまいと思ふ。

次には不健康者の場合である。今日と雖も母體を救ふ爲には醫師は墮胎をすらも行ふの、權利があるとしたならば、母體の健康を維持する爲に。姙孕を避けることには、恐らく多くの人に異論がないに相違ない。

若し母體の健康を維持する爲に、姙孕を避けることが許すべきことゝするならば、同じ目的の爲に姙孕を制限し調節するこ

と（從つて產兒を調節し制限すること）も許すべきこととなつて來る。

若し母體の健康が、多くの子供を哺育するに足りない場合に產兒の調節が許すべきことであるとしたならば、一家の資力が多くの子供を養育するに足りない場合にも、同一のことが許さる可き筈である。

然しながら子供を育てると云ふことは、必ずしも子供に最低の衣食住を供すると云ふことではない。既に以上の場合の產兒調節を正當とするならば、子供に與へ得可き敎育の程度を引下げぬ爲に、產兒を制限する場合をも承認しなければならぬ。更に母體の肉體上の健康を維持する爲に產兒を調節することを是認するものは、兩親、殊に母親の精神上の健全と發達とを保障する爲に、產兒を制限することをも是認しなければならぬ。

三

次には今日の社會狀態を全體として見た時に、人口制限の目的から、產兒調節の必要があるかどうかと云ふ問題がある。そして此問題に這入ると、產兒調節（バースコントロール）の主張は、一轉して新マルサス主義となつて來る。

現在の社會に於ける一切の弊害は、少くとも貧困から直接間接に起る一切の弊害は、人間に固有な蕃殖力の過剩によるものであるか、それとも經濟組織の缺陷に基づくものであるか。マルサス論者は前の立場を取り、社會主義者は云ふまでもなく後の立場を取る。

マルサスによれば、人間社會に於ける貧困といふ現象、並びに之から起る一切の社會的弊害は、人間固有の蕃殖力に基づく人口過剩によるものであつて、若し今日の經濟組織を改めて、假りに全ての人に生活を保障するような經濟組織を採用したとするならば、人間固有の蕃殖力は直ちに、其抑制せられてゐる力を現はして、斯ような經濟組織を破壞せしむるに相違ない。貧困は社會組織の罪ではなくて、人間の蕃殖力の罪である。

此學說は現在の經濟的支配者の階級に取つては、誠に救ひの福音であつて、如何なる國の資本政府と雖も、此學說を危險とし、此學說を不道德と見做して、之が鎭壓の必要を感ずるものはないだらう。

然るに此學說が產兒調節（バース・コントロール）と結びついて新マルサス主義といふ形を取ると、それは初めて危險なものとなり、不道德なものとなる。何故ならば一度び新マルサス主義が、勞働階級によつて實行せられたなら、勞働者は最早や、量に於ても質に於ても自分と同じような勞働者を、再び生産しないからである。舊マルサス

主義と新マルサス主義とに對する、支配階級の態度の豹變は、此一事によつて説明することが出來る。

尤も今日の産兒調節論者の悉くが、必ずしもマルサス説を共鳴に遵奉して居る譯ではないが、(米國の有名な産兒調節論者、サンガア夫人なども、自分の見た二三の文章では、必ずしもマルサス説の信奉者とは思はれぬ) 中には嚴密にマルサスを祖述して居る人もある。そこで此運動に對する社會主義者の態度も色々である。マルサスの生國として、産兒調節運動がより多くマルサス説を背景とする英國では、社會主義者は概して反對の態度を取つて居る。しかし佛國及び米國では之と反對であつて佛國では現に社會主義者の一團體が、盛んに此運動を助けて居るし、米國でも概して社會主義者は其支持者である。

然しながら産兒調節論は、必ずしもマルサス主義と引離すとは出來ないものではなく、同じく社會主義の論據の上からも主張することが出來る。サンガア夫人の二三の文章を見たところでは、マルサス説から出發して居ると云ふよりも、寧ろ婦人解放主義に深い根據をもつて居る。

現在の社會に於ける貧困と、貧困から生ずる一切の社會的弊害が、人類の蕃殖力の過剰に基くものであるかと云へば、吾々は固より否と答へるものである。けれども少くとも現在の社會組織の下に於て、産兒の調節は必要であるかどうか、特に無産階級に取つての避く可らざる必要であるかどうかと云ふならば答は自づから異なつて來る。産兒の制限は不自然であらうか。不道德であらうか。或は不自然であり不道德であるかも知れぬ。けれども多くの人々に取つては、それは道德の問題ではなくて、必要の問題である。若し子を持つまいといふ欲求と感情とが不自然であり、不道德であるとしたならば、斯くの如く不自然にして不道德な欲求と感情とを、「自然」に生み出した社會的條件が、不自然であり不道德でないかを顧みなければならぬ。

四

今から數年前、米國の一雜誌で次の如き書翰を讀んだことがある。道德上の論據から産兒調節を非難する人は、先づ此書翰に答へるの責任がある。

『私は二十六歳の若い女で、夫は一週二十八弗の收入のある製圖師であります。私達二人とも子供が大好きで、ほんとに私達は、決して〳〵自分の子供はもつまいと決心した程に、大の子供好きなのです。私達が斯んな決心をしたのは、考へた上にも考へた揚句です。歐羅巴では、今ま幾十萬の父と子とが、掠奪

階級の利益の爲に屠られてゐるし、私達の「自國」では、每年每年幾千人の男や女や子供等が、相當の衣食住を得ない爲めに死んでゐるのです。私達の目には、戰爭や貧困や、豫防することの出來ない病氣の爲めに、人類種族は今や自滅を急いでゐるかのように見えるのです。それで私達も力を添えて、今こそ斯んな「文明」に結末を與へてよいと決心したのです。』

『米國には、慈善團體の保護を受けてゐる、數千の家なし兒があります。それで子供に飢えてゐる人々に對して、私達は、この上子供を造らないで、現に生れて來てゐる子供の發育と敎化とに盡されることを勸めたいのです。若し若夫婦が勞働階級に屬してゐる人ならば、その產兒の九割は實に吾々の頭上にある營利組織の結果として、貧困と、窮迫と、犯罪と、死との生涯を送る可く運命に定められるのです。で斯くも恐ろしい前途をのみ約束する世の中に、無理無體に子供を投り込む罪科の共犯者たることをやめるのは、吾にも人にも、大なる義務である。

『勞働者には眞實の家庭はありませぬ。その家庭と云つてゐるものは、良くしたところで、畢竟憐れな街らひであつて、寧ろ之を破壞することの早やければ早いほど、自身の爲めにも後世の爲めにも利益です。金持の世界は利潤の爭奪に狂してゐます勞働者の息子や娘が、長屋や工場や、坑道や鐵道や、又は世界の戰場で、蠅のように死なうとも、彼等は利潤を收めることは忘れませせぬ。近頃、特に歐羅巴では、女は是非とも子供を持たねばならぬと迫るのが、資本家階級一般の風で、勞働の使用者は彼等の戰を戰ひ、彼等の利潤を增す爲に、より多くの兵士とより多くの勞働者とを欲するのでしよう。

『より多くの子供を造れといふ、主人の要求に對する私共ヘンリー・ピタアビンと其妻との答へは斯うです——吾々はもう貴方の大砲の糧秣を作らない、貴方の鑛山と貴方の工場との爲に奴隸を作らない、貴方の淫賣屋の爲めに娘を產まない、貧困によつて犯罪を强ひられる靑年を作つて、貴方の監獄と貴方の養育院とを滿たさない。

『貴方は貧困と疾病とにより、監獄と賣淫と戰爭とによる、人類の自殺を主張する。私達の最後は貧者の墓でしよう。百中の九十九までは斯うなのです。けれども、決して〳〵私達の子供等は……何故ならば、私達はもう〳〵子供を持たないからです一人の子供をも資本家階級の利潤を作る爲めに、此世界の中に產まうとはしてゐないからです。

『……私達は斯うして全力を、何時かは寄生的階級を地球の表から一掃する××の軍隊に傾倒しようとする。私達はもう〳〵私達に心なき沈默をさせ、心なき妥協をさせ、その食ひ物と着る物を得る爲に、自らを僞らしめる一人の幼兒をも持つまいと決心してゐるのです。そして私達は、全ての聰明な男女勞働者に、產まれた子供の爲に適當な世界を造るまでは、子供を持たぬ決心をするように勸めたいのです……』

新マルサス主義と
貧困、避姙、搾取

高畠素之

（一）

人間は其の食物範圍以上に增殖せんとする自然的傾向を有してゐる。人口增殖力は食物增殖力よりも常に大きい。そこで此二個の力が平均を保つには、人口の增殖を妨げる何等かの作用が起つて來ねばならぬ。貧困及び罪惡は卽ち之れである。世の中に種々なる罪惡が跡を斷たず、多數の人々が窮乏狀態にあるは、社會制度、經濟組織の罪ではなくて、人口增殖てふ自然律の結果であり、人爲を以て如何ともすべからざるものである。所が人口の增殖を妨げる今一つの原因がある。それは卽ち道德的抑制である。道德的抑制とは人々が家族を扶養し得るに至るまで結婚を抑へ、其間不自然なる情慾の滿足を爲さざることである。貧困及び罪惡は人爲を以て如何ともすべからざる自然の現象であるが、斯る道德的抑制が人間の理性に依つて完全に行はれる時、其れは必ずしも避け得られぬものではない。卽ち社會改良は必ずしも不可能ではないのである。けれども、それは制度上より來たるべきでなく、各人の理性の發動に待たねばならぬ。

以上は所謂マルサス人口論の要旨である。此所說から道德的抑制の部を除き、其れに代ふるに早婚避姙を以てし、情慾の滿足と人口防止とを一擧兩得しつゝ、貧困犯罪等の除去、換言すれば社會改良の目的を達成しようとするものが卽ち新マルサス主義である。新マルサス主義は佛蘭西に於ては十九世紀初葉より既に不言實行せられ、其後英吉利に於て始めて一個の理論的主義たる形態を與へられた。一八七六年ノートンの著書が風俗紊亂とせられてより却つて社會の注意を惹き、遂には一箇の團

體を生じて和蘭、獨逸等にも次第に波及するに至つたのである。

(二)

マルサス説は誤れる根柢の上に立つてゐる。人口の增殖が食物の增加に伴はないと云ふマルサス説の前提が、如何に無根據であるかは、少しく注意して生物界を觀察した者の直ちに看破し得る所である。私は曾て、此點に就き次の如き意味の事を述べた。——

生物はすべて猛烈なる生殖力を有つてゐる。象は有らゆる動物中生殖力の最も低きものと云はれてゐるが、それでも其一生百年間に平均六匹の子を產む。所で此六匹が悉く生存するとすれば、最初の一組の夫婦から七百四十餘年後には約一千九百萬匹の子孫が生ずる譯である。生殖力の最も弱き象でさへ此通りである。之れがバクテリアの如き微生物になると、僅か一晝夜にして、約一萬位に增殖する力を有つてゐる。

然るに、生物は一方に於て食物の需要者であると同時に、他方に於て食物の供給者である。自分は他の異つた生物を食つて生きてゐるが、他の異つた生物は又た自分を食つて生きてゐる。故に生物の生殖力が大きいと云ふことは、其生物を食つて生きてゐる他生物から云へば、實は其食物の增殖力が大きいと云ふことである。

英國海岸で、年々捕獲される鰊の數は、殆ど全世界の人口に匹敵する。此鰊は種々なる細魚や甲殼虫を食つて生きてゐる。試みに捕獲した鰊の腹を割いて見ると、大抵二十乃至七十匹の甲殼虫を含んでゐる。そこで今、すべての鰊が毎日平均一匹宛の甲殼虫を食つて生存するものとすれば、英國の漁夫が年々捕獲する鰊の食ひ盡くす甲殼虫の數は、實に全世界の人口の約百八十倍に相當する。

斯くの如く人間に食はれる鰊よりも、鰊に食はれる甲殼虫は遙かに急速力で死滅すべき筈であるが、鰊を食ふ者は人間ばかりではない。金鯖の如きは一口で約一千匹の鰊を呑む。ベイアード教授の計算する所に依れば、假りに一匹の金鯖が一日に食ふ鰊の數を十匹と見積つても、毎日少なくとも百億萬匹の鰊が金鯖の餌食となる。同教授はまた、北米海岸に於て年々金鯖以外の他の猛魚類の餌食となる鰊の數は少なくとも三萬兆匹に上るだらうと云つてゐる。

斯樣に一生物の『人口』の增加は、他生物に取つては食物の增

加であり、反對に、他生物の『人口』の增加は、一生物の食物の增加である。されば自然界全體に就て云へば、『人口』の增加と食物の增加との間には、マルサスの言ふ如き『種子の浪費、疾病及び夭死』——人間社會の貧困及び罪惡は之れに相當す——を外にしても、常に一定の平均が保たれてゐる譯で、マルサスの目に自然界に於ける悲慘の原因として映じた生殖の偉力は、寧ろ反對に、自然界に於ける一切の生命、一切の發育の條件でなければならぬのである。

尤も人間に在つては、少しく趣きが異つて來る。人間——殊に文明人——は、他生物を食ふが、他生物に食はれることは滅多にない。人間を食ふものは、今では黴菌ぐらゐのものであらう。卽ち人間社會に於ては、食はれる單位の增加を伴はずして食ふ單位のみが增加するのである。そこで若し食物範圍が固定不動であるとすれば、人間は結局大仕掛の飢餓窮乏を免れ得ないであらう。

人間以外の生物にして、人間の食物となるもの〻絕えず增殖しつ〻あることとは、以上の說明に依つて之を推知することが出來る。尤も人間が求むる生物は、人間以外の他生物中にも之を求むる者あれど、人間は知識と云ふ武器を有つてゐる。此武器を以て人間は其食物競爭者を排擊して、自己の食物たるべき生物を我手に獨占することが出來る。魚類の飼養に於て、産卵期に親魚を圍ひ以つて生れた卵が他の魚類の餌食となるを防ぐが如き農業や養蠶業に於て害虫驅除を行ふが如き、牧場に於て猛獸の襲來を防ぐ設備をなすが如き、みな之れである。

加之、人間は生産技術を改善して、自己の食物たるべき生物の食物を精選增量することも出來、また人爲淘汰に依つて、自己の要求通りに其生物の身體の組織、形狀及び大小等を變造することも出來る。要するに、知識の進步、生産技術の改善は、人間の食物範圍を殆んど無限に擴大し得る可能性を有してゐるのである。

(三)

以上は、人口の增加は食物の增加よりも大なりてふ、マルサス說の根柢に對するホンノ一批評に過ぎぬものである。然し此一批評に依つても、マルサス說が如何に薄弱なる論據の上に立脚してゐるかが分るであらう。

斯くの如き薄弱なるマルサス說が何故非常なる勢力を得るに至つたかと云ふに、それは此人口論の根柢その者に依るのでは

なく、此根柢の第一歸結たる貧困及び罪惡の是認に基くのである。前にも言ふ如く、マルサスに依れば、人口過剩を妨ぐる自然必然の結果として社會に貧困及び罪惡が生じて來る。それは歴史的のものではない、社會的のものではない。實に人口過多てふ永久の自然律に胚胎するものだと說くのである。之れは資本家、權力者に取つて頗る好都合な主張である。彼等は之れに依つて同胞の窮乏に對する責任を解除され、勇敢に自由に、而も潔白なる神々しき良心を以て、無產者を搾取してゆくことが出來る。又政治方面に於ては、社會主義者などの主張する分配問題を毫も考慮する必要がなくなる。誠に結構な學說である。

此意味から云ふと、マルサス說の根柢たり前提たる人口過增の法則などは實は何うでも宜しいのであつて、貧困是認の結論だけが無暗に有り難いものになる。

單に直接の資本家、權力者に於てのみでなく、マルサス當人の心中に於てさへ、或はさうであつたかも知れぬ。ブルヂオアの學者中には、カール・マルクスの經濟說は最初より階級鬪爭主義を辯護しようと云ふ動機に出でたもので、公平無私を尊ぶ科學の見地からすると寸毫の價値なきものだと主張する向もあるようだが、此筆法でゆくと、マルサスの人口論も亦マルサス當人の意識に於て、最初より貧困を辯護しようと云ふ動機で組織されたものとも言ひ得る。マルクスが終始一貫して熱烈なるプロレタリア主義の鬪將であつた如く、マルサスが徹頭徹尾私有制に基く資本主義經濟組織の辯護者であり、富の不平等なる分配の是認者であつたことは、此類推を裏書するに足る好都合な行跡である。

けれども世の中には、うまい事ばかりはない。敵を殺す武器は、我身を亡ぼす武器ともなり得る。貧困是認てふ金の茶釜を吐き出した人口論の前提は、延いて貧困防止を目的とする人口制限てふ惡魔を誘び寄せた。殊に新マルサス主義に至つては人口過增の靈魂を神に祭つて、專ら此人口制限――避姙――の惡魔に隨喜渴仰するのである。

人口制限は何故惡魔であるか曰く、無產者の『人口過多』は、資本の利潤を增大するが故に。無產者は勞働力を以てのみ有產者である。勞働力は商品である。商品の價格は、其供給に準じて上下する。勞働力の供給多ければ、其價格は下る。勞働力の價格が下れば、他の事情に變化なき限り、資本の利潤は其れだけ增大する。故に、資本の立場からすれば、無產者の人口は『過多』なるに限るのである。資本の蓄積大なるに從ひ、資本家

の富大なるに從ひ、換言すれば生産『過多』なるに從ひ、勞働者の人口は益々『過多』とならねばならず、事實またさうなるのである。

國内の人口が『過多』なるに從つて、多數の國民卽ち無産者の購買力が過少になる。そこで資本は海外に市場を漁らねばならぬ。其爲には戰爭も敢て辭せない。戰爭には兵力が必要である兵力は人口である。人口を制限されては困る。戰爭に勝つた。植民地が報いられた、新領土へはドシ／＼同胞を送り出さねばならぬ。同胞は人口である。人口を制限されては迷惑である。

然るに新マルサス主義は、避妊に依つて人口を制限すべしと說く。新マルサス主義は反自然的なり、反道德的なり、人類を滅亡に導くものなりとの聲が、ブルヂオア論客の一角に揚つたのも無理からぬ次第である。

（四）

右はブルヂオアの目に映じたる、社會改良策としての新マルサス主義である。然らばプロレタリアは之れを如何に見るか。人口の制限は勞働力の價格下落を防止するの意味に於て、プロレタリアは新マルサス主義を排斥するものではなからう。貧乏人の子澤山、餓鬼の多いのはお互ひに苦勞の種である。勞働力の價格は多少下落しても、子供の少ないに越したことはないとの意味に於て、プロレタリアは新マルサス主義を排斥するものではなからう。

だが、それだけである。新マルサス主義は、靜坐、念佛、體操、慈善などと略々同相場のものである。それ自體に於て、必ずしも不結構なものではないが、それを以て他の一層根本的なる社會改造策に代用せしめんとする時に愚弄の對象となる。

人口制限に依つて、勞働力の價格は如何に低落を阻止されようとも、資本對勞働の對立は爲に微動だもするものではない。資本主義は依然として堅牢である。避妊は搾取をヒニンするものではないのである。



日常生活に於ける迷信

文學博士　野上俊夫

一　宗教と迷信

總ての宗教は皆少からざる迷信を含んで居る。其の教祖の又は使徒たちの一生涯に關して頗る神怪不可思議なることを傳へ、或は教祖又は之れに關係した人々が、將來の出來事について常人には到底爲す能はざる豫言をなして居り、而してそれが着々と後の事實に當て嵌まると云ふやうな事を述べて居るものは極めて多い。釋迦が生るると直ぐに歩み出して『天上天下唯我獨尊』と云つたとか、聖母マリアが處女でありながら聖靈に感じて妊娠したとか、耶蘇が水の上を歩いたとか、少しの酒やパンを澤山にしたとか、死後天に昇つたとか、釋迦の死んだ時に、有らゆる鳥獸虫魚が周圍に集り來つて悲んだとかいふのは、即ち教祖たちの生涯を神秘なものと考へ、常人の到底企及すべからざるものとなした爲めに生じた考へであり、佛教に於いて地獄極樂を說き、耶蘇教に於いても同樣に天國と地獄とを說き、或は耶蘇教の舊約書などに種々の豫言を傳へたりして居るのは、いづれも皆時間的又は空間的に遠い所の出來事を豫言して居る形である。

此等の事柄は、いづれも古代民族の幼稚なる思想から生れた素朴なる考へを其のまゝ記錄したものであるが、或日此等の無智なる人々の頭腦に入り易いやうに說教者が法を說きたるもので、例へば幼兒に勸善懲惡の趣旨を吹き込むに御伽噺を以てするが如き形式によつたものであらうと思はるゝが、併し後世の其の宗教に關係ある學者たちが、其れ等の記載を悉く事實なりとして說明せんと試み、之れに尤もらしき理由を附して學問的の樣子を有たしめやうと試みるやうになると、其の結果は人文の進步を阻害し、天下の人心を毒することの大なるに至るのである。西洋の中世紀のスコラ哲學の或ものなどは其の最も著

しい實例であつて、其の辯證の精なることや論理の誤らざることは極めて面白いがそれ等の辯證や論理の出發點とする前提が何等の根據なき宗教上の獨斷であるが爲めに此くの如き精細なる辯證論理を用ひたる結果は益その誤りを重ぬるに至るのである。近世の學問が第一に此くの如き中世の誤れる學問に對する反抗から起つたものであることは、今更事新しく述べる必要はない。

二　日常生活に於ける迷信

併しながら此くの如き宗教上又は哲學上の大問題に關してで無く、日常生活の極めて些細なることに關しても人間は隨分多くの迷信を有して居る。種々の形に於いて緣喜を祝ふとか、吉日を選ぶとか、占ひに物を問ふとかいふことは、普通には無智の人々の社會にのみ行はれるものと考へられて居るが、實際よく調査して見ると、隨分案外と思はるゝ人々の中に極めて多く見出さるゝ。宇宙の眞理を研究することを以て自己の任務として居る學者たちは、最も迷信に遠かつて居りさうなものであるに係らず、實際は堂々たる學者にして案外に幼稚なる迷信を抱いて居り、旅行するのに吉日を選び、病氣の治療をするのに卜筮に問ふといふやうな例は決して少くは無い。尤も一方から考へれば學者といふものは決して天地萬有の理法を悉く研究するもので無く、各極めて狹い範圍に閉ぢ籠つて研究するのみであるから、其の範圍以外の事柄に對しては案外無智識であり、隨つて迷信の多いのも或は當然とも言へるであらう。

學者以外の人々に於いても迷信は案外多いのに驚かれる。昔は大將が軍を出すのに或は日の吉凶を卜ひ、或は星の運行を問ふのは普通であつた。其の中の或るものは策略の爲めに、士卒を皷舞せんとしてやつたものが無論多いであらうが、併し大將自ら其の事を信じてやつたものも決して少いことはあるまい。戰の勝敗の如きことは、其の結果に於いて極めて重要なるに係らず、其の結果の豫測は頗る困難である、自ら最善と信ずる所を盡しても尙ほ大敗に終ることもあり、自ら左程に努力せずとも僥倖に勝利を得ることが無しとも云はれない。隨つて軍人に種々の迷信が多く又著しく緣喜を祝ふのも寧ろ當然とも云はれる。

軍人と同じく屢生死の境に出入するものは水夫である。板子一枚の下は卽ち死であり、碧空一點の雲なき好天氣が何時狂瀾怒濤を捲き起して自己の生命を危うせぬとも分らぬ。隨つて水

夫も亦軍人に劣らず多くの迷信を有して居る。西洋の水夫が金曜日に出帆することを望み、日本の船夫が船中に三毛猫を飼ふが如きは皆縁喜を祝ふものであるが、其の他に鱶が船の後を追うて來るときは遠からずして其の船の乘員に死するものあるべしと信じ、鱶は其の死の近きを嗅いで船を追跡し來るのであると考ふる如き、或は風の音に種々の言葉を聽き、雲の形や蜃氣樓に實在の黃金世界を考へるなどは、洋の東西を問はず、水夫の間に廣く行はれて居る迷信である。

三　相場師山師の迷信

軍人や水夫ほど死生の巷に出入するといふ譯では無いが、併し金錢の事に關して非常な冒險を試み、時としては一獲千金の喜びを見るが、一歩を誤れば忽ち巨萬の負債に呻吟せねばならぬやうになる所の投機商や、或は實業家の中でも冒險的の性質を帶びたる鑛山師などは、又可なり多くの迷信を有つて居る。我が邦の神社で最も賽錢の上り高の多いと云はるゝ京都伏見の稻荷神社や成田の不動尊は、主として此等投機商の爲に繁昌して居るのである。何等相場に關係のなき一學生が偶然相場の高低を云ひ中てた爲めに、強ひて之れを乞うて自己の娘の婿にした株式仲買人があり、米價の上下を何か『天文心理』とでもいふやうなもので豫知する術は無いものかと心理學實驗室に訪ねて來る相場師あり、或は幼稚園の兒童にして稍文字を解するといふが爲めに『神童』であるといふ噂を立てられた兒どもがあると、平均一日に一通づゝ相場師から問合せの手紙の來るといふが如きは、皆自分が實際に見聞した所の事實である。

相場師や鑛山師ほどで無く、半ば遊戯的なるものに於いても、其の勝敗を非常に重要視するときは、亦これに種々の迷信が附加して來る。ボートレース、ベースボール、テニス其他の競技に於いて、一校の名譽を背負うて立つ選手連が、如何に些細なることに注意し縁喜を祝ふかは人のよく知る所である。此等の選手は皆種々の護符を身に着け、神佛の加護を祈り、競技の日には特に神佛に供物をし、勝利を祈るといふのは普通である。

碁、將棊又は骨牌遊びの如きものに於いても此の事は同樣である。西洋のカルタ遊びに行はれて居る此の種の迷信を一二擧げて見ると、(一)テーブル掛けの無い卓子でカルタをやるのは縁喜が惡い。(二)遊びの時に金を貸す人は負け、借る人は勝つ。(三)カルタを卓子から下に落すのは縁喜が惡い。(四)歌を謠ひながら遊べば自分の組が負ける。(五)遊びをしながら腹を立て

ると負ける。などと云ふのである。全然理窟が無いといふので無く、見方によつては可なり重大な眞理を含んで居るとも云へるが、併し何等の理由なしに此くの如きことを信ずるは矢張り一種の迷信なるを免れない。

四　結婚に關する迷信

結婚は人生の極めて重要なる出來事であり、而かも見方によつては一種の投機の如き性質を有して居るので、之れに關する迷信が極めて多いのも寧ろ當然である。結婚に關する風習又は儀式といふやうなものには隨分無意義な迷信的なものが多い。此等は其の昔に於いては實際上の必要なる意義を有して居たものもあらうが、それが今日に於いては全然一種の無意味なる習慣となつて居るに係らず、矢張り此等の無意義な習慣に隨はねばならぬものと考へらるゝ所に迷信的な強壓力を有すると云へやう。勿論すべての事柄に關する風習とか禮儀とかいふものは皆此くの如き性質を有するものであるかも知れないが、結婚に於いて一番此の事が著しいやうに思はれる。

例へば結婚の指輪の如き、其の起源は夫が妻を買收した代價として妻の父に贈つた金錢の意味であるといふ人もあり、又は之れを以て妻が夫に束縛せられ夫に從順なるべき象徴なりと考へるものもあるが、兎に角今日に於いては、たゞ何の意味も無く、夫婦が或は約婚の時に、或は婚禮の時に、交換するか或は夫が妻に與へるものとされて居る。而してそれを左手又は右手の第四指にはめるといふことも、第四指には心臓から特別な血管が來て居ると云ふやうな迷信から來て居る。

結婚に吉日を選ぶことは東洋も西洋も變りは無い。西洋では羅馬以來五月に結婚することは凶なりとして居る。但英國では五月中の或る日は吉なりとして居る。或は羅馬にては二月十一日、十一月二日、十二月一日の三日を結婚には凶なりとし、或る本には次ぎの諸日を以て最も吉なりとして居る。一月は二、四、十一、十九、二十一。二月は一、三、十、十九、二十一。三月は三、五、十二、二十、二十三。四月は二、四、十二、二十、二十二。五月は二、四、十二、二十、二十三。六月は一、三、十一、十九、二十一。七月は一、三、十二、十九、二十一、三十一。八月は二、十一、十八、二十、三十。九月は一、九、十六、十八、二十八。十月は一、八、十五、十七、二十七、二十九。十一月は五、十一、十三、二十二、二十五。十二月は一、八、十、十九、二十三、二十九の諸日である。

結婚には『合性』といふ事が大に重んぜらるゝ、これにも種々な意味があるやうであるが、例へば火性と水性とは相合はぬとか、戌年と申年とは和合せぬとか、一白と九紫とがどうとかいふ事である。支那などは此の事が随分やかましく考へられ、結婚すべき男女の生れたる年月日及び時間までも精密に調べらるるといふことである。

五　吉日と凶日

日に吉凶あるとは決して結婚の場合のみに限らぬ。其の他のすべての事にやかましく日の吉凶を論ずる人が少くは無い。日本でも佛滅の日とか友引の日とか云ふが、西洋でも此の種の考へは極めて多種ある。ウイリアム、ロード、バーレーといふ人が其の子に残した書面の中に、一年に三度の月曜日を避けよと忠告して居る。第一は四月の第一月曜日、この日はカインが生れ其の兄アベルの殺された日である。第二は八月の第二月曜日で、ソドムとゴモラとの滅された日である。第三は十二月の最終月曜日で、救世主キリストを賣りたるユダの生れたる日である。云々。此れ等も見方によつては頗る滑稽で、假りに此等の出來事の起つた日を凶なりとしてもそれを何故に曜で數へて何々の月曜日としたのであるか分らぬ。四月の何日、八月の何日、十二月の何日といふやうに其月の第何日目にしてもよささうである。

第十六世紀の中頃の書物に天文學者等の意見に随つて凶日が記されて居る。一月一、二、四、五、十、十五、十七、二十九は大凶。二月二十六、二十七、二十八は凶、八、十、十七は大凶。三月十六、十七、二十は大凶。四月七、八、十、二十は凶、十六、二十一は大凶。五月三、六は凶、七、十五、二十は大凶。六月十、二十二は凶、四、八は大凶(下略)といふが如きである。

金曜を忌むことは前に述べたが、其の起源は云ふ迄も無く基督の磔刑であらう。殊に水夫は此の日を忌むが、就中小船の水夫に甚だしく、大なる蒸汽船の水夫には左程にも感じなくなつて行きつゝあることは當然である。併しながら金曜を忌む風習は今日尚ほ比較的下層の人々には深く滲み込んで居り、今日に於いても尚ほ此の日に轉宅することを避け、又は下婢などが此の日から傭はれて來ることを忌むやうな風習は案外廣く殘つて居る。

日に起したものでは『方角』がある。日本でも轉居や旅行などに當て、或る日に或る方角に行くは凶なりとして之れを止

め、或は強ひて其の方角に行く必要ある時は『方たがへ』と稱して一旦異つた方角に行つて後に目的の方に行くといふやうな事が行はれた事は、古の本に度々出て居る。或は建築物などに於ては或る方角は之れを凶なりとして其の方の隅の所を少し缺いて置き、或は其の方角に守護神を安置するとかいふことは、今日でも古實を重んずる家の建て方に多く行はれて居る。比叡山が京都御所の東北に當る所から、王城鎭護の守護神を祭られ、京都御所の東北隅の壁を少しく缺いて、其の壁の上に幣束を持ちたる猿を載せてあるなどは卽ち此の考へから來て居るのであらう。

此の事は西洋に於いても無論同樣である。ロンドンの女などで、旅行する時には必ず先づ『方角』を考へてからでなければしないといふものは極めて多い。

之れに關したことで數の迷信がある。日本で四の發音を忌むことは落語などによく出るが、西洋では十三の日を忌むことは周知の事實である。起りは勿論キリストの最後の晩餐からであらうが、今日まで尙ほそれを强く恐れるのは頗る滑稽である。或は此の迷信を學ぶことを以て文明に近づくかに考へて居る日本人さへもあるといふことは全く噴飯に値する。

六　天體に關する迷信

天體に起る種々の現象は又多くの迷信の種となつて居る。日蝕月蝕が種々の神意ある如くに解せられ、或は其の時の當路者の政治の恐しきに對する神の怒りなりと考へ、或は人間の病を避けしめんが爲めに日月が病氣をして下さるのであると考へたりするのは最も普通である。彼のコロンブスが豫め日蝕のあることを知り、之れを利用して、土人を懾伏せしめたことは有名なる話であるが、日月の蝕を恐るゝものは決して無智なる野蠻人のみでは無く、文明人の中にも亦少くは無い。彼の碩學ベーコンは日月の蝕を恐れて氣絕したと傳へられて居る。

彗星も亦天體中最も異樣なものとして種々の迷信を生じて居る。殊に西洋に於いては彗星の現はるゝ時にキリストが再來し、世界の最後の裁斷が來ると信ずる人の多い爲めに、稍大きな彗星が現はるゝ度毎に此の種の迷信が廣く行はれて人心に大なる不安を起さしめた事が多い。例へば一七一二年十月十四日の木曜に午前五時五分に彗星が現はれ、翌日の金曜日に世界は火によつて滅さるべしといふ事を時の學者ホイストンといふ人が云ひ出したので、人心に大動搖を生じ株式は下落し、銀行は

取り附けにあひ、ロンドン人は最も安全なるは水上なりと考へてテームス河に船を浮べたものが多く、正午頃其の星の現はるるや、多くの耶蘇教の牧師は船に乘つてテームス河の對岸のカンタベリー大僧正の宮殿に行き、此の禍を避けんが爲めには如何なる祈禱をすべきかを問うたといふ事である。一九一〇年に有名なるハーレー彗星があらはれた時にも、此の世界の終りといふやうな考へは或る人々の頭の中に浮んだらしい。又それを信じない人でも心中潛かに心配したものは少からずあつた事であらう。

七　動物に關する迷信

天體に次いで諸種の動物も亦迷信の原因となつて居る者が多い。『烏啼き』が惡いといふことは日本でも非常に氣にかける人が多い。西洋では梟を嫌ひ、此の鳥の啼く時は何か災難が近々に起るものと考へられて居る。昔ローマのカピトル宮殿に一羽の梟が迷ひ込んだ爲めに、ローマ全市が神に犠牲を捧げて淨めの式を行つたと傳へられて居る。或はあるローマ皇帝の死する少し前に帝の室の屋根に梟がとまつて居たといふやうな話は少からずある。

『犬の遠吠え』も日本に於いても氣味の惡いものとされて居るが西洋に於いても同樣に考へられて居る。例へば犬は非常に鋭い嗅覺を有つて居るから病氣又は死の近づくを嗅ぐのであると考へられ、犬の吠へた後には間も無く人が病氣にかゝり又は死ぬると考へて居るものが少くない。兎に角、夜中犬の遠吠へを聞くのは決して心持ちのよいもので無く又犬が人間の及ばぬ鋭い嗅覺を有することも事實であるから、彼此相結合して此くの如き迷信を生ずるのは當然とも考へられる、馬も亦犬と同樣に考へられる場合も少くは無い。

動物の中には、上に述べた梟や犬とは反對に、良き事の前兆として考へられて居るものもある。杜鵑の如きは其の一例である。此の鳥は春を告ぐる鳥と考へられ、春を持つて來ると思はれて居る。英國の北部では、春の初に始めて杜鵑の鳴くのを聞くと、ポケツトより錢を出して其の上に唾を吐き、之れによつて凶を卜ふ迷信がある。其の時に偶然懷中に錢を持つて居ないと縁喜が惡いと考へられて居る。

八　身體に關する迷信

自己の身體に起る種々の出來事も亦迷信の原因たるものが多

い。我邦に於いても『耳鳴り』は或は良い事を聞く前兆なりとせられ、或は凶事の前兆なりとせられる。西洋では耳の鳴ることを『我が耳の中に火が燃えて居る』といふとがあり、其の時には誰か自分の噂をして居ると考へる。勿論今日はたゞ戯れに云ふに過ぎないが、併し何かそこらに深い關係があると心中竊かに考へて居る人は決して少くは無い。

『くしやみ』は日本に於いては人が自分の噂をして居る時に出ると考へられ、而かも其の數の一つの時は褒められて居るとか、二つの時には謗られて居るとかいふやうにいふが、西洋に於いては多く凶兆なりとせられ、特に病氣の兒どもがくしやみをすると危險なりと考へられる。印度などにも亦之れと似た事があるとのことである。

人が誤つて地上に倒れた時には頗る緣喜の悪い事を考へらるるのは、常識から考へても當然のやうに思はれる。ジユーリアス、シーザーが始めてアフリカに上陸した時に誤つて俯向に倒れたので、彼れの軍勢は大に之れを凶兆なりと考へんとする恐れがあつた。然るにシーザーは早速の氣轉で『我れ斯くの如くアフリカを捕へ獲たり』と叫んだので、軍勢は大に喜んだといふ。第十一世紀にウイリアム一世が英國に上陸した時も同じやうな事をしたと傳へられて居る。

畫像や寫眞の落ちたのも亦自身の倒れたのと同様に凶なりとせられる。第十七世紀の初に英國に於いて大勢力を振つた大僧正ロードは、自己の畫像が床上に落ちたるを見て後次第に勢力を失ひ、遂には斬首の刑に處せられた。彼れ自身も亦その像の落ちたるを見てより後は、甚しく自己の運命の迫れるを感じて常に不安であつたと傳へられて居る。

九　迷信の勢力

人間は理性の動物なりと考へられて居る。實際に於いて理性は人類が他の動物と異なる所以の最も主要なる點であつて、これあるが爲めに人間社會には他の動物に見ることを得ざるほど知識が進歩し、學問が發達して居るのである。然るに一方に於いて人間の知識や學問が日に月に駸々として進みつゝあるに係らず、他方に於いては人間は古來の多くの迷信から脫することは出來ない。迷信は決してたゞ人間の中の無知識なる階級のものにのみ限られ居るに非ずして、知識の點に於いては充分に發達して居る學者、軍人、政治家などの知識階級の人の間に於いても決して少くはない。

或は同一の人にして或る時は極めて理知的であり迷信を排する態度に出でるが、或る時には全く盲目的に何物かの權威に服從し、笑ふべき迷信を有して怪まざるものもある。神佛の存在を否定し來世の信仰を一笑に附する學者が、苦しい時に神頼みをしたり、念佛を唱へたり、或は自己の專門の學問に就いては極めて鋭利なる論理を以て進んで行くに係らず、自己の信ずる宗教の經典に記されて居る幼稚なる神話を文字通りに信仰したりするものも少からずある。或は少壯血氣の時には極めて理性的であるが、老境に入るに隨ひ神秘的の考へを起し、曩に一顧をもしなかつた宗教に入るものも少くない。

或は一國一民族について考へて見ても、或る時代に於いては頗る現知的で科學的精神の著しく振興することもあり、次ぎの時代には反對に神秘的になり迷信的になつて、其の思想に何等の生氣を有せざるやうになるものもある。

此くの如く本來理性的なる、又は理性的なるべき人間にして、時として此くの如く迷信的になり、或は時を異にして理性的と迷信的との性質の交代し來るといふことは、人間の精神に於ける悲しむべき矛盾として感ぜられ、又頗る不可能なる事として疑惑の焦點となつてゐる。或る人に於いては此の矛盾若しくは不可解に對して激烈なる煩悶を惹起し、或は其の結果死の解決を求めるといふものも決して尠くは無い。

一〇　人間精神の進化と迷信

併しながら翻つて考へれば、人性に此くの如き矛盾のあるのは、人間の精神の發達から考ふれば決して不可能にも疑問にもあらずして寧ろ極めて當然なることを知るべきである。元來人間の精神は決して最初から今日の文明人の有するが如き高等なる程度に發達して居たもので無い。初は今日見る所の野蠻人の如く幼稚な程度の精神であり、更にそれ以前には今日の野人猪か猿猴抔のものであり、更にその以前には鳥類、魚類、昆虫類若しくは蠕虫類、海綿類の如きもの丶程度であり、更に溯れば單細胞生物の如き低級なるものであつたに相違無い。卽ち其の初には極めて初歩的なる數種の本能、例へば食慾、恐怖、性慾の如きもの丶み有して居り、纔かに其の個性乃至種族の生存を保つに過ぎなかつたものが、悠久なる年月の間に、種々の複雜なる環境に適應する必要上、次第に身體の上にも進化を來すと共に、精神の上にも亦進化を來し、漸次に高等な種々の本能を生ずるやうになつて來たのであらう。例へば憤怒、群居性、蓄

育本能、摸倣、好奇心といふ如き本能が生じ、多くの同類のものと共棲し、或は外敵を防ぎ、或は食物を捕獲し、或は自己の種族の生殖を安全に營む必要上、次第に進歩せる精神作用が發生し來り、最後には理性、知識といふやうなものが生じて、益急激なる進歩を促すに至り、或は道德、禮儀といふやうなものが起つて、人間の共同生活を安全に保護し、進んでは人間の生活を益愉快に便利にするやうになつたものであらう。

即ち理性や知識は、道德や禮儀などと共に、人間の有する最も尊いものであり、人間と他の動物とを區別するに最も主として役立つものではあるが、併し一方から云へば、他の劣等なる諸本能に比して其の發生の日尚ほ極めて淺いのであるから、其の人間の精神の上に有する根柢が極めて淺く、人の行動を支配する力は極めて弱いことは、是れ亦止むを得ざることである。

彼の道德の進み禮儀の整へることを以て他に比類無しと誇稱せる白人種が、一旦戰爭となれば忽ちにして恐るべき野獸性を表はし、破壞、虐殺、强盜、强姦、爲さゞる所なきの醜態を演出したるは、即ち根柢の極めて淺い表面的の道德禮儀が、危急の場合に遭うて忽ち其の力を失ひ、人心の内部の力强く潛在せる野獸的の本能が赤裸々に表はれ出でたるに過ぎない。

理知と迷信とについても亦之れと同樣なる事が云ひ得らるる。平生無事の場合には、我々は冷靜なる理知の力に訴へ、知識によつて萬事を解決せんとするが、何分にも理性や知識は其の發生以來日は極めて淺く、力も亦頗る弱い。加ふるに宇宙の事物は無數無限にして、之を窮むるほど益不可解なる部分の多きことを歎ずるに至らしめ、彼の大哲ニユートンをして「我れはこれ眞理の海の濱邊に二三の貝殼を拾へるに過ぎず」との歎を發せしむるに至るものである。隨つて或る特別の場合に臨める時、又は急に人生若しくは宇宙に關する全體觀を樹立せんとの必要に迫られたる如き場合には、平生の如く己れの知れる所を知らざる所とを明かに區別して安んじて居ることが出來なくなり、己れの知らざる所に對しても何等かの解決の如きものを與へんと焦慮するの結果、從來笑つて顧みざりし迷信に陷り、前の理性的態度と正反對の態度に出づるは、寧ろ當然あり得べきことに屬する。或は少壯にして精神の力旺盛なる時に極めて現性的なりしものが老境に入るに隨つて迷信的になるのも亦此の如く考へ來れば少しも怪むを須ひない。

二　所謂宗教的教育の是非

今日の人々があまりに理性的になり、知識を重んずるに過ぎて、信仰の力を輕視し、確乎たる信念を有せざるが爲めに、徒らに煩瑣なる學問を有しつゝ處世實行の力に乏しく、知力のみ發達して強大なる意志を有せざる薄志弱行の徒の多きことを歎ずる聲が、此の頃諸方に起つて居る。此等の人々は之れを以て今日の學校教育の智育に偏したるの罪となし、之れを補ふには宗教的信念を以てせざるべからずとして、或は靑年少年に佛教乃至基督教的の教育を施さんとし、或は幼時より日曜學校のやうな所に於いて宗教的情操を養はんと主張し、殊に本年秋我邦に於いて世界日曜學校大會の開かるゝを機として、大に兒童の宗教々育を盛にせんと主張するものが此頃漸く多くなりつゝある。

此くの如きは其の大體の趣旨に於いては極めて結構な事であり、今日の知識過重の教育は勿論其の弊を少からしむるに努むべきではあるが、併し此等の宗教教育、信念教育の主張者の或るものゝやうに、在來から存在して居る或る宗教若しくは或る一宗派の教義をそのまゝに兒童に授け、或はその內に含まれて居る極めて幼稚なる迷信までをも兒童の心に植え附けんとするが如きは、我等人類が悠久なる年月の間に開發し來つた理性の力を沒却し、人間の文明を逆進せしむるものであつて、斷じて排斥せざるべからざるは云ふ迄も無い。

人間の精神が不斷の進化をなしつゝある以上、我々の心中に不斷の疑問が生じ矛盾が發見せられて、その爲めに我々が斷へず精神的に苦むといふことは、人間の爲めに必要であり望ましきことである。勿論或る程度に於いて一定の信念を有し、萬事これに隨つて行動して從はざることは極めて望ましきことではあるが無理に早く信念を得んとして其の如何なる信念なるかを顧みることなく、幼稚にして安價なる信念、即ち迷信を求め得て得々たる如きは、知識の向上を求めて止まざる人々の立場から見れば寧ろ無智にして卑怯なる態度として排斥し去らねばならぬ。

一二　大本教と在來の諸宗教

近來我が邦に大本教なるものが起つて、相當に大なる勢力を得、多くの人を動かして居るのは、著しい現象である。然るに其の說く所が極めて幼稚であり、荒唐無稽であるとして、之れを排し撲滅せんとするの企てが一方に起つて居るやに聞いて居る、自分は大本教については何等の知識をも有するもので無い

が、若し實際其の說く所に荒唐無稽なる所あり、又人心を惑はすものがあらば、之れを擊破し撲滅すべきは云ふ迄も無い。併し一方から見れば大本教が兎に角多數の人を惹き附ける力を有することの事實である以上、それに何物か現代の人心（よしそれは幼稚なる人に限るとしても）に觸るゝ所のものを有することを認めねばなるまい。勿論現代人の心に觸れても其れが惡しきものであれば之れを撲滅すべきであるが、幾分でも其の中に善良なる分子を認めたならば、之れを保存するのみならず、益之れを助けて現代人心を救濟するの方便とすべきであらう。

更に翻つて考へれば、現在善良なる宗教として我が邦に存在して居る多くの宗教の中にも、亦多くの荒唐無稽なる迷信的分子を含有して居り、人心を惑はすこと甚しきものも決して絕無では無い。勿論その宗教全體としては善良であつても、其の一部分たりとも此くの如き有害なる分子が含有されて居たらば、須らく大本教の荒唐なる分子と共に此の有害なる分子をも除去すべきは云ふ迄も無い。

此の點から決して我々は大本教と在來の宗教とを異つた方法で取扱つてはならない。大本教の不合理なる所を排斥するならば同時に在來の宗教の不合理なる迷信的部分を排斥せねばならぬ。在來の宗教を出來るだけ合理的に解釋し、或は其の善良なる部分を保存するならば、大本教をも出來るだけ合理的に解釋し、或はその善良なる部分を保存せねばならぬ。

附記。迷信に關しては予の舊著『叙述と迷信』（大正元年、弘道館發行）がある。或は參照せられたならば、極めて匆卒の間に稿を脫したる本論文の不完全なる點を幾分か補ひ得るかも知れぬ。



銀座は汚ない處

＝近視、遠視、斜視、亂視（二）＝

元祖日本一のユウモリスト　貝塚澁六

一　尾張町角の四大店舗

強度の電燈が雨後の柳に艶々しく輝いて、其の間に『一萬圓』の正札のついたダイヤ入の金の指輪が、其ダイヤの細かい多數の角面から、やさしい冷たい五色の光をチラチラと放射してゐるショウヰンドウの前に立つたりすると夜の銀座の美しさが身に浸みこむようにも感じられるだらうが、晝の銀座は實に汚ない處だ。

或日の午後、私は銀座四丁目尾張町角、電車交叉點の一隅に立つてゐた。イヤ、一隅から一隅へと位置を變へて、つまり其の四隅に立つて、あそこの光景を見物した。

私は正味廿五年ばかり東京に住んで來たが、あの四辻を見物した事は其の時が初めてだつた。あの四辻を通行した事は何百回か何十回か知れないが、わざわざ見物する積りで見物した覺えは無かつた。尤も、初めて東京に來た時、一度だけは其の積りで、十七歳の田舍書生が口をポカンとあけて見物したのだらうとは思ふが、其の時の覺えは少しもない。

大庭柯公君が先ごろ『讀賣』に『貝杓子』といふ隨筆を書いた中に、あの四辻の四軒の家を數へあげて、一軒だけはどうしても思ひ出されないで、分らないまゝ書いてゐた。大抵の人が先づそんなものだ。そこで我輩は今直接の觀察を以て、あの四辻に關する正確な報道をする積りである。

銀座通りと云へば、普通に新橋から京橋までの、幅十二間ばかり、長さ十町ばかりの大通りを意味し、品川、上野、淺草間の幹線電車がそこを走つてゐる事は申すまでもない。そして其

の眞中邊を横切る道路が、一方は歌舞伎座前を經て築地兩國行、一方は日比谷公園脇を經て新宿行及び青山行の電車を走らせてゐる事も、同じく申すまでもない。其の重要な電車の二線の交叉點が卽ち右の四辻である事も、亦た同じく申すまでもない。申すまでもない事を一應申して置くのが、文章の段取上、止むを得ない事である事は、是れ亦た同じく申すまでもない事である。

扨この四辻に、有名な服部時計店と有名な山崎洋服店と、有名なカフエ、ライオンと、有名な（然し實は誰も滅多に知らない、大庭柯公君さへ記憶されてゐない）第八十四銀行京橋支店とが陣取つてゐる。勿論、出入口はいづれも折り曲りの角に開かれて、京橋日比谷側の服部と、新橋築地側のライオンとが向ひあひ、京橋新橋側の山崎と新橋日比谷側の銀行とが向ひあつてゐる。斯う云ふと、此の四個の大店舖が如何にも巍々堂々とした、光輝燦然たる大建築ででもありそうに思はれるが、實はさしたる者でもない。

銀行は煤ぶつた白煉瓦の地味な三階作りで、堅實らしくは見えるが景氣の好い所は少しもない。大庭君の記憶に留まらなかつたのも無理はない。服部は比較的に低い二階作りで、三階以上が時計塔になつてゐる。落ちつきのある薄い鼠色の壁と、二階の長い折れ曲つたバルコニーとが、可なりの重々しさを見る人に感じさせるが、さりとて財界に於ける服部金太郎君の威力を表象するに足るほどの者ではない。時計塔はさすがに遠近の目標になつてゐるが、之としても敢てオッタマゲルほどの莊嚴さを備へてゐるわけではない。

若し夫れ山崎に至つては、汚れくさつた白色の石造（？）家屋で、安つぽくて見すぼらしいこと此上ない。出入口の上にある『山崎商店』の黑い題字も品のない厭な書體だし、横側の窓上に書かれた『高等洋服裁縫』の字面も氣障だし、三階の前面を無理に飾つた四角塔も、何んだか山こしらしい感じが先に立つ。出入口の兩側を全部大硝子のショウヰンドウにして『高等』洋服地を陳列してゐるのも何んだか物寂しくて一向に引き立たない。誰か此店を小憎らしく思つた人が石でも投げつけたものか、其の大硝子の一枚の中央に面白い形のヒビが出來てゐる。先づ小さな圓が一つ。其の外部に稍や大きな圓が一つ。そして兩圓の共同中心から四筋の線が大圓の周邊まで達してゐる。其中の一線だけは大圓周の所で彎曲して遠く上方に走つてゐる。どこかの都市の鐵道線路の略圖と見立てたいような氣がし

そして其ヒビを防ぐ爲に三四個處ばかり丸い厚紙の膏藥を張つてあるのが、此の大店舗に少なからず貧相の氣分を與へてゐるが、それでもさすがに圓心の處だけには西洋婦人の小い畫像を張つて、洋服屋らしい意匠を見せてゐる。

　最後にライオンは商賣柄として大ぶん派手に拵へてある。壁や柱の鮮かな薄桃色が先づ明るい感じを與へ、Café Lion の大きな金文字が其の間に輝き、出入口の二階に楓、松、竹、檜など大きな植木が緑を交へ、其の上にあるアーチ形の飾り屋根の廂の下に、金塗りのライオンが二疋向ひあつて跳つてゐるなど總て陽氣な見かけである。然し之とても、東洋第一の大都會の中央を飾る建物としては、殊にそれが當代新人の耽溺を恣いまゝにする御場所柄であるとしては、餘りに貧弱な氣持がする。但し『東洋一の大都會』としては、殊に『當代新人の耽溺場』としては、それが丁度相應なのだと云ふ人があれば、成程と云ふより外はない。

二　赤い丸い顔と青い四角な顔

　然し此の四つの店舗が四隅に陣取つて、二ツづゝ對角線に向きあつて居るだけなら、別段見苦しくて堪らぬといふ程でもないが、諸君マア私と一緒に目を放つて此の四辻の空中を御覽なさい。

　電話線がある、電燈線がある、電信線がある、電車の架線がある。殊に電車の架空線が四本と四本と交叉して、其の十六個の交叉點に(専門語を知らないから說明がしにくいが)摩擦を防ぐ爲だらう變な形の副金がしてあつて、夥ただしく不恰好なものになつてゐる。電線の多數に張られた光景に對して、蜘蛛の巣のやうだといふ形容語を昔しからよく聞いてゐるが、どうしてどうしてそんな面影もない。あの細い電話線だけなら或は多少そんな感じも出るか知らんが、こんなに大小不定の、變な形の、不恰好な奴が高低縱橫に張り渡されて、蜘蛛の巣の美くしさなど思ひも寄らない。

　それに、電線があれば從つて電柱がある。其の電柱が又、大小不同、高低不同で、木の柱がある、金の柱がある、赤塗の柱がある、廣告だらけの柱がある。其の廣告が又、硝子行燈をクツつけたのや、ブリキ板をブラさげたのがあり、柱を其のまゝ使つたのでは、ペンキ塗の黒文字や、青文字や、赤文字が俗惡を極めてゐる。ちよつと見た所だけでも、中華第一樓、安藤七寶店、耳鼻咽喉科、齒科醫院、靴用クリーム、ヘラリヤ、田屋

の羽根湳園、サンエス萬年筆、金屏風問屋金光堂など數へきれない。

マア何んといふ汚ならしい、ゴタゴタした、不愉快な、空間の一部だらう。街路樹の柳が二列に並んで立つてゐると云つたら、ちよつと奇麗そうに聞えるか知らんが、實は埃りだらけの生氣のない奴が、此の汚ないゴタゴタの間に、迷惑そうに首をうなだれて居るに過ぎない。

それから又、鋪石道だとか、ペーヴメントとか云つたら、見ない人には如何にも立派な道路らしく想像されるだらうが、それが又デコボコだらけ泥だらけで、お話にならない。ライオンあたりから好い心持になつて出て來る耽溺の詩人なんどが歌つてゐるようなものでは決してない。殊に車道の電車乘場の所など、或はコールタールでやつて見たり、或は木を敷いて見たりしてゐるが、何んしろ只だ汚ないばかりである。況んや今日は電車線路の修繕をやつてゐる。レールの間の敷石が掘りだされて人道車道のあちこちに積みかさねてある。樣々な風體をした工夫達が續々とやつて來て電車のあいまあいまに何かゴタゴタとやつてゐる。それはそれはの混雜の景氣である。

所で、此の混雜を少しばかり整頓する爲に交通巡査が四五人掛つてゐる。巡査君はまだ白服だ。其の白服の左の肩に綠縞の肩章をつけて、短劍を帶びてゐる。交通巡査だけ實用になりそうもない短かい劍を帶びさせたのを見ると、少し變な氣がする。警察官には威嚴が必要である。場合に依つては人民を斬つて棄つべき役柄である。故に平生長劍を帶びさせて置くのである。但し交通巡査は單に通行人の世話役である。之には威嚴の必要がない。只だ忠實で親切でありさへすればいゝ。マアそんなわけだらうと察せられるが、然らば人民を斬るべき長劍巡査が本統の警察官で、忠實親切な交通巡査は本統の警察官でないのか。聞く所に依れば、近々總ての巡査の長劍を廢して短劍若しくは棍棒に替へるといふ警視總監のお考へもあるといふ事だが、して見ると、威嚴と斬棄との役柄は本統の警察官でなく、忠實と親切との役柄が本統の警察官であるらしくも考へられる。若し果して然らば、今の交通巡査君は一歩早く先に進んだ理想の警察官だといふ事になる。我々人民としてはどうやら其の方が有りがたそうに思はれる。

イヤ、飛んだ横道に話がそれた。扨一人の交通巡査君は、電車線路の交叉點の、山崎側の一隅に立つてゐる。そこには臺のついた鐵の棒が一本立てゝある。其の棒の頭には前後右左に四

つの顔がある。前後は丸い顔で、左右な四角な顔である。丸い顔は赤色で、四角な顔は青色である。そして赤丸顔には『止』（下にStop）と書いてあり、青角顔には『進』（下にGo）と書いてある。そして交通巡査君が折々棒のネジに手をかけて其の顔の向きを替へてゐる。青角の『進』が新橋と京橋とに向いてゐれば、赤丸の『止』が日比谷と築地とに向いてゐる。電車は總て其の命令に從つて進んだり止まつたりしてゐる。猶ほ其そばに信號手が一人居て、赤い旗と青い旗を代り代りに動かしてゐる。外の交通巡査君はあちこちの隅に立つて通行の人や車を制したり、進ませたりしてゐる。中々手數のかかる、世話の焼ける事だが、お陰でどうやら少し混雜がおさまつてゐる。

斯ういふ風にして、電車が續々續々として四方から來て四方に行く。然し電車の外にも色々な車がある。先づ貴女紳士の自働車がある。女車掌で有名な乘合自働車がある。荷物用の大自働車もある。無數の自轉車がある。樣々の荷車がある。箱車がある。稀には人力車もある。それらが皆な交通巡査の指揮に伴つて進んだり止まつたりしながら、四方から來て四方に行くそして其の間にゾロゾロゾロゾロと行つたり來たりする徒歩の通行人がある。何んといふ目まぐるしい、せわしない、ゴタゴタした、そして汚ない光景だらう。

三　人込の中には個人性がない

然し此の混雜の中をジット眺めてゐると、中々面白い場面がある。

大體をぼんやり打眺めた所では、只ゴタゴタした汚ない物の中に、ザワザワした無數の車と人との通行があるに過ぎない。折々けたゝましい自働車の笛や、新聞賣子の呼聲などに驚かされるが、それも少し慣れると何んでもなくなる。電柱のそばか何かの安全な處に立つて、夢のような心地で一つびとつの人や車を見てゐると、いつまでもいつまでも飽きないほどの面白味が湧いて來る。

例へば少し腰の曲つた白髮のお婆さんが、脊の高いキリキリシャンとした十四五の娘に連れられて、今しも電車道を横ぎりかけてゐた所に、『止れ』の丸顔が忽ち『進め』の角顏に替る。交通さんが『ソレあぶない！』とお婆さんの肩に手をかけて後戻りをさせる、娘はモウいつのまにか小走りをして向ふ側に越してゐる。お婆さんがうるんだ目をキョロキョロさせて娘をさがすと、娘は向ふ側でおなかをかゝえて笑つてゐる。暫くたつと又

青面が赤面に替ると、娘は元の處に走つて行つて今度はお婆さんの手を引いて來る。やつとの事で四筋の鐵橋を横に渡りおほせると、お婆さんは命びろひをしたような顔付で、ヤレヤレと腰を延ばす。『南無阿彌陀佛』を唱へたかどうか知らないが、イヤモウ恐ろしい娑婆世界である。

大きな岡持を首で提げた小僧が、……イヤ『首で提げた』では分るまい。手で提げるなら固より論はない。子供の時から兩手を無くした人が足でバケツを提げるといふ話も新聞で讀んだ事がある。然し『首で提げる』は如何にも變だ。然しそれが事實だから仕方がない。其の小僧は自轉車に跨がつて、兩足をペタルに乘せ、兩手をハンドルに掛けてゐる。手にも足にも物を提げる餘裕がない。尤もハンドルを片手で操縱すれば、片手だけは明くわけだが、其の岡持たるや到底片手で提げられるような小さな代物でない。そこで彼は其の大きな岡持（但し空になつた奴）を、首で提げる事を發明したのである。換言すれば、彼は其の岡持の柄の中に頭を突きこんで、其の横木を喉に當てがひ、脊中に岡持の本體をしよつたのである。無冠の太夫敦盛なんどが幌をしよつたり、泥棒なんどが大風呂敷をしよつたりするのなら不思議はないが、大岡持をしよつた自轉車乘りの小僧はちよつと奇觀である。若しか之が芝居の舞臺にでも現はれようものなら、見物は一齊にドッと笑ひはやすべきほどの滑稽趣味を帶びてゐる。然し銀座の四辻の混雜の中では、誰あつてそんな事に目を呉れる者がない。所が獨り面白がつて見てゐても、此の滑稽劇の演技者自身が又すましたもので、悠々として群集の中に消えてしまつた。

『女天下』の畫葉書にある通りの、眠つた赤ん坊を重そうに負ぶつた洋服の小紳士のあとから、今そこらで大ぶん奮發したらしい買物の紙包を提げた背低の奥さんが、背低のくせにフエルトの草履か何かをはいて（尤も精々分の厚い奴ではあるが）、小々古びた刺繍入のパラソルを型の如く少し斜めにさして、しやなりしやなりとお運びになる。然し畫葉書屋と特約した畫家ででもない限り、及び私のような切賣りのヘボ文士でゝもない限り、そんなものに興味の目を向けるほどの茶人は先づない、奥さんの御名譽にもならなければ、旦那様の御耻辱にもならない。

十三四の西洋人の小娘が二人、同じような麥藁帽を無雜作にかぶつて、同じような裾の短い黒い着物を凛々しく着なして其の裾と靴下との間に同じような眞白い細い足を五寸ばかり出して、キチンと足並を揃へてサッサと歩いて行く。それとスレ

スレに行き違つた、陸軍大佐くらゐであるらしい、太りじし、赤ら顔、胡麻鹽髭の將校が、黒皮の長靴をはいて左の手に劍のツカを握り右脇に軍用カバンをかゝえこんでゐる所は、如何にも堂々たる風采に見受けられたが、身の丈は右の娘達に比べて正に三寸ばかり低かつた。然しそんな事は此の混雜中に於いて毫も帝國軍人の威儀體面に關するわけのものでない。娘達は固より日本の軍人さんとスレ違つた事に氣もつかない。

日本人だか西洋人だかチョット見分けのつかない、派手なネクタイの瀟洒たる青年紳士の前に、少し赤い毛の髮を平べつたに七分三分に分けた、妙に之も西洋人くさい、薄つぺらな高い鼻を尖らせた若い婦人が、變に品を作つて體をねぢらせ、たたんだパラソルをステッキのようにして、左足の爪先の甲を右足の踵におツつけるといふ不思議な藝當をやりながら、電車の來るのを待つてゐる其の姿も、殘念ながら私より外に（及び其のネクタイ紳士より外に）見る人がなかつた。

急に少し薄ら寒くなつたといふ今日の氣候にシックリ合せた、背地に茶味のかゝつたセルの仕立おろしを着て、薄手の藤紫に白の野菊をあしらつた、如何にもアッサリした羽二重の帶を上手に占めた、寸分の隙もない奥さんらしい奥さんも、其の直ぐそばに立つてゐる、白地の浴衣の大ぶん汚れた、從つて紺飛白の單衣の持合せのない事を明かに自白した、五分刈の髮の大ぶん延びすぎた、正に多大の同情に値する失職智識階級の一人も、どちらも人の注意を引くには足りない。

銀座に行くと云へば、近處をぶらつくとは違つて誰しも少し改まつた氣持になるのだが、殊に御婦人としては御尤も千萬。其の筈の事なのだが、其の銀座の人ごみの中に、そこらの裏町や拔路次の中から出て來たらしい、此の晴れの場所を繩張の町內と心得てゐる、又實際その通りである、町の襷がけの女中さんなどが不斷着のまゝで、無邪氣な顏をして誠に氣安そうに歩いてゐるのもある。又銀行の前などには、人力車の蹴込に腰かけた車夫が、乘せて來た客の出て來るのを待ちながら、此ゴタゴタの間に脇目も振らず、一心に本を讀んでゐるのもある。それが存外、勞働演說會などの雄辯家であるのかも知れない。

何しろ斯んなわけで、仔細に觀察すれば中々面白いが、大體から見て銀座の四辻の人ごみには、殆んど個人性がない。只だ老若男女の無數の通行人がある。色が黑からうと白からうと、若作りであらうとフケて見えようと、白粉の乘りが好からうと惡からうと、他人の目に映らない以上、全く同じ事である。氣

が利いてゐるなど丶得意がる事なかれ、モットモット氣の利いたのが幾らもある。見すぼらしいなど丶氣にする事なかれ、モットモット身すぼらしいのが幾らもある。そこがさすがに大都會の大都會たる所以である。そこが大都會の恐ろしい所以でもあり、又存外住みよい所以でもある。

四　自働車の走るは逃げるに似たり

線路修繕の都合か何かで、ほんの暫く電車が順調を失すると、乘降場が忽ちにして平常に何倍する眞黑な人ごみになる。何事が起つたのかと見ると何事も起つては居ない。只だ通行人のヘケが少し止まつただけである。

そこに紳士自働車がやつて來ると頗る面白い。風を切つて大道を走らせる勢ひもこ丶では全く出せない。ブウ、ブウなど丶遠慮がちにやつて見た所で、誰も容易に道をあけてやらうとしない。群集の威力が自然に發揮されてゐる。それを一思ひに車輪にかけて、蹴ちらし踏みにじつて疾驅したなら、車上の人には嘸ぞ愉快な事だらうが、まさかにそこまでの勇氣も出ないものと見える。次第に速力を緩めて來た自働車が遂に據んどころなく群集の傍らに停止する。心に任せぬものは兜町の形勢と多數の民衆である。鴨川の水と叡山の山法師がしのばれる。正に是れ古今同一の歎。紳士は嘸かし御不興な事と察しられるが兎にかくさあらぬ振りで我慢してゐらつしやる。

然し其の間にも確かに不安の感じはあるだらう。通行人から見れば走つてゐる自働車は危險だが、止まつてゐる自働車は何んともない。自働車の威力は今全く群集に無視されてゐる。尤も、車上から金銀貨を小砂利のように投げつけるか、紙幣を引札のようにバラ撒くかするなら、群集は疑ひもなく其の威力の下に平伏するだらうが、只だ車上の人が莫大な富の持主だといふだけでは、それに向つて感謝の意を表すべき理由がない。群集はまだ其の莫大な富が自分等を搾つた結果だとまでは考へてゐないらしいが、少なくとも自分等と何等の交渉も關係もない無用有害の長物であつて、兎にかく癪にさわる奴だとは感じてゐる。よし癪にさわるといふほどの明かな反感は無いにしても、此の場合、極く輕く踏んだ所で、多數人民の交通上、一個の邪魔物として目されてゐる。其の冷かな視線を浴びつ丶、今は群集の一部に卷きこまれてゐる自働車は、どうしても敵軍の重圍に陷つたといふ不安の感じが無いわけに行かないだらう。

漸く電車の運轉が順調に復して群集が疎らになると、自働車

は其の隙を見すまして、そろりそろりと其の大きなズウ體を動かしはじめる。今度はブウ〳〵で人が少しよける。怪物は頓に元氣を回復して速力を早める。前方の通行人がバラ〳〵と左右に分れる。もう大丈夫と見て取ると、奴は更に高聲のブウ〳〵を連發して一氣に疾驅する。其の狀あだかも、纔かに敵軍の重圍を脫して一目散に逃走するが如くである。跡に殘る煙の臭いのが狐の何やらに似てゐる。

今一つ書き漏らした物がある。銀行の前の人道と車道との界に巡査交番所がある。丁度、大砲の玉の頂上を丸く磨りへらしたやうな形の、厚味のある石造で、如何にも小さくはあるが如何にも堅牢に見えてゐる。それが柳の葉がけに据りよく立つてゐて、中にゐる巡査の白服が窓からチラ〳〵見える所などは、多少の風景と云ふ事も出來る。

火事のある度に町が奇麗になると云ふが、此の交番も昔し暴徒に燒き拂はれたお蔭で、貧弱な木造が此のような立派な物に替つたのである。交番さへ石造にして置けば、もう幾ら暴徒が起つたつて大丈夫である。石を燒き得る火は此の世界にない。サザエのお伽噺などは勿論子供だましに過ぎない。

五　行倒れの樂天家と女車掌の誇り

私は最後に一つ不思議な人物を認めた。彼は上半身にゴザの切れはしを着、下半身に股引をはいて步いてゐた。私は先づ彼れの後ろ姿を認めたのだが、其ゴザの裾は僅かに臀部の上方にまで達するに過ぎなかつた。そして其の灰色の股引は、臀部に左右二個所の穴を有し、其の二個所の穴から黑赤い肉が露出してゐた。私はフト猿の尻に二つの坐りだこのあるのを思ひだした。

彼は草履の殘骸とでも云ふべき物を足につけてゐた。それは不思議でも何んでもないが、彼れの帽子は實に不思議な物だつた。人が帽子を冠つてゐれば其の頭は見えないのが普通である。然るに彼は焦茶色の麥藁帽を阿彌陀に冠つてゐながら、其の艶氣のない禿げ頭が後ろから見えてゐた。彼れの帽子には頂上の部分が全く缺如してゐるのであつた。

彼は其の頭の禿げぐあいと、足取りの不確かさとから、もう可なりの老人と見えた。然し足取りの不確かさは必ずしも年のせいばかりでは無いらしかつた。彼は何か頻りにブツブツと獨りごとを云ひながら步いてゐた。彼は確かに一杯きこしめして

居るのであつた。

彼がゴザの切れはしの内部に何を着てゐるかは遂に分らなかつた。彼は幾度も幾度も其ゴザの上衣(若しくば外套)を體に引きしめながら歩いてゐた。私は其の後ろ姿の、頭の禿と、臀部に於ける左右二個所の肉の露出とが、妙に面白く感じられて、思はず知らず其のあとを付けて行つた。

顏を一度見てやりたいと思つたが、追ひこして振り返る不作法をするに忍びない氣持がして、矢張り後ろ姿だけに滿足してゐた。然しどこまで付いて行つても、別だん何んの變哲もない。彼は依然として獨りごとを云ひながら、少しヨロヨロして歩くに過ぎなかつた。

『オイ親方、一ぺイ飲まう!』彼は突然として向ふから來かゝる職人風の男に話しかけた、職人風の男は氣の好さそうな笑ひ顏を答禮にして、何んにも云はずに行き過ぎた。

『オイ君!旦那!一ぺイ飲まう!』彼は又向ふから來かゝる洋服の男に話しかけた。洋服の男は尊嚴を冒瀆されたもの丶如く、ゴザの親爺を一と睨み睨みつけて行き過ぎた。

『ワツハハハハ!』彼は馬鹿に大きな聲を出して笑ひながら其の洋服男を見返つた。所が、其の見返へる拍子に彼の體が、ヨロヨロとよろめいて、其まゝバツタリそこへ仆れた。

彼は起きあがらうともしなかつた。然し死んだのでもなかつた。轉がつたまゝで矢張り何が頻りにブツブツと獨りごとを云つてゐた。段々人だかりがして來た。私はもう群集に飽きた。此の樂天家の最後を見屆けるにも及ぶまいと考へて、そのまゝ彼と別れを告げた。彼は矢張あちら向きにゴザを引締めたまゝ轉がつてゐた。私は遂に彼れの顏を見なかつた。銀座には斯うした通行人もある。

私は京橋から乘合自働車に乘つて見た。素敵な別品さんの車掌がゐた。黑い靴下に包んだ太い短い足と、少しアヒルに似たような靴の足取りとは餘り感心しなかつたが、あの裾短かな甲斐々々しい洋服と、あの何とかいふ帽子を少しハスに冠つた所とが、ひどく可愛らしく見えた。眞白に塗つた顏の黑いハツキりした眉毛の下に、うるみのある美しい目を見張つて、『えゝ三越前で御座います。お降りは御座いませんか』と、電車の車掌とは違つた艶のある聲で、一かど確かりした役目柄の口上を云つた時、御本人も大ぶん得意らしかつた。藝妓の誇り、女優の誇り、女給の誇り、而うして又女車掌の誇りがある。多少の美貌を資格にする婦人勞働のいちらしさがそこにある。

京橋をわたつて日本橋通りに來ると、銀座とは丸で違つた空氣が漂つてゐる。走りゆく自働車の窓から兩側を見わたすとそこにもこゝにも新らしい大建築が聳えてゐる。今建築中のも幾つかある。また出來揃つてゐない所に勃々たる生氣がある。古い、汚ない、低い、小さい、せゝこましい銀座に比べると、こゝは新らしくて、美くしくて、高くて、大きくて、晴々してゐる。兎にかく雄大宏壯の感が生ずる。之が近頃の日本の黄金の力、資本の力の發現だなと考へると、それを讃美する阿呆らしさを感ぜずに居られないが、それにしても銀座よりはズート心持がいゝ。早く着手した古い姑息な改造よりも、遲く着手する新らしい大膽な改造の方に、却つて大きな便利と成績とのある場合があるといふ、其の一つの實例だなと、又してもそんな方に引張りつけて考へたりした。若し又、いつか貧民町をスツカリ取りこわして、其の居住者が取りあえずこゝらの大建築の中に住みこむような事になつたらなどと、そんな夢も見たりした。

六　新らしい簞笥に無殘な大疵

松屋呉服店の直ぐそばに私の友人の住んでる事を思ひだして、今度はツイそれを尋ねて見る氣になつた。銀座通り日本橋通りの大きな騷々しい景氣を見物したあとで、靜かな小さな家庭生活を見る事も、亦た一興だと考へた。

神田塗師町七番地などゝ云ふと、滅多な人の知つてる場所ではない。所が尋ねて行つて見ると、それがあの大通りの一部である。あの大通りに口を開いた狹い路次をはいつて、僅かに十間か二十間ばかり行くと、そこの右側に尋ねる人の標札が見つかつた。

成程あまり結構なお住居ではないらしい。第一この狹い、暗い、じめじめした路次が厭だと思つた。然し大都會の中央の諸便利を我々風情がツイ手の屆く處で享樂しようと云ふには、之より外に方法がないのだらう。

行きなり格子戸を引きあけると、主人夫婦が意外な客に少し驚いて迎へてくれた。成程狹い家だ。土間が一疊、玄關が二疊、それに並んで臺處の板の間が二疊、流し元が一疊、そして奥が四疊半、それきりだ。然し讀者諸君、此の家の夫婦をミジメな貧乏人と思つては違ふ。彼等は此の小さな家庭で存外餘裕のある生活をしてゐる。そこが東京の生活だ。

四疊半には小さい椽側があつて、すぐそばに便所がある。便

所のない家はない。小さい家では座敷のすぐそばに便所があるより外に仕方がない。人生必然の約束である。地方で廣々した生活をしてゐる人などから考へたら、不思議なように思はれるだらうが、そこが東京の生活だ。それでも其の椽側の前に一疊敷ばかりの庭があつて、植木の二三本あるのが見つけものだ。

四疊半の內部を見渡すと（と云へば何んだか廣そうだが）、一方の壁ぎはに簞笥と戸棚と本棚とが置き並べてあつて、主人公は其度に胡坐をかき、机を一つ隔てゝ私と相對してゐる。其の机のそばには長火鉢が置いてあつて、細君が早速その銅壺の湯を汲んでお茶を拵へて飲ませてくれた。それが生ぬるい出しがらのお茶ではない。熱くて香ばしいお茶だから嬉しい。机の上には羊羹の鉢も出された。其の羊羹が又水つぽい厭な羊羹でないから嬉しい。

不意に私の後ろの襖があいた。あゝまだこゝに部屋があるのかと思つて振り向いて見ると、そこには二階へあがる段梯子が見えてゐた。二階には二階だけで別に一家族が住んでゐて、その人が今便所に行く爲めに降りて來たのであつた。隨分お互に究屈なわけだらうと思はれるが、そこが矢張り卽ち東京の中央の生活なのだ。

私の友人夫婦の多少ゆたかな事は、簞笥なり戸棚なりの品質の好いので分る。間に合ひさへすればいゝといふ安物でなく相當に趣味の滿足されるだけの品が揃へてある。唯だ一つ驚いたのは、其の立派な新らしい簞笥に無殘な大疵がついてゐる。何でもそれは先達て、若い夫婦にありがちの大立廻りがあつて、何をブツつけたのか知らないが、主人公が癇癪まぎれにやつた事らしい。惜しい事をしたものだなアと私がカラかひ半分に云ふと、主人公は只フフンと鼻を鳴らし、細君は少し俯向いてクスクス笑つてゐた。

此の細君が又、この小い狹い暗い家には似つかないほど美くしい色の白い可愛らしい人である。丸髷を奇麗に結つて意氣な縞柄の浴衣を着て、白いへりとりの前[illegible]をして、如何にも好い恰好に坐つてゐる。之で簞笥に大疵をつける必要の生ずる理由が分らないと私は思つた。

總てがこんな下町趣味なのだから、主人公は餘ほど古風な人物かと云ふに、それが又大いに違ふ。伊太利語が得意といふ一事だけでも、彼れの新らしさが分るだらう。彼は又近ごろ蓄音器に凝つてゐる。彼は二疊の間に蓄音器を持ち出して撰りぬきのレコードを私に聞かせた。音樂にツンボな私には何が何やら

サッパリ分らなかつたが、ファウストの三段笑ひとか、マルセーユの曲とか、チゴイネルの何だとか、獨佛英伊四個國の歌を聞いたのだそうな。

それから私は鰻飯の御馳走になつてそこを出たが、東京の眞中の大通の直ぐ裏にこんな靜かな小さな家屋のある事、そしてそれが一面から見ればどうしても貧乏長家の悲慘な生活でなければならないように思はれるのに、實は存外不足のない暮しである事、而も其の間に新らしい智識と趣味との溢れてゐる事を、返す返すも不思議に思つた。何しろ東京には斯ういふ生活もあるのだ。

神田驛から高架鐵道の電車に乗るべく其の高いプラットフオームを登つた時、日はもう暮れかけて、見渡すかぎり薄もやの中に黒い屋根が續き續いて、只本郷臺の森の上に『仁丹』の電氣廣告が牡丹色と黄色とで交代に光つてゐた。

世界日曜學校大會に就て

沖野岩三郎

一　日本に於る世界的會合

我が日本國が西洋諸國と交通し初めて以來『萬國』或は『世界』の二字を冠せる會合を催したのは、僅かに二回である。其の第一回は紀元千九百七年、即ち明治四十年に、東京神田美士代町の基督教青年大會で、『萬國基督教青年大會』を催した事であつた。當時は、此の會合に先んじて、英國からゼネラル、ブースが來て明治天皇陛下に謁見を仰付られ、米國からはユニオン神學校長のホール博士が來て熱のある宗教講演を試みられた。そして世界の各國から集つた名士達は到る所に歡迎され、日本の櫻と、富士と日の丸とを廣く世界に紹介する事が出來た來會者の中には英國エヂンボロー醫科大學長のシンプソン博士のやうな科學者もあつた。

當時は日本が日露戰爭に捷利を得て、世界の諸國に日本といふ國の存在を認識せしめた最初で、世界各國の人達は、此の新進の日本が如何なる國であるかを物珍らしく見に來たのであつたから、萬事は可愛い日本、若い日本として寛大に善意に觀て歸られたのであつて、彼等數百の代表者は何れも皆な滿足して滯在し感謝を以て歸國した。

其の第二回目の世界的會合といふのが、今回の世界日曜學校大會である。此の會合によつて世界各國の人達が如何に日本を觀るかは實に興味ある問題である。

二　世界日曜學校大會の由來

千八百八十七年七月に米國シカゴ市で開いた國際日曜學校第一回世界大會を、千八百八十九年七月一日を以て、英京倫敦に於て開く事を決議した。そして同年に到つて英、米、佛、伊等の各國から八百の代表者が集つて、フランシス、エフ、ベルセーを會長に推擧した。英國皇帝はベルセーが、日曜學校の爲に盡力した功績に因つて彼に授爵の恩命を下したのであつた。

第二回大會は千八百九十三年九月三日より五日間セント、ルイスに於て開かれたが、同市は此の大會を祝する爲、其の開會中全市にイルミネーションを施したのであつた。

第三回大會は千八百九十八年七月十一日から六日間、ロンドンに於て開會した。宰相以上の實勢力を有する倫敦市長は代表者全體を其の官邸に招待して盛大な歡迎會を開いたのであつた。

第四回大會は千九百四年四月十七日から三日間猶太のエルサレムに廿六ケ國を代表した千五百廿六名が會合したのだつた。

第五回大會は千九百七年五月十八日から六日間伊利太ローマの美以教會で開かれた。出席者は卅七ケ國の代員千百十八名であつた。有名な伊國建設者ガルバルヂーの孫娘に當る、イタリア・ガルバルヂー孃も日曜學校教師として講壇に立つた。米國大統領ルーズベルトは遙かに長文の祝辭を送つた。

第六回大會は千九百十年五月十九日から、六日間ワシントン市で開かれた。各國より集り來る代表者實に三千九百八十名の多きに達した。

開會第二日午後四時から、代表者一同は列を正して大行列をなす事にした。此の擧を聞いた米國下院は、開會中の議事を休止して『參集せる代員と其の代表せる事業に對して敬意』を拂つた。そして同社の集會には、大統領タフト夫妻が臨場し、タフトは『日曜學校の尊貴』と題して一場の演説をした。

第七回大會は千九百十三年七月八日から八日間、世界的の偉人ツイングリー、ペスタロツチの兩人を宗教、教育の二社會に産み出した瑞西ヅーリツヒに開會した。此時實に七十ケ國から一千六百人の代表者が集り、土曜の午後は、四百五十人の大合唱團の合唱があつた。

三　世界日曜學校大會と日本

第二回の大會がセントルイスに開かれた時ベルセー卿は、其英本國と同盟國たる日本が、第三回の大會に當つて、興味ある報告を齎さん事を希望する意味の演説をした。で、第三回の大會がロンドンに開かるゝや、日本を代表した出席者池原透は、日本が既に九百一個の日曜學校三萬五千の生徒を有する報告をした。是に於て。日本が此の大會に認められる事になり、第四回大會には、仙臺在住の宣教師フェルプ孃が日本を代表して出席し、第五回大會には、在日四十年の永きに亙つた大阪在住のエ、デ、ヘール博士が日本に於ける事業の概況を演説し、東北學院長シュネーダー博士も日本を代表して出席したが、第六回

大會には田中義弘が日本代表者となつて出席するや、議長博士マイヤーは其の第一日の集會を閉づるに當り、日本の代表者田中義弘に祝禱を捧ぐるの名譽を與へ、同夜の歡迎會場にてグリーン博士が各國代表者を歡迎するの辭を述べた時本多庸一は亞細亞州全體を代表して謝辭を陳ぶるの重任を負うた。

斯くして此の會合に於る日本の位置は、稍各國代表者に認めらるゝに到つたが、第七回の大會が七十ヶ國の代表者二千六百名を風光明媚な瑞西に集めた時、日本に於る日曜學校の實際を視察して歸つた、フランク・エル・ブラウンは日本の日曜學校が盛大に赴きつゝある狀況を報告したのであつた。此時、ヅーリツヒ湖畔なるトンハーレー音樂堂の壯麗な會場に於て日本を代表して出席した明治學院總理井深梶之助は、此の風光明媚なる瑞西に集れる諸君を、櫻と富士とにて名高き日本國に招待したしといふ意味の演説をした。彼れの流暢なる英語は會衆の總てに其の意のある所を傳へ得た。そして此の發議は實行委員長ハインツの動議となり、ベルセー卿の贊成演説となり、遂に全世界の代表者が多大なる贊意の下に滿場一致を以て可決したのであつた。

然るに千九百十六年、即ち我が大正五年は恰も歐洲戰亂中であつた爲め、遂に平和克復の後を待つ事となり、本年十月五日から十四日まで十日間を其の第八回世界日曜學校大會の開會期とするに到つた。これ實に開會以來前例なき長期間の會期である。

四　米國と本大會との關係

此の大會が三十年前に英京に於て其の第一回を開かれた時、會衆八百の二分五厘强の三百十二名を送つたのは北米合衆國であつた。彼れは其の代表者中二百四十三名を汽船ボスニア號で同時に英國へ送つたのであつた。爾來每會、其の出席者の多數と應援の熱心なのは、いつも米國が第一位であつた。殊に第七回大會が、七十ヶ國の代員二千六百名中、北米合衆國の代員は千三百四十四人であつて、正に過半數を米一ヶ國で引受けてゐるので、彼れは世界の基督教國七十ヶ國に匹敵する多數の代員を出席せしめ得たので、第八回の大會が、日本に於て開かるゝと決するや、此の新進戰勝國の招きに應じて來らんと希望する者優に二千名を越えたのであつた。

殊に實行委員長たるワナメーカーは、最も熱心なる日曜學校の教師であつて、彼が嘗て大臣の椅子を占めてゐた時、二千餘の日曜學校生徒を指導する爲、毎土曜の早朝から汽車に乘つて

遠くへ出かけるので、大臣である自分が土曜の全日を休むのに其の下僚をして半日の勤勞をさせるに忍びないと云つて、土曜全日は彼の部下を悉く休ましたといふ程の男である。そして彼が今、米國の小賣商王として有名である事は世界の總てが知つてゐる所である。

此の世界的豪商が、日本を訪問するといふ事だけでも新聞種である上、彼の勢力德望は優に米國の代表者三千を引率して渡來せしめ得る事を信ぜしめた。そして彼は九月四日ヴァンクーバー發シベリア號に乘船する旨の通知を日本の準備委員に通知して來たのは七月の中旬であつた。然るに彼の老夫人は宿痾の爲めに病褥中にあるので、どうであらうかと其の來否を氣支ひつゝあるが、或る有力な東京の某新聞は、早くも彼れの來朝を確報なりと說き、米國の代表者も頗る少數しか來ない事を報道した。そして夫れは米國人の駄法螺であつたと云つて居るが、果して夫れは米國人の駄法螺だつたのであらうか。每會の出席者が其の三分の一以上二分の一強の比例を示した彼れ、殊に第七回に千三百五十人を瑞西に送つた彼は、第八回にワナメーカーと共に二千人以上を日本に送らんとした事は、夫れは信ずべからざる事であらうか。若し、彼れが夫れだけの代表者を送らうと決心して居ながら、僅かに其の半數に充たざる少數しか送らなかつたとするならば、其所には何等か深い原因が無ければならないと思ふ。其の原因は果して何であらうか。確かに一考の價値がある。

五　日本の國交と大會の關係

歐洲戰亂前、卽ち今より七年以前に、しかし日本の招待に歡喜したる各國の代表者が、今に到りて俄然日本に來る事を拒むべき理由を發見出來ない。若し世評の如く豫定の半數も來ないとするなら、夫は最も意氣込んで居た米國人が、此の大會以前卽ち千九百十三年より今日までに於て、僅かに日本の招待に應ずるを好まない何等かの理由が存在しなければならない。

日露戰爭後、日本の小學生徒と中學師範の生徒は、其の教師の口から、日本は世界の一等國だと云つて敎へられた。實際日本人も夫れを事實だと自ら信じてゐた、歐洲大戰に際しても、尙ほ日本人の一部分は、『若し日本軍が五六十萬も歐洲に出動するなら、必ず全捷する。』と信じてゐた。

所が歐洲戰亂の結果は、決して日本を世界の最大强國だと云はれない事實が歴然として來た。これと反對に戰爭には弱いと相場の決つてゐた米國が案外の成績を歐洲戰亂の最後の幕に收

め得た。

此の成行に對して最も注意を拂つてゐたのは何れの國であつたらうか。夫れが卽ち新しく日本の領土となつて、しかも時々不平の意を洩してゐた朝鮮であつた。

朝鮮が日本領土になつて以來、總督府の施政が朝鮮人を文化に導いた事は、蔽ふべからざる事實である。けれども又た反面に於て總督府が朝鮮の學校教育に於て、教師に帶劍させたり、其の教課に朝鮮建國の歷史を除いたりした點や、渡つて行つた内地人が、惡辣な手段で彼等朝鮮人を虐めた實例の數々も決して隱蔽する事の出來ない事實である。

斯ういふ狀態に居る國民は古今東西、どこでも、いつの世でも、必ず宗教的になるものである。朝鮮も矢張り其の轍を蹈んで彼等は政治的の野心を投げ捨てゝ宗教に信賴せんとした。そして米國から東洋傳道に來てゐる宣教師の說に熱心なる傾聽を與へた。

米國傳道會社が六十年來東洋に傳道して、支那の儒教、印度の汎神哲學と戰つて、花々しい成績の擧らなかつた折も折、此の朝鮮人の求道心を見て實に驚喜した。彼等宣教師が朝鮮內地に傳道を試みるや、一時に三百人五百人の改悔歸信するなど枚擧に暇の無い程であつた。此の有樣を見た米國傳道會社は朝鮮傳道に必死の力を致した。そして朝鮮人中に、個性の尊重を教ふる基督教を信ずる者が多くなるに伴れて、總督府の統治が段々と困難になつて來た。日本の官憲の一部には、朝鮮人が不逞な事を考ふるのは基督教を信ずるからであると觀察した者があつたらしい。さうした感情が無教育な下級官吏の頭には、直接基督教を憎み米國宣教師をも忌むやうな空氣となつて、朝鮮人に對し米國宣教師に對した者のあつたといふ事も蔽ふべからざる事實であらう。

千九百十九年の朝鮮に於ける舊國王殿下の大葬は、何等國民をして三浦觀樹、岡本柳之助等の入獄せし當時の王妃事件を追憶せしめたる事は否むべからざる事であらう。そして哀號運動萬歲運動となり、遂に朝鮮に於る基督教徒の多くが、祖國を思ふ愛國心に駈られて獨立運動を起すに到つたといふ事は、基督教徒と雖も夫れを承認しなければならない事實であらう。隨つて日本の大新聞が、盛んに不逞鮮人の文字を羅列し、其の文字の散見する所、必ず基督教徒なる文字を見るので基督教、即ち米國人が朝鮮人の尻押をするのが憎いといふ心情は、日本の新聞紙の何れを見ても隨分露骨に現はしてるといふ事も、日本總て

の承認しなければならない點である。

斯う云ふイキサツから考へて見れば、米國の基督教會が最初の意氣込のやうに二千三千の多數を日本へ送るや否やは少々疑問になる。カリフヲルニヤにあつて、夙に日本人の爲めに力を盡したストージ博士が、我が皇帝の卽位式を祝せん爲め海を越えて遙々渡來した時の、宮内省の態度に對してすら敏感な人々は杞憂を懷いた程であつた。況んや、朝鮮統治と日本關係は誤解が重なつて、容易に解く事の出來ない程度にまで進んでゐるこれは何と云つても致方の無い事で、日本内地に於てすら基督信者として小、中學の教育たる事が、今尚ほ困難の位置にある今日、朝鮮の米國人宣教師の傳道が總督府の武斷政治と相容れない點のあるのは、何ともする事の出來ない事實であらう。我々は今回の大會が中止の已むなきに到るまで歐米諸國が昨年の朝鮮事件を重大視したといふ風説が、單に風説として消え、今回の大會がいよ／＼開會され少くとも二千以上の會衆を得るに到らんとするのは、日本が文明國であるといふ理解を得て居る證左であらねばならない。

六　誇るべき點恥しむべき點

サンデイ、スクールと云へば卽ち基督教徒が日曜日に於る聖書の研究學習であるといふ事は最早世界共通の意味になつてゐる。所が、日本の基督教徒が、此の大會開催に關する後援を日本の有力者に依賴しようとした時、殆ど十中の七八までは、日曜學校の何たるかを知らない人々であつたといふ話である。然るに愈々此の大會を日本に於て開くといふ事になり、其の總費額凡そ三十萬圓の中、基督教徒は僅かに金二萬圓を募集し得るのみで、殘額二十八萬圓は、後援會で募集するのである。そして其の後援會長は、大隈重信で、副會長は澁澤榮一、阪谷芳郎、田尻稻次郎、藤山雷太といふ顏振である。恐らく此の大會の第一回から八回までの中に、今回の大會のやうに、基督教を信じない人ばかりの會長副會長で、後援會を作り、其の出費の大部分を引受けた前例は何所にも無いであらう。これは確かに歐米人をして、日本が基督教を排斥する國であるといふ從來の誤解を一掃し得るに足る好例であると思ふ。

しかし、嘗ては世界の一等國であり、又た五大國の一まで漕ぎつけた大日本帝國が、東京、横濱、鎌倉、日光、京都、大阪神戸、奈良の關東關西を合して漸く二千のベッドしか無いといふのでは、世界の各國から二千人以上も招待して、どこへ御泊め申す事も出來ない。東京では僅か三百人位しか收容する旅舍

が無いとは、五大國の手前少々お恥しい次第である。

此の有樣を見た東京の有志者が、自己の邸宅を開放して其の旅舍に宛てようといふ程まで、此の大會に好意を有する人々の多いと云ふ事は實に麗はしい話である。

我々は此の大會によつて、『小さき日本、狹き日本』といふ感じを歐米人に感ぜしむるの已むなきを悲しむと同時に、『麗はしき日本、優しき日本人。』といふ感じを彼等に與へたいものである。大會夫れ自身には夫れ自身の目的があつて、我々は夫れを批評する必要を認めないが、以上の如き雜感を此の大會に對して抱く事は決して無用でないと思ふ。

最後に附言したい一事は、千九百七年の萬國青年會大會に際して渡來せる朝鮮人代表者は、日本の招待會には、如何なる會合へも出席しなかつたといふ噂があつた。今回の大會に出席する鮮人にも果して夫れだけの祖國主義の者があるか否やは、注視に値する事件であらう。今回の大會で特に或る人は朝鮮を歡迎したいと申出た人があるさうである。どうか此際此の大會を利用して、日米親善と同時に日鮮親善の實を擧げてほしいものである。

赤色露國を踏破して

極東西伯利の視察を終えて

昇曙夢

一、形勢混沌――百鬼夜行

極東シベリヤは日本軍駐屯の御蔭で今の處表面極めて落付いて居る樣では有るが、內部には極めて不安な空氣が漲つて居る特に政治狀態に至つては依然として混沌たるもので、今後幾變轉するか殆んど前途の見越がつかない。今日極東シベリヤの政治機關としては浦鹽臨時政府とウエルフネ、ウジンスク政府とブラゴウエシチエンスク政府との三つの政府が存在して居るが是等は事實上過激派の政府で有つて、それを組織する閣員なるものはいづれも野心家の群で、謂はゞ一種の政治ゴロの寄合である。野心家と云つても大きな野心家でなく單に政府の名を以て私利私慾を滿たさんとする樣な連中ばかりで、金でも貯め込んだら直ぐ出奔しやうとする逃腰の人ばかりである。彼等によつて露國の恢復など思ひもよらぬ。眞に衷心より國を思ふ者などは一人も居ないと云つてよい。だから一般民衆は彼等を少しも信用して居らない。農民の如きは餘りにホジヤーイン(主人)の多いのに呆れて居る。從つて是等の政府から發布する政令も又其の發行にかゝる紙幣も何等の信用がなく、浦鹽臨時政府で發行した新紙幣の如きですら段々暴落して行く一方で、何處に行つても民衆はそれをとることを好まない。ハルビン邊に行くと全然通用しないで、却つて何處でも民衆は日貨を迎へる樣な狀態である。私がハバロフスクを出發した後の事であるが、同地の市會は浦鹽臨時政府を承認せずに獨立を宣告して、それが爲に一時騷動を醸したと云ふことであるが、臨時政府の信用など

は奥地に行けば行く程薄弱である。是等過激派的三政府の間に介在して反過激派を以つて任じて居つたのがチタに於けるセミヨノフ軍である。然るに此のセミヨノフ軍もアタマン自身は別として其の部下は随分怪しげな連中の集合である。從つて掠奪もすれば虐殺もする强姦もすると云ふ風で、一般良民からはパルチザン以上に惡まれて居る。彼等がセミヨノフに從つて居るのは要するにセミヨノフの手に金塊が有る間だけで、其れが無くなれば何者に變ずるか知れたものぢやない。眞に中心よりアタマンに忠勤を表して居るものは僅かに一二に過ぎないのであるから、セミヨノフが一旦逆境にでも陷入るとすれば、テンデンバラバラに過激派かパルチザンの群に投ずる様な連中ばかりである。セミヨノフ自身が既に本來大政治家の器でなく、東洋流の英雄肌の男であるから、随分突飛な事でもやり兼ねない男である。先頃發表されたセミヨノフの宣言なるものを果して事實だとすれば、彼は統一露國の爲には全然外國の干渉を斥けて今迄仇敵であつた浦鹽政府と妥協せんとする意を仄めかし、進んでレーニンと手を握らうとする氣勢を示して居る。之は日本軍が彼に對して援助を打ち切つた面當かも知れないが、兎に角どんな突飛な輕業をするか分らない。然し今迄はセミヨノフ軍も極東三政府の間に介在して反過激派としての任務を盡すと同時に三政府の連絡を絶つて、之が爲にボリセウイキーの統一を妨げて居つたのであるが、今では日本軍のザバイカル撤退と同時にセミヨノフ軍もチタを引上げてダウリヤ迄撤退したと云ふから、セミヨノフにとつては、今迄の地盤を全く失つた様なものである。其結果としてセミヨノフが再び蹶起しない限りイルクツクからアムール沿線に至る一帶の地は、ボリセウイキーによつて早晩統一されるだらうと思はれる。而して結局セミヨノフ軍も、他の極東三政府も、自然自滅すべき運命にあるものと見なければならぬ。從つて是等の小さな野心家若くは野心家の團體は將來の露國にとつては、殆んど問題とするのに足らないのである。今日日本軍は緩衝地帶の設定に就いてウエルフネウージンスク政府と折衝を重ねて居るが、之なども畢竟一時的性質を持つて居るに過ぎない。つまり双方とも緩衝地帶を各自の政策の利用に供せんとするのである。日本側の眞意は元より我々に分らう筈はないが、察する處日本軍は緩衝地帶の設定を一段落として之を口實に一旦軍を引揚げるか、或は之によつてボリセイズムの東漸を緩和せんとするか、或は又之を媒介として勞農政府と直接交渉の端を見出さんとするか、其の一つであら

う。そこまで行けば先づ結構なとである。一方ボリセウイキーはボリセウイキーで同じ緩衝地帶によつて日本軍の撤退を促がし、同時にソウエートの政權を極東に及ぼさうとする底意である。現に共產黨の陰謀として傳へらるゝものを見るに彼等は緩衝地帶の設定を曾て獨逸と聯結したブレスト・リトフスク條約と同じ樣に見て居る。卽ち一時日本軍の要求に屈從して緩衝地帶を設定し、其を通じて曾つて獨逸に對して行ふたと同樣に、日本の勞働階級の間に過激思想を宣傳し、日本に革命を促さんとする陰謀を有して居るのである。之が果して事實だとすれば、日本が緩衝地帶を利用するといふよりも、寧ろ露國の共產黨に宣傳の機會を與へる結果になりはしまいか。大に注意すべき問題であらうと思ふ。

二、右か左か——帝政派、農民、パルチザンの現狀

極東シベリヤに於ける政黨政派の關係は可也複雜である。特に政黨として名さす可き者は極東共產黨、社會民主黨、社會革命黨の右黨及左黨、農民黨等である。けれども共產黨を除いたら他の黨派は殆んど勢力がないと云ふてよい。今日浦鹽臨時政府の閣員は所謂聯立內閣と稱して、日本に對する緩和政策上表面には各黨派の穩健分子が立つて居るけれど、是等は畢竟木偶同樣で、彼等の後に立つて彼等を指導監督し、政府の實力を握つて居るものは共產黨である、又目下開催されて居る國民議會の多數を占めて居るのも矢張共產黨の議員である。共產黨はつまりボリセウイキーであるから、穩健派の閣員はボリセウイキーの爲に壓倒されて、殆んど策の施し樣のない姿になつた居る。是等の政黨政派以外、更に極東には帝政派なるものも多數存在して居ることは事實である。が此の帝政派は別に結束した勢力ではない。此の派の人々は今でも帝政の復活を夢みて居る連中で、徹頭徹尾日本に賴り、日本軍の力によつて過ぎ去つた自己の地位を維持しやうと努めて居る敗戰者である。彼等が日本軍に賴つて居るのも實は自分だちの地位の安全を計る利己主義から來て居るので、眞に國を愛ひ民を思ふ愛國の士が少ない。唯彼等は徒らにボリセウイキーを呪ひ、ユダヤ人を罵つて居るばかりで、彼等自身に何等の力もなければ、將來露國をどうすると云ふ積極的の對策もない。却つて彼等はお互に離反し合つて一向大きな勢力を作つて、ボリセウイキーに當らうとするものがない。いづれも皆過去の夢に生きて居る意氣地なしの連中で

早晩滅亡す可き運命を持つて居る。又彼等が一旦亡びてしまはなければ眞に新しい露國は生れて來ない。近頃では日本軍でも彼等の到底爲すなきを見て愛想をつかし、餘り相手にして居ないが、それでも泣き付いて來れば職業を與へてやつたり、生活の便利を計つてやつたりして居る。それが爲め彼等は日本を大に德として居るが、要するに將來の露國にとつては彼等は問題とするに足らないのである。

一般農民に至つては必ずしも共產主義を迎えて居る譯ではない。本來シベリヤの農民は歐露の農民と違ひ所謂自作農であつて、一種の有產階級である。然るに共產主義の社會に於ては、彼等の農作物及び財產は徵發若くは沒收さるゝ恐れがある。現に勞兵會時代に彼等は其の財產を徵發された經驗を持つて居るので、寧ろボリセウイキーを惡んで居る。けれども彼等は無學文盲の民であるから、ボリセウイズムを眞實に理解して居る譯ではない。又實際あの廣いどこまで行つてもはてしのないシベリヤの大平原に入つて見ると、唯モウ天地の悠久を感ずるのみで國家の觀念などは起りようがない。此處では政府の法律も國家の有難味も一向に感じられない。況んやかゝる廣大無邊なる大自然に於て、僅かに其の一角を點綴するに過ぎない貧弱なる農村に於ては、ボリセウイズムもコンムニズムも有つたものではない。臨時政府も緩衝地帶問題も此所では蚊のうなる程の響きすら與へて居ない。此等は畢竟都會の問題であり、野心家の問題であり、プロリタリーの問題であつて、大多數のシベリヤ農民の與り知らない處である。唯然し彼等は無智にして他の煽動に乘り易い民族であるから、ボリセウイキーの宣傳が巧く行つたら、他に優秀な勢力の出ない限りシベリヤ農民は結局赤化するの他ないだらうと思はれる。

パルチザンは勞兵會時代の赤衞軍が赤軍に變じて、それにコルチヤツク軍の殘黨と農民壯丁とが加はつて成つたものであるが、然し其の中樞を成して居るものは元鑛山の坑夫であつたものや、同じ鑛山に使はれて居た支那人朝鮮人の類である。是等の徒黨が最近段々と馬賊の樣な者になつて行く傾向の見えるのは憂ふ可き現象である。彼等は平日は別に一個處に固まつて居ると云ふ譯でなく、ウスリー沿線とアムール沿線とに亘つて諸方に散在して居る。平素は農耕に從事したり、或は良民を脅やかして掠奪したりして居る。之には農民の壯丁も加つて居る處から、甥が伯父の家に掠奪を行つたり。息子が親父の家に掠奪に出かけたりする樣な例すらもあると云ふことである。彼等は

武器を持つて居る間はパルチザンであるが、一旦武器を棄てゝ了へば普通の土民であるから、之を討伐するにも住民との區別がつかないので非常に困つて居る。從つて各地に散在して居るパルチザンの數などはもとより分らう筈はない。けれども彼等の間にはちやんと連絡があつて、一旦事が起つたら直ぐ勢力を集中して敵に當ることが出來る。四月四五日の武裝解除後、鐵道沿線三十キロ以内には武裝團體としては存在を許されないから、今の處武器を持つた者は沿線には居ない。其の代り武器を解いてしまへば出入が自由であるから、却つて武裝解除後になつて、ウスリー沿線の都市村落内には、パルチザンの徒が入込んで來て、密かに宣傳に從事して居ると云ふことである。アムール沿線は之と少しく事情を異にして鐵道が不通であり、河川の航行が自由でない爲に、今の處此の方面のパルチザンは何等の活動にも出ることが出來ない。けれども冬になつて結氷でもすると、彼等にとつては交通が自由になり、日本軍にとつては不自由な時であるから、此の時期をねらつて大に活躍するだらうと豫期されて居る。だから若し今に於て深く警戒しなければ第二第三のニコラエフスク事件を惹起すかも知れない狀況にある。

三、過激派の宣傳――宣傳網、排日劇

過激派の宣傳は今でも盛んに行はれて居るが、其の宣傳の方法は口頭宣傳と、文書宣傳と、興業物宣傳との三種に分れて居る。口頭宣傳とは面と向つて直接口より口に宣傳する方法で、之は何時如何なる處に於ても自由に出來得る宣傳である。文書宣傳には新聞紙と號外大の半切れ紙と、小冊子とビラの樣なものとを利用して、之も手廣く盛んに行はれて居る。其の內多くは唯で撒き散されて居るのもあるが、小冊子の樣なものは廉價で發賣して居る。それから興業物宣傳とはオペラ、活動、演劇等を通しての宣傳をさすので、之もなかなか盛んである。此種の興業物は各地に於て過激派の機關たる職業組合の手によつて經營されて居るので、主として宣傳用に供されて居る。茲に一二の例をとつて云ふならば浦鹽のオープシチエ・ドストウプヌイ・テアトルでは『街道の娘』と云ふオペレトカを演じて居たが、是れは資本家と勞働者との階級戰鬪を仕組んだものであつた。筋は茲に一人の橫暴工場主があつて、其の工場に使はれて居る職工の許婚女となつて居る、女工の容貌の美麗なるに迷ひ、其れを親父や許婚の夫の手から無理に奪ひ取つて、自分の玩弄

物にしてゐる。と、そこへ女工の親父や許婚の夫を先に立てゝ多くの職工がエワ（女工の名）を取り返しに來る。すると工場主は横暴にも彼等を打擲したり踏み倒したりして追ひ返してしまう。その内に女工は前非を悔ひ工場主の手を脱れて元の許婚の職工の處に歸つて、結局勞働者の勝利に歸すると云ふ筋である。此の種の宣傳劇の内には直接日本軍をあてこすつたものもある。ニコリスクのソエディイエニョンヌイ・サードで見たのであるが、此處では日本を諷した喜劇を演じて居た。其の筋はセミョノフと臨時政府とを夫婦に仕立て、彼等の間に夫婦喧嘩が始まると、日本が仲裁に入つて、いづれにも深く同情する様な顔を見せて、自己の野心を遂げようとするが、結局どちらからも其の野心を見破られて追ひ立てられることになる。が、いくら追ひ立てゝも日本人はまだ愚圖々々して居るので、仕舞には日本人が被つて居た帽子迄取り上げて室外へ突き出して了ひ、其の去つた後で夫婦は強く握手して仲直りすると云ふ筋である。極めて露骨なクダらない諷刺劇ではあるが、觀客は主として勞働者階級の男女であるから、却つて此の種の低級な物が大向ふの喝采を博して居ると云ふ風である。此の種の劇場は多く公園内に有つて、公園の入場券さへ買へば、特に劇場の入場券を買はなくとも、自由に觀劇が出來るから、此種の劇場は到る處滿員である。

日本兵に對する宣傳も度々行はれて居る様である。然し之は言語の通じない故に直接の口頭宣傳でなく、多くは翻譯した文書宣傳によるのであるから、それが發見次第直ぐに將校の爲に沒收されることになつて居る。けれども其の沒收される迄に敏捷な兵卒の中には早くも之を寫し取つて、後生大事に保存して居る者もあると云ふことである。

四、有産階級の運命――極度の窮迫と極度の享樂

一般の生活狀態は極めて悲慘である。永い間の戰亂、革命、内爭、政變等によつて經濟上の基礎は根柢より破壞され、ルーブルの暴落は殆んど底止する處を知らない有樣で、其れが爲露人の生活狀態は一體に慘めなものである。けれども其の内シベリヤの農民は先にも云ふが如く一種の有産階級で、自分の土地を自分の手で耕して其の收入を得、又餘りあれば之を賣つて金にすることも出來るので左程不自由を感じて居ない。唯彼等は少しでも餘裕の物質があれば、ボリセウイキーやパルチザンの

爲に、彼等若くは沒收さるゝ恐れがあるので、少しも貯蓄しようとしない。從つて一體に怠け勝で今日食ふだけの物しか作つて居ない。そこに農民の悲みがあり不平がある。それから都會の下級勞働者も左程困つて居ない。彼等には、馭者とか、車夫とか、人夫とか、運搬とか、相當の職業があり餘る程あるから、それにさへ從事すれば、今ヒ不自由なく暮すことが出來る。唯獨り中流以上の有産階級に至つては、今日生活上何等の目當がなく唯運命のまゝになり行く外仕方のない窮狀に苦しんで居る。彼等の中には財産を携へて、疾うに外國に亡命したものもあるが殘つて居る連中は既に其の所有金を使ひ果して、今では困つて居るものが多い。今日露國に於ては、何處でも文化的施設や經營は荒廢に歸し政治的乃至社會的生活は一切の活動を中止して居るので、有識有産階級に適當な職業が全く無くなつて居る。たとへ有つても報酬が僅少である上に、其の受くる處のルーブルが紙屑同樣であるから、如何程貰ふても今日生活を支へて行く事が出來ない。と云つて彼等は從來占めて居た地位上の誇りが有るから、下級勞働に着くことを欲しない。それには又今迄少しもその樣な職業に慣れて居らないので不便でもある。それでも背に腹は換へられないので窮迫の極度に達すれば、止むを得ず下級な勞働にもつかねばならぬ。ハバロフスク邊では元の或將官が馭者となり其の娘が淫賣婦の群に投じて漸く其の日其の日の生活を支へて居ると云ふことを聞いた。此種の生活上の悲劇は到る處に多いだらうと思はれる。現に今では行き詰つた生活難の爲に一家離散して親父は親父娘は娘と云ふ風に、各々其の好む處に從つて諸所方々へ落延びて行く外に仕方のない狀態になつて居る。私はハバロフスクからニコリスクに到る間若い二人の露西亞の令孃と同車したことがある。二人は今迄ハバロフスクで小學校の女教員を勤めて居たけれど、薄給で迚も口を糊するに足りないので、一人は浦鹽に、一人はハルビンに、職を求めて行くのだと云ふことであつた。然し浦鹽にしろハルビンにせよ同じ樣な狀態で、到底彼等に適當な職業がありさうもないから結局は糊口に困つて淫賣婦の群に投ずるか、若くは町より町、村より村と物乞をする流浪の身となるより外仕方がなからうと思ふ。斯樣にして露西亞の有識有産階級は將來段々と滅亡して行く運命を持つて居る。其の前途は誠に朝露の樣な果敢ないものではあるが、然し之が彼等にとつては免れ難い必然の運命であるかも知れない。

この樣な窮迫の狀態にありながら露西亞に於て はよく予盾

した現象に接することがある。即ち一方では困窮のドン底にありながら、一方では、公園、喫茶店、劇場等は盛裝した男女によつて滿員の盛況を呈して居る。かう云ふ現象は到底他國民の理解出來ない心理狀態であつて、獨り露西亞に於てのみ見る現象である。若し他の國民であつたら、幾年も幾年もあゝした境遇に置かれては、今頃は絶望の淵深く沈み、神經過敏に陷つて半狂人同樣の狀態に有るべき筈であるのに、露西亞人はそこへ行くと鈍重と云ふか、ノロマと云ふか、まだ／＼暢氣である。そして今日を如何に樂しく面白く送らうかと苦心して居る。奥地に入ると晝間は良家の子女にして洗足で徘徊して居る者を多く見受けることもあるが、夜間になると持つて居る限りの品を質屋に入れて、ピカ／＼した靴の一足でも買ふて公園や劇場に入つて、享樂に耽つて居ると云ふ有樣である。所謂宵越の金を使はないと云ふのが、持つて居る所の金や、入つて來る富の收入は、すつかり今日の内に使ひ果して、明日の運命などは少しも考へて居ない。そこへ行くと國家の滅亡や戰爭や生活難などは、彼等にとつて全く別問題である。之は露人特有の性情によるもので、彼等の所謂ニチエウオ主義から來る心理狀態である。それに今では幾分絶望觀も手傳つて、どうせかうなつては仕方がない。それが脫れ難い運命であるならば今更クヨ／＼したつて仕樣がない。寧ろ今日の此の刹那を出來得るだけ樂しく暮して行くに若くはない。さう云つた樣な心持からあゝした頽廢的な刹那的享樂主義を生み出した樣にも思はれる。それでも流石に疲弊困憊の空氣は爭はれず、レストランの如き金のかゝる場所は、極めて淋れはてゝ稀に訪づる人の顏を見ても、一種の淋しい不安の色を浮べて居る。であるから今日シベリヤの各都市に於て見る處の華やかな都會生活の一面は、決して眞實の希望の輝きでなく、謂はゞ夕陽の將に沈まんとして放てる最後の閃きの樣なもので、其の蔭には不安と、絶望と、疲憊と、沒落の色を宿して居る。

五、文化狀態——教育、宗教、道德、文藝

極東シベリヤの文化狀態は一體に荒廢に歸して居る。先づ教育の方面に就いて見るに、私の旅行中は丁度夏季休暇中であつたから、直接學校の授業を見ることが出來なかつたが、學校當局者に就いて聞く處によると、兎に角今でも或種の學校は開かれては居る樣であるが、然し一般生活難の爲に、子女を教育す

る丈の餘裕がなくなつて居る。それに學校用具たる筆、紙、墨が既に缺乏を告げて、假令有つても非常なる高價を呼んで居る。それは兎に角差當り教科書に困つて居る。今日教科書類は、露西亜では全然印刷が出來ないので、日本や上海で僅かに印刷して送つて居る様な有様であるが、それが又非常な高價で、生活難で苦んで居る露人の手では、到底購求することが出來ない。それが爲今では學生の數がずつと減少して極めて僅かしか通學して居ない状態である。それに學校教員が今日單に其の俸給のみで喰つて行かれないので他に轉職するものが多い。それやこれやで學校教育は、今後益々淋びれて行く一方である。

宗教は革命後暫くの間國民が自由放縦の生活に流れた爲著しく信仰心が衰へて居つたが、近頃は段々勃興して來る傾向が見えて居る。日曜祭日の際教會に行つて見ても、先づ七八分通りの人がある。ハルビンの様な處に行くと殆んど滿員で、立錐の餘地もない程の盛況を見せて居る。然し此の宗教心の向上は、必ずしもボリセウイキーに對する反動的精神の現はれではない謂はゞ苦しい時の神頼みと云つた様な、消極的心理から發した信仰である。つまり長い間打續いた戰亂や生活難の間に、色々悲慘な事實を經驗して、現世の果敢ないことを感じ、人間の事が到底頼むに足らないことを痛切に感じた結果、自然神に頼り神の御力にすがると云ふ心持になつたやうに思はれる。今日の宗教心の勃興はつまりさういふ一種厭世的の絶望觀から發したもので、其の内には積極的な、活動的な力を缺いて居る。之がもつと大きな國民的の宗教運動となつて、ボリセウイズムに當ら近には、まだまだ前途遼遠であらう。それはかりでなく今日露西亜の宗教家の間に、此の宗教的運動を指導して起つ程の大きな人格を缺いて居るのが何よりの不幸である。

宗教は今陳べる通り稍々勃興の兆を見せて居るにもかゝはらず、道徳状態は今日益々墮落に墮落を重ねて行く一方である。之は一見予盾して居る様ではあるが、元來露西亜人の實生活に於ては、宗教と道徳とは全く別物である。宗教心が如何に向上して居つても、道徳的生活の水準が極めて低級なのは、露西亜人の常である。今教會に入つて熱心に涙を流して祈禱し懺悔して居る者が、一旦教會の門を出ると、ウオーツカの臭に誘はれて、直ぐ居酒屋に飛込んで、飲んだくれた揚句の果には、喧嘩口論殺人をも辭さないと云つた風である。之に本來露國民の極端から極端に走る性癖から來るので、今日宗教心が向上して居ながら、道徳が墮落して居ると云ふ事は敢て怪しむに足らぬ現

象である。殊に今日家庭の紊亂、婦人の墮落は、其の極度に達して居る。之は一つには最近の生活難から來て居る現象で、今の所露西亞には寡婦生活の者が隨分に多い。永い間の戰亂中に男子は大抵戰死したので、寡婦一人の手で多くの女を養つて行かなければならない境遇にあるから、當り前では到底生活が出來ない。止むを得ず身を賣らなければならない境遇に陷つて居るものが餘程多くなつて居る。それと今一つには歐露や西部シベリヤから避難して來た者の內には、親の手許を離れた娘が澤山あつて、其等が適當な職業にも有り着かない內に、墮落して淫賣婦の群に投ずる處から、今では此の種の女は平素よりもずつと多くなつて居る。日の暮れ方から公園のベンチに腰をかけて、人待ち顏をして居るものや、可也の盛裝を凝らして街上をぶらついて居る女の多數は、皆此種の怪しげな連中である。そして其の相手となつて居るのは、先に米國軍であつたが、今では遺憾ながら一部の日本人若くは日本將校であるとの風評を耳にしたこともある。斯くして內外からの誘惑によつて婦人の貞操を蹂躙され、道德の基礎は根柢より破壞されつゝある有樣であるから、其の他の事は言ふ迄もなく荒廢を極めて居る。此の荒廢の裡より新しい露西亞が生れる迄には、果して幾十年を要することであらうか。

文藝思想上の生活に至つては、從來極東シベリヤには特に言ふ可き程のものはなかつた。が、最近浦鹽には歐露のボリセウイキー治下に於ける未來派文學の影響を受けて、未來派の運動は可也盛んである。彼等の內には詩人も畫家も居るが、詩人の內にはモスクワから來た有名なブルリユクを始め目下浦鹽臨時政府の內務次長をして居る、トレチヤコフ、ルスター通信社の社長たるゴンチヤル、從來浦鹽詩人として聞えて居つたベネデイクト・マルト等がある。私は浦鹽に滯在中大阪每日の黑田君の電報紹介によつて過激派の宣傳機關として見られて居る、ルスター通信社にゴンチヤル氏を訪問した。其の時ゴンチヤル氏は日本のインテリゲンチヤで特に文壇に籍を有する人に會ふのは始めてゞあると云ふて、非常に喜んで私を迎へてくれた。ゴンチヤル氏は年の頃三十內外の未だ若々しい大學出の元氣な愉快な男で、詩人肌の至つて氣持のよい人であつた。一體に露西亞人系のボリセウイキーは、多く大學出の教育のある若いインテリゲンチヤで、會つて見た印象では、反過激派の人々などよりも遙かに氣持がよい樣に思はれる。ゴンチヤル氏の語る處によれば、浦鹽の未來派藝術家は十數人も有つて、每週一度に必ずゾ

ロトイ・ローグと云ふレストランに會合を催ふして、お互の親睦を計る外に、時には繪畫展覧會と開いたり、又講演會を開いたりして居る。更に進んで國民大學を開設して民衆の敎育に當り勞働夜學校を設けて勞働者の指導に任ずる樣な計畫を立てゝ寄々相談して居るが、今の處資金がないので迚も實現出來さうもないと言つて、ゴンチャル氏は大にこぼして居た。最近彼等の手によつて可成大型の文藝雜誌『トウオルチエスドゥウオ』創作）が發行されて、既に二號迄出て居る。未だ内容は詳しく讀んで居ないが、皆が筆を揃へて眞劍になつて、極東に於ける此の唯一の文藝思想活動の機關に向つて精力を集中し、大に無產階級文化の爲に氣を吐いて居る。ゴンチャル氏は私が浦鹽に來たのは又とないよい機會であるから、早速其の晩でも皆を集めて文藝會を開きたいから、是非出席してくれないかと云ふ事であつたが、生憎其の晩は浦鹽日報社で私の爲に歡迎會を開くことになつて居たから、止むを得ずゴンチャル氏の厚意を辭さなければならなかつた。しかも其の翌日私は浦鹽を出發しなければならなかつたので、浦鹽の文藝家達と、親しく談話を交へる機會を得なかつたのは、返す／＼も殘念であるが、ゴンチャル氏とは將來文藝上の批評など、互に交換する約束だけはつけて來た

兎に角此の一派の人々は、未だ浦鹽の社會に一大勢力を形作る迄には至つて居らないけれども、將來文藝思想方面に於て極東シベリヤの爲に、又彼等が直接に任じて居るプロレタリー文化の爲に、貢獻する處が多いだらうと思はれる。然し今陳べた未來派の運動は今の處單に浦鹽にのみ止まつて居て、未だ極東シベリヤの他の方には及んで居ない。又其等の地方では何等文藝思想上の生活を見ることが出來なかつたが、獨り演劇、音樂、舞踏の類は到る處に於て盛んに行はれて居る。先に陳べた職業組合の經營に係る過激派宣傳用の演劇の外、更に反過激派の經營にかゝる劇場もあつて、相當の賑ひを呈してゐる。殊にハルビンの如き反過激派の色彩濃厚にして、今でも帝政時代の空氣が漲つて居るブルジョアと官吏との多い町では、昔に劣らぬ華かな都會生活が見られた。殊にハルビンには歐露から逃れて來た相當な地位の俳優や、音樂家や、舞踏家が比較的多いので、此處では相當に立派な演劇を見ることも出來、音樂を聞くことも出來る。現に私がハルビンに滯在した僅か數日の間に、チエーホフの『櫻の園』とゴーゴリの『檢察官』とが舞臺に上つてそれが相當の成功を收めたのは最も嬉しかつた事實の一つである。音樂も演劇に劣らず盛んで、凡そ一週に二、三度は必ず大

仕掛のシムホニーコンサートがあつて、グリンカ、チャイコーフスキー、リムスキー・コルサコフ等を始め、西歐近代樂ではウヱーベル、グリーグ、ゴリチルマン、スペンチアロフ等の名曲を聞くことが出來る。そこへ行くと露西亞人は極めて呑氣なもので、國家はあゝした混亂の極度にありながら、一方では斯う云ふ藝術を樂しむ餘裕の有るのを見て、私は衷心より露西亞人を羨まずには居られなかつた。

六、南京虫と支那兵、パルチザンと支那船

最後に極東シベリヤの交通運輸、商取引物資供給の狀況に就て少しく附け加へて置く。アムール線は大鐵橋破壞の爲に、何時通ずるか分らないけれど、ウスリー線と東支線とは、一日に一回か二回必ず正則的に通じて居る。其の内ウスリー線は、浦鹽よりイマン迄は、日本軍の管理に屬して、日本側によつて運轉され、總て旅客よりは運賃を徴收しないことになつて居る。其代り軍用列車として、單に軍事上の輸送をする丈で、他の物資を輸送する様な狀態迄には達してゐない。イマンからハバロフスク迄が露西亞側の管理に屬して、露西亞側で運轉して居るが、露西亞側はウスリー線全體を自己の手に收めんとして、屢々交渉して居るけれど、日本軍が之に應じない爲非常に困つて居る。概してウスリー線の客車は、こゝ數年の間一度も掃除したことのない様な狀態で塵は山と積り、座席の布地は一等席でも二等席でも殘らず剝ぎ取られて、其の不潔なること言語に絶し、旅客は毛布、食器、茶器、食料等を携帶しなければ旅行することの出來ない様な狀況である。一寸とした食料位は各驛に於ても賣つては居るが、一面に蠅が附着してゐて、とても買つて食ふ氣にはなれない。山なすクベーの塵埃は未だ我慢することが出來るが、南京虫の襲撃に至つてはたまらない。それに線路の凸凹が甚だしく、列車の動搖從つて烈しく、睡眠など思ひもよらない。ウスリー線に比較すると、東支線は未だ遙かに優つて居る。けれども此の方を今では全く支那側の權内にあるので、支那兵の跋扈が隨分甚しい。一等室であらうが二等室であらうが、無遠慮に飛込んで來て、勝手な振舞をするので、旅客の迷惑は此の上もない。幾許汚なくともウスリー線の方がまだ氣持がよい様に思ふた。

極東の商取引は先の見越がつかないのと、其れに金融機關杜絶の爲、殆んど中止の狀態である。ハルビン邊は、他の地方に

比して幾分か動いては居るもの丶、各商店共大きな取引がないので、店員は殆んど遊んで居る様な狀態で、今の處冗員淘汰に苦しんで居る。

物資は各地とも思ふた程缺乏を告げて居ない。浦鹽の如き船着場には支那のヂャンク船によつて物資が輸入され、バザールには常に相當の物資が絶えない。食料品の如き物によつては、却つて内地より安いものがある。然し奧地に入ると、流石に缺乏の狀態も見える様だが、兎に角是迄の處は例の中央購買組合によつて、多少物資が供給されて居つたのである。唯今日の處資金が缺乏して來たので、中央購買組合の供給も思ふ様に行かなくなつて居るが、其の代りシベリヤ奧地には、支那船が滿洲より物資を積んで、松花江を遡つて、アムール江に出で、アムールを上下して各地に物資を供給して居るので、其れ程甚しい缺乏を感じて居ない。アムール沿線のパルチザンは、日本や露西亞側の船と見れば、直ぐに其れを拘留して捕獲するのであるが、支那の船には手を下さず、自由に航行されて居る。之は彼等自身の便利から來て居ることは云ふ迄もないが、一面に於ては露支兩國の間に、或程度の通商が事實上成立つて居ることを證するもので有る、勿論奧地に於ける取引は貨幣缺乏の爲物々交換を爲して居る様である。

七、「誰の罪」——撤兵と極東の赤化、新對露策の必要

之を要するに極東西伯利は歐露と同じく最後の點線に近づいて居る、道徳は根柢より破壞され、文化は頽廢し、凡ての施設は荒廢に歸し、一切の經營は中絶して居る。都市に入つて目貫の場所に行けば、大きな建物が慘澹たる破壞の跡を留めて、徒らに殘骸を空際に描いて居る。鐵道沿線に入れば、汽鑵車や客車や貨車やレールの殘骸が山なすばかり沿道に晒されて居る。江上に舟を乘り出せば、アムール鐵橋の如き數里に亘る大鐵橋が中央のあたり二桁も物凄く大河の眞中に落ち込んで居る。斯様に至る所過去の文化の生々しき殘骸の横はるのを觀ては、曾て偉大であつたロシヤのために一掬の涙なきを得なかつた、ロシヤの恢復は決してこ丶二十年や三十年の問題でなくして、五十年六十年乃至百年を要することゝ思ふ。從つて極東シベリヤの如きは長く落着く所を知らないで、動搖に動搖を重ね、混亂に混亂を加えて、我が日本に取つては永久の煩ひとなるべき地帶であらう。曾てゲルツエンは『誰が罪』と題して一家庭の悲劇

を取扱ひ、その中に三人の生活の境遇を描き出して、抑も是れは誰の罪であるかと問ふた。ロシヤ今日の頽廢狀態に對しては、ロシヤ自身の罪は素より免かれないが、聯合國も亦全然責任が無いとは言へない。聯合國が寄つたかつてロシヤを何うしやうの斯うしやうのしたのがそも〳〵の誤りで、初めからロシヤの事はロシヤ人に委せておいたら今頃は何うにかなつてゐたに違ひない。ボリシエヴイキイならボリシエヴイキイで早く統一されて、今頃はそろ〳〵彼等に對する反動が起りかけて、早く片が附いたかも知れない。何時までもロシヤをあゝした混亂狀態に導いたのは慥かに聯合國の罪である。勿論極東にボリシエヴイキイが跋扈するやうになれば滿鮮國境に對する脅威には違ひない。けれどもロシヤ側から言へば、それは日本の問題であつてロシヤの問題ではない。ロシヤ人としてロシヤの事を考ふる時、何人も統一ロシヤを望むのは自然の情である。極東の自治獨立、分割などは決して彼等衷心の希望ではない。表面極東の獨立を望んで居る者でも、これは爲にする一時の政策であつて心の底を叩いて見れば矢張りロシヤの統一を望んで居る、日本軍のザバイカル撤退を見て之を惜しむやうな顔をするのはほんの表面だけのことであつて、内心では喜んで居る。排日感は依然強烈な色調を呈して、だん〳〵惡化して行く傾向さへ見える之に對して我國では何等の緩和策も講じてゐない。一方では僅かな施療程度の慈善ぐらゐで彼等の歡心を買はうとするのは大間違ひで、却つて露人の反感をそゝるばかりである。此の點から言つても日本の對露策は慥かに世界的人道的背景を缺いて居るやうに思はれる。要するに極東西伯利を行く所まで行つたら、今一度ボリシエヴイキイの洗禮を浴びる狀況にある。たゞボリシエウイキイの生命が永續的のものであるか何うかは大なる疑問であつて之に就ては更めて論じたいと思つて居る。が、今日我邦の立場としては一旦潔く軍隊を引揚げる方がよい。長い間の單調な平原の生活は餘り賞めたものでもあるまい。退屈の餘り動もすればシベリヤ風に化し去らんとする軍の空氣を一新する上から言つてもその方が得策である。その結果ボリシエウイズムの東漸は止むを得ないが、それは我に相當の準備さへあれば何等恐るゝに足らぬ。若しまたボリシエウイキイにして我が滿鮮の國境を犯すやうなことがあれば、その時こそ堂々大兵を繰出して彼等を討伐しても宜いではないか。それこそ名目の立つ出征で、誰を憚かる必要もないのである。今のやうに根柢の確立しない微温的な對露策の下に於ては軍の行動も自由でないだらうし、また之に就いては軍の方でも大分不平があるやうだから、この際一旦撤兵を決行して、新たに對露策を確立しては何うであらう。この點特に當局の一考を煩はしたいのである。(完)

レーニンの革命戰略

—(勞農政府を支持する三つの力)—

大阪每日新聞
東京日日新聞 記者　布施勝治

○

余は今度の訪露に際して赤色露國に三ツの偉大なる力が動いて居るのを目擊し且つ大にそれに感歎して來たのである、三ツの偉大なる力とは何であるか、曰く（第一）露國民の困苦缺乏に耐える陰忍力、曰く（第二）過激派の土俵際の持久力、曰く（第三）レーニンの强情一天張りの中央集權力の三ツが即ちそれである。

○

過激派はカピタリズムからコンムニズムへ移るのに何うしても或る期間勞農專制時代と云ふ階梯を昇らなければならぬと云ひ自ら同專制を敷きその局に當つて居る。

勞農專制とは何であるか、言ふ迄でも無い勞農階級がカピタリズムの天下を打ち壞して反對黨を撲滅し、ジノギエフの云ふた所謂「新らしいコンミユン家屋の敷地の掃除と地ならし」をやり更らに一步を進めて遮二無二コンミユン家屋を建てやうと勞農階級が大馬力を出して大奮鬪する時代を指すのであつて、赤色露西亞の現狀が即ちそれである。

掃除が濟み、地ならしが出來、その上に家屋が建つて了へばこそ、その中で安樂な生活が出來るのであるが、革命當初の一二年間は掃除と地ならしで打ち過ぎ、次いで建設時期に入つたとは云ふもの丶サウエートと云ふ土臺が出來、レーニンと云ふ大黑柱が建つた丈けで屋根も壁も將た造作もまだ〳〵完成迄でには日が遠い、で今尙ほ勞農專制時代にある露國の人民は安樂生活どころか風雨雪霜に洒されるは言ふ迄でも無く、あるとあらゆる困苦缺乏を忍ばなければならぬ。鐵道の諸機關は紊亂して交通が不規則となり、物資が缺乏して幾多の人民が履くに靴無く、着るに衣無しと云つた樣な慘憺たる狀態にある、余に最も痛切な印象を與へたのは西伯利沿道各地に跣足と而して散髮

の婦人の數多見受けられたことである、跣足は靴の缺乏の結果で散髮は昨冬猖獗を極めた發疹窒扶斯の結果である、又或る地方では食鹽の大缺乏で驛の食堂へ行つても鹽氣のないソップが出る、その邊では食物の旨いまづいを尋ねる代りに「鹽氣があるか無いか」と尋ねるのである、以て如何に困缺苦乏の苦痛が激しいかゞ察せられる譯である。

　而して此の慘憺たる勞働專制が出來てからもう足掛け三年を經たのみならず。今後も長く持續するやうな勢である、此の間に於ける人民一般の困苦缺乏は一方でない、長い間の戰爭と革命とそれに伴ふ饑饉や流行病で死んだものゝ數丈けでも三千萬人(殆んど我帝國の總人口の半數に達したと云はれて居る)それに加へて戰爭と革命後の經濟機關の亂脈、寒氣、饑饉、イヤハヤ泣つ面に蜂どころの騷ぎでない、八百八難が一時に露國を襲つて來たのである、が、露國人はヂツとそれを忍んで來た、今も尚ほ忍びつゝある、又今後も忍ばうとして居る、その隱忍力の偉大サー、到底外國人の思ひも及ばぬところである、斯く云ふ余の如きも赤露旅行中例の黒パンと粟の粥で辛抱したのを始めとして幾多の缺乏と戰ひ、且つそれが露國人の忍耐力の試驗ともなると考へて寧ろ興味を以つて之れを忍んで來たので一層露國人の辛抱力の偉大なるに敬服させられたのである、尤も之れは露國の人民が從來のブルヂョアは別だが大多數の下層民――今日の上層民――は元來程度の極めて低い生活をして粗衣粗食に慣れて居たと今一ツ(第二)神經が間拔けて遲鈍であると云ふ干繋もある、がそれにしてもアの隱忍力は驚ろくべきものであつて、もし之れが他の國民であつたら長くとも革命の二年目頃には參つてゐたに相違ない。

　惟ふに露西亞は北歐の寒國で且つ廣い原野の國である、寒氣は露國人の爲めに隱忍力を鍛へ、廣い原野は大ザツパな破天荒事を一氣呵成的にやると云ふ雄大な剛氣を養つて來たのである、さればこそ、露國人は一面に勞農專制と云ふ大膽無比の政治を遮二無二押し通うしつゝ他面あらゆる困苦と缺乏とを何所迄でも隱忍して行くのである。

○

　過激派、從前のボリシエギキーにして今日のコンムニスト、一名レーニン黨に就いて余が平素最も感服して居るのは彼等が失敗に失敗を重ねて危急死亡殆んど風前の燈火！　いやもうとても駄目だ！　と云ふ樣な危機に瀕して尚ほよく泰然自若として狼狽せず落膽せず。何とかして敗を轉じて勝となすの策を廻ら

す……平たく言へば土俵際でウンと持ちこたえて踏張る力の强いことである。

過激派が天下を取つて以來土俵際迄で押しつめられたことが少くとも二度あつた、一度は一九一八年の春獨逸軍がペトログラードに迫つた時で二度目はデニキン軍が莫斯科を威嚇し、ユデニツチ軍がペトログラードに肉薄した昨年秋のことであつた、兩度とも勞農政府は全く風前の燈火であつて前回にはレーニン始め勞農政府がペトログラードから莫斯科に逃げ、次回には一時土耳機斯坦へ逃亡すると云ふ説が傳はつた……程に危ふかつたのであたりまへならばもうアノ邊でヘコ垂れるところであつたが、そこをレーニンが土俵際でウンと蠻張り。遂々持ちこたえたばかりでなく一度目にはブレスト・リトウフスクの講和で獨逸を釣り、後で恐ろしい背負投の手を喰はし、二度目には猛烈な逆襲でユデニツチ軍をして所謂ユデニツチ將軍一人の軍となし、大規模のデニキン軍をして少規模のウランゲル軍にして了つた。

昨秋ユデニツチ軍の露都進撃には余自身も從軍して同軍の前進から敗退への早變りの藝當にスツカリ中てられたのみならず共に悲慘な退却――中途まで貨物列車の中に鮨詰め、あとの四十露里の道程は徒歩で……を餘儀なくされたのであつた、當時ユデニチツ軍の先鋒隊が露都のセント・アイザツク寺院の高塔が見へる所迄で押し寄せ、莫斯科ではもう「露都は落ちた」ものとして居つた程危ふかつたのであつた、然るに危機一髪と云ふ間際にトロツキーが裝甲列車とコンミユニスト隊を率ゐてやつて來ると、絶望も絶望、たゞもう青くなつて居つた赤色露都が俄然一夜にして蘇生し急に市内勞働者の總動員をやる、「露國革命の精華と誇り」だと云ふ「露都を飽くまで死守するのだ」と力み出す、上を下への大騷ぎをやつて逆襲に轉ずる……ともと/\實力の無いユデニツチ軍の事だから忽ちまくし立てられて總退却となり、總敗北となり、總崩れとなつて了つた、がアノ危機一髪の間際に何うしてあれ丈けの踏張力が出るのであらう!? とガツチナで三方包圍攻撃を喰つて危ふく逃れた余はその時ツク/\過激派の踏張力の强いのに驚歎したと同時に過激派に此の踏張力のある所以が何であるか を考へたのである。

余のそれ迄での經驗によつて觀るとそれには少くとも三ツの理由がある樣に思はれる、即ち

(第一)レーニンやトロツキーを始め過激派の頭分連中は揃ひも揃つて皆何十年間ツアール專制の壓迫の下に國内にあつては

獄中又は流刑地の辛酸を嘗め、外國に逃れては流浪生活の苦勞を忍んだ……所謂酸いも辛いも噛み分けた言はゞ海千山千の苦勞人ばかりで、その間に心膽を鍛へ修養を積んだ丈けあつて皆驚ろくべき膽力がある、忍耐力がある、糞度胸もある……と云つた樣な譯で此の點普通心太式に經上つた官僚政治家等の到底企及すべからざる所である。

（第二）過激派は元來勞働階級を地盤として立つた政黨である、シテ勞働階級は概して無資産、無一文である、だから彼等には何んな逆境に瀕しても「イクラ失敗つてもとの默阿彌になる迄でのことだ、やれる所迄でやれ」と云ふ捨鉢的の糞度胸と向ふ見ずの蠻勇があり、而して未練がましい所が無い、否な未練を殘す對手がない。

（第三）過激派は之れ迄で反過激派、又革命黨等の政敵に對して幾度か恐怖政策を斷行し、虐殺もやつた、蠻行もやつた、あるとあらゆる壓迫をやつた、而してその結果過激派は四方に不倶戴天の敵を作り、此等の敵から常に復讐の機會を狙はれて居る、で過激派は勞農政權一度倒れたら最後、彼等の生命はその日限りなくなると云ふことを自覺して居る、必らず手酷しい復讐を受ける……赤色恐怖（テラー）に對してそれに幾倍もする白色恐怖が報ひられると云ふことを覺悟して居る、而して此の自覺と覺悟とが彼等の爲めに「土俵際で踏張る力」を與へたのである、もし踏ン張り損ねたら踏み潰されるにきまつて居る、何所までももちこたえなければならぬ、でレーニンはつまり今迄で過激派のやつた虐政に對する政敵の怨恨と復讐熱とを巧みに利用して過激派の爲めに背水の陣を敷いたのであつて、之れが爲めに過激派はあたりまへならばもう駄目と云ふ際どい所でも持ちこたえるので、いつも乍らレーニンの革命戰略は老猾巧妙を極めて感服の他ない。

斯くして勞農政權が如何なる危急存亡に瀕しても（第一）親分連中が泰然自若として動かず、而して（第二）乾兒供が向ふ見ずの蠻勇揃ひである上に（第三）背水の陣を敷かれて居るから過激派は何所迄でも持ちこたえる、土俵際でウンと踏張る力が強いのである。

○

隱忍力の馬鹿強い露國民の上に立つて居る踏張力の何所までも強い過激派のその又上に立つて赤色の天下に號令して居るのがレーニンである、此の粗野にして木訥、ゴツ／＼した小柄な禿頭男が！　如何うして荒つぽい猪武者の寄り合である過激派

を率ゐて宛然手足の如く動かし、一億の大國民を統治して行くとが出來るか。少しく研究したものは誰でも先づレーニンの中央集權力の絶大なるに驚歎し、アレだけの力があればこそあれ丈けの偉業が成し遂げられ、又爲されつゝあることを感ずるのである。

「中央集權力」と云ふと一寸分りがよくないかも知れぬが、之れを普通の政治の遣り方で云ふと「獨裁專制」となる譯だが、勞農政府は兎も角も過激派と云ふ政黨に根柢を置きサウエートと云ふ議會の如き代議機關に依つて政治をやるのだから今日の過激派の政治を「勞農の階級專制」とは云ふことは出來てもレーニン一個の獨裁專制と云ふのは適當でない樣に思はれる、けれどもサウエートが殆んど過激派の意の如く動き、而してその過激派がレーニンに驅使されると云つた樣な譯であるから結局事實に於て勞農の階級專制はレーニンの獨裁專制になつて來る譯である、が過激派は之れをレーニンの專制と云はずに「中央集權」と云つて居る。

○

余のレーニンに就いての最も深い印象は(第一)彼の風貌性格共に東洋人に似て居ることゝ(第二)彼が理論に深いと同時に實行の方にも長じて居ることとである。

過激派の領袖中にトロツキー、ジノギエフ等を始めとして幾多の猶太人があるのでレーニン亦猶太人ではないかと云ふものがある、けれども彼が純粹の大露西亞人であることは彼の本姓がウリヤーノフと云ふ大露西亞姓であることでも明瞭である又レーニンの父はシンビールスクの國民學校長で彼の兄は歷山三世暗殺陰謀罪で死刑に處せられたことは今尙ほ世人の記憶に殘つて居るところである、が余の彼と接する度毎に彼の風貌のあまりに東洋人に似て居るのでウリアーノフ一族には東洋人の血が混じて居るのではないかと思ふのである、否な余のみでない、余がレワールに居た頃同地に來た過激派當局の一人も「レーニンは日本人に似て居る」と云つたことさへある、實に彼のひき締つた小柄な躰軀、その圓い禿頭、顏の概して扁平な所に頰骨の少しく高く、鼻の比較的圓く廣い所などは何う見ても東洋式である、尤も彼の東洋人に似て居ることが單に風貌丈けであつたら固より論ずるに足らぬが彼の性格の中にも東洋式の豪傑風がある。露國の過激派は何と云ふても荒つぽい連中の寄つたかりであつて中々理屈一方で治まる筈のものでない、所謂「筋ツこばつた筋肉」とか「マメだらけの腕ッ節」など云ふことを誇りと

して居る……日本などで言へば土方氣質……少くとも天下を取つた當初はそんな風の連中であつた、之れをレーニンが統率して文句を言はせず、ギユツと抑へて殆んど我が手足の如く動かして居るのは畢竟レーニンに東洋的の親分肌があつて彼の配下の勞働者か理の是非を問はず「レーニン御大の言ふことなら何でも彼でも眞理だ、親分の指圖なら何所までも行かう」と云つた樣な氣合になつて來るので此の點レーニンは何うしても東洋式の豪傑、親分と云はなければならぬ。

　レーニンに會つて見ると粗野な木訥漢でトロツキーの言ふた「利口で頑固な土百姓」としか見へない、向ひ合つて坐り乍らチツと彼のソバカスだらけの顏を見るとこんな百姓面をして居る男に何うして學問なんかあるかと思はれる、又話しを交へても、「日本では子供を撲たぬと聞いたが、それは眞個か」「君の御父さんは何をして居られるか」と云つた樣な極めて通俗的な質問をするので何んだか田舍出の百姓爺とでも話しをして居る樣な氣持がする、けれどもレーニンの學殖の如何に深いかは彼の是迄での苦學振りとその幾多の著作とに見ても明らかなる所である、彼の海外流浪時代の多くは外國の圖書館でその日を送つたと云ひ、又彼の巴里に居た頃、二年間ブツ通して巴里の圖書館に通ひ通した、のみならずその幾萬卷の書物を讀破した非凡の讀書力は當時佛國の學者連をしてアツと云はしめたと云ふ逸話もある、又レーニンが西伯利流謫地で書いた「露國に於けるカピタリズムの發達」と云ふ著書の出た時有名なコワレフスキー博士が手を拍つて「レーニンは立派な大學教授（プロフエツサー）になれる」と云つて賛歎したとのことである、がレーニンは大學教授にはならずジノギエフの言ふた「名教授中の名教授よりも更らにより偉大なる勞働者の親分」になつて了つた。

　レーニンが大學教授にならずに親分になつたのは畢竟彼が理論丈けで滿足が出來ずその理論を何うしても實行しなければならぬと云ふ英雄的覇氣があつたに因るので彼の今日ある所以は要するに彼がマルクシズムの哲理を新らしい複雜な時代に於て調子外れの露西亞國民性に適合して最も巧みに實行したのにある、だからもしレーニンから「實行」を拔きにしたならばレーニンは後世學者もしくは大賢聖人と云はれたかも知れぬがそれ丈けに止まつたであらうし又彼が學問がなくて實行一方の男であつたら猪武者的蠻勇政治家に見られて唯だ世界恐怖の的となつたに過ぎなかつたであらう、然るに彼は理論と實行の兩刀使ひに巧みである、「學問でも來い、實行でも來い」と云ふ彼の

矢面に立ち得るものは廣い世界にロイド・ジョージ位いなものである・・・などと彼の乾兒達は豪語して居る樣な譯である。

○

ところが彼の實行方面即ち施政の要訣は何かと云ふとは一にも集中、二にも集中、三にも集中で、政治で御座れ、軍事で御座れ、經濟で御座れ、何でもかでも中央集權政策で押し通す、言ひ換へれば國政の大綱一切を自分一個の手に握つて居るので過激派露國を「レーニンの天下だ!」と云ふのもつまりは彼の中央集權政策の徹底を言つたものである。

元來露國人は頭から抑へてかゝらぬと兎角放縱に流れ易い國民で之れを統治するには何うしても獨裁專制でなくてはならぬと云ふことはロマノフ王朝三百年の施政の經驗に徵して明らかなところである、革命の當初ミリユコーフやケレンスキーなどが馬鹿にハイカラ振つて英米式の所謂「自由民主」主義の政治を露國にやらうとしたのは誠に拙劣極まるやり方でその失敗に終つたのは無理もない、當然のことであつた、之れに反し彼等よりも更に左方にあるレーニンが露國民衆の統治策を英米のハイカラ政治家に習はずしてザールの專制政治家に學んだのは賢明と云ふべく何と云つてもレーニン丈けのことはある、然らば彼は如何にして這個中央集權政策を斷行し得たか如何にして自己一身の手に國政の大綱一切を集中し得たか。

惟ふにレーニンの中央集權政策の成功に就いては少くとも二ツの主なる原因がある、即ちレーニンが天下を取つた當初來渾身の智囊を絞つて各方面に亙り嚴格なる紀律の恢復に努めた、即ち赤軍にありては軍紀、工場にあつては勞働紀律、過激派內部にあつては黨紀を敷いて何うでもこうでも赤兵なり、勞働者なり、黨員なり、萬事につけその首領の命之れ從はなければならぬ樣にしたのがその第一因で第二因はレーニンの人格の中に前說の如く東洋式の親分肌があつて人を引き附け人を悅服せしめる一種の力があることで、そこがトロツキー始め他の過激派領袖の及ばぬところで又レーニンの今日過激派の天下に於て中心人物である所以に外ならぬ。

レーニンは斯くして一面紀律を以て强制的に權力を集中すると同時に他面自己の人格の力で任意的に人しをて我れに倚らしめたのであつて、何と云つても彼は勞農露國の大黑柱、而も太く堅い大黑柱である。

○

過激派の天下は何うして是れ迄で持ちこたえて來たが、普通

の常識で考へると到底アンナ無鐵砲な政治が續く筈は無いと云ひ度いところであるがレーニン政府は今も尙ほその存在を續けて居る。それは目前の事實である、幾度か危機に瀕した勞農政府は何うして倒れずに續いて來たか、幾度か逃亡を傳へられたレーニンやトロツキーが何うしてその椅子に座つたきり動かぬのであるか？ それには幾多他にも色々の理由があらう、が余の觀て來た所に依つて判斷すれば、その最も大なる理由は前記三個の偉大なる力にあると云ひ度い。

刻下の露國を平たく譬へて云ふとレーニンと云ふ不世出の名國手が過激派六十萬人の助手を驅使して露國民と云ふ國體の大きい病人に對して大々的、根本的の外科手術をやつて居る樣なものである。

若し此の病人が神經が過敏で身體が脆弱、到底此の大手術に堪え得ず折角の手術もその中途で病人が往生でもしたら何んにもならぬ、而して手術に當る過激派が氣が弱くて、血が流れたり病人の呻つたりするのを聞いて靑くなる樣であつたら手術は必らず失敗するに定まつて居る、又手術の主任として自ら刀を取つて立つたレーニンが下手な藪醫者で且つ六十萬人の助手を驅使する丈けの望みと技術が無かつたら病人は結局助からぬ筈である。

然るに病人たる露國民は神經が鈍く且つ絕大の忍耐力がある、而して手術に當る過激派は荒つぽい膽玉の太い連中ばかりでその上に立つレーニンはアノ通りの恐ろしく强い名國手だから空前の大手術―大革命が兎も角も成就され且つ續いて行くのである、而して今後いつ迄で續くか、病人が手術を耐え通して新らしいコンミユン生涯に入ることが出來るか、それとも不具になるか、或は中途で往生するか、それも亦多く如上三個の力の消長如何に繋る問題である。(九月十日記)

咬豆茶話

□綾部の狂變イヤ綾部の神様の信仰者は案外に少く、天理教が五百萬の信徒と號するに關らず、大本教は二十萬内外ヂヤゲナ。シカシ御大王仁三郎の私財は約七十萬圓とは京都府警察部の調査、ソレガ善男善女が審窓でお賽錢箱に抛り込んだ浄財であるかは疑問だ。

□一體、コノ王仁三郎なるものに一世を指導すべき宗教哲學もなければ、道徳的人格の中心たり得べき素質もない、全く猶太人の世迷言見タイに神がかく／＼申さるゾヨと丸でアテつぽうの太甚しいものだ、豫言の内容なぞは宛然市井の賣卜者同様のもので、今更新らしく穿鑿するのも大人氣ない話だが。

□先づ第一に、鶴石十二集めれば天下を取るとの妄信から鶴石を集めてをることだ、ソコイ等邊りが一寸お稲荷様級のものだ、出口の神様が最敬禮しておる、並等の人間の神様が二人ある、一は京都府の資産家梅田信之、一は東京で澁澤男と共に實業界での大立物であつた中野武營の實息武二君。コノ御兩所様何れも數萬の寄附をやつたさうだ。

□そして出口の第一の相談役は小森雄介君。君はさる富豪の女婿で、一時は逓信大臣秘書官として、後藤男の旗下に參じたこともある。富豪の女婿どころが神様崇拜の的だろうとのことだ。その他知名の信者に、前明治製糖專務の高木鐵男、淺野中將、小牧中佐、淺野憑虚、小山内薫、谷本富といつた顔振れ。

□日本人は薄つぺらである、マダ本物のマルクスも諒解しないでいて、モウ唯物主義には飽いた、唯物より唯心主義へなぞとの囈言が何處にも彼處にも聞ゆる、存外つまらぬ大本教が彼是、問題にされるのもこの飽つぽイ日本人の弱みがつけこみ所カナ。

□だが、一面には眞面目に宗教哲學を研究するものが殖えて來た、日本の講習會中での最高權威と稱さるゝ京都大學の夏期講演でも今年は京大の十博士の講演中で波多野博士の宗教哲學が尤も聽講者が多く、之に次いで新城博士の宇宙進化論で、市村博士の比較西學論なぞは波多野博士の十分一の聽講者もなかつた。

□そして宗教及進化論の聽講者の三分の一は婦人であつて、婦人生理學の聽講者の三分の一が男子であることは餘程異つた現象だ、これでみると日本人も形而上學より基礎科學、基礎哲學に這入りかけた、ナニ樣智識の憧憬には結構なことだ。

□毎度引合に出してすまんが、大杉榮君が鎌倉の居で、不圖したことから知合になつた中學の四年生の可愛い男がをつた、ところがこの男が二回程大杉宅に遊びに行つた所が早速警察部の抗議で中學校は放逐された、勿論その男は、社會主義の社…の字の意義も解らねば、大杉君を社會主義者であるとも知らぬ頑是ない少年だ。

□そこで、そのものは、詮方なく京都の高島屋と云ふチイとばかりは有名な呉服店か、煙草屋に圖案係として友人と共に採用さるゝことになつた。所が京都府警察部からの抗議で高島屋も首になつてしまつた。中學生の一友人も大杉君とは一面の識もなく、また、社會主義には何等の關係筋もないのだ。とそして中學を逐れたものは有名な資産家の愛甥だ。

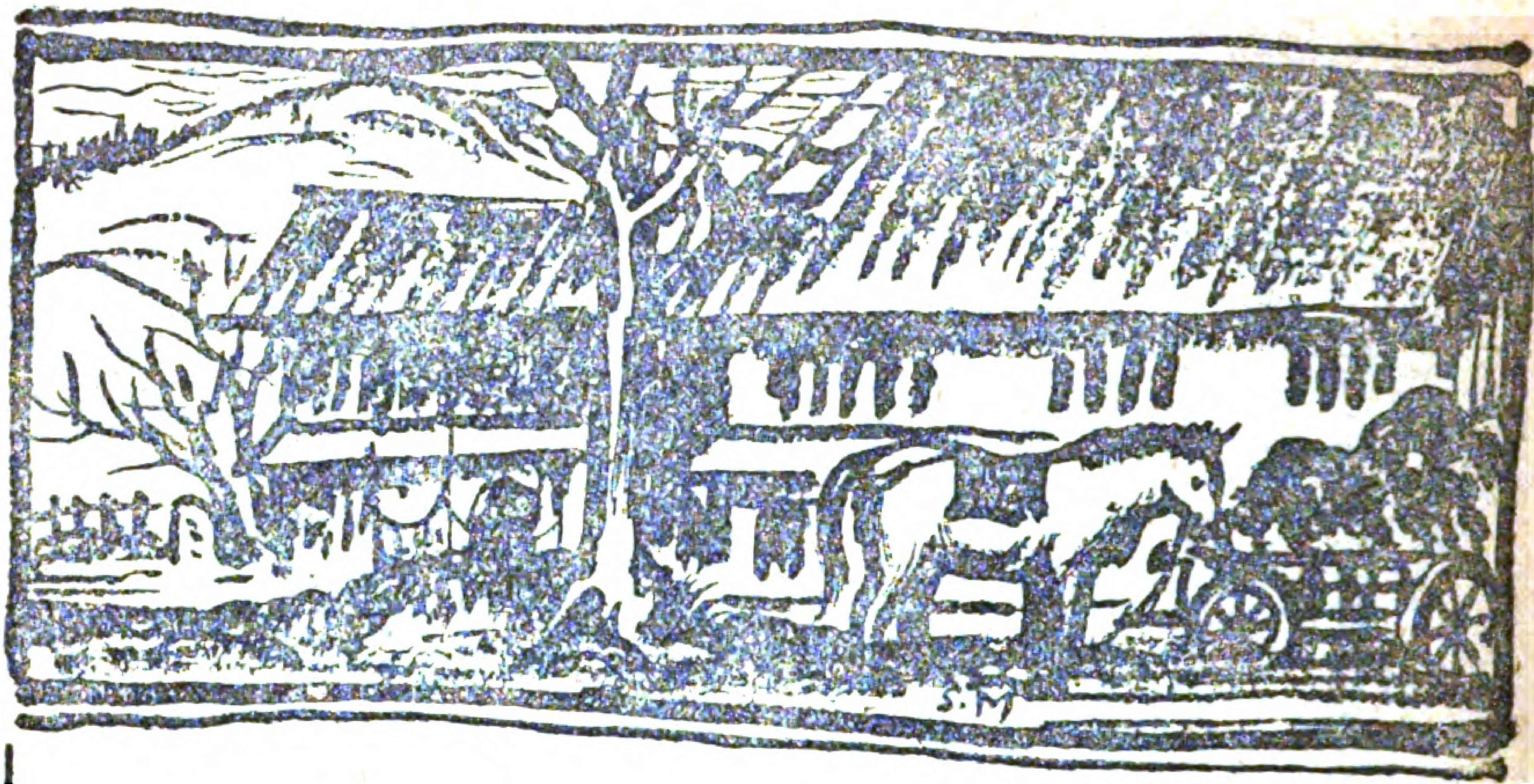
□低級總て件の如しさ。かりに社會主義が役人衆の考へ通りに惡いものであるとして、サテ、その惡人を製造するもの〻は何處のドナタハンであるか一寸承りたいものダテ。

出版部、講演部設置

本社は社會改造の大抱負を實行するため、雜誌『改造』を發行する以外に今回出版部、講演部を設置することとした。講演部は世界的に權威あるものたらしめる必要上、詳細は追つて發表することとした。

大正九年九月

改　造　社



□新らしき村にて　武者小路實篤

□殘れる手記より　故中澤臨川

□中澤臨川君　吉江孤雁

□藝術一家言　谷崎潤一郎

□彼の朝鮮行　柳宗悅



新しき村にて（對話）

武者小路實篤

甲。君はこゝに來てどう思ふ。僕は隨分樂しみにして來たが、隨分失望した。あの畑はどうだ、草だらけぢやないか。そして作物の出來のわるいこと。それに夫婦ものゝ住んでゐる小屋は隨分ひどいね。この家だけが、まあ家らしい。この家は主人の住んでゐる家で、他の家は小作人の小屋だね。

乙。僕のおどろいたのは、皆の仲のあまりよくないことだ。お互に輕蔑し切つて、陰で惡口を云ひあつてゐるのにはおどろいた。

甲。この調子ではこの村も、今につぶれるね。

乙。つぶれないまでも、あまり樂園ぢやない。いゝのは景色許りだ。

甲。中には眞面目ないゝ人も居るらしい。畑に出てゐる人は二三人切りだね。あの人達は隨分働いてゐた。しかし二三人働いて三十人の人がくらすのだから大變だ。

乙。女の人は居ないのかね。ちつとも働いてゐるのを見ないね。

甲。何處かで働いてゐるのだらう。何しろ、僕はもつと皆が仲よく、尊敬しあつて、働いて、畑に草一つはへてゐないと思つてゐたよ。

乙。本當だよ。いくら主義はいゝとしても、之ではものにならないね。

(A登場)

A。よく遠い處を來てくれましたね。(間)なんでも聞きたいことがあれば、聞いて下さい。お答へ出來ることはお答へします。

甲。それなら正直に申しますが。このまゝで村は自活が出來ると思つてゐらつしやるのですか。

A。このまゝでは自活が出來るとは思ひません。しかし今に自活が出來る時がくると思つてゐます。今は新しき村の農夫になり切つてゐる人は一人もないのですから、農業で自活の出來る資格のある人さへ、二人切りゐません。しかし段々皆も畑の仕事に馴れてくるでせう。そして今は田がありませんが、田が出來れば、自活出來る時が、二三年の内にはくると思ひます。

乙。今村に居る人は、皆よく働きますか。

A。えゝ。よく働きます。たゞ何を働いたら一番いゝか、自分は何の仕事をするのが、一番いゝかと云ふことが、わからないのです。働くことは働きます。

乙。お互に尊敬してゐないやうですね。

A。お互に尊敬しあつてゐる人の方が多いでせう。輕蔑しあつてゐるのは例外です。見物に來た方は、例外の方に氣がつきやすいものです。

甲。畑に隨分草がはへてゐますね。

A。あすこはあまり土地がわるいので、土地のいゝ方に力を盡してゐるので、惡い方は種をまくだけはまいたのですが、放たらかしてあるのです。こゝは實に草と虫の多い處です。あたりが、まだ草原のまゝになつてゐますから。

甲。土地はあまり廣くないやうですね。

A。えゝ實測すると七町歩位だと云ひますが、臺本によると五町歩位です。

甲。それではあまり多く住めませんね。

A。さうです。しかしゆく／＼は働く處は他にもとめて、こゝは村の修業場か、公園のやうなものにしたいと思つてゐます。しかしこゝでもうまくやれば四五十人の人の生活は得られると思ふのです。日本は土地が廣くないのですから、狭い土地を利用出來るだけ利用して、一人の人はどの位いの土地を要するかを本當に知りたく思ひます。

乙。今の様子では其處までゆくのは大變ですね。

A。ある處までこぎつける迄が大へんで、それからさきは樂だと思ひます。しかしその方の天才が來てくれなければ無理です。今居る人は村の農業を自分の天職と思つてゐる人はないのですから、かう云ふ仕事は矢張りその方に全力をつくし、注意を全部其處に集め得る人が居なければ無理です。しかし今にさう云ふ人が來ると思つてゐます。

甲。來なかつたらどうするのですか。

A。來なければ、自分達で出來るだけのことをして待つてゐます。しかし心あたりがあるのです。

乙。小屋には隨分ひどいのがありますね。

A。えゝ。ゆく／＼はちやんとした家に皆すめるやうにしますが、ニワカごしらへですから、この家をつくるのにさへ、一年あまりかゝりました。結婚したいから家をたてたいと云ふと一年はかゝるのですから、小屋でもいゝからと云ふことになるのです。その内には家もちやんとするつもりです。今は金の方の都合もわるいのです。

甲。金はどうしてゐるのです。

A。寄附と、村の人の收入でくらしてゐます。

甲。何しろ今のまゝでは中々自活は出來さうもありませんね。

A。まだ來てからまる二年にならないのですから、まだ經驗がないのですから、と失策のとりかへしをして、見當がつくのには四五度の經驗が必要でせう。まだ二度出來たものが、三四種類あるだけです。その内にはいろ／＼のことがわ

かると思ひます。しかし正直なことを云ふと、新しき村の農夫になれる資格のある人が、五六人入つてくれ、そして他の人がその仕事の手つだいをするやうになればいゝのです。

甲。新しき村風の農夫と云ふのはどう云ふのです。

A。現在最も進んだ農業術を本當に會得した人のことを云ふのです。即ち牛馬や、器械を生かしてつかうことの出來る人を云ふのです。さう云ふ人には誰もがなれると云ふわけにはゆきません。その方に本當に生れついてゐる人でないと、私はさう云ふ人の來てくれることを信じ、又、祈るのです。今迄はあまり自己流でやつてゐました。之からは教はるものは教はつてやりたく思つてゐます。

乙。畑に出てゐる人が少ないやうですね。

A。えゝ、いろ〳〵の仕事があるので、それに畑のことがはつ切りのみこめないので、畑の仕事をするのが不適當な人もありますから。今に畑の仕事をするのに適當な人があれば、それを忠實に助ける人はゐるのですから、さうなれば目に見へてすゝむと思つてゐます。この頃になつて、誰でも百姓をして自活出來るものではないと云ふことをはつ切りしました。百姓も文學などと同じく、一種の素質が必要です。その素質を十分持つてゐる人が村の農業を全部うけもてるやうになると大したものです。人間のしなければならない仕事はいろ〳〵あります。私達は何の勞働が一番自分に適してゐるかまだ知りませんし、又今の村では自分の一番適當な仕事が出來ると云ふわけにもゆきませんから、不適當だと知つてゐても畑の仕事をするより他ありませんが、私なんかは草むしり位より外は見當がよくつかないのです。何しても、之でいゝのか知らんと云ふ氣がします。つかみ處がまだのみこめないのです。そして草むしりする時も考へてゐることは農業のことではなくつて、かいてゐる創作や、かゝうと思つてゐる創作のことを考へてゐるのですから、その方に道がひらけないのはあたりまいです。

甲。それではつまり、あなたが百姓の仕事をするのはまちがへだつたことに氣がついたのですか。

A。まちがいとまでは思つてゐません。しかし農夫としては一人前の人間ではないと云ふことは認めます。まして、新しき村の農業を發達させる方には無資格です。今度から村の農業を一生の仕事にする仲間をふやす方針をとり、村の農業だけは立派なものにする方針をとらうかと思つてゐます。

乙。そんなことが出來るのですか。

A。もうそろ〳〵出來ます。村に入りたいと云ふ人は澤山ゐます。その內から農業にくわしい人に先づ助けに來てもらふのです。元より、村の精神を賛成してゐる正直な人に限りますが、そして村の農民團を先づつくつて、そしてのち段々他の仕事を村らしく手に入れてゆきたく思つてゐます。

甲。農民團以外の人は農業はしないのですか。

A。それは手つだうことはします。又その方の人の云ふことをきいて働くこともします。しかしそれは他にその人にとつて、殊に村にとつてその人にしてもらいたい適當な仕事が目つからない時に限ります。村の農業の中堅は、村でなければ見られない、進んだ方法で、効果のあがる方法で、協力して、村の人の食物の問題を解決してゆくことを一生の仕事にしてゐる人によつてつくられなければなりません。その仕事はやがて人類の農業の手本になることを意味してゐます。（何か不意に思ひついたやうに室を出てゆく）

甲。おどろいたね。あいつの空想家には。

乙。あんな雜草だらけの畑を見ながら、あんな空想をしてゐられるのは珍らしい男だ。

A。（出て來）。失敬しました。何しろこの仕事はいゝ人間をよびよせて、その人の力によつて生長するより仕方がありません。太公望が西伯をよびよせたやうに、私達は偉大な人類の農民を先づよびよせて、この問題を村風に、則ち自發的協力で、兄弟姉妹にたいする愛を土地によつて生かす方法で解決したいのです。偉大な農民。土地の愛兒をもとめるのです。私達はその仕事を助けることを光榮に思ふでせう。そしてその恩には又、自分に許された方法で報いる

でせう。次ぎに私は村の大工團をつくりたい。之は農民團より少なくつていゝ。しかしこの仕事も、誰でも出來ると云へないのはあたりまいだ。その方の天才が出て、村風に健康で、頑丈で美しい兄弟姉妹の家をたてゝほしい。それが出來たらどんなに幸福だらう。私自身はさう云ふ人をよびよせる仕事をしたく思つてゐる。各國にちらばつてゐる兄弟の力をかりて、かゝる人間を村に推薦して、村の光りをましたい、さう云ふ心がけを皆がもつやうになつて、先づこの村を立派なものにしたい。そして一目見て、人間は協力すれば、こんな町でもたてられるものか。無能力者のあつまりのやうに見へてゐたが、眞心と云ふものは恐ろしいものだと、愛から、本氣さから生れたものはこんなに美しいものかと云ふことを示したい。

甲。それであなたは。今の村がその方に向つて進んでゐると思つてゐるのですか。

Ａ。勿論その方へ向つて進んでゐると思つてゐます。目に見える處では反對に見へるかも知れません。しかし内に動いてゐるもの、我等を守護するものを感じてゐるものは、樂觀しないわけにはゆきません。

乙。本當にあなたは何かに守護されてゐると思つてゐるのですか。

Ａ。自分達の心がけが正しければ、何かに守護されます。それは人間からか、神からか、自然からか知らない。しかし何かに守護される。今の世の中で一番人類が幸福になれる唯一の路を歩いてゐる以上、何かゞ守護してくれます。それは人類のことを本當に心配するものはこの仕事のよくゆくことを望まないわけにはゆかない。そしてその人達の望みは無意味には消えてゆかない。

甲。あなた達の道が人類が幸福になる唯一無二の道のやうにあなたは思つてゐるやうですが、それは本當ですか。

Ａ。それは本當です。あなたはもつといゝ道を知つてゐますか。私は知らない。もつといゝ道が萬一あれば私はその道に從ふ。私は新しき村の生活を最上無二の生活と思つてゐる。現在は其處まで行つてゐない。しかし自分達の立場や目的はまちがいない。君は今の世に人間が勞働せずに生てゆけると思つてゐますか。思つてゐないでせう。さうすれ

ば誰かゞ勞働しなければならない。君は勞働者がゐるからそれに任せておけばいゝと思つてゐるのですか、兄弟に重荷を負はせてそれに指一つかけないものはパリサイ人だと云はれても返す言葉がありますか。今の世ではない。勞働は樂なものではない。他人の苦はいくらでも辛棒出來ると云ふものは、兄弟を愛しない、人間を人間と見ない人間だ。さう云ふ人間は罰を受けても仕方がない。他人の苦しむのを正當だと思ふものは自己の苦しむことを正當と思ふ人間だ。自己を苦しめる權利を他人に與へるものだ。現在の社會の立場から云ふと、我々はお互に他人は殺されてもいゝものだ、自分の愛するものだけ幸福になればと思つてゐると云はれても返す言葉はあるまい。そんな社會に立つて不安を感じないでゐられますか。君は？ 私は不安で仕方がない。愛するものゝ生命を思ふにつけて、萬人の生命を思ふ。愛するもの、自己の幸福をのぞむに從つて萬人の幸福をのぞむ。他人の幸福を望むことゝ、自己の幸福をのぞむことは一つである。二つだと思ふ時代は過ぎた。他人の不幸を仕方がないと見ることが出來るものは、自分の不幸も仕方がないと思ふより仕方がない。自分の不幸をさけられるだけさけたく思ふものは、他人の不幸もさけられるだけさけやうと思はなければならない。このことは絶對に本當だ。君はさうは思ひませんか。

甲。思ひます。

A。それを思ふなら、その眞理を實行しないではゐられない。その眞理を實行するのに我等の道より他にありますか。その道は他人を殺さない道です。他人の意志を尊敬する道です。他人の生命、個性を尊敬する道です。それは同時に自己の生命、個性、意志、運命を尊敬する道です。兄弟姉妹と自己を同一のものとして尊敬する道です。兄弟姉妹としてお互の不幸、お互の苦しみに協力によつて打ちかたうと云ふ道です。その道が正しくないわけはありません。

乙。理屈はさうです。しかし實際はどうでせう。僕は例外許りを見たのかも知れません。しかしこの村にはたしかに自己のことと自分達の愛するものゝこと切り考へられない人がゐます。僕はそれを認めました。

A。それはゐないとは云ひません。私自身だつて、理想的な人間だとは云へません。しかし私は自他の區別をすること

の通りと云ふことを知つてゐます。自分の幸福を望む爲に他人の幸福をおろそかにするものゝ必ず罰を受けることを知つてゐます。處が村ではそれを知つてゐる人が多くはありません。まるでそんなことの感じられない人もゐないとは云ひません。しかし私はそれを恐れてはゐません。今の世の中は、自分のこと切り考へられない人のあつまりです。村へ入つたからと云つて、すぐ根性のかはるものではありません。殊に女は、夫と子供に忠實になる爲に、又弱い爲に、自己のこと切り考へられない傾向につくられてゐます。そして男は女にたのまれると義侠心を起しやすく、兄弟のことを忘れやすく出來てゐます。しかしそれは私達にとつてよき反省劑です。私達はさう云ふ傾向のある人が、自づとさう云ふ傾向から脱して、村の精神に同化されることをのぞんでゐます。又一方、我々は今の世の中と精神的に戰つてゆく以上、他人のエゴイストにまけるやうでは心細い話です。それに少しでも負ける人間は、今の世に正しい生活は出來ません、不正な、エゴイスト的な他人のことをかまつてはゐられない空氣は世界に滿ちてゐます。それに打ち克てる人は、村のうちにそんな空氣がまぎれ込んでも、それにおどろかないだけの力が必要です。そしてその力が生れ出してゐることを僕達は感じてゐます。この精神のしみ込む處、パン種のやうな働きをなすでせう。村の人にとつて何が一番大事かと云ふと、他人の目の塵を氣にする時自分の目の塵を知ることです。他人と自己との區別を現世的に解釋してそれで滿足してゐる人間は遂に村の住人にはなれません。さう云ふ人は村に居るのは無意味すぎます。村のどんづまりの精神はどうしても、兄弟姉妹と自己とを同一の物指で見ることです。そして他人が不當に苦しむことを自己が不當に苦しむことゝ同じに考へることです。感情的に感じることは出來ないでも理性的に感じることです。

甲。一寸、伺ひますが、あなたの家が、他の人と比較にならない程立派なのはどう云ふわけです。

A。それは前にも云つたやうに、家をつくるのに時間と金がかゝるからです。私の家を先づつくつたのは皆も承知してくれたのです。むしろもつと立派につくりたい位に思つてくれたでせう。他の兄弟の家ももう五六年を待つて下さ

い、兄弟の家は僕の家より立派になる時がくるでせう。早くつくる必要と、やすくつくる必要とあつたのです、そしてそれでもいゝから早く村の土地にすみたいと云ふからです。他に意味はありません。もし云へるならば、皆が僕の齢位になつたら僕の家よりもつと村らしい家に住めるやうになるでせう。それも村が正しい道を歩いてよき人を呼びよせられた曉ですが、それまではなるべく間にあはせにしておくつもりです。私達の精神さへ生れば今想像してゐる以上の仕事がこの土地の上に行はれます。我等の精神が本當に生上る時を待つて下さい。話はもとにもどしますが、私達は、永遠に新しい、最も古くつて最も新しい眞理の上にすなほに生活しやうと云ふのです。乃ち支那で云へば聖人の時代のやうな精神で、そして又ホイットマンが夢みてゐたやうな精神で、則ち他人には支配されずに神と人類と自分の頭に支配されて獨立した人間としてなすべきことをなし、その上で自由をたのしむ人間になるのです。兄弟姉妹を不當に苦しめず、協力して、お互の勞働をより正しく、より健全にするやうに骨折つてゆきたいのです。私達は金の爲に働くのではありません。貧乏したり、病氣したりする時の爲に金をためる必要はありません。子孫の生活難を恐れることはいりません。正しい人間となり、正しく生るやう、なすべきことをなす人間になるやう子供を教育すれば他に心配することはないのです。私達の世界が方々に出來れば人間としてのその人の値で何處でも通じるのです。金は通用しないで、人間の眞價が通用する。このことは今のある人々には不幸かも知れない。しかし我々は金で不當に快樂や、媚びを得たいとは思はない。虚僞なものは閉口だ。このことは實際村ではもう實現されてゐる。いゝ人が村にくると、村にその人が持つだけの愛をその人が村から又うけとる。金があつてもなくつても、それは同じことだ。愛と、本氣さと、人間としての値さへあれば皆よろこんで迎へる。始めは通じなでも、いつか通じて、愛は愛をもつて迎へられる。我々はその人が人間としての眞價を何かで發揮したものを尊敬する。働きのある人でも根性が賤しく、エゴイストであればよろこべない。それは他人の利慾心にに媚びても眞心には媚びない。新しき村では眞心が眞心に通じる丈より役に立つ人は役に立つ人として尊敬される。しかし愛される資格あるものは愛される、よし働けな

い人でも精神が純粹な人なら愛される。

乙。新しき村以外ではあなたの精神は生ないのですか。

A。生きられますかね。生かせたら生かして見せて下さい。僕には駄目でした。僕は新しき村に入つて始めて、良心の前に立つて耻ない人間、云ひわけをしないですめる人間になりました。元よりそれは自分の心が清く勤勉になれる時に限るのです。村に居たつて耻かしい生活は出來ます。そしてその時は心はなほひけ目を感じます。しかしすぐそれから助かる道を見出すことが出來ます。世間にゐる時は私にはそれが出來ませんでした。兄弟の爲に働くと云つても、どうしていゝかわからない時が多かつたのです。今は働かうと思へばすぐ働けます。たゞその力が足りない、しかし力の足りないことは怠慢から出ないならば、良心はせめはしません。しかし同時に私は兄弟のよく働けるのを讃美したくなり、自分は謙遜になります。働いて苦しい時、勇敢に働く兄弟、それはエゴイストから働くのでもなく、强いられて働くのでもなく、本當に村の爲、兄弟の爲、否もつと大きなものと直接に向つて働くのですから感謝し、讃美したくなります。見へや、務めで働いてゐる人もあり、時もあるでせう、さう云ふ時は見てゐて危なつかしい氣がしますが、さもない純粹の勤勉は感心しないわけにはゆきません。

甲。今村では勉强は十分に出來るのですか。

A。十分に出來ると云ふわけにはゆきません。その人が特別な才能をもち、その人の才能を生かすことが、村にとつても、その人の一生にとつても、兄弟にとつても有益であることがわかり、そしてそれを研くには東京なり、何處なり出かける方がいゝときまれば、その人はその研究すべきものを研究するやうにしたく思つてゐます。今はまだその必要を感ぜずにゐます。しかし勉强するには今の村は不適當な處があることを殘念に思つてゐます。今にその方も、いい人が集ることで、うまくゆくと思つてゐます。才能ある人の才能を見あやまりたくないと思つてゐます。

乙。病氣の時は、どうするのですか。醫者はゐないのでしよ。

A。まだ醫者はゐません。今醫者は二里半四方にはゐません。しかしその内には新しき村らしい醫者も出來ると思ひます。それを一生の仕事にしてゐるものもあります。村はいろ〳〵のいゝ人が入つて、村らしくいろ〳〵の方面に働いてくれる時に始めて村になるのです。村が村らしくなるのに必要な人間は次第に加はるでせう。醫者には病人が集る、目醫者には目のわるい人があつまる。士官學校には軍人になりたい人があつまり、專門の學校には專門々々の人が集る。そのやうに村には正しく生活したいものが四方から集る。今は金の爲に入れる人の數があまり制限されてゐる。しかし正しい生活を本當に憧がれる人が集れば、其處に力が生れ、新しき村が生れる、そして自分の仕事を要求される處で、自分の仕事を生かしてゆく。新しき村らしくそれが生だす時、村は實に村になる。今は村の基礎を固め、よき人が入れる地盤をつくつてゐる。自分達は眞に村を生長させる力ある人をよびよせる。その力のある處に我等の强味がある。

乙。もしさう云ふ人が來なかつたらどうします。

A。來ないことは感じられません。人類の要求する、神のよしと見る仕事の爲に本氣にならうと云ふ人は、今の世にもいくらでもゐます。皆知らずに求めてゐる。もしさう云ふ世界があり、其處で自分の眞價を發揮すればそれが村を通して、全世界に響き、自分の骨折が本當に兄弟の爲、人類の爲に役立つことを知れば、その仕事をするのを光榮と思ふのが當然です。私達はこの當然な道を力强く、おちついて歩いてゆくのです。どうしてもいゝ人をよびよせずにはおけません。見てゐて下さい。二三年ならずに見ちがへるやうに生長しますから。そしてどうしてこんなにいゝ人が集り、いゝ人の力が生るのだらうと不思議に思ふ時が今にきつと來ます。來させないではおきません。新しき村、ここだけで、本當に良心が生られ、隣人の愛、人類の愛をすなほに生かせるのですから、さう云ふ要求をもつ人は自づと集つて來てくれます。このことは疑ひやうがありません。正しく生たい人の爲にこの村は生れたのです。不正な人がこの村に入つたつて落ちつくことは出來ません。本當に眞劍に、兄弟の爲、人類の爲、自己の爲に同時に生きやう

とする人をよびよせる力をもつ、この新しき村は祝された村です。

(土地の人が一寸顏を出す)

A。一寸失禮します。(去る)

甲。僕達もそろ〳〵歸らう。本當に聞きしにまさつた樂天家だね。

乙。どんな現實の上にたつても夢見てゐられるのだから幸福だ。

甲。お目出たいね。

A。(入つてくる)失禮しました。

甲、もう私達も失禮します。

A。さうですか。

甲。五六年たつた時、又上ります。そして今日の話を事實で見せて戴きます。

A。えゝ、事實でお目にかけませう。君達は僕の樂天家におどろくでせうが、僕は自分でいくら疑つて見ても、この仕事がわるくゆくとは思へないのです。僕は全世界にある正しく生きやうとする意志を感じてゐます。この意志に生命を與へる仕事は失敗したくも出來ません。僕の恐れてゐるのは正しく生きやうとする本氣さのゆるむことです。そんな事さへなければ、同じ心の人はあつまり、そして隣人の愛と、自己の本務とを生かすことでこの村を生長させてくれます。自分のしたくないことは隣人にさせない、隣人のしたくないことは、自分も手つだつて、それを出來るだけ氣持ちよくするやう骨折る。全世界に不合理の、人間の愛で救へば救へる、不幸を段々なくして、人間はかう云ふ風に生るのが、正當であり、幸福であり、悅びであり、良心も理性も滿足すると云ふことを實行で示してゆきたい。この仕事は自分一人では出來ません。しかしよき兄弟姉妹の協力はそれをし上げます。この信仰は失なひたくも失なへません。この信仰をもてばこそ、安心してこの仕事が出來るのです。この信仰をもたぬ人にはこの仕事は危かしく

も見へるせでう。僕には危かしい處はないとしか思へません。まあ五六年たつて又來て下さい。私はその時なほ確信の道を歩け、勝利の道を歩いてゐることを信じます。生命さへあれば。

甲。それでは失禮します。さよなら。

A。さうですか、さよなら。

乙。さよなら。（二〇、八、二四、）

殘れる手記帳より

（臨川氏は日記をつけるのが大嫌ゐありました、ただこれだけの三篇文の草稿の骨子だけが手帳の端から發見されました。非寐り間にも學問といふこと、社會と云ふことを忘れざりし病餘の氏の英姿を思ふと坐ろに人間としての感動の念が一パイに湧いて來ます。）

故　中　澤　臨　川

「語學」の例、沙翁、ゲーテ

兩者の協同により得らる

○其の準備

（A）民の教育（暴に行かぬために、又一方には自覺させて氣運を作る爲めに）

（B）「ソリダリテ」の考を上にふきこむ事（義務の觀念麻痺し、慈善といふ僞善行はる）

○民の教育は權力や資本家にのみ任せてもだめ

之は志士、思想家の「プロパガンダ」に由るの外途なし（思想の力！）

その爲めには運動を humanize し思想家の同情を得る要あり

社會改造論

第一　改造まで

（一）社會問題の意義

「勞働」は改造の第一因子

（二）なぜ改造せねばならぬか

（三）改造への筋路

○人民によること（a）

一の Ruler（Constructive Genius）よること（b）

右の二方法あり

（a）失敗の歷史…

（b）時代が之を生むまで。

○かくして用意なりし時に Constructive Genius 出で
社會改造成る

○ナポレオンの事

○純平等的「デモクラシイ」の非(英雄を迎へる爲めに)——之につきホイットマンの詩

(四)いかに改造するか

(五)改造者の道德

十九世紀は「なやみ」の世紀

第二 改造後の社會

(一)科學文明の社會的功罪

○「デモクラシイ」を起した、しかしその物質的世界觀により Mechanical democracy に墮した

○生産をまし人間を幸福にした、しかし資本主義を起した

○世界をより國際的にした

○宗教を破つた

○博愛主義を組織的にした

之に對する缺點(デカタンスの事)

今後の事

○「科學は人間の他の精神的産物と異つて直接端的に社會と交渉する一大武器を持つ、それはその "Usefullness" である」

○あまり社會から離れた

(二)理想主義的反動

(三)デモクラシイの是非

科學對ニーチエ……

○デモクラシイの眞義

科學的より脱することが必要

個人主義と社會主義

ニーチエの起りし事、及其哲學の功果(英雄はみな個人主義)

(四)創造の社會

文學、教育、宗教、科學、産業等

(五)婦人問題

(六)耕農生活

○Manual labor は Mechanical labor より人道的

Wisdom の實はこゝに存す

今後は大きな農園を設き各人隨意に玆に働かしむ

○耕農生活と智識生活との fine balance

○都市的文明の破壞（今後はできる）
○此度の戰爭で食物の不定はあまりに各國にindustrialに傾いた故に
○耕農生活は healthy
○衣食住中食が第一、工業は食とは一番緣遠し、つまり Luxury と軍國主義との結果工業盛なりし
○今後の農の進歩——一の化學工業として
○Return to native（ルッソー、トルー等）
○ジョーレスは自然の愛によつてどれだけ humanize されたか
（七）國際問題
（八）科學の進歩
（九）個人と社會

第三　結　論

ラッセルが事

○彼の見よろし、しかし彼も餘りに樂天的、Possessive impulse をかろく見すぎた
（一）それは直ちに創造の衝動を以てかへうるものなりや所謂「代償」はいかにしてえられるや
（二）所有の衝動はむしろ强本能であるかぎり或程度まで必要ではないか、（artist—の生活）これなしに人間は Idle にならぬか
○餘りたやすく Anta gonism を宗教へ持つてゆきすぎる
○中產者にして英國人なれば Guild Socialism に賛歎するなり

學風論

○ラッセル
○教育に於ては何よりも第一に自由が主なり、他の社會にては正義と自由とが等分に要求され、又は正義が自由より貴い場合がある、しかし教育にては自由が何よりも主（小學教育は別）學風は之に反す
○慶應——資本主義
大學……學僚主義
一高……デカンショ
　勝つたがい丶……ゴウマン
早稻田……民衆主義
一般私立……Envy 及一高に對する他の高校（宗教軍隊の學校は申すに及ばず）競爭心强し（之は制度の罪あり）
然し教育者としては特點をことわるべきではないか



中澤臨川君

吉江孤雁

今年四月のはじめ巴里で、伊太利への旅行の準備をしてゐた頃、或夜、ふと目が醒めると、私の兩頰に涙がながれてゐた。そしてひきしめるやうな寂しい悲しい思ひが胸に迫つてゐた。ついいまゝで私の枕もとへ來て二時間はなしをしてゐた、中澤君の和服の後姿が戸口から消えて行つたのが、まざ〳〵目に殘つてゐた。

何故に二時間といふ限られた時間であつたのか私には解らない。また何事を話したかそれも覺えてゐない。けれどその時の心持と、寂しい後姿とは永久忘れることは出來ない。

四五日たつて家の方からの手紙で中澤君の病氣の事を報じて來たので、電報で病狀を問ひ合はせた、そして伊太利の旅行中も同行の友人二人とゝもにその事を話して心配に耐えなかつた。

七月になつて一度、此度は私が中澤君の病床へ見舞ひに行つた夢を見た。小田原であつたか、荻窪であつたか、それは解らない。中澤君の一人臥てゐる室で別れを告げて出て來た事を覺えてゐる。いつも別れ際の光景だけが寂しく胸に殘つてゐる。

七月廿二日マルセエユを出た船がおだやかな地中海と、暑い紅海と、單調でしかもモンスウンで荒れ立つ印度洋をすぎてコロンボへ着く間、私は若し歐洲からの歸途洋上で死ぬ人があるならば必ずこの單調な印度洋上であらうなどと思つた。そして二葉亭四迷氏のことなぞを思ひ浮べた。すべてが何となく死の光景ばかりを思はせられた。船員等はこのコ

ロンボ附近の海を「魔の海」と呼んでゐると話した。コロンボへ着いたのは八月十一日であつた。中澤君はもうその時この世の人ではなかつた。如何にしても再び逢ふ事の出來ない人になつてゐた。

シンガポールへ着いたのは、それから四五晝夜の後であつた。その地で椰子樹とゴム樹の林の中にある、まだ石碑も立てゝない二葉亭氏の墓の話なぞを聞いて、心の落つかない一種の不安に襲はれた。

それから三晝夜して香港へ着いて、陸上で一夜を過した朝、新聞紙上で初めて中澤君の訃音に接した。同室の友人の好意で或る商會の社宅へ泊つて、朝早く支那のクーリが擔ぐ乘籠で山上から港へ降りて來る途々、どれほど寂しい思ひをした事であらう。

急に身邊の空虚になつたやうな感じがした。何事もつまらないといふ感じ、何のために外國生活なぞをして來たらうかといふ感じがした。何か物を言つたり、何か書いて見たりする元氣がなくなつてしまつた。

さらでだに單調な船上生活は、一層無意味なもの〻やうに思はれた。

東京へ戻つた日、中村秋三郎君から故人の病狀なぞを話されてまことにすまないといふ感じがした。中村君と故人との友情ぐらゐ淸くして深い友情を私は見たことがない。

その翌日荻窪の故人の家へ行つて見た。雨の日で、森の中の家は人氣の少ない寂しさを見せてゐた。令弟の鹽澤君は故人の面影を深くしのばせた。

心せはしく歸省して見ると、到る處に故人の事跡が見られた。信州の山奥に、姫川の岸に沿ふた村々に電燈の輝いてゐるのを人々は故人の徳として話して聞かせた。少年時を共に送つた松本の中學は舊の姿を改めたけれど、舊い城樓や濠の水は依然としてゐた。

少年時の回想は盡く故人と連關しないものはなかつた。夏冬の學校の休みを、歸省の途中私の家で屢々泊つて行つた少年時の重雄君は最早や見ることが出來ない。

一昨年、中澤君が信州の事業を引き上げて東京へ歸る際、私の家族等を訪問してくれた時、大あらしで倒れた舊い槻の木を見て、中澤君が「この木もいよ〱天命がつきましたかな」といつた語が、その時から妙に胸に殘つてゐたと私の老父が話して聞かせた。

死のすゝんで行つた跡を後から振返つて見てかれこれといふのも愚かな事かも知れない。併し中澤君の今年の一月ぐらゐから以後に書いた論文を見ると一種の寂光が、この世のものとも思はれない一種の澄んだ光がその中に漂つてゐることは何人も否むことは出來ない。

巴里への故人の手紙のなかに二三首の短歌があつた。今探がしても直ぐ見當らないが、その中に、今までは已れのみにくい姿を人に示めすのを誇りのやうに思つてゐたが、これからは、已が美しき姿を表はすことを悦びにするといふ意の歌があつた。この美しき姿が次第に現はれて來たやうに私には思はれる。美しき姿とは故人その人の眞の姿である。いま迄は斷片的に、或は表現そのものゝ上に於て現はれてゐた故人の眞の姿が、その眞正な光りとなつて輝く可き時に來てゐたのだと思はれる。

詩人らしい科學者、眞正至純なる文藝鑑賞者にして社會評論家たる故人の一世については、更に改めて考察する時をまつことにする。（九月十七日日暮里にて）



藝術一家言

その四

谷崎潤一郎

上述の如く、「明暗」に出て來る人物は、主人公を始めとして凡べての男女が悉く議論ばかりして居る。甚しきは溫泉宿の女中や一と云ふ少年までが、論理的な物の云ひ方をする。就中最も振つてゐるのは小林と云ふ一種不思議な人間である津田を圍繞する下らない事件の葛藤がごたごたといよいよ下らなく面倒臭く展開して行く間に、此の男は時々ヒヨイと飛び出して來て、上流社會を呪ふやうな議論を盛んに吹ツかけて氣焰を擧げたり、津田を困らせたりするのであるが、その議論が又ひどく上すべりのした騷々しいもので、さながら大道藝人の口上の如く、徒らに雄辯であつて一向切實な力がない。思ふに作者は、小林と云ふ人間を以て、一と頃の正宗白鳥氏などが好んで描いたやうな性格、――逆境に沈湎して始終世の中を皮肉に見てゐるやうな、悧功で、横着で、その癖何處かに弱い所のある、ニヒリステイツクな性格を髣髴させたつもりなのであらう、たしかにさう云ふ人間も世の中に居るには違ひないし、それをほんたうに描くことが出來れば、それだけでも此の小說は立派なものになるのだけれども、惜しい哉作者の描いた小林は單に論理の傀儡であつて生きた人間になつて居ない。あゝ云ふ性格には、憐れむべき半面と、憎むべき半面とがなければならない筈であるのに、それが少しも現はれて居ない。年中齷齪と生活に追はれてゐる筈でありながら、格別の用もないのにヒヨイヒヨイと津田の眼の前へ飛び出して來て、フアウストに附き纏ふメフイスフエレスの如くに、一流の人生哲學を滔々と述べ立

てる。あれで見ると小林と云ふ男は恐ろしいおしやべり好きの閑人であるとしか思はれない。此れは畢竟、作者があゝ云ふ性格に深い同情と理解とを持つてゐない結果であつて、作者の意圖は、ただ一時の賑やかしにあゝ人物を事件の中へ點綴したに過ぎないのであらう。巧猾なる作者は、それでもさすがに氣がさしたと見えて、あの人物を成るべく人間らしく見せる爲めに、酒を飲んではポロポロと涙を出させてゐるが、それが又いかにも取つて附けたやうで、裏の見々透く淺はかな技巧に墮してしまつてゐる。偉大なる作家のうちには、僅かに一行か二行の文字を以て、一箇の性格を躍如たらしめる手腕あるものが少くないのに、此の作者は小林にあれほどの饒舌を弄させながら、遂に何物をも描き得ないでしまつたのである。性格描寫に於ける漱石氏の手腕は、此の一事を以てしても思ひの外貧弱だと云はざるを得ない。

最も閑人らしくない小林からして既に斯くの如くであるから、忙しい中に一々彼の相手になつて居る津田と云ふ人間の呑氣さ加減は云ふまでもない。一體漱石氏には何となく思はせ振りな貴族趣味があつて、「明暗」中の人物も小林を除く外は大概お上品な、愚にも付かない事に意地を張つたり、知慧を弄したりする、煮え切らない齒切れの悪い人たちばかりである。私に云はせればあの物語中の出來事は、悉くヒマな人間の餘計なオセッカイと馬鹿々々しい遠慮の爲めに葛藤が起つてゐるのである。たとへば津田は、どう云ふ譯からか知らぬが、結婚しようとも思つてゐなかつたお延と結婚してしまひながら、いつ迄も以前の戀人の淸子のことを考へてゐる。そこへ吉川夫人と云ふ頗る世話好きの貴婦人型の女が出て來て、津田の未練を晴らさせる爲めと稱して、延子には知らせずに、彼を淸子に會はせようとする。

「私の判斷を云ひませうか。延子さんはあゝ云ふ怜悧な方だから、もう疾に感づいてゐるに違ひないと思ふのよ。何みんな判る筈もないし、又みんな判つちや此方が困るんです。判つたやうで又判らないやうなのが、丁度持つて來いと云ふ一番結構な頃合なんですからね。そこで私の鑑定から云ふと、今の延子さんは、都合よく私のお誂へ通りの所にゐらつしやるに違ひないのよ」

吉川夫人はそんな事を云つて、「でなければあゝ虚勢を張る譯がありませんもの」などゝ、頻りに自分の悧巧ぶりを發揮する。

「男らしくするとは？、何うすれば男らしくなれるんですか」

「貴方の未練を晴す丈でさあね。分り切つてるぢやありませんか」

「何うして」

「全體何うしたら晴されると思つてるんです、貴方は」

「そりや私には解りません」

夫人は急に勢ひ込んだ。

「貴方は馬鹿ね。その位の事が分らないで何うするんです。會つて訊く丈ぢやありませんか」

……………………………………………………

「だから私が今日わざわざ此所へ來たんぢやありませんか」と夫人が云つた時、津田は思はず彼女の顔を見た。

「明暗」の讀者は、此の場合をよく考へて見るがいゝ。此の婦人は立派な社會的地位のある、思慮に富み分別に富んだ相當の年配の女である。それがどんな事情があるにもせよ、既に他人の妻君になつてゐる淸子の所へ、そつと津田を會はせにやらうとする事は、而も津田の妻たる延子に内證で、いろいろの手段を弄したりしてまで、そんな眞似をさせようとする事は、餘りに亂暴な處置ではあるまいか。彼女はまるで若い書生ッぽのやうに他人の心理解剖に興味を持ち、一時の氣まぐれからハタの迷惑も考へずに、餘計なオセツカイをしに來たとしか受け取れない。然るに、彼女と同樣に思慮に富んでゐるらしい津田が、又ノコノコと彼女の云ふなり次第になつて、お延の前を云ひ繕つて、淸子に會ひに行くのである。彼はなぜ、吉川夫人などゝ云ふイヤに悧巧振つた下らない女を、尊敬したり相手にしたりしてゐるのか。

それほど未練があつたとしたら、なぜ始めから自分獨りで、お延になり清子になり正直に淡白にぶつからぬか。さうすれば問題はもつと簡單に解決すべきではないか。斯くの如きまどろつこしさは、それが彼等の性格から來る必然の徑路と云ふよりも、たゞ徒らに事端をこんがらかして話を長く引つ張らうとする作者の都合から、得手勝手に組合はされたものとしか思はれないのである。

私は必ずしも貴族趣味を惡いとは云はない。津田のやうなハムレツト型の人物も、それをほんたうに描き出せば、その優柔な性格に基因する苦悶と懊惱とが、もつと痛切に現はれていゝ筈である。そこ迄行かなければ、此の小說の目的は恐らく達せられないのである。たゞ此れだけでは、津田は全くしないでもいゝ心配をし、喰はないでもいゝ道草を喰ひ、極めて微溫的な煩悶を抱いてブラブラ遊んでゐるお坊つちやんに過ぎない。

此れは私の臆側であるが、津田の性格は思ふに漱石氏自身をモデルにしたのではないだらうか。若しさうだとしたら作者はなぜもつと深く、その鋭い理智を以て津田の胸臆を赤裸々に解剖しないのであるか。なぜあんな上ツ面なところでお茶を濁してしまつたのであるか。津田が煮え切らない如く、作者の態度も甚だ煮え切らないやうな氣がする。あの小說の根本の缺陷は、實にその態度のアヤフヤな所から來てゐるのである。津田の心の中へ這入つて見れば、上べはいかにも上品のやうに見え、優長なやうに見へても、その實せつぱ詰まつた苦しさもあれば、可なりの熱誠もあり、醜惡な方面もありさうに思はれるのに、作者は妙に取り澄まして、體裁のいゝ表面の部分だけを、空々しく書き流してゐるのである。小林が津田に向つて投げてゐる嘲弄の言葉は、恐らくは作者自身が小林の口を借りて自己を批難してゐるのであらう。作者が小林と云ふ一箇の傀儡を捻出して來た一つの理由は、それに依つて不鮮明な津田の性格を、纔かに側面からでも補足せんが爲めであつたのであらう。作者にトルストイやストリンドベルヒの如き、寸毫も假借する所なき自己解剖の勇氣がなかつた事は、即ち此の小說をして氣の拔けたビールの如くにさせてしまつた所以である。

だが、翻つて考へるのに、漱石氏に斯くの如き自己解剖を要求することは抑も無理な注文かも知れない。なぜなら、

前にも云つたやうに、氏は飽く迄も東洋藝術の精神に傾倒する詩人であつて、新しい意味に於ける近代の小說家ではないのであるから。小說に於ける氏の傑作が「草枕」であり、「門」であることは、氏の藝術上の本領が何處にあるかを語るに足る何よりの憑據であると思ふ。此の二つの作品は、小說にするよりは寧ろ漢詩や俳句を以てした方が適當ではなかつたかと思はれるほど、それほど東洋的な低徊趣味に終始してゐるものであつて、進んで新しい美を築き上げようとするよりは、退いて舊い美の中に浸り込まうとするかのやうに感ぜられる。東洋主義の藝術と、西洋主義のそれと、いづれが優つてゐるかは自ら別問題であるが、作者の傾向が前者に屬してゐる以上、「明暗」のやうな小說の不成功に終つたことは當然であつて、私は決してその爲めに漱石氏の藝術家としての全價値を、否定し去らうとするのではない。要するに「明暗」その物が、勝れた作品でないことを明かにすれば足りるのである。

今日では「明暗」が發表された當時とは大分時勢の風潮を異にしてゐる。從つて、「明暗」の中に現はれる津田や、お延や、吉川夫人や、岡田一家の人々や、あゝ云ふ連中の勿體振つた生活の仕方、――何事をも正直に赤裸々に云はうとしないで、わざと複雜な手段や技巧を弄したりする所謂貴族趣味的な態度を以て、高尙だとか上品だとか考へる者は少くなつたに違ひない。津田にしろ、お延にしろ、お秀にしろ、彼等の間に蟠まる煩悶なり爭鬪なりは、われわれの眼から見れば全く贅澤の沙汰であつて、彼等がお互ひにもう少し虛僞を排し、悧巧ぶる癖を止めてしまへば、容易く解決される問題のやうに思はれる。つまり彼等の爭鬪は、貧乏人にはする暇のない爭鬪であつて、智識階級の遊戲以上には出て居ないのである。にも拘らず、あのやうな作品が今も猶高級藝術として多くの讀者を持つてゐるとすれば、それは偶々あの作品が漱石氏の如き學者に依つて書かれたものであり、殆んど議論風發的小說と云つてもいゝほど議論づくめで書かれて居る爲めに、何となく高級らしい感じを與へ、多少敎育のある人々に淺薄な理智の滿足を與へるが爲めであらう。私をして忌憚なく云はせれば、あれは普通の通俗小說と何の擇ぶ所もない、一種の惰力を以てズルズルベツタリに書き流された極めてダラシのない低級な作品である。多くの通俗小說の作家が、女子供の興味を目安にして書いてゐる

やうに「明暗」の作家は、二十から三十前後の學生や、官吏や、會社員あたりを目安にして、その興味に投ずるやうに書いたに過ぎないのである。女子供はセンチメンタルな甘い筋を好むが、學生や官吏は薄ッぺらな屁理窟を好む。「明暗」に屁理窟が多いのはまことに偶然でないと云へる。

小說の中で、屢々長たらしい議論を云つたり物識りを發揮したりするのは、バルザックが最も得意とする所である。ヘツペルの戯曲を讀んだ者は、あの中に出て來る人物がいかにも堅苦しい理窟づくめで作られてゐる事を感ずるであらう。しかし、バルザックやヘツペルの理窟には、讀者にそれの善惡を考へさせる隙もないくらゐな恐るしい力と千斤の重味がある。彼等の理窟は、その中心の熱情が迸り出たものであつて、決して漱石氏のそれのやうに後から取つて附けたものではない。その他ユーゴーにしても、イブセンにしても、バアナアド・ショウの如きにしても、彼等の理窟には何かしら眞劍なものがあるのである。彼等は決して、高級藝術の保護色として議論をあしらつてゐるのではない。

「明暗」の批評は先づ此の位にして置いて、私は次ぎに、泉鏡花氏の「風流線」を擧げて見よう。

（つゞく）



彼の朝鮮行

柳宗悦

（斷片）

○

彼はいつも彼の傍から離さなかつた朝鮮の磁器に又も心を奪はれてゐた。彼はいつもそれ等のものと話する事が出來た。然し互に通うその心は、いつも彼に寂しい情を誘つた。彼はその姿に現はれる美しさの寂しさを想はない時はなかつた。彼は屢々「最も悲しい心を歌つたものが、最も美しい詩歌だ」と云ふシエレーの句を想ひ起した。靜な沈みがちな白い釉藥や、その中から音もなく浮び出てくる青い草花や、又はそれ等のものを包むたわやかな線が、彼の眼には人知れぬ情の世界を示した。彼は様々な事を想ひ回した。そこに現はされた人情や、心の訴へや、又はそこに住む人々の運命が、彼の心を繁く往來した。そうして終りにはいつも彼の眼に涙がにじんでゐた。彼はその壺を彼の手の内に抱く事を忘れなかつた。壺も温められて平和な憩ひを受ける様に見えた。

彼に平かでない日が永く續いた。彼が愛し又親しさを感じるその隣邦の人々が、苦しい日を送つてゐる事が、絶えず彼の耳に聞こえてゐた。彼はそれ等の人々の哀情をまともに讀む想ひがした。なぜなら彼の手近くに置かれたそれ等の磁器は、その苦しさを彼に告げない時はなかつた。彼の眼の前には様々な幻像が浮んだ。時としてそれは見るに耐えな

い力の傲りであつた。又はあり得べからざる矛盾さの勢ひであつた。彼自らはその力の奴隷ではなかつたとは云へ、彼は屢々天の見知らぬ聲によつて、詰られる想ひを嘗めた。然も地の底から絞り出る訴へに彼の胸は壓せられる樣であつた。虐げられた聲を聞く毎に彼の心は沈みがちであつた。だが彼の心からは新しい情愛が湧き上つてゐた。彼は一旦見知らぬ者の聲が彼に起てよと命じるのを聞いた。彼は沈默を破るべき時が彼に來たように思へた。彼は家を出て彼の苦む友達を訪はねばならぬ心に滿ちた。

○

彼が東京を立つて朝鮮へ向つたのは五月の初めであつた。彼は彼一人の此旅が如何なる結果を持ち來すかを考へる暇はなかつた。それは殆ど全く彼の心の衝動による企てゞあつた。情が彼に行く事を命じたからであつた。人々は問ふかも知れない。「多くの者が朝鮮の治政に努力してゐる。彼の一人の行ひが何を持ち來し得ようか」と。だが多くの者の所置は一度だにその國の心を温めなかつたようである。如何なる辯明があるにせよ、今日迄治政の行ひが日本と朝鮮とを近づけ得なかつた事は事實である。それのみではない、殆ど永遠の反感がその努力の報酬となつてきた事を誰も知つてゐる。然し彼は情の國を信じてゐた。情が滑らかであるならば交り得る心と心とがあるのを信じてゐた。彼は情に活きる心に對して憎みを持つ友のない事を信じてゐた。それを信じないにしても彼自身の内に目覺まされた情愛は餘りに强くあつた。若しも彼が朝鮮の地に入つて憎みの刄を受けるなら、それは彼の感情がまだ不純であるからだと思へた。彼は情愛による結合が此の世に可能である事を信じた一人であつた。彼は如何なる政治にも多くの信仰を持たなかつた。此世には愛による政治があり得ない事を知らされてゐた。然し彼は他の幸な世界がある事を信じてゐた。彼が朝鮮に旅する事によつて、かゝる世がある事を彼自らに味うと欲した。

○

朝鮮の人々は日本とだに云へば、情もない暴力の國であると思ふであらう。此評は自然な結果であると彼にも思へた。

然し若い日本の人々は眞理の守護者として努力してゐる事を彼は目擊してゐた。今日彼等の心は領土や權力の問題に注がれてゐるよりも、遙かに强く民主の思想や、神の問題や、平和の意味に注がれてゐる事を彼は知つてゐた。日本がその政治や軍隊によつて代表された日本であると思はれる事を彼は殘念に考へてゐた。彼は彼の旅行によつて異る日本を人々に傳へようとの希願があつた。此事は彼の許に屆いた幾多の人々の手紙によつて立證する事が彼には出來た。

出發のまぎはにも彼は次の樣な溫い手紙を若い一人の友から受けた。

「今度朝鮮に行かれる事を、かげで嬉しく思つてゐます。朝鮮の同胞を懷ふと、僕はあやまりたい樣な氣がします。我等の兄弟が彼等に對して犯して步いた罪を、少しでも拭つて廻りたい氣がします。そして彼等の訴へと願ひとに耳を傾けたいのです。僕は朝鮮人のよき友達の一人でありたい。僕は貴方が朝鮮人の最もよきすぐれた友である事を信じます。貴方が、やがて朝鮮に於て若い人々と打ちとけて相語る時、僕の彼等に對する止み難き同情をも想ひ起して下さい。」

彼はかゝる手紙を受ける每に、どんなにそれを未知の朝鮮の人々に見せたかつたであらう。彼は又京城にゐる彼の愛した一人の日本の信徒から、次の樣な便りをも受けた。

「日本人と朝鮮人とが信賴し合う眞の平和は、宗敎的に覺めて理解し合う道しか他にない事を切に思ひました。……

私は始め朝鮮に來た頃、朝鮮に住むとに氣が引けて朝鮮人に濟まない氣がして、何度か國に歸ることを計畫しました。……

朝鮮に來て朝鮮人にまだ親しみを深く感じなかつた頃、淋しい心を慰めて朝鮮人の心を語つて吳れたものは矢張朝鮮の藝術でした。

私はいつもの祈りに、私に朝鮮に居ることが何時か何かの御用に立つ樣にと云ふ事を加へて淋しい心に希望を與へられてゐました。」

彼は此友達に愛と敬意とを感じてゐた。殆ど全ての日本人が憎の的である時も、此友達ばかりは彼が住む町の凡ての朝鮮の人達から、愛せられ慕はれて、その名を知らない者はなかつた。此友に逢ふ事も彼には此旅での喜びの一つであつた。

○

彼は又此旅で彼がかねがね朝鮮に對して抱いてゐる敬愛の念を、何事かによつて披瀝したい考へがあつた。彼は此爲に音樂會を開いて、その收入の全部を朝鮮文化の仕事に献げようと欲した。又かゝる會を企てる事が、藝術を通して互を結ばせる一つの温い道であると彼には考へられた。音樂者であつた彼の妻は此企を喜んで、自らその會に出演する日を心待ちした。

彼と彼の妻は渡鮮の志を果す爲にその準備に急がねばならなかつた。彼等は先づ次の樣な趣意のもとに内地で此會を最初に開こうと欲した。趣意書は次の樣に書かれて、種々な彼等の友に發送せられた。

「吾々は朝鮮のことに心を引かれてゐます。今そこに苦む人々の心情や運命を想ふ毎に、淋しい感情に誘はれます。本來人種的に又地理的に近い血縁の間である日本と朝鮮とは、もつと心からの友であつていゝと思ふのです。今は不本意な趨勢の爲に二つの心が互を憎み拒けてゐます。私達は政治の力がどれだけ二つの國を結びつける事に成功するかを知りません。只此世に眞の平和や友情を内側から持ち來すものは、宗教や藝術の道だと信じてゐます。どうかしてかゝる道を通して互の愛を呼び覺ましたいと思ふのです。

吾々は朝鮮の人々が藝術的感性に優れてゐる事をその歴史によつて知つてゐます。吾々は隣邦の人々に對する吾々の信頼と情愛とのしるしに今度渡鮮して音樂會を開きその會を朝鮮の人々に献げるつもりです。又日鮮人協力の文藝や學藝の雜誌を計營したいと志してゐます。かゝる仕事は二つの心が互の平和に進む意味深い最初の一歩だと信じてゐます。

私達はその計畫を遂行する爲に玆にその資金を集めたく思ひ内地の各處で最初に音樂會を開き、來て下さる方々の浄財に待とうと思ふのです。私達は多くの方々がいつも情愛の味方である事を信じてゐます。私達は私達の日本が朝鮮に對して情の日本でありたいと希つてゐます。情愛に二つの國が固く結ばれるなら、それは未來の東洋の文化を形造る美しく大きな動因になると固く信じてゐます。

千九百二十年四月。」

各地の人々から彼は厚い返事を受けた。そうして彼等の同情と好意とによつてかゝる會が企てられる樣になつた事を彼は深く感謝した。かくて後に彼の妻は凡そ一ヶ月の間、家と小供とを離れて、北は北海道や新潟や、南は阪神や岡山迄、寧日なく音樂の旅を續けた。

又京城での音樂會は、「東亞日報」主催のもとに凡て朝鮮の人々の盡力によつて開かれる運びになつた。此事は彼の豫期し得ない最初の感謝であつた。且つ又日本人の側に於ても、彼等の企てを嬉んで三度の會が基教聯合會の好意によつて催される事になつた。幾多の好意ある手紙が京城から彼の許に屆いた。彼は既に彼の旅の事で胸が一ッパイであつた。

○

船が釜山に入つたその夜は朧ろ月夜であつた。埠頭から出て朝鮮の土を踏んだ時、彼も彼の妻も彼の友も、どんなにか異樣な昂奮を覺えたであらう。發車のしらせに、せかれる迄、夜に歩く白衣の鮮人に眼を奪はれてゐた。

汽車での一夜が明けて、食堂の窓から異つた景色を見た時は、水原近くにも進んでゐた。赤い土やまばらに生へた春の草や、石の多い河原が交々窓のうちに現はれてくる。只一人で牛に土を耕し乍ら、靜に煙草を燻らしてゐる姿を見ると、誰も朝鮮に入つたと云ふ心が今更にするであらう。もう京城迄は一時間である。

汽車が或停車場に止つた時、彼の室は突然、態々そこ迄迎へに出てくれた三人の朝鮮の友によつて賑はされた。彼はどんな喜びを以て是等の人の手を固く握つたであらう。その一室は嬉しげな顔に溢れてきた。九時少し過ぎて汽車は南

大門の驛についた。彼は友の紹介によつて早くも見知らない多くの朝鮮の人々の中に圍繞された。京城で彼を待つてゐた彼の妹をさへ彼は暫く見失つてゐた。その他彼の親しかつた友や、彼の企てを助けてくれた未知の友を、それ等の人の間に見出した時、彼は溢れる喜びを感じた。彼は迎へられて場外に出た。すぐ前には南大門が高い空の中に昔のまゝに佇んでゐる。

門は五百年の間如何に多くの人を迎へ又は送つたであらう。或時はその君主を、又は捷ち誇つた將士を迎へたであらう。或時は外國の使者を又は義憤の人々を通したであらう。或時は敵の爲にその扉が毀された事もあらう。この都を訪ねる凡ての人は此門の陰を過ぎたにちがいない。今は誰が此處をくゞるのであるか。朝鮮を愛する人々であるか。又は朝鮮を想ふ人々であるか。或は又寂しくうなだれた苦みの人々であるか。門は永へに默してその苦みをも喜びをも語らない。それは何の心を以て今彼の一行を迎へたであらう。

○

彼は彼が京城につくや否や、彼の朝鮮の友によつて、心を盡した歡迎の會が彼の爲に設けられてあつた事を、感謝せずにはゐられなかつた。彼は滯京二十日足らずの間、異つた團體から四度の鄭重な招きを受けた。皆に夥しい數の料理が彼の爲に設けられたのみならず、今は稀な古風の音樂さへ特に用意されてあつた。彼は實に是等の會に於て朝鮮の人々とくつろいで話し會ふ最初の機會を得た。會は凡て朝鮮の人々の情に厚い挨拶を以て始められた。彼も立つて彼が此旅を企てた心を打ち開く喜びを得た。彼は是等の會によつて、今やもれ上ろうとする文藝の運動や、要求せられた宗教的信念が深く漂つてゐる事をまともに知る事が出來た。又是等の交りによつて感情の高められた現時の風潮や、何を人々が深く求めてゐるかをも一層深く知る事が出來た。彼は時としては興奮を以て、又時としては抑へ得ない親しさを以てそれ等の人々の言葉を聞いた。凡ての人は彼の前には包むだ心を開いてくれる樣であつた。與へられた深い此好意の前に、彼の心は一層鼓舞せられ刺激せられた。彼が今朝鮮を訪ね、その人々の心に面接してゐる事を想ふ時、彼の心は

更に洗練せられ又厳粛にせられた。彼は是等の人々の運命に對して献げねばならぬ彼の仕事の前に敬虔な心を以て跪まついてゐた。

彼は又依頼によつて滯在の間、四度の講演を開いた。忌憚なく彼の思想を表白する自由が、今の境遇に於ては不可能であつたとは云へ、彼は彼の氣持や彼の希望を公表する幸を得た。屢々若い人々の熱心な質問によつて、彼は一層それ等の人々の要求を知る事が出來た。それ等の會によつて彼が受けた好意は、いつも彼の熱情に新な油をついだ。

彼の妻の企てた音樂會は、京城に着いた翌日から開催された。彼女の滯京十日の間、七度の音樂會が要求された。彼は最初かゝる會が京城の樣な所では、高貴な人々の助力なくしては決して行はれないと屢々注意された。然し彼はかゝる言葉を省みず彼の企てを徹しようと欲した。それが事實であるならば尚更彼の會は一般の人々の厚意によつて、一層平民的に開かれねばならぬと考へられた。彼は又今日の情況では日本人が、朝鮮人の間で滿足な會を開く事は出來ないとも云はれた。且つ又それが可能であつても、朝鮮人の手のみでよき結果を齎し得る會は開き得ないと迄云はれてゐた。彼は是等の批評を聞く毎に、正に反對な事實が可能であると云ふ事を示そうと思つた。彼はその時彼を疑ひ朝鮮の人を疑うにしては、彼の信仰は餘りに厚くあつた。

事實朝鮮側での基督教青年會に於ての音樂會は、彼を信じた友や又未知の人々によつて完全に用意せられた。集つた人々は堂に溢れて遂には入場を斷る事を餘儀なくされた。此事は更に第二回の會をさへ要求した。彼も彼の妻も彼等を心から迎へた朝鮮人の情に對して量り得ない感謝を感じた。

彼の日本の友も彼の爲に非常な勞を惜しまずにくれた。かくして彼の敬慕する基教の信徒の好意によつて、三度の會は強ひる事なく盛況に終つた。彼の妻は尚要求されて更に二回の演奏を續けた。彼は是等の會によつて人々の好意に浴し、彼も亦彼の情を贈り彼の望を果す折を與へられた事を深く厚く感謝した。

かくして彼は人々の好意の間に幸な多忙な時を過ごした。然も彼はその間屢博物館に彼の樂しい驚愕の時を費してゐ

た。半跏して想ひに沈む彌勒の像や、美しく柔かな高麗の器や、強く大きな李朝の磁器に彼は彼を忘れてゐた。又どんなにか好んで町々を彷徨ひその風俗や人情に觸れ、又は古器物を漁り歩いたであらう。彼は彼の愛する何物かを手にしないで家に歸る事はなかつた。

彼の二十日間の滯京は彼に忘れ得ない幾多の印象を殘した。それは涙の日であり喜びの日であり、感激の日であつた。心に於ての幾多の出來事が彼の上に起つてゐた。記者はこゝにそれ等の二三を語る事が、彼の氣持ちを一層明かに傳へる道であらうかと思ふ。

○

鐘路の大通りをパゴダ公園近く迄行つて少し北に入ると、朝鮮の古本を扱ふ書肆が今も殘つてゐる。時代に激變がある爲か、昔を今の世に引き繼いでくれるかゝる貴重な店は、漸次に此京城から無くなる樣である。一つには古書に通じる人が絶えてくるからでもあらう。

彼が一日此古本に埋つた店に入つて、學者だと云ふその主人の奧の間に案内された時、彼はその溫突（おんどる）の小さな室の壁に、京城市街の古地圖を發見した。古風なその圖を眺めた時、彼は昔に歸る想ひがした。近時著しく形を毀された京城を、その古地圖にあてはめてみて、彼は昔の純な京城を樣々に想ひ回した。彼は歷史家でもなく、又地理を學ぶ者でもなかつたが、彼は彼の仕事に緣遠い此地圖を、高く拂つても買はないわけにはゆかなかつた。彼は此地圖を見る事によつて、古い朝鮮に深く交る想ひがした。日々變化してゆく京城の淋しい運命に對しても、彼は此地圖を長く保存せねばならぬと考へたのである。かゝる地圖なくしては誰が二十年、五十年の後、美しかつた京城を想ひ起す事が出來よう。人は京城を破壞しても、地圖は京城を守るであらう。彼が其地圖を抱いて店を出た時、彼は又燃え上る同情を朝鮮の人々に感じた。

地圖が示す樣に京城の市街は明かにその自然を背景として計畫された都であつた、今日も少し歩いて南山に登るなら

ば、それを一目のうちに見る事が出來る。中でも美しいのはその南山を南に控えて、連る城壁を守る崇禮門(南大門)から、大通りを過ぎて光化門に至り、勤政殿の本宮を臨んで、高く北漢山を仰ぐ秩序ある建築とその自然の背景とであらう。何人も氣づく樣に此景福宮の建立が絕えず自然を省みて、その礎を置くのに正しい場合を擇んだと云ふ事を、注意しないわけにはゆかぬ。古代の人々はいつも都を自然に守られた個所に撰んだ。然し乍ら彼等も亦、その建築によつて自然を更に飾る事を忘れはしなかつた。自然によつて都は守られ、都によつて自然は飾られたのである。此事は特に府の廣袤僅か東西に一里、南北に二十餘町の此京城に於て、明かに示されてあつた美觀であると思ふ。

彼は地圖を見るにつけてもかゝる美が今日失はれてゆくのを悲しまないわけにはゆかなかつた。市區の改正と云ふ名目はかゝる破壞を躊躇なく撰んでゐる。かくして多くの勞力と資金と美とを持つた西大門は第一に此都から奪はれて了つた。美しかつたと聞く西小門も續いて人の眼を樂ます事を許されなくなつた。李朝の建築として優秀であると讃えられる南大門は、幸にも今日保護の形に於て僅かに殘つてゐる。然し如何なる旅人がそれを眺めて、感慨なくして過ぎる事が出來よう。殘留するとは云ふが、その壯嚴な崇禮門の美に、なくてはならぬ兩側の城壁は、破壞し盡されて見る影だにない。高く厚い均等の城壁を左右の翼としてそゝり立つたその壯大な姿の前に立つて、人々は眞に「崇禮」の念を起したであらう。史家は此門の藝術的價値を賞めるが、然し孤立する門にのみ美があると思ふなら、それは淺い見方に過ぎぬ。然しかゝる事を云はなくとも、何たる侮辱が門を廻らす保護の柵によつて示されてゐるであらう。實に古代の美と何の關はりもない醜い新な石柱と鐵柵がそれを圍んでゐる。彼の感覺には此光景がどれだけ痛ましく思へたであらう。一日彼が東大門を過ぎた時、彼はかう心に呟いてゐた。

「東大門よ、お前の身が舊時の姿を止めて此京城を守つてゐる。どうか永く立つてゐてくれ。お前は凡ての友達が倒れてゆくのを見てさぞ寂しいだらう。然し誰か出て來てお前の運命をどこ迄も守護しようと云ひはるだらう。今後それが朽ちない限り、今迄の樣に日に何千何萬の人をそこから市內へ又市外へと通はしてくれ。汝寂しげな東大門よ、又明朝

日が東から出る時、之れを怨んでくれるな。きつとお前を心から愛する者がお前の門をくぐつて入つて來るだらう。」

夕ぐれの空に彼は門を見上げ乍ら、一夜の幸な眠りが此門に降る樣にと心に念じてゐた。

然し京城での彼の感情が最もひどく破れたのは、彼が景福宮を尋ねたその時であつた。古風な長屋造りの家に守られた大通りを進むと、前の攝政大院君が、文祿兵火の殘墟を昔に戻さうとして企てた宮殿へと近づいてくる。此景福宮の建築は李朝最後の大作である。前には光化門が聳えてゐる。その威力に於て君位の壯嚴を表示するのに充分であらう。實に此宮殿の美は、その宏大な扉を過ぎて、更に奧深く二重石段の上に立つ勤政殿の大建築を見る時であらう。背後には更に尙北漢山の白岳がそれを守るが如くに立つてゐる。下に蓮花を浮べて四十八本の大石柱に支へられるかの慶會樓も正殿にま近く佇んでゐる。是等は李朝末期の作であつて、遠く新羅や高麗の作に劣るとは云ふが、然し東洋藝術のすたれてゆく今日、實に吾々に殘された貴重な建築と云はねばならぬ。その結構の大や美に於て、是等のものが京城の都を美しく飾つてゐる事を誰が疑ひ得るであらう。よしその裝飾や、線や、形相に東洋建築の衰頽と下降との徵があるとしても、今日如何なる日本の人々が之に比敵し得る建築を造り得るであらう。

然るに何事であるか、自然を深く考慮し、その排置に周到の注意を拂ひ、民力の限りをさへ盡して築造されたその計畫が、正に滅亡の憂きを見ようとしてゐるのである。今日光化門と勤政殿との間に實に厖大な西洋建築が總督府の手によつて建ちつゝある。然も位置は西側に片寄つて、舊時の秩序を少しでも、省みる事がない。さしも大きな正殿も今日は門を通して見る事さへ出來ぬ。否、今日では既に勤政殿の全景を正面から見る如何なる位置もなくなつたのである。何たる無謀の計畫で之があらう。やがて之が正殿を毀し、光化門を棄てる前徵でないと誰が保證し得よう。景福宮奧深くの幾多の小建築は、今は住む人もなく顧る人もなく、風雨のまゝに晒されてある。生ひ茂つた草木をわけながら、是等のものを目の前に見るとき、異邦の人ですら淚を眼に浮べるであらう。況んや朝鮮の人々に未だ記憶さへ殘つてゐる時、此事は由々しい出來事であらう。人々は必ずや寂しさから怒りに迄移るにちがいない。何たる無益な無謀な所置で

あらう。强ひて民族の反感を買う爲に、此事を行なうのかと人は聞くにちがいない。此問ひが合理的でないとどうして思ひ得よう。

人はもう二度と此都に企てられた自然と建築との調和を見る事は出來ぬ。今は只かの古い地圖ばかりが、舊時の俤を人々の詩情に贈つてゐる。地圖こそはかゝる所置が果して正しいか否かの審判を、未來の人々に告げるであらう。

○

彼は朝鮮の小供達の服裝が好きであつた。彼は町を歩き乍ら幾度となく、ふり返つてはその可愛い姿に心を引かれた。白や水淺黄の色の中で、丁度單調を鋭く破るかの樣に、赤の上衣や黑の下衣が冴える樣に見える。時としては黄や虹や黑の縞が幼兒の身を鮮かに彩つてゐる。何と云ふ美しいつゝましやかな赤であらう。その黑にさへも朝鮮の味ひがにじみ出てゐる。黑と云へば一色よりないと想ふなら、それは大きな誤りである。小供はどこも同じである。何事も知らないで樂しさに耽つてゐる。彼は吾身を之れに比べ、雜然とした此世の現實を想ひ回したりして、小供を見る事が好きであつた。何かは知らないが、わけても朝鮮の小供が彼には可憐に見えた。

彼が一日仁川に行つた時、是等朝鮮の小供と車が同じであつた。彼等は凡て十二三の女の子であつた。五六人連れ立つて遠足にでも行くのであらう。樂そうに一時間を語りあかしてゐた。

車が着いた時是等の小供は何ものかを急に見出したのか、驅けるようにプラットフォームに出ていつた。彼があとを續いて車から降りた時、彼の眼には突如見なれない美しい光景が映つた。一人の若い日本の女敎師が、それ等の小供を抱くように撫でゝゐた。小供は先生の名を呼び續け乍らその二つの袂にすがつてゐた。殆どもう歩く事が出來ない程に前後左右から小供の小さい手に固く着物を握られながら、おくればせに場外へと出て行くのであつた。之を見た彼の眼からは、急に涙がとめどなく落ちた。おゝ、如何に此世での美しい出來事であらう。先生も生徒も嬉しさに凡てを忘れてゐる樣であつた。彼は仁川に着いて、船を海に浮べて遊んだ時も、只此の事ばかりを想ひ起してゐた。

若しも人に母の様な愛があつて、又人に小供の様な至純な情があるならば、どんなにか此世が喜びの世界であらう。日鮮の多くの人達が憎みの刃を示さない日がない今日、此温い光景を誰が想像し得るのであらう。彼には凡ての問題が此實例によつて解き得るのではないかとさへ思へた。錯雜な爭の世の中で、かゝる喜びを見る事が人には如何に恩寵であり、希望であり、又懷く可き出來事であらう。彼もその日一日小供の様に幸ひであつた。その日を想ひ出す毎に彼は幸ひな心持ちにならない時はなかつた。

○

之とは異る內容ではあるが、同じ様な出來事が彼自身の上にも與へられた。之は彼が朝鮮の旅から歸つてからの事ではあるが、彼には忘れ得ない出來事であるから、玆に附け加へておかうと思ふ。

彼は或る日招かれて、朝鮮人の或會合で講演する依賴を受けた。彼はかゝる機會が來る事によつて、一層彼自身を朝鮮人の中に見出し、又正當な了解を彼等から得る事が出來るのを希つた。彼はその依賴を喜んで受け、又彼を招待する彼等の好宜に深い喜びを感じた。

それは雨の降る夕方であつた。彼が扉を押してホールに入つた時、既に二百人近くと思はれる人々が彼等の座席を占めてゐた。凡てかゝる會合が當局の人々にとつて危險であると思はれるのは云ふ迄もない。集る人々は數人の看守者によつて警戒せられてあつた。かゝる空氣を味つた事のない彼は何となく重たげな感じを受けた。絕えまなくかゝる監視を受ける人々を想うにつけて、彼は更に暗い氣持ちに打たれた。

此日彼が話そうと思つた主題は、朝鮮の味方としての若い日本の人々に就てゞあつた。云ひ換へれば眞理や平和や又は情愛に活きようとする日本の新たな精神を傳へたい主旨があつた。それ等の精神が朝鮮の運命に對して温い友誼を盡す日がある事を彼は信じてゐた。

彼が控へ室に待つてゐる間、ホールには讃美の音樂が響いてゐた。やがて彼は靜な祈禱の聲が重い空氣の間に漂うの

を知つた。遠く故郷を離れて、………此異郷で、彼等は神に向つて何をか訴へ、何をか祈るのであらう。彼も亦心の内で神が彼等の寂しい希ひに答へ給はん事を祈らないではゐられなかつた。

扉の開く音に彼の默想は破られて、彼が今宵の講演を始めるべき時の來たのを知つた。彼は立ち上つて人を分け乍ら響く拍手の間に演壇に近づこうとした。此時ふと彼の肩を靜におさへて彼の耳に早く囁いた朝鮮の人があつた。

「今晩は貴方がたに迄警察の監視がひどい樣です。速記者二人迄來てゐる位ですから、どうか注意して話して被下さい貴方の御身の上に若しもの事が起つてはすみませんから。」

公衆の中で突然に彼に囁いた此言葉は、どれだけ深い感激を彼の心に起したであらう。彼は見知らぬ人からの此溫い聲を聞いた時、どう彼の氣持ちを表はしていゝかを知らなかつた。彼は夢中で演壇に立つた。

思ひつ思れつゝある此瞬間の出來事が彼の胸には消えない記憶を殘した。彼は人情の此世にどれだけ深い喜ばしさを味つたであらう。日本の人々をして朝鮮の味方である事を希つたその時、彼は實に朝鮮の人によつて味方せられた彼であつた。

如何なる政治が兩國の問題を解決するかを人は知らない　だが情に交る時、矛盾する二つの心がない事を彼は信ぜざるを得ないのである。彼も朝鮮の人達を想ひ朝鮮の人々も今彼を想つてゐる。幸が二人の間を流れてゐる。何の故に今二つの國が爭つてゐるのであらう。世界の心は愛情へと求めてゐるのではあるまいか。單純な吾々の感情にこそ、平和の王國が潜むでゐる。凡ての錯雜な問題は玆に終りを見るであらう。何故に一切の不自然な勢を棄てゝ人情のまゝに活き得ないのであるか。彼はその宵の短い出來事に於て、彼の信念を更に强める事が出來た。

之は一つの小さな插話に過ぎない。然しかゝる小さな出來事に、眞に大きな眞理があると云ふ事をどうして否む事が出來よう。

○

彼は鐘路の通りが好きであつた。そこばかりは昔の面影がある。こゝはまだ醜い洋風の建物に蠶食されないでゐる。然も小さな和風の安普請も、こゝでは見ないですむ。朝鮮の町々が日々それ等の力の侵害を受けるのは、抗し難い事であらうが、誰にもそれは淋しい氣持を起させてゐる。だが鐘路の大通りは朝鮮の都だと云ふ心を今も送つてくれる。白衣の人の悠々とした姿はこゝには應はしい。日本では見られない大きな牛が柴をのせ、荷を引いてその間を通つてゆく。馬がこきざみに過ぎるのを見れば、旅の歸りでもあらう。人の往き來も玆は繁く、店の飾りも賑はつてゐる。夜毎々々に夜店の燈びが夥しい人を集めてゐる。(その多い集りを恐れたのであらう。昨春の出來事があつて以來當分此夜店は禁じられた程であつた。)店には七寶をちりばめたと見える髮飾りや、あの眞鍮の樣々な器の光りや、又はあの木堀りの下駄を鬻ぐ荒物の店や、又は世にも稀な素紙の老舖や、それ等のものは昔乍らの店々であらう。町を進めば高麗の塔も目に映り、遙か先には東大門が城壁をひかえて未だに佇んでゐる。此町はなくてはならぬ朝鮮の寶である。

彼は或日いつもの散策を終へて鐘路から南大門への電車を撰んだ。車はいつになく込み合つてゐる。でも彼は彼の座席を得る事が出來た。彼の左には年老つた女が白い包みと細い杖とを抱いてゐた。彼の右には兩班とも思はれる、高貴なみなりの老人が喪を示す白帽をかぶつて、いつもの正しい姿勢で彼の席にゆるやかに座つてゐた。黄金町の乘換えで車は殆ど滿員であつた。彼の前には二人の日本人が入つてきた。車が出ると彼等は聲高らかに此よも山の事を話しだした。話によれば一人は長く京城に居る商人のやうである。一人は此頃玆に來たらしい。恐らく案内でもされて廻つてゐる途中と見える。彼が何心なくそれ等の人々を眞近くに見た時、ふいにその内の商人の方が、彼の右に座つてゐた立派な老人の帽子をいきなり手につかんで、そうしてそれを他の一人に指して、

「中々うまく出來てゐる帽子だらう。馬の毛だ。よく見ろよ、こないだ死んだ王樣の喪中だと云んで今は白だが、ふだんは之が黑いんだ。中々手さはりがいゝやね。」

「妙な恰好の帽子だね、所變れば品變るか。」

之を見た彼はいきなり此商人をにらみつけた。彼は腹立しさに感情がこみあげてきた。此無禮な所置にかの老人の心が平和であるべき筈がなかつた。老人の顔に恐ろしく苦い表情が浮んだ。然しこらへる樣にして帽子の位置を正した後、眼を横にそらした。

彼は激昂した。だが、無禮な態度を受けてさへ、それを忍ばねばならぬ鮮人の心を想ふ時、彼は又暗い心に歸つた。そうして彼等に代つて謝まる樣に、老人に向つて「許してくれ」と彼は呟いた。今迄此無禮な安價な優越感がどれだけ鮮人の反感を買つたであらう。嘗て彼は「日本人が如何なる態度を朝鮮人にとるかを知らうとするなら、朝鮮服を來て町を歩いてみると分る」と友達から教へられた。彼は今此事がまがひもない事實だと云ふ事を信ぜざるを得ないでゐる。人は之が無學な商人の例外な所置に過ぎないと云ひ得るだらうか。彼は不幸にも京城に來てかゝる態度が底深く流れてゐるのを知つた時、どんなにか苦く思つたであらう。彼が逢つた要路の人々の口から、彼は嘗て朝鮮に對する愛情の一言をすら聞いた事がなかつた。異つた風俗や習慣は彼等の弄ぶ話題であつた。若し外國の人々が同じ樣な態度を日本にとると知つたら如何なる反感が日本の間に盛れ上るであらう。試みに東京の電車の中で同じ樣な出來事があつたとするその無禮な行ひに憤らない日本人がどこにあらう。反感こそ自然である。醜い優越の感に傲り乍ら、反感を豫期しないのは矛盾である。彼はかく考へて終日不快であつた。

○

彼は滯京の間種々な朝鮮の藝術を見る事によつて、幸な多くの時を過ごした。然し中でも彼の友人が蒐集したものゝ内で、一つの李朝期の大壺を見出した時、彼は今迄に經驗した事のない感情に打たれた。彼はその日の日記に次の樣な感想を書いた。(壺は高さ尺五寸の大作であつて、白地に呉州で蓮花が畫いてある。花びらや蕾は長砂の爲に薄紅と綠色と呈してゐる。)

「……陶磁器の浮び出てくる其立體にも彫刻の味ひがある。屢々その形は人體の美さをさへ暗示する。此一個はわけて

も柔らかである。肌の美しさはその暖をさへ想像させる。誰れもそれに手を觸れ得たら感じを禁じ得ないであらう。その圓みや、肩にそつと流れる線に自然の呼吸をさへ聞く事が出來る。然もその肌の色が如何に美しい白さであるよ。いつも朝鮮の磁器に見られる樣に靜な靑味がヴエールの如くにかゝつてゐる。此單純な白い色にさへ吾々は民族の心を讀む事が出來る。それは女人の樣なつゝましやかな、內に匿れた穩かな色だ。吾々は外に出ようとする如何なる傲りをも玆に見出す場合がない。凡ての美は內に內にと包まれてゐる。見えない何ものかを見守る人を心待ちする樣である。

その春霞の樣な白い世界に、畫き出されたのは一束の蓮華である。たわやかな莖の上に花は彼女の靜な座を占めてゐる。薄紅と萠黃の色に花びらは穩かに開かれてゐる。右には一輪のふくらやかな蕾と、左には長い莖もたわゝに一つの豐な葉が畫かれてゐる。是等のものが今朝まだきの露にぬれて、淡い霞の中に浮び出てゐる。凡てが夢みる樣である。音もなく亦僅かのゆらぎすらなく、蓮華は何事かに想ひ沈む樣に見える。丁度かの女人の樣な彌勒が半跏の姿で、手に首を傾けて想ひに耽る風情がある。

如何なる陶工が此永遠の作を産んだのであらう。彼は幾百年の朝鮮が心に抱いた想ひの限りを玆に寫した樣である。心がそれに眺め入る時、凡ては淨められ靜められ、彼岸の世に往く想ひがある。何たる靜けさであらう。之こそはかの佛徒が愛した蓮華の花さく淨土であらう。しめやかな淋しさや、靜な美しさが見る者の心に迫つてくる。余は如何に强く余が故鄕の宗敎をまともに味う想ひがしたであらう。只の器だと云つて之を忘れる罪を犯してはならぬ。どれだけ多くの宗敎の筆がか程迄に心の秘事を畫き寫せたであらう。此一つの壺を想ふ事は、直ちに此世を想ひ、心を想ひ、彼岸の世を想ふ意味があらう。詩情の豐なものは、丁度キーツが希臘の瓶に向つて永遠の言葉を綴つた樣に、此一つに對しても優れた詩人となり得るであらう。盡きる事のない冥想の美が玆には恐ろしい迄に示されてゐる。見る者の呼吸は漸次に靜まつてくる。心はいつかその蓮花の座に移されて、彼も亦夢みる樣な世に漂ふであらう。我もなく彼もなく凡ては一に流れる三昧にへと歸つてくる。

之は李朝の作に於ても、永遠なものゝ一つである。かゝる宗教の域に達し得た作を幾許か此世に持ち得るであらう」。

彼はこの様な感じを記したあとで、彼の手記に次の様な考へをも書き添えてゐる。

「眞に藝術に於て心と心とが觸れ合うのである。若しも日本の人々が單に研究と云ふ態度を棄てて、朝鮮の藝術に心からの愛を感じるなら、その態度は一變するにちがいない。藝術はいつも吾々に情愛と結合との幸を與へてくれる。如何に愛すべきかを知る時、吾々は如何に敬ふべきかをも知るのである。互の敬愛にのみ眞の友情が起るのである。敬愛の念がなくしてどうして日本が朝鮮の友となり得よう。

藝術の美に於ては國境もなく隔離もない。心と心とがぢかに逢うのである。藝術にはいつも和合の世界がある。政治や軍刀は排他でない場合がない。地に平和を望もうとするなら、それ等の道をいつか越えて、藝術や宗教に迄心を深めねばならぬ。それ等の國にのみ愛の悦びがあるのである。

わけても朝鮮の藝術は人情に溢れてゐると思ふ。若しも人がそこに近づくなら、愛さずにはゐられない世界が前に開けてくる。丁度古代の日本の朝鮮の藝術に於て、その文明の一歩を始めた様に、今の日本もそれを顧る事によつて心を養ひ得るであらう。美の心に豐な日本は此眞理を受ける事に既に用意せられてゐる筈である。此事を想ふ時、朝鮮藝術の紹介が新しい驚愕を若い日本の人々に齎らす事を余は信ぜざるを得ないでゐる。」

彼は是等のことを書いたあとで、彼が不日朝鮮美術史を書きたい希望をも述べた。且つ彼は殘された作品の無益な散逸を惜しんで、朝鮮民族美術館を設置したい願望をも記した。彼は前から此企てを實行しようとして、彼の所持金の許す限りをその爲に費し始めた。彼の家を訪ねた者は誰れでも知るであらう。彼が家のどの室にも朝鮮の作品を見出さない場合がない。彼はいつか是等のものを纒めて、京城に送り返す日の來る事を待つてゐる。

○

曾て彼が朝鮮を人々に傳へようとして、かの石佛寺の彫刻や又三國時の佛像を雑誌によつて公表した時、如何に多く

の讃嘆の言葉が未知の友から彼の許に屆いたであらう。若い無數の日本の人々が藝術に對する憧憬に於て特に著しい特色を持つ事を彼は知つてゐる。彼はいつか日本が藝術の理解によつて朝鮮の心に近づき得る事を信じてゐる。銳敏な感情の所有者であるなら、どこに愛し得ない朝鮮の藝術があり人情があり得よう。彼のこの信念は朝鮮を始めて訪ねた二人の藝術家からの書翰によつて、明かに裏書された。

彼の近い友であつたLは、彼と共に一週間を京城で過ごした後、日本に歸つてから次の樣な感激の手紙を、京城にゐる彼に宛てた。（Lは英國の畫家であつて、彼の最も親しい友の一人であつた。十年の日本での滯在と二年の北京での生活の後、まもなく故國に歸らうとするLは、彼は强ひて朝鮮に行く樣にと勸めた。朝鮮に行く事は啻にその友を異常な美に近づけるのみならず、東洋の精神を味ふ上に缺いてはならぬ旅であると彼には思へた。友も此行をどんなにか期待して、歸國の爲非常に忙しかつたに拘はらず、一週の日を割いて、彼の行に加はつたのである。此短い滯在は此友にとつて最も感銘の深い出來事であつた。彼は永く朝鮮の土地と別れる事をどんなに惜んだであらう。手紙にもその心を讀む事が出來る。）

「僕がどれだけ重い氣持ちで京城の停車場を立つたかを君は察しるだらうか。僕の心は二つに割けそうだつた。どうしてもつと早く朝鮮に來なかつたかを自分でさへ不思議に思ふ。もう國に歸る時が迫つてゐるが、五年もしたら必ず朝鮮に歸つてきたい。自分の半身はまだそこに殘してある。別れねばならぬあとの半身は苦しさに泣いてゐる。車が早く動くにつれて、丘は長く美しい線のうちに浮び又沈んでゆく。あの獨特な優秀な朝鮮の線は凡てに流れてゐる。それは銳く美しく且つ悲しく人の心にもつれてくる。その線は丘にも男の帽子にも又女の髮にも、兩者の靴にも見る事が出來る。

あの朝鮮の琴の響きにもそれが聞えてゐる。眞鍮にも鐵にも銀にも又金にもその線がある。あの高麗の器こそは自分を天の驚異に迄導いてくれた。自分は生涯の間線の美を愛してきた。どうして自分は今迄朝鮮に來なかつたのだらう。」

彼が朝鮮から歸つてまもなく、彼は又彼の一人の印度の友達が朝鮮に行くのを見送る喜びを得た。此友達も藝術の朝鮮に逢ひに行くのであつた。旅先から彼は又次の樣な手紙を受けた。

「あの壯嚴な奇異な東洋の美である金剛山から出した僕の手紙は受けとつて被下つた事と思ふ。僕はまだ京城の朝鮮の旅籠に宿まつてゐる。周圍や壁や特殊な屋根や、食物や、又凡てのものに僕は愛を感じ出し敬意を感じてゐる。僕は殆どこゝを去る事が出來なくさへなつてきた。恐らく僕が死ぬ時が來たら、僕はこゝに來て是等の人々の間で死に靜な丘に埋められたく思つてゐる。だが今は止むなく京城を立つて數日間を開城や平壤で過ごし、大連の方に行く事に決めた。

昨日の夕方、君の注意によつてあの驚く可き李朝の壺をA氏の處に見に出掛けた。それは眞に寂しい偉大な美しい朝鮮美術の代表作だと思ふ。吾々はその寫眞をとつた。あれは全く稀有な作だ。それは朝鮮宗教の深さに迄自分の心を波打たせ又導いてくれた。何も之以上書けない程色々な事で自分の心は一パイになつてゐる。」

此手紙を彼によこしたSは京城を去る時、殆どLと同じ樣な感じを抱いて、手紙を又彼によこした。

「心を魅るあの京城の町を去る時、自分の胸は泣いてゐた。實際自分が朝鮮の人達を愛してゐる程、そんなに強い愛を感じた事は今迄多くはなかつた。自分はまもなく君に逢つて朝鮮に關して盡きない話をする日を待つてゐる。」

記者は此手紙を引用する事によつて、讀者に種々な暗示を贈る事を希つてゐる。藝術を通して朝鮮に近づく者が、如何に心からの愛を朝鮮に感じるか。又かゝる眼を通して朝鮮に近づく時、如何にそれ等の心が朝鮮の人々によつて愛を受けるか。是等の手紙はその活きた例を語るであらう。

その國の藝術を知る事が、やがてその國の人情を理解し、愛を呼び覺まし、敬念を抱くに至る道ではないか。かくして人がその人情を愛すそ時、彼自らがその人情に愛されてゐるのを見出すのである。藝術を理解する者には、あの默する丘や靜に流れる河さへも眞に其國の心を示すであらう。一國の文化をその自然や風土から全く分け隔てる事は出來ぬ。

人情も風俗も習性も、又はその工藝も建築も衣服も器具も、山も河も木も花も凡て一個の離れ得ない有機體であらう。それ等の密意を味う者はＬの手紙にある樣に、あの訴へる樣な情に滿ちた朝鮮の線を何處にも見る事が出來るであらう民族が嘗めた樣々の悲しみや寂しさや、又は心の美しさを、彼が四圍の何處にも見出す事が出來るであらう。かゝる光景が眼に映る時、どうしてその國やその人に愛を感じないでゐられやう。愛するならどうして又愛されずに終るであらう。特に朝鮮の美は愛に充ち愛に飢える美ではないか。

人々が是等の手紙が旅行者の單な感激に過ぎないと云つてはいけない。若しも内面の洞察がないならば「多年の經驗」も何の意味があり得よう。瞬時の直觀もその内面の意味に於ては永遠な深さがある。人情は知識よりも眞理の理解者である。情愛に於て交り得ない心と心とがどこにあり得よう。今日、日鮮の間に蟠る不幸は、只々情に缺け涙を持ない行ひの結果ではあるまいか。彼の日記には次の樣な言葉が見出されてゐる。

「朝鮮の人達よ、一度貴方がたの心に活きた者は、眞にその國を去る事に悲しみを感じてゐる。貴方がたも亦離別の悲みを眞に知つてゐるであらう。近い日に再訪の日を果す事を私も希ひ、又貴方がたも望んでほしい。」

○

二十日間の滯京の後、彼は又彼が來た南大門を去らねばならない境遇にゐた。彼を送る多くの人に彼は再三別れの言葉を殘した。獨り車の窓から又朝鮮の景色を眺め入つた時、彼は胸に迫る感情を覺えた。彼は紙につぎの樣な事を書いた。「朝鮮の人達よ、又暫くは貴方がたに別れなければならない時が來た。然し私の心は貴方がたから別れまい。貴方がたも心に於ていつも私に交つて下さるだらう。私に寄せて下さつた貴方がたの厚い志を私は決して忘れまい。私は貴方がたの中に於て、今迄味つた事のない幸福を感じさされた。私のこの短い旅が何事かを貴方がたの心に贈つたなら、それも私にはあり餘る悅びだ。貴方がたは又目前の事に重い心持ちに沈む事があるであらう。その折にはその事をいつも考へてゐる私を想ひ起してほしい。見えない國に於て私達は私達の王國を持つてゐる。私はそれを信じてゐる。貴方がた

もそれを信じて被下るであらう。

身は遠くに隔るが、心はいつも時と處とを越える。心の王國は何人にも奪はれはしない。それは現世よりも、より眞實な世界だと私は信じてゐる。

安らかな日が吾々が愛する友の上にある事を私は希ふ。希ひが神の嘉し給ふところとなる事を私は心ひそかに信じたい。朝鮮の人達よ、又吾々が逢ふ日の近く來る事をお互に祈らう。」

○

「改造」六月號に種々な曲折があつた後、彼の「朝鮮の友に贈る書」が發表された。之は彼が朝鮮に行く前に發表したく思つたのであるが、遂に其望は滿されずに了つた。「改造社」から彼は非常な厚意を受けて卷頭にまで載せたいと通知されたに拘ず、警保局の檢閲はその發表をさへ危くした。種々な交渉の後掲載はされたが、當局の見解によつて、その本文の主要な個所は不穩當であると云ふ名のもとに殆ど全く抹殺せられた。彼がその雜誌を開いて讀み返した時、その削除の個所が餘り多い爲、自分が書いたものゝ樣な氣さへしない位であつた。然し彼の友がその哀れな結果に就て彼に厚い手紙を寄こした時、彼は返事を書いた。

「こう云ふ樣な事柄は、此世では屢々繰り返へされた。自分は別に驚きもせず又無益な怒りにも怒りたくないと思ふ。自分よりもどれだけ多く朝鮮の人達は此事で苦んでゐるか分らない。自分は寧ろ内心に於て幸福を感じてゐる。なぜなら自分は二つの理由で、自分の趣意が守護せられてゐる事を發見したからだ。一つは眞理が最後の是認を得ると云ふ内心の確信によつてゐる。當局者の許認を受けないと云ふ事は、自分の信仰に對して聊かの傷にもならない。寧ろ此事は自分の信念が未來に活きると云ふ榮譽を意味すると考へてゐる。他の一つの理由は不完全なものであつたに不拘、非常に多くの讀者からあの一文に對して厚意と讃辭とを受けた事によつて、朝鮮の友としての日本をもつと明に意識する事が出來たからだ。實際此二つの事實は自分に今幸福を與へてゐる。

報告によれば自分の書いた趣意は朝鮮の紊亂を意味すると云はれてゐる。又或點からすれば安寧の破壞であるとも許せられた。然し自分は是等の見解と全く正反對な、平和と愛と秩序とを求めてあの一文を書いたのであつた。日鮮の和合を求めたものが、不穩當であると云ふ逆理は誰によつても承認されないと自分は考へてゐる。恐らく余が朝鮮に與して日本に反旗を飜へすと迄思つたのであらう。然し余は朝鮮に對して抑へ得ない愛を感じると共に、若い精神的な日本に對して最も強い信賴を持つ事を實際に述べたのである。二つの國が互に眞理に活きたる時に、眞の平和が結ばれる事を自分は書いたのである。

眞理を愛する事によつて、自分が罪を受けるなら、かゝる罪は自分には名譽であらう。多量な抹殺を受けたのは余が卑しかつた爲でもなく、又余が誤つてゐる爲でもない。かゝる抹殺は眞理を行ふ事を恐れてゐる者の不自然な所置に過ぎない。此所置によつて余は一層余の信仰を保持して、二つの國の心からの和合に向つて、不斷の努力を獻げたいと云ふ信念を强めたばかりである。」

かゝる氣持ちは彼を一層の嚴肅にした。記者は彼の許に屆いたと云ふ多くの手紙から二三の例を玆に引用しようと思ふ。彼はそれ等の引用が、餘り彼自身の事に關するので、その發表を躊躇したが、然し記者は之によつて彼の朝鮮に對する情が日本に於て一個の例外ではないと云ふ事を示したく思ふ。次の便りは田舍にゐる一人の敬虔な友から彼に屆いたのである。

「改造六月號にお出しになつた「朝鮮の友に贈る書」を讀んで涙が出ました。私達の愛を代表して下さつたことを心から感謝致します。

葉書などで失禮ですが。私もまた先生と同じ愛を持つてゐる一人であることを御知らせして、感謝のしるしにしたく思ひます。

朝鮮と日本との融合の爲の御運動に、若し私の出來る事がありましたらやらして下さい。出來るだけの事は致しま

すから。」

彼はまもなく此友から、音樂會を開いて其純益金の全部を送るから、何か朝鮮と日本との和合の爲に用ゐてくれと云ふ厚意ある手紙を受けた。又他の友達から次の様な興奮した言葉を受けた。

「兄の「朝鮮の友に贈る書」を今讀んだ。なぜ早く讀まなかつたかと思ふ。自分は涙ぐんで盡ない悅を感じてゐる。あの一文を朝鮮人のみでなく、支那人も印度人も讀む事によつて、內面的に相互に情の世界に活き得ることを、自分も厚く信じてゐる。自分はあれを讀んで泣いてゐる、兄の心からの情愛にまともに觸れ得た事は感謝の他ないと思ふ。悅びまでにこのハガキをお書きした。」

別信、

「畧、末文ですが貴方の書かれた「朝鮮の友へ」の大きな愛に對して、涙ぐまずに讀む事が出來なかつたと云ふ事を附け加へさして被下さい。私は非常に感謝して居ります。

今迄多くの雜誌を讀みましたが、あんな感激に深い文字に始めて接しました。貴方の叫びは私の腔裏の血を動搖させてゐます。全部の文字に對して（一字の除外なく）賛成の心を表します。」

彼は又思ひがけなくも女の友からの熱心な手紙をも受けた。

「私が樣々の事で苦んでゐた時、貴方の文を拜見した事はどんなに嬉しかつたか知れません。苦い涙ばかりの私には始めて嬉しさの涙がつたひました。貴方の御考へになつてゐらつしやること、なさつて下さる事などは、此世に對する希望を內から溫めてくれる光だと思つております。後畧」

彼は是等の手紙によつて若い日本の人々が、旣に朝鮮の溫い味方であるのを見出し、どんなに感謝し、又鼓舞せられた事であらう。よし彼の記事が多く削除せられても、削除せられないのは是等の人の心であらう。彼はその一文によつて一層朝鮮の心に深く入つたのみならず、日本の心にも深く入つた事をどんなに幸福に感じたであらう。

その朝鮮譯は「東亞日報」に掲載せられたが、僅か二回で發表を禁止された。然し彼は六月十六日の,The Japan Advertiser,にその一部英譯が掲載せられた事を後に知つた。彼は禁止の禍に逢つた彼の文が見知らぬ人々の好意を受けて廣く人々に傳へられた事を心から感謝した。

○

今は秋も半になつて、彼が愛したあの北漢山が、澄ぬいた空に聳えてゐるであらう。山は今も裏切る事なく京城の都を守つてゐる。然し住む人々の心に平和が守られてゐるであらうか。彼は此事を思ひ又寂しさに襲はれてゐる。彼は家に歸り遠く離れても、いつもその國の人々を想ひ回してゐる。彼は彼の心に於てそれ等の人々を守る事を忘れまい。彼の愛するかの北漢山が今も都を守る事を忘れてゐない様に。（一九二〇年九月）



——（創作）——

□反抗と否定　長谷川如是閑

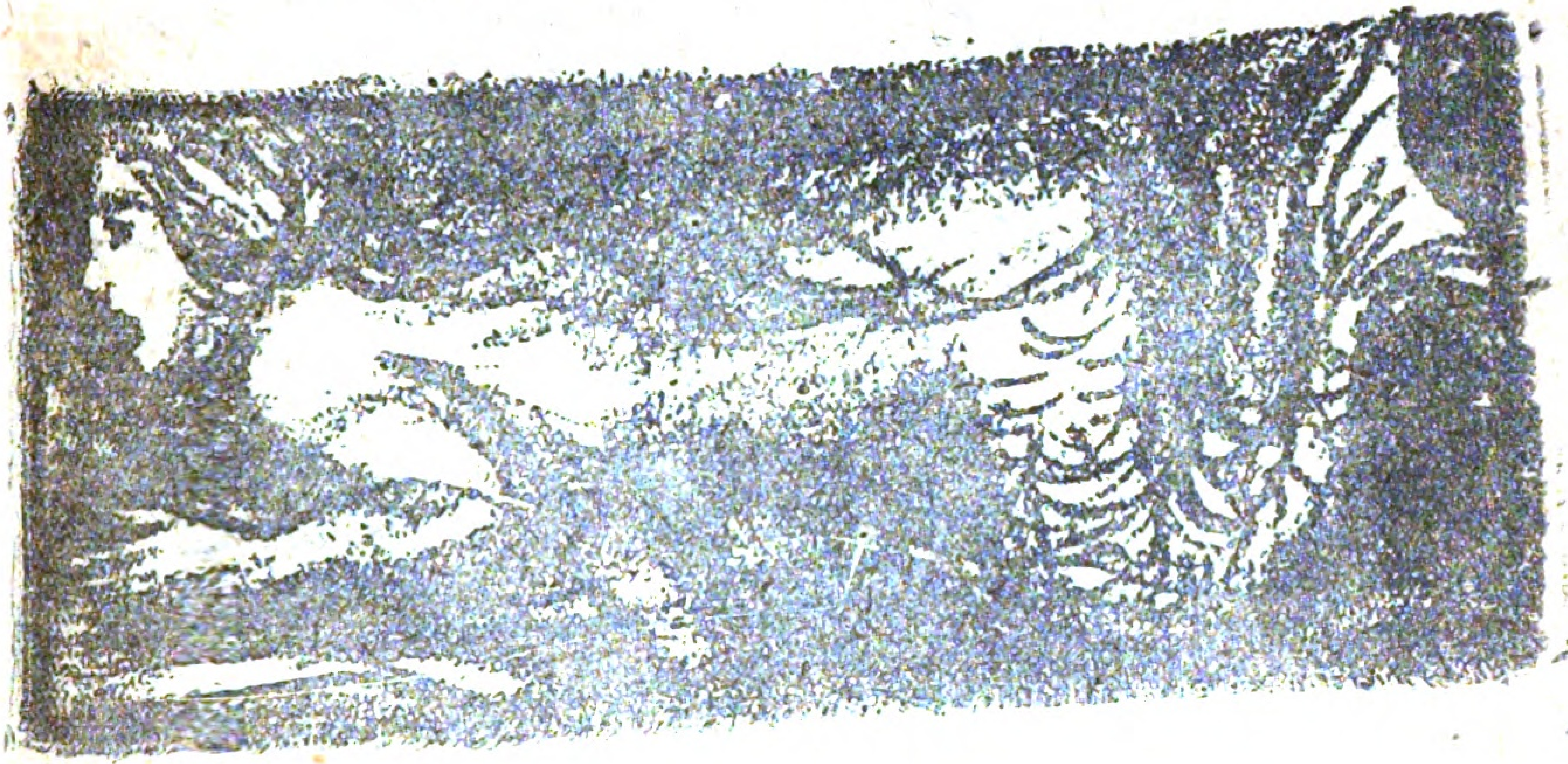
□悔恨　正宗白鳥

□酒亂　細田民樹

□或る海邊の町　廣津和郎

□歸去來　宇野浩二

□潮風　里見弴



反抗と否定

長谷川如是閑

『ブルツ、ブルツ、ブルツ、ブルツルツルツルツルツルツ……』

隣の自動車のエンジンの爆音が、四邊の靜かな空氣をバラ搔きにするやうな響を立てた。

『あれツ又！』その響と同時に細君の、怒鳴るともつかず、唸るともつかず、呟くともつかない聲が、彼れをビクとさせた。

『ねえ、あなた、私もういやだわ。早く引越しませうよ。』妻君は頗るエクセントリツクのカーヴを持つた聲で、彼れを抓るやうに云つた。

兩足を投げ出した眞中に新聞を置いて、それを見てゐるふりをしてゐた彼れは、自分は、そんなことを意に介さないうちに、自然と妻君に同情してゐるやうに見える態度を示さうとした譯ではないが、結局そんな風を見せるやうな態度で云つた。

『困るなア。……引越すたつて家はなし、隣の自動車を叩き壞す譯にも行かないし此方が聾になることも出來ないし……』

『あなたは無神經だから駄目だわ。平氣なんですもの、あんな人殺しのやうな音を。』

『アツハツハツハ。』彼れには『人殺しのやうな音』といふのが一寸可笑しかつた。
『笑ひごつちやないぢやありま　んか。』
實際彼れにとつても笑ひごと以上ではあつた。

彼れは數ケ月前に此處に越して來たのであつた。その前に彼れの居たA町の家といふのは、荷馬車や荷車の往來は可なり烈しいが、極めて貧弱な家並の、表通りの借家であつた。年寄りの齒齦のやうに、汚たない家が出たり引込んだりしてゐる中に挾つて、彼れの家は、道路よりも二尺ほど低い地盤に、も一と鍬入れたゝといふやうな凹みに、格子戸の、腐りかけた敷居が埋まつてゐるので、彼れは、自分の家を見ると、何時も、流し元のジク〳〵した泥の中から出て來る蚯蚓を思ひ出した。さうして每日、朝の五時ごろから、輜重大隊でも通過するやうなけたゝましい車の音に驚かされて目が醒めるのが非常に辛らかつた。ある朝、眠いのに起き上つて。窓から往來を見下ろして、それが肥車の行列であつたことを發見して、『もう我慢は出來ない』と思つた。が何時の間にか、彼れは、その音響に眼を覺まされる朝が稀れになつたので、妻君に、肥車が減少した喜びを述べたら、妻君は、自分の夫が、馬鹿であつたことを始めて發見したやうな顏で、他を眺めて、
『呆れたわね、あなたは。』と悲しさうに云つた。
妻君は、彼れの神經が、段々と鈍つて行くことを知る度に、悲しさうな表情をするのである。夫の神經の鈍ることは妻君にとつて一番悲しいことでゝもあるかのやうに。
彼れは、自分の神經の鋭鈍などを別段念頭に置く男ではなかつたのであるが、妻君の悲しさうな表情を度々見せられたので、自分の神經の働きに關して、成るべく公表しない方が好いといふやうな氣になつた。肥車の時にも、シマツタと思つた。

『ねえ、この家何うかしませうよ。』その時も、妻君はさう云つた。

『何うかしやうたつて、僕の建てた家ぢやなし……』彼れはそんなことをいつた。

『さうぢやないのよ。何處かへ引越さうといふのよ。』妻君は、家といふものは、何處へ行つても建てつまつてゐるので、そのうちの何處へでも入つて行けるやうに考へてゞもゐるらしかつた。

彼れは氣の毒さうに、妻君に向つて敎えた。

『引越さうたつてお前、今家はありやしないよ。偶々空く家があつたつて、大抵一年も前から豫約濟みなんだからね。』

『そんなこと解つてゐますよ。』案外にも妻君は、そんなことはよく知つてゐたのだ。

『それなら、引越さうといつたづて、何うも出來やしないぢやないか。』

『そりやあなた、この時節に、坐り込んでゐて、何處かに空家はないかつて云つてゐたつて、誰れが持つて來てくれ手があるものですか。あなた位無精な人はありやしない。火鉢の前に坐り込んで、「家はないか、家はないか」と云つてりや、家が獨り手に歩いて來ると思つてゐるんですもの。』

『そんなことはあるものか、この家だつて、隨分苦心して探し當てたのぢやないか。』

『だから、こんないやな家しか探しあてないんだわ。Mさんだつて、Nさんだつて、皆氣の利いた家に入つてゐるぢやありませんか。うち見たいに、高い家賃を出して、こんな汚たない家に入つてゐるものはありやしないわ。Tさんなんか、何時の間にか金主を見つけ、て自分建の家に入つたたつていふぢやないの……私こんな家いやになつちやつたわ。』と妻君は顏中を歪がめて、そこらを見廻した。

妻君は、自分の言葉が、自分の耳に入るのを聽いて、段々昂奮して行く質であつた。だから、彼れは、妻君ばかりに物を云はせるのを危險がつた。けれども途中から割り込む隙間を見付けることが容易でなかつたので、大抵は濟んでしまつてから、ポンプを持ち出すのであつた。

「だつてお前、あんな人達は皆上手なんだからね。何時の間にか、重役と懇意になつたり、取引先きの家庭に入り込んだりして、何うもそれは不思議だね。」

「不思儀なもんですか。そんなことの方が本職なんですもの。」

「だから僕には、あんな連中の眞似は出來ない。」

妻君は默つて彼れの顏を見た。妻君が默つて彼れの顏を見るのは、乾度彼れに同情するか、感服するか、少くとも異存のないことの知らせであつた。

彼れは嬉れしかつた。

で彼れはその家に何年か居た。妻君はその家で始めてのA子を産んだ。妻君はその産後に長く患つて、その後健康は回復したが、樣子が何處となく前と變つたやうであつた。勿論彼れがそれを感ずいた譯ではなく、極親しい友人のHにそれを云はれた時には、彼には能くも合點が行かなかつた。Hといふ男は隨分變なものゝ言ひ方する男だけれども、彼れに向つて餘り嘘を云つたこともないし、嘘をいふ必要のある關係を持つた間柄でもなかつたので、彼れは比較的、誰れの云ふことよりも、Hの云ふ事を信用した。

妻君の樣子が、自分には一向變なやうにも思へないが、さういはれと少し何うかしてゐるやうでもあり、萬一實際にさうであつたら、何うかした方が好いかとも思つて、彼れは妻君のかゝりつけの醫者にそのことを相談した。醫者は、さういふ病人ならば、もつと閑靜な所に引込む方が好い、といつた。

「どういふ病人ならば、さうした方が好いのですか。」と彼れは尋ねた。

「あなたが今仰つたやうな病人ならばです。」と醫者は、演說口調で答へた。

彼れは、自分の言つた病人なるものについて、正確の概念は持つてゐなかつたが、兎に角さうした方が好いのならばさうした方が好からうと思つて、歸つて妻君にそのことを話した。妻君は大變喜んで、その話をした日が、日曜だつた

ので、二人は子供の手を引いて、院線の電車でN——附近を尋ね廻つた。

蚯蚓のやうな家の中から出て、青々とした生垣續きの、こんもりした樹木の間から家根を少しばかり見せてゐるやうな住宅ばかりの、この邊をうろついてゐると、鮮しい空氣で肺の中を掃除してゐるやうな氣がして、彼れは蘇き返つたやうに思つた。

『實に好いなア、この邊は。お前のやうな病人には、かういふ閑靜な所で靜養するより外別に仕方がないのだぜ。』と彼れはくたびれた子供を背負つてゐる妻君にさう云つた。

『私のやうな病人て、私病人でも何でもないぢやありませんか。いやな人ね。』と茨の垣越しに見える、安ッぽい白煉瓦張りの洋館を眺めてゐた妻君は、此方を向いて笑つた。

偶然に貸家の有無を尋ねた酒屋が、親切に、間もなく空くといふ家を世話してくれて、數月前に引移つたのが、彼れの今の此の住居である。

近所の大きい邸宅や別莊に挾つて、それこそ、樹木の多いこの邊では眞上からでも見なければ有るか無いか解らないほどの少さい住居ではあるが、士地柄とて相應に庭もあり空地もあつて、殊に兩隣も、前後も、樹木ばかりで家の見えない位、大きい邸宅なので、晝間でも、深閑として、あの町から移つて來ると、まるで山の中であつた。

『好いなア。』と彼れは椽先に立つて、貸家にしては檜や松や青桐や躑躅や、家主の植木屋の有り合せのものにしろ、割合豐富に木の植はつてゐる庭を、すばらしい庭園でも見渡してゐるつもりで眺めながら、得意になつて、叫ぶやうに云つた。

『ほんとうに好うござんすことね。』妻君は、戀人の顏でも見るやうな樣子で、彼れの方を見た。彼れも同じやうな心持で妻君を見た。

『あれ何だか、鳥が鳴いてゝよ。』妻君はピピピッピ、ピピピッピ、と單純な調子の小鳥の聲に、天才のメロディーで

も聞き惚れてゐるやうな顔をして耳を傾けてゐる。
『好いなア、向ふの松の木は。随分高いね。何うだい、まるで繪に描いたやうな枝ぶりぢやないか。』彼れは、隣家の庭の、谷のやうに低くなつた邊の木立の上に、二三本高く差し出てゐるその松の木を指した。
『あの淺黄色の空のところへ、くつきりと松の樹の姿が現はれてゐるところは、何とも云ひやうがないわね。』妻君は、延び上つてさういつた。
『大分虫が泣いてゐるね。』彼れは、垣根越しに、別の隣の方を見た。そこは、草が莽々と生えて、芒の穂がキラ〳〵と光つてゐる。
『土地がないの何のといつたつて、町から一寸出ると、自分の邸の内に、こんな廣い草原のあるうちがあるんだからなア。日本はまださう悲觀したものでもないテ、狹い〳〵なんていふけれど。』彼れは、椽先の雨戸を開けると、隣の高窓の格子に頭を打ちつけさうになる、昨日までの住居のことなんかは、すつかり忘れてしまつた。
『それだから、土地がないんぢやありませんか。』と妻君は、頰をふくらして、さう云つたが、何時もの態度から見ると餘程批評的、超絶的であつた。
『何うして？』彼れは、妻君の方を見るでもなく、口をあけて廊下の天井を眺めながらから問ひ返した。
『こんな人が、皆自分のとこへ取り込んでしまうから、私達には無いも同然だわ。』
妻君は、前の家に居たらば、眞劍でいふことを、今は戯談らしく云ふのであつた。
『まあ、さうお云ひでない。隣の人の地面でも、かう私のとこの垣根續きにあれば、私の土地も同じぢやないか。隣の主人よりも、私の方が、この草原を利用してゐる譯なんだよ。椽先からあの芒の穂を眺められるだけでも、隣の主人よりも、私の方があの土地を使つてゐることになる。』
『でも、あすこへ高塀を作られてしまつたら、あなた何うするの。いけないつていふことも出來ないぢや　ありません

か。』

『あんな所へ塀なんぞ作るもんか。誰れの得にもならないことは、誰れもやりやしないよ。』

『それでも、あすこへ此處の家が蔭になつてしまうやうな高い家を建てたら何うして？』

『さうしたら、此方が引越すまでさ。そこへ行くと貸家住居は便利至極だ。』

『だからあなたの議論は勝手だつていふのよ。私が引越さうつていふと、あなたは屹度、今時空家がそこら中に轉ろがつてゐると思ふのか、なんていふ癖に、自分の都合なら、今にも引越せるやうなことを仰つしやるんですもの。』

『アッハッハ……。』

『オホホホ……。』

若し此の爭論が、以前の住居で起つたら、それこそ妻君は土瓶を二つ位壞はすのだが、環境の變つたお蔭で、それは樂し相な笑ひ聲で解決してしまうのであつた。

二人は、一週間ほどは、そんなことばかり云ひ合つて暮らした。

引移つてから、始めての日曜日の晩は、非常に好い月夜だつたので、妻君の發起で、隣の芒を利用してお月見をすることになつた。家主の植木屋から椽臺を借りて來て庭先に据へて、その上に坐り込んだが、さうすると、隣の芒が見えないので、その椽臺の上に、家に二つだけある椅子を持ち出して、二人はそれに腰をかけて、枝豆を嚙つた。

『みんな人のものね。椽臺も、芒も、お月様も。』と妻君は笑つた。

『お月様が人のものといふことはあるものか。我々のものだ。』と彼れはいつた。

『あなたはお隣りの庭まで自分のものだつてんですもの、お月様もあなたのものでせうさ。』

『「自然は萬人の財産なり」だ。』彼は何かでそんなことを讀んだと記憶してゐるが、意味はさうでも、言ひ方がもつと違つてゐたやうにも思はれた。然し妻君が、それを讀んでゐさうにも思はれないから、違つてゐても構はなかつた。

「フン。」と妻君は顔をしやくつて、下眼で彼れを視た。

「何がフンだい。」と少しばかり飲んだウイスキーに陶然となつた彼れは、さういつて小さいコップを突出した。

「私達の財産は自然きりね。」そのコップにウイスキーを注ぎながら妻君は、首を縮めて『ク、』と鼻をならした。

「さうだなア。」と彼れも聊か心細さうな聲を出したが、ウイスキーをちびと舐めると、急に反り返つて、大きな聲で『「自然は無限の富なりイ。」』と生徒が讀本を朗讀するやうな調子で怒鳴つた。

「吃驚するわ。Aちやんが眼を醒すぢやありませんか。」

「好いなア。此の邊ぢや夜中にどんな大きな聲を出しても、何處からも尻は來ないからね。」

「ほんとうね。先の家のお隣りのご主人は、何時でも十二時ごろに歸つて來るんでせう。だもんだから、お風呂に入るのに、お湯の音がチヤプ〳〵するのを近所に聽かしちやならないつて、そうつと入るんですとさ。そんな氣兼ねまでしなけれやならないんだから、あんなところにゐると大變ね。私ほんとうに此處へ來てのう〳〵したわ。」

妻君のその言葉は、彼れに結婚當時の彼の女を想ひ出さした。

「あんな鬼のやうなお母さんのとこへ歸つて行く位なら、私死んでしまうわ。」さう云つて何處までも續けて行かうとした彼の女の漂浪ひの生活に、彼れが飛び込んだのは、もう今から七八年前のことであつた。

彼れは別に、彼の女の漂浪ひの生活に同情した譯でも何でもなかつた。極めてつまらない挿話が、二人をこんな運命にしたことを想ひ出す度に、何時も彼れは擽つたいやうな氣がした。

貧乏書生であつた彼れは、或る日根つから親友でもない同窓の金持の息子に伴れられて、ある料理屋に行つたが、そこはその息子の馴染と見えて、頻りに傍若無人に振舞ふのが、血氣盛りの彼れには忌々しくつてならなかつた。自分の生活と、この馬鹿息子の生活とを對照して見て、彼れは、山のやうな御馳走と奇麗な女どもの眞中で、泣きたいやらな心持になつて、ベソをかいて坐つてゐた。その質に取られた猿のやうな彼れの態度が、馬鹿息子を始め、奇麗な女ども

の興味を惹く。八方から彼れに、外國語のやうな言葉で盛に何か云ふのだが、彼れは頭が熱して、耳がガン〳〵云つて、返事をするどころか、先方のいふことも解らなかつた。
とう〳〵耐らえ切れなくなつた彼れは、そのまゝ飛び出さうとしたが、帽子を尋ねて居る間に見つけ出されて、再び座敷に引戻されて、大笑ひの眞中に坐はらせて、噺やし立てられた。
そのうちに馬鹿息子は酔ひ倒れて、女どもは座敷の偶で何かたべながらこそ〳〵話しをしてゐる。その女どもの中に彼れが皆に玩弄にされてゐるのを、始めから、彼れの側に立つて防戰してくれた一人の女がゐた。彼れは、その女が座敷から見えなくなるのを心細がつてゐたが、この時も、片隅の連中を一人離れて、彼れの前に座つて、罪もないことをいつて相手になつてゐた。
彼れはふと思ひついて、此の女に向つていつた。
『君は、今此處にお金を持つてゐないかい。』
女は驚いて彼れの顏を見て、急に返事もしなかつた。彼れは、慌てゝ言葉を續けた。
『君、僕は今夜は口惜しくつてしかたがないのだ。金がないばかりに、こんな馬鹿野郎に散々馬鹿にされて……僕は實は二人で、牛屋へでも行くつもりで來たんだ。こんな目に逢つて、忌々しくてたまらない。僕は奴に鼻をあかしてやらなければ承知が出來ないのだ。僕今夜の勘定を僕が拂つて歸りたいと思ふんだが、實は一圓ばかしか持つてゐないんだ。』
彼れは眞赤になつて、きまり惡る相に俯向いたが、勇氣を鼓して、その先きをいつた。
『幾何持つてゐたつて、僕等の金はこんなことに費へる金ぢやないんだ。けれども、馬鹿野郎に欺かされて來たのが僕の失敗だから仕方がない。ねえ君、君は何うかね。能くかういふとこの女中は、隨分金持ちのもあるといふことを聽いてゐるが、今こゝに持つてゐるといふ譯でもあるまいね。僕は歸つたら外套や衣服を質に入れて、乾度金をこしらへて

返すから十圓ほど貸してくれないか。』

　彼れは目に涙を一杯ためて、齒を喰ひしばつてそれを云つたが、云つてしまつても、女中の顔を眞ともに見る勇氣がなかつた。

『およしなさいよ、馬鹿らしい。それに十圓ばつかぢや足りやしませんよ　あんな金持にはいくらでも費はしてやる方が功德だわ、あなたが百だつて出すことはないぢやありませんか。』

　女中は、低い聲で、たしなめるやうにさういつた。

『さうぢやないんだ。僕はあんな奴に威張られるのが癪に障つて〳〵しやうがないんだ。僕の家は貧乏な上に、母しか居ないんだ、だから學資だつて血の出るやうな金なんだ。』　多少醉つてゐた彼は段々昂奮して聲をふるはせた。

『だからそんな貴いお金をこんなところへ棄てるのはおよしなさいよ。』　女は益々低い聲に力を込めていつた。

『けど僕は、けど僕は……』　彼れは咽喉が塡つて口が利けなくなつた。眞黑な腕で頻りに眼をこすつて、たゞ首を振つた。一層寢てゐる馬鹿息子を蹴飛ばして歸つてやらうかとも思つた。けれども、どうしても今夜の金を、自分で拂つて、高慢な馬鹿息子の鼻を明かせてやらないと、明日から學校で奴と顔を合せるのもいやになる。學校を卒業するまで此の馬鹿野郎に威張られてゐるのはとても堪らない。

『幾何でもいゝんだ。百圓でも二百圓でも、僕は月賦でゞも返すから、此處の帳場に賴んで、僕の勘定にして置いてくれゝば好いんだ。……畜生、人を貧乏人だと思つて玩弄にしやがる。こんなとこを母に見せたら、口惜しがつて自殺するかも知れない。それでなくても母は、僕が東京へ出て、貧乏書生だつて馬鹿にされやしないかつて、手紙を寄すたんびにさういつて來るんだ。畜生ッ。』

　彼れは一生懸命に聲を忍ばせるつもりでも、片隅の女連は、一齊にこつちを見て、何かひそ〳〵云ひ合つてゐる。

　それを見ると彼れは急に間が惡くなつて、おづ〳〵と前の女中の顔を見た。さうして彼れは驚かされた。女は手巾で

片方の眼尻を拭きながら、泣き笑ひのやうな顔をして彼れを見てゐるのであつた。彼れの眼から、堪えてゐた涙がハラハラとこぼれた。

『いゝわ。私帳場に頼んで、私が立替えたことにして置くわ。』女はさういつて、つと立ち上つて行つてしまつた。

何時まで經つても女は歸つて來なかつた。彼れはそのうちに、馬鹿息子が目でもさまして下らないことをいつたら、今度こそ蹴りつけてやらうと待ちかまへてゐたが、覺まし相にもなかつた。彼れはもう片時も坐つてゐる氣がしなかつた。堪え兼ねて、廊下に出ると、今の女中が紙片を手にして小走りに走つて來て、手早くそれを彼れの懐にねぢ込んで、

『これ受取だわ。あなた嘘だと思ふといけないから。』といつて笑顔を見せた。その笑顔は彼れに特殊の印象を與へたが今はそれどころではなかつた。

『どうも有りがたう。實際僕は感謝する。幾何か知らないが僕は屹度返へす。僕はかういふものなんだ。』彼れは蟇口から名刺を出して女に渡して、

『餘り澤山だつたら月賦にして貰う。』

『何をいつてゐるんですよ。そんなこと何うでも好いのよ。又來て下さいね。……あら　あなたこんな所へ來る方ちやなかつたのね。……私御伺ひしちやいけない？勉强のお邪魔をしないやうに。』

『來てくれ給ひとも、……けど僕のところは大變汚ないからね。』

二人は長い廊下を驅けるやうに歩るきながら、そんな話をした。

かういふ一幕から二人の生涯の始められたことを、彼れは、『のう／＼したわ。』といつた妻君の言葉で思ひ出した。それは妻君が、始めて『鬼のやうな』養母の手を離れて、派手やかな漂浪の生活から、一轉して彼れと貧乏な間借り生活に移つた時に發した言葉だつたのである。

彼れは、今から考へると、何んであの晩にあんなに昂奮したのか、全く譯が解らない。あんな馬鹿息子とつまらない競争をしたことが何ういふ氣だか、いくら考へて見ても理解されなかつた。それは馬鹿息子に馬鹿にされる遣り方で、馬鹿息子を馬鹿にする遣り方ではなかつたのである。

けれども、その歸りがけに、廊下で、受取りを彼れの懐にねぢ込んで、『貴方嘘だと思ふといけないから』といつて微笑んだ彼女の俤は、何時までも〳〵彼れの瞳の底に生きてゐる幻像であつた。それは彼れを何時も、今夜の月夜のやうな、さえ〴〵とした思ひ出の空氣の裡に捲き込むのであつた。

陶然となつた彼れは、肩を列べてゐる妻君の方へ上半身をよろけさせて、それを支へやうとするやうに、妻君の二の腕を輕く握つた。妻君は重いものでもそこに載せられたやうに、自分の肩を彼れの方に傾けて、彼れの肱にそれを凭せかけた。それは彼れにとつて實際重もかつたので、彼れは力みながら、妻君の身躰を起さうとしたが、態としてゐる妻君の抵抗の爲めに、さうするまでに息がきれた。

『おい何か唱つて聽かせないか。お前の唄を久しく聽かないね。考へて見ると、處女時代に於けるそれつきり、全く聽かなかつたぜ。』

處女時代とは、彼の女の漂浪時代のことを二人のなかでいふ時の附牒であつた。

『「處女時代に於けるそれ」つて何？そんな、ハイカラな言ひ方をしなくたつていゝぢやありませんか。馬鹿〳〵しい。』

『オ痛た。』彼れは眞個に痛たかつた。腿がヒリ〳〵する。

『痛いなア。けど随分久しぶりの痛さだね。フ、。』彼れは何うしても彼女を唱はせたかつた。

『唄はないかい、陳芬漢芬を。久しぶりで聽いてやるぜ。』

『「陳芬漢芬」も久しぶりね』さういつたかと云ふと、突如彼の女は唄ひ出した。

『しかも櫻の初日の夜、はでな一座のその中で、

つひおかほれのうわきから、人の客来にしのび合ひ……』

『い〻でせう。』妻君はケロリとして枝豆を嚙つた。

彼れは、妻君の唄が、人に聽かれて恥くしくない程度のものか、何うなのか、自分では判斷がつかなかつた。然し彼の女が、先の家では決して唄はかつたことから考へると、餘り人は聽かせられるものでもないのぢやないかと思つた。でも彼れには、妻君の聲が月夜に響き渡るのを、先の家の隣の主人公が風呂の湯の音を遠慮するやうに、遠慮する必要のない、この野中の一軒家見たいな住居を嬉れしく思つた。

『お前の唄は、元來それで飯が喰へる程度なのかい。』

『いやなことを聽くのね、あなたは。私だつて今まで續けてやつてゐれば立派にやつて行けるやうになたつんだわ。』と妻君はいつた。

『さうかなア。』と彼れは云つたが、一向さう思つてもゐないやうだつた。

『あなたは駄目だわ、何大丈夫だの何だのていふと、私達と別の世界の人間のやうに思つてゐるから。私だつて、あの人達だつて、同じ日本人ぢやありませんか。』

『それや日本人だが、同じ日本人でも、僕のやうに君が代一つ唱へないものもあるからなア。』

妻君は再び小聲で何か唄つてゐたが、急に沈んだ聲で、

『何んだか私つまらなくなつちやつたわ。』とさつきの唄のつゞきのやうな調子でいつた。

『何うして。』と彼れは、多少面喰つたやうな聲でいつたが、別段面喰つた譯でもなかつた。

妻君は、何とも答へなかつた。少し顏を上げて、空を見上げたが、夢を見てゐるやうなその顏は、月の光の故か、青白うかつた。

『私、何だか一人で遠い〳〵所へ行つてしまひたいやうな氣になつたの。』多時して、妻君は低い聲でさう呟いた。

「いけない〳〵。そんなことを云つちや。」

彼れには局面の急激な變化が諒解出來なかつた。たゞ、これがHの所謂『變挺』なるものだなと漸く合點した。でさういつた。

「そんな考は、かういふ閑靜な土地へ來て、花を作つたり鷄を飼つたりしてゐれば自然に癒つてしまうよ。」と醫者から云はれたことをそのまゝ繰返した。

妻君は、彼れの言ふことなどは全く耳に入らないやうに、見當違ひの方を眺めてゐたが、急に身體を彼れの方に倒して、彼れがオヤと思ふ間もなく、彼の女は彼れの胸に顏を埋めた。

彼れは自分の心臟の運動が止つたかと思つた。無論口も利けなかつた。さうして勿體ないものにでも觸はるやうな手つきで、彼の女の背に手を載せた。啜り泣きの聲と共に、彼れの胸に押しあてられた妻君の髮が根元から搖れた。

彼れは悲しくなつた。さうして悲しくなりたくもあつた。で衝動的にこみ上げて來る悲しさを押へやうともしなかつた。涙が彼れの頰を傳つて、彼の女の襟元に落るのが嬉しかつた。

それは可なり長いことであつた。彼れは曇つた眼で、月を見つめたり、雲の走るのを眺めたりした。さうして偶には全く外のことを考へたりした。今度來た雲は、屹度月にかゝるだらう、オヤ又避けた、なんてことさへ考へた。さうして又、そんなものが見えなくなるまで涙を流した。

「濟まなかつたわね。許してね。」

妻君の微笑した顏が、出しぬけに、彼れの鼻の先に現はれた時、彼れは驚いたけれども、蘇き返へたやうな氣がした心から嬉しくつて、矢張り口が利けなかつた。強く妻君を抱へて、さうするつもりでもなんでもなく、彼の女の額に接吻した。すると又涙が流れた。

「許して！許して！」妻君は力のこもつた低い聲でさういつて、彼れの肩に兩手をかけた。

彼れが自分の衣服も妻君の衣服も、夜露でぐつすり濕つてゐるのに氣がついたのは、それから大分經つてからだつた。

彼れの妻君が、四十度以上の高熱を出したのは、その翌晩のことであつた。それが三日も續いたが、時々夜着を刎ね除けて暴れ出すので、下女にばかり任かしても置けず、彼れは晝夜片時も、妻君の傍を離れることが出來なかつた。醫者は窒扶斯の疑があるといつたが、さうでもなかつたらしく、數日で、熱は奇麗に取れたが、疲れ切つてたゞ昏々と眠つてゐた。

大分良くなつてから、うつ〳〵と眠つてゐる妻君の枕元に彼れが坐つてゐる時、その肱掛窓から二三間離れた隣の檜の植込の中から、突然、

『ブルッ、ブルッ、ブルッルッルッルッ……』と耳をつん裂く響が起つたのであつた。彼れは咄嗟に、飛行機がそこへ墜落したのぢやないかと思つた。彼れがハット思ふ拍子に、

『あれーッ。』と絹を裂くやうな妻君の聲に、彼れは二度吃驚した。

妻君は半身を起して、大きい眼を見張つて、キョロ〳〵とそこらを見廻してゐるが、身體中がワナ〳〵慄えてゐるやうであつた。

『何でもないのだよ、自動車の音だよ。餘り傍で急に起つたものだから、私も吃驚した。』

彼れは、彼女の床にすり寄つて、彼の女を寢かさうとした。

『私いやだわ。アレ又するわ。あゝ私何うしよう。いやだわ。』彼女はさういつて。兩手で耳を押へやうとしたので、身體は支へを失つて、ドシンと布團の上へ倒れた。

『あれ、そんな亂暴な眞似をしてはいけないよ。もう音はしやしないから安心おしよ。』

さういつて彼れが、布團をかけてやる途端にまた、

『ブルッ、ブルッ、ブルツルツルツルツルツルッ……』

と鼓膜をバラ掻きにして腦味噌をヒッ掻廻はすやうな響が起つた。

『あら忌やーア。』妻君は子供のやうに悲鳴をあげて、耳を抑へて夜着を頭から被つた。

彼れは、今まで、こんな近くに、隣の自動車の置場があることは全く知らなかつた。それは檜の植込みに隱れて見えないで居たのだが、この音の樣子では、生垣から何間も離れてゐないに違ひない。それにしても、今まで少しも音のしなかつたのは何の譯かわからない。或は偶々本邸から來るだけかも知れない。さうであつてくれゝば好いが、と彼れは思つた。

けれどもそれは空頼みであつた。翌朝彼れが朝飯をたべてゐると、昨日と同じ鼻の先で、初まつた。

『ブルッ、ブルッ、ブルツルツルツルツルッ……』

妻君がこの音に怖びえることは前日よりも烈しかつた。下女が寢間から飛んで來て彼れを呼んだので、彼れは茶碗を抛り出すやうにして行つて見ると、妻君は、まだ兩耳に人差指を突き込んだまゝ、眞靑な顏をして、眼をすえてゐた。

『私いや。あゝいやだ。あなたあれ何うかして下さいな。私頭が割れ相だわ。足の爪先までビリリッと響くのですものあらまたしさうだわ。あゝいやだ。』

妻君は昨日のやうに身體を悚るはせて、首を振つてゐる。それを見ると、彼れも、今にもあの音が起りさうな氣がして、不安な豫感に胸がドキ〳〵した。

幸ひに、もうその音は起らなかつた。シューといふ音がして、自動車は出て行つてしまつたらしい。

『もう大丈夫だ。何處かへ行つてしまつた。』

彼れはさう云つたが、妻君は矢張り目を据えて、耳から手を離さなかつた。

『いゝえ、まだするわ。あれ又するわ。』何かに駭はれたやうに、妻君は顏をふせた。

その日の晩にも、その音が起つた。翌る朝も起つた。彼れは、仕方なしに妻君の寢床を、そこから一番遠方な部屋に變へた。それは彼れが書齋と稱してゐる自分の居間なので。彼れには隨分迷惑なことだつた。その部屋では、音は少し遠いけれども、妻君の怖えることは變らなかつた。

『あなたお隣へ行つて、あんな音をさせるのを止めさせて頂戴よ。』少し病氣の輕くなつた頃、妻君はさういつて彼れを責めた。

彼れは無論そんな命令を隣へ下すことが出來やうとは思はなかつた。隣の人がそれを聽き入れる筈のないのは知れ切つた話であつた。でそれを妻君にいふと、妻君は怖い目で彼れを睨みながら、

『だつて隣に病人があるのに、無遠慮にあんな音をさせるなんて、近所の迷惑を思はないにも程があるわ。先にゐた家のお隣のご主人は、夜お風呂へ入るにも隣近所に遠慮して、お湯の音をさせないやうにしてゐたぢやありませんか。實業家だか華族だか知らないが、そんな世間に構はないものは恥をかゝしてやる方が好いわ。』

妻君は、病み上りの骨立つた頰の削げた肉をピク〳〵させながら、神經的の聲でさういつて焦れた。

『實業家で、さうして華族なんだからね。』

彼れは、自分にも何の意味だか解からないことをいつて見たが、ふとそれが自分の妻君に關係してゐることのやうな氣がして、覺えず彼の女の顏を眺めた。

彼れは偶に、自分の妻君が、實業家か、華族の夫人だつたら、彼女の爲めには無論のこと――場合によつては、彼れ自身の爲めにも――仕合せであつたかも知れないと思はせられることが無いではなかつたのである。今も病み衰えたその顏を見ると、自分の妻の病み衰えたのよりも、別の婦人の病み衰えたそれのやうに思はれた。と云つて、それは彼れに不滿足を與えることでもなければ、不愉快を與へることでもなかつた。彼れは却つてそれによつて幸福を感じてゐるのである。妻君のいふ通り、『自然』の財產の外は全く無一物に等しい彼れの生活は、妻君一人の爲めに、冬の自然であ

ることを脱れて、春の自然であり得るのである。彼れは今そんな風に考へた譯ではないが、妻君が、隣家の主人を、『實業家だか華族だか知らないが』といつたのは、彼れに、覺えず、妻君自體のことを考へさせたのであつた。がそれと同時に彼れは、アノ馬鹿息子のことを思ひ出した。がそれは何ういふ譯だかわからなかつた。

自動車のブル〳〵は、病上りの妻君にとつても彼れにとつても、迷惑千萬に違ひない。然しながら、それは多くの人間のやつてゐないことだとは、彼れには考へ得られなかつた。それを他から禁止させやうとすると、恥をかくのは、隣の主人か、こつちの方か、彼れには判斷がつかなかつた。で更らに、

『實業家で、而して華族なのだからなア。』と繰返した。

さういつてポカントロを開いてゐた彼れが、妻君の眼には、實業家でも華族でもない人のやうに見えたのは疑ひなかつた。然し妻君にとつて、それは不幸なことでも、不快なことでもないのは、彼の女の次の言葉が證明してゐる。

『實業家だの華族だのつてものに、少しは人間らしいことを敎えてやらなければ駄目だわ。自分たちはまるで世界の人間か何ぞのやうに、地球上の人間などは何うにでもなれつてえ風に思つてゐるのですもの。』

『地球上』といふ言葉が、如何にも古典的なのを、彼れは面白く思つた。『凡そ地球上の人種は』といふ彼れの時代よりは一世紀前の文句を彼れは思ひ出したのであつた。妻君は恐らく、さういふ成語のあることを知らないのだらうと彼れは思つた。そんなことを考へてしまつたので、肝心の妻君のいつたことを彼れは聽いてゐなかつた。でも何とか返事をしなければないと思つてさう云つた。

『自働車の置場から火事でも出しやがるといゝのだかなア。』

『駄目よ。あんなそばから火事が出たら、家がけんのんぢやありませんか。よく自動車から火事を出すから、私それもけんのんだと思つてゐるのよ。』

なるほど、それは彼れの忘れてゐたことであつた。然し彼はさういつた。

『なあに、家の燒けるのは此方の損害ぢやないから好い。そこへ行くと貸家は氣樂だ。』

『でも着物や道具を燒かるだけでも、私たちには大損害だわ。』

妻君の此の言葉が彼れには甚だ妻君の言葉らしくなく聞えた。この妻君は、場合によつては、彼の女の、又は彼れの一番大切な道具を打ち壞はすことを少しも躊躇しない女であつた。多くの場合に於ては、それをしなければ承知しない女であつた。平生彼れは、妻君のさうすることに贊成はしないが、然し今の場合は、自分が妻君の地位に立ちたい氣がした。

『何構ふものか。時々はすつかり燒けてしまつて、全部新しくなるのもいゝものだよ。』

『馬鹿々々しい、私たちの物は塵ッぱ一つだつて、華族や實業家のお蔭で無駄にされてたまるもんですか。』妻君は昂奮して云つた。

『プルッ、プルッ、プルッツルツルツルツルツ……』

　又も例の音が起つて、家内の空氣がビリ〳〵と震搖した。

『えッ、口惜しいッ。』けたゝましい叫び聲と共に、妻君は括り枕を刎ね飛ばした。そこらの藥瓶や、水差が『プルップルッ』に喝采したやうな音を立てゝひつくり返つた。

見ると妻君は目の色を變へて、息をはづましてゐる。彼れが驚いたやうな顏をして妻君を見たのが、一層彼の女を焦ら立たせたらしく、妻君は、今にも彼れに掴みかゝり相な見幕で、聲を顫はした。

『私もう忌やです。何うしても忌やです。何處へかやつて下さい。こんな處に居ろといふなら私逃げ出してしまう。誰れがこんな目に逢つて辛棒してゐるもんか。「今に音をさせてやるぞ、今に音をさせてやるぞ」つて、年中人を威かしてゐる。私達を何だと思つてゐるんだ。そんな人間の隣に居なければならないんなら、死んでしまつた方が餘ッぽと增だ。あなた！あなた！私を何處かへやつて下さい。あなた！あなた！』

それは彼れを『ブルップルッ』以上に驚かした。實をいふと『ブルップルッ』は彼れには何んでもなかつたのだ。たゞ妻君へのお交際に、それを問題にしてゐたまでゝあつた。然しこの妻君の昂奮には、彼れは息のつまるやうな煩惱を感じない譯に行かなかつた。彼れには、隣の自動車よりも、家の妻君の方が餘ッ程恐ろしかつた。

でその日すぐと、彼れは醫者に賴んで、妻君を入院させることにした。もう八分通り全快してゐる妻君を車にのせて病院へ送り込む時、彼れは車の上で、度々その失費について考へさせられた。

間もなく全快した妻君は、家に歸つて、再び隣の『ブルップルッ』を聽いた時には、始めてそれを聽いた時に劣らないほど昂奮した。たゞ病氣が癒つてゐた爲め自制することが出來たが、それだけ彼れは妻君を氣の毒にも思つた。その後『ブルップルッ』の聽える度に、妻君がまるで脾腹でも打たれたやうな苦し相な顔をして、『あれッ』といふ、隨分耐らえてゐるらしい聲を出すのを聞くのが、彼れを憂鬱にさせた。尤も彼れの憂鬱は、その間に、妻君が、その音に對して、必らず何か奇拔な評を下すのを面白いと思つたりする程度の憂鬱であつた。

話が始めに戻つて、彼れは、今も妻君が『人殺しのやうな音』とその『ブルップルッ』を評したことを面白いと思つた。自動車が西洋で出來始めの頃往來の人達は、それを『惡魔の車（デヴィルスカー）』と呼んだといふ話を、彼れは思ひ出して、妻君が西洋人だつたら、一番始めに、アの音を『惡魔の合唱（デヴィルスコーラス）』とでもいつたゞらうなどゝ考へて、彼れは自分ながらその想像を面白ろいと思つた。

『今日の日曜はあなた家にゐて下さい。さうしてAちやんのお守りをしてゐて下さい。私家を探しに出て行きますから、あなたを當てにしてゐたつてちつとも埒は明きやしない。』妻君は、身仕度をしながら、そんなことをいつた。

『それは助かる。Aちやんと溫和しくお留守番をしてゐるわ。』彼れは思ひ出したやうにA子の名を呼んだ。

『まだ好いんですよ。今Nやが御飯をたべさせてゐるんぢやありませんか。……あなたは、平生ちつともAちやんのこ

とを構はないから、馴染まなくつていけないわ。ちつとも、自分の子供を可愛がらないのですもの。』妻君は、その総ひの文句を絶望した役者の白(せりふ)のやうな句調でいつた。

『僕は非常に可愛がつてゐるから、可愛がれないのだよ。』

『又人をひやかすやうなことを仰つしやる。』

『だつてさうだよ。何れだけ可愛がつたら、僕の思つてゐるほど可愛がつたことになるかわからないから、一つそ可愛がらないことにするのだよ。大に慾の深いものは、金を儲けやうといふ氣になれないものだ。何れだけ儲けたら好いのか見當がつかないからな。』

彼れは全く嘘をつく氣でさういつたのではなかつた。實際彼れにもその邊の見當がつかない氣がしてゐるのである。

『何を云つてるの！』妻君は、彼れのいふことなんぞは相手にしないといふ風で、身仕度を急いだ。もう妻君の頭には彼れのこともAちやんのこともなく、これから探し當てやうといふ貸家の幻像で一杯になつてゐるのであらう。

妻君が出て行くと間もなく、例のHがやつて來た。Hは、彼れに妻君の『變挺』であることを注意した男である。彼れと同窓で、同じ會社に彼れと同じ頃から出た男だが、何時の間にか社内の利け者になつて、地位も俸給も、今では彼れより何割がた好いところに居る。彼れはHを自分より何割がた豪らい男だとも何とも思てゐるのではないが、彼れにとつては非常に好い男で萬事此の男のいふことに從つてゐれば、實践的に間違はないと思つてゐる位、彼れは此の男と仲が好い。

『今そこで妻君に逢つたぜ。貸家探しだつてね。例のブル／＼をまだ氣にしてゐるのかい。』彼れは座りもしないうちからさう云つた。

『氣にしてゐるどころぢやない。この頃はもう精神的に、アレがいけないんだね。』

『「精神的にいけない」たア何ういけないんだい。』

『マアさうなんだよ。反抗的だね。少し變になつたら、あそこへ火でも放けかねない勢だ。……いや火は放けまい。』

彼れは、あすこから火事が出るのは困るといつた妻君の言葉を思ひ出したのであつた。

『火なんぞつけて堪るものか。だが矢張り變挺だからだよ。かういふ閑靜な所へ來れば癒るといつて來たのに、最も閑靜でないものにぶつかつたんだから堪らないや。困つたなア。家はないかい。』

『ないね。それは此頃は、夜遲く何臺もの自動車があれをやるんだよ。十二時頃にブルッブルッとやられちや僕でも餘りいゝ氣持はしないね。全體君あのブルブルは何の必要があつてやるんだい。』彼れは、自動車については、乘合自動車と、會社の自動車に二三度乘つた外に何の智識も經驗もなかつた。

『あれかい。』Hも自動車の智識は、彼れと伯仲の間にあるのであつた。『あれは何さ。自動車が動き出す前に、一寸小手試めしをやるんだね。マア相撲で云つて見ればシコを踏むやうなやものさ。』

『自動車がシコを踏むのかい。』彼れには何のことかわからなかつたが、マアそんなものかとも思つた、

『でも必要なのか知ら、そんなことをするのが。マサカ俺は自動車を持つてゐるぞといふことを吹聽する爲めに、あんな音をさせるのぢやなからうね。』彼れは妻君の心理を思ひ出して、そんなことを云つた。

『そんなことはあるものか。第一君、自動車を持つなんてことは、我々にこそたいしたことだが、あの先生達には何んでもないんだからね。そんなものを自慢しやうとも思やしない。』

『でも君、隣近所に構はずあんな音を立てゝ、少しは遠慮しさうなものぢやないか。』

『なあに君、彼奴等は、自分の自動車の音がそんなに喧かましいと思つてちやゐやしない。「人の屁は臭さく、己の屁は香ばし」だ。』Hはそんな文句を覺えてゐては、時々それを云ふ。彼れは喋舌りつゞけた。

『さうなんだよ。君の妻君だつて、あれが、君が妻君に買つてゞもやつた自動車だつたら、ブル〳〵やる度にゾク〳〵するほど嬉れしいと思ふ位のものだよ。』

『さうだらうかね。』彼れにはさうも思へなかつた。

『さうさ。だから妻君の病氣の一番好い治療法は、自動車を買つてあてがうことだね。さうしたら、妻君は、隣の自動車とブル〳〵の競爭でもさせて、痛快がつてゐるだらう。』

『つまらないツ。』彼れは實際つまらないと思つたのである。『それよりか君、何とか方法はないかね。家は一月や二月探かしたつてありこはないよ。その間僕が彼奴に困しめられてゐるのは實際煩るさいからね。』

『君も矢張妻君にかぶれて、ブルブルが氣になるやうになつたのかい。』

『さうぢやないよ。妻がブウ〳〵いふのが煩さいんだよ。』

『ブル〳〵でなくて、ブウ〳〵の方かい。なるほど、何方も、兄たり難く弟たり難しだね。困つたなア。……ウンよし僕が一つやつて見やう。』Hは何か思ひついたと見えて、さういつて乘り出して來た。

『僕が一つ隣の大將に會つて、君のとこの事情を話して、妻君が强度のヒステリーでからだとか。君がそれを苦にやんで、會社の仕事も手につかないとか……』

『そんなことがあるもんか。』彼れは口を容れた。

『マア先方へは、よろしくいふのだよ。それは手なんだからね。君は何うも正直でいけない。で自動車をあの置場の所でブル〳〵やることだけは、運轉手にさういつて止めていたゞけまいかといふことを嘆願に及ぶのだ。主人には、僕も一二回會などで逢つてゐるのだから顏を見たら向ふでも思ひ出すだらう。マア僕に任かせ給へ。今日は屹度家にゐるだらうから、今から行つて來るわ。そこで一寸土産物がゐるが、五圓ほどあるかい。イヤ僕のとろにあるから後で勘定しやう。停車場前で果物の籠でも作らせてかつぎ込むことにしやう。さうだ〳〵。早くさうすれば好かつたに、僕の智惠がこんなに後から出たのは少し變だぞ。』そんなことをいひながら、彼れは獨りで合點して出て行つた。

彼れは妻君から頼まれたA子のことはすつかり忘れてしまつて、そのまゝそこに身體を横にすると、つひ睡むくなつ

て、うたゝねをしてしまつた。

目を覺ますと、日影は大分移つてゐた。Hはまだ歸つて來ない。談判行惱みで長びくのか知ら、と彼れは思つたが、それにしても少し長過ぎる。彼れはA子のことを思ひ出して呼んだ。

子守と一緒に庭で遊んでゐたA子は飛んで來た。數え歳の五つにしては柄が大きい、お母さんに似て、眼が大くて、男のやうな口をしてゐる。日曜の晴衣の白ろい洋服を着せられて、活潑に、お父さんに抱きついた。

彼れはA子の手を引いて、Hの歸つて來るのを迎へ旁外に出た。背中合せの隣家の邸の表門は、大廻りに廻つて、ここから四五丁の距離がある。そこへ出るまでの廣い野原に咲き亂れてゐる草花を摘みにかゝつたA子は、もうその先きに行き相な景色もなかつた。

彼れは遊んでゐるA子をそのまゝにして、少し許り行つて見たが、Hの姿も見えなかつた。多時して原に戻つて來て見るとA子は、知りもしない派手な令嬢風の娘と二人で、面白ろ相に騷いでゐた。彼れが近いて、A子を呼ぶと、A子は、ふりむいて彼れを見たが、令嬢の袂を取つたその手を離さうともせずに、令嬢を引張るやうにして彼れの方に來て、

『姉ちやん、〱。』と叫んだ。

『オヽ姉ちやんに、遊ばせていたゞいてゐるのかい。』と彼れは云つて、令嬢に挨拶した。

令嬢は心持顏を赤くして、御辭儀をしたが、

『ほんとう、お可愛いお子さんですことね。』といつて、束ねた花を、A子の手に渡した。

令孃は、海水浴にでも行つた名殘らしい血色の好い顏をして、涼しい眼で、彼れを凝と見て、少しはにかむやうに俯向いたが、晴れやかな、凜とした聲でA子に、

『A子さんのお家は？』と聽いた。いつのまにかA子といふ名を彼の女からきいたらしい。

『あこ。』とA子は、後ろを指した。
『まあ、御隣りね。』と令嬢はふり向いて、彼れの家の、少しばかり見えてゐる小さい屋根を眺めた。令嬢と離れるのをいやがるA子の手を引いて、彼れは家に戻つたが、Hの戻つて來たのは、それから一時間もたつた黄昏時だつた。
『大成功〳〵。』Hはそこへ大胡座をかいて『奴さん、大に同情して、それは少しも知らないで氣の毒なことをした。いや置場をあすこへ置いて、音をさせないといふ譯にも行くまいから、早速あの置場をもつと遠方へ引かせやうといつてね、運轉手や大工を呼んで、ちやんと設計までさせてくれたよ。いやもうちつとも文句なしさ。早くさういつて行けばよかつたのだ。』
『さうかい、それは有りがたかつた。僕は又餘り時間が長いから談判行惱みかと思つてゐたよ。』彼れも成功を喜んだ。
『馬鹿いひたまへ。自動車のプルプルの談判が、如何に不調だつたつて、それに四時間も五時間も費すべらぼうがあるものか。僕だつて、まさか自動車プル〳〵の談判だけで訪問したと、三百屋見たいなことは言つても行けないぢやないか。プル〳〵の件は歸りがけに一寸話しただけで、直ぐ解決させた譯さ。』
『さうだつたかい。』と彼れは云つたが、何うだつたのか能くもわからなかつた。
そこへ疲れ切つたやうな妻君が歸つて來た。お客のHへは碌々挨拶もしないで、
『駄目だつたわ。』とペタ〳〵と崩れるやうにそこへ座つた。
『駄目結構。夫人、僕は今隣へ行つて、すつかり談判して來ましたよ。』とHははしやいだ聲でいつた。
『何を談判して來たの、』妻君は煩るさ相に、首を後ろへ振つた。
『隣の大將に、此家の事情を話したら、大に同情してしまつてね。自動車の置場を早速外へうつすが、それまではあすこでプル〳〵やらせないことにしやうといふことになつたのです。もう今日からプル〳〵はずつと向ふの門の傍の空地

でやる相ですから、御安心なさい。貸家探しも用なしですよ。』

Hのしやべるのを聽いてゐる妻君の眼つきが、段々變つて來るのを彼れは見た。Hがしやべり終つた時の妻君の顏は殆んどあのブル〳〵を聽いた時のそれのやうだと彼れは思つた。すると妻君は、

『それは何うも有りがたうございました。』と變な切口上で、誰れにいふともなしにいつた。

Hは意外の樣子に、大に面喰つた調子で、

『別に有りがたくもないが、然し奥さん、それでいゝぢやないですか。兎に角先方を讓歩させたのだから。引越すたつて、今家はありませんからな。あの音さへしなければ、こんないゝ家は、何處にもありませんぜ。』

『えゝさうね。』妻君は氣のない聲で、そんなことを簡單にいふだけだつた。

『H君の盡力で大助かりだ。當つて碎けろといふのはこのことだわ。』彼れは取りなすやうにいつた。

妻君はフイと立つて、隣の室へ行つて音のする程高く襖を閉めた。サラ〳〵と帶を解く音が聽えた。

Hは、彼れに眼くばせをして、首を振つた。彼れには何だかわからなかつたが。取り敢えず諾いた。

Hが妻君には聽えないやうに、彼れに『氣をつけたまへ。』だの『まだ變挺だぜ。』だのと云つて歸つたあとで、妻君は待ち兼ねたやうに彼れの居間にやつて來た。

『Hさんは誰れに頼まれて、お隣へ談判なんぞに行つたの。』妻君の聲は尖つてゐた。

『別に頼みもしなかつたのだがね。例の通り自分で合點して出て行つたのだよ。』

『あなた何故止めなかつたの?』

『僕が?止める理由はないぢやないか、うまく行けば結構なんだもの。』彼れは意外の詰問に狼狽して、訥りながらさういつた。

『何が結構なんです。隣ぢゃそんなことを恩に被せて、私達に頭を上げさせまいとするんですわ。此方は此處にゐる間

隣に頭が上りやしない。道でゞも會つたら御禮の一つも云はなければならないぢやありませんか。誰れが馬鹿〳〵しい。あんな奴に、死んだつたそんな眞似をするものか。何だつてHさんにそんなことを云はせたんですよ。』

『だつてお前も何時か僕に、隣へ行つて、あの置場を何處か外へやらしてくれつていつたぢやないか。』

『それはあなた、あの時分私も逆上せてゐたから、あなたが隣に暴れ込んで、あの置場を打ち壞はすか、何うかしてくれれば好いと思つてゐたんですわ。誰れが謝り閉口して、嘆願に行けつていふものがあるもんですか。忌々しい。もう何うにもなりやしない。こゝにゐる間、恩に被なきやなりやしない。私いやだわ。そんな思ひして片時もゐるのはいやだわ。あんなものに恩を被せられて、一日だつてゐられやしない。』妻君は痙攣的に饒舌りつゞけた。

『でも好いぢやないか。毎日ブル〳〵に怖えてゐるよりも。』彼れは遮つた。

『何が好いものですか。ブル〳〵は一日に何度しかないけれど、恩に被せられてゐるのは、しよつちゆうですからね。隣の植込を見てゐるだけで、忌々しくなるわ。音のした方がよつぽど好い。何うして男つてえものは、皆そんなに無神經で意氣地なしなんだらう。私もういやになつちやつたわ。』妻君は、例によつて、そこら中を引ツ掻きまはしたいやうに、上ずつた眼で周圍を見た。

彼れは、湯吞や、灰皿などを何氣ないやうに片寄せながら、

『Hと來ちや、その點はまた頗るのんきだからね。今日も五圓ほどの……』云ひかけて彼れは、惡い事を云つたと思つたが、もうごまかし切れなくなつて續けた。『停車場で果物の籠を作らして持つて行つたのだよ。』

案の條妻君は、一層馬力をかけてまくし立てた。

『馬鹿らしい。向ふから何か持つて來たら十倍にして返してやるけれど、此方からあんな奴に物なんぞやる義理はあるもんか。Hさんのやうな新聞のやうな人が勝手にするのなら好いけれど、何うせ此方の名前で持つて行つたのでせう。何んで私たちが、華族の大金持なんかに物をやらなければならないんです。あんな音をさせて人をさん〴〵苦しめてゐる

ものに、使物をやる馬鹿が何處にあるもんですか。』

『だつて物を頼むのだから、マア普通の禮儀として持ち込んだのだらうよ。』彼れはなるべく自分は責任を取るまいとして、人事のやうにさういつた。

『何も嘆願することなんかないぢやありませんか。打ち壊はしてやるか、それが出來なければ此方が退けば好んですわあんなものに御願するなんて、マア何ういふ氣だらう。もう此處にゐられやしない。晉位なら、その時だけ忌やな思ひをすれば好いんだけれど‥‥あゝ私何うしたら好いんでせう。もう片時もこゝにゐるのはいやだわ。ねえあなた、家がなければ、皆で何處かへ下宿でもいゝからしませうよ。』

『所がその下宿が中々ないのだからね。偶々あれば、目の玉の飛び出るやうに高いんだからね。それに子供をつれて下宿住居も氣が利かないなア。』

玄關の方に、女の聲で訪づれがあつた。妻君は膨れ切つて動かうとしないし、下女は何處へ行つたか出て來ないので彼れが出て見ると、品の好い中老の婦人が、大きい菓子折をそこに置いて、馬鹿丁寧に挨拶をして、

『手前はお隣りのKから上りましてすが、主人から、先刻は結構なものを澤山にありがたうございました、能く御禮を申すやうにといふことでございました。それからこれは到來ものでござんして、甚だ失禮ですけれど、手前共のお孃さんから、此方のお孃さんのお目ざに差し上げるやうにと申すことで、何うかよろしく‥‥それからお孃さんに是非お遊びにおいで下さるやうにつて、手前共のお孃さんから御言傳でございます。大さうお可愛いお孃さんで。只今あすこでお女中さんと御遊びになつてゐるところをお目にかゝりまして‥‥』

彼れは、妻君のことが胸にあるので、この婆さん、早く持つて來たものを置いて歸つてくれゝば好いと思ひながら、無器用なお辭儀を二つ三つして、老女の歸るのを待ちかねて、引浚ふやうにその折を持つて、居間に來た。

『なんですこの折は。』妻君は、汚たない動物でも見てゐるやうな樣子で、その折を睨みながらいつた。

『Kのお孃さんが、Aちやんについてくれたのだよ。』

『Aちやんに。』と妻君は又新しい問題に不快な興味を持つたといふ調子で『何うしてHのお孃さんがAちやんを知つてゐたでせう。』

『何今一寸僕がAちやんを連れて出たら、向ふの原にKの令孃がゐて、Aちやんがひどく令孃に懐いてしまつて、歸らうとすると、令孃がもう少しA子を貸してくれといふものだから、つひあの原で長く遊んでしまつた。』

『いやな人ね、あなたは。』妻君は眉を寄せて吐き出すやうにいつた。

『何うしてだい。』彼れには、全く妻君の意味がわからなかつた。

『何うしてつて、あなた。』妻君は、全く侮蔑した口調で。『考へて御覧なさい。あなたが、Kの令孃が可愛いからつて、も少し貸してくれつて云つたら、Kが貸してくれますか。』

『成る程ね。』彼れは、妻君が中々面白いことをいふと思つた。けれども、まさか妻君がそんなことを眞個に考へてゐるのだとは思へなかつた。でさういつた。

『だつてお前、あの美しい令孃が、無邪氣にA子を可愛がつてゐるところを見てお覧、お前だつて腹は立てないだらうぜ。』

『あの人達は、自分のやうな身分の尊いものが、人を可愛がりでもすると、その人達が乾度有りがたがると思つてゐるのだから腹が立つわ。自分達が一寸何かすれば、それがたいした有りがたいことになると已ぬ惚れてゐるのだから始末に終へやしない。それも、あなたがたのやうにそんなことを直きに有りがたがるものがあるからですよ。増長しきつてゐるんだわ、あの連中は。』

その時、遠方から例のブルツブルツブルツがかすかに聽えた、隣家では早速約束を守つて、表門の方でそれをやつてゐるのであつた。

妻君はそれを聞くと、殆んど怒鳴るやうにいつた。

『忌々しい。もつと此方でやるが好い。あんな遠方でやつてゐるのを聽くと、此方が謝り閉口して嘆願したことを思ひ出して、胸が惡くなる。私もう我慢が出來ない。ねえあなた引越しませうよ。』

『おい腹が減つた。夕飯の仕度でもしてくれないか。』彼れは妻君を臺所へ追ひやりたいよりも、寧ろ實際に腹が減つてゐたのであつた。

妻君は、返事もしなければ、立ち上りもしなかつた。

『Aちやんのお相伴をするかね。』彼れは、菓子折の蓋を取つた。見事な西洋菓子が一杯つまつてゐた。

それを一つ摑み出して喰べながら、彼れは、美くしい令孃がA子の爲めに花束を作つてやりながら、小聲で何か唱つてゐる、さゞなみの響のやうな顫え聲を思ひ出した。彼れが近いた時に、此方をむいて、直ちにA子の父と察して微笑みを送つたその生々とした表情を思ひ浮べた。一寸俯向いてA子に『お父さま？』と小聲で尋ねて、彼れの方を窃むやうに見て、その辭親しい人にでも見せるやうな笑みを。彼に見せたことを思ひ出した。彼れは、菓子をたべてゐるのが、紙でも嚙んでゐるやうであつた。

『令孃つていくつ位？』妻君は強いて冷靜にしてゐるやうな調子でさう聽いた。

『さうさな。二十前後だね。』

『美人？』

『ウン。』と彼れは氣のない聲で『マア美人だらうな。』と云つた。

彼れが妻君との會話の間に、少し嘘に近いことをいつたのは、此の一句だけだつた。實際彼れはあの令孃を「マア美人だらう」位に考へてゐるのではなかつた。

彼れは喰べかけた菓子を折の蓋の上に置いて、妻君と面と向つてゐた身體を少し外らした。彼れは自分の考へること

が、妻君の眼に見える譯ではないが、それを考へるには、頗る目の前の妻君が邪魔になつた。彼れはたゞ、令嬢の無雑作に分けた髪の毛や、血色の好い顔の色や、すらりとした後姿や、震動する音聲や、そんなものを切れ〲に考へたがそのうちに我れ知らず深い溜息を洩らした。ハツと思つて妻君の方をそつと見ると、妻君の鋭どい眼が、彼れの眉間の邊を突き刺すやうに睨んでゐるので、彼れは苦笑しながら視線を外らした。

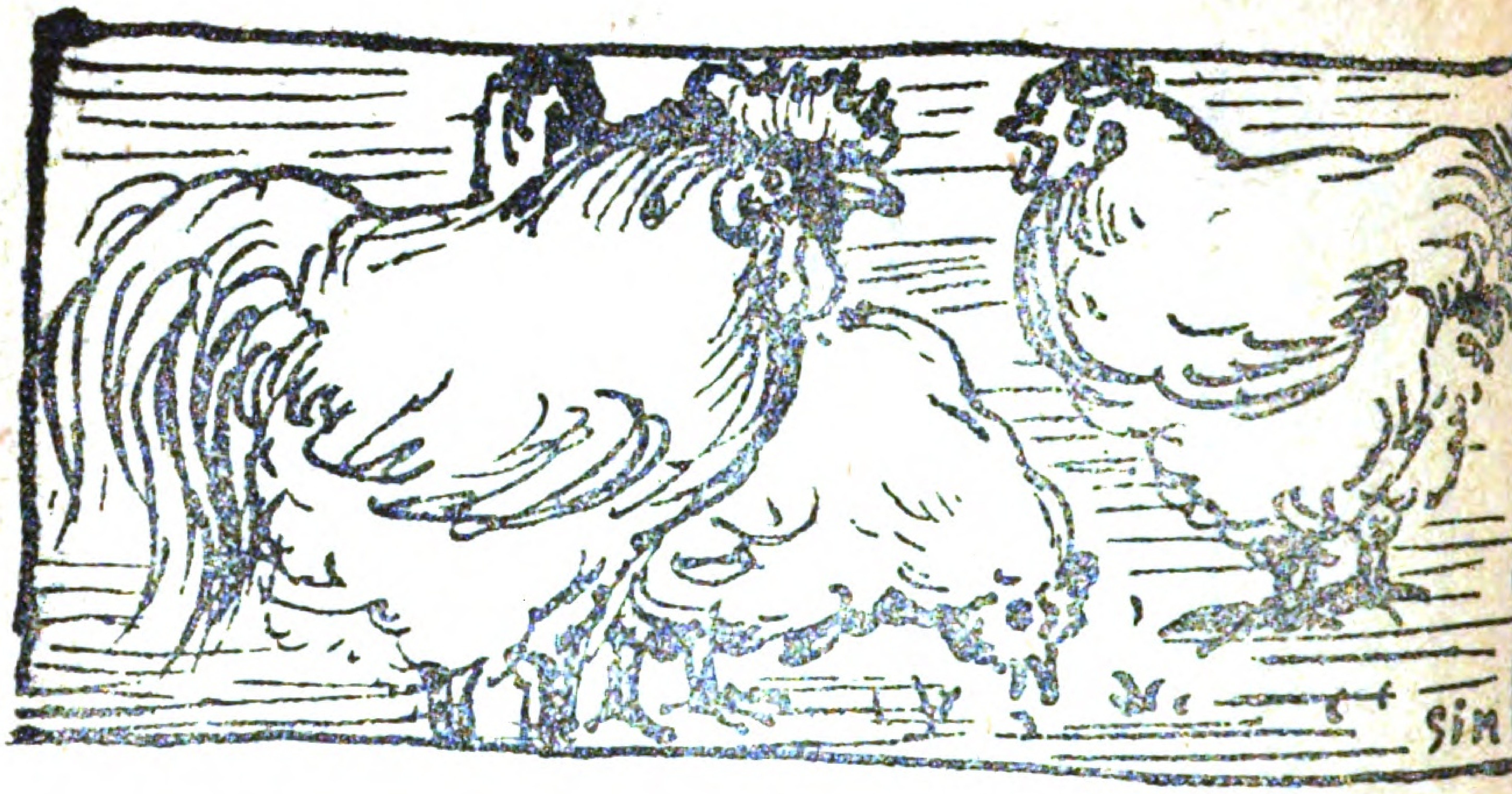
物を投げたやうなガタンバサ〲といふ音がしたので、彼れは驚いて振り向いて見たら、今の菓子折が庭に抛り出されて、折は踏石に當つてバラ〲に砕けて、奇麗な西洋菓子がダリアの咲いたやうに散亂してゐた。

椽に出た妻君は、振り返つて、瞳の寄つた眼で彼れを睨みながら、

『あなたはよつぽどぐうたらねえ。』と今菓子折を叩きつけたと同じ調子で云つて、荒ツぽい足音を立てゝ臺所の方へ行つた。

彼れは、そのまゝ仰向けに寢て、『A子さんのお家は?』さういつて少し屈んだ令嬢の、すらりとした下半身の曲線を想ひ浮べた。その途端に、臺所で妻君が瀬戸物を投げつけたらしいガチヤンといふ音が響いた。隣の自動車の遠方でやつてゐるブル〲がかすかに聽えた。

『アーア。』大の字の身體を引き伸して、大きい欠びと伸びを一緒にした時の彼れの頭からは、今まで起つたすべての事が、奇麗に拭ひ去られてゐた。　(をはり)



悔恨

正宗白鳥

よし子は離れ山の裾の四阿（あづまや）に一人で休んでゐることにした。村上と塚越とが頂上を差して登つてゐるのが眩しい光の中に見えた。

よし子はこの春可成り重い流行感冒に罹つて以來身體が弱つてはゐたが、田舍生れで子供の時分野山を驅廻つてゐたゝめ、脚力は自から鍛えられてゐたので、少し勇氣を出したらこのくらゐな山を上り下りするのは、何でもなかつたのだつたけれども、わざと疲勞に假托（かこつ）けて、其處で足を留めて暫く二人に離れてゐることにした。

手巾を用ゐるまでもなく、涼しい風に汗は直ぐに乾いた。廣々とした眺めは胸の中に漂つてゐるゴミ〴〵した思ひを忘れさせるやうに美しかつた。

彼女等の住んでゐる小さな別莊は、池の彼方に鮮明に浮出てゐた。安樂椅子や机なども其所の玻璃戸越しに見られた。

草原の中や森の中に散在してゐる數多の別莊を見下したり、今日はじめてこの高原に姿を現はしたかと思はれる一群の蜻蜓の飛び行くあとを見やつたりして居たが、すると、ふと、山の方から「オーイ」と呼びかける聲がした。それは村上の聲であつたが、見上げると、二人とも足を留めて笑顔して此方を見下してゐた。塚越は手巾を出して振廻してゐた。

よし子も微笑して手巾を振つたが、やがて二人の姿が頂上近くなつたところで見えなくなつてしまふと、再び透明な空氣にすべての物の姿が鮮かに現はれてゐる高原を見渡してゐたが、何時の間にか彼女の目は晦くなつて、塚越の顔と村上の顔とがそれ〴〵の男臭ひ匂ひを放つて、彼女の前に迫つて來た。そして、彼女は最早それを押退けようとはしないで二人の影の刺戟のまゝに心を任かせてゐた。

今年の一月に村上と結婚したよし子は、小さな下女だけを連れて、避暑がてら遲れ馳せの新婚旅行のつもりで此方に來てゐて、有り振れた平穩無事な新婚旅行らしい日を過してゐたのであつたが、北陸地方を漫遊してゐた塚越が、昨日不意に訪ねて來たゝめに、彼女の心は今までに例のなかつた混亂を覺えだしたのであつた。夫の村上は云ふまでもなく、塚越にしても平生と些とも違つたところはなさゝうであつたが、よし子は上べだけでも從前のやうな態度を保つてゐられなくなつた。そしてそれを村上や塚越に感づかれるのが恐ろしかつた。

數年の間二人には同じ程度で親しくしてゐたのであつたが、どちらに對しても戀を感じたことはなかつたので、仲介者や父兄の取成しで村上と結婚することになつた時にも、よし子自身は、どうせ獨身で一生を通れないのなら、時機の遲れない間に極りをつけた方がいゝと、平凡に考へてゐたに過ぎなかつた。結婚を望まれたのによつても、村上にこそ戀ひされてゐたのに違ひないが、塚越からは以前親しい知合ひといふ以上の立入つた思をほのめかされたこともなかつたし、今だつて友人の妻としてはられてゐるだけなのかも知れなかつた。

しかし、昨日久振りに出會つた瞬間から、塚越の目付顔付、言ふ事爲す事の一々が、よし子に過去の記憶を呼起させて、しかもそれ等の記憶に、今まで夢にも思はなかつたやうな不安な意味を附加へさせるのであつた。

「ねえ、奥さん」と、塚越は笑ひ〳〵呼びかけて、快活に旅中の見聞を話した。和倉や山中などの溫泉宿で、藝者連れの客と隣同士になつて、いろんな興味のある光景を見せつけられたことを無遠慮に話して村上夫婦を笑はせたり、汽車に乘合せた西伯利亞歸りの商人から命懸けの旅行話を聞かされて自分も露西亞へ行つて見たくなつたと、眞面目にさう思

つてゐるらしく云つたりした。よし子はさういふ話を聞いてゐるだけでも、塚越の凛々しい音聲や、旅の日に焼かれて黒くなつた顔付に、以前左程に感じなかつた男らしさを不思議に感じてゐたのであつたが、それはそれとして、話の間に塚越がある女と婚約の出來たことを微見かしたのが、よし子には平氣では聞かれなかつた。

「それはいゝことだが、誰れだい、相手は」と、村上が訊ねても、塚越は、

「東京へ歸つてから手紙で知らせるよ。今はちよつと云はれないんだ」と、思はせ振りを見せてニコ〳〵してゐた。

「突然だから見當がつかないが、……Aぢやないのか」

村上のさう云つた言葉に、よし子はハツと顔色の變るほどに驚いて胸を轟かせた。Aとは足立きぬ子のことであつた。

「まあ今のところは君だちの想像にまかせといて、僕の方では一切明言しないことにして置かう」

塚越はさう云つて矢張りニコ〳〵してゐた。明言しないほどなら最初から何も言出さなければいゝのにと思ひながら、よし子に最早塚越の婚約の相手はきぬ子であると極めてしまつて、言ひやうのない暗い氣持に包まれた。

ある知人の家で晩餐を饗ばれた時、塚越も招かれてゐたので、歸りにはわざ〳〵廻り途して、家まで送つて呉れたことがあつたが、その時塚越は平生の快活に似合はず沈鬱な口調で、「僕はある重要な事であなたに聞いて頂きたいことがあるんですが」と言淀んだ。

「改まつてそんなことを仰有るのは可笑しいわね。私が聞いていゝことなら何でも聞きますわ。……早く云つて御覧なさい」と、よし子は事もなげに云つて、好奇心から相手の言葉を待つてゐたが、塚越は

「さう簡單に云ふ譯には行きません」と、口を噤んでしまつた。

その重要な事はつひに聞かずじまひであつたが、それを聞いてゐたなら自分の一生の運がまるで違つてゐたかも知れないと、今のよし子には思はれだした。あの時の塚越は自分の事を何とか思つてゐたのに違ひないと、よし子はさういふことに全く氣のつかなかつた者の自分の無神經が腹立たしくなつた。たとへ、今の夫と結婚するのが極つた運命であ

つたにしても、あの時の塚越の譯ありげな囁きを何故聞いて置かなかつたのであらう。よし子は塚越の結婚の豫報を耳にした今二人で肩を並べて薄暗い目白坂を上つた夜の有様が、一生にまたと經驗されないやうな色彩をもつて目の前に描きだされるのであつた。塚越の稍々もするとのろくなる足取りや、稍々もすると話を斷つて俯首がちになる樣子や、息遣ひまでも、それ等がみんな彼れの胸に秘めてゐた切ない思ひの現はれだつたやうに、今となつて思浮べられるのであつた。

以前塚越が旅から送つて呉れた繪葉書の文句や、彼女と彼女の兄とに宛てて寄越した戯れ半分の手紙の文句などが、今はじめて氣付かれるやうなある暗示をもつて思出された。あの文句もあの文句もと、強い連想が彼女の頭の中を馳せて壓え切れなかつた。そして、暗示を含んだ塚越の手紙に對して、此方からは無神經な文字を連ねた返事を出したことが痛ましく後悔された。

「あの時こんなことを仰有つたわね。それからあの時にはこんな事を書いた手紙を下すつたわね。あれはどういふ意味だつたのです。あなたの本當のお心持を私にもハツキリ分るやうに知らせて下さい」と訊ねたくなつた今は、最早訊ねる時機は過去つてしまつてゐる。

よし子は結婚したゝめに自分の身心の不自由になつてゐることに思當つた。半歳の間の結婚生活のおかげで、男の心だの世間の事だのと、いろんな事に多少目が開いた今は、最早自分は五體を縛られて謹みを強いられてゐる者のやうに不自由になつてゐる。

ある學問上の問題で兄と議論を鬪はしてゐた時の塚越の才氣の溢れてゐた顏付、親類の女客が四五人も集つてゐるところへ、兄を訪ねて遊びに來て、女客の仲間入りをさせられた時の塚越の含羞んだ顏付などが、一つ消えると他の一つと、入れかはつて彼女の目の前に立つた。

「とに角今年中には君の新夫人にお目に掛れるんだね」と、云つて、村上はそれを、輕井澤へ齎らされた無上の吉報であ

るやうに喜んで、昨夕は取つて置きの葡萄酒の口を開けて祝盃を上げた。

　よし子も據ろなく盃を手にしたが、芳醇な酒も彼女の口には苦かつた。同じ學校で一緒に學んで同じ時に卒業した仲間の中でも、きぬ子には、何事につけてもひそかに敵視されてゐたやうに、よし子は絶えず思つてゐたのであつた。あの陰險で教師などに取入ることの上手だつたきぬ子のことだから、どんな策略を用ひて塚越に取入つたのやら分つたものぢやない。

「あなたはきぬ子さんのことをよく御存じなの！。御用心なさいよ」と、よし子は昨夕中それを云ひたくつてならないのを云ひ得なかつたのであつた。

　日の耀いてゐる高原を見渡してゐるよし子の目には、花嫁花婿として盛裝して並び立つた。きぬ子と塚越との姿が、しば／＼鮮に映つて來て仕方がなかつた。そして、彼女自身と村上とが、晴れの婚衣を着けて精養軒の披露會に席を並べた時のことが、詰らなく思出されて仕方がなかつた。

　山頂へ登つた二人は、早くも四阿近くまで下りて來てゐた。よし子は心を取直してそちらを見上げて微笑した。

「何か飲料を持つて來ればよかつたね」と、云つて、額から汗を垂らしてゐる村上は忙しく息を吐いた。

　四阿で一休みして山頂の眺めなどを話してゐる間に、村上は、

「山の上で塚越君から昨夕の話の事についていろ／＼詳しいことを聞いたよ。僕がうまく水を向けたもんだから、それに乘つて一切白狀したんだよ」と、得意らしく云つて、「しかし、塚越君が此方にゐる間は、お前には云はないでゐて呉れと云ことだから、後の樂みに取つて置かう」

　塚越はたゞ微笑してゐた。



酒　亂

一

細田民樹

「どうしてお父さんがそんなことを言ひ始めたのか、私には解らない。」

　腹立たしく吐きつけるやうにかう言ひながら、甲吉は今度こそ思ひ切つて、「あなたにもその理由が解らないのですかねえ。」と、長火鉢を拭いてゐる繼母に甫めて訊ねて見た。甲吉は眼の先が眩むやうな恥しさを感じて、ちつとそのまゝ繼母の顏を胸めかねたやうに、自分の毛深い脛をわざと撫でながら、その方へ苦しい視線を持つて行つた。

「私にもよくは解らないんですけど、先立つてあなたが二階て勉強してゐられた時、私は階下で織機を外してたんですよ。小さい子が入つて來ると糸を縺らすと思つたもんですから、何氣なく土扉を閉めたんですがねえ。――」

　繼母も少し顏を赤らめながら、矢張り甲吉を正面に見るには堪へないやうに、布巾を辷らしながら猫板の上に眼を遣つて言つた。

「それは何時です？」

甲吉は繼母を咎めるやうに目角を立てた。

「芳子が痙攣を起したでせう、あの晝のことですよ。」

繼母はもじもじと面眩ゆさうに言ひ澁つた。

「何だ！　馬鹿々々しい。」

甲吉は父を嘲笑ふやうにぷいとかう言ひ捨てると、またもとのやうに默りこくつて、自分の毛脛を撫でてゐた。なるほど繼母にさう言はれて見れば、先立つて七つになる腹違ひの妹が痙攣を起した日の午前に、

「書院で織機を立てられてはやかましいから。」

と甲吉が反對したので繼母は、折角經かけてあつた梭のまゝを他所へ移したのだつたが、その時邪魔をする、子供を來させない爲に、繼母が書院の土扉を閉めてゐたかどうか、その二階に本を讀んでゐた甲吉は因よりちつとも知らなかつた。それを父が甲吉と繼母とふたりで殊更土扉を閉めてこつそり書院に入つてゐたやうに疑ふのかと思ふと、彼は全く意外な動機から、とんだ濡衣を自分と繼母との上に懸ける父を苦々しく思はずにはゐられなかつた。

「あれも矢張り御病氣の所爲かも知れませんね。」

繼母はやがて甲吉にお茶を淹れて、隨分當惑したやうに眼を伏せながら溜息をついてから言つた。

「そんな馬鹿なことがあるものですか。」

甲吉は吐き出すやうな手短かな調子で、心の中から惡魔のやうな父の影を押し除けるやうに言つた。

甲吉はもう永い夏休みも終つて大學の開校期も夙くに過ぎてゐたのに、丁度上京し得ないでゐるのだ。暴飮家の父は今年の春頃から度々腦充血を起して、最初急性に來たのが助かつたと思ふと、それから殆んど定つたやうに慢性の發作を起した。そして父の發作の起つた時は、全く痲痺狂のやうな誇大妄想に陷るのであつた。そんな時は日頃往診に行つてゐる患者の家などへ押しかけて、言ふ言葉に躓きながら、呂律の廻らない調子で途方もない大きなことを言つたり

町の有志の家へ寄つて、そこいらに居合せる町長などを、町の施政に就て酷くこき下したりした。父は町での名望家だつたが健康な時とは違つて父の發作が起り始めてからは誰言ふとなくさうした父を輕蔑して慢狂だと綽名を付けた。金はあるし家柄は鼻にかゝるし、高慢に增長するからそれで發狂するのだと評判せられた。そして父の發作はどんな狀態のもとに一番多く起つて來るのか、全く見當がつかなかつた。發作の起る一週間も前から、患者ひとり診察しないで風にも當らないやうに、靜かに自分の部屋に閉ぢ籠つてゐる時の姿は、死刑囚が最後の日をぢつと待つてゐるやうな哀れ深い氣の毒なものであつた。さうかと思ふと、繼母などを盛に怒罵した揚句の果に盛に打擲してそのまゝ發作に陷つたり、不斷のやうに極く平氣で話をしてゐながら、いきなり變調を來たしたりした。こんな風だから、それとなく父を看護してゐる甲吉や繼母にも、凡そ父の發作を豫期する目標が立たなかつた。

甲吉は彼と繼母に對する父の、實に言ふにしのびないあられもない疑惑をまでも、父の病氣の所爲に歸することは出來なかつた。父は正氣で甲吉を疑つてゐるらしかつた。これまでもなく甲吉は繼母の口吻で、凡そ父が繼母に何を言つてゐるかを察しるに骨を折らなかつたけれども、それは父の餘りに馬鹿げた疑ひでもあつたし、また彼は繼母と共に、父が自分達を疑つてゐるといふ話をすることさへが、何の根據もないのに、父の疑惑に偏するやうな不倫な姿に類似したお互を假定の上に置くことになるのだから、そんなことを想像して見るだけでも汚らはしい氣がしてゐたので、彼は父か繼母に何を言つてゐるかを略推して知つてはゐても、それを強いて繼母に訊ねるには堪へなかつた。それで、何かの話につけて繼母が、彼に對する父の疑ひをそれとなく暗示的に漏さうとする場合には、甲吉はそれを強く反撥して、繼母からてんでそんな汚らはしい話を受け入れる餘裕さへ見せまいとした。だから苟くも繼母の話が、父の疑惑のことに接近して行きさうになると、それを跳ね返すやうな甲吉の態度は、繼母が甲吉を徒に父から隨分虐められてゐることを彼は十分に同情しながらも、自分の潔白を實證しきるつもりのやうに、彼は繼母に對して何の假借するところもなく、寧ろ冷淡に他人行儀を續けてゐたのだ。自分と繼母との間を假にもそんな風の疑惑で包まれたものと想像して見るさへ

も、甲吉はその汚辱に頭が混亂しさうな氣がしてゐるのに、繼母は如何に苦しいとはいひながら、十五歳ぐらゐな時から實の子のやうにてしほにかけて世話をした甲吉に向つて、父のそんな疑ひを暗示するやうなことを言ふのは、何處か繼母の輕佻さを露してゐるやうで彼は不快でならなかつた。假へ劍を含まされるやうな思ひをして、自分の臍の尾を嚙むほど辛くとも、決して甲吉にそんな話をすべきではあるまいと彼は思つてゐたのだ。けれども發作が度々起るに連れて、父の醜い疑惑が漸々激しくなるらしく、その爲に繼母を生傷の絶えないやうな目に合せるのを見ては、甲吉は義理にでも繼母に對して父のこの疑ひを呼び起した動機や原因を一應訊ねて見ない譯には行かなかつた。それで實に生身を斬られるやうな恥しい思ひを抑へて彼は繼母に訊ねたのだ。

「書院の土扉を閉めてゐたなんて、そりやひつかゝつて來るところがないから、そんなことを機會にお父さんが難癖をつけたのですよ、あなたも御迷惑でせうが、よく氣を付けて下さい。こんな疑ひといふものは、その眼で見ると何も彼も皆さう見えるものでせうから。」

甲吉は自分の憤慨ばかりでなく、よく繼母の立場なり迷惑なりも見え透くほど理解せられるので、何となく繼母を慰めるやうな穏んだ調子で言つた。

「えゝ、私も餘り思ひがけないことを仰しやるので恐ろしくなりました。それからは隨分氣を付けてゐるんですけど、書院のことなどはおろか、お父さんは何に依らずもう聽かれないやうなことばかり仰やるものですから。――」

繼母は顏を眞赤にしながら、てれたやうな調子で眩ゆさうに、ちらと甲吉の顏を見ると、直ぐにまた眼を落して了つた。

「實際困つて了ふ。」

甲吉は抑へるやうな調子で呟いた。その語調の中には、暗に繼母に對して、さういふ父の疑ひを受けるやうな、何か知ら輕佻な空氣があなたの身邊に漾つてゐるのではないか、とでも言ひ度さうな響きがあつた。

「去年町に赤十字の總會がありました時も、二次會を濟まして、また田中さんを連れてお歸りになり、それからまたお酒だつたんですけど、御自分はお醉ひになつて、先に倒れてお了ひになつたんですの。そして田中さんひとりが暫く召し上つて、これもいきなり座敷へ倒れて、たうたうその夜お泊りになりましたが、今年の春葉子が生れた時どうでせう！　あれは田中の子だなんて、去年の總會の夜のことを言ひ出して、てんで産褥へのぞいても下さらないんですの、……。」

甲吉はもうその先を聽くに堪へないやうに中腰になつて起ち上りかけた。彼は繼母の性質として斷じて父の友人の田中とそんなことがあつたらうとも思つてはゐないのに、丁度法廷の中間に自分の潔白を證する弱い被告のやうに、あられもない侮辱をまで申開かうとする繼母の切ない心持を隨分氣の毒に思つた。自分が繼母を咎めだてして追窮してゐるやうに繼母が解してゐるのではないかと思ふと尙更繼母が不憫に思はれた。

「そんな馬鹿なことが……何を仰やるのです。——お父さんは昔からそんな性の人なのだから。」

腹も立たうけれど堪忍してお遣んなさい、と繼母を劬はるやうな調子が、今度は甲吉の言葉の中にあつた。彼はよつぽど……繼母の來ない昔に、さうした父の性質を證するに足る實例を、繼母に談じて慰めてやらうかと思つたが、さうすると繼母と一緒に父の惡口を言つてゐるやうな、いゝ氣な自分を見出さねばならないし、一つには父の留守にさうした話をすることが、何か知らこの上父の疑ひを濃くする方へ繼母と一緒に流れ寄つて行くやうに思はれる不快さがあつたので、たうたうそれを話さないで了つた。確かそれは甲吉の實母が死んだ年——繼母の來た前の年の冬であつた。甲吉は酷い疥癬を病つたので奥の六疊へひとり寢なければならなかつた。でも病氣の爲に非常に痒い時には、しく〳〵と泣き出すものだから、死んだ實母が仲働きの女中の一人を、甲吉の病んで寢てゐる部屋に付けて置いた。その女中はおさよと謂ふ二十少し過ぎたくらゐの色の白い圓い顏をした女だつたが、その夜甲吉の守をしてゐるうちに、何時の間にかそこの炬燵へ寢入つて了つた。そして夜中に甲吉が吃驚して眼を覺ますと、暗い部屋の中で、女中が無闇矢鱈と離

かに打擲せらてゐるのだ。ちつと耳を澄ますと、女中を打擲してゐるのはどうやら甲吉の父らしかつた。甲吉は唯何のことやら恐ろしいばかりであつた。

「甲吉へおさよをつけて置たのは私です。おさよが甲吉の部屋へ寝たら、あなたに腹の立つ理由がありますか。これには何か深い仔細があるのでせう。私が病氣をして寝てゐると思つて、あなたは私をコケにしましたね。」

　死病がついて間もなく亡くならうとしてゐる弱り切つた母は、夜中に苦しい身體をそれでも起して父に言ひ募つた。父は明かにおさよと通じてゐたのだ。だから十四にしかならない病人の甲吉の傍におさよが寝てゐたのを、甲吉に對する強い嫉妬でおさよを打擲したのだ。その女中は間もなく甲吉の實母にひまを出された。

　甲吉は十年ももつと前のその夜の印象を、眼の前に見るやうに鮮かに思ひ浮べたが、父のかうした實例を繼母に語つて聽かせることは、あんな發作の度に起きるやうな謂はゞ半病人の父を如何にも虐げることになるばかりか、繼母に對して或ひは父を侮辱させる種になりはしないかと思つたので、口の先まで出かけたのをぴたりと談さなことに定めて了つた。

「私は構ひませんけど、あんなことを仰やつたのでは、本當に子供の教育だつて出來はしまいと思ふと、それはかりがねえ、私は……。」

　繼母は涙を浮べながらかう言つた。甲吉には三人の年下の兄弟があつた。それは皆繼母の生んだ子供であつたが、一番上の十二になる男の子は、幼さい時瘰癧を病つて、今でも頸の邊りに、あさり貝でも着けたやうな傷痕が殘つてゐるし、次の七つになる芳子は、ものあたりがする度に痙攣を起して、口に泡こそ吹かないが、全で癲癇のやうな症状に陷るのだつた。かうした纖弱な子供を見るにつけて、甲吉は中年を過ぎて節制のない暴飲家になつて了つた父の悪い遺傳が、子供達の血に交つてゐるのだと思つた。それに何より悪いことは、父が醉つて來て甲吉がゐない時には、食卓の傍に坐つてゐる繼母に向いて、耳にするには餘りに恐ろしい甲吉と繼母とを對象にした邪推を、あたり構はず言ひ散ら

すので、今年十二になる男の子が床の中で泣きながら、母を虐める父の小言を殘らず耳を澄まして聽くといふ風であつた。相當に教養のある父でありながら、可也物ごころの付いた子供達の前で、こんな亂倫な話をいきりたつてするといふやうな、それがどんな惡い影響を子供達に與へるか。それなのに酷い酒癖のある父は一向そんなことは何も顧みないのであつた。

繼母はそればかりを毛虫に刺されるやうに氣に病んで泣くのだ。

「くだらない疑ひをかけられて、實際あなたにもお氣の毒だからお父さんが許しさへすれば、私も早く學校へ歸りたいですよ。もう夙くに始まつてゐるのだから。」

父がとても歸さないことを知りながらも、また何時發作の起きるか解らない父を放擲らかして歸れるものでないことをも甲吉は十分知つてゐながら、自分に懸かるさうした疑惑を單に父の病氣の所爲だと思ひ得ない彼は、一刻も早くかうした呪はれた家庭の空氣を脫して、夏の涼しい朝、深呼吸でもするやうに、東京へ歸つてほつとしたかつたのだ。

「今年一杯休校なさる分でも、今歸られちや本當に私が困ります。まだまだお父さんのお病氣が酷くなつて行くやうな氣がしますから。」

「厭だな。」

甲吉は深い嘆息をして立ち上つた。此頃大分身體工合のわるい父は、それでも俥に乘つて病家に行つたが、もう歸つて來る時刻なので、それを考へて彼が立つたのだ。繼母と話をするさへ父に氣兼ねをせねばならないとは！　甲吉はそれを考へると、何も彼も投げ出したいやうな腹立たしさを感じたが、そんなあられもない父の疑惑に苦しんでゐる自分の姿が、またひどく不憫にも思はれたのだ。

甲吉は父がもう歸つてゐはしないかと、くだらないことに氣兼ねをしなければならない不快さに、腹立たしい不安を感じながら、病室の廊下を通る時、それとなくちらりと藥局の方を見たが、そこには藥局の人達がゐるはかりだつたの

で、そのまゝ庭づたひに母屋の方へ來た。そして何時ものやうに、床に置てある素型の大きな胴乱と煙管をとつて、祖母の部屋へ入つて來ると、そこへいきなりぺつたりと坐つた。丁度祖母は鼈甲の眼鏡をかけて椽側に乘り出すやうにしながら、新聞の續物を讀んでゐた。

「甲さんかい。お父さんは居るかの。」

「お正午から何處か病家へとて行つたやうですが、もうおつつけ歸るでせう。」

甲吉は祖母の傍で一服しながら、氣のりのしない返事をした。母屋へ來ると氣にかゝると見えて、祖母はかうして何より先に父の樣子を訊ねた。

「お祖母さん、お父さんがあんなことを言ひ出した火元が解りましたよ。」

「それはまたどうしてな。」

「思ひ切つてお母さんに訊いて見たんです。」

「まあお前のやうな、そんなことをお母さんに訊くなんて——。お母さん身を斬るほど厭だらうにな。」

甲吉は父の自分に對する疑惑に就いては、八十を越した將來のない祖母の胸を痛めまいと、つい先日まで噯にも出しはしなかつたのだが、父の妹で母屋の方の下女や下男を指揮して百姓をさせてゐる家つきの叔母が、——父の青年時代の放蕩の結果、亡くなつた祖父が父を一旦禁治産にして、當然他所に嫁づく筈の叔母に養子をとつたのだが、早く養子に死なれて、子供を連れて寡婦になつてゐるのだ。——とかく繼母との圓滑を缺いてゐるので、甥の甲吉を陥れる爲ではなく、繼母ひとりを中傷するつもりで父の疑惑を祖母に談したのであつた。その時甲吉は叔母の無智なお喋りに尠からず腹を立てた。叔母は、繼母が甲吉に戀してでもゐるやうに繼母を祖母に中傷したのだ。

「叔母さんまで馬鹿なことを言つちや困るぢやありませんか。あなたがそんなことを言ふなら、全でくだらない自家の噂を自家のものが廣めてゐるやうなものだ。馬鹿なお喋りはお止しなさい、他のことゝはちがふ。」

「誰がそんな馬鹿なことを言ふものですか、私は唯お母さんに、嫂さんが甲ちやんに非常によくなさると言つたゞけちやありませんか。」

そしたら祖母が、

「私もようとは記憶して居らんけど、それはどちらでもよいがな。だけどどうして作太郎（甲吉の父）がそんなことを言ひ出したのだらう、まさかそんなみつともないことを言ふほど耄碌もしやしまいけど、皆惡い病氣が言はせることだよな。」

と、かう言ひながら、祖母の爲には、年はとつてゐてもひとり息子に相違ない父を辯護するやうに、またそんな醜いことを言ひ出した父をさすがに呆れながらも、腹の底の熱く煮えるやうな嘆かはしい調子で父に十分同情しながら、こんな話を祖母の耳に入れた叔母を叱るやうに、祖母は情けなさうに嘆息したのであつた。それは先日の出來事で、また甲吉に懸かつてゐる父の汚い疑惑が祖母の耳に入つた最初であつた。

「火元つて言ふのはかうですよ、先立つて私が書院の二階で本を見てゐた時、お母さんが織機を外しに入つて來たんですがね。」

甲吉はかう談しかけて祖母の眼色を窺つた。祖母が父をかはいゝ餘りに勢ひ父の非を審くやうな孫の甲吉の談を不快に思ひはしないかと察したからであつた。祖母は面白くない顔はしたが、一應その理由が聽きたいといふ風であつた。

「お祖母さんには一切こんな話はきかせまいと思つたのですが、先立つて叔母さんがくだらない告口をあなたにしたものだから。」

甲吉がかう言つてゐると、叔母も煙草入を持つてそこへ入つて來たので、叔母に對しては先日の言ひがゝりもあるものだから、彼は悉しく繼母から聽いた父の疑惑の動機を談した。

「何てとてつもないことを作太郎は言ひ出すのだらう、こんな情ない話がまたとあらうかいな。」

祖母は父を憐れむやうに肩を顫はせながら大きな吐息をしてから眼鏡を外して拭いた。こんな心配が見る見るうちに祖母を衰へさせて行くやうな氣のするほど、祖母は父を想ふのだ。

「困つて了ひますね。」

叔母は輕くかう言つた。それにはまたいくらか繼母に對する皮肉な味があつた。甲吉は何時も繼母を辯護すれば叔母がへんに邪推するし、また叔母の肩を持つと繼母が、

「甲ちやんは叔母さんの子ばかりかはいいのですかね。自家の子供は何ともないのですよ屹度、女親が違ふと私の子供なんて、ちつとも兄弟のやうな氣がしないんでせうね。」

こんなことを蔭で父に言つた。御菓子を買つても、また到來ものを分けてやるにも、繼母の子と叔母の子に同じやうにしてやらないと、叔母は、甲吉などちつとも氣が付かないでゐるのに、病室の方に來た到來ものなどをよく記憶えてゐて、

「綾さんは甲ちやんにあれを見せましたか、あれは甲ちやんにつて他所から下すつたんですよ。芳ちやんなど頂いて食べてましたがね。」

叔母はその到來ものを繼母が自分の子供にばかりやつて、母屋の方の叔母の子供にくれないことを甲吉をだしにして當てこするのだ。繼母は繼母で少し氣の忙しい極く人の好い女だつたが、どうもそれは繼母にありがちな本能的の癖と言つても差支へないほど、甲吉に蔭日向をした。彼を名指して町の知人から贈られたものでも、一向彼がそんなことを構ひつけないものだから、つい默つて自分の子供達に分けてやつたりした。一口甲吉に談すなり、見せるなりしてそれから分けてやればよいものを、繼母はそれをどう忘れするほど、甲吉を本當の子供と分けへだてしてゐないとも言へるし、何か甲吉に言はないで内證で自分の子供に分配して了はうと思ふ繼母根性が失せないのだとも言へた。そしてこんなつまらないことが、女の仲ではお互に反感の因となつた。さうして兩方の小言を聞く度に、甲吉は、何といふ

淺ましい無智なそしてお互に自身の臭みを知らない下手な女達だらうと苦々しく思ふばかりであつた。

「嫂さんも可笑しな人ぢやありませんか。何ぼ何でもそんな話を川口に聽かせるなんて兄さんに大恥辱を掻かせることになるぢやありませんか。」

甲吉が父のあられもない疑惑の動機を話し終ると、横から叔母がかう言つた。

「川口に談したつて、そりや何時ね？」

甲吉も吃驚して訊ねた。川口といふのは、甲吉の家の野番頭をしてゐる謂はゞ下男頭のやうな男で、甲吉の家では何も彼も川口に相談しないで、ことを運ぶといふことは殆どないのだ。自家のもの見たいに大事な男ではあつても、談す話にこと缺いで、こんな恐ろしい醜い不倫な疑惑をまで、繼母が川口に聽かせるには及ぶまいと、甲吉も繼母の輕佻を憤つて見た。叔母の話によると、つい二三日前病室の方の臺所で、丁度川口も來合はせて父の酒の對手をしてゐた時、何かの話をきつかけに、甲吉との疑ひを父に懸けられてゐる繼母が、その鬱憤のやり方なく、父の面前で川口に向つて、「お前にだけはぜひ聽いて置てもらはねばならないが、――」と火のやうに眞劍になつて、自分と甲吉にとんでもない濡衣をかけてゐる話を突發させた。川口はそんな話を甫めて聽かされて、その場に兩眼の措場もないやうに困つて了ひ、父は父で、繼母の態度が、酷く眞劍なので「馬鹿！　何を言ひ出すのだ、そんな馬鹿なことを誰が言ふものか、ねえ川口！」とか何とか言つて、その場をお茶に濁しながらてれたやうに混ぜかへして了つたと言ふのだ。

「嫂さんが可笑しくはないよ。よつぽど腹が立つたから、川口には言はずに居られなかつたんだわな。自分に疚しい覺えがあれば、そんなことを他人に談せるものぢやないわな、だけど作太郎は病氣だで、病人は病人のやうにしてやらないとね、さうでせう、甲吉！」

祖母は川口の前に自分の潔白を言ひ表さずにはゐられなかつた。繼母の腹立たしい氣持を十分理解しながらも、矢張り我子に贔負をして、父は病人であるといふ同情をその場に持たなかつた繼母を非難するやうに言つた。

叔母は調子付いたやうに何も繼母を非難するやうなことばかり並べてゐた。すると庭づたひに繼母が遣つて來た。川口に繼母が談したといふことは、一面甲吉には小氣味よくも思はれてゐたが、祖母や叔母と同じく肉親の父を繼母がすこし非難し過ぎたやうな、繼母に對する或もどかしさが三人の間に漾つてゐたので、繼母が入つて來ても何となくその場がしらけてそぐはなかつた。繼母は肉親のもの三人が寄り集つて、何か自分の小言でも引いてゐるのではないかと、邪推するやうな眼付で氣の進まないやうに、

「甲吉さん御飯ですから。」

と言つた。

「お父さん歸つたのですか。」

「えゝ。」

繼母は明かに叔母の非難を想像したらしく氣乘りのしない返事をした。實際叔母が繼母を非難してゐた矢先だつたので、甲吉も何となく自分の良心を抑へられるやうな鬱陶しさを吐き捨てるやうに、

「ねぇ叔母さん、今からは私にお母さんの小言を言はないで下さい。」と、彼は少し大きな聲であけすけにかう言ひながら叔母がどんなに繼母の惡口を自分に焚き付けても誤魔化されはしないぞと思つた。そして彼は繼母に向いても、「その代りお母さんも叔母さんの蔭口を私に聽かせないで下さい。」

そしたら祖母が、その場を融和するやうに、「でもよい話なら兩方のを聽いてお上げだらうがの、ホヽ。」

「それは勿論。」

甲吉は枯枝でも折るやうな味氣ない調子で、しかし輕く祖母に答へた。繼母も叔母もてれたやうに苦いばつの惡い顏をしてゐた。

二

繼母が病室の方へ歸つてから、叔母は「今晩はこちらでおあがんなさいよ。何も御馳走はないけど。」と優しく言つた。それには、あんな疑惑をかけられてゐる父と食卓を共にする爲に、病室の方へ歸るのが甲吉にとつては厭なことに違ひないと推量した叔母の思ひやりがあつた。甲吉は自分の家庭が二つあるやうなものだから、病室の方で食事をしたり、氣の向いた時は母屋に來て祖母と話しながら食べたりしてゐたのだが、父の疑惑を知つてからは、どうも父と一緒の食卓につくのが憚られ出したので、大抵母屋の方に來て食事をした。すると病室の方の繼母はそんなことをなすつては、却てお父さんの疑ひを濃くするやうなものだから私が困る、どうぞ病室の方へ歸つて食事をしてくれと頼むのであつた。歸らないでゐると先のやうに迎へに來るのだ。

「いや、今晩は向うで食べませう。」

「さう、さう、その方がよいわな。」

祖母も十分事情を察してゐるやうな口調で甲吉を賺すやうに言つた。で、甲吉は繼母が歸つた後暫くして、病室の方へしぶしぶと不快な氣持を抱いて歸つて來た。お勝手の方ではもう藥局の人達の食事が濟んだらしく、下女と看護婦とがそこいらを片づけてゐた。甲吉は廊下を通つて父の食卓を据ゑてゐる涼しい部屋に入ると、

「子供達はもう濟んだのですか。」

と、父に對する不快な心持を抑へるやうにわざと平氣で、そこの空氣がいやに緊張しないやうに、その場を合せてかう言つた。

「まあ一杯やれ。」

大分前から始めてゐたらしく、父はもう赤くなつてゐた、發作が起き始めてからは、腦が重いと言つて五分刈にして

了つた、半白の頭までが薄すら赤く酒の色に滲んでゐた。甲吉は默つて極く自然に父の杯を受けたが、發作が起きるやうになつてからでも、どうしても酒を禁め得ない父の杯を持つた手付を見ると、つく〴〵情けない心持がした。酒故の發作でありながら、酒故の、町中に評判せられるやうな醜體でありながら、父が尙その酒杯を捨て得ないことが、酒の味のよく解らない甲吉にとつては、酒そのもの〻嗜好に同情するよりも先に、何か知ら父の意識の缺陷に酒を詰め込むことに依つて、父は父なりのエクスタシーに達するのだと思はれるのであつた。そのエクスタシーが父の發作であり病氣なのだ。慢狂と噂されるやうな父の酒亂は、父自身でもその發作の過ぎた後十分氣の付くことで、それを隨分恥しく思ふのであつたが、寧ろ持ち續けてゐる甲吉は、そこに大きな父の缺陷が横はつてゐて、敏感にその恥辱を感じ得ないほど父の意識がルーズになつてゐると思ふのだ。もし父が今少し敏感に、銳敏に自分の發作を恥ぢる心掛けがあるなれば我が眞實の子である甲吉と、自分の妻の間を疑ふやうなあられもない、亂行を決してする筈がないやうに思ふのだ。發作の起きた後の父はなるほど病氣に違ひなからう、けれども發作の起きる前までは、父は正氣で酒を飲み續けるのだ。それをしも病氣と呼ぶことが斷じて甲吉に出來ないやうに彼はまた父の、自分と繼母に懸けてゐる堪へられない疑惑をその病氣の所爲だとは斷じて思ふことが出來ないのだ。甲吉は餘りに恐ろしい父の疑惑に壓せられてゐる結果、その潔白を證さうとする基調に自分の主觀を走らせてゐるので、勢ひ父に對する同情が薄らいで了つて、何につけても父に對抗的に反感を持つてゐる自分をよく知つてゐる。けれどもそれは仕方のないことだと思つた。唯父全體を見渡す時そこに氣の毒な病氣を持つて自制の眞實の親を、如何にも痛々しく眼のあたり見ねばならないので、出來る限りは自分の胸に凡ての腹立たしさを疊み込み、決して父を芽立たせないやうに努めようとしてはゐるのだ。

　甲吉は冷靜に落ち付いて極く自然に父の杯を受けながらも、彼がこの部屋に入つて來る前に、父が繼母を虐めるやうな唯ならぬ話をしてゐたらしいことを感じた。繼母に甲吉との間のことを何か皮肉に言つたらしい餘燼がまだそこに燃え殘つてゐるやうな空氣が殘つてゐた。さう感じると甲吉の心が石のやうに固くなつた。彼が入つて來たので、父は少

しくてれて機嫌をとるやうに甲吉へ杯をさしながら、話の模様をまた他の方から始めた。

「あそこの家も困つたものだ。俺に相談したつてそんな馬鹿なことは出來はしないでな。かはいさうだが仕方がない。」

と甲吉の顏を窺ひながら、父が薄笑ひを浮べてから言ふと、繼母はもう聽くに堪へないといふ調子で父の語を反撥するやうに、

「そんな罰當りなことをするからですよ、矢張り道でないことをしますとね。」

から面倒くささうに答へた。甲吉は父の話の樣子で察しると、父にかゝりつけの町では相當な資產のある地主の家の寡婦が、ひとり娘に養子をもらつたところ、この春娘が病死してから間もなく、自分が養子の子を妊娠んだので、その處置を秘密で父に相談したと言ふのだ。そんな事實は甲吉も以前からうすうす聽かないではなかつたが、他所に起つたこんな事件の眞僞を詮義するのは問題ではないのだ。父はかういふ話を繼母にして、また甲吉にも半分この話を聽かせるやうな態度に出て、暗に甲吉と繼母の關係に當てこすらうとするのだ。甲吉はその馬鹿らしさに呆れてものが言へないやうな氣がしたけれども父が如何にも甲吉の眼色を試すやうな薄笑ひの眼付で、嘲笑的に彼を窺ふので、この場合默つて他所のそんな不倫の話を聽いてゐると、甲吉が自分の暗い疚しさに怯んで了つたやうに父は思つて、一層自分を疑ふに違ひない氣がした。だがもし、こゝで彼の欝窟した感情を爆發させると、父も興奮して遂には發作を起すやうなことになりはしないかと思つたので、しのぶのはこゝだと我慢しながら、彼は靜かに、

「よくもそんなことをのめのめとあなたに相談に來たものですねえ、いゝ年かゝへたお婆さんが。」

と父に對する憤り切つた憤怒を、それでもぐつと抑へて、かう受け流した。

「お婆さんつつたつてまだ四十の上をさう越しちやゐないよ。女もあんな年になると丁度惡戯がしたくなるものだて。へ、、、、。」

と父は聲高に嘲笑つて、のぞき込むやうに繼母の顏を見た。繼母も怒りに堪へないやうにぴりつと目角を立てた。明

かに嵐の前のやうな險惡な空氣がむし〳〵と一座に漲り切つてゐた。
「どうだお前！　甲吉にお酌をしてやらないかい。」
益々醉つてまた父の口を尖らして、十分毒々しい厭味を交へながら、繼母をそゝのかすやうに催促した。
「大抵におしなさい、あなた！。私はどんな濡衣を着せられても構ひませんけど、甲吉さんは今から御出世なさる大事な御身體ぢやありませんか。それに眞實の親のあなたが、甲吉さんに……」
繼母はわあんと聲を擧げて、そこへ俄かに泣き倒れた。怺へ怺へた繼母の鬱積がたうたうその袋を緒の切らしたのだ。
「甲吉さんも聽いて下さい、先立つてお盆の晩母屋でお客をしたでせう、あの時私があなたにお酌をしたのが、お父さんのお氣に入らないのです、だから今も、あなたにお酌をしろつて、あの言ひやうはどうでせう、私本當にお父さんは御病氣の所爲だ所爲だと思つて今日まで我慢してゐたのです、本當に腹が立つて堪らないぢやありませんか、まさか犬や畜生ぢやありますまいし……」
繼母は頭の尖に錐でも揉み込まれるやうに甲高な悲しさに堪へないやうな聲で、振り絞るやうに泣き入るのだ。そしたら次の部屋に寢てゐた十二になる男の子と、七つの芳子が吃驚して起き上つて、彼等の母の泣いてゐる膝もとに來ておい〳〵と悲しさうに泣き始めた。
「……私はこんな子供達を連れて歸して頂きませう、私さへゐなければ、あなたの疑ひも晴れます……乾度……」
繼母は泣きながらきつとした眼付をして父を眴めた。
「何！　歸る！　歸れるなら歸つて見ろ。」
父は眞赤な顏をしてかう言つたかと思ふと、手に持つてゐた杯を、椽板の椽側に叩きつけた。微塵になつた杯のかけがちりんと微かな餘韻を殘して、蛾のやうに廣く散つた。
「お父さん、馬鹿な眞似はお止しなさい。あゝして子供が、そんなくだらない話をきいたら、何も彼も轉倒するやうな惡

い影響を子供の心に殘すぢやありませんか、‥‥私自身の實に悲しい心持は別としましても。ねえ、お父さんあなたはまた今夜御酒が過ぎたやうです、お身體に障ることが解つてゐるぢやありませんか。もうお休みなすつて下さい。」

甲吉は蒼白くなりながらも、迫つて來る呼吸を抑へるやうにして、聲を顫はせながら、優しく父を宥めようとした。

「何？　御酒が過ぎた！　口はゞつたい干渉をするな。酒は俺の生命だ。まだ飮むのだ。」

父はかうした場合の癖になつてゐる「酒は俺の生命だ。」を繰り返したかと思ふと、手にあつたのを叩き壞したので、今度は下積みになつてゐた盃臺の大きな白い杯を採りながら、なみなみと自分で淹いで貪るやうに飮み乾した。父の興奮が漸々酷くなつて行くのを見ると、甲吉は手がつけられないやうな氣がした。甲吉は眼前に發作の起きて來る父を見るやうな心持がしたので、ついと立つて父の大きな酒杯を取らうとした。そしたらそれをまた椽側に投りつけた。

「甲吉！」と父は怖いほど判然した口調で、ちつと大きく澄んだ瞳を彼の顏に据えながら、「お前は俺を籠絡しようとしてゐるな。お前は天誅といふことを知つて居るか、え？　知つてゐるか。不倫を犯すものはかうして悉く天誅を蒙るのだ。」

父はゆつくりと、言葉と言葉の區切りを明瞭にかう言つた。そして强直した眼の玉をちつと据えたまゝ動かさないで、「かうして天誅さ」と言ひながら食卓の脚を右手に引きさらつて、そこへどんで返りに食卓を引つくり返へしたのだ。十二になる男の子は母屋へ馳けつけた。そして藥局のものは、廊下づたひにこの騷ぎをきいて、發作が起きたのかと思ひながら、恐る恐る入つて來た。興奮し切つた父にたうとう發作が來たのだ。父は脊髓を反らすやうに、ぱたりとそこへのけぞつて倒れた。そして手足をぶるぶると顫はせながら、急ち顏の色が蒼ざめて了つた。父の發作は慢性で生命に別狀ないことを皆心得てゐながら、それでも發作の度に、皆が新しく大きな不安に襲はれねばならなかつた。かうして倒れた刹那の父の樣子を見ると、全く死に瀕したもののやうな姿なので、とても回復しようとは誰にも思はれないからだ。それで父の發作の度に皆が恐怖を新しくするのだ。倒れた父は齒をきりきりと堅く食ひ縛りながら、正體は全くないのに、兩手の指先を調子づけたやうにひらひらと動かして見たり、右手の親指を無理に口に入れようとして焦燥

りながら、しつかりそれを嚙んだりするのだ。藥局からは、父が自分で常用に調合してゐる抱水クロラールを持つて來た。それが最も悲しいことには、父は日頃の自分の發作を豫め知つてゐるので、手づから自分の發作の時に使ふ藥を拵へてゐるのだ。

母屋から庭づたひに急いで來た祖母と叔母は先づ咎めるやうな眼付で、甲吉を、そして繼母を見廻しながら、

「みんな居ない方がよいがな。靜かに寢かせれば落ちつくで、……」

と祖母は看護婦や書生達に父のかうした姿を見られるのが、如何にも癪に障るやうな、強い調子で言つた。

翌る朝父は漸々意識が判然して來て回復はしたが、死んだものゝやうに寢床に横はつたまゝ身動き一つしなかつた。覺めて來ると、父は誰に會ふのも恥しいやうに、自分の亂行の悔恨に魂を蝕はれるのだ。けれども皆それとなく警戒を怠らなかつた。父は發作後の二三日は腑脱けのやうになつて、何か自分の忘想に追跡せられるやうに、眞晝間町へ飛び出し、役場に行つて町長を怒鳴り散したりしながら、慢狂と謂はれるやうな醜體を演じて來ることがたまにあるのだ。だが多くの場合發作のあつた後の二三日は、女のやうに女々しくなつて、溫順しく陰に隱れるやうに寢床を放れなかつた。發作前の焦燥と發作後の悒鬱は、はたで見る眼にも如何にも氣の毒に堪へないものであつた。丁度その日の正午過ぎ父の朋輩の田中といふ町の醫者が見舞に來たやうにして、父を診斷した。日頃心安いので甲吉は田中さんに言つた。

「ねえ、田中さんどうでせう、僕もう學校へ歸らなくちやいけないのですが、駄目でせうかしら。」

「そりや駄目ですよ、今年は諦めて休校したまへ、お父さんの癲癇狂は漸々頻りに起りはじめますよ。それに發作後にはとても淋しいんだから、お父さん君を東京へなんぞ歸しやしないさ。」

田中さんは父の寢てゐる部屋に行つて、三十分ばかり父と談してゐたが、軈て歸り支度をして出て來ると、入澤內科の御弟子だつた田中さんは、ぶつきらぼうにあけすけに、そしてすこし漫畫式の飄輕な調子で、

「奥さん、××君の發作は漸々酷くなりますからね、今度亂暴をした時は、手を縛くとか何とかして、土藏の中にでもお入れなさいよ。その方がなるたけ興奮を避けることになつて、××君の病氣の爲にもその方がいゝんですよ。」

「でもまさかそんなことはねえ。」

　繼母は困つたやうな表情をした。

「ちよつとかはいさうな氣がしますが、發作の起きた時は、本人は何も知らないのですからねえ、主人を大事にしてやらうとお思ひならぜひさうなさいよ。僕もその話を××君にしましたがね、苦笑してゐましたよ。」

「當人が豫め承知してゐればですけど」

「えゝ、苦笑してゐましたから大丈夫ですよ。それに大事な器具を矢鱈壞されてもお困りでせうがね、ねえ、甲吉君！」

　田中さんは半分甲吉に談しながら、かう言つた。

「僕も實際父の病氣の爲にその方がいゝとは思ふのですけどね。」

　どうも賛成しかねたやうな顏を甲吉がすると、田中さんはひとり呟くやうに、

「それより外に手はありませんよ。××君の酒はこうもうに入つてるんですから、このぶんでは死んでも禁めやしませんからね。」

　田中さんは眞劍にかう云ひながら、輕く笑つて歸つて行つた。

三

「甲吉！　甲吉！」

　田中さんが歸つた後で父の寢てゐる部屋の方から、蒲團でも被つてゐるやうに重い籠つたやうな聲がするので、甲吉

は靜かに父の寢室へ入つて來た。彼は前夜のことを思ひ出してゐたので、言ふやうのない重苦しい心持がして、いきなり正面に父の顏を見るにしのびない氣がした。父も昨夜の亂暴な人とは全く別人のやうに憂欝な蒼ざめた顏をしながら、極く靜かに上眼をつかつて、さすがに眩しさに耐へないのか、甲吉の顏は見ないやうにして言つた。

「田中の話ではお前も學校の方が氣になるだらうが、俺がかうした病氣では、他に杖にも柱にもなるものがゐないでな、心細い次第だ。」

發作後の父はとりつく島もないほど淋しさうに、かう言ひながら甲吉を頼り切つてゐるやうな十分の依頼に、潤んだ眼付をした。

「いや私は別に……。お父さんさへ快くなつて下されば、半年や一年休校したからつて、ちつと厭ではありません。」

父の眼には涙があつた。甲吉もかう返答してゐるうちに急に眼の縁が熱くなつて來るのを覺えた。かうして慈愛に溢れた父の眼付を見ると、甲吉はどんな辛いことも父に許したかつた。親子水入らずのこんな溫かい父が、何故あられもない疑惑を自分に懸けるのだらう、どうしてこの優しい父が、自分と繼母を疑ふやうな惡魔の心になるのだらう、甲吉は溫かい父の態度を見るにつけて、その恐ろしい疑惑を思ふと徒に悲しかつた。父の自分に懸けたそんな疑惑は繼母との情愛を深める爲の單なる痴話であつて惜しい、父達夫婦の愛情の裏書であつて惜しい、その爲の父の疑惑なら甲吉はどんなに父に虐げられ、自分が如何ほど大きな犧牲を拂つても、快く父に殉じたい氣持がした。けれどもそれが單なる冗談でもなく、父達夫婦の他愛ない痴情ではなしに、すつかり具體的に父が彼と繼母を疑つてゐるのだと思ふと、甲吉はかうした場合の孤獨な優しい父に隨分殉情的になりながらも何か知ら奥齒にもの丶挿つたやうな、父に同情し切れない、またどうしても殉情的になり切れない或ものを感じずにゐられないのだ。——お酒をお禁めになつたら、あなたのさうした疑惑も屹度晴れるでせう、——甲吉は寢てゐる父の悄げてゐるのを幸、かう眞面目に諫告して見たい氣がした。父を襲ふ酒そのもの丶直接な打撃といふよりも、父の酒と共に纒はる一つの空氣、言ひ換へれば酒を禁め得ないや

うな父であるから、自分の酒癖に對して針のやうな辛辣な自覺がなくて、自分を滅亡に導くやうな酒をいくらでも、平氣で咽喉を開けて通すやうな父であるから、萬事を至つてルーズに遣り過して了つて、甲吉への疑惑などもその酒と同じく寧ろその酒の爲にこそ平氣になつてゐるのだ。そしてそのルーズな酒は到底父の禁め得ないものである限り、從つて甲吉への疑ひの晴れよう筈は決してないのだ。だから父に對する酒の諫告など、その濟度し難い疑惑と同じく全く今更何の役にも立たないのだ。かう思つて來ると甲吉は凡て絶望のやうな氣がして、一刻も早くこの呪はれた家庭を飛び出したいのだけれども父の發作は益々頻發して甲吉の出足をさらうふではないか。それにも増して發作の後は別人のやうな優しい慈愛で、深い信頼の眼を向けながら甲吉を杖とも柱とも頼つて來ようとするではないか。甲吉はそれやこれや考へるとその場へ昏倒しさうな心持がした。發作後の酷い疲勞に父はまた眠りに落ちたらしく默つて了つたので、甲吉はよろよろと起ちよりながらその部屋を出て行つた。

甲吉は父が奥に寢てゐるだけに一層繼母に對して遠慮せねばならなかつた。彼と繼母がどんな話をするか、何時も父が聽耳を欹てゝ、寢てゐながら窺つてゐるやうな氣がするのだ。だから彼は假へ用事で繼母と話をせねばならないことがあつても、なるたけそれを避けてゐた。繼母の全身に父の疑惑が絡まつてゐると思ふと、彼女に對して一種の不氣味ささへ感じるのだ。甲吉は廊下で繼母と擦れちがつても、自分はずつと壁の方に寄り添つて、繼母を開けて通した。父の疑惑が蠍のやうに繼母の脊中を這ひ廻つてゐるやうな恐怖を感じるからだ。で、甲吉は大抵なら母屋の方に來てゐて、父が呼びたくない限り繼母のゐるこちらへは歸つて來ないやうにした。

丁度母屋の方では四つになる叔母の男の子が風邪を引いて大分熱が出たので、父の傍を放れるよい口實が出來るやうに、甲吉は叔母の子の枕元に付きゝつて、氷嚢や水枕で冷してやつてゐた。そのうちに、病室の方では、七つの芳子が晝間町の牧場に遊びに行つて、酸模か何かを採つて食べたのがあたつて、夕方から例の癲癇性の痙攣を惹き起した。けれども病室の方は十分に手があるうへに、芳子の痙攣には一定の時間が經つと癒るといふ自信が皆にあるので、甲吉は

母屋から病室の方へ歸らないでゐた。あゝして父の寢てゐる蔭で甲吉とへんな話でもするやうに邪推する父であることを繼母もよく知つてゐるので、彼が母屋の方へ行つてゐることは結句繼母にも氣がねのない筈であつた。それなのに夕方ちよつと芳子の樣子を見に歸つた時、まだ床を放れないでゐた父が、

「芳子をすこし見てやつてくれないか。繼母が氣を惡くしてゐるから。」

と言つた。繼母は、母屋へ行つて叔母の子供ばかりの看護に漬かつてゐる甲吉に不足なので、――甲吉さんはうちの芳子などどうでもいゝのでせう――とこんなことを父に焚きつけたに違ひないのだ。何てくだらないことだらうと甲吉は思つた。色情の疑惑に就いては、父が甲吉と繼母を疑ひながら、而も甲吉の蔭口などはこそこそと繼母が父に訴へてゐるのだ。そして繼母に焚きつけられて、父がまたやにさがりながら、繼母の甲吉に對する非難なり、小言なりに、手もなく同意し、一致するのだ。甲吉はそれを考へると嘔吐氣がつくほど、胸が惡くなつた。年を老つて若い後家入をもらふと兎かく女房に捲かれるものだわ――と祖母が言ひ言ひするその言葉通りに、何といふ卑劣な繼母根性だらうと思つた。

「芳子はこちらで十分手がありますが、母屋ぢや素人ばかりですから、熱が九度五分もあるんですから。」

甲吉は心のうちで尠からず、繼母に對して憤慨しながら。でも折角落ち付いて來た父を苛立たせてはわるいと思つて、優しく叔母の子の病氣を説明して、手の引かれない理由を話した。

「さうかそんなにわるいのか、俺がちよつと行つて診てやらう。」

父はかう言つた。すつかり落ちついた父はもう起きようとしてゐたところだつた。

「えゝあとで診てやつて下さい。」

甲吉は叔母の子の爲に父に賴むやうにかう言つて母屋へ引き返した。

翌る日は父もすつかり平常に復して何の異狀もない樣子だつた。父に診てもらつた叔母の子も大分熱が下つて來た。

けれども酸漿を食つて下痢を起してゐた繼母の方の、七つになる芳子は一日置いてまた酷い痙攣を起した。丁度父は倖で患者を診に出かけてゐたので、甲吉と繼母とが芳子の枕元につききつて、頭を冷した。芳子は口に泡こそ吹かなかつたが、その症狀は全く癲癇性のものだつた。氷嚢をよほど氣を付けて靜かに頭へ持つて行つても、芳子はその冷たさに吃驚して、咳上でもついたやうにぶるつと顫ひ上がつた。

「しつかり抱きしめてゐる方がよいだらう。」

甲吉はかう言つて、胡坐を廣くかきながら、芳子を力を入れて抱きしめてゐた。

「今度は大分酷く來るやうぢやありませんか。」

繼母はおづおづとしながら、芳子の頭を冷した。甲吉が固く抱いてゐても、がたがたと寒さうにおこりがついて、芳子は間歇的に魂消るやうに跳ね上らうとした。芳子は不斷斜眼ではなかつたが、どうも眼付が人並より違つてゐた。瞳が少し奥に引つ込み過ぎてゐるやうな眼だと甲吉は思つた。こんなのが癲癇性の眼なのだらうと、ひそかに或恐怖を感じてゐたが、その眼を今ひつ釣つたやうに開けたきり、ぴく／＼してゐるのを抱いてゐると、父の酒から起つた惡い遺傳の證據を見るやうで、如何にも殘酷な氣持がした。そのうちに父が歸つて來たが、甲吉が芳子を抱いてゐるうへに、繼母が傍で甲吉にのぞき込んでゐるこの場の樣子が、實に馬鹿げたことながら、例の疑惑から父の不快を買つたらしかつた。

それから二三日經つた夕方であつた。芳子はよくなつても、叔母の子がどうもしつかりしないので、甲吉は正午頃から母屋に來て、叔母や祖母と子供の枕元で話をしてゐた。すると十二になる繼母の男の子が、呼吸を切らして、甲吉を呼びに來た。

「兄さん！　お父さんが田中さんでわるくなつたんだつて！」

血相をかへてかう言つた。甲吉も驚いて立ち上つた。

「たつたこの間あんなに酷かつたのに、まあ。田中さんでまたお酒でも出たのだらうぞ。」

祖母のおろ〳〵聲を聽きのこして、甲吉は庭づたひに病室へ歸つて繼母に樣子をきいた。

「患者が溜つたら呼びに來いちよつと田中のところへ遊びに行くからつて、今朝歩いてお出でなすつたのです、それにまあ今田中さんの書生さんが知らせて來たんですよ。」

繼母も周章てゝ言つた。甲吉は母屋の下男に俥をすぐ持つて來るやうに言ひ付けて、町の田中さんへ走つた。

田中さんへ來て見ると、父は倒れてはゐないで、何か大きな聲で田中さんに怒鳴り散らしてゐた。甲吉の顏を見るといきなり、

「甲吉！何しに來たのだ。お前にはもう用がない。」

とぢつと異樣に光る眼を据ゑて怒鳴つた。

「甲吉君は君を迎へに來たんだよ。患者がもう澤山待つてゐるのだよ。僕の方にも澤山溜つてゐるのだから、ね、君、君の大氣焔はまた明日拜聽するとして、とにかく歸りたまへな。」

「うむ、さうか、ぢや歸らう。」案外父が素直に起ち上つたと思ふと、

「いや、まだ君に甲吉の出鱈目に就いて、まだ君に談さねばならない。」

「その話は今君がしたぢやないか。甲吉君にはとくと僕が意見して置くから、さ、俥が來た、歸りたまへ。」

「さうか、さうか。」

父はまたつまらない妄想に追跡せられてゐるのだ。何といふ狂人そつくりの眼付だらう。

「麥酒(ビール)を少し召し上つたゞけなのでしたけどね、ほんとにお氣の毒で御座いますね。」

下男が父を俥に乘せて、田中さんの玄關を出てから、田中さんの奥さんは甲吉にかう言つた。

「甲吉君、今日は實にへんなことを言つたぜ、お父さんが！」

「さうでせう、僕と繼母のことでせう。」
「あんなことを言ひ出しちや全く困つて了ふな。もうあゝなると、ちよつと酒の香を嗅いでも發作が起きるんだね。」
「だからあんな時は、うかうか患者を診せられないと思ふのです。」
「困つて了ふな、」
　氣の輕い田中さんも、さすがに暗い顏をしながら、「まあとにかく早く歸つて見たまへ、屹度また奥さんを虐めて酒を出させるよ。先日僕が言つたやうに、酷く亂暴するやうならどうしても土藏へ入れたまへな。」
「仕方がなけりやさうします。」
　甲吉は決心の色を示しながら、田中さんから十町ばかりの道を、よく熟れた稻の間を走つて歸つて來た。
　病室の表の方の溜りには近在から來た患者がゐるので、裏口から下男も入つたらしくそこに俥が置てあつた。甲吉はそこの廊下へ上ると、もう奥で父の怒罵してゐる聲をきいた。いきなり駈けつけて見ると、母屋の方から祖母や叔母も遣つて來てゐる中で、發作の起きた父は、手當り次第に繼母を打擲してゐた。甲吉はその座敷を一眼見ると、かうして呪はれた陰慘な家庭の、打ち煙つたやうな悲しい空氣に含まれて自分までが狂ひ出しさうな不安を感じた。田中さんから歸つて來た父は、果して、また酒を出せと言つて繼母を虐めてゐるのだ。
「殺されてもお酒は出しません、あなたの御病氣の爲です。」
　打擲せられながらも繼母は、繼母らしいことを言つてそこへ引き摺られてゐた。父が床に置てあつた肘突を取つて振り上げようとするので、甲吉は後から俄かに羽搔ぜめに父を抱いた。祖母も、叔母も、誰も、甲吉に帶や綱を渡すことの出來るものがなかつた。甲吉は勿體のないやうな、何か恐ろしい濟まない氣がすると心がめいつて了つて、急に手を弛めて了つた。すると父は矢庭にまた繼母へ飛びかゝつて行つた。
「お前はこの間俺の留守に、芳子が痙攣けたとき、甲吉と何をしてた。をい、甲吉と‥‥」

また[illegible]悶しい疑惑の意識が返つて來たらしく、父はかう言つて呼吸を彈ませながら、泣き倒れてゐる繼母を蹴散らした。甲吉はもう堪りかねた。素早く部屋の隅の蚊屋のつりてを一つ引き外したかと思ふと、父の右手をぐつと固く握つて、後へ少し捻ぢ上げるやうにしながら、父の左手を無理に掬ひながら、ぐるぐるとその兩手をつりてで捲きつけて了つた。

「お父さん暫らく休んで下さい。土藏に奇麗な茣蓙を敷きましたから、あそこで暫らく休んで下さい。あなたが落ちつかれたらいくらでもお酒を持つて行きますから。」

甲吉はこれまでに張り上げたこともないやうな大きな聲で、父の耳元へ口を寄せるやうにしながら、全身を顫はして父に頼み入るやうに叫びながら、遂には嗚咽するのであつた。祖母や皆もしくしくと泣き始めた。父は甲吉の意外に大きな聲に魂消たやうに、氣味惡く凄いほど澄んだ眼を睜つたが、

「さうか、さうか。」

と俄に溫順しくして、廊下の襖づたひに靜かに土藏へ押されて行つた。

土藏の中には、父が寢ようと思へば何時でも寢られるやうに寢床が敷かれた。甲吉は薄暗いそしてひんやりとした土藏に入つて來ると、父の手を捲いたつりてを解いて、父を寢かせようとした。祖母達みんなが蹤いて來たが、

「お前だけはこゝに居てくれ。」

父は恐ろしい澄んだ眼付をして、正氣のやうに繼母にかう言つた。しかし甲吉は或危險を感じたので、繼母も皆も先に出して、自分は一番後から土藏を出ると、靜かに開戸を閉めて了つた。

「お前と甲吉は、……お前と甲吉は……。」

父は恐ろしさに堪へないやうに、繼母と甲吉に懸けた疑惑の幻覺に追跡せられてでもゐるやうな聲で、咽喉を顫はせながら、わざ〱かう言ふのだ。

父のかうした聲を殘して、土藏の開戸をぴつしやりと閉めて了つた瞬間、ふと甲吉に一つの暗い反省が閃くやうに落ちて來た。彼と繼母を壓した父のこれまでの疑惑の全部が、もし間違ひもなく單に父の病氣の所爲だつたとすると、さうした病氣の父を劬はるよりも先に、それを眞にうけてあれまでの父を憤つた自分の心の愚かさが、今こそ全くさうした病氣の父にどんなに詫びても追つつかない濟まなさが感じられるのであつた。甲吉は激しい悔恨に胸が煮え返つた。だがまた父は酒を飲まないでも、不斷彼が見ては極く平靜な時でも、彼に其疑ひを懸けてゐたのを思ふと、それをまでが父の病氣の所爲だつたとは、どうも思ひ切れなかつた。それをまで父の病氣の所爲と言ひ得ようか、——甲吉は何處までが父の正氣から出る疑惑で、何處から父の病氣から來るその疑惑なのか、父の正氣と病氣の境目が、考へれば考へるほど頭が煮えるやうで全く解からなくなつた。甲吉は自分ももはや父のやうに狂つて來てゐるのではないかと思ふと、飛び上りたいやうな恐怖を感じた。

けれども結局また甲吉は深い悔恨に胸を突かれるのだ。もし世間のさうした人々、例へば酷い嫉妬をしたり、その結果深い疑惑に陥つたり、さうした人々を皆或種の病人と呼ぶことが出來るなれば、父は飽くまでもこの種の氣の毒な患者であつた。而もその父の上には剩へ、酒といふ痲藥がかけられてあるのだ。それを自分が劬はることをしないで、如何にあられもない疑惑とはいへ本氣で憤慨せねばならなかつたとは、何といふ悲しいことであらう。彼はさうした世間の人々を憤ることが出來ないやうにまた父に對してもちよつとも憤る理由がないやうに思ふのだ。甲吉は父に對する不幸な悔恨で一層強く心を打たれたが、今の場合父のなすがまゝに、自由に放つて置くことが出來ないで、父を劬はる最良の方法として、その自由を剝奪するために、かうした處置をとらねばならないこととは——。

彼は父を監禁した土藏の扉の前に立ちながら、薄暗い床板の上に無心に横はつてゐる父を、心の中で幾度も拜んだのだ。

甲吉の眼には止度もない涙があとからあとから湧き上つて來た。（大正九年九月）



或る海邊の町

廣津和郎

雨と風とが大分はげしくなつて來た。父と母とがゐる病院は、そこから五丁ばかり離れたところの直ぐ海沿ひにあるので、少し心配になつて來た。海からは少し高く築地が出來て、その上に病院は立つてゐるのであるから、若し嵐になつても、そこまでは海水は來ないだらうと思つたが、それでもかなりに心配になつた。

十時頃だつた。田舍の十時だから、もう隨分夜が更けた感じがしてゐる。私は此土地で昔はかなりの豪家で、鰹船を何艘とか持つてゐたが、今は大分零落してゐる、併しそれでも尙有力な家の一つたるを失はない或家の表の八疊座敷を借りて、そこに住んでゐたのだが、もう家の者達はすつかり寢てしまつて、奧の方は暗くて寂然(しん)としてゐる。机に向つて、電燈のない土地なので、吊ランプの薄暗い光で、その時分の私の一家の生活のもとである外國小說の飜譯をしてゐたが、少しも氣が乘らず、何となく外の雨風が氣になつてゐた。波の音も隨分はげしく聞える。

一つは父や母についての心配から、一つはさうやつて一人机に向つてゐる事の淋しさと所在なさとから、私は病院まで行つて見ようかと思つて立上つた。

音のしないやうに玄關に出て行つて、下駄を穿いて、手索りに傘を探しながら、

外を見ると、眞つ暗だ。眞つ暗の中を雨と風とが烈しく荒れてゐる。此眞つ暗の中を海邊の道を通つて行く事は考へても一寸難儀だ。おまけに病院の直ぐ手前には一二間幅の溝川が流れてゐる。そこの橋はかなり狹くてあぶなつかしい。そんな考が一寸出かけるのを臆劫に思はせても來た。多分嵐にはなるまい。この位の事で終るだらう。だから、止めにしよう。そんな事を考へて、併し尙躊躇しながら佇んでゐると、その玄關――玄關と云つても田舍風の大きな土間だが――の向う側の開が明いて、そこからさつと燈火が土間に射して來た。

『あ、あなたでしたか。音がしたものですから、一寸來て見たのですが』さう云つてその開のところに一人の男が立つて私に聲をかけた。それは私の父や母の入つてゐる病院の若い醫者なので、N市の醫專出で、副院長と云つたやうな形で、此病院にやつて來てゐるのだ。そして私と同じ家の、その玄關の向う側の開から入つて行くやうになつてゐる八疊と六疊との離室を借りて、そこに若い細君と二人で住んでゐるのだ。彼は私が下駄を穿いて傘を持つてゐるのを見ると

『此降に何處へか御出かけですか？』と吃驚したやうに訊いた。

『病院まで一寸行つて來ようと思ひまして』

『病院に？……何か御急用ですか？』

『いゝえ、別に用はないのですが。……雨風が少し烈しいからどうかと思ひまして』

『あ、そんな御心配ですか？　そんなら大丈夫ですよ。この位な事なら、あの病院は安全なものですよ。――あなたは未だ來ていらつしやらなかつたから御存知ないでせうが、この間、かなりひどい嵐があつたのですよ。併しどうもありませんでした。――今夜位の事は、始終あるのですから、何でもありやしませんよ。……それよりどうです、私も先刻から退屈で歸つてゐるのですが、私の部屋にいらつしやいませんか？』

『それぢやお邪魔に上りませう』と私もその氣になつて、云はれるまゝに彼の後から彼の離室に入つて行つた。――私は此家に來てから十日程になるが、彼の部屋に行つたのはその時が初めてゞあつた。

彼は學生氣の未だ拔け切らない、何處か親がかりの坊つちやんと云つたやうなところのある、大柄な、鼻の下にちよびと八字髭を生やした無邪氣な男であつた。未だ醫專を出てから一年程しか經たないと云ふ事であつた。細君は名古屋タイプのかなり綺麗な人であつたが、その言葉つきや物ごしの也をはづれた莫迦丁寧さが、却つて不自然で、今まで素人でなかつた女が、急に素人になつたので、使ひ馴れない言葉や禮儀を一生懸命に使つてゐるのだと云ふ事が、あけすけに見えてゐた。私は病院の看護婦達の噂によつて、彼女が名古屋で藝妓だつた事や、この若い醫者が彼女と一緒になるのを親が許さないために、彼女をつれて此汽車の線路から六七里もあるやうな淋しい海邊の町に來てゐるのだと云ふ事などを前から知つてゐた。——併し少し話してゐる中に、此若い夫婦が頗る人の好い、深切な、感じのいゝ人達である事が解つて來た。私はかうして此部屋に入つて來た事が、惡くはなかつたと思つた。

彼は私とのする話は取留めがなかつた。彼も私も學校生活を了へて間もないので、話題は大概學生時分の事に向けられて行つた。野球とかテニスとか、學生時分の腕白とか、いたづらとか……

「併し隨分退屈でせうね、此土地は？」中學時分に野球の選手だつたと云ふ彼の嚴丈な身體を見ながら私は訊いた。——實際此土地には何もなかつたのだ。晝間は病院に行つてゐるから氣が紛れるだらうが、夕方病院から歸つて來ると彼は此離室に細君とたつた二人きりになるのだ。見たところ、彼はこつこつ何かを研究すると云ふタイプの人ではないらしい。部屋の片隅の本箱に、多分醫者の方の專門書らしい洋書がほんの申譯に二三冊入つてゐるが、併しそれは病院から歸つて來てから、こつこつ讀まうと云ふやうな人ではないらしい。……若い健康を持ち、都會のいろいろの生活に馴れてゐながら、かうしたところに引つ込んでゐる事の堪らなさが、人事ながら、妙に私に實感的に迫つて來た。一年二年……とこんなところに、此綺麗な、正直で善良だけれども、頗る無智らしい細君と引つ込んでゐる生活……考へたゞけでも私にはやり切れないと思はれたのだ。

「ええ、隨分退屈ですよ」と彼は答へた。けれども、彼の幸福らしい、神經のいらいらする事などのないらしい顏は。—

同じ退屈を感じてゐるにしても、若し私だつたらと思つて今想像したやうな苛立たしい退屈は感じてゐないらしくもあつた。何處かもつとのんびりして、それ程物事が不服ではないらしく思はれた。

『それで僕、近頃水彩畫を時々描いてゐるのですがね、あなたに一つ見て頂きませうか？』彼はこんな風に云つて、机の抽斗から幾枚もの繪を持つて來たりした。――この邊の風景が、中學校の手本から學んだ手法そのままの幼稚な表現で、いろいろに描いてあつた。勿論下手なものだつた。

一時間ばかりそんな風にして、彼の部屋で話し込んでゐた。外には雨風の音が、さつきよりも烈しくなりはしないが併し尙引續きに荒れてゐた。その時、とんとんと此家の門の戸を叩く音が聞えたのだ。

『Ｏ先生、Ｏ先生！』から云ふ聲が、戸を叩く合間に、雨風の音に混つて聞えた。皺嗄れた老婆らしい聲であつた。Ｏ先生とは此若い醫者の苗字なのだ。

『ちえッ！』と醫者は舌打した。『又杉田のところからだらう！』

さう云つて、彼は眉をしかめて、細君の顏を見たが、仕方がなささうに立上つて、玄關口に出て行つた。門の門を開ける音がして、彼が來訪者と何か二言三言話してゐるのが聞えた。が、續いて、『ぢや、今直ぐ行くから』もう少し高い聲で云つて、彼は私達の方へ引つ返して來た。――彼はぷりぷり怒つたやうな顏をしてゐた。

『來て呉れと云ふんですか？』と細君が訊いた。

『ああ、容態が變になつて來たと云ふんだ！』

『杉田と云ふと、たしかあの神戸の高商を途中で退めたとか云ふ人でしたね』と私は云つた。

『さうです、あの男です。先日から三日に一度ぐらゐづつああして、危篤だと云つてやつて來るのですがね。妙に根强い男で、不思議に保つのですよ。――あんなひどい病人はこの海岸中にもたつた一人しかゐないのですのにね。何しろ肺臟がすつかりやられてゐるばかりでなく、殆んど全身に結核がまはつてゐるのに、どうして保つてゐるのか、我々にも

解らないのですよ。……癒る見込などは到底ないのですよ。』と醫者は忌々しさうに私を顧みて云つた。

彼の顏にあらはに浮んでゐる不快が、私の輕い反感を誘ふた。勿論彼が醫者であるにしたところが、こんなに風雨のはげしい晩に、到底癒る見込のない病人に一時の手當をしに行く事は、さう愉快な事ではないに違ひない。ましてその病人はもう疾うに死を宣告されてゐて、何度も何度も危篤狀態に陷つては、それが妙に取留めると云ふのであるから、その危篤と云ふ事も、最早新しい刺戟を醫者に與へないのも無理はない。併しさう云ふやうに考へても彼の冷淡さが、醫者としては似合はしからぬやうに私には思はれたのであつた ——それには こんなやうな記憶も手傳つてゐた。と云ふのは、今から十日前、丁度私が此海邊に東京から來たその晩であつた。私はその晩は未だ今の部屋が借りてなかつたので、病院で父や母と枕を並べて寢てゐた。その晩、二階の患者に附添ひに來てゐた一人の老婆が死んだのである。それは丁度その頃、此海邊の町に祭があつた。それで方々からいろ〳〵なものを貰つたのを、老婆は無暗に食べ過ぎてはげしい下痢を引起したのであつた。私は初めて來た晩の輕い昂奮のために、その晩は妙に眠られなかつた。それで夜通しその老婆が唸つて苦しんでゐるのを聞いた。それだのに、病院の看護婦や藥局生達は、その老婆の唸り聲に眼をさましさへしなかつた。いや、眼をさましても、その老婆の部屋まで見に行く深切氣を誰も起さなかつたのであつた。——私はその唸り聲を聞きながらも、まさか彼女が死にかけてゐるのだとは知らなかつたが翌朝人々が眼をさました時、彼女は死んでゐたのだ。『急性腸加答兒』と云ふ病名が後でつけられたが、併しその老婆は病院に來てゐながら、醫者の診察も受けず看護婦の看護も受けず、一杯の藥も飮まず、一人で苦しみ悶へて死んで行つたのであつた。

その時私は病院のかうした冷淡さに腹が立つた。そしてそれが今思ひ出されて、O醫師の死にかけてゐる肺病患者に對する冷たさが、妙に私の反感を誘つて來たのだ。

併し私は勿論そんな感じを面には表さなかつた。

『それは隨分御苦勞ですね』こんな風に彼に向つて云つたのだ。

若い醫者が玄關から出て行くのを見送つて、彼の細君に『お休みなさい』と云つて、そして私は自分の部屋に歸つて來た。

外には相變らず風雨の音が烈しく聞えてゐる。私は又机に向つたが、やはり氣が進まないので、そのまま寢床に入つて、今O醫師が見舞に行つた危篤だと云ふ杉田の事だの、此海沿ひの町に來てゐる他の肺病患者達の事だのを、取留めなく考へてゐた。杉田と云ふ青年を私はたつた一度見た事があつた。そして彼の事がその時から、妙に私の頭に殘つてゐたのである。

それは今から二ケ月ばかり前、丁度六月時分だつたが、その時分私は父を見舞ひに此海岸に二三日來てゐた事があつた。或朝、天氣の好い日に父と一緒に病院の緣側に腰をかけて話してゐると、

『ほれ、あすこに歩いてゐるだらう。あの男は神戸だか大阪だかの高商を中途まで行つたが、可愛さうに病氣になつて此海岸に來てゐるんだよ』さう云つて、父が右手の一丁ほど離れた汀に歩いてゐる一人の青年を指さした。――病院には庭もなく、垣根もないので、我々が腰かけてゐる前の砂濱は、そのまますつと此町の海岸の何處とも續いてゐるのである。――その青年は遠くから見ても、ひよろりと瘠せて、身長が高くて、六月だと云ふのにフラネルだかセルだかの上に、袷羽織を著てゐた。そして一本の杖にすがつて、のろりのろりと歩いてゐる恰好が、ほんたうに賴りなく哀れげに見えた。

『あんな事をして、外など歩いてゐては、ほんたうはよくないんだらうがね』と父は眉をしかめながら云つた。『あの男は肺師かばりでなく、全身結核なんださうだからね。――關節も睾丸でも全部結核菌に襲はれてゐるんださうだからね――あれでよく保つてゐると云つて、醫者達が不思議に思つてゐるんだよ』

その青年は少し歩いては休み、少し歩いては休みしながら、次第に病院の方へ近づいて來た。そして彼が直ぐ間近に近づいて來た時見ると、遠くで見た時よりも尙一層瘠せてゐて、頰がこけ、眼が凹み、色が透明るやうに弱々しい白色

を呈してゐて、實際何とも云へない氣味の惡い顔付をしてゐた。

それでも、さういふ病人とは思はれないやうな、明るい、快活な調子で、

「今日は。——今日は大變よく霽れましたね」と私の父に聲をかけた。

「好い天氣ですね。——併しあなたはさう運動はなさらん方がいいでせうに」と父が心配さうに云つた。

「いや、もう、退屈なもんですから」と青年は事もなげに、快活に答へて、そして私の方をちらりと見ながら、「東京からお客樣なんですか？」

「ええ、伜が來てゐるのです」

「はあ、御子息さんが。——それではあの「××」を翻譯なすつた方ですね。Kさんと被仰るんでせう。——僕はあの「××」を御譯で愛讀したものですよ」

私がその頃「××」と云ふフランス作家の小説を翻譯してゐた事はほんたうだつた。私は自分が何か云はなければならないやうに强ひられる氣がしたが、併し彼の調子が餘りに馴々しくて、そして何處かに、私よりも年が若い筈の彼の言葉つきに、まるで老人のやうに思ふ事をどんどん無遠慮に云ふと云つたやうな、抑制のなさ過ぎる、乾いた感じがあつたので、私はついて口を開く氣がせずにしまつた。——それは勿論反感でも何でもなかつた。が、病氣で瘠せほうけてゐる青年には、又時々は少年にすら、そのものごしや言葉に、非常に老人らしいところのあるものがよくあるものである。その老人らしさが、或距離を私の心に彼に對して感じさせたのである。

やがて、その青年が、再び杖を賴りにして、もと來た方へ引つ返して行つてしまふと、父は後から見ると殊にひよろひよろしてゐて、死そのものゝやうに見える彼の姿を見送りながら、

「氣の毒な男だね。お前のやうな自分と同年配の人を見ると、非常になつかしがつて話しかけたがるんだよ。——併しお前のやうな健康體のものは、まあなるたけあゝ云ふひどい病人は避けるやうにしなければならない」と云つた。

それから父は杉田が如何に家人に對して我儘な病人であるかと云ふ事や、彼が西洋料理を食べたくなると、此處から十何里も離れた名古屋まで、飛脚に取らせにやる事や、そしてそれも汽車の通つてゐるのは三分の二ばかりの間なので殘りの六里以上の間を、飛脚が手に持つて搬んで來なければならないと云ふ事や、そんな事を話した。

「そしてあゝ云ふ病人で、而も若い男は、頭の中に性的の問題ばかりが考へられると見えるんだね。看護婦などを摑まへて、朝から晩まで、さういふ方面の事ばかりを喋つてゐるさうだよ」そんな事も父は話して聞かせた。――そして聞けば聞く程、この若い病人が、私には氣の毒に思へて來た。

私は唯一度、而も一寸の間見た杉田の顔や姿を思ひ出しながら、此風雨と瀕死の彼との事を、何か關係でもありさうに、ぼんやり寢床の中で考へてゐた。

翌朝は早く眼が覺めた。と云ふよりも、私は近頃不眠症に罹つてゐるので、ほんたうの熟睡はなかなか出來ないのであつた。とろ〳〵とまどろむだかと思ふと、直ぐ眼がさめてしまふと云つた具合で、自分でも眠つたのか眠らないのか解らないやうな氣がする事が多いのである。――朝の光が戸の隙間から洩れてゐるのに氣がついた時、耳を聳てると、雨の音も風の音もすつかり止んでゐて聞えなかつた。

私は起き上つて、雨戸を開けると、空は氣持よく霽れてゐた。私は早速外に出かけて行つた。――細い横丁を半丁ほど行くと、直ぐ濱に出るのだ。朝日が昇つて間もなくなので眼の前の渥美半島の低いうねうねした山々の頭は、霧のしぶきのやうな日光の下に、その輪郭が朧ろに崩れて見えた。海は昨夜の名殘で、未だ波が相當に高かつたが、併し空氣は澄み切つて、一里から二里ばかり沖にあるS島その他の島々が、はつきり見えた。

父と母とのゐる病院は、そこから左手の方へ二丁餘はなれた海邊に立つてゐるが、木造の粗末な建物の戸は、未だ悉く閉つてゐた。無論昨夜のあれで、別條があつた樣子は少しもなかつた。東に面した濡れた雨戸が、朝日を受けてうす赤く光つてゐた。

私は自分だけ百姓屋の一室を借りてゐるが、飯は三度三度病院まで食べに行く事になつてゐた。そして朝飯を食べに行く前に、毎朝海邊を少しく散歩するのが例であつた。――私は右手の方の明神のある小さな岬の方へ昨夜の雨で濡れてじゆくじゆくしてゐる砂の上を、歩いて行つた。その明神の鼻まで行く間の海岸には、二室か三間ぐらゐの小さな家が、少しづつの距離を置いては、六七軒建つてゐた。それ等はみんな肺病の療養に來てゐる患者達の家なのである。――杉田の家もその中にあつたが、併しそれは路から少し右手に勾配を上つたところに引つ込んでゐた。――私はその家々にどんな患者が住んでゐるかを、朝夕の散歩の時に見て大概知つてゐた。

ある家には、若い男女が住んでゐた。男は未だやつと二十二三位で、眼鼻立の整つた、美しい顔をしてゐた。中學を出たばかりで、直ぐ發病したので、此海岸に來たのであるが、それの世話について來て居た若い下女と關係してしまつて、今では離れられずに、二人は夫婦のやうにそこに住んでゐるのである。――『女から離れなければ、長持はしません』から醫者達は云つてゐるさうである。――併しその若い下女は、下女と云つても何處かに品のある、眞面目な顔をした女であるが、始終甲斐々々しく働いて、男の看護や、煮焚きの仕事を、他の見る眼にも感心させられる程、一生懸命にやつてゐた。――私は此二人の男女が、人々から嘲笑の的とされてゐるにも拘らず、心ひそかに好感を持つてゐた。

ある家には、四十五六の、昔何處かの技師をしてゐたといふ男が、細君と二人の子供と一緒に住んでゐた。彼は毎朝早く海に行つて水浴をしてゐた。夏からだんだんに馴らして行つて、今では冬になつても、その習慣を止めないさうである。そして此抵抗療法のために、彼はもう病氣が殆んど全快したと云はれてゐる。――私は毎朝、彼が水浴をしてゐる時分に、よくこんな海邊を歩くので、いつの間にか、會釋するまでになつてゐた。

その朝も、丁度私が彼の家の前を通つた時、彼が家から出て來たのに、ぱつたり出會つた。『お早う』と彼は云つた。私もそれに禮を返して、そして明神の鼻の方へ歩いて行つた。

そこは此渥美灣と伊勢灣との間に突き出てゐる半島の、その又一番突つ鼻の小さな岬となつてゐるのであつた。――

そこには少し小高い丘陵があつて、松の大木などが生えてゐる。私はそこに昇つて行つた。その上の眺望は、此海岸の中で、最も私の好んでゐるものであつた。自分の立つてゐるその岬を境にして、左手には湖水のやうな渥美灣が擴がり右手には太洋と潮の行き逅つてゐる伊勢灣が擴がつてゐる。左手の海が穏かなのに引換へて、右手の海は白い波頭をいくつも沖の方に並べながら、荒れ狂つてゐる。そして伊勢半嶋の嶋々は、此海の上の水蒸氣のためか、灰色に煙つて見えた、

私はそこで、此大きな海の景色を眺めながら、四五度深呼吸をした。そしてそこから下りて來た。

そろそろと汀線に沿うて、今來た道を引つ返して來ると、杉田の家の門から、一人の男の姿が現れた。がつしりした大柄な恰好で、私はそれがO醫師である事を直ぐに氣がついた。——私は彼に向つて、挨拶のつもりで、手を上げて見た。彼の方でもそれに應へ手を上げた。そして彼はそこに立止つて、私の近づいて行くのを待つてゐた。

『お早う』と私は近づくと云つた。

『お早う』と彼も直ぐにそれに應じた。

『昨晩あれからずつとお歸りにならなかつたのですか？』と私は彼と並んで立ちながら訊いた。

『ええ、ずつと徹夜でした。——そして今し方、たうとう息を引取りましたよ』

『えツ、たうとう？』

『さうです』と云ふやうに、彼はうなづいて見せて、そして淋しく笑つた。

私達は默つて並んで歩き出した。

『併し、實際によく保ちましたよ。——今まで持つたのが、ほんとうに不思議ですよ』Oはかう云つて、非常に疲れたやうに、頭を右の手でこつこつと叩いた。——併し流石に昨夜のやうな冷淡なところは、今は此醫者の樣子にはなかつた。

私達の百姓家の方へ曲る角まで來て、私は彼と別れた。——私は杉田がたうとう死んだと云ふ事が、特に悲しいとも淋しいとも思はなかつたが、併し心は何となくしめやかだつた。私は何か考へに耽つてゐると云つたやうに、俯向き加減に頭を振りながら、父や母のゐる病院の方へ歩いて行つた。

病院の雨戸は、その時はもうすつかり開け放されてゐた。（九九）



歸去來

宇野浩二

一

此處に二三人の友達が集まつた時、四方山の話の末に第三者の噂が出たのである。「鶴丸退藏はどうしてゐるだらう？」「どうしてるかね、退藏の奴……」と鶴丸退藏の噂はそれ以上に發展しなかつた。「乙骨三作に暫く會はないが、君は？」「會はないね、相變らず毎日本でも讀んでるんだらう、退屈なことだらうね。」「ところが、彼は退屈つてどんなものだか知らないと言つてるさうだよ。」「僕等から見ると怪物だね。」「ハハハハ、」「ハハハハ、」とそれで乙骨三作の噂も終るのである。「時に、島木島吉はどうしたか知ら？」「何でも男爵の家に家庭敎師に住込んでるといふことだよ。」「拔け目のない男だから、又うまく人々を瞞着してゐるだらう。」と島木島吉の話もそれ切りで、「土屋精一郎は……？」と次に誰かゞ言ひ出すと、「よせ〳〵、俺は彼のことを考へると不愉快だから……。」と土屋精一郎の噂は一言でもみ消されてしまつた。由來、人の名前なんて變なもので、それは元を正すと單に親や先祖が符牒の代りに附けたものに過ぎないのだが、一旦附けられて定つて見ると、最早や彼の

頭と同じく拔きさしならぬものとなるのである。ところで、理屈は拔きにして、名前とその本體とが全然違つた功果を與へることがあるのを諸君は知つてゐるだらう、例へば今の噂の土屋精一郎君の場合がそれである、彼の噂はいつでもこんなにひどくはなくても、大抵惡口で終始されるか、さうでなければ抹殺されるのが常なのである、それにも拘らず彼自身が人々の前に現れると、その圓轉滑脫な交際振りのために、人々は彼がそこにゐる間は大いに笑はされ、大に御馳走され、時の過ぎるのを忘れさせられる位なのである、ところで又無論その反對の人もあるのである。それは例へば私がこれから話さうとする厨戶朝生君の場合である。

「厨戶朝生、」と言ふと、彼を知つてゐる人なら、誰だつて輕い、快い笑の影を頰に浮かべるのである、それは何も輕蔑――幾分それが混つていないとは斷言出來ないが、しかし頭から輕蔑してゞはないのである、さうかと言つて非常に愉快になつて、無論笑ふ位だから可笑しさを感じるのは事實であるが、腹の底から愉快になつて笑ふと言ふ譯でもない、が、兎に角我々の友達の中でこの男に不快な感じを抱く者は一人だつてないことは確である。それでゐて本人に會つて見ると、話などが少しくど過ぎて、する事が馬鹿正直で、どうかすると幾分か愚に見えるやうなこともあつて、到底公衆の中に『これは自分の友達だ』と言つて手を取つて這入つて行けないやうなこともあるので、多少眉を顰める友達もあるのだが、離れて噂をする時はひどく人々に一種の快感を與へる、人德見たいなものを持つてゐる男なのであつた。

一口に言ふと、砲兵のやうに體が大きくて、色が黑くて、そして吃音で、さういふ風格の人物にあり勝な極く善良なこの山梨縣生れの畫學生は、從つてその物の考へ方も亦砲兵のやうに正直で、善良で、そして小心で、されば又臆病者であつたさうだ。砲兵と言ふと、彼は今から數年前に鄕里で中學校を卒業した後、一年餘りそこで小學校の代用敎員を勤めてから、やうやくの思で山梨縣から上京して來たところで、それから三ヶ月目に東京で徵兵檢査を受けて、實際に砲兵にとられたのである、だから愈よ彼が長年の望でやつた洋畫の研究を始めたのは、その三年間の砲兵の勤務を終つてから

のことなのであつた。彼は兵役を濟ますと、早速小石川の繪畫研究所に這入つて、毎日兵隊であつた時のやうに勤勉に畫の稽古を勵んだものであるが、這入つた日の翌日だつたか、早速外の學生に『砲兵』といふ綽名を附けられたものである、すると彼はその四角な、大きな顏の要所に附いてゐる、その六尺近い體の玄關であり、又主人であるところの、だが如何にもそれを支配し兼ねて見えるその小さな、光の鈍い目に、善良な愛想笑を浮かべながら、「さうかな、や、や、やつぱり砲兵に見えるかな？ ちや、諸君、」と吃りながら言つて、突然直立不動の姿勢をとつて、失敬と言つてその熊のやうな手で擧手の禮の恰好をしたものである。神よ、斯くの如き我々の正直な、無邪氣な友達に汝の廣大無邊な慈悲を垂れ給へ！

だが、神樣は何をうか〳〵として彼の日を暮してゐるのだらう？ 彼が三年の間大砲や馬を友達にして國家への奉公を濟まして、愈よ長年の望の仕事を始めてから六年も經つのに、その間に彼は唯一度だつて幸福どころか、その兄弟にも子分にも見舞はれたことはないのであつた。加ふるに、これだけは十二分に神樣から惠まれた健康な體を彼は牛馬のやうに驅うつて、明けても暮れても畫をかいてゐたのであるが、それが又一寸も進歩しないのである、のみならず、小心で、規丁面な性質の彼は、年を經るうちに幾分か馴れはしたが、放膽な、かと思ふと無茶苦茶に神經質な、だらしのない多くの美術學生たちに脅かされることが一方ならぬのである。例へば彼が研究所に行くのにいつも最寄の菓子屋でジャム附きの半斤の食麵麭を晝飯の代りに持つて行つて、小使の爺の出してくれる出鱈目の木の葉を煎じたやうな茶で十分滿足してそれを食ふのである、外の學生たちがどうかすると表のミルク・ホールに行くのに誘つても、今日は一つ別嬪のモデルが來た祝に親子丼をみんなで取つて食はうと勸められても、彼は決してその仲間入をしないものだから、それだけの事で隨分と彼を輕蔑する者があるのである、ところがさういふ種類の人間に限つて、「おい、厨戸君、明日返すから一寸五拾錢貸してくれないか、」と言つて、引奪るやうにして借りて行つて、明日は愚か明後日になつても月末になつても返さないのである、そして催促すると輕蔑したやうに嗤ふのである。

始めは、なる程藝術などに心を込めようと言ふ者は、そんな風でなければいけないのかな、正直な男だけに彼は眞面目に考へたものである、借りた金は返さず、約束などは屢々反古にし、なるべく夜更かしをして、稽古を怠り、健康を害し、等、等と、言はゞ普通の人間の是とすることと反對の事をしなければ、全く藝術家になる資格がないのかな？ 俺は人に金を借りる事が嫌ひ、約束を違へるのは嫌ひ、どうも上達しないから躍起になつて稽古を勵む、健康は生れつきで此上なく達者だから夜眠れないやうな事は一年中に一度もない、俺はやつぱり藝術家を志願する資格がないのかな？ と厨戸朝生はまる三年の間幾度この考に悩まされたか知れない。「を、を、をれは駄目かな？」と彼は持前の愛嬌のある吃り言葉で屢々言つたものである。「俺の繪はまづいな、俺が自分でまづいと思ふ位だからな、やつぱり君たちが見てもまづいだらうな？ どうだはつきり言つてくれ、厨戸朝生の繪は見込がないか？ 俺の繪のどういふところが拙い？ どこがどうと言へない程、全體がいけないんだらうな？」

すると、腕白な、出鱈目な、彼の友達も、何と言つても、皆根は正直な者たちであるから、「まあさう言つたもんぢやないよ、」「珈琲でも飲みに行かうか？」「此間外國から歸つて來た岡部長四郎の展覽會を今日見て來たが、まんまり感心しないね、」などと色々と別の話に接ぎかへてしまふのである、すると、どうかすると、「さうごまかすなよ、」と厨戸朝生はその善良な顔に寂しさうな笑顔を浮かべながら、吃音者らしい聲の調子で言ふのである、「はつきり言つてくれよ佐々田四萬、君はどう思ふ？」などと弱い音の言葉でつゞけるのである、「さあ……」「ねえ、……」などと尋ねられた相手は困つたやうな笑ひを浮かべながら困つたやうな答をするのである、「やあ、困つたらうな、困るだらうな、失敬、々々、厨戸朝生は時々困つたことを言つて困らせるな……」と言つて、笑ひ聲の立たない笑ひ方をするのである。

大體、そんな風に、心が弱くて、柔順な男なのであるが、いつとなく彼にも、如何に藝術家でも、やつぱり百姓や軍人と同じやうに、借りた金を返さないことや、約束を反古にすることや、健康を害することは、決して讃めるべきことではなく、悪いことに違いない、と言ふ確信を抱くやうになつた、それには彼が小石川の研究所を、そこに二年餘り通つ

たのを止めて、その間に美術學校の入學試驗を二度受けて落第して、又二年ばかりぶら〳〵と下宿住居をした後、つまり彼が繪畫の研究に身を委ねてから五年目の或秋のことだつたが、彼の同鄕の先輩の畫家、折谷市郎に會つたのが、重要な原因をなしてゐるのである。

厨戸朝生が如何に砲兵のやうに善良で、正直で、そして才分を惠まれなかつた畫家であるかといふことは、これ迄の話で大凡諸君も見たことであらうと思ふ、だか又彼が決して眞底から無考へな、愚な徹頭徹尾の惡い人物ではないといふことも併せて考られることだと思ふ。さて、今言つた或秋のことである。彼は或人から貰つた折谷市郎に宛てた紹介文を認めた名札を持つて、町を歩いてゐたのである。折谷市郎といふと、彼が中學二三年の頃始めて行く行くは畫家にならうと志を立てた時分に、既に同鄕の先輩で町の文房具店などにも折谷市郎先生作と書いた袋に這入つた水彩畫の繪葉書に依つてその名を覺えた人である、彼はその繪葉書を買つて來て、それを手本にしては一生懸命に習つたものだつた、繪の隅の方に丸に市の字を英字のやうな恰好にくづした落款さへ、彼には何と懐しく見えて、彼も亦自分の名の頭字の朝といふ字を、色々と苦心の末、先づ草書にして、改めて英字のやうな恰好にくづして、それを丸の中に入れて自分の幼い畫の落款にしたことである、自分の畫が版になつて、それが繪葉書に刷られて町に賣り出されるなんて、何といふ素晴らしい事であらう、それは無論山梨縣の或町だけではなく、東京はおろか、日本全國に廣がつてゐるのに違ひない、あゝ！　と思つて、中學生の厨戸朝生は感激の時を久しうしたものであつた。やがて、大人になつて、東京の畫壇の消息にも一通り通じて見ると、何の事だ！　彼が少年の頃あれ程崇拜してゐた畫家は寧ろ畫界の落伍者の一人で、今は漸く一部の畫界の歷史や消息に通じてゐる畫學生の仲間に、その名を辛うじて知られてゐるだけの不遇な老畫家に過ぎないことを知つた、彼等の言ふところに依ると、彼は年毎の官營の展覽會に缺かさず出品はするのであるが、厨戸朝生が中學時代の頃にたつた一度入選した外、その頃例の水彩畫の繪葉書が出版されたのであらう、以來一度もその會場に陳列されたことはないとのことであつた。さういふ種類の畫家の數を數へたなら、濱の眞砂と盡きぬであらう、

だが、さういふ事情に悉く通じた今になつて見ても、厨戸朝生にはやつぱり折谷市郎といふ名前だけは何となく懐しく聞えるのである、のみならず、丁度その年の秋の官展に市郎の畫が十何年振りに入選したのである。厨戸朝生は、彼自身も密かに一枚出品して見たのであるが、無論それは落選したことだが、彼は市郎の當選を我事のやうに喜んだ。唯、困つたことには、丁度その頃のこと、さう大して裕福でない故郷の家から、この秋限りもう仕送りは出來ないと脅して來てゐたことである。朝生は、そこで、若しその秋の官展に自分の畫が當選したら、そしたら何とか理屈がついて、仕送りもつゞけて貰へるだらうし、或ひは少しづゝでも畫の注文が來るかも知れない、と望ないこととは思ひながら望をかけてゐたのであるが、それがすつかり外れて見ると、今迄さへ僅な仕送りの金だつた爲に、一方ならず困つてゐたのに、一文も送られないとなると、人の七倍も小心で臆病な彼は、あらゆる疾病に對するよりも恐怖で眞蒼になつたのである。そこで、彼はあらゆる傳手を求めて、生活の資を得る道を探し始めた、そして彼は今或人から、偶然に折谷市郎は色んな内職をしてゐるから、その人に紹介して上げやう、と言はれて、紹介の名札を貰つた次第である。

芝の愛宕下町で電車を下りて、彼は尋ねる家を探すのに大方三十分も時間を費して、さて蜘蛛の巣のやうにごぢやごぢやした裏町の、見すぼらしい格子造りの家の一つに、今となつても何となく崇拝してゐる折谷市郎の名を見出した時には、何とも言へぬ幻滅の感じに襲はれた、當年の水彩畫の繪葉書の落款に、丸に市の字を歐字風にくづした面影はどこにもなくて、貧弱な名札に、而もその左の隅には前にゐた住所でも刷り込んであるものと見えて、墨で一筋に消した跡があるのを、入口の頭の上に張り付けてあるのである。それでも厨戸朝生は先輩の名家に會ふ時の臆病さで、吃音者特有の不鮮明な發音で、御免下さい、と呼ぶと、「はい、」と案外近くに答へる男の聲がして、あ、あれが折谷市郎だな、と思ふ間もなく、がらりと玄關の破れた障子が開いて、背のひよろ高い、青黒い色の顔が可成り右の方に傾いて首の座に乘つてゐる、目尻の下つた、しかし何處となく美術家らしい男が現れたが、訪問者を見ると訝しさうに「どなつたです?」と言つた。

「わ、わ、わ、わ、私、」とさういふ場合には不斷は大抵おさまつてゐる吃りが必ず出るのであるが、今も案の上そんな風に眞赤になつて吃りながら、厨戸朝生は「私はこ、こ、こんな者です、」と紹介文を認めた名札を出したのである。

早速、玄關の二疊の間を通り越して、がらんとして何一つ道具らしいものが置いてないので、廣々として見える六疊の間に、しかし石版刷りのビラ繪のやうなものや、畫稿の反古のやうなもので足の踏所もない程散らかつてゐる奥の間に通されたが、やがて相手が吃音ではないが、朝生にも匹敵する程の不明瞭な發音の言葉で、問はず語りに始めた話に依ると、「君は體が丈夫さうですね、羨しいですね、」と言ふのを冒頭に、藝術家は普通以上に體が丈夫でなければならない、そして十分に養生しなければいけない、自分なぞは青年の頃、所謂若氣の至りで、不養生を自慢にしたり、體を何處か惡くしないと、餘りぴん〳〵してゐると鈍才に思はれるやうな氣がしてわざと胃を破したり、心臟を惡くしようと言ふので生醬油を飲んで走つたり、そのお蔭で僕は到頭心臟が持病になつてしまいましたよ、或ひは又或期間少しばかり金が豐富に這入つたことがあつたが、貯金することが藝術家の値打を下げるやうな氣がして、却つてその後金のために看板畫をかいたり、斯うして到頭團扇の畫や廣告のビラ畫かきになつてしまいました、等、等、と彼の說くところ聲は小さくて不鮮明だが、一句一句悉く厨戸朝生を感動させるに十分であつた。

「一寸、失敬します、お茶でも入れませう、」と言つて折谷市郎は話半ばに立ち上つて、どうぞおかまひなくと挨拶する朝生にかまはず、唐紙一重の隣室へ這入つて行つた、その後をふと見送つた朝生の目に、それにも亦何一つ道具らしい道具の置いてないところの、三疊敷の茶の間のぼろ〳〵に剝げた壁の傍に、八歲六歲位の乞食娘のやうな二人の子供が、小鳥のやうにくつ附き合つて、膝の上に手を置いて並んで坐つてるのが認められた。

「お、お、お子さんたちですか？」と暫くして貧しい茶器を持つて這入つて來た市郎に、朝生が斯う吃りながら聞くと

「え〻、」と市郎は無表情な顔で答へた、「家内がゐないものですからね。」

「亡くなられたんですか？」と聞くと、

「え、」と相手は相變らず他所の人のことのやうに、「一昨年亡くなりました。仲々厄介ですよ。」

さういふ風にして、朝生は二時間餘り邪魔をしてゐた後、歸りがけに漸く思ひ切つて、「實は、お、お願に上つたのですが……」と前置して、廻りくどい言葉で自分が今月限り國から仕送りを斷たれたこと、だから決して澤山の金は望まないが、出來るだけ切り詰めて暮して行かれるだけの、生活費を得たい、自分に出來るやうな何か仕事がないでせうか？　中腰になつて切り出した。

「さうですね、」と折戸市郎は案外、まるで親類の者の身の上をでも案ずるやうに、その瘠せた兩腕を組み合はして、その中に山羊のやうなしよぼ／＼の頤髯を埋めるやうに頭を垂れて、もう一度「さうですね、」と言つてから一寸顏を上げて朝生の方を見ながら、「繪の外に何か習ひ覺えたものはないんでせうね、例へば簿記とか、保險の勸誘とか？……」と言つて、彼は相手の大きな、善良らしいが、又如何にも鈍才らしい、光の鈍い目の色なり、吃音者らしい訥辯に氣が附くと、急に今言つた言葉を取消すやうに、「さうですねえ、」と再び組んだ腕の中に頤を突つ込んで、仔細らしく數分の間考へ込んでゐたが、ふと何か思ひ付いたのか、急に立ち上つて、朝生の坐つてゐる後の押入の中をごそ／＼搔き廻した後、何やら大形の紙を二三十枚亂雜に卷いたのを持出して來て、「いやな仕事で、つまらなくて、而も報酬がお話にならない程少ないのですが……」と言ひながら朝生の前にその紙をひろげた、それは三尺幅くらゐの大型の軸物にする石版畫らしく、上の方に『教育敕語圖解』として、その下一面に敕語の趣旨を汲んだ樣々の場面が黑一色で繪解きしてあるものである、それを四色位の色を使つて彩色する仕事なのである、「つまり石版屋の仕事より安く人間の肉筆で利用しよう、といふのです、一枚に就いて三錢なんですが、」と言つて、市郎はてれ隱しのやうに立上つて次の間へ急須に湯を入れに行つた。

「まあ、お暇ならもつと遊んで入らつしやい、」とやがて元の座に歸つて來て折谷市郎は言つた。結局、朝生は、それでもかまはないから、試みにやらして貰はうと言ふことに定めて、それから二人で彼等が專門にやりたいと志してゐる油

畫に就いて話し合つた。

「その日その日の食に困つて來たり、妻が病氣をしたり、子供が生れたりしたら、畫もくそもなくなりますよ、」と市郎は蝿のやうな訥辯で話し出した、「さうなつたら、下駄の齒入れでも、燒芋屋でも何でもかまはない、食つて行ける仕事がしたいと思ひますよ、それや、千人に一人、萬人に一人といふやうな天才は別でせうがね。それでゐて、一寸でも時間が餘つたり、一週間でも食べ物の餘裕が出來たりすると、又いつの間にか何か眞面目な畫を一つかいて見たいといふ考がむく／＼と頭を持上げて來ますね、不思議なもんですね、藝術といふ奴は惡魔のやうなものですね、君はさうは思ひませんか？　藝術は長くて、人生は短いと言ひますね、しかしそれは千人に一人、萬人に一人の藝術のことですよ、我々にとつては藝術は長いも短いもない、影と言ひますか、蜃氣樓と言ひますか、幻影といひますか、誠に果敢ないものに相違ないんですよ、ところで、人生は、人生はどうでせう。我々にとつて人生は餘り長いとは思ひませんか、厨戸君？……」

別れる時、市郎は朝生に、「その仕事は、その勅語圖解の彩色は、無論僕が言はなくても、すぐ厭になつて止めたくなるでせうが、僕の口からこんな事を言ふのは厭ですが、仕事としては、口過ぎの仕事としては、書記でも、巡査でもいいからさういふものをやることを心掛けた方がいゝと思ひますが……」と言つた。

「は、」と朝生は吃り出すと無暗にお辭儀ばかりして、もつと外に色々言はうと思つたこともあつたが、咄嗟のことで、生憎一言も發音がうまく行かないので、「わ、わ、わかりました、さよなら、」と言つて外に出たのである。

二

その翌年の春のことであるが、厨戸朝生は折谷市郎の紹介でもつとも始めのうちは見習生といふ格で、遞信省の通信事務員といふものになつて市郎の近くの芝南佐久間町の紙箱屋の二階を借りて、そこから毎日通勤してゐた。彼は毎朝六

時半に起きて他所行きにも不斷着にも、何せよ一枚しかない着物に、研究所時代からの小倉の袴を穿いて、出勤の途中飯屋に寄つて簡單な朝飯を濟まして、夫から研究所時代からお馴染の辨當代りにジヤム附の半斤の食麵麭を買つて行くのである、そして歸りには又朝の時の飯屋に寄つてなるべく安くて澤山の量のある夕飯を食つてから箱屋の二階に歸るのだが、それからは別に小說本が好きといふではなし、と言つて時々折谷から受けて來る内職の畫の仕事をする氣にもならず、五燭の電燈の下で毎晩ぼかんと坐つてゐるのであるが、此頃頓に何とこの善良な『砲兵』にも世の中が味氣なく見えて堪らぬのである。そこで、二日に上げず折谷のところへ出かけて行くのだがいつ行つても彼はおんなじ顏をして、或時は燒畫の道具を以て文房具の木箱のやうな物に畫をかいてゐたり、團扇の下圖のやうなものをかいてゐたり、稀に子供雜誌の挿畫のやうなものをかいてゐたり、終には朝生が行つても、仕事の手を止めないで、唯時々ぽつり〳〵と餘り興の乘らぬ話をし合つて、そして結局二時間なり三時間なり、この間お互ひに默り合つてゐる方が多い時を潰すのであつた。だが、朝生は人並外れて子供が好きで、子供も亦彼に馴付くものだから、終には市郎を訪問すると、先づ子供と一二時間遊んで子供たちが寢てしまつてから市郎とぽつり〳〵と會話をして、そして遲くなつて箱屋の二階に歸るのである、十時になると箱屋の家族は皆寢てゐるのである、玄關の間に二人の小僧が寢てゐるのである、その蒲團の隅つこを恐る恐る踏んで、彼は忍ぶやうに自分の部屋に上るのであつた、便所に行くには主人たちの寢てゐるところを通らねばならぬので、彼は大抵家に這入る前に、いつも定つて『苦は樂の種、仁丹格言』といふ廣告の貼つてある電信棒に小便をするのが常であつた。

　だが、七日七日には麗らかな日曜が廻つて來るのである。櫻の花も咲くのである、すると、この砲兵のやうな、六尺近い大男の厨戸朝生の總身の血も春と共に溫まつて見えるのである。彼等が歩いて通る地面の上には、麗らかな日光を受けてその赤い日傘や友禪の着物の色までが影と共に落ちて染まるかと思はれるやうな、派手な姿をした若い女や娘たちも町に見られるのである。春といふものはどんな靜かな室内に坐つてゐても、紅白の幟旗に取圍まれて、どこからともな

く天地の奥から皷の音が聞えるやうな氣がするものである、厨戸朝生もさういふ日曜の午後には、何の用事がなくてもそゝられるやうに町を歩くのである、やつぱり俺は明日から一生懸命に畫かう、と彼は歩きながら思ひ立つのである。たとへ三度の飯を二度にしても繪具を買つて、カンヴスを買つて、一生懸命にやらう、俺だつてやれないことはあるまい、いつ迄俺だつてこのまゝで通信事務員をしてゐられるものか、俺も早く嘗て研究所時代の同窓だつたせめて乙骨三作位に人に名前を知られるやうにならう、そしたら國の父や兄も俺を認めて、老ひたる母は俺の爲によい嫁を探してくれて、月々相當の仕送りをしてくれて、そのうちに追々と俺の畫の注文をする者も出來てくるだらう……だが、そんな者があるだらうか？　乙骨三作は大分うまいからな、俺なぞ迚も及ばないだらうな？……いや〳〵、何でもかまわない、是非明日から一生懸命にやらう、と厨戸朝生はから〳〵と足の脂の染み込んだ日和下駄を鳴らしながら、春の町を興奮しながら歩くのである。

　すると、通信事務員の見習生を卒業しないうちに厨戸朝生は次第に現在の職が厭で堪らなくなつて來て、去年の秋以來めつきり親くなつた折谷市郎のところに毎晩出かけて勤の愚痴をこぼすやうになつた、愚痴をこぼす時、この男は吃音にも拘らず、小唄をうたふやうに雄辯になるのである、「僕はどうしても畫をやらうと思ふんです、折谷さん、僕がこれから畫をやつても、どうしても駄目でせうか、僕の畫には見込がありませんか？」

「まあ……ねえ……」と市郎は困つたやうな、どちら付かずの返事をして、「僕ももうぼつ〳〵、僕なんぞ暇がないのだから、間際になつてもその時の都合で畫けるか畫けないか分りませんから、今から官展の用意をしようと思つてるんです、今年は一つ人物を畫かうと思ふんです、一寸いゝモデルが見付かつたんですよ、いゝと言つたつて、つまりモデル賃が安くて、畫にする面白さうな女が見つかつた譯ですがね。」

「僕も人物をやつて見やうかな？」と朝生は獨り言のやうに言つて、「いや、いや、僕はやつぱり風景にしませう、畫いたら持つて來ますから、折谷さん、見て下さいな。」

「えゝ、見せて貰ひませう。」

と斯ういふ會話があつた後、厨戸は毎土曜と日曜とには必ずスケッチ箱を肩にして郊外に出かけて行つては、日曜の夕方になると、折谷のところへ畫いたものを持つて來て見せるのであつた。「どうです、やつぱり厨戸朝生は物にならないかな？」と見せながら彼は癖で、彼自身のことを他人事のやうに斯う言つては悲しさうな表情をして折谷の顔を見るのである。「こゝの草のところは一寸うまく畫けてあるつもりなんだが、どうです？」

「はあ、草はうまいですな、」と折谷はいつもおんなじ顔をして言ふのである。「だが、一體に、何と言つたらいゝかなつまり印象が薄過ぎるやうな氣がしますな。」

「印象が薄い！」と厨戸は鸚鵡のやうにくり返して「さうだ、印象が薄い、さうだ、さうです、實にうまいことを言ひますね、印象が薄い！」

印象が薄いと批評されて、彼は自分もそれに至極同感しながら、毎日勤め先から歸つて來ると、箱屋の二階の自分の居間の、形ばかりの床の間の前に自分の畫いた畫を立てかけて、五燭の電燈を右手に持つて照らしながら、近づいて見入つたり、遠のいて眺めたりしては、「俺はやつぱり駄目かな？」と思ふのだが、藝術は、藝術は嘗て折谷市郎が喝破したやうに、惡魔かな、まつたく惡魔だな！　厨戸朝生にはその印象の薄い畫をびり〳〵引き裂いて、繪筆を叩き折つてしまふ思ひ切りは到底つかないのである。

そのうちに二十四番の春が過ぎて、夏の始になつたのであるが、或日突然、日曜でもないのに、折谷市郎が内職の團扇のやうに積んだ床の間の前に何の布切だか眞白な布切を幕のやうに張つて、その前に痩せこけた、最初にちらと見る者の目にはいつの間に折谷の娘がこんなに大きくなつたのだらうと思はせるやうな、即ち乞食娘のやうな感じのする年は十七八歳になるかと思はれるモデル女が、洗ひさらした紡績の着物を來て、きちんと坐つて兩手を膝の上に置いてゐる姿を、程よい離れた位置に畫架を据えて、一心不亂に畫いてゐるところへ、厨戸朝生が割合に晴れ晴れした顔をし

て這入つて來た。

「や、ぼ、ぼくも畫きたいな、折谷さん、」と厨戸は中腰になつて折谷のかきかけの畫をのぞき込みながら言ふには、「愈よ遞信省を止めました、今朝辭表を郵便で出しておきましたよ、今日から僕も畫きますよ、畫きますよ。」

「到頭止しましたね、」と折谷は例に依つて少しも顔の表情を變へないで、動かしてゐる繪筆の運びも止めないで言つた。

「やつぱりうまいな、うまいな、」と厨戸は頻りに首を傾けながら言つた、言ひ忘れたかと思ふが、當時厨戸は三十歳で折谷は四十五歳になつてゐた。

三

厨戸朝生は國の家に手紙をやつて、自分も此年になるまで萬難を排して心がけて來た仕事を、今になつて止めてはこれ迄の苦勞を犬死にさせてしまふ譯だから、もう一奮鬪、それも長い事はいはぬ、せめてこの秋まで大いに勉强して、この秋の展覽會には自分の畫がみんなの前に並ぶやうにしたいと思ふから、十月まで澤山とは言はない、月々應分の仕送りを願ひたいと言つてやつた、そしてそれが漸く聞き屆けられると毎日のやうに郊外寫生と、折谷の家の訪問とに出かけて行つた。

折谷の家に行くと、たとへ彼が彼女をモデルにして油畫をかいてゐない時でも、つまり彼が内職の團扇畫をかいたり單色の石版畫に彩色を施したりしてゐる傍に、必ずいつかの瘦せこけた、いやに頰骨のとがつた、營養不良らしい黄色な顔のモデル女が坐つてゐるのである、今日は彼女がゐないな、と思つて這入つて行くと、案外にも臺所の方で折谷の子供たちと遊び半分に水仕事をしてゐたり、かと思ふと表の方から子供たちと一緒に歸つて來たり、まるで折谷の家の者になつたやうに、いつ行つても彼女の顔を見ない日はなかつた。

「お金さんはあなたの家にずつと來てるんですか？」と始めの頃廚戸が聞いたことがあつたが、すると折谷はいつもの通りの無表情な顏で、

「いゝや、さうでもないんだが、大方夜が明けて、日が暮れる迄來てゐるんですよ、」と言つたが、或時傍に彼女がゐないのを見定めて彼が彼女に就いて説明したところに依ると、彼女には姉と弟とがあつて、姉もやつぱりモデルをしてゐるのださうである、ところが彼女等の父親が詐欺取罪か何かで目下入牢してゐるので、家の財政が一方ならず苦しい上に、彼女等の母親が或時娘をモデルに賴みに來た或美術家と妙な事になつてしまつて以來それ迄勵んでゐた狀袋はりの內職を止めて始終その男と相引きするために、一層家の中が苦しいのださうである、幸ひ、お金の姉は、妹より顏立などもずつと派手だし、從つてモデルに賴み手も始終ある上に、段々男から金などを取ることを覺えたので、それでやつと一家の生計をつないでゐるのだが、自然モデル稼業もあまり流行らない上に、外に金を儲ける腕のないお金は、姉と違つて化粧するどころか、三度の食事も碌々當てがはれない程虐待されてゐるといふ事であつた。「だから、あの女は家に歸るのを厭がるんですよ、そして飯を食はしてやると、顏附が變るほど喜ぶんだよ。終には泊めてくれさへするのならモデル代も何も入らない、そして女中の用事でも何でもするから、御飯を食べさしてくれて泊めてほしいなんと言ひ出すんですよ、君」と折谷はそんな話をする時でもやつぱりおんなじ顏をして言ふのである。

「ぢや、さうしたらいゝぢやないですか、女中の代りまでしてくれると言ふのなら、それ程重寶なことはないぢやありませんか？」と廚戸朝生は稍々好奇心を起したやうな目付で言つた。

「だけど、」と折谷は忙しさうに、丁度煎餅屋の職人が煎餅を燒く時にするやうな、體の上半身を始終搖すりながら、一枚又一枚と、繪筆をなめては畫具をつけ、一筆畫いては筆を水洗に浸しゝながら、他所事のやうに言ふのである、「僕のとこだつて子供が二人もゐるんでせう、廚戸君はさすがに米の値段を知らないでせう、お金に晝飯を一度食はすのがやつとですよ、とても女中として置いておく事なんか出來ません。」

「ぢやあ、僕、」と厨戸が膝を乘り出して言ふには、「僕この近くに家を借りて、僕もお金ちやんに御飯の支度や掃除なぞを頼まうか知ら？　そしてどうでせう折谷さん、僕もお金ちやんをモデルにして人物を畫きたいな、」と終の方は獨言のやうに言つた。

　すると、折谷が屹度贊成してくれるかと思ひの外、畫をかく手だけは止めないで「それは面倒ですよ、君、」と彼は言ふのである、「それに、僕の考へではどうもあの娘は家庭がよくないですからな、例へば彼女の話に依ると、毎晩四疊半と三疊半の二間しかない狹い家の中で、母親と情夫と、どうかすると姉娘が色男を引張り込む事があるさうですし、それにまだ弟が一人あると言ふんでせう、どうせお金だつて碌な事を覺えませんよ、うつかり君、彼女を女中代りに置いたりすると、一生擔ぎ込まなければならないやうな目に會ひますよ。」

　厨戸は今日に限つて折谷が何故お金のことを惡く言ふのか、その心持を汲み兼ねたが、それを強ひて反對するのもよくないと考へて、「さうですかな、」とがつかりしたやうに言つた。

「しかし、」と折谷はつゞけて、「モデルに傭つてやることはいゝぢやないですか。そして例へ僅でも金をやると、それが彼女にとつて一番功德になるらしいですよ、寢るところにも困つてゐるのは確らしいが、何よりも餓ゑてゐるらしいのですよ、此頃は何でも僕のとこで晝飯を一度食ふきりで、家に歸つても朝も夕方も碌に食はして貰へないらしいんです。」と相變らず繪筆をつゞけながら、顏の表情を少しも變へないでつゞけたがやがて又何と思つたか、「しかし、厨戸君僕は君がやつぱりもう少し風景をやる方がいゝと思ふがな、殊に展覽會にはその方がパスする可能力がありますよ、僕は君の風景に面白いことがあると思ふがな、それに一枚一枚とよくなつて行くやうぢやありませんか、これから展覽會までみつちりと風景の方に力を入れたらどうです？」と言つた。

　そつで厨戸は少しばかり嬉しくなつて、「さうですかね、少しでもよくなつて來ましたかね、嬉しいな、」と言つた、そしてやつぱり人物なぞは思ひ止まつて、この老友の注告に從つて風景に力を込めようと思つたのである、ところが、そ

の日から一週間程後のことだつたが、彼が夕方、その大きな體の左の肩に輕々とスケッチ箱の革紐を引つ掛けて、右手にかきかけのカンヷスを下げながら、ぺつちやんこになつた下駄を引きずつて、電車にも乘らずに郊外の方から歸つて來る道で、丁度折谷の家と彼の止宿してゐる箱屋の家との間の邊で、ふとモデル娘のお金と出遭つたのである。

「やあ、今歸るの？」と彼は黑い顏の人によくある、笑ふ拍子に綺麗な眞白な齒を見せながら聲を掛けた。

「えゝ、」とお金は言つたが、その聲の調子が如何にも親しい人にのやうだつたのが、善良な大男の畫家を喜ばした。

「ご、ご、ご馳走してやらうか、」とそこで厨戸は厭味のない調子で言ふと、

「えゝ、」とお金は早速答へて、「あなたの家はこの近く？」と言ふのである。

そして無論二人は直樣同じ方角に並んで歩き出した、骨のやうに瘠せてゐて頰骨が出てゐて、一寸見たところでは年取つてゐるのかそれとも若いのか、分らないやうな感じのする顏の娘だが、爭はれぬものだ、鬼だつて蛇だつて魅力を添へるといはれてゐる年頃の、まして人間の十八歳の女のお金は、女に馴れない厨戸朝生にとつて、これ迄折谷の家で十度以上會つたことはあるが、斯う二人だけになつて見ると、何とも言へぬ魅力を感じるのである。「何を、お金ちやん、食べよう、天丼？　親子？」と彼がその大きな體を曲めて、道を歩き歩き、彼女の顏をのぞき込むやうにして聞くと、

「私、何でもいゝわ、」としかし彼女は一向恥かしげもなくはつきりした言葉で答へたものだ。

で少しばかり廻り道して、天丼を三つ注文して、厨戸はお金を連れて箱屋の二階に歸つて行つた。やがて注文したものが來ると、彼が驚いたことには、大食で而もがつ／＼と早く食ふといふので評判の彼と、同じ早さでお金が一つの丼を空けたことである、そして殘つた一つの丼の蓋を取つて、「これを半分わけにしようか？」と聞くと、「えゝ、」と一寸ほゝ笑んだが、彼の女がはつきり答へたのに更に驚かされた、流石の、無神經らしく見えるこの大男の畫家にも、少しづつお金のする事が感じが惡くなつて來た、だが、それでもまだ排斥の氣分を感じる程ではなかつた、のみならず、食べるものだけ食べてしまふと、それから取止めのない談話なぞを交して見ると、何と言つても十八歳といふ年だけの可愛

らしい所も、しほらしい所も見えて來て、厨戸は再び愉快な氣になつた、恐らく年の若い娘と一つの部屋で唯二人きりで話したことなどは、彼の三十年のこれ迄の生涯での始めての出來事に違ひなかつた。

「さう〳〵、お金ちやん、」と彼は言つた、「今日こゝへ來たこと、折谷さんには內所にしといてね。」

「えゝ、」と彼女は無論そのつもりでゐると言つたやうに答へた。

それからぽつり〳〵と二人の間に折谷に就いて話が出た、彼女の言葉に依ると、折谷は彼女が厨戸と接近することを喜ばないとのことである、と聞いて、厨戸はいつか折谷が彼にお金を女中に置くことを反對したのみか、モデルに傭つて畫くことさへ、始めは一寸讚成しておきながら、直に後から反對したことを思ひ出して、一寸厭な氣がした、けれども、斯うして當のお金から折谷に裏切つて、自分に親しんで來てゐる現在に思ひ及ぼすと、彼は忽ち折谷に對する不快はけろりと忘れてしまつて、やつぱり愉快になつたのである。

だが、そのうちに困つて來たのは、始めの間はなるべく退屈させないやうに、ゆつくり腰を落着けて行くやうにと思つて、吃音ではあるが、それをなるべく吃らないやうにとする注意からいつとなく極めて低い調子で物を言ふ癖がついてゐたが、さういふ調子で、小唄でもうたふやうに一種の味を持つた話し振りで、彼はお金を引止めようと努めたものだが、氣が附くと相手は彼の話の最中から、こくり〳〵と居眠りをし出しながらもしかし仲々歸りさうにならないことであつた。

「明日も亦歸りに寄らない？　折谷さんに內所でね、」とか、「大分遲くなつたな、家へ歸つて叱られやしない？」とか、それから又、「ぢやあね、少しお金を上げるから、家へ歸つて夜分のモデルに頼まれたからと言ふといゝね、」とか、つまりもう歸つてくれといふ事の別の言ひ方を色々とした後、厨戸が大きな欠伸が出たのを機會に、「あゝ、眠くなつた！」と言ふと、その時、始めてお金は立上つて、「ぢやあ、私、歸るわ、」と言つて、「私、寢床を敷いて上げるわ。」

そして厨戸が止めるのにも拘らず、お金は寢床を敷いて、無理に厨戸に寢間着に着更へさせてから、又一時間ばかり

ゐたのであるもうその時は彼の方でもどうせ十時を過ぎたからには、階下の箱屋の家族は皆眠つてしまつたらう、そしたら自分も彼女を送つて玄關まで行つたついでに、表の電信棒のところで小便をしてやらう、と度胸を定めたものである、けれども、それが過ちの元になつた、と言ふのは、その晚、お金は今も言つた通り遲く家に歸つて行つたことは行つたが……。無論、厨戶朝生だつて大砲のやうに木石ではなかつたのである。

四

その翌日から、夕方になると、お金は必ず折谷の家から歸りに厨戶のとこへ廻つて來るのである、すると、どうしても夕飯を食べさせない譯には行かないのである。が、さう每日のことに天丼を御馳走する譯には行かないし、それに厨戶自身が朝晚近所の飯屋に食事をしに行く境遇であるのだから、お茶漬を振舞ふといふ譯にも行かないのだ、ところが、いつからともなくお金は彼に自炊を勸めて、每日夕方にやつて來てはその翌日にかけて一日分の飯を炊いて行つてくれるやうになつた、一寸便利な事のやうではあるが、厨戶にはそれ等の事が何から何まで次第に感じが惡くなつて來たものである。だが、お金は一向そんな事に氣が附かぬ樣子で、どうかすると、「今日はどうしたのか折谷さんが機嫌がよくて、モデル代を少し澤山くれたから、」などと言つては、貧乏人の子は貧乏人の子だ？　鹽鮭の切身などを提げやつて來るのである。すると又、厨戶は厨戶並にお金ちやん、き、き、君は折谷君とも怪しいんぢやないか？」などと燒餅を燒いて言ふのである。

「まさか、」とお金は笑ふと一寸可愛らしく見える顏をして言ふのである、「晝日中それに子供が二人もゐるぢやないの？」

と、そんな話も出るのだが、次第に、どうしても厨戶にはお金が每晚やつて來ることに堪へられなくなつて來た、或時、珍しく下の箱屋の亭主と朝顏を合はした時、亭主は厨戶さん近頃は奥さんがお出來になつて、結構ですな、」と言は

れてからは、それが一層堪らなくなつて、それに彼女が來始めてから、とんと氣に入つた畫もかけない、ぐづ／＼してゐるうちに展覽會に出品する期日も近づいて來る、と思ふと、體こそ人の倍も大きいが、度胸は人の半分程にも小さい厨戸は氣がもめて堪らなくなつて來た、そこで思ひ切つて、房州の方へ旅に出たものである。

そして展覽會の締切期日の五日程前に、彼は持つて行つたカンヴスを悉くよごして、その中から一枚と餘程前にかいたのを一枚と都合二枚の畫を出品しておいて、當分折谷にも歸京したことを知らさないで、箱屋の二階にくすぶつてゐた。けれども、或朝、展覽會の入選畫の題名と作者の名前とが新聞に報告されたのを見ると、十人か十五人に一人位の割合でしか通過しない競爭に、首尾よく彼が當選するなどといふことは夢より外にはあり得ないことなのだ、さう思ひながらも、今年はひよつとすると？……さうでないと忽ち國からの仕送りが絕えて、又以前のやうに通信事務員か何かの境遇に落ちなければならない、どうか一枚だけでも通つてくれゝばと願つた甲斐もなく、幾ら新聞の隅から隅を見ても彼の名を見出すことが出來なかつた。ところがその代りに、折谷市郎或る少女の像といふのが確に入選の中に報告せられてあるのである、折谷は十何年ぶりかで、去年と今年とつゞけて二度入選した譯である、或る少女の像といふのは多分お金をモデルにしたものに違ひない。去年の今頃は厨戸はまだ折谷の顏を知らなかつたけれども、彼の入選を自分のそれのやうに喜ばしく思つたことだつたが。今年は、それも考へて見ると、彼等の間にお金といふ娘が現れて以來妙に折谷に對して好感が抱けなくなつて、從つて或る少女の像の入選が厨戸には何と氣に入らないのである、それにはもつとも去年とは違つて、彼等が友達になつてしまつたといふ事情から、嫉妬心も混り出したには違ひないのである。だから去年は自分の畫が入選しなかつた代りに、折谷の畫が入選したので償ふことが出來たのに、今年は自分の畫が落選して。彼のも落選すれば腹がおさまる譯なのに、彼のが入選したので、厨戸は二倍に叩きのめされたやうな氣がしたのである。

がつかりして、ごろりと仰向けに寢そべつて、腕枕をして天井を眺めてゐると、元より善良な男のことであるから、

始めのうちは、或る少女の像、入選、落選、お金、お金と折谷、などと取止めもなくくしや〳〵と考へたものだが、やがて、やつぱり俺の畫はまづいんだらうな、俺と折谷と比べたら比較にならないからな、俺はどうしても駄目かな？それにしても俺が折谷を惡く思ふ譯はちつともない、いや、俺の方に多少譯があつても、折谷から見れば、そんな譯はない筈だ、だから彼は俺のことを疑に思つてるだらう、明日あたり久し振りで訪問しよう、などゝ思つてゐるうちにいつかうと〳〵と眠つてしまつた。そして、何時間ほど經つたのか、「厨戸さん、電報ですよ、厨戸さん、」といふ箱屋の小僧の聲を耳の傍で聞いて、彼は目を醒ました、何も體にかけないで寢てゐたので、目を醒ました時、氣が付くとぞく〳〵寒かつた、で、大きなくしやみを一つして、電報を手にした瞬間おや、俺の畫が入選して、その通知が來たのかな？ と虫のいゝ事を考へたが、見ると、それは國の家からで「チチビヨキスグカヘレ」といふのであつた。

それで、厨戸朝生は何年ぶりかで、故里の山梨縣下に歸り榮えのしない歸省をした譯であつた。彼が歸つた時、彼の年取つた父はその臨終の床で呼吸だけはしてゐたが、枕元にゐた兄嫁が、「お父さん、お分りになりますか、朝生さんが歸つて來られましたよ、」と言つたが、父はどんよりした目を彼の方に見張つたゞけで、それから二時間程すると息の根が止まつてしまつた。すると彼は不斷の會話の時のぼそ〳〵言ふ吃音者らしい聲とは別人のやうな、朗らかな、少し馬鹿氣て見える程の大きな聲を立てゝ泣いたものである、考へて見ると、父の死がその主なるものに違ひなからうが、自分の才能のこと、折谷のこと、お金のこと、落選のこと、これから先、父に死なれた後の自分の身の振り方のこと、秋風の吹く東京と違つて、座敷の軒から望まれる國境の、もうその頂には眞白に雪の積もつた高山から冬のやうな風の吹いて來る故里の家のこと、本當に冬になつた時の寒さのこと、さういふことを一度に思ひ浮べて、一口に言ふと束にして泣いたやうな譯に違ひなかつた。

死者の四十九日の忌日が過ぎる時分には、愈よ毎日冷い風が吹いて來て、厨戸朝生の心を更でも悲しくするのである、野に出て百姓の仕事を手傳ふ譯にも行かず、無論呑氣に繪を畫くことなどは到底出來ない周圍の感じなのである。

掃除の手傳をしたり、手紙の代筆をしたりしても、そんな事には一時間以上の時間を潰す譯にも行かないのである、兄嫁の待遇なども決してよくはないのである。すると、或時兄が彼に「お前もさうしていつ迄も遊んでゐても仕樣があるまい、どうだ、役場か、それとも學校にでも勤めたら?」と言ふのである。「はあ」と答へておいたが、いつ迄も答だけでは濟まされなくなつて來た。或時東京の折谷から葉書が來て、「そちらはもう隨分寒いでせう、僕なぞ子供の頃の記憶を浮べるだけでも、山梨縣の寒さは身に沁みてしまつたと見えて、風を引きさうです、早く歸て來ては如何?」と書いたその餘白に假名ばかりの拙い字で、「早くかへつていらつしやい、金」と書いてある、モデルのお金のたよりなのである。それを見ると、早速にも飛んで行きたい氣が躍るのである、こんな田舎で、子供のうちからの馴染の者ばかりの中で、到頭畫かきになれなかつたのかと思はれて、役場の書記か小學校の教員になつて恥を曝すよりは、東京で通信事務員をしてゐる方がどんなに樂しいか知れない、と思ふと、折谷市郎のことが去年までのやうに、中學時代に始めて彼の名を繪葉書で知つた時のやうに、懷しく考へられて來るのであつた。

到頭、彼は半分逃げ出すやうにして、再び東京に出て來た、十一月の末のことであつたが、まだ彼の父が世にゐた間は、叱られながらも上京する時は何がしかの金を貰つて出たものだが、さういふ譯で、彼は上京すると早々生活の方法を講じなければならなかつた。早速折谷を尋ねて行くと彼は三ケ月前にも半年前にも、少しも變らない恰好で何でもその時は大小無數の羽子板を床の間に積んで、それに燒畫で模樣を畫く仕事をしてゐた。廚川が例に依つて、何か彼にも出來るやうな仕事がないか、と賴むと、「だん〳〵世間の景氣が惡くなつて來てね、」と彼はやつぱり少しも動じない顏附で言ふのである、「全然商賣を止める譯ではないんでせうが、何處からも此前のやうにたとへ厭な仕事でも賴みに來ることは殆どなくなつて、此方(こつち)から賴みに行つても此頃は少し手控えしてゐますのでとか、ずつと商賣が暇なもんだから、新しいものを造(こしら)へないで前のものを捌くやうにしてゐるとか言ふ始末ですよ、もつとも今はこの羽子板が丁度時節だから相當に忙しいんだが、ばかに安くてね。しかし何ならこの僕の燒畫した畫に、簡單に着色する仕事なら少しは分けて上

げてもいゝがね、」と言つた。

「さうさう、忘れてゐましたが」と厨戸は言つた、「今年も亦展覧會に通りましたね、お目出たう。あのお金ちやんをかいた畫でせう？」と言ふ時、思ひ出してお金がゐないので、「お金ちやんは近頃は？」と少し顔を赤くして聞くと、

「相變らず始終來てゐますよ、だけど此頃は油畫どころぢやないから、何だか子供とばかり遊んでゐます、その代り女中の仕事をしてくれるので助かりますがね、」と折谷は言つた。

「で、あの展覧會の畫は賣れましたか？」と厨戸が聞くと、

「何が賣れるものですか、今頃は京都で曝し物になつてゐるでせうよ、」と折谷は言つた、「僕はつく〴〵考へたんですが、もう來年からは展覧會なんて出すのを止さうかと思つてゐますよ。もつとも、そんな事を言つてゝも、例の藝術といふ惡魔に取憑かれてゐる我々の事だから、又來年のその時分になるとふら〳〵と妙な氣になつて、高い繪具を使つて畫いて出すんでせうがね。僕は君も知つての通り、去年何年ぶりで入選したんですが、そして今年もどういふ廻り合せかやつぱり入選しましたが、あの可否の發表のされる朝、つまり新聞に入選者の名前の載つて出る朝ですな、僕はあの朝を十何遍經驗した譯ですよ。ぐぢや〳〵と何百人かの名前が小さな活字でごみのやうに並んで載つてゐますね、あれを手に取る時は、この年になつてやつぱり手が震へますよ、芝居でやると手が震へて字が讀めないといふ場ですね。ところが違ひますよ、名前なんて何といふ變挺なものでせう、すつかり自分の通りですな、折谷市郎といふこの變なたつた四字の、人が見たら百遍見ても忘れてしまふやうなこの名前が、自分のとなると、あの朝の新聞のごみ見たいに人間の名前の並んでゐる中に、一秒間以内にちらりと見付けますからね、さうすると動悸がしますよ。それも、もつとも一昨年までの十何年間は、さういふ經驗も知らずに、自分の名の載つてないのを、三遍も五遍も、あきらめては見直し見直したものです。ところが、まあそんな火を呑むやうな思をして、自分の畫が通つたのはよいが、その結果がです、その結果がです。……無論その一日二日の間は外の事が手に附かない程そわ〳〵と嬉しくて堪りません、厨戸君僕

は本當のことを、實際正直なことを言つてるんですよ、すると君も知つてるでせう、僕に始終、夏は團扇の畫、冬はビラ畫など賴みに來る內藤といふ石版屋があるでせう、あそこから鯛を一疋お祝だと言つて持つて來てくれましたよ、今年もやつぱり又鯛を持つて來てくれましたよ、鯛は目出鯛といふ魚ですからな。ところで、もう一つ恥を話さなければ分らないが、僕は去年も今年も展覽會が始まると、毎日は行けませんけれど、二日か三日おきに此近所の一番澤山新聞を取つて居るミルク・ホールへ牛乳一杯飮みに出かけて行くんです、君も知つてるでせうが、ミルク・ホールぢや前の日の新聞をさう取つて置きませんよ、まして一日飛んで前の新聞なんて反古にして使つてしまふでせうからね、それを泣くやうに賴んで、何しろ牛乳一杯の客なんですからね、泣くやうに賴んで取つておいて貰ふんです、どうです、そして毎日の、殆ど十種位の新聞の展覽會の畫の批評といふ批評を片つ端から讀むのです、だが、去年もさうでしたし、今年もさうでしたが、折谷市郎といふ名前は虫眼鏡で探しても、どの新聞の誰の批評にも出て來ないんですよ、去年の繪はまだ風景でしたから、安い値段で無理に賣りましたが、今年の繪なんて、唯の貧乏娘の而も別嬪でもない娘を畫いたものでせう、あんなものやらうと言つたつて、何處の家だつて掛けておく譯にはいかないでせうから、貰ひ手がありませんよ。どうです、すると、僕の畫が、苦しい中から工面して、カンヷスや畫具を買つて、大事な時間を割いてやつとこさで入選して……さて僕に齎らすものは、つまり鯛一疋なんです。君、藝術といふものは惡魔の何かですよ、君はまだ若い人だから、今のうちに何か別の、もう少し安全な渡世の出來る職業に就いたら如何です？……」

五

折谷市郎の言葉は厨戸朝生を、植物なら根こそぎにする程、動かしたのである。無論彼の辯舌はくどくてそして極めて爽かなものではなかつたが、その言ふところの眞實が厨戸の胸を叩いたのに違ひなかつた。これは迚も俺のやうなものがうか／＼と踏み込んで來る畑ではない、折谷の言葉を借りると渚に足を踏み入れてゐる程度ならば、今のうちに安

全な陸に後戻りをするがよい、この大海を命をとられずに渡る者は天才といふ特別の人間で、才のない唯海が好きだといふ程度の我々は、氣を附けないといつの間にか激しい波にさらはれて、海底深く沈んでしまふ、危い、危い。と警めるのである、厨戸君、僕を見給へ、僕は卽ちその溺れた者だ、と折谷は相變らず無表情な顏をして言つたが、心なしか聲が何となく悲しさうに聞えた。

だが、今更厨戸にしてもおめ〳〵と國に歸つて行く譯には行かなかつた。と言つて、いくら人から人へ紹介狀を貰つて、仕事を探して廻つても、全くこれも折谷の言ふやうに世の中が次第に不景氣になつて來た爲か、六尺近い、力だつて人並にある、善良なこの人間を誰あつて使つてくれようと言ふものが見當らないのである、錢一つ貰れぬ日はなし、と言はれる程に繁昌な東京中に彼を要するものが何一つないのである、電車の車掌と巡査の外には。しかし、文字通り一日が一日とその日の食に困つて來ると、到底故なしに人の懷や脛を食ひ潰す度胸のない彼は、最早や電車の車掌でも外に愈よ仕事がないとすれば、ならうと決心した、だが、幾ら廣い東京でも、いつどんな知つた人に會ふかも知れない中で、車掌になることは如何にも二の足が踏まれたので、思ひ切つて、簡單な試驗を受けて巡査教習所に這入つたのである。

そこでも彼の善良性は忽ち周圍の人たちに認められて、誰にも彼は好かれた。それに今迄の場合と違つて、こゝでは中學を卒業してゐる上に、繪の嗜みさへあるといふとが、教養所に於いて遙かに外の同僚たちより優れてゐるので、彼のこれ迄の生涯の經驗として始めて、彼は人々から多少尊敬さへもされた。だから、彼は巡査が覺えねばならぬ簡單な法律をも擊劍をも、教練をもすべて熱心にやつたので、上役の人々からも目を掛けられた。唯一つ、誠に都合が惡いことは、巡査として可成り重要な條件であるところの、言語の明晰を缺く點であつた。普通なら、どうかするとこの缺點だけで巡査としての役目を果すことが出來ないと言ふので、折角一ケ月なり三ケ月なり教習所の飯を食ひながら、罷免せられることとさへあるのだつた、だが、今も言つた通り、上役の人たちから彼は隨分愛されてゐたお蔭で、三ケ月後には

交通巡査に採用されることになつた。

ところが、半月もしないうちに、彼の訥辯はその交通巡査にはどうしても不向きであることが發見されて、愈よやつぱり罷免になりさうだつたが、又上役の一人で世話する人があつて、彼は風俗係の刑事に採用されることになつたのである。これは段々困つたことになつて來たな、刑事は厭だな、と彼は心の中で二三度も思つて、その度に自分の方から辭職を申し出したい氣になつた位であつたが、それ程迄に世話してくれる人の好意に對して、持前の弱さからついずるずるになつて、彼は愈よ下谷署の風俗係の刑事の辭令を受取つたのであつた。そこで、どうして、彼が風俗係の刑事として第一日を勤めたゞけで止めることになつたか？　それを諸君に話してこの物語は終るのである。

厨戸朝生が風俗係刑事として、始めて下谷警察署の扉を開いたのは三月の初旬の日のことであつた。そこで署長と會つて、これからは色々とお骨折を願ひたいとか、それには始終巡査と聯絡をとつて貰ひたいとか、或ひは自分の受持以外の事でも廣く警察の目から見て不審な人物なり事件なりに出遭つた時には應分の探偵をして戴きたいとか、色々あつた末、さて署長が言ふには、「いづれ段々とそのうちに馴れて來られたら色々な仕事をお願ひするでせうが、先づ始めは實に馬鹿々々しいやうな仕事ですが上野公園の夜間の風俗の取締をしていたゞきたいのです、で。當分は毎日夕方日の暮れる前に一應本署に立寄つて、それから公園内の交番を根據地にして活動して下さい。」と言ふのは、それから厨戸が公園内の巡査交番所に行つて、日の暮れるのを待つて、交番を出て公園内の彼方此方の、なるべく通り路から離れた木の陰とか、草原とか、つまりあの廣い公園の中だが、大抵のところには要所々々に瓦斯燈が點つてゐるから、どんな人通りの少ない路でも、その光の屆かないやうな暗い場所はない、けれどもたまには木の蔭になつてゐたり、土手の麓になつてゐたりして、全く人目を離れた所がある、警察から貰つた地圖を見ると、御叮嚀にも大體さういふ場所には、筆の軸を朱肉に浸した奴でポツポツと印がつけてあるので、探して廻る必要がなかつたが、さて厨戸の仕事といふのはその朱丸を施してある場所に、日の暮れ方に出かけて行つて、適當な場所に用意の黒い布切を敷いて、怪しい二人連の

人間の來るのを見張りするのである、そして此方の張つてゐる網に掛つた男女を引捕へて、交番まで連れて行つて說諭したり、或ひは中には密淫賣などがあるから、さういふ者なら容赦なく拘留處分するといふ仕事なのである、そしてそれ等の男女の性名を用意の手帳に書留めて、毎日警察署まで報告するのであるが、署長の言ふには、一件でも件數の多い方がつまり成績の上つた證據であるから、無論賞與とか昇級に影響があると言ふのである。

そこで彼は研究所時代にこしらへた軍艦絲紗の吊鐘マントを着て、全く暮れ切つてしまつた上野公園の博物館の裏手を目指して出かけたが、途々昨日まで歩いた同じ上野公園に違ひはない、そして俺も亦昔のまゝの厨戸朝生に違ひない、だが……だが、さうではない、一切の狀態が變つてしまつた、といふやうに思はれて仕方がないのである。今方銅像脇の交番を出る時に、「ぢや、さ」と、後のさよならと言ふ言葉が吃りさうだつたので、さう言つた切りで、輕く帽子を取つて挨拶すると將武者の恐らくは折谷よりももつと年上かと思はれる巡査が、極めて自然な恰好をして、擧手の禮を返したが、すると厨戸はあわてゝ自分の方も帽子に手を擧げかけたものだ、そして氣がついてその手で帽子の恰好を直して立去りながら、兵隊の擧手と巡査の擧手とは何處か要領が違ふなアと思つたことである、だが、巡査が自分に何故禮をしたかと怪むどころか、それが五年も十年も前からの習慣のやうな氣がした、が、即ち俺は刑事なんだとはつきり思ふと忽ち變な氣持になるのである。さう思ふと、人通りの少ない公園の道だが、たまにすれ違ふ人が彼の方を見てぎよつとするやうに見えるのである、すると彼は自分が今この世に於て、今迄の三十年間が悉く閑却された位置にあつたのに反して、仲々注意される人物になつたやうな氣がして、冷々する夜氣と共に身心が引き締まる思ひもするのである。

そして漸く目指して來た場所に着いて、懷から用意の敷物用の黑い布切を木蔭の草の上に敷いて署長に注意された通り大地にその大きな體を橫たへたところが、すると何だか町には電車が走り、犬が步き人々が通つてゐるこの世の中にゐるやうな氣がしなくなつて、今斯うして草の上に寢そべつて、犬の樣に四邊の樣子を窺つてゐる刑事の厨戸朝生はあの

兵隊になつたり、研究所に通つたり、通信事務員になつたり、その間種々樣々の苦勞をして一人前の畫家にならうとして三十歳になつた彼と同じ廚戸朝生か知ら？　と怪しまれて來た。東京の三月上旬の夜公園の空氣は彼の故里の山梨縣の春を思はせるに十分である、彼は少年の頃そこで近所の腕白友達と始終盜坊ごつこをして遊んだことを思ひ出した、その頃の三ちやんや、次郎ちやんや權ちやんの顏がありありと目に浮ぶのである。……神樣、廚戸朝生はこれからどうなつて行くのですか？　と彼は急に泣きさうな氣になつて、斯う心の中で叫んだものである。

その時、カサ、カサ、と忽ち彼の耳を兎のやうに聳立たせたところの、確に人の足音が起つて來たのである、彼は一切の事を忘れて身體中の神經を耳と目に集めて音のする方に注意した。彼のをる場所から十數間も離れたところを通じてゐる小路から、彼もその中に身を隱してゐるところの、立入ることを禁じてある草原の中に這入つて、彼のゐる近くの土手と木立の蔭になつてゐる方角に向つて、正に二人の男女がひそ〳〵と話し合ひながら歩いて來るのである、二人の人影が時々木の枝と枝との間にそれと窺はれるのである。彼の心臟はづきん〳〵と鳴り出した。彼は役目も何も忘れて、彼がこれ迄の長い生涯の間に一度も經驗したことのない、斯ういふ羨むべき、不屆きな行動をむさぼり樂む男女に對して、叩きのめしてやりたいやうな嫉妬を感じたものである、彼は幾度も唾を呑み込んでは息をこらした。だが、これが俺の職業なのかな、變だな、とその次にちらと考へたが、そのうちに彼と二間と隔たない場所に來て、ぴたりといつの間にか立止まつた男女の、甘い囁き聲などがはつきりと聞えて來ると、彼は暗闇の中でだが、顏が眞赤に火照るのを感じながら、益々體中がいら〳〵するやうな嫉妬を感じた。すると又不思議なものだな、警察なんてゑらいもんだな、警察の地圖に筆の軸で朱肉の印をつけた場所に、きつかり間違ひなく男女がやつて來るとは！　大したものだな、と一瞬間一寸感心したが、忽ち又彼方の現實の男女の氣配に彼ははつとして兎のやうに耳を聳てたそしていくら見詰めても灌木の繁みと夜の暗さで彼方が見える筈はないのだが、それにも拘らずきら〳〵と目を輝かしながら、仕切りなしに唾を呑み込み呑み込みしたのだが、いくらさうしても心臟のづき〳〵んと打つ音は少しも鎭まらないのである。

……突然、彼は脱兎の如く、隱れてゐた場所から飛び出して、かの男女の傍に現れたのである。彼等がどんなに驚きあわてたか、それは諸君も十分想像することが出來るであらう。さて、その中に勢よく飛込んだまではよかつたが、久しくさういふ激しい場面に出遭つたことのない厨戸は、「こら！」と言はうとして、「こ、こ、こ、こ、」と、失敗つた、と思つて焦れば焦る程呶鳴りつける言葉が出ないのである、かねて署長から、「君は少し吃る癖があるさうですが、なアに今度の役目はさう聲を出さなくてもよいので、默つて最寄の交番へ引立てゝ、後の說諭の方は巡査に任してしまつて宜しい、」と言はれてゐたのだが、まだその運びに至らないうちに斯ういふ失敗を生んだのである。彼は咄嗟の間に、相手の男が自分を輕蔑して飛掛つて來はしないかと心配したが、相手の男女は又厨戸以上に面喰つてゐる場合なので厨戸の吃音を嗤ふどころか、何と言はれたのかさへ聞かなかつた程であつた。「と、と、とも角も交番まで來い、」と言つて厨戸はなるべく相手に顏を見られないように、あらぬ方に顏を反向けながら言つたが、遲れ走せに氣が付いて「俺は下谷署の風俗係の刑事だ、」と帶の間に挾んであつた紐の附いた刑事の鑑札を取出した、が、無論暗い中で何が、何だか、誰にもよく見えなかつた。

「濟みません、濟みません、」とやつとの事で身裝などを取繕つて、男の方が無暗に頭を下げながら言つた。「私たちは普通の夫婦なんでございます。……」

だが、この時はまだ厨戸の方でも胸の動悸が治まらないので、相手の言ふことを一々聞き分けてゐる能力がなかつた唯やうやく吃音が止まつた位のところで、「兎に角、一應交番まで來給へ、」と言つて、相手が逃げ出さない程度で注意しながら歩き出した、その邊は徹頭徹尾刑事の心持になり切つてゐたものであつた。相手の男女も唯犬のやうに恐縮してゐるきりで、到底逃げ出すなどゝいふ勇氣を持ち合はせないらしく、厨戸の一二歩後から、先程までの樣子とはけろりと變つて、二人は二尺程の間隔を取つて白々しく離れて歩いて來た。

「旦那、」とそして歩きながら男は後から、厨戸に向つて泣き出しさうな聲で言ふのである、「旦那、」私どもは當り前の夫婦

なんです、ちやんと役場にも屆けてある夫婦なんです、」とくり返しくり返し同じことを言ふのである、

　それには耳をかさないで大凡半町ばかりも默つて歩いてゐたが、餘り繰り返して同じことを言ふので、厨戸は煩ささうに振り返つて、「當り前の夫婦が」と先から吃らないやうに口の中で十遍もくり返してゐた言葉をやつと吐き出した。

「當り前の夫婦がどうしてあんなところへ出かけて來たんだ？」

「それがでございます、」と男は言ふのである、「私は砲兵工廠の職工でございます。私の家は直この近くの日暮里でございます。私の家は三疊と六疊の二間切りで、そこに親父夫婦と兄貴夫婦と弟二人と乳飲兒が二人、親父の子と兄貴の子です、それに私ども夫婦でせう、家内は去年の暮に貰つたのでございます。それも何も私が無理に貰はうとしたのでも家内が無理に來ようとした譯でもないので、家内もやつぱり工廠に行くのですが、仲々よく稼ぎますので、同じく職工をして居ります親父が、一人でも稼ぎ手を増やしたいといふのと、私の身を固めたいといふのとで貰つてくれたのですが、兄貴は大反對なのでした、けれども親父が到頭言ひ張りましたので、この家内が來ることになつたのです、私もこれとは従兄妹同志なんでございます。……」

　善良で、正直な風俗係刑事はいつの間にか歩調を緩めて、この職工と並んで歩きながら、彼の一語毎に「ふむ、ふむ、」と合槌を打つて、今し方暗闇の木蔭で彼等の睦言に耳を傾けたのと同じ熱心さで傾聽したことであつた。「それで……？」と相手の言葉が切れさうになると、彼の方から催促したものである。

「私も家内も、」と職工は可成りな雄辯で話しつゞけるのである、「自分からこんなことを言ふと何ですが、隨分よく稼ぎます方で、二人で確に人の三人分は儲けるのでございます、それを親父がみんな取上げて、私どもにはまるで小遣錢もくれないのでございます、もつともそれは私どもだけに辛く當る譯ではございません、親父は兄夫婦にもやつぱり厳しいのですが、それで兄夫婦はいつも親父にがみがみ言はれる、とその仕返しに私どもに當り返すものですから、私どもは親が二人あるやうに苦しい目を見てゐるのでございます、そこへもつて來て、今も申したやうな小さな家の中でせう、私ども

は家の中でゆつくり話し合ふことが出來ません上に、……恥かしいお話でございますが、夜に夫婦の情合も結べないやうな譯で、而も旦那、これでこんなところへ參りますのもたつた二度目なんでございます、親父が喧ましくて、仲々斯うして二人で外で出會ふことだつて容易なこつちやないのです。旦那、どうぞして、夫婦が別居して住めるやうに、お上のお力でして貰ふ譯には參りませんでせうか、兄夫婦だつて、始終私どもを苛めますが、元はと言ふと、そんな譯からだと私は思ふんですが……いゝえ、さうしてもどうにか斯うにか食べて行ける位にはみんな働ける身體なんです、親父だつて隨分のお金を儲けるんです、その上に相當の貯金もしてゐるんです。……」

その時三人は丁度博物館の前の通りを歩いてゐたが、行先に交番の赤い灯が見えて來たところで、厨戸刑事は急に立止つて、「よし、お前の言ふことはよく分つた。何とか夫婦が別々住めるやうに、いづれ取計らつてやらう」と氣安めの出鱈目を言つて、「ぢや、それにしてもこれから氣を附けて、あゝ言ふ不體裁なことをしないやうにしないと不可んぞ。今日は勘忍してやるから歸り給へ。」

そして厨戸はぺこ〳〵と乞食のやうにお辭儀をしてから、美術學校の方角へ歸つて行く職工の夫婦を見送つてから、又一人でぶらぶらと元來た道の方へ引返して行つた。餘り足を早めて歩くと先の夫婦に追附きさうになるので、成るべくゆつくりと歩いて、やがて圖書館の前に出るところで、ベンチを見付けて腰を下ろした。取止めもなく、なる程可哀さうな夫婦もあるものだ、などと考へてゐると、彼等の狹い家の中を想像したり、すると同じやうに狹い家で困つてゐた者があつたが、誰だつたかな？　と暫く考へてから、やつとして、それは折谷から聞いたお金の家のことだつた、お金はどうしてるだらう？　と今度はお金のことを考へたりしてた。

さうして彼は長い間吊鐘マントで自分で自分の體を抱くやうにして、しつかりと上半身を包みながら、ぼんやりとベンチに腰かけてゐた、そして取止めもなく、極めてぼんやりとではあるが、泰西の畫家の名に憧れて、生れて始めて這入る圖書館に行つて、地下室の下足室でまごついたり、借り出しの方法を二度も三度も係りの者に尋ねたりして、畫集を見

に行つたことや、やがて又折谷に分けて貰つた仕事の畫の模樣を參考するために一週間程つゞけてそこに通つたことや、かと思ふと、何でもどうかしてこの學校の學生になりたい、あの門をあの學校の學生として自由自在にくゞりたいと少年らしい希望に燃えながら、始めて美術學校を見て、門の前にぽかんとして立ち盡した日のことや、すると又ずつと飛んで三年間の砲兵時代のことなどを、思出すともなく思出してゐると、その時上野の鐘がボーン、と何時を告げるのか知らないが、鳴り出したのである。

これはいけない、俺の今の身分は、と氣が附くと、忽ち署長の顏、今先巡査らしい敬禮をした、署長より立派な交番の髯武者の巡査の顏、それから自分の帶の間に挾んでゐる刑事の鑑札のこと、などを思ひ出して、彼は念の爲にその帶の間の鑑札を手で探つて見ながら、博物館裏の先程の場所に進んで行つた。先の男女が又來てやしないかな、又彼等と顏を合はすと彼等も狼狽するだらうが、此方も困る、だがまさか未だ公園の中をうろついてるにしても、先と同じところには來はすまい、それに晝間の署長の話にも、「この地圖の」と例の地圖を示しながら、「丸點を二重に附けてあるところなら、一晩でも二晩でも、一人捉まへてそれを交番に送つて行つたら、直又元の所へ引返して見張つてゐても差支へない、どうかすると、引返して來ると、もうちやんと後の組が來てゐることがある位です、アハヽ、」と鼻紙を揉むやうな音を立てゝ笑つたのを思ひ出して、厨戸は、さうだ、當分あそこと定めておかうと獨言しながら、何の氣もなく小路の兩側に附けてあるところのとある柵を飛び越えて、その土手と木立とで二重に影になつてゐる二重丸の印の場所の二三間手前まで來た時である、突然彼が思はず立止まつて、而も二三歩後ずさりした程彼を驚かした、何か動物か大きな鳥かゞ急に人の足音に驚いて飛び出したやうな物音が起つたのである。そして一分間經つてばた〳〵と彼が來た方とは反對の方角にその物音の主が一二間駈け出した時に、彼は始めて何の事だい！と氣が附いた、夜目によくに見別けられなかつたが、明らかに先の男女とは違つて、二人とも背の高い、もつと身上のよささうな一對の男女が逃げ出したのである。咄嗟の事なので、そのうちに又一分經つて彼等の姿が向ふの別の木立の蔭に消えた時分に、こら！とこの時な

ら確に吃らないで叫べるとは思つたが、氣を拔かれた厨戸刑事は元の驚かされた位置に立つたまゝ、ぽかんとしてゐて、又一分以上經つてしまつたのである。彼はその時妙に咽喉の邊がむづ痒いやうな氣持がして、高笑ひしたくなつたが、辛抱してにッと唇でだけ笑つてそれから何といふこともなく、一時間程の間に二對の男女が陣を取つた場所の跡を、腰を曲げてのぞいて見た。すると、又妙に彼等の行跡がいま〳〵しくなつて來て、彼はそこから二間ばかり離れた、先に彼自身が陣取つた灌木の蔭に、再び黑い布切を敷いて、その上に高いので長々と寢そべる譯には行かず、體を丸く縮曲めて、今度こそはと大いに力瘤を入れて息をこらしてゐたのである。二十分もした時分に、カサカサと待ちもうけた音がして來た、丁度彼は寒さと氣拔けと退屈とで思はず大きな欠伸を半分し掛つてゐた時で、突然、案外近くの、始めの時のやうに路の方からではなく、大分ずつと先から草原に入り込んでゐた者らしく、左手の土手の上に足音が聞えて來たのである。先からの續きで何だか無暗に彼は氣分がくしや〳〵して、腹が立つてゐたので、今度こそ愈よといふ場で飛び出したら署長も場合に依つては一つ位毆つてもいゝと言つてゐたから、本當に毆り付けてやらう、それも男の方でなく女の方の白く塗つたむら〳〵した柔かい頰べたをぴしやりとやつてやらうと思つた。すると女が泣き出す、どんな聲で泣くだらうなどと更に體を固く丸く縮めて息をこらしながら思つてゐると、急に彼の心臟がこつんと止まつたやうな氣がしたのである、と言ふのは、段々彼の蹲つてゐた場所に近づいて來た男女のぼそ〳〵言ふ話聲がぼそ〳〵ではなく個性を持ち始めて來ると、その女の方の聲が先づ彼の耳をはつと打つたのである、そして次の瞬間には男の方の聲も彼を打つたのである、そして彼の心臟がこつんと止まつたやうな氣がした譯なのである。

　彼は龜のやうにぐつと、幾寸も延びないその太い首を延ばして、終には耳に手を當てがつて聞いてゐたが、やつぱりどうしても二人とも聞き覺えのある、間違ひなく彼等の聲である、よく似た聲があるものだな、しかし……いや、幾ら何でもこれは似た聲ではない、確に彼等だ、と思つてゐるうちに當の男女はもう彼の二間ばかり先の、例の警察の地圖に二重の丸の印の附けてある場所、土手と木蔭とが二重に蔭になつてゐるところに來てゐた。まして「私、厨戸さん

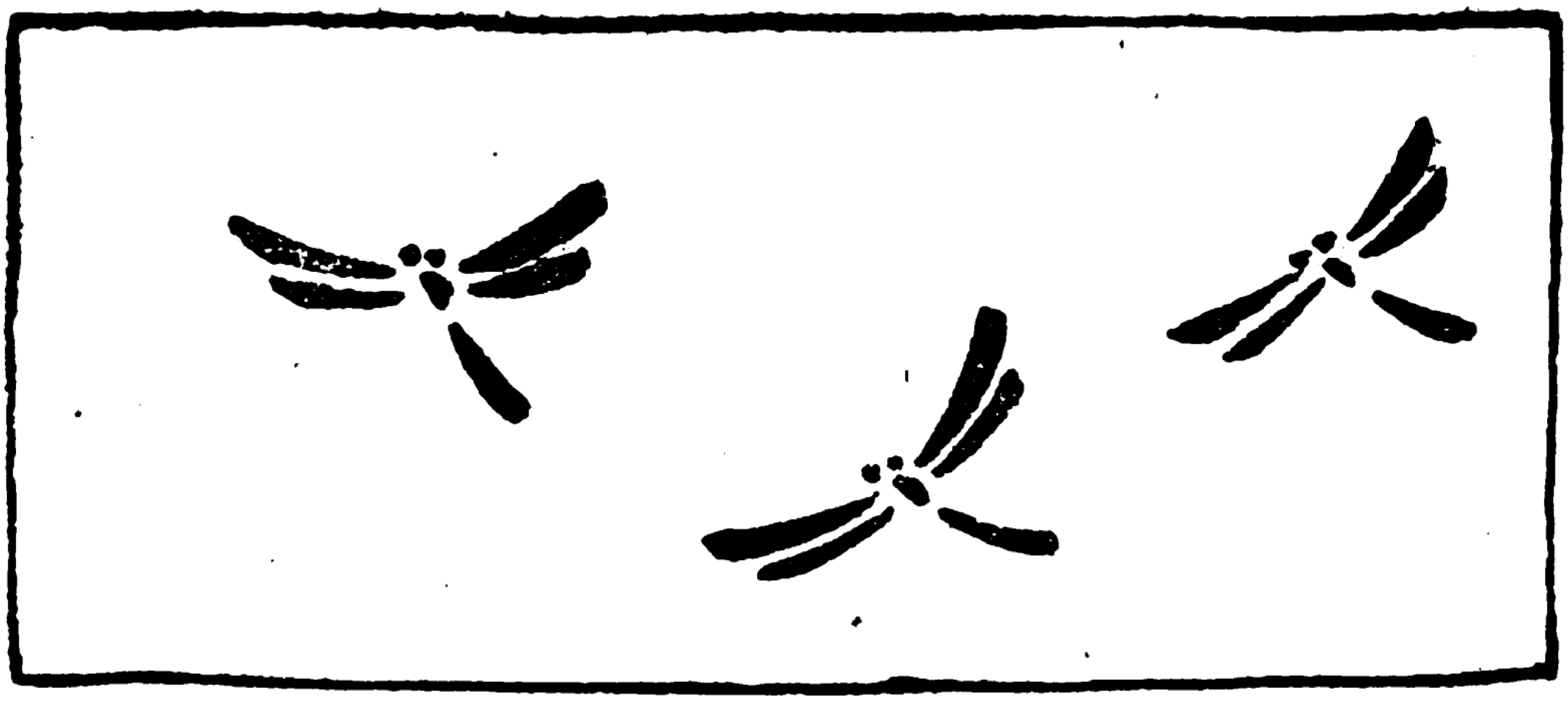
「と……」と確に女の聲が彼の名前を彼等の會話に挾んだ時は、厨戸刑事は思はず暗闇の中でぐつと制を縮めた、さうだ、やつぱりさうだつたと思つて、彼はいつか全身にびつしより汗を吹き出しながら、兩手で頭をかゝへてしまつた。が、そんな近くに刑事になつて覗つてゐるとは知らない二人の密會者は、諸君はもう彼等を十分知つてゐるであらう、つまり折谷市郎とモデル娘のお金とは、喋々喃々と語りつゞけたのである。

だから、逃げ出す譯には行かず、と言つてまさか先の職工夫婦のやうに、飛び出す譯には行かず、進退谷まつて彼は彼等が目の先の暗の中にゐた殆ど小一時間の間を、或ひは彼等の會話を聞くまいとして、兩手の指で耳を抑えたり或ひは兩手を拳にして汗を握つたり、さうして彼等が悠々とその場を立ち去つてしまつたまで、彼はそこに石のやうに轉がつてゐたのである。

それで諸君も十分想像されたであらうと思ふ、つまり厨戸朝生はその翌日、刑事の職を忽ち止めて、それから二三日後にに飯田町の停車場から、故郷の山梨縣に歸る汽車に乘つた譯である。

この話の始に書いた、厨戸朝生、といふ名前が言はれたら、彼の友達が皆頻に笑を浮べると私が話した譯も、それが非常に輕蔑した笑でもなく、又非常に悲壯を感じたそれでもないと言つたことも、これだけの話を讀んで自ら諸君は諸君の顏に浮かぶ笑で、それがどんなものであるかと言ふことを幾分感じられることだらうと思ふ。

（九・九）



潮風

里見弴

あらい格子縞のゆかたで角帶、白足袋の草履ばき、跨を大きくわつて、出尻(でっちり)のやうに構えた腰で調子をとりながら、まはりはごく短く、上だけ長めにした田舍臭い散髮の、少しぐらゐは白粉を塗つてゐはしまいかと思はれるほど、柄にない色白い若者が、肉切庖丁のやうな、洋銀渡金(ニッケルめっき)でピカ〳〵光る兩刀のナイフを、手玉にとつてゐた。

「……ハ、淀の川瀨は水車。……お次は、ナイフはよん挺、手は二本、尤も三本あれア片輪でげすが。……いよ〳〵四挺の亂どり、巴は波の紋！ ハ、シカリ！」

紅い手拭の頰被がよく似あふ因果な顏つきの道化師は、並んで立つて、硋すッぽ藝をしてゐるものゝ方は見もしずに、扇の要で隣を指して、口上を云ふ。三味線の年增をいれて、お囃が四人……調子が早間になつて、締太鼓が、胸と腹との邊あたりへ、操るやうに響いて來る……。

邪念の多さうな、ベラ〳〵と面皰(にきび)のふき出た若者も、全く無我の境にはいつて見えた。目をよせて、ぢつと一點を見詰めてゐる。テリン〳〵と、柄を握られるたびに刀が鳴つて、鳴つたと思ふと、綾に、筋かひに、まるで糝粉(しんこ)細工かなんかで、へ

ナ〱撓ひでもするやうに、キリ〱と空へ舞ひあがる。……午まへのことで、西へ向つた玄關さきの廣場で、ぢかに陽こそあたつてゐないが、眞ッ青な、八月の大空へ、まばゆいほどにきらめきながら舞ひあがり、舞ひくだる……。

　直衞はさつきから、いかに商賣とは云ひながら、日に何遍となくあんな思ひをするんではたまらない。と思ひながら凄いほど一心になつてゐる若者の目つきで、なんとなくいやな氣持にされてゐた。で、

「行かうか」

と、砂の上にぢかに出してある籐椅子に腰かけてゐる悦三の肩を叩いたが、然し矢ッ張り、そのまゝ不愉快な見物から目は離せなかつた。

「うん」

　曖昧に答へて、友達もぢつと見入つてゐた。

まだ海へ出かけたものはさうたんともなかつた。誰がやらせたのか、太皷の音で、午食ちよつと前の半端な時間を怠屈してゐた宿屋ぢうの人たちは、――坊ちやんお孃さんはもとより、旦那樣も、奥さんも、御隱居さんも、それから直衞や悦三のやうな學生連も、殆ど一人殘らず玄關へ出て來てゐた。襟に宿の名を染め出した袢纏に、半腿引で、岡持を肩にかけた男や、臺所で働く女たちは、うしろの方から、小松の間に立つて見てゐた。そつちは、暑さうな陽が、砂に、白く、チカ〱と耀いてゐた。

「こん畜生！　またこの女は……」

　突然、大勢のなかでいくらか遠慮して抑えた聲ではあつたが、悦三が、笑ひを含みながらも怒鳴りつけるやうな調子で、さう云ふと、ひよいと直衞の鼻のさきにつッ立つた。それと同時に籐椅子が吊し上つた。見ると、悦三の帶が、椅子のうしろに結きつけてある……。

　バタ〱バタ、と廊下を逃げて行くうしろ姿は、女中のお種だつた。

「オイ、といてくれよ。あの婆ア、ほんとにしようのないやつだ」

何ごとが起つたかと、あたりの人々が振り返つた視線の一齊射撃を浴びては、ひとかど惡黨がつてはゐるが、今年大學に移つたばかりと云ふ年ごろの悦三は、有繋に赤くなつて、籐椅子をぶらさげた尻を直衞の前につきつけた。

「オイ、早くといてくれつたら」

と、もちまへの早口で急ッついた。

振り返りながら、友達の顔さへまともに見ることが出來ないまでに、やり場に困つてゐる目つきに氣がついて、（ヤアすつかりあがつてやアがるな、いゝ氣味だ！）と思ふくらゐの餘裕のある氣持も、一方には保つてゐながらに、直衞は衆目の的になつてゐる男にかゝりあつて、まきぞひで、自分までこの馬鹿げた見物に端役を勤めなければならないことで、他愛もなくかアッとなつて了つた。世界中のお孃さんの見る前で赤恥をさらしたやうな氣持は、殆ど腹立たしいほどのものだつた……。

ヅキン〳〵鳴りさうに、頬に血がのぼつて來るのを感じて、必要以上にこごんで、——悦三と籐椅子とのかげに隱れるやうにして、手早く帶の結び目をとくと、直衞はそのまゝ玄關からあがつて、さつさと部屋の方へ歸つて行つて了つた、「オイ、なんだい、海に行かないのか」と呼びかける友達の言葉も聞きすてに……。

二

……急に空が暗くなつて來た。平濶な砂濱と、海との上に廣がつた蒼空のもとでさへ、午後の三時ごろが、殆ど日暮のやうな暗さになつて來た。いつの間にか箱根の山々が見えなくなつて了つた。それで、見馴れた景色が、初めて來たところのやうに變つて見えた。變つたと云へば、海の色が、インキのやうに黑みわたつて、碎けかゝる波がしらばかりが、まるで光を放つかと思はれるほどに白くなつた。江の島の輪廓は薄墨で描かれたやうに空へにぢみ出してゐた。片

潮の濱で、白い運動着の生徒の、ベースボールをやつてゐるのが豆のやうに見える。

風が死んで、あたりは不氣味なほど靜かだつた。懶い波の音のあひまに、ごく幽な遠雷が鳴つてゐた。……永いこと二人は默つてゐた。

「行かうか」

と悦三が云つた。柔いやうで、砂は、尻の下に堅かつた。脛を抱いてゐた手をとくと、さう誘つて置きながら、片肘をついて、體を横にした。今にもポツリ〳〵と大粒なのが來さうな空模樣に、彼等ばかりが廣い砂濱にとり殘されてゐた……直衛は返事をしなかつた。

「綺麗だなア、オイ、ちよいと見ろよ」

また暫くしてから悦三が云つた。手にさわつた濱草を、なんとなくちぎつたのに、しみ〳〵と眺め入つてゐた。それはたゞ、つまらない、防風の葉だつた。粉雨のやうに降つてゐる。ありとしもないほのかな光に、緑が、不思議なあざやかさで目にしみるのだつた。

「うん、綺麗だ」

片膝立てた上に顎をのせて、遠く水平線を見入つてゐた直衛も、振り向いて、同感した。

「そんな、上の空でなく、もつとよく見てみろよ」

悦三が得難い品でゞもあるやうに、そつと手の平にのせた防風の草をさし出した。

「だから綺麗だよ。There's no doubt about it だ」

「まア、そんなことを云はずに手にとつてみろよ」

「いゝよ、よくわかつたよ」

直衛は大きな八重歯を出して、ニヤ〳〵笑ひだした。

「何を笑ふんだい」

と、悦三もつり込まれて微笑みながら云つた。

五日ばかり前に、二人でこの避暑地へ來る汽車のなかで、性慾論が出た。丁度、騎士の稱を受ける式に、劍で峯打ちを喰はす、その dub と云ふ言葉を覺えたての悦三が、性慾敎育と云ふものも、中學卒業かそこらの年ごろで、强制的に dub するに限ると說いた。みんなあんまり誇大して考へてゐる。人生の一大事だと考へる。また無上の快樂だと考へる。そのために自慰だのなんだのと云ふ惡習が起る。早く dub して了へば、なアんだと思ふことに、いつまでもこだはつて、あたら靑春のエネルギイを消耗してゐるのだ。實際それだけ苦しむ値打のあることならいゝが、みんな不必要な煩悶をしてゐるのだからくだらない。俺が他日文部大臣になつたら、小學校からそろ〳〵性慾敎育をほどこして置いて、中學卒業試驗と同時に、一人殘らず dub を授ける。——などと、盛にその dub と云ふ言葉を應用して、氣焰をあげた。それくらゐだから、云ふまでもなく、悦三は、彼の云ふところの峯打ち式をうけてゐた、——半年ばかり前に、吉原かどこかでうけてゐた。彼の dub 制度から云へば、それでも三年ばかり餘計に「不必要な煩悶」をして來たわけだが、その說に相應の敬意を拂ひながらも、それでは何か世の中が赤くなつて了ふやうな氣持で、聞いてゐた直衞は、もちろん淸淨無垢な靑年なのだ。

そんな話から、然も結局は、騎士の身の有難さを聞かされたのだつた。さま〴〵な功德のなかの一つに、ものを見る目が明かになる、dub をうけないものには、本統の美はわからない、と云ふ一條があつた。……珍しくもない防風の葉を、無理おしつけに美しがらせやうとする友達の言葉の裏に、直衞は、比較硏究の實證を握らうとしてゐるやうな氣持を感じて、可笑しくなつたのだつた。

「とても、君のやうには綺麗に見えつこないよ」

「なぜさ」

案外悦三も無邪氣で、解せない顔をした。

「だからさ、何しろこちは dab 前だからね」

「フン」

と、少してれながらも、鼻のさきで笑つて、「pre-dubist の目、かな。それとも、濱草の緑と pre-dubist か。一寸いい新體詩の題だな」

この九月から、制服の襟にLの字をつけやうと云ふ悦三は、そんな風に戯れた。

箱根の山を隠した陰雲を貫いて、淡紫の光がチラ〱ッ、チラ〱ッと二度ほど流れた。やゝ近い雷が續いて鳴りだした。

「さアッと來るぜ」

「行かうね」

「行かう」

二人は砂を拂つて立ち上つた。渚近い、砂が黒く濕つてゐる方へ來ると、濱が揺れだしたやうな氣持がするほど、一面に蟹が出てゐた。毎年の海水浴に、濱には馴染の深い彼等だつたが、あまりの數に、暫く立つて眺めた。見ると、その何千と云ふ蟹が、一匹殘らず同じ動作を繰り返してゐるのだつた。前の二本で砂を擁え込むやうにして、うしろの二本足で穴を匍ひ出して來るのだが、出口へ頭だけ出して、目を高くさし上げて、外敵の有無を窺ふやうに見える。いゝとなると、五六歩、チョコ〱ッと足早に出て、砂を投げ捨てる。と、まるで大砲が發射した反動であとへさがるやうに、穴の口まで飛び退くが、そこでもう一度そとを眺めながら消える。例へば、護謨の紐で穴のなかに繋がれてゐるものが、何かの力で引き出されて、或極度の延長へ來ると、パチンとはぢけ返るやうな、忙しげな動作で、濱一面さわめき立ちながら、それで、雷のあひまには、松籟ほどの幽かな音が、地の上を低く匍つてゐるばかりだつた。それは實り

前のことで、なんとなく不氣味だつた。

ヤツと聲をかけると、いきなり悦三が氣違ひのやうに駈け出した。メチャ〳〵に蟹の群を蹂躙するつもりだつたのだが、直衞が見てゐると、丁度化學の實驗で、一滴の藥で忽ち液體の色が消えて行くやうに、濱一面の動搖が、見るまにひいて了つた。と、遠の方で、悦三が憑かれた人のやうに、一つところで高足を踏んで踊り狂ひだした。逃げおくれた一匹を兩足の間に圍んで、行かうとする方を踏みつけて、どつちへも行けなくして面白がつてゐるのらしかつた。

やがて、息を切らした悦三が戻つて來た時に、直衞が笑ひながら云つた。

「どうしたい」

「蟹のやつ、すつかり over-whelm されちまつて、殆ど爲すところを知らない有樣だつたね」

「フン、貴樣も存外子供だな」

「そこが可愛いとさ」

「馬鹿!」

却つて直衞の方が、大分もう海水浴の客らしく染つて來た頰を、一層赤くして、そつぽを向いて了つた。

三

夏の、永い薄暮が來た。晝間烈しい陽にほした、ほとぼりがさめ切らないやうに、ポツポとするだるい體を、緣さきに運んで、食後の水蜜桃を食べてゐた。甘いつゆがたれるのを、顎をつきだして、庭へこぼすやうにしながら、遠くのあづまやを横目で見やつて、悦三が云つた。

「貴樣が日記になんか書いてたのは、右のはしのだらう」

直衞も一寸目をやつたが、頰張れるだけ頰張つた口をもぐ〳〵させて、濡れた手の滴を庭へ向けて拂ひながら、立ち

上ると。
「ちよつと待てよ、いま手を洗つて來るから」
さう云つて廊下に上靴（スリツパ）を鳴して行つて了つた。
ポオン〳〵と、護謨鞠を打つラケツトの音が響いてゐた。
「スリー、ワン！」
「いゝとも、スリー、ワソはジユウスの基だ。さア來い」
「サアブで取るかな」
「何がそんなへなちよこサアブ、平氣の平ちやんだ」
庭の芝生で、直衞たちよりも三つ四つ若いくらゐな學生が、テニスをやつてゐたが、あづまやにゐるお孃さんたちの見てゐる前だと云ふ意識で、ひどく燥いた氣持になつてゐた。
「どうだ、はひつたらう！」
「フオルト！」
「嘘つけ！　インサイだよ」
「チエー冗談云ちやアいけないぜ。フオルトだとも。ねえ、君」
「當り前さ。フオルトもフオルトも、大フオルトだ」
と、組同士が云ひ張つた。
「そんなら、いゝよ」
「そんならなんていやだ。……」
と云ひかけた時に、丁度手を洗つて來た直衞が、椽さきに立つて眺めてゐるのに氣がついて、

「ねえ、今の全くフォルトでしたね」
テニスでは、學習院で一二と云ふ腕前だつた直衛は、こゝで、その年下の連中の仲間にはひつて一二度やるうちに、いつか師範役らしく扱はれるやうになつてゐた。
「見てゐなかつた。僕は今こゝに來たばかりなんだ」
「庄司さん、貴方はひりませんか」
「さうだな。今日はくたびれちまつたから、まアよしませう」
さう云ひながら、直衛は緣側にぢかに坐ると、低聲になつて、笑ひながら友達に云つた。
「その實、やりたいは山々なんだがね」
「ぢアやつて來いよ。どうせ尺八の稽古なんぞして、琴を彈くお嬢さんを物色してゐるやうな精神ぢアないか」
「馬鹿云ふない」
と、すぐもう赤くなりながら、「俺は、あいつらみたいに、さも見て貰ひたさうにやるのはいやだ。冷淡に思はれるくらゐに、ちつとも女にのろくない ところを買つてくれるやうな女で なくつちア いやだ。あいつらみたいな、へんなWooing は出來ない。そこ行つちやア毅然たるもんだ」
「つまりキゼンタル・ウーイングだよ、貴樣のは」
それで二人は、一度に笑ひこけた。横ッ腹が痛くなるほど笑つた。
その時テニスコートのむかふ側の徑を、お嬢さんたちが、海岸の方へ出て行つた。
「オイ〳〵、きつと自分たちのことを笑はれたと思つたんだぜ。悪いや、ほんに惡かつたなア……」
直衛は、内心實際惡かつたと思ひながら、わざとやゝ冗談めかして云つた。
「大丈夫さ。笑はれて怒らうと、どだいむかふぢア眼中に置いてやしないよ、心配するだけ自惚てらア」

「なにそんなもんでもないよ。こつちばかりでこんなに思つてるんぢやアつまらない……」
「おや、そんなに思つてるのか」
「いゝえさ、メエチエンを見ると、俺たちは、まアなんとか思ふだらう？　綺麗だとか、鼻がどうだとか、——兎に角すぐ問題にはしてゐらアね……」
「さう〳〵。直公なんぞ、まるでそれが商賣みたいなんだ」
「よせよ！……女の方だつて、さう云ふ氣持はきつとおんなじことなんだよ」
「さうかなア、この頃のお孃さんたちは、みんな利口になつてるから……」
「爺みたいな口を利くなよ」
「だつてさうだよ。……利口になつてるから、俺たちみたいに若いものに惚れたつて、どつち道夫婦になれるもんぢやアないと云ふことを、ちやアと心得てるさ。だから俺ア、女學生は嫌ひだつて云ふんだ……」
「なアに、それこそ買被つてゐるんだ。そいだけ常識が發達してゐれア、大したもんだが……」
「それア、さうかも知れないな」
「さうだとも、案外無邪氣なもんだよ、きつと……」
「その邊のところは、大勢妹をもつてる直公の方がオーソリテイだ。……ぢアまア、むかふでも、こつちを問題にしてゐるとして、一體貴樣は、どれを問題の中心に置いてゐるんだい。さつき右のはしにゐた、あれだらう」
「どうも、さうわからなくちア困るなア」
「さうか？　違ふか？……だけど、なぜ俺がさう云つたかわかるか」
「知らない」
「どつか彼女に似てゐるもの」

「彼女つて誰だい」
「貴様の日記に、彼女々々つて始終出て來るぢアないか」
「だから、それが、どの彼女だい」
二人はまた笑ひだした。實際直衛の日記には、たゞ一度往來ですれ違つたやうな女でさへも、まるで戀人のやうに書かれてゐることが、さう珍しくはなかつた。
「月見草だよ」
「なんだ。ちつとも似てゐやしない」
直衛はパッと赤くなつた。日記のなかで、月見草と呼ばれてゐる「彼女」は、目白に通ふ山の手電車のなかでよく一緒になつた少女だ。色の白い、丸顔の、小柄な娘で、悦三などの目には、てんで女としては映らないほどに、初々しさを通り越して、まるで情のない品物だつたけれど、直衛にとつては、この娘に會ふ會はないが、一日ぢうの氣持をすつかり變へて了ふほどの力で働いてゐる、生きた女だつた。
「相近うして遂に相觸るゝことなきは二條のレール也。君と共に運命に觸して此のレールの上を走ること數月、而も相接するの機なし、亦宜なりとや云はんか。」
など〻書いたこともある少女のことが、急に思ひ出された。目白の學校へ通はなくなつて了へば、もう今後一生會ふことがあるかどうかもわからない人だつた……。
「散歩に出かけるかな」
悦三に誘はれて、二人はやがて、椽さきからすぐに庭へ出た。なんと云ふこともなしに、足があづまやの方へ向いた二人はそこの椽臺に並んで腰かけて、暫くぼんやりしてゐた。
「オイ、一寸これを見ろよ」

さう云つて悦三が、草履の爪さきで、濕つた砂の上を指してゐた。そこには、護謨裏の草履の跡が、いくつも殘つてゐた。

「フン」

直衛は笑つた。悦三は立つて、同じ方へ向いた草履の跡の上に、自分の足を置いてみた、遠いのや近いのと、いろいろ置きかへてみた、――まるで女の歩幅でも計らうとするやうに……。と、急に、チエと舌を打つと、亂暴にそこらじうの砂を踏みくちやにして、一つ殘らず護謨草履の跡を消して了つた。

「さア、これでいゝ行かう」

「何がこれでいゝだい。一體貴樣は少し變だね。なんだか苛々してゐるぢアないか」

「苛々もしようさ。こゝに來てからもう幾日になると思ふんだい。一週間……。馬鹿にしてやがる。お孃さんがなんでえ……」

池のそばへ通りかゝつた。睡蓮の赤や白の花が、團栗(どんぐり)の形につぼんで、靜かに浮いてゐた。直衛は一寸足をとめて眺めた。

「なんだ、そんなセンチイメンタルな花？　どこがいゝんだい。……俺アもう東京へ歸らうかしら」

「貴樣と云ふ人間は、實際ものごとに滿足と云ふ氣持がもてないやつだね」

と、直衛が呆れたやうに、相手の顏を見ながら云つた。「俺なんか、毎日てきめんに肉はついて來るし、食ひものだつてまア〳〵充分だし、經濟も來てから氣の向いた時だけで五十頁讀んだんだから大勉强の方だし、メエチエンは見放題だし、こんな結構な身の上はないくらゐに思つてるんだ。……この花だつて、たゞ漫然と見てゐる分にやア、綺麗なもんだぜ。センテイメンタルだのなんだのつて、わざ〳〵批評だか解釋だかをつけて、ひとりで怒つてたつて爲樣がないぢやアないか。俺なんか、貴樣にでも數はらなければア、睡蓮がセンテイメンタルだなんてことは、一生涯知らずにすま

して了ふところだつたんだ」
「俺に云はせれア、貴樣はまたへんな悟をひらいてゝ、まるで爺みたいだよ……」
「うん、それアさうだ……」
「それ〳〵、さういやに輕く受けて、すぐ承認しちまふところがいけないんだ」
「いけないつたつて爲方がないよ。それアね、貴樣が中々ものに飽き足らないで、始終がつ〳〵してゐる氣持は、積極的で大いにいゝと思ふよ。その方が俺たちの年齡として本統だとも思ふよ。偉い人が、運命に對しても、齒をむき出したやうのやり方で押し通したのを考へると、羨しくもなるよ　だけど、それア俺の柄ぢアないんだ。いや、さうぢアない、生れつきの性分にやア、わりにさう云ふところもないぢアないんだがね、何しろ俺は輕燥な性分だから……」
「それさ、すぐさう輕燥だなんて、平氣で自分を否定しちまふのがへんだよ」
「へんかも知れないが、子供の時から俺は輕燥でいかん、としみ〴〵思ひ込んで來たんだから、今更どうも爲樣がないよ。こんな性分で、惡く圖に乘つて、運命に反抗しやうの、ものごとに飽き足りやうのつて云ふやうな非望を起した日にやア大間違ひだ、爲にならない、とちやんともう覺悟してゐるんだから駄目だよ。いくら貴樣がおだてたつて、無駄だよ。俺はどんな現在にでも滿足して、相應に面白がつて行けるやうに、ちやんと消極的に、あきらめ的に、自分を拵へあげやうとしてゐるんだ。勿論俺なんざア別段偉くならうとも思つてないんだから、氣は樂だね。まア銀行にでもはひつて、成べくゆつくり月給もあげて貰つて、その代りあんまりこき使はないやうにして置いてくれれア、それでもう滿足さ。默つてゐたつて、そのうちうちでお嫁さんを貰つてくれるだらうしさ……」
「然し、それがみんな本統なら、貴樣も一寸えらいな」
「えらいか？　そいつア困つたな。いよ〳〵えらいとなると、また俺の人生觀が變つて來ることになるんだが、もうそいつア厄介だ」

「なんて悟りすましたやうな顔をしてゐるが、直公も、女にかけると、隨分がつ／＼するぜ」
「あゝそれアするね」
と心から同感したやうに、友達の方を顧て、「殊にこつちに來てからがひどいんだ。俺ア、自分でも、こんなに燃えていゝか知らんと思つてるよ。……實際ひでえからなア……」
「そんなに殺氣だつてるのか」
「殺氣だつてるね。だけど、大丈夫だよ。俺にアとても殺意は起らないから……」
こんなことを話しながら、二人は海岸へ出て、ブラ／＼江の島の方へ歩いて行つた。永い盛りの薄暮も、有繋にもう夜の闇に席を讓つて、空には星がきらめきそめた。遠くから、白いゆかたの二人づれが近づいて來た。時々煙草の火がパツ／＼と赤く見えた。近づいてみると、それは、片瀬の學習院の游泳部の方に來てゐる中學生だつた。
「オイ、こら／＼」
悦三がつくり聲でさう云つた。二人は慌てゝ煙草をうしろに隱したが、こつちをすかして見て、
「なアんだ、川瀬さんか」
「いま君のとこへ行かうと思つて出かけて來たんだ」
「こゝはもう散歩區域のそとだよ」
悦三は、わざと先輩ぶつて、「それに、煙草なんぞ喫んで、けしからんな」
「庄司さん」
それには返事もしずに、柳と云ふトボケた顔つきの少年が、「なんかご馳走してくださいな」
「君たちこそ、片瀬饅頭でも、お土産に持つて來るがいゝんだ」
「あゝ、今度來るとき持つて來よう」

美少年の安井が、狡猾さうに、ぬからずさう答へた。悦三は、以前にこの美少年に戀してゐたことがあつた。夢中に焦れてゐた頃にはどうにもならなくて、もう要もない今になつて、かう云ふ機會が來ることを可笑しく思つたりしながら、

「ご馳走してやるから、云ふことをきくか」

「なに云つてるんだい」

もうその安井が、薄黑く見えるほど鼻の下に生毛を延ばして、いつぱしちごさんでも拵へてゐるやうな年ごろだつた。

宿へ歸つて、東京から送つて貰つた果物の罐詰などを一緒に食べて、暫く話すと、二人は門限があるので慌てて歸つて行つた。それを送つて、もう一度濱へ出ると、舊暦五日か六日ぐらゐの月が、海の上の沖天にかゝつてゐた。海獸風が涼しく頬を撫でゝ流れた。

ふと、並んで歩いてゐた安井の手が、直衞の指先にふれると、そのまゝキユウツ握られた。と、殆ど同時に、と、まるで、手と口とが別の持主に屬してゐるやうに、安井が平氣な顏で尋ねた。

「明日游泳に來るの？」

女では勿論のこと、男でも、年下のものから、さう云ふ風にしむけられた經驗のまるでない直衞は、我ながら情けないほどに心を騷がされて、すぐにはどう云ふ感情も浮きあがつては來なかつた。が、その人を食つた口の利きやうで、まづ不快にされた。

「どうするかわからない」

江の島葉山間の遠泳を、學習院の游泳部で試みた最初の年に先頭を勤めたほどで、直衞は得業生のなかでも、——殊に飛び込みや浮身や潛りなどの業ごとにかけては、先輩たちをも壓するほどの技倆をもつてゐたので、學校をすませて

了つた今年からは、ほんの包み金ではあるが、兎に角報酬をとる游泳部助手として、本來なら毎日片瀨へ出勤しなければならない身の上だつた。初めのうちは、悅三もおつきあひなり、大勢の友達に遇へる樂みもあつて、一緒に出かけたが、鵠沼からは可なりの道のりを、海岸づたひに歩いて行くのが臆劫になつて、だん〳〵には、「まア、今日は怠けろよ」などゝ誘惑した。さうされゝば、直衛も、たつて一人でも行かなければならないと云ふほどに義務づけられてゐるわけではないので、自然と怠けがちになつて來た。――それにしても、この場合の、「どうするかわからない」は、ひどく素氣ない挨拶には違ひなかつた。

「成べくなら來ない？」

さう云ひながら、少年は、握つてゐる手に力を入れた。

「あゝ」

最初の、動悸が亢るほどの心の擾亂には似げなく、直衛は、見るまに白々しく冴え返つて行く氣持を、自分ながら不思議に思ふばかりだつた。

寢ぼけたやうな、けうとい月光が、見渡すかぎりの砂濱を、銀灰色にけぶらせてゐた。波が、聲高く、低く、長い岸に沿つて、靜かに、いつも同じ獨語を繰り返してゐた。――暫く、みんな默つて歩いて行つた。下駄の下で、砂がサク〳〵と鳴つた。

「もう歸らうぢアないか」

突然悅三が云ひだした。直衛も、一日の遊び勞れで、さつきから、大分眠くなつてゐたが、それでも、なんと云つても、柔く、溫い手の平の握力は、惡い氣持のものでもなかつた……。

「歸るの？　もう少し送つて來てくださいよウ」

と、安井が、直衛の顏を覗き込むやうにしながら、甘えた調子で云つた。

「あゝ、だけど、もう眠い」
直衛も、そこに、幾分かだゝッ子じみた氣持を托して答へた。そして、ギュウッと、堅く握り返してから手を放した。
「明日は、きつといらつしやいよ。僕、御前泳ぎが教へて貰ひたいんだ」
安井がさう云つて、とかく出ツ齒の多い日本人には珍らしく、鮫のやうに、鼻の下から逆に引ツ込んでゐる可愛らしい口元で笑つた。
「生意氣云つてらア、お前なんぞ、まだ御前泳ぎは早い〳〵」
悦三が揶揄つた。
「よござんすよ。川瀬さんなんぞに教はらふたア云ひませんよ」
「なんだ、こいつ!」
「あゝ、ごめん」
少年たちは、二三歩逃げるやうに駈けて、それから振り返つて、「さよなら」を云つた。直衛たちもそれに答へて、宿の方へ引き返した。悦三が、暫くしてから、笑ひながら云ひ出した。
「安井のやつ、いやに Koquetisch だな」
「貴樣は、せんに隨分惚れてたッけなア」
「うん、あれなら今でもいゝや」
「駄目だよ、あいつ、俺に惚れてやアがる」
「ふん」
悦三が鼻のさきで笑つて了つたので、直衛は、たつた今の出來ごとを話さうかと思つてゐたのだが、押し返して云ふだけの氣もなく、それに、なんだか面倒になつて、そのまゝ默つて了つた。

「だけど、こんな晩に、惚れた女と二人で、かうやつて歩いてゐたらい〻だらうな」

さう云つて悦三は空を仰いだ。「月並だが、夢のやうな晩だ」

「俺は、叔母さん、――かなんかの方がい〻な」

「嘘云へ、K公だらう」

「K公でもい〻な。だけど、全くのところ、あんまり惚れてるひとより、好きと云ふ程度のひとの方がい〻な。どうも俺は、惚れてるひとの前だと、氣が張つて、窮屈でやりきれない……」

「こんな晩に、好きと云ふ程度の女と歩いててみたがい〻、すぐ惚れたと云ふ程度までいつちまふさ」

「さうかなア、俺なら大丈夫だと思ふがな」

「駄目さア。モウパッサンの小説にもあるよ。Moon-light つてのがね。月光の加減で惚れちまふ話だ。論文なら、月光の戀愛に及ぼす影響とでも云ふところだね。それアおそろしいもんだよ」

安井のしたことも、その「影響」だつたかも知れない、直衛はふとさう思ふと、可笑しくなつて、くす／＼笑ひだした。悦三も、自分の云つた言葉だけの可笑さで、一緒に笑つてゐた。

宿に歸つて、寢床にはひつてみると、海岸を歩いてゐた時分にはひどく眠かつたのに、どうしたのか目が冴えて了つて、直衛は、中々寢つかれさうもなかつた。それで、日記帳を持ち込んで、腹ン匍ひになつてから書きだした。

俺は美しい女を知る位なら、必ず愛されたいのだ。愛されずに、自分一人ヤキモキしてるほど馬鹿氣た氣のきかない事はない。だから俺は宿でも往來でも、女を見ぬやうにしてるのだ。

そこで、額を枕にのせて暫く考へてゐたが、また萬年筆をとると、にや／＼笑ひながら、括弧に入れて、

少しウソらしいな。

と、書いた。

すぐあとから寢に來ること丶思つてゐた悅三が、隣の部屋で、机の上をカタコト云はせ始めた。

「オイ、寢ないのか」

「なんだか、馬鹿に藝癢を感じて來たから、書きだしてみるんだ」

「ゲイヨウたアなんだい」

「藝術的癢みさ」

「あ丶、癢か。そんな言葉が昔からあるのかい」

「あるとも」

「ふうん、面白いね、癢くなるのか」

「ムヅ／＼して來る感じがい丶だらう？」

「あ丶、い丶よ、素敵にい丶よ。藝術蚤にたかられたやうで……」

「オイ、よせよ。折角の癢みがとまつちまふぢアないか。ナフタリンみたいなやつだな」

悅三は蚤ぎらひで、旅行でもする時は、きつとナフタリンを持つて出かけた。それを床の上に撒いたり、食れたあとへこすりつけたりしてゐた。直衛はまた、隣の寢床であの藥の匂ひをプン／＼させられると、頭が痛くなると云つて、大嫌ひだつた。

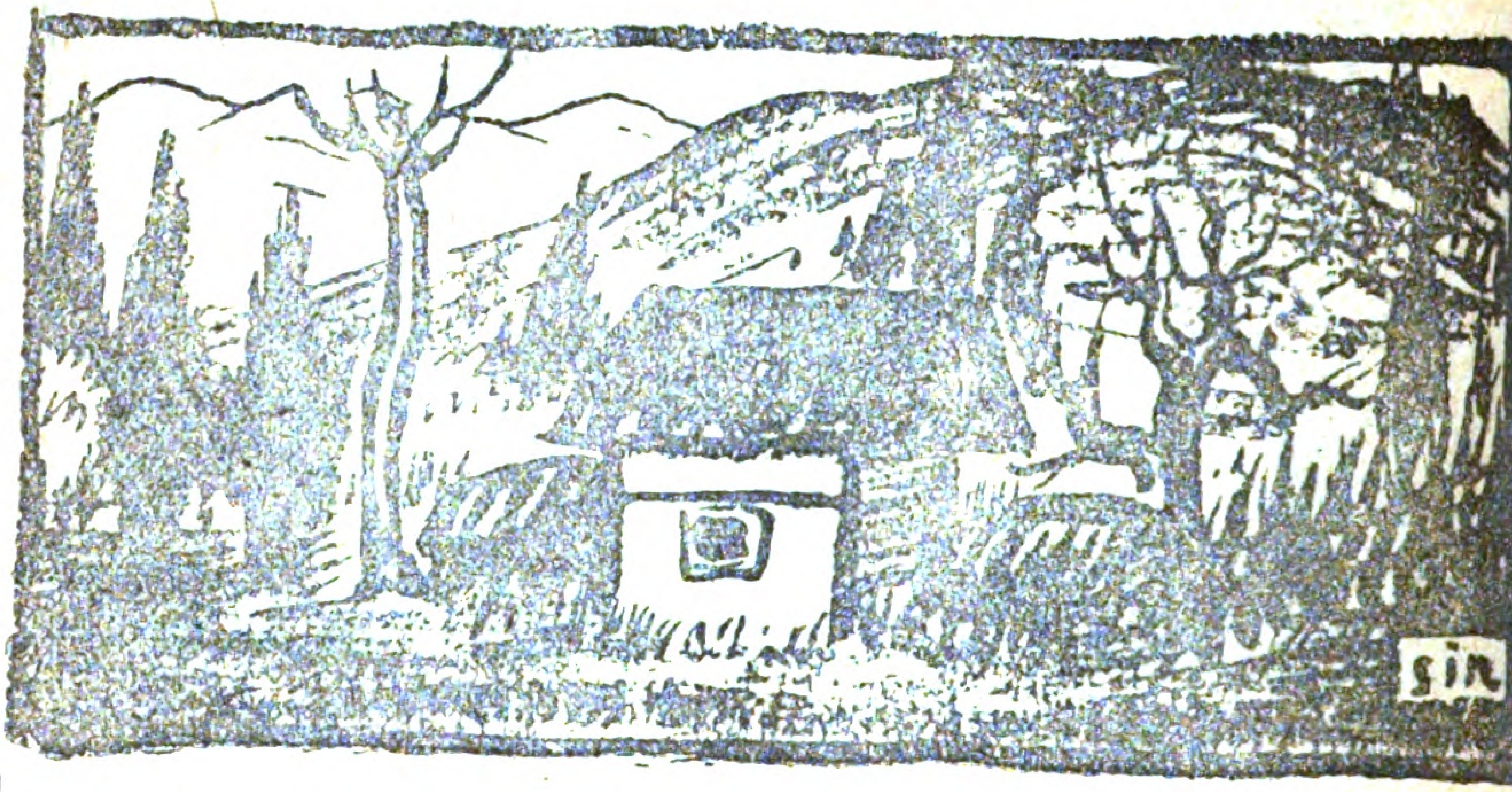
「ナフタリンはひでえなア」

と、苦笑ひながら、「ぢアまア、せい／＼藝術蚤にお食れなさい。いつまでも癢みがとまらなかつたら俺のそばへ來て、匂ひでも嗅ぐさ……」

「うるさい／＼。もう交通遮斷だよ」

「俺もさう云へば、なんだか癢くなつて來たから、こつちでも、負けずに書かうかな」

無精ッたらしく、寢間着の懐から手を出して、それを受けとつたが、自分へ來てゐた叔母からの手紙の封筒を見たゞけで、すぐ立つて、みんな一纏めに椅子の上に置くと、さつさと洗面所の方へ行つて了つた。
「ねえ、お才ちやん」
「え?」
「川瀬さん、お前さんに惚れてるね」
「そんなことないでせう」
　お才は色をも動かさなかつた。
「二人ともいゝ男だけれど、矢つ張り庄司さんの方がいゝかね」
「いゝ男のことを云つたら、川瀬さんの方がいゝでせう。だけど、あたし、あの方きらひ」
「オヤ、この娘は庄司さんに岡惚してるよ」
　お種は、横目で睨んで、遠くから指さきでつツ突くやうな手つきをした。
けれども、お才は、今度もニコリともしなかつた。すまして　默つてせつせと床をあげてゐた。
「あゝあ、もうまたお晝飯か」
　お種は、重いものでも持ち上げるやうな格構をして、欠と伸とを一緒にした。
　急に近くに來て、油蟬が暑苦しく鳴き始めた。(未完)


gin

「かきなさいとも、ポリ〳〵かきなさい」
「うるさい〳〵。もう交通遮斷だよ」
暫くして、直衛の日記にこんなことが書かれた。
「叔母さん、實はね、僕はKちやんに接吻したんですがね、惡いでせうか」
叔母さんはテーブルの彼方側で、編物をしながら、ニヤ〳〵笑つて居られる。
「そりや、若いうちですもの、仕方がありませんよ」
と云はれたのでまづ安心した。然し其後僕が行くと、叔母さんはきつと出て來られて話をされる。だからKちやんのピアノも獨りで樂しむ事が出來なくなつた。

「オイ、一寸うまい散文詩が出來たぜ」
けれども、もう悦三は答へなかつた。惡かつた、と思ひながら。直衛はゴロリと枕についたが、暫くすると、また起き返つて書き始めた。

庭にテニス・コオトがある。夕方お孃樣方の見てゐる處で書生が四人ばかりでやつてる。俺も一緒になつてやつて、見て貰ひたかつた。けれども俺は、あの書生の如く、見て貰ひたさうにやるのはいやだ。「女にもてやうとしてゐるのだ」と云ふ事と、女から見られるのがいやだ。「少しも wooer でない、女にのろくない」と云ふ處が女に見せたいのだ。だから飛び出してやつても見なかつた。毅然として男らしさうに見せかけて居た。さうしたら、川瀬が俺のことをキゼンタル・ウウワアだと云やあがつた。實際これも、自分のいゝ處を見て貰ひたいと云ふのだから、一種の名譽心には違ひない。名譽心なんて駄目だと云ふかも知れないが、人格修養上缺く可らざるものだ。之あるが爲に人格が高くなるやうだ。恥を知るとか、男らしいとか云ふのは、皆他人を相手にしてることのやうだ。見てくれる人がなけりやあ恥のかきやうがない。閑居して一人で恥をかいたと云ふよりは、公開の席上で赤

恥を曝したとか、人に見られちやあ恥かしいと云ふ方が普通だ。男らしくつたつて見てくれ手がなけりやあ張合がない。「俯仰天地に恥ず」なんかは、天地を相手にして居る。天に見られた時、地に問はれた時、少しも恥しい處がない、偉いと褒られたいと云ふのがその精神だ。つまり、天地に對する名譽心だ。善をするんだつて、良心に褒められたいからだ。

夜妙に寝られなくなつた。無理に寝やうとしたつて、寝られないものは仕方がないんだから、つまらぬ悶えはやめにして、色んな事を考へながら、この日記をかく。

彼女の事はこの頃ついぞ思ひ出さなかつたが、この時は比較的强く襲ふた。こんな句を心のなかで云つて見た。

○夢よりも淡し目白の月見草

○日は落ちぬ月は傾く荒野原
　たゞ麗しき月の孤兒

月の孤兒とは月見草の事だ。

○日に疎く月に煙となるものを
　などてか消えぬ吾が情(こゝろ)かな

もういゝ加減消えたかと思つて居た彼女の印象は、まだ割合に深い。

今玄關の時計が一つ打つた。なんだか滑稽になつて來た。

○寝られない夜にはおならも玉箒

戀人も屁も一緒くたゞ。涙が出て來たからもう寝られるだらう。

もう一つ書かう。

どうも俺は、宿にゐる Fräulein に興味を持ちすぎるやうだ。之はいけないとは云はない。（寧ろ之のみを夢みて死んで了ひたくも思ふ）けれども現實の半面を忘れてはいけない。夕方二人で散歩した。星が綺麗だつた。砂の上に仰向にねて星を見て居ると、段々消えて行つて了ふ。空の色、空の星、砂の色、あゝ俺は滿足だ、と思ふ。が、やつぱり心は liebe を求めてやまない。

川瀬は彼女を間違へてる。ちゞれッ毛の女をつかまへて、月見草に似てゐるなんて云ふが、月見草だつてあんな大山大將の奥さんみたいな頭はしてやしない。（尤もあの連中はクリスチヤンださうだから、あんな頭が流行つてわざとあゝしてゐるのかも知れない。）

今朝川瀬の日記を讀んだら、Zimmermächen ist sehr zärtlich だなんて書いてあつた。そしてその次に、「但しそれは始終でない。『三人で蚊帳をつるとお化が出るよ』『ウソ云つてらア』『出るとも、一體この部屋で……』『え?!』この『え?!』と云ふ言葉が肝性のためか、みそッ齒なのか、少し黒くなつた小さな齒を見せてあいた口から洩れ、目を一寸瞬つたその瞬間に於て zärtlich なのだ」と云ふやうな事が、例の小說めかして書いてあつた。一體川瀬は Fräulein にはちつと（でもよいかも知れないが）興味を持たないで、すぐみそッ齒なんぞに興味をひかれて居る。どうしてもあいつは俺より大人だ。

さあ今度こそ寝よう。

四

「……お目ざめあつて然るべし……」

假聲めかしたそんな言葉の斷片が耳に殘つて、直衛は目を覺した。

やつと三十になるかならずなのだらうが、直衛たちの目には、もういゝ加減の婆さんに見える女中のお種が、蚊帳に顔を押しつけて、なかを覗きこんでゐた。悦三は、と見ると鼻から口の周りを脂でテカ〳〵に光らせて、まだグッスリ寢込んでゐる。

「あゝあ」

直衛は大きく伸をしながらもう、「何時だい？」

「十時過ぎましたわ。朝のお膳がいつまでも片づかなくつて仕樣がないつて、お才さんが困りぬいてるから、そこで、乃公おん自らご出馬になつたんです。…まアま、川瀨さんの寢相と來たひにやア、百年の戀もさめ果てるわねえ」

「オイ、悦べえ、百年の戀がさめるとさ」

「うるさいな」

と、悦三は目をつぶつたまゝ眉間に深い八の字をよせて、本氣に怒つたやうな聲を出した。

「だつて、それぢア困りますよ」

「何が困るんだい。それとも、この宿屋にやア、何時何十分起床つて規則でもあるのかい。他人の睡眠を尊重することを知らないやつは、俺ア大嫌ひだ！」

「ホウ」

と、お種は脣を尖らせて、おどけた風に吃驚した顏つきを扮つた。「他人の睡眠を尊重と來たひにやア、どうとやらしてショウシヤガンニエウスの形だ、アッハヽヽヽ。そんな英語は、こしとらにやア、通用しませんよ」

「オイ怒るぜ、ほんとに。ご隱居さんやお孃さんの客たア違ふんだ。宵の口から寢てゐる人間と一緒にされてたまるもんかい」

「それアほんとだよ。川瀨は昨夜書きものをしてたんだ。俺が寢ついたんだつて、一時過ぎだつたもの……」

「俺なんざ明るくなつてから寢たんだ」

「誰アれも頼みもしないのにね……」

「なぐるぞ」

「逃げるぞ」

「駄目だ〳〵。かう云ふ氣違ひにあつちやアかなはない。目がさめちやつた」

「こつちやアまた起しに來てゐるんですもの、ねえ、庄司さん」

「一體いま何時なんだ」

「だからさ、もうおツつけ十一時ですよ」

「さうか、もうそんな時間か。……嘘だらう。さばよむと承知しないぞ」

「嘘なもんですか。それに今朝は皆さんいやに早起だつたもんだから「こちらのお寢坊がひときわ目に立つんですよ」

「さうか、十一時か。六、七、八、九、十、十一と」

と、悦三は指を折つて見て、「そいでも六時間寢たな。よし、そいちア起きてやらう」

「まア、ほんとに五時頃まで起きていらしつたの？」

お種は蚊帳をはづしながら、呆れ返つたやうに笑ひだして、「それぢや、河合さんのとこなんかとは、晝と夜とがまるで喰ひ違つてるわけですわね。あちらはね、今朝四時のお目覺。そいでね、五時からご祈禱をなすつたんですよ」

「なんだい、河合つてのは」

「アラ」

と、驚いたやうに目を瞠つたが、すぐ氣がついて、笑ひながら、「とぼけたつて駄目よ」

「とぼけるもんか。まさか河合武雄がご祈禱をしやアしまい」

「クリスチャン・パアテイだよ、きつと」
直衛がニヤ〳〵しながら云つた。
「アラ、ほんとにご存知ないの？」
と、お種は、チャリン〳〵と蚊帳の鐶を涼しく鳴しながら、「貴方がたは學習院でせう？」
「それがどうか致しましたかね」
「そんなら、女子部の河合さんをご存じないなんて……。嘘よ、きつと、とぼけていらつしやるのよ」
「へえ、そんなに有名な女がゐるのかい？……一體、どうしてまたさう有名になつたもんだらう。不良少女かね？」
「まるでゼロね。うちには隨分大勢學習院の方がいらつしやるけれど、河合さんを知らないなんて方は、それア一人だつてありアしませんわ」
「ぢア、もぐりかも知れない……」
「まつたく！……有名な美人ぢアありませんか」
「あゝ、美人か」
「貴方がたは、どうも少しへんですね。庄司さんは、游泳の先生をなさるくらゐだから、尻ご玉をねらふ方かも知れないけれど、一體貴方は、ゆく〳〵は小說家にでも成らうツて方ぢアありませんか。そんなぼんやりしたことでどうなるんです」
「へえ、以後氣をつけます。えゝ、河合は美人、河合は美人、河合は美人と。オイ、これを早口で云つてゝごらん」
「くだらない」
「くだらなかアないよ。河合は美人、河合は美人、〳〵、クワイは美人、クワイは美人、ね？」
「可怕(こは)いは美人の方がいゝや。その方が敎訓的だ」

と、直衛が、はばかつた褞袍着の前を掻き合せながら立ち上つて、「外面如菩薩、內心如夜叉、可怕いは美人、と」
「なんて涼しい顔をしていらつしやるが、皆さんだつて、內心、……それこそ內心なんだかわかりやアしませんわ。如、
如なんだらう」
「如排々か」
「さう〳〵」
「嬉しがるない」
「さてと、顔を洗つて來るかな」
　直衛は揚子歯磨をもつて出かけやうとした。
「まア待てよ。一緒に行くから」
「早く起きちまへよ」
「そんなに云ふない。今…… I can't get up ……」
「馬鹿だな」
「馬鹿だつて爲様がないよ。……一遍東京へ歸つて來やうかしら。It's quite necessary になつて來た」
「いやな川瀬さん……」
「なに云つてやがるんだい。お前なんぞの知つたことぢアないよ」
「それアあたしの知つたことぢアありませんさ。だけど、ちアんとわかつてますよウだ」
　そこに、部屋の受持のお才がはひつて來た。日によつて、美しく見えたり、醜くなつたりの烈しい女だつた。十八九と云ふ年ごろによく見る、しまつた肉づきの、丈も中加減だつた。顔だちは、どつちかと云へば、淋しい方だつた。
「お才ちやん、一寸手をかしておくれな」

「え？」

「川瀬さんが起きられない人だつてから、お前さんそつち側から手を引つ張つてあげてくれない？　あたしはこつちを引つ張るから。いゝかい、一、二の三だよ……」

「起る、起る、起る〳〵〳〵」

「さア、お起きなさい」

「起るから、手を放してくれよ」

　お才はすまして、直衛の床をあげにかゝつてゐた。

「あのね、君、オイ君」

「お才ちやん、呼んでいらつしやるよ」

「ア、あたし？　こちらを呼んでらつしやるのかと思つて……」

　と、直衛の方を一寸目で指して、「どうもすみません」

「郵便は？　來てない？」

「貴方も、相手が若いもんだと、いやに優しくなるんですね……」

「それアさうさ」

　悦三は、いつになく、パツと赤くなつて、急に勢よく飛び起きた。「顏を洗つて來ようツと」

　お才が隣の間から手紙や新聞を持つて來た時には、悦三はもうゐなかつた。で、緣側の籐椅子に腰かけて、やがて午に近い陽がカツと照りつけてゐる庭先を、ぼんやり焦點もなく見詰めてゐる直衛のそばへ行つて、

「お手紙」

「フム」

無精ッたらしく、寢間着の懐から手を出して、それを受けとつたが、自分へ來てゐた叔母からの手紙の封筒を見たゞけで、すぐ立つて、みんな一摑めに椅子の上に置くと、さつさと洗面所の方へ行つて了つた。

「ねえ、お才ちやん」

「え？」

「川瀬さん、お前さんに惚れてるね」

「そんなことないでせう」

お才は色をも動かさなかつた。

「二人ともいゝ男だけれど、矢つ張り庄司さんの方がいゝかね」

「いゝ男のことを云つたら、川瀬さんの方がいゝでせう。だけど、あたし、あの方きらひ」

「オヤ、この娘は庄司さんに岡惚してるよ」

お種は、横目で睨んで、遠くから指さきでつッ突くやうな手つきをした。

けれども、お才は、今度もニコリともしなかつた。すまして　默つてせつせと床をあげてゐた。

「あゝあ、もうまたお晝飯か」

お種は、重いものでも持ち上げるやうな格構をして、欠と伸とを一緒にした。

急に近くに來て、油蟬が暑苦しく鳴き始めた。（未完）

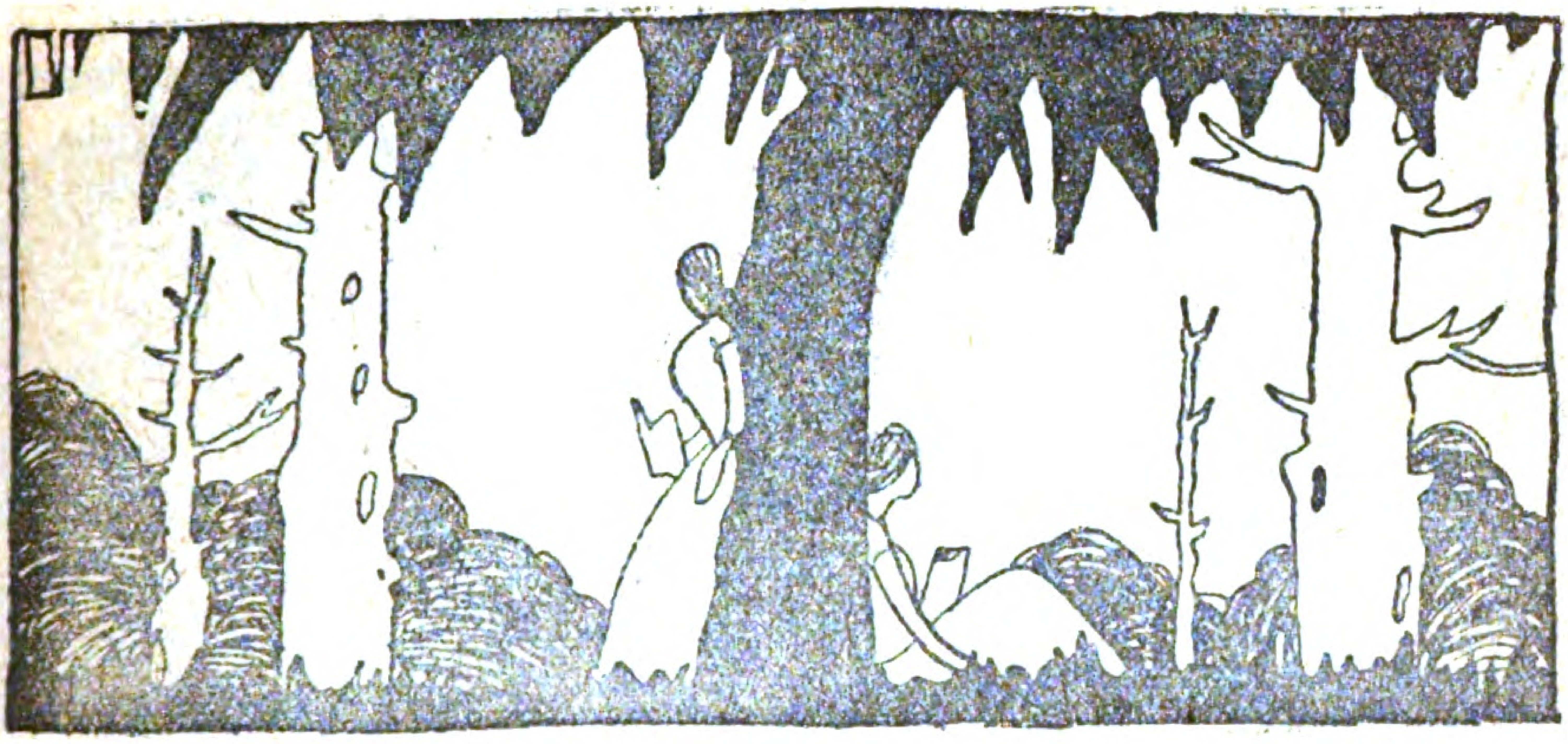


——（社會講談）——

□奥女中江島　大庭柯公

□勘平の最後　生方敏郎

□石川五右衛門　上司小剣



奥女中江島

大庭柯公

一

エー、當世はいろ〳〵の新らしいことが御流行と相成まして、何御不足のない御身分のお方々が、お道樂に「新講談」一名「社會講談」を、御銘々にお試に相成ますといふ次第で、先づ以て旦那藝とでも申上げべきもので御座いませう。私如きはそれとは事かはりまして、最早商賣換えをいたし、來春あたりからは寄席の御厄介に相成りまして、憚りながら高座より皆樣方の御機嫌を伺ひますほどの覺悟で御座います。辯じます處甚だ不手際至極では御座りませうが、眞劍の段を何分とも御賞美下さいまして、格別のお引立を願ひ上げます。

お話は徳川七代將軍家繼公の正徳三年から四年へかけましての、女性を中心と致しました、前後に例のない出來事で御座います。六代將軍家宣公の御臺所は、前關白近衛基熙公の姫君で、未だ家宣公が甲府殿として、將軍家御世嗣と定まりました時分の御入輿で御座いました。寶永の六年愈々征夷大將軍としての御宣下がありまして、六代將軍の御代となりますと云ふと、千代田城内外の諸事が、有職故實本位

の京都式を學ぶことに相成まして、遙かに典禮のお稽古といふ騒ぎで御座います。二言目には關東の猕猴冠と上方から言はれることが、如何にも辛かつたものと見えまして、故實や儀法の御研究といふ次第です。新井傳藏と申した一介の處士が、博學の聞えが高かつたばかりに名さへ勘解由と改めて、一朝にして將軍家の侍讀と相成りましたのは、全く有職故實尊重論のお蔭で御座ります。

六代將軍の治世は、僅か四年間に過ぎませんが、この四年の間で、大奥の御行事萬端は、驚くばかりに京都式の虚禮儀式を本位とすることになりました。林家はじめ白石先生の如きは、詩經禮記など漢土の式典をさへ持出して、京都式の儀典へ足をかけるといふの有様でありました。御用學者の心理などいふものは、幕府時代も今日も畢竟同一のものと見えます。しかも下々の者——今日の言葉を以て申ますれば、民衆——の睨んでゐる處は、何時の代にも確かなもので御座います、少なくとも新井白石のやうな學者の見當よりは、ヨリ正確なもので御座いました。

彼の關白近衞公が江戸へ下向に相成りますことに就て、極く面白い挿話が御座います。其時代に頻りに流行りました落首と申すもので、卽ち上の御政事向きに對して、下々の諷刺文に嘲罵で御座います。その當時讀まれました落首に、

「近衞公下から讀めば〇〇〇殿ぐず〱せずに早く起たんせ」

と云ふのが御座います。御承知の通り公卿の位倒れで、京都の堂上公卿ほど貧乏なものはなかつたもので、それが關東へ勅使として參ります時分には、例の空威光だけ光らせますものゝ、其實しつかりと現ナマのお土産を握つて歸りますのが、何よりの役徳なのであります。民衆といふ慧眼家、殊に江戸ツ兒といふ奇抜な落首子は、兎角お土産物を握るために、江戸御逗留の永引く近衞殿を嘲つて斯く讀んだもので御座います。すると其返歌と題する落首が直ぐまた作られて、然るべき目貫の場所へ貼られました。その返歌といふのは、

「わしぢやとて年寄〇〇ぢやあるまいし、握りさへすりや直ぐに×××」

京都側の腰拔けと關東側の買收政策とを遺憾なく皮肉に嘲笑してをります所が、一段のお慰みで御座います。

お話は兎角横道へ入り過ぎましたが、幕府御政事向きの表面へ現はれました處でさへ、概して斯ほどの馬鹿げ加減であつて見ま[illegible]は、人知れぬ千代田城の大奥には、どれ程の愚劣なタワ事が、日夜行はれて居りましたものか、遠い昔の事とは申せ今日からでも、容易に想像のつく次第で御座います。初代の家康公が十五人の側室で、後世を驚かせてをりますが、それが十一代家齊公に相成りますと、お手附きの中臈即ち側室が、驚く勿れ四十人、その四十人の側室に儲けられました子女が五十五人と申すので、これとて記録にのりましたものだけが此の數で御座いますから、不圖した出會頭に出來ました將軍家の種は、どれ程あるやら分りません。

これ等から見ますると六代將軍家宣公は、自分にも御臺所が例の近衛殿の姫君といふ所から、自然閨中にも左程の亂行も御座いません。唯だおすめの方、左京の方と申す二人の側室がありましたばかりで、將軍家としては先づ閨門の正しかつた方で御座いませう。この左京の方こそは七代將軍家繼公の御生母で、家宣公薨去後は月光院と申して、七代將軍御在職僅か四年間では御座いますが、奥向きの實權は總て此人の手の中に入つた次第で御座います。お話の主人公に相成ります女中江島こそは、この月光院のお附女中で、主人月光院の大奥にての權威は、やがて自然にお附女中の權威と相成りました。

二

御廣敷にて規定通りの立會人一同の前で、『奥向きの事は親兄弟たりとも一切他言致間敷候』宿下りの節物見遊山芝居見物等決而致間敷候事』と申渡されるのが、奥女中召抱への際の御定例でありました。月光院が未だ中臈として、六代將軍の侍妾左京の方として、將軍の御鍾愛を得てをります際、その附女中と成りました江島も、勿論この定まり文句の御奉公心得書を讀みきかされて、召抱へられたには相違御座いません。本來が御家人の家に育つた若い女だけに、宿下りに芝居を見るなの、一生御奉公致せのと申渡されたことに、輕い反感に感じたに相違御座いません。しかも其處に

は唯一つの大きな望みが御座いました。と申すのは、主人左京の方こそは、江戸の町醫師の娘で老女玉江の部屋子であつたものを、或時公の御目に留つたばかりに、先づ御三の間に置かれ、後に御側に召出され、寶永の六年にお世繼をお産み申上げたと云ふばかりに、これ程の出世である。さすれば左京の方の附女中も、決して同樣の運を担はずとは限らぬ、況して人に後れず物に臆せぬ面魂の江島には、これ程の抱負と自信とが、胸中に秘められてあつたことは明かにで御座います。

『わたしや深川貝殻育ち、貝の柱に蠣の屋根。ヨーイ〳〵善い粉が出來たぞえ』
『仇な淺蜊と添はうよりや、わたしやお前の「バカ」がよい。ヨーイ〳〵善い粉が出來たぞえ』

奥向一切の張り物用にも、糊を挽くその糊挽歌のこんなのが、澄んだ聲で傳はる長閑な千代田城の太平な春を、江島は三ツ四ツも迎へました。

　正月七日の御鏡餅曳の行事にも、幾度となく出會ひました。馬鹿氣で大きな御鏡餅が、お三寶に載せられて先達が引張つて行くと、その後から、春駒に見立た大摺子木に跨つた役人、それに續いては炮六を笠に換へ、大根と牛房を兩刀に擬したものなど、道化を盡した行列が、女中の部屋〳〵から大奥を練廻して、夜の四ツ時まで大賑ひをやりまして、四海浪靜かなる御代の壽いとたうとけれと祝して、迹を收める習ひで御座います。二度三度と斯んな馬鹿げた光景に出會ひました江島は、大奥の事と人とが、案外に組し易いと感じました。

　正月十一日の夜はまた格別で座います。去年中に御膳所でお召抱えになつた新參の御仲居御末に、吉例として是非とも勤めさせます裸踊で御座います。足を運ばせ手を動かすにも、總て式作法の備はつてをるやうな大奥で、如何に正月の餘興とは申せ、如何にお目見得以下の御末風情とは云へ、女の身の忌むべく羞らはしき裸體姿を、燭臺の火の煌々と點され、綺羅を盡して控えをる大勢の女中の前面を、大型の御幣、摺子木、貝杓子をそれ〳〵裸體の肩にかついで、順

順に繰出し練歩きますと、古參の御末十數人が、藥罐の底やら桶の底を叩き立て、

『新參舞を見しやいナ、新參舞を見しやいナ』

と囃し立てるのであつて、當夜は御臺所さへ唐子の間に入らせられて、お透見遊ばす次第で御座います。敏感な江島はまだ物慣れぬ新參な女共の、當夜の迷惑に同情を寄するよりも、ヤレ周禮のヤレ孔孟のと、しかつめらしい儀式禮典に學者ぶる新井君美（白石）朝臣などといふ禮儀屋の威張つてゐる大奥で、これ程の亂痴氣騷ぎが、なんのお目出度い行事であらうぞと、少なからぬ反感を懐くので御座いました。

それにも增して、爰に一つの事實が、愈々江島をして將軍家の愚劣と大奥の腐敗を深く〳〵感ぜさせ、しかも「一生御奉公可致事」の覺書から、愈々大奥愚弄の心機に轉ぜしむることに相成りました。

三

お話の順序といたしまして、六代將軍の御代にお定めになりました、將軍家御寢所の掟を、お聽きに入れます、將軍が大奥に御成りになりまして、御中﨟と御寢の夜は、蔦の間にお入りになりますのがお定りで御座います。噓のやうな眞の事は、毎夜二人の中﨟が御寢所へ入りますことで、一人は御用の者で、他は御添寢と申す譯で御座います。二人とも總白無垢の服裝で、髮を櫛卷に致しまして簪は一切挿すことは法度で御座います。蔦の間の入口に控えて居ります御年寄が、先づ二人の中﨟の髮を解て、中を檢めます、お檢めが濟んで再び元の櫛卷となつて、其處に御成りを相待ちます。

『御成――』

と上御鈴廊下御錠口番女中の、涼しい聲が通りますと、やがて蔦の間に着御があります。こゝでは決して御酒は出ません。

さて御寢間の模樣はと申せば、將軍は中央に、御用の御中﨟は右に將軍に向ひて臥します。お添寢は將軍の左の方五

尺だけ離れまして蒲團を敷き、背を向けて臥します。お枕刀は床の上に置かれ、枕元にはお煙草盆とお小盃が置かれます。御伽坊主は總て是等のお手廻りを整えましてお次の間に退きます。一旦退きました上は、お寢間へは入ることを許されません、萬一緊急の場合は、鈴を鳴らしてから入るといふお定りで御座います。

如何に將軍家とは申せ、お一人の御寢所へ、一夜に兩名の側室が、お添寢を申上げるといふことは、風紀問題を通り越した人道問題に相違御座いません。兎も角も上﨟又は中﨟附の所謂お附女中などが、寄るとさはるとの話題は、多くは之れで御座います。左京の方お附女中の江島などは、何時もそれに對しての、深刻な批評家であり皮肉家でありました。尤も批評や皮肉は他の衆と一處に話した場合の小鬱憤に過ぎませんが、江島の腹の中には、更に大きな不平と反感とが御座いました。その不平と反感とは、將軍の嬌豔な亂行に對するよりも、寧ろ何百人といふ奥女中の總てが、その亂行の犠牲とならうと願ひ、犠牲となることの手傳ひをなすといふ程の、男のために、權威のために、踏みにじられた奥女中根性に對する不平反感で御座いました。

お添寢の御中﨟が、掟通りに翌朝になりまして、別席で當夜御番の御年寄女に、昨夜はお打解けにて斯く〳〵の御戯れあり、しか〳〵のお睦言を承はつたなど〻申上げることを洩れ聞ては、江島はその度毎に、女性の屈辱に憤りました、また將軍が御臺所の方へお泊りが繁く、御中﨟方の方へ疎く相成る時には、中﨟附女中衆は自分の身の上の事のやうにして、妬み怨みに日夜暮し合ふといふ有様、更に中﨟と中﨟との嫉妬は、部屋方の女共までが、主人の一大事のやうに考へて、妬み深い睨み合ひから、果ては雑司ケ谷の鬼子母神へ願がけをするといふほどの始末、江島はそれを見もし聞きもして、さて考へるとこれが皆唯だ一人の寵を爭ふ女性の慕なさに、燃えるほどの反感を持たずには居られなかつたので御座います。

四

御家人の株は、徳川時代には随分と金銀を以て賣買の出來ましたもので、自然町家出身のものも株を買つて、御家人と相成つた次第で御座いますが、奥女中江島は御家人の白井平右衛門の娘みよと申す者で、二十歳前後には尾張殿へお女中奉公を致し、御本丸へは最初は御使番として出仕致しました。お使番と申しますと、大奥の女中の中でも、尻から二番目ほどの極く下賤な女中で御座います。しかも僅か數年の間に、お目見得以上の高等女中格へ進み、寶永の六年江島二十八歳の時、その七月三日に左京の方に於て若君（後に七代將軍家繼公）御誕生の節、左京の方附女中と相成つた程の出世を致した處から見ましても、江島が物の役に立つ悧發な女であつたことが想像されます。

かくて寶永の六年から正徳の二年まで、つまり六代將軍御治世の四年間、江島は將軍の側室左京の方のお附女中として、大奥の總ての光景、表裏の事情、お役人共の心事など、一切萬端を手に取るやうに知り切つて了ひました。

一旦は、町醫者の娘が左京の方と出世するならば、御家人の娘である自分も、目に物を言はせさへすれば、同じ運命に出會ふことは必ずしも困難ではないと江島は考へました。しかし三十に手の屆いた江島は、一方で中臈の閨中に於ける屈辱的な事實やら、他の總ての女中共が、唯一人の寵に愚劣な暗鬪をしてをる狀態などを見聞して、確かな意識はないにしても征服の慾とでも云ふほどのものを味ひたくなつた。かくて家宣公（六代將軍）は正徳二年の十月十四日、御歳五十二で薨去に相成ました。それが江島三十歳といふ、婦人としての性的慾求の最も昂進した歳の冬の事で御座います。

將軍薨去と相成ますと、御在世中お手附の中臈は、髪を落して厭や應なしに尼姿にされますのが常例で、外出と云へば勤めた君樣の御命日に御參拜致す位のもの、そこで案外年若くて此の悲運に出會つた者などの中には、お寺の小姓に戀着して、服など贈るのを一生の思ひ出としてゐたものもあつた程で御座います。しかしながら左京の方は、家繼公の御生母ではあり、家繼公は僅か四歳の若君ではありますが、正徳三年に元服を行はせられ將軍宣下と云ふ次第からして七代將軍の治世三年間と申すものは、月光院として間部詮房と共に、奥向一切の事は、その權下に屬した次第で、同時

に江島も月光院附女中といふことで、大年寄格に昇進致しましたから、大奥に於ける江島の權勢は、何ものをも壓するやうに相成ました。

五

硬い書物で見ますと、家繼虚弱寒暑に堪へずとあります。世に「生理」の神ほど、公平で且つ嘘僞りのないものは御座いません。一夜のお伽に二人の側室を近けられましたほどの將軍のお小兒は、孰れも羸弱で御座いました。家繼公御誕生の前年、今一人の側室おすめの方に出來ました大五郎君と申す若君も早く亡くなりました。左京の方に出來ました家繼公は、將軍となるだけの御運はありましたが、八歳で薨去といふ次第です。

家繼公治世の初年は、江島は三十二の年增盛りである。その前年に新井白石が「采覽異言」を著はさうが、その又前年に蘭人が來聘しようが、そんな事は、此の大奥の一人の女性に取つて、何の交渉も御座いません。一人の人間として本能を備へて一人の女性として、婬靡な空氣の中に閉込められたこと十年に近い江島には、たゞ燃えるほどの爛れるほどの性の悶えがあるばかりです。身が年寄格までに昇り、權威が付いて見ると、他の女中共の屈從的な卑劣さに對する反感は、段々と消え去つて、今はたゞ性慾の煩悶に身を焦すのみでありました。

俗に醫者坊主と一口に申しますが、これ程始末におへぬ代物は御座いません。ツル〳〵と頭を掻くことに於て幇間の如く、物識り顔をすることに於て儒者の如く、權勢に取入ることに於て御用商人の如く……斯う申して參りますとどうやら當節のお話のやうにも聞えますが、正に正德三年七代將軍當時のお話で御座います。當時若し千代田城の大奥に、奥山交竹院と申す大奥の醫者が、御座いませんでしたら、江島事件も或は本ものに成り得なかつたかも知れません、そこは落花情あり流水豈に情なからんやとか、漢文先生の仰しやる通り、性慾の悶に燃え切つてをつた江島の眼つきを流石に眞先きに診察したのは、醫者坊主の交竹院で御座いました。

六

その頃淺草の諏訪町に、柄屋善六と申す諸家の御用達が御座いました。諸大名から旗本衆へのお出入御用達で御座いますから、今日で申せば所謂御用商人で御座います。近邊でも評判の工面の好い商家で、随つて出入の者共も可なりに多く御座いました。

「旦那様御在宅で御座いませうか、源七で御座います」

顔馴染の女中に取次で貰ひますと、直ぐお上りなさい、寒いので奥の間の炬燵に旦那様はお出だから、其間へ通れと女中に言はれて、出入の出羽屋源七勝手を知つてをりますだけに、奥座敷へ通りますと、

「オー源七さんか、さあ〳〵ずつとこつちへ、随分寒い晩だナ、モー節句ツて云ふのにこう寒くても困るナ……年寄りは炬燵のまゝ御免ヨ」

「サーもうどうか其儘……夜分出ましてお邪魔と存じましたが、少しその御内々の御相談を申上げたう存じましてへー」

「お互家業に關したことならナ、夜が夜中でもこの善六は喜んで相談に乘るヨ、そこでどんなお話だイ」

出羽屋源七一膝乘り出しまして、將軍様御代がはりを機と致して、此際本丸を始め城内御入用の薪炭を、一手に引受けましたら利潤莫大なること、それには手懸りの全くないと云ふ次第でもないが、何分にも大奥の役人女中達へ附け屆けの必要のあることを、こま〳〵と說きました。

「源七、善は急げだ、遣らう〳〵」

御用商人のくせで、ヘタな犬のやうに餌を見込んだら離れません。

先ヅ大奥へ取附きますについて、その手蔓からたぐらなければなりません。柄屋善六その道の呼吸は、永年の御用達

で心得て居ります。

先づ樽代として金子百兩を小普請奉行小金井六左衛門へ贈りまして、取成しを頼み、大奥の醫者奥山交竹院へは、唐織の羽織二卷に裏地を添え、尚ほ妻女へは緋縮緬金糸小縫ひの小袖に裏錦を添え、尚ほ其子へは進物代として金百兩を贈りまして、奥女中への取成を頼み込みました。

儒者醫者藝者いづれも、金の好きな動物で御座ますが、醫者坊主の交竹院に於きましても、これ程心盡しの音物を貰つたことは御座いません。慾には目は暗んだが、その密計を進めるための見當の目は、流石に上手で御座いました。將を射るには先づ馬を射よ、婦人を落すには先づ弱點を衝けで、早くから月光院附の江島が、大奥の窮屈な掟に身も心も悶々してをる狀を見拔ゐてをりました交竹院は、或日登城の節、江島を廣間へ呼びまして、

「江島樣、日頃はお勤め大儀の事と拙者お察し申上まする。就きましては某懇意の町人から芝居見物に誘はれましたがお差支なくば一日お供を致したう存じます」

と、そこは醫者坊主の言葉巧みに持かけますると、派手好きで大膽な江島の事ではあり、何にか他の社會と異性とに接したくはあり、また斯程の非違を敢てしますことが、今の自分の威勢と、今の大奥の不秩序との前に、十分容されることであらうと、高をくゝつた江島は、二つ返事で交竹院の提議を納得致しました。

計畫成就といふので、手を打つて喜んだ善六は、源七其他に手配りをさせて、當時木挽町での大芝居山村座の棧敷八間を借り切り、上四間に釣翠簾を垂れ、後ろへは幕を張り、下四間へは金屏風を立廻し、美くしく飾立てゝ、正德三年の四月廿五日江島を招待した。

正德三年四月といへば、四歲の家繼公が其前月に元服され、四月の二日に將軍宣下のあつたばかりの時である。本來ならば新將軍御生母附の女中として、此の大事な時期の大切な御儀式の濟んだ後二十日餘りの時である、大奥の事何呉れと配慮致すべきであつて、外出處の沙汰ではない筈である。しかもはち切れるばかりの肉を、緋縮緬の打かけに包み、

腐らんばかりの氣を、大奥の御年寄詰所に閉ち込め來つた江島に取つては、芝居見物といふ別天地と異性とに一度に會ひ得る機會の前には、將軍の薨去も新將軍の宣下も、畢竟何の價値もなかつた。

七

その時山村座の狂言は、二代目團十郎が初めて助六をやりましたので、古今無類の大入といふことで御座いました。この日江島は、腹心の女中四五名を伴に連れまして、用にかこつけて城を出まして、駕籠で山村座へお忍びで參りました。

上四間下四間の借切りの棧敷へは、お取持役として例の交竹院は勿論、小金井六左衞門、役者上りの淸五郎など申す者が出揃つて居ります。さて評判の狂言に相成ましたが、肝心の江島は何やら浮かぬ顏を致して、生欠伸の二つ三つも續けるといふ風で御座います。この躰を見て取りました小金井六左衞門は、これは立役を棧敷へ呼ばぬせいであらうと思ひましたから、その賴みを淸五郎に致させて、團十郎と生島新五郎とを連れて來させようと致しましたが、兩名とも其日は參りませんために、江島に於ては極めて不興の體で、その日は歸りました。

これでは折角の計畫が、所謂寶の山に入りながら空しく歸るに等しいと、善六は焦り込んだ。

「サー一同、入費には構ひなしだ。腕によりをかけて遣つて貰はう。お禮の處は仕上げ次第だ」

などと善六は、金で面を叩くやうなことを言つた。

今度はしつかり打合せを濟ませて、前日に續いて間もなく、再び江島を山村座へ招待致しました。

江島が棧敷へ着くと、簾の裡で酒宴となり、團十郎と新五郎とを迎へにやつた。すると團十郎は體よく斷りましたが新五郎は座元と語らつて棧敷へやつて參りまして、江島の酒のお對手を致し、狂言半ばに江島を伴ひ、忍び道から太夫元の二階へ參りまして、此處で初めて密會を遂げました。新五郎其時が四十三の男盛りで御座います。

かうなると、もう江島には千代田城も大奥もなかつた。月光院などは怖ろしくもなく、他の總ての女中は馬鹿氣て見えました。遂には六代將軍がお寢間に二人のお伽を添寢させて、男の威光での女人蹂躙を、掟のやうにして續けられたのに、强い反感を起した江島は、今は千代田城の固めをさへ打破つて、男といふ獨り定めの優勝者に打勝つたやうな勝誇つた氣に成りました。

が、千代田城の人目の關は、さうは繁々外出する譯には參りません。春に出會ふた戀のままで、夏を空しく過ぎ秋をも亦過ぎんことは、爛熟の江島に取つては、大なる苦痛であつたに相違御座いません。無論後人の作では御座いませうが『饅頭になるは作者も知らぬ智惠』といふ古川柳が御坐いますのが、即ち人間の關へ隔てられての江島が、此の悶々の時期に際しての、世間の想像訛傳を基礎としての、川柳一流の皮肉に相違御座いません。密會後の生島新五郎が、大奥へ納めまする菓子屋の蒸籠の中へ身を潜めて、江島の部屋へ通つたと申す俗說を言廻はし面白く川柳に致したものと見えます。

春狂言といふ誘惑季節が來た。正德四年正月十二日常憲院樣文昭院樣御廟へ、月光院の御代拜といふ事で、江島は櫻山、宮地、吉川その他御仲居以下で女中總て十二人を伴につれて、宮地を上野へ御代拜として向はせ、江島自身は增上寺の御廟へ代參し、代參を了へると直ぐ御駕を木挽町山村長太夫の芝居見物へと廻らせた。

江島のこの大膽な所行は、もう戀のために死を以て最後を飾らうと決心したものに相違ない。と云ふのは、芝山內での御代參の恒例は、代參が終つた後で、方丈で饗應のある事になつてをる。それを江島は方丈へも立寄らずに退戾つたといふので、御附共はその例格相違に不審を抱いた。丁度そこへ奥女中大勢山村座へ芝居見物があつたと、芝山內へ通じて來た者さへ御座いました。悧潑な江島が、これしきの見易い結果を考へぬ筈は御座いません。

櫻山、宮地以下の女中衆こそ、たゞの芝居につられその芝居見で、これほどの馬鹿は御座いません。

この春で江島は三十三の春に會ふた。そしてこれは、久しい間の總ての拘束から解放された初めての春でありました

江島は此日例の棧敷の正面に座を占めて、交竹院、六左衛門、善六も一方に、新五郎、半四郎、清五郎を他方に侍らせ翠簾を捲き上げさせて、盛んに盃の献酬さへした。その傍若無人の體に、見物は皆この棧敷へ目を注いで、どよめき渡つたが、これが江島としては、自由な女性としての、初めての又終りの勝利で御座いました。

四日の後芝山内よりの上申から、表沙汰と相成まして御評定の末、醫者坊主の交竹院と御用達の善六源七は伊豆の大島へ流刑、生島新五郎は姦通の名義で八丈島へ流刑、江島は信州高遠へ遠流といふことに相成まして、六十一歳まで其地に戀の殘餘を永らへました。



勘平の最後

生方敏郎

一

鹽冶判官高定の小姓早野勘平は、御臺所顔世御前の腰元お輕と不義をしたことがあらはれて、本當ならお手打になるところであつたのだけれど、情ある顔世の御前の取計ひで裏門からのがれることが出來た。

浪々の身となつた勘平は、命こそ免がれたれ、祿に離れて、世を渡る生計も知らず途方にくれると共に、虎の尾を踏むやうな危い戀をしたことが今更に悔ひられたそして、自由なる戀に對して、世の中の掟と道徳とは、何故にこんなに迫害するのかといふやうな疑問を起すだけの餘裕もなく、ひたすら戀といふものがおろかしく思はれ、そのおろかな事をした自分の身が悔ひられた。そして、將來自分の身の振方をどうつけやうといふ考も出ず、またお輕をどうしやうといふ分別もつかず、大磯あたりまでは、夢中でお輕の手を引いて走つたが、もう追手はかゝらないものと安心がつくと、たゞ後悔と、不安のみに、せめられてゐた。

そこへゆくと、お輕はおぼこのやうでも、女だけに、さあとなれば勘平よりも、落着いてゐた。そして

『兎も角も私の親里へひと先行つたらどうでせう。草深い田舍ではありますが、父様も母様も、頼母しい人でございますから。』

と、すゝめたので、他にいゝ考への浮ばない勘平は、お輕の言葉に從ふより他に道はなかつた。

この山崎村へ落着いてから、はや夢の間に一年餘りを過ぎた。

成程お輕の言つた通り二親は善人だつた。富裕といふではなかつたが生活に逐はれるほどの生計でもなかつた。舅の與市兵衛はもう六十の坂を越してゐたが、體もしつかりしてゐたし、學問こそないが物の分つた、下世話に言ふ酸も辛いも噛み分けた老人であつた。姑のおかやは氣が強く他目には亭主を尻に敷くやうなところも見えたが、根本は親切で殊にお輕に對しては目がない程可愛がつた。つながる緣で聟の勘平にも親切にした。ひとつは、勘平が武士であつたのにお輕のために身を落して百姓の養子になつて、この草深い田舍に、朽ちてしまふのがいぢらしくもあつたからだらふ。多少の遠慮もあつたやうだ。

勘平が薪を割つたり、なれぬ手付で鍬を持つて、與市兵衛と一緒に野良仕事に出たりすると、舅たちは氣の毒がつて

『まあ〱、そんなに働かないでも、當分は好きなことをして遊んでゐなさるがいゝ。働いて田舍が嫌やになつてしまつて鎌倉へかへられるよりは、なにをせずとも家にゐてくれた方が、年寄の身として、どんなに安心でいゝかわからない。なあ、お輕』

などと冗談らしくいふこともあつた。

武士が浪人して、田舍へくれば、その頃讀み書きを敎へる者のなかつた山崎のやうな村の人々は、子供を敎育して貰ふことを望んだ。けれども、勘平はしかつめらしく寺小屋師匠になりすまして、白雲頭のよだれくりを敎へるにはまだ年が若く血氣に充ちてゐた。やはり勘平は、家に落着いてゐるよりは、薪を取りに出たり、草刈りにいつたり、野良仕事を手傳ふ方を樂しみに思つた。元來殺生の好きな勘平は、淀川へ網を投げたり、時には釣したりするのを好んだ。け

れども彼が最も好きなのは鐵砲をかついで、近くの山へ鹿や猪をうちに行くのが、なによりの憂さ晴らしであつた。終日川で釣して、暮れてゆく男山や、薄紫の遠い宇治の山々を眺める時など、窮屈な主人持の武士の生活よりも、百姓の一生の方がどれだけ自由で、樂しみが多く、何れだけ人間らしい生活だかといふことをしみじみ思ひ耽るのであつし

『俺は戀を得て、その上に自由な生活へ這入つた。あゝ俺は本當に幸福者だ。』

そう思ひ乍ら女房の若々しい姿を胸に描きつゝ家路を急ぐ夕暮もあつた。

しかし、雨が三日もつゞくと、もう退屈でたまらなかつた。そして、馴れた鎌倉の繁昌な光景を追憶して、ぼんやりと曇る空を見上げてゐた。そして、もとの朋輩の事など淋しく考へた。

そんなときお輕は、

『あなた、何を考へてゐなさるの。』

と、心細そうに問ひかけた。勘平は

『なにも考へてはゐないよ。天氣になつたらこの後山へ狩に行かうと思つてゐるのさ。』

『あなたは隨分殺生がお好きですのねえ、私はそれよりも、庭へほうづきを植えたり、朝顔の育つのを見るのが、樂しみですよ。先達て蒔いた朝顏の種子が、芽が出たと思ふと忽ちあんなに伸びて、私がたてゝやつた竹の手に、あんなに絡んで茂つてゐます。御覽なさいな。ほら、もう蕾がついたでせう。』

こんな話をしてお輕は、良人をなぐさめた。

二

山崎あたりの秋の景色は殊に好かつた。鎌倉のやうな松の多い山では見られない美しさに燦いた。立田姫の織なす錦

と歌はれた紅葉で、四方の山々は飾られた。勘平は益々田園に親む心になつてゐた。もう元の武士にかへりたいといふ發作的の迷ひも今では全く無く成つてゐた。

年もあけた。

花も散つて、秋の紅葉よりもまた一層美しい若葉が、世界を活々と彩る時となつた。宇治では乙女等が、なまめかしい歌をうたひつゝ茶を摘む頃となつた。

一日伏見まで用達に行つた與市兵衛は鹽冶家に關する非常な事件を聞き込んでかへつてきた。それはかねてから仲たがひであつた當時執頭第一の高師直と、鎌倉の殿中に於て、口論の末、鹽冶判官が師直に斬りつけたこと。それも僅かにかすり傷を負はせただけで、人に支へられて、敵を取逃がしたこと。その爲に幕府の掟によれば殿中に於て刄傷に及んだ鹽冶判官の一家は、改易になるであらうと云ふこと。京も鎌倉も専らその評判で持ち切つてゐるとのことであつた

與市兵衛は、

『まつたく鹽冶の家へは魔がさしたやうなものぢや、どんなに腹がたつたか知らぬが、ようまあ、殿中で、ひつこ抜いたものだぞなあ。改易となれば、お家は斷絶、家來はみんな浪人しなければなるまいが、やれ〳〵氣の毒なことぢや。このう、勘平殿、お前さんも、鹿爪らしく窮屈に、今まで勤めてゐたところで、やつぱりまんが惡るければ、浪人をしなければならなくなる。世の中は、田を行くも畑を行くも同じこつちや、何事も運だ、運だ。』

と語り終つて嘆息した。

姑はそれを聞いて、

『やれ〳〵ほんにお氣の毒な、判官樣もさうさつしやるには、よく〳〵のことであつたのでせう。だが、家來衆がみんな浪人することになれば、家の平右衛門も、やがて戻つてきませう。ほんにあれも百姓の子に生れ乍ら百姓を嫌つて武家になりたさに足輕奉公なぞをして、僅か二人扶持ばかり戴いて今もつて嫁も迎へることも出來ないやうな貧乏暮しを

してゐると聞いたが、これで目が覺めて家へかへつて來るであらう。此度の事件は鹽冶樣の爲めには、お氣の毒な事なれど、この家の爲には、この上もない仕合せでした。平右衛門がかへつて來たら、早速嫁を取つて、私たちは、お輕と勘平殿とを連れて隱居しませう。兄一人妹一人きりの子供をばもうこれからはどんなことがあつても、村より外へ出すことではない。もう老ひ先がいくらもない今となつて、外に出てゐた兄妹が、二人が二人ともかへつてくるとはやつぱり阿彌陀樣の有難いお慈悲ぢや、南無阿彌陀佛。々々々々。』

と、喜んだ。

だが、勘平もお輕も、殿樣や御臺所が、今どうなつてゐるかといふことが氣にかゝつた。けれども勘平は默つて考へ込んでゐた。お輕は

『とゝさん。そして殿樣や御臺樣は何う遊ばしたでせう。』

と訊いた。與市兵衛は

『殿樣は御切腹は免れまいとの取沙汰ぢや。』

『まあ、さうしたら御臺樣は何う遊ばすでせう。家來衆は多勢ゐ乍ら、かういふ時には何の役にも立たないものでせうか。』

『役には立つまい。そんな時は唯惶てふためいて、騒ぐばかりぢや。それも無理はない。平殿を前へ据へていふては可笑いが、百姓町人と違ひ、自分で自分の身過ぎ世過ぎの道を立てることを全く知らぬ武士といふ人間は、扶持を離れては、頓と木から落ちた猿ぢや。他人を殺すことなら上手かも知らぬらが、自分の妻子を養ふ力は持つて居らぬ。お氣の毒な扶持ばなれした鹽冶の御家來衆は、今は路頭に迷ふ者も多からう。扶持を下されて養ふ中こそ有難い御主人さまなれ一合の米も自由にならぬ身に落ぶれてしまへば、他人に忠義を勵ますだけ威光も消える道理。だから殿樣になぞ生れるのは結局不幸といふもの、また武士なぞは、二本さして、意張つて歩くところは、他目に羨しいやうなものだが、ちつ

とも安心のならない身の上ぢや。百姓が一番いゝんだ。それだのに兎角いまの若いものは、武士を羨むで、百姓の子が武家奉公を志願する。本當にこけの骨頂ぢやぞや。』

勘平は、

『本當に親父様のおつしやられる通りです。武士は何をするにも、自由に氣儘(きまゝ)なことは出來ず、窮屈で嫌なものです。私もこの山里へ住んでみて、初めて百姓の味が分りました。』

與市兵衛は喜んで、

『さうだとも、さうだとも、聟殿の言ふ通りぢや。やがて平右衛門も戻つて來るであらう。』

『とつさん。私や、兄さんがかへつて來るのがうれしい。』

と、お輕もよろこんだ。

三

勘平は、その日から一人になると、うつうつと、舊主人のことや、朋輩の身の上など、考へ込んだ。果敢なく消えてしまつた鹽冶家の榮華の春の歡樂を、釣する綸を垂れ乍らも胸に再現したりした。

ある日勘平は、狩に出て、とつぷり日が暮れてから村へ這入るほどにをそくかへつてきた。眉のやうな三日月がすでに沈んで、山里の道は、どこからも射すあかりがないので、ずい分暗かつた。勘平は火繩を振りつつ、道を照して歩いた。その時、突然

『卒爾(そつじ)ながら煙草の火を貰ひたい。』

と、呼びかけた者がある。

勘平はその一聲をきくと、大變親しみのある聲だと思つた。

『それはお安いこと』
と、火繩の火を聲のする方へ差出した。旅人は、
『火口(ほくち)を切らしたので、先刻から久しく煙草を吸ふことが出來ず困つてゐました。これは忝けない。』
と、云ひつゝ、火繩を煙草に當てゝ火を移さうとして强く吸つた。その時の火の力で、旅人の鼻から目のあたりが見えた。勘平は思はず、
『おつ、千崎彌五郎殿ではないか。』
と、叫んだ。
旅人は驚いたやうに、
『して、あなたは、どなたですか。』
『手前は早野勘平です。珍らしいところでお目にかゝりました。今は私も、草深いこの田舍の土民になり下り、昔の朋輩に會す顔もないやうな者ですが、若しお差支へがないならば、この一町先が私の住居ですから、茅屋ではありますがお立寄りを願ひ度いものです。』
『いや我等とても今は浪人結句(けつく)貴殿のやうに、田舍住ひの方が氣樂で羨しい。』
勘平は聲をひそめて、
『時に主人鹽冶判官樣には殿中にて、高師直に刄傷に及んだとの取沙汰をきゝましたが、それは本當の話ですか。』
と、きいた。彌五郎は、
『本當にも、本當にも、まつたく思ひ掛けないことになつてしまつたものです。もとより高師直殿は、權勢を笠に着て常から傲慢不遜の人であるから誰にもみな憎まれてゐた。それで吾等の主人に對して、諸大名初め世間一統が同情はしてゐるのだが、いかんせん、執權職にして、その上管領直義公の御覺えが目出度かつた高師直が相手だから掟通りにお

家は斷絕、主君には切腹仰せつけられた次第です。如何にも殘念なれど、致方ない事だ。』

『して、相手の高師直はどうなりました。』

『眉間にわづかのかすり傷を受けたゞけで、たいした怪我もしませんでした。』

『そして公儀からの何のお咎めも無いのですか。』

『おとがめのあらふ筈がない。高師直殿は、吾等の主君に對してこそ無禮もしたが、天下の掟に、少しも觸れるやうなことはしてゐないのだから。』

『すると、言はゞ片手落ちのやうなものですな、そして、家中の者は、皆どうしてゐます。』

『浪人になつて、皆な散々ばら／＼になりました。早速その日の生計に困るものもあるし、すぐ困らないでもこの先いつまで浪人するやらあてどがないから、皆んなが何よりあせつてゐるのは、金の事です。それ故手細工の器用なものには、提灯屋を初めた者もあり、鍬柄屋を初めた者もある。原郷右衛門殿は、淀で居酒屋を初めて居られます。また吾等は絹の行商をして、京と浪花の間を歩いてゐます。』

勘平は嘆息して、

『御臺所や若君は、どうしてゐられます。』

『それは大石殿が萬端後見せられてゐるから氣配ひあるまいと思はれますが、亡き主君の石碑建立のため、郷右衛門等の發起にて、家中有志の者から寄附金を募つてゐます。話せば段々色々のことがあるが、それは追々に致したい。』

と、彌五郎は口を噤んだ。

話とはどんな話かと思つたので、勘平は道からはなれた雜木林の中へ彌五郎を導いた。そして、四邊に心を配りながら二人はをそくまで話した。

彌五郎はそこで初めて本當の話をした。主君の石塔を建てるために金をあつめるといふ名目のもとに、あつめてる金

は卽ち軍用金であつて、實は高師直に對し、有志の者四十五名血判して、復讐を企てつゝあるといふことを語つた。そして、最後に、

『先祖代々扶持を受けて、養はれてきた、士は多いが、いよ〳〵といふときになれば、恩を知つてる、武士は、鷗の屁のやうなものだなあ。何れも之も犬侍だ。』

と、口惜相に言つた。

勘平は、彌五郎の話に感激して、

『では、兎も角も、私も石塔の寄附をいたしませう。郷右門殿に、左樣傳へて頂き度い。』

と、言ひ切つた。

それは復讐の一味徒黨するといふ意味なのであつた。

そして千崎彌五郎と別れた。

四

その頃君父の仇に對しては、不倶戴天を誓ひ復讐することを以つて、武士が最高道德の一つと信じたばかりでなく、復讐はまた己れの武力を試す趣味の對象でもあり、己れの力量を示す功名の機會でもあつた。佛徒の手によつて、諸行無常の世の姿を說かんがために書かれた平家物語は、當時の人々には、大なる復讐戰の歷史として、讀まれた。物の哀れを寫さんがために書かれた曾我物語は、當時の人々から復讐道德の聖典として、愛讀された。

勘平は、さう云ふ武士階級の中に、さういふ信念を持つやうに育てられた。

勘平が復讐の一味に、加はゝらうとした動機は、主家の滅亡を憤つた爲ばかりではなかつた。千崎彌五郎の悲痛なる

實話に、動かされたゝめばかりではなかつた。勘平は少年時代から鍛え上げた武術を實戰に於て試みたかつた。擊劍槍術それも得意であつた。しかし、勘平がもつとも自負するところの鐵砲の狙ひの確かさを試みたかつた。亂世に生れ合はせなかつたばかりで、折角の砲術を戰場に於て試みるの機會に會はず、空しく山野に狩して、鳥獸を相手にするより他に道のないのを彼は常々から悲んでゐたのだ。

『十分に自分の武術を現す機會がありさへすれば、自分だつても、一國一城の主になれないこともなからふになあ。』

などと思ふことは度々あつた。また友達同志とそんなことを語り合ふこともあつたのだ。

主君の不幸は、勘平の樣な血氣な若侍にとつて、自分の功名心を滿足させるに最もいゝ機會となつた。

『既に四十五人の同僚は、この企てに、血判した。無論命は無いものと覺悟しなければならない。成功しても、または不成功に終つても、どの道生き伸びることは出來ない。しかしもう自分も三十だ。人生五十とすれば、當り前に生きたところで、この先わづかに二十年しかない。その二十年を碌々として、田野の間に生き伸びたところで、草木の榮えて枯れて、忘れられて、行くやうなものだ。けれども今一命を捨てゝ權威赫々たる高師直の白髮首を擧げることが出來るならば、名は末代までも留まるだらう。人は一代名は末代と昔から言はれてゐる。苟も人間と生れた以上は、普通人の企て及ばないやうな花々しいことをして、死にたい。さうだ、俺も一味に加はつて働かなければならない。』

勘平の考へはどうしても其處へ落ちていつた。だが若しこのことをお輕に打明けたならば、お輕はなんと言ふだらう甘い戀を捨てゝ功名心の爲めに盲目となつた私を怨むだらふか？親たちも彼女も私を百姓にして無名に、安樂に、平和に一生を送らせやうとしてゐるのだ。自分もついこの間までは、その氣でゐた。自然の中に草木と同じやうに無名に榮えて、無名に枯れてゆくのが、何よりの幸福と思つてゐた。まつたくそれは幸福に違ひない。けれども自分の若い血はその幸福だけでは滿足出來ない。危いことがしてみたくなつた。

その後も千崎彌五郎は、度々きて、勘平と裏の竹籔で、ひそ〳〵話をしてかへつた。勘平は仕事も手につかなかつた

釣に出ても餘り魚を得ずにかへつた。お輕が何か話しかけても生返事ばかりしてゐた。初めお輕は、勘平に何か女でも出來たのかと邪推してみた。しかし、やきもち喧嘩を仕向けても勘平は相手にならなかつた。

お輕は自分たちより他に誰もゐない時に、勘平にきいた。

『あなた何か御心配の事があるのでせう。一人でくよ〳〵考へてゐないで、私にも明して下さいな。女の身の及ばぬながらも出來るだけのことはしてみたうございます。』

勘平は心の中を見透されたと思つて、あはてた。

『いや、何も心配してはゐない。』

と、初めは隱してゐた。しかし、そんなことではお輕が承知しなかつた。勘平も無暗に隱すのは、かへつて知られる元になると思つたので、

『實は此間、道ではからずも千崎彌五郎に會つたところが、亡君の石碑建立のために、寄附金を集めてゐるとの話なのだ。勿論御臺所や若君の將來のためにも、金を集めてゐるのだから金額は決して少くない。私も先君の厚い御恩を受けた身でその上自分勝手に逃亡したやうな次第だから出來ることなら百兩も寄送して先君の墓にお詫びがしたいと思ひ彌五郎に百兩出さうと言つてしまつたのだ。それで困つてゐるところなんだ。』



石川五右衛門

上司小剣

生立の記

十三

青地の村から出たお伊勢參りの同勢八人のうちに、子供が一人居るといふことは道中筋で人々の眼を集めた。

『あれや何んちやい。あんなもん連れて行ッとる。』

『あんな小ツぺいにお女郎買ひが出けるやろか。』

憚り氣もなくこんなこと言ふのが、ちよい〳〵と文吾の小さい耳へ入るが、文吾はたゞニヤ〳〵と笑つてゐた。伊勢參りの願望の屆いたのが嬉しくて〳〵、人が何んと言はうとそんなことは構はないのである。

木遣り音頭の聲賑かに、殆んど村中の人殘らずに送られつゝ先づ隣り村の平井明神に參詣して、だん〳〵伊勢路へ向ふのであるが、其の時から文吾の小ひさい身體は笑はれ通しであつた。先達の源右衛門さへ、時々後を振り向いては笑つてゐた。

何故そんなに可笑しいのか。それはこの頃この國のお伊勢參りが、古市の姫買ひ

を目的として、神信心は附たりであつたから、子供の參宮をば、八十の老婆の嫁入りよりもまだ不思議なこと、可笑しいこととしたのである。先達を除いては、皆血氣の若者ばかり、六人のうちで四五人までは、この度の旅によつて、其の處女性を破らうとしてゐる。それまでは愼んでゐて、それからそろ／＼といふのを、一生の誇りとしてゐる。後の世に行はれる神前結婚式……先づさうした猥褻な意味に、お伊勢參りをば性的の行動と觀るのであつた。元服に烏帽子親を選ぶやうな心を、お伊勢參りの人がもつてゐた。

『あの人もえゝけど、まだお伊勢參りが濟まんよつてね。』と、村の娘たちは、伊勢參りに行かない若者を幾分嘲笑の眼をもつて見た。處女の重んぜらるゝのは、いつの世でも同じことであるが、男の方でお伊勢參りの濟まぬものは駄目であつた。

出立の前夜、文吾の母は、いろ／＼に心配して、先達源右衛門の家へ尋ねて行つた。嬉しさに包まれて、旅の支度をしてゐた文吾は、背戸を出て行く母の姿を見て、直ぐ源右衛門の家へ行くのぢやなアと覺つた。人の姿を見て其の行方を知るといふとは、文吾が忍び足の法とともに、此頃自得した一つの神經作用であつたが、大抵は誤らなかつた。あの人は何處へ行くといふことを知るのは、さうむづかしいことではないやうに思はれた。殊に母の場合には、それが手に取る如く分つた。

旅の支度に忙しいなかで、母の出て行く後姿を見送つた文吾は、につこり笑ふと、直ぐ表から飛び出して、畦道傳ひに源右衛門の家へ先き廻はりした。

源右衛門の家は中くらゐの百姓であるが、家柄は文吾の家の次ぎに位してゐた。文吾の家は後家と子供とだけだから村の寄り合ひの正座も奪はれて了つたのであるが、源右衛門も家柄だけでは正座へなほることが出來ないで、成り上りが幅を利かしてゐるのを酒に紛らしつつ憤つてゐる。今年五十一になるまで、四度お伊勢參りの先達を勤め、大和の行者參りには八度も先達になつたのを誇りとしてゐる。

今度も先達に講元を兼ねてゐるので、大きな薬家の傍に一坪ばかりの土地を浄めて、神籬を立て、八足の札を置き新菰を敷いて、大神宮様が祀つてある。文吾はこの神籬の中へ入つて、母の來るのを待つてゐると、察しに違はず聞き覚えの尻切れ草履の足音がした。さうして入口の敷居を跨ぐ影が薄く幽靈のやうに見えた。

文吾も直ぐ母の後から眞ッ暗な土間へ入つた。白い砂が疊のやうに美しく均らしてある神籬の中へ、若し土足を踏み込めば、直ぐ腰が立たなくなると、村人は皆恐れてゐて、爨代を安置する平井明神の神主のほかは、誰も入るものがない。それを文吾は子供らしくもない好奇心から、神の罰で腰が抜けたら、明朝の出立も職喜びになるのを忘れて、つひフラ〳〵と神籬の中へ忍び込んだのである。しかし榊の枝がさら〳〵と袖に觸れて鳴つたゞけ、腰も抜けなければ跛足になることもなかつた。文吾はニヤ〳〵と笑つて、暗い土間に倒れてゐる鍬の柄に躓きもせずに、すうッと風のやうな足どりで、圍爐裡の切つてある板の間の前まで行つて蹲つた。

源右衛門は鹿島立ちの酒に醉ひ仆れて、榾の火にあか〳〵と顏を照らされながら眠つてゐた。文吾の母は、源右衛門の内儀と一言二言話してゐたが、うんと寢返りをした源右衛門を、内儀は『もし、もし』と呼び起して、『左衛門旦那のが、わせらッた』と告げた。

『これは、これは。』と源右衛門は眼を擦りつつ起き直つた。亡き夫左衛門と、先祖との光りが見る影もない後家の上にまで輝いて、蔭では何んと言はうと、面と向つて文吾の母を侮るものはまだなかつた。

『御用なら、お人を下されば上りましたのに。』と源右衛門は居住ひをなほし、胴服の襟を引ッ張りながら言つた。お人を下さるにも何んにも、母子二人切りの家では、どちらか一人が使に出るよりほかはなかつた。家柄よりも物持ちを貴ぶ風は、山城大和から此頃この伊賀の國へも吹き込んで、田地持ち山持ちが上座になほるのを憤つてゐる源右衛門には、態とらしく丁寧に文吾母子を扱ふ傾きがあつた。それは文吾母子を敬ふのは石川の家柄を敬ふので、石川の家柄を敬ふのは、詰まり家柄を重く見ることを村人に知らせやうとするに當る。石川に次いでの家柄をもつた源右衛門が石川を貴

ふのは、また自分の家を村人から貴ばせやうとすることになるのであつて、源右衛門の心は、こんな簡單なことに對して、甚だ複雜に働いてゐた。

『あのわるさがお伊勢參りするんや言ふてききまへんので、若い衆も連れて下さりますそうで、いづれまアあんたはんの御厄介や思ふてお頼みに參じました。あんな小ツこいもんが色事も存じまへんでへうし、皆さんの足手纏ひになるやらうと思ひますと、お氣の毒さんで……』と、母は早口に言つて、萎びた手を圍爐裡の火に翳してゐた。

色事の二字に、文吾はハツトして首を傾けた。光明寺の夜の不思議と、路傍の煮賣屋の風呂の栓と、この二つの新らしい事件は、文吾の幼い頭を掻き亂して、何やら其處に物があるやうな氣がしてゐた。お伊勢參りがしてみていといふ心も、これが爲めに一層强くなつたのだといふことは、自分にもよく分つてゐる。

『お伊勢參りに子供を連れて行くのも、樂しみなもんぢやらうと思ひましてなあ。……』と言つて、ニヤ〳〵笑つてゐるだけで、源右衛門は別に何にも言はなかつた。母はもつと言ひたいことや頼みたいことがあつたらしかつたけど、親の口からは出しにくい言葉だと見えて、もじ〳〵して言ひそゝくれたまゝ歸つて了つた。

『可哀さうに心配してらるなア。』と、源右衛門は内儀を顧みて、矢張りニヤ〳〵しながら言つた。文吾は呆氣ないやうた氣もしたが、色事の二字を、仔細に胸の裡で考へつゝ、また風のやうに源右衛門の家を飛び出すと、先き廻はりして母よりもズツと早く自分の家へ戻り着くなり、元の樣子で旅支度のものを弄つてゐた。

さうして、翌日の出立に源右衛門の家の勢揃ひへ眞ツ先きに行つたのは文吾で、白衣に脚袢甲掛けの姿が可愛らしかつた。

『妙ぢや、妙ぢや。妙ちきりんぢや。あれ見い、子供の伊勢參り。……』と、道中の何處でも、囃し立てるやうに呼ばれた。全く其の頃の土地では、お蔭參りの時のほかは、子供の伊勢參宮が、それほど珍らしかつたのである。伊勢參りといふことが、妙な意味に取られる伊賀あたりの風儀であつた。

十四

伊勢參りから歸つた文吾は、小さい身體が急にめき〳〵と、筍のやうに伸びるやうな氣がした。

『俺はもう子供でないぞ。』と、人に向つて威張りたくなつた。

『あの坊んち、どないしまんね。殺生なことしやはつて。……』と、古市の油屋で、先達の源右衞門が赤い前垂の女に叱られるやうな物の言ひやうをされてゐるのを、文吾は恐ろしいやうな、可笑しいやうな氣持ちで聞いたのであつた

『何んでもえゝ、店の法通りにして與れ。』と、旅慣れた源右衞門も、少し困つた風で、役人の前へでも出たといふ形をして言つた。六人の同行は、そら來たとばかり、待つていたらしい顏をして、面白さうに眺めてゐた。

やがて文吾唯一人のところへ、衣摺れの音とゝもに現はれたのは、母を少し若くしたほどの女であつた。

『坊んち、泣かんやうに、よう遊びなはれや。』

其の女は、前で結んだ美しい帶を、白い手で撫でながら、こう言つて、莞爾と笑つた。其の顏には小皺が多くて、ツンと高い鼻の側面に一かたまりの菊石が、つくねたやうになつてゐた。其の菊石の上の白粉は殊に濃くて、美しい帶を撫でゝゐる手の甲にも白粉の痕が見られた。

白粉の化け物！　さう思つて文吾は、睨むやうに其の女を見詰めた。さうして、一つ驚かしてやらうかと考へてみたりした。

『坊んち、何んにも怖いことあれへん。わたしがよう遊ばしたげるがな。……何んぞ手遊品持つて來たらよかつたなあ。』と言つて、女が四邊を見廻はしてゐるうちに、文吾は例の忍び足の法で、突然女の前から姿を隱した。

『あゝ、坊んち、何處へ行かはつた。』と、女は白粉の顏をあげて、きよろ〳〵した。文吾が隅の屛風のところから、ぺちや〳〵と手を叩くと、女もぽん〳〵手を拍つた。文吾の手はよく鳴らないが、女の手は表へ聞えるほど朗かに響いた

『そんな手の鳴らしやうではあかん。』と言ひさま、女は文吾に飛びかゝつて、其の手を自分の手に持ち添へやゝ鳴らさうとしたが、四つの手が一つになると、兎てもうまくは行かなかつた。

『この子、妙なことをする子やなア、氣味がわるい。』と言つて、女の手は固く文吾の手を握つた。それを振り離して、火桶の緣を一つトンと叩くと、文吾の姿はまた女の眼から消えてしまつた。

『ポン、ポン。ポン。……』

今度は女の方から、迷子でも探すやうにして、一層朗かに手を拍つた。

『ペチヤ、ペチヤ、ペチヤ。……』

文吾の小ひさな手は、女の直ぐ前に、小兎が餅でも搗くやうな音を立てたと思ふと、其の呑まれたやうに大きな丹前を着た姿が、元の通り火桶を前にして坐つてゐた。

『この子はまア、可愛らしいと思ふてたら、怖いらしいわい。……』と、女はさも〳〵感心したやうに言つた。

其の頃ポルトガル國から初めて渡つた來たタバコといふものゝ烟りを、大きな灰皿の附いた管で、スパ〳〵吸ふことを、この古市あたりの女は少しづゝやつてゐた。伊賀の奥から出て來た文吾は、それが珍らしくて、女に敎はり〳〵、火を點けて貰つたのを一口吸ひ込んだが、厭やにいがらつぽく、眼を白黑にして咽せ返つた。女はよく鳴る手を拍つて笑ひこけた。

『さいぜんの敵打ちや、あんたは伊賀の山椒賣りの子や思ふて、侮つてたら、えらいことしなはつたなア、そやけど、タバコには降參だすやろ、兜脱ぎなはれ。』と言ひ〳〵、女は文吾に摺り寄つて來た。

『わつはゝゝゝ。……』

次ぎの間に大きな笑ひ聲が聞えたのは、源右衛門を始め、同行の若い衆たちで、先刻から樣子如何にと、次ぎの間へ來て覗つてゐたのであるが、襖の隙から覗いたものが、こらへ兼ねて大きな聲で笑ひ出したのに和して、五六人がどつ

と一時に笑つた。

羞かしいといふことを、文吾は其の時初めて知つた。今までの恥かしいといふ心持ちとはまるで異つた羞かしさ！そんなものがこの世にあることを少しも知らなかつたのだから、全く文吾には或る世界の夜が明けたやうなものであつた浮世の夜はだん〳〵更けて行くのに、文吾の夜は明けかかつた。まだ固い寒梅の蕾が一夜の南風に綻び初めるやうなものであつた。

『おうい、邪魔すなやい。後家さんに頼まれて來たことがあるんちや。』

醉ひしれた源右衛門の千鳥足が、廣い廊下に響いて、文吾の小さな座敷を覗く同行たちを叱り飛ばす聲が聞えた。

ほんたうに浮世の夜が明けるのは、秋のことゝて、長いことであつた。それを長いとも短かいとも、文吾は一切夢であつた。浮世の夜が明けて、文吾の夜も全く明けた。文吾はたゞぼんやりしてゐた。其の小ひさい背中をば、女が輕く叩いた。

『何考へなはる、坊んち、』と言つた聲は、文吾の耳に滲みた。

『山吹さん。………』と、文吾は大人のする大きな枕に押し付けてゐた耳へ、よく覺え込んでゐた女の名を改めて呼んでみたが、何も言ふことはなかつた。

『はい。………』

『…………』

『何んだす。………何んとか言ふてくなはれ。』

今日はもう山吹に別れなければならないのかと、文吾の悲んでゐるところへ、源右衛門は頓に若返つた五十面を、朝酒にほんのりさせて、入つて來た。

『石川の坊んち、今日も流連や、幸ひ雨になりさうで、結構なこつちや。』と、丹前姿で突つ立つたまゝ言つた。

『おゝ、嬉しい。……』と、山吹が魁けて欣んだ。流連の意味が文吾にはよく解らなかつたけれど、雨が結構ちやと言つた源右衛門の言葉と、女の嬉しさうな顔とから推し測つて、文吾もぞく〳〵と嬉しかつた。

十五

古市二日といふ村の伊勢參りの掟を破つて、三日も流連したので、日取りの狂ひは後の道中で取り返へすから、下向の迎ひを平井明神の境内に待ち惚けさせる心配はないが、苦勞なのは、めい〳〵の懷中であつた。源右衛門は講の積み金を持つて出たのだけれど、それは今までの旅籠賃と、御師への禮物と、大神樂の奉納とにあらかた使ひはたして、幾らも殘つてゐない。

どうしてもこれは、村から呼び金をするよりほかはないが、其の使には誰が立つ。同行八人が一室に集り、女を退けての評定が、三日目の辰の刻に始つた。伊勢から伊賀へほんの隣り國ではあるけれど、古市は東南へ寄つてゐるので、達者な足で、久居から林へ拔けて、上野へ出ても、一日では兎ても行かれない。二十里あまりの道程を、往復七日がゝりの參宮は、氣樂過ぎる道中だが、今日往つて明日金を持つて復るといふのは、少しむづかし過ぎるので、誰れも彼れもこの使は尻込みするのが當然であつた。

さういふ時には、きつと籤にしようといふことになるのを、この時は小さい文吾が言ひ出すまで、皆忘れてゐた。

『負ふた子に敎へられて淺瀬を渡る。』なぞと呟きながら、源右衛門だけを拔きにして、源右衛門が籤を拵へた。一番長いのを抽いたものが、金の使に立つといふ定になつた。

『何んぼ先達でも、源右衛門さんが拔けるのは、ちつとすこいなあ、源右衛門さんを入れて、文吾はんを拔いたらえゝ。』と言ひ出したものがあつた。

『成るほどさうちや。こんなもん籤に當つたかて、使に行かれへん。よしんば行けても金の工面が出けえへん。』と、合

槌を打つものがあつた時、文吾はカッと怒つた。

『こんなもん……とは、何んぢやい。使に行かれんか、金が出けんか、やらしてみてから言へ、くそ垂れめが。』と叫んだ文吾の小さい口からは、火を吐きさうで、唇は眞ッ赤に燃えたやうであつた。

『俺はもう大人ぢやぞ。』

　更にかう文吾が叫んだ時、一同は噴き出した。文吾にくそ垂れめがと罵られたものも、共に笑つてゐた。

『籤なんぞ引かんかい、俺が其の使したる。』と、文吾はいよ〳〵威丈高になつた。

『まア〳〵。』と、源右衛門は、さながら若い主人を宥める家老のやうにして、文吾のいきり立つのを押へながら、最初の定めの通り籤親の自分だけが抜けて、一同に紙捻の籤を抽かした。

『どうれ、俺が一番長いのを引いて、使にいたろ。金もドッサリ持つて來たるぞ。』と、文吾は一晩のうちに聲變りがしたのか、大人のやうな調子で言つて、眞ッ先きに源右衛門の節くれ立つた手にある白く細い籤を摘まんだ。

　文吾には、その紙捻が一番長くて、どれが短いといふことがよく分つてゐた。どういふもので分るのか、それは文吾も知らないが、兎に角源右衛門の汚ない握り拳を透いて、中の紙捻がギヤマンの鉢に浮く慈姑の根のやうに見えてゐた。

　七人の親指と食指とが、皆源右衛門の拳の上に集つたところで、源右衛門は『よしか』と一聲、パッと指を開くと、七つの手に一本づゝ紙捻がブラ下がつた。比べて見ると、成るほど文吾のが一番長かつた。

『さあ、俺が使に行く。金もドッサリ持つて來てやるぞ。』と言ふなり、文吾は山吹の部屋へと、長い廊下を踊る風にして行つた。後に七人は金魚が水を吐くやうに、ぽかんとして、顔を見合はせてゐた。

　暫くしてから、源右衛門が、氣がゝりでたまらないといふ顔をして、山吹の部屋へ來た時、源右衛門の眼には、女が唯一人立て膝をして、長い煙管の瀬戸物の吸口から、頻りに烟を吸つてゐるのだけしか見えなかつた。

『坊んちはもうお立ちだしたで。何やら急な用やいふて。』と、白粉の斑になつた口元に微笑を寄せつゝ、女は言

つた。其の背後の屛風の蔭に文吾の立つてゐるのを知らずに、源右衛門はいよ〳〵心配さうな顔をして、腕組みをしながら山吹の部屋を出て行つた。朝酒もスッカリ醒めたらしく、舌を吐いて文吾の覗く丹前の後姿を松風が冷たく撫でゝゐた。

『バア。』

廣い廊ドを己れの部屋へ入つた源右衛門の後姿を見屆けてから、文吾は山吹にかう言つた。

『可愛うて、仕様のない子やなア。』と、山吹は溜息とゝもに、撫で肩を窄めつゝ言つて、莞爾と笑つた。

十六

日が暮れかゝる頃、文吾は源右衛門を始め、同行のものにはもとより、廣くて多い油屋中の男女にも餘り知られないやうに、忍び足の法で往來へ出ると、直ぐ他の遊女屋へ入つて行つた。廊下や部屋の樣子は、油屋で呑み込めてゐたからズン〳〵と入つたり廻はつたりして、鏡臺や手匣の類を掻き探がした。忍び足の法が、こんなにまで人に氣付かれないで、役に立つものかといふことは、文吾自身にさへ驚かるゝほどであつた。人が來れば、壁……襖……屛風……何んでも有り合はしたものに寄り添ふてさへゐれば、それで先方は氣付かずに行く。壁に近付けば壁と同じやうになるし、襖にぴつたり身體を押し付けてゐれば襖の繪にでも見えるのか。曲折のある屛風は身を忍ぶに最も屈強のものであつた。

しかし、幾ら部屋〳〵を探して歩いても、お金を貰うことが出來なかつた。仕方がないから、珊瑚珠、瑪瑙、水晶なんぞ玉ばかりを多く貰つて、お金はほんの少しばかり、これでは足りないであらうと思ひながら、油屋へ戻つて來た。部屋へ入つて見ると、山吹は居なかつたから、貰つて來たものを殘らず出して、疊の上へ並べて見た。

文吾の心には、貰うといふことゝ盗むといふことゝの間に隔ての障子が立てられてゐなかつた。村で後家柿を貰うた

時からさう思つてゐる。人間が尠うて品物は多い。人間が殖えて行くよりも品物の殖える方が早い。欲しいといふものが皆貰へたら、誰れも欲しがるものはない。さうしないで、こんなところに珊瑚や瑪瑙を五つも六つも隠して置くから持つてゐないものが欲しがるのだ。まアこれを皆貰うて行けと、懐中へ押し込んだ時、肌が冷りとした。

待てよ、こんな玉は貰うても喰へない。肌に着けたとて、何んの藥にもなるものでもない。それをどうして人が欲しがるのか。文吾の智恵はなか〳〵急に其の譯を考へ付くことが出來なかつた。

あゝ分つた。こんな美しい玉は、柿や栗や米や麥や粟のやうに、さうドツサリあるものでない。世界中にあるのを、海の底に生えてゐるのまで、皆持つて來たら、總べての人に一つ宛こんな珊瑚の玉一つぐらゐ行き渡らんこともあるまいが、誰れも皆持つてゐては値打ちがない。同じやうに裸體で生れて來た人間に、外から値打ちを附けやうと思ふて、こんな玉を拵へよつた。さうして態と其の數を尠うして、誰れでも手に入れることが出來ないやうにして置く。狡猾い奴ぢや。こんなものは、貰うてやるに限る。

紺屋の職人がどうにでもして勝手に染められる色にさへ値打ちを附けて、光明寺の和尚さんはまだ赤い法衣が着られないと言つてゐた。阿呆め、物の色はお天道さまの光で、いろ〳〵に見えるのだ、人間の眼の加減で、赤いとか青いとか紫だとかになるまでぢや。それにこれは俺の色だ。ほかのものは赤い法衣を着ることならんといふのぢやもの。人の物とか我れの物とかいふのは、一番分らん話ぢや。赤い色は許さぬぞよと威張つてみても、御所柿の實が自然に赤く染まるのを、將軍樣だつてどうすることも出來ぬぢやないか。烏瓜の實は大僧正の緋ごろもよりも赤いぢやないか。阿呆め。駒鳥の胸は御領主樣の緋縅の鎧よりも綺麗ぢやぞ。

御領主の富田樣から、お布令が出た。あのお布令といふものが自體氣に喰はぬ。村總體を一つの同じお布令で縛らうとしても、太いものがあつたり、細いものがあつたりして、工合よう行くものか。人間一人にお布令一つ宛別々でなけれや、ほんとには行かん。ほんとゝいふのは御領主樣の役人が考へてゐるほんとで、ほんとのほんとぢやない。俺を

叱るお布令と源右衛門さんを叱るお布令と同じことでは、キッシリ行くものか。源右衛門さんにはお内儀があつて、子を産んだからお芽出たうと人が祝ふけれど、光明寺の和尚さんが、女子を引つ張り込むのは極内ぢや。煮賣屋の肥えた娘のことは、俺のほかにまだ誰も村で知るものがないけれど、あれが和尚さんの子を生んで、若しそれが知れたら、えらい目に遭ふのは和尚さんであらう。同じことをしても源右衛門さんなら芽出たうて、和尚さんなら悪いといふ理屈が立つなら、御領主のお布令は村方の人間一人〳〵別々に、一つ宛拵らへて貰はねばならぬといふ理屈も立つ。

人間が誰れでも蹈んで歩けて、蚯蚓や蜈蚣が自由に棲んでゐる土地へ、勝手に繩張りをして、これは俺のものぢやと言つてゐるのも可笑しいが、海の底から抜いて來たものを、こんな玉にして、これは俺のぢや、俺よりほかにこんな見事なのは滅多に持つてゐるものがないぞとひけらかしてゐるのも阿呆ぢや。

こんなことを、文吾は獨りで考へながら、大きな赤い玉を一つ取つて、疊の上へころ〳〵と轉がしてみた。

其の時廊下に、山吹らしい足音が、パタ〳〵と響いたので、文吾は周章てゝ數々の珠玉を押し隠しながら、

『俺は矢ッ張り、悪いことをしたのかなア。………』と思つて、胸を抱いた。

廊下の足音は山吹でなくて、源右衛門さんであつた。あんまり心配して、歩きつきがひよろ〳〵と女のやうになつてゐた。

『もういておいなはつたのか。』と、源右衛門さんは驚きの眼を瞠つた。

『もういて來ました。………お金はこれだけ、これは家のお母さんに貰うて來ました。賣つてお金にして。餘つたのを持つて戻れといふてだした。』と、文吾は平氣な顔をしてお金と玉とを出した。

源右衛門を始め、同行は皆どうも怪しいと思つたけれど、偖文吾がどうして金と玉とを手に入れたか、見當の附けようもなかつた。さうして、背に腹はかへられぬので、數々の珠玉を源右衛門が松坂の町へ持つて行つて、お金に換へて來た。其のお金は油屋の支拂ひをして、まだドツサリ餘つた。それが皆文吾の懐中に入つた。

翌朝の出立に、文吾は急に、「あツ痛ツたゝゝゝツ。」と腹を押へて、山吹の膝に倒れかゝつて了つた。

八人の同勢が七人になつて、村へ下向の途に就いた。

生立の記(上)——完——

これは私の創作であります。この雑誌では、社會講談といふものになつたり、また創作欄に收められたり、いろ〳〵しましたが、總べて私の頭の中から生れた五右衛門で、在來の講談にはもとより、史實とやらにも據つたものではありません。新講談叢書の一として出版する筈で書き初めたのを、山本さんが少しづゝこの雑誌へ載せられたのでしたが、餘り長くだら〳〵書いてゐるのも厭やですから、生立の記の「上」を以つて打ちきり、あとは一纏めに書き上げます。太陽堂の主人がわざ〳〵見えて、是非にといふお話でしたので、多分同書肆から出ることゝ思ひます。

新刊紹介

▲文化の權威（文學博士椎尾辨匡著）東西文明の融合は日本文化の使明であるとの見地に立てる著者が其講演の中より戰爭と宗敎文化、世界の文化、日本の文化、國民經濟の改善、日本佛敎の特色、人生の達觀以下數篇の論文を蒐めたるもの必讀の文字多し（定價金二圓隆文館發行）

▲口語全譯淨土三部經（江部鴨村譯）淨土敎の思想の根據たる『淨土三部經』を誰人にも理解し得らるゝと思はるゝ平易なる口語體に飜譯せるもの也（定價金二圓隆文館發行）

▲勞働政策（桝田重實著）勞働爭議の淵源は分配問題に存し其解決を勞働政策の樹立に俟つべしと論ぜるもの。著者は嘗に實業界に在りて學理と實驗を巧みに融合せるものにして好著たるを失はぬ（定價金四圓八十錢同文館發行）

▲ゴッセン研究（手塚壽郎著）ゴッセンの名著にして且難解として知られたる『人間交通の發展並に是より生ずる人間行爲の法則』の研究にして蓋し眞面目なる態度を以てせられたるものであることを附言す（定價二圓五十錢同文館發行）

▲サンヂイカリズム　サー・クレー　現時英國に於ける政治評論家たるグレーのサンヂカリズムを

譯したるもの也。（定價一圓八十錢南北社發行）

▲死を侍む女（細田源吉著）死を侍む女以下數篇の短篇を蒐めたる新進作家叢書の一部也（定價五十錢新潮社發行）

▲カアペンタア詩集（富田碎花譯）エドワード・カアペンターの民主主義の彼方への譯である。（定價壹圓新潮社發行）

▲生活改造問題批判（佐々木吉三郎著）物價調節問題、勞働問題等に關する著者の批判である（定價壹圓七十錢大日本圖書會社發行）

▲大國民の根底（桝田義一著）五大國の一である以上島國根性を去つて世界的修養が必要である。と所謂常識家？として知られたる著者は說いて居る（定價一圓八十錢實業之日本發行）

▲最新文藝思想講話（加藤朝鳥）從來發表せる著者の論文集也。（定價七十五錢新潮社發行）

▲人生の行路（文學博士村上專精著）人生の行路には荊棘あり曠野あり闇黑の峻坂もあれば坦々砥の如き大道もある、此の多岐多樣の人生に對し佛者の立場から敎訓的に說いたもの（定價二圓丙午出版社發行）

▲心靈實在の研究（和田德義著）靈魂實在說を信ずる著者が其否定に對し證として幾多の實驗を提示せるものにして一讀の價たるを失はぬ（定價二圓東京堂書店販賣）

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	七十錢	二錢
半ヶ年	四圓二十錢	不要
壹ヶ年	八圓四十錢	不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲日本御講求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事

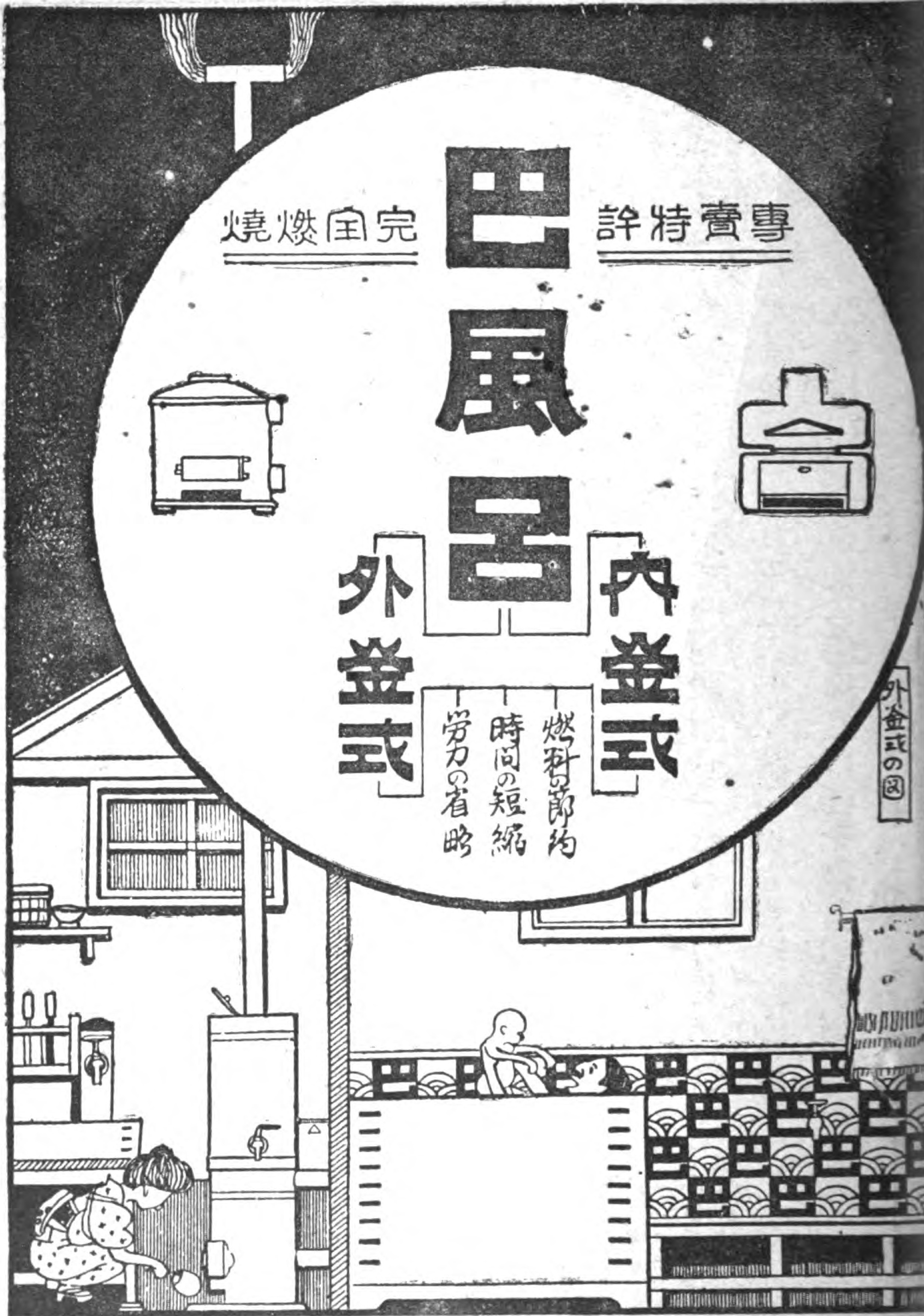
▲御拂込は振替によるゝを最も便利とす

大正九年九月二十七日印刷納本
大正九年十月一日發行

本號定價　金壹圓貳拾錢

編輯兼發行者　東京府下中目黑七七〇　橫關利藤太
印刷者　東京市京橋區南鍋町二丁目廿七番地
印刷所　秀英舍

發行所　東京芝區櫻田久保町七　改造社
電話新橋一八五九
振替東京八四〇二



専賣特許
完全燃焼
巴風呂
内釜式
外釜式
燃料の節約
時間の短縮
労力の省略
外釜式の図

新柄陳列會

十月一日より七日まで、本年流行の三越獨特の新柄物を各種陳列致します、此れで東京の新流行が一目瞭然

寄裂見切反物賣出し

十月一日より開催、例年非常な大評判ですが、本年は殊更にお恰好な品で、柄のよい品が澤山に御座います

三越の十月

十月定休日は十一日、廿五日

友禪縮緬陳列會

十月十八日より二十四日まで、三越を代表する友禪縮緬の新製品を始め、友禪に關する各種の參考品を陳列

日本自由畫壇繪畫展覽會

十月廿八日より十一月三日迄、大雲、鶴友、嘯谷、桂仙先生を始め同人お揃ひにて東京にての第一回目の展覽會

三越呉服店

東京駿河町